花太郎呪文

角田喜久雄

花太郎呪文

角田喜久雄

春陽文庫

A−2−18

　江戸の花太郎さま　願かけた　　花さま花太郎さま　願かけた　……
　こんな童歌がいつごろからか江戸の町に流れていた。花太郎さまとは日暮里の諏訪明神に隣りあった子育て地蔵尊のことであった。御用聞き花屋勘兵衛の評判娘お美年は、地蔵尊の地下道で、土壁に五寸くぎでぶちこまれた瀕死の老婆から「花太郎さまに……」という最後の言葉とともに銀の鈴をあずかった。俄然、奇怪な事件に巻きこまれたお美年の行く手には⁉
　黒装束の怪しい一味に捕えられ危ないお美年を救った浪人は加賀美三四郎であった。次々に大江戸の町を荒らして回る江戸の花太郎と名のる怪人の正体は⁉　美濃郡上二万八千石金森家にまつわる謎とは⁉　――伝奇長編の真価を満喫させる巨匠角田喜久雄の代表的巨編！

装画＊木村　卓

花太郎呪文

角田喜久雄

春陽文庫

A
2
18
580

定価580円
0193-010218-3066

春陽文庫

2182

花太郎呪文

角田喜久雄

春陽堂

花太郎呪文

角田喜久雄

春陽文庫

春陽文庫

花太郎呪文

角田喜久雄

春陽堂

花太郎呪文

花屋小町

「今晩は、御免なさい……」
　戸口の方で男の声が呼んでいる。
「どなた？」
　お美年(みね)は鏡台の中をのぞきこんだまま、声だけ高くした。
　湯上がりの浴衣を、おしげもなくもろはだぬぎにして、鏡を食い入るようににらみながら口紅をひいている。
　十八という年ごろが、二の腕のあたりから胸乳のふくらむ辺へかけて程よくむっちりと肉付かせ、それこそ、しみ一つない雪のような膚に、湯上がりの赤らみがぼうっと薄く紅刷毛(べにばけ)でぼかしたよう。
　お美年という名前より、花屋小町とよんだほうが通りがいい。父親の勘兵衛(かんべえ)がもと花屋をしていたからだ。
　勘兵衛親子の住まいは谷中(やなか)仲門前町にある。この辺は軒並み寺つづきだから、花屋はいい商売になったらしいが、三年前女房に死なれてからは、娘の美年を店へ出してさらしものにしたくないといって、ふっつり商売をやめ、それまで副業であった十手捕りなわを表看板に、いわゆる御用聞き一本になってしまった。
「御免なさい。勘兵衛親分はお留守ですか？」
　と、表の声が高くなる。
「ええ、おとっつぁんは留守ですけれど……御用でしたらあしたにしてくださいませんか」
「ああ、お美年ちゃんですね。お一人ですか？」
「おとっつぁんも仙太(せんた)も、御用の筋で出てしまっているんです」
「そんなら、お美年ちゃんでもいい。至急、お耳に入れときてえことがあるんですが……入ってもようございますか？」

「あら、いけません。いけませんよ！」
「いけませんか？」
「いけませんてば！　万吉さんでしょう。いやよ、入ってきちゃア」
「へへへ……湯上がりってとこですね。鏡台の前ではだぬぎになって……つるつるしたむき玉子みたいなおきれいな膚ですねえ。ああ、たまらねえ」
「あらッ、のぞいたの？」
　と、お美年はあわてながら、さっと膚を入れる。
「のぞきゃしませんよ。でも、ちゃんと見えるんでさ、そらそら、あわてて帯しめ、すそを直していなさる。まだ、すそから赤いものがちらちら見えてますぜ。へへへ……」
　ひょうきんな声でしゃべっているのは、町の木戸をあずかっている番太の万吉という男であった。
　手早く身じまいを直したお美年は、少しはすっぱに足音をたてながら、さらっと境の障子をあけた。
「いけすかないったらありゃアしない！」
　つんとふくれた顔をするのへ、戸口に立った万吉は、
「すいません」
　と、ぺこりと頭を下げながら、
「冗談どころじゃないんです。あのうわさは本当だったんですぜ。お美年ちゃん」
「うわさって？」
「花太郎さまが化けて出るっていう……本当なんですよ。花太郎さまの泣き声を、この耳でたしかに聞いてふっとんできたんですよ」
　と、せきこんでしゃべり出した万吉の顔は、もう冗談どころか、妙にこわばっておどおどしていた。

　　江戸の花太郎さま　願かけた
　　花さま花太郎さま　願かけた

よい子産むよに　願かけた
よい子育つよに　願かけた
江戸の花太郎さま　花あげた
花さま花太郎さま　花あげた
勘兵衛の花屋で　花かって
赤い花白い花　花あげた

こんなわらべ歌がいつごろからはやったかは分からないが、歌の文句にある江戸の花太郎さまというのは、日暮里（にっぽり）の諏訪（すわ）明神に隣りあった子育て地蔵尊のことをさしているのだといわれている。

　地蔵尊になぜ花太郎さまなどという名前がつけられたのか、その縁起のほどは分かってはいないが、その名前にちなんでか、お参りする人は必ず花をあげるしきたりであった。江戸の方角からくれば、丁度、谷中仲門前の勘兵衛の店の前を通るわけだから、都合よくそこで花を買っていったものであろう。

　面白いことに、花を買えない貧しい人は、白紙に花という字を一つ書いて、それをお堂に張ってきてもいいといわれ、花屋をしていたころ、勘兵衛の店では、そういう人のために、紙や筆の用意までしてあったという。

　ところが、その花太郎さまに、この春ごろから妙なうわさがたちはじめた。花太郎さまが夜泣きするのだという。

「お美年ちゃんもあのうわさはきいたでしょう？」

「花太郎さまが夜泣きするって、あれでしょう？　聞いてますわ」

「ある時は、けだものがほえるような気味わるいうめき声だったり、ある時は、女がひいひい身もだえしながら立てる悲鳴のようだったり……」

「そうですってね。でも、いざとなると、それをききましたっていうたしかな人は一人もないそうじゃないの？」

「ところがあるんですよ。あっしが聞いたんだ」

「うそよ。万吉さんは人をかついで喜ぶのが癖だからきらい！」

　と、お美年はまたつんとする。

　びっくりするほど大きな澄んだ目だ。その目にじっと見られると、いい加減分別のあるじいさんまでがぞくっとして変な気持ちになってくるというが、まんざら誇張でもないらしい。

「うそなもんですか、お美年ちゃん。あっしゃア、用足しのもどり道に、たしかにそいつをきいたんです。なんだか、女のすすり泣きのような声にまじって、甲高く、一声、ひいッ、ひーいッ……」

「いやだ、万吉さん。およしなさいよ、変な声を出したりして……」

「あっしゃすっとんで親分にしらせにきたんでさ。うそだと思ったら、お美年ちゃん、自分で行ってたしかめてごらんなさいよ」

　万吉はいよいよ真剣な顔つきだ。

　お美年は、父の勘兵衛がひそかにそのうわさにさぐりを入れていることをしっている。花太郎さまは夜泣きするばかりではない。人をとって食うという奇怪なうわさまで立っていたからだ。

　じっと考えていたが、

「じゃ、あたし、行ってみるわ」

　決断するのも実に早い。

　表に出ると、うら盆も間近い十三夜の月が明るく空にかかっていた。

　谷中から日暮里、道灌山（どうかんやま）まで、寺やしろの敷地のほかは、森と荒蕪地（こうぶち）ばかりの寂しい丘陵つづきであった。

　その日暮里のはずれ辺りにあるのが諏訪明神だが、その広い境内に隣った雑木の森のかげに花太郎さまのやしろがたっている。

　三尺ほどの高さに石垣（いしがき）をきずき、その上にとびらもない形ばかりの堂宇があって、まつって

ある地蔵尊もどこでも見かけるありふれた石仏であった。
　ただ、だれが供えたのか、ぽつんと一本ともっているろうそくの灯が、堂宇の前にも中にも山をなしている手向けの花を色とりどりに描き出しているのと、堂宇の壁に花と一文字かいた紙片がところきらわず張りつけられているのが、ああ、これが花太郎さまかと、やっと気づかせるぐらいである。
　お美年は道々つんできた野花の一束を社前に手向けながら、静かに目をとじ手を合わせた。
　江戸もこの辺りまでくると深山と変わりはなく、しんかんと静まりかえった夜空に、こずえをわたるそよ風がかすかな音を伝えているだけだ。
「気のせいか、薄っ気味わるいねエ」
　と、万吉はあたりへうろうろ目をやりながら、
「大丈夫ですか、お美年ちゃん。気をしっかりもってくださいよ」
　と、心細そうにいう。
「そういうあんたこそ大丈夫？　男のくせに声を震わせたりしてさ」
　お美年は、しゃっきりした声でいいながら、いたずらっぽく白い歯を見せてにっと笑ってみせた。
「お美年ちゃん、こわくねえんですか？」
「平気よ、わたし」
「ああ、そうか。あっしがついていますからねえ」
「ほほほ、いい気なものね、弱虫のくせに……あんたがいなければなお安心なのよ。この世の中で、一番こわくて、一番きらいなのは男の人……」
　お美年はずけずけという。評判の器量よしだから仕方ないといえるのかもしれないが、心ない男どもに随分いやらしいことをいわれたりしかけられたりした。
　ことに、この春は、三人連れの浪人者たちに

ひどい目にあわされるところだった。相手が侍だからとつい手びかえていたのが悪かったといえるだろう。はっとした時には、もう抱きすくめられ、よってたかって押し倒されてしまっていた。
　その時の、胸やすそをくぐって恥知らずに膚をはいまわった男たちの指先の感触を思い出すと、今でもぞっと身ぶるいがする。
　恥ずかしくて、だれにだって話せたことではないが、それまでにされながら、危ないところを自分一人の力ではねのけて逃げてきたのも、気丈なお美年でなくては出来なかったことだろう。
「お、お、お美年ちゃん！」
　と、万吉がお美年のそでにしがみついてきたのはだしぬけのことであった。
「あ、あれでさ。聞こえるでしょう　そら、聞こえるでしょう」
　のどをつまらせながらせきこんでささやく。
　なるほど、じいっと息を殺したお美年の耳に、突然、ひいーっと一声、けたたましい、しかしかすかな女の悲鳴が聞こえてきた。
　あたりを見回しても、人影一つない。おかしなことだが、たしかに地蔵尊の口から漏れたとしか聞こえない。
　ひいーっ……
　と、一声長く尾をひいて響いた女の悲鳴は、やがて、切なげなすすり泣きの声に変わり、まもなく、ふっととぎれたように聞こえなくなってしまった。
「ねえ、お美年ちゃん、聞いたでしょう。だから、あっしがうそじゃねえっていったんだ。ねえ、地蔵さまが悲鳴をあげて泣いたでしょう」
　万吉は声をあえがせながらいう。意気地のない男だ。震えているらしい。
「本当に……でも、そう思って聞けば人間の声とも聞こえるけど、こずえをわたる風の音だったかもしれないわ」

真顔になったお美年は、その美しい大きなひとみをぱっちりあいて、いまさらのようにじっと地蔵尊を見つめた。
「いいや、風の音なんかであるもんですか。たしかに、女の悲鳴でしたよ。地蔵さまが泣いたんだ」
と、万吉はゆずらない。
「なにしろ、あまりかすかな声だもの……もう一度聞いたらはっきりするわ」
「まだ居すわって聞いているつもりですか。と、とんでもねえ。お美年ちゃん、悪いことはいわねえ、もう帰りましょう」
「ほほほ、ここへわたしを連れ出したのはだれでしたっけ。いやなの、わたし、なんでも中途半端のままにしとくのは……」
「だって、長居なんかしてるとたたられますぜ、花太郎さまに……」
「花太郎さまにたたられるとどうなるのかしら？」
「どうなるかって、そりゃア、魅入られたが最後どこかへさらっていかれて……」
「あの福徳御円満なお顔お姿の花太郎が、もしもそんなに魅入ってくださったら、わたし、いっそうれしいの。いやらしい人間の男なんぞより、どれほど幸せか分かりゃアしないもの。ほほほ……」
「あれッ、あんなのんきなことといってなさるぜ。ねえ、悪いこたアいいません。帰りましょうや」
「意気地なしッ。いいから、あんただけ、とっとと先に帰っておしまい」
「だって、お美年ちゃん、お前さん一人……」
「いいからさ。もうじきおとっつぁんがもどるころだから、そうしたらすぐここへ来てくださるようにそういっておくれ」
「そうですか……」
と、やっと帰れる口実の見つかった万吉は、
「でも、お美年ちゃん、くれぐれも用心しておくんなさいましよ。さわらぬ神にたたりなしだ

からなア」
と、何か予感でもしたのか、くどくどとくりかえして、あとは横っとびにすっとんで逃げていってしまった。
普段は人一倍気立ての優しいお美年だが、いざとなると荒くれ男たちさえぎょっとさせるくらい気丈なところを見せる。やっぱり、花屋の勘兵衛の娘だけあると近所のうわさだ。
一人残ったお美年は、耳をそばだてながら、あたりへじっと目をやった。
あれが人間の声だとすると、まさか石仏が口をきくはずはない。一体、どこから響いてくるだれの声なのか――
てこでもそれをつきとめねばおかぬ目の色であった。
この辺には、昔、人をくう鬼がすんでいたという伝説があり、その死骸（しがい）をうめた鬼塚（おにづか）という地名も残っていて、今でも、この辺一帯には一切手をふれず、荒涼たる荒れ地のままに残しておくのもそのためだといい伝えていた。
まさか鬼も住むまいが、昔は野武士野盗のたぐいの巣窟（そうくつ）だった時代のあることはたしからしい。
それにしても、この太平の御代（みよ）となっては、野盗でさえうかとは住みつけるはずもなく、現に、この辺一帯、人が身をかくせる場所と建物といっては、お美年の目の前にある小さな花太郎さまのお堂ただ一つだけではないか。
お美年が突然きっと目をあげた。
風さえとだえた静けさの底を、なにか遠い潮騒（しおさい）の響きでもきくように、わっわっわっ……と波うちながらかすかな物音が走ったからである。
わっわっわっ、わあーん……
と、波打ちながら高まり、また低く細く、次第に消えていく。
どうも気のせいか、たしかに、地蔵尊が何事かうめくようにつぶやきたもうたと聞こえた。

いや、大空のはるかかなたから降ってきた声のようでもあるし、また、深いふかい大地の底から響き伝わってきたようにも思える。
　もちろん、あたりには見渡すかぎり何者の影もない。
　さすがに、お美年の顔は緊張にこわばっていた。
　美しい顔だ。笑うと片ほおに大きなえくぼが出来る。えくぼを作りながら首をかしげ、白い歯をちらっと見せてにっこり笑うその顔を見ては、女でさえわれをわすれてうっとり見ほれてしまうという。
　そのお美年のひとみが、今はぎょっとするくらい鋭い光をはなって地蔵尊をじっと凝視していた。
　ふしぎだ。何かからくりがなくてはならぬ。この花太郎さまに、何かだれもしらない秘密があるにちがいない。
　お美年の目は、そのうち、ふとある地点にくぎづけになった。地蔵堂のすぐそばの草むらである。
　堂宇の裏手一帯は夏草が腰を没するほど生いしげり、その先には森が黒々としげっているのだが、堂の前に詣でる人はあっても、鬼塚の名のある裏手までは絶えて踏み入る人もなく、草に踏んだ跡さえ残っていないのに、ただ一個所、草が倒れて自然の道を形作っているところがあった。
　だれかが、それも何度か通ったのであろう。
　お美年は、その踏み跡をつたって堂の裏手に回った。堂のまうしろで道がとだえている。つまり、堂のうしろの石垣につきあたっているのだ。
　そこへかがみこんだお美年がすぐ気がついたのは、どうしたわけか、石垣の一つがゆるんで少し透き間が出来ていることだった。
　ためしに手をかけてみると動く。動くばかりでなく、少しずつ外へせり出してくる。

女の手にはかなりの重さだったが、しかし、とうとうその一つを抜きとってしまった。あとはわけなく三つ四つの石が抜けとれて、そのあとに、人間が一人やっとはいこめるくらいの穴がぽっかりと口をあいたのだ。
　首をのばしてのぞきこんでみると、どうやら、堂宇の下は深い穴になっているらしい。
　なにしろ、光のささない床下のこととて、定かには見とおしもつかない。
　お美年は、堂の前にろうそくのともっていたことに思いつくと、急いでそれをとってきた。
　灯火をかかげながらのぞきこんでみると、はたして、床下の中央の辺りに、三尺四方くらいの丸い穴がぽっかりと口をあけている。
　そのそばに、ひどく赤さびた鉄板が取りのけてあり、その鉄板の上や周囲にかきのけたようにどろの山が出来ているのは、もともと、穴の口をその鉄板でふさぎ、さらにその上から土をかぶせてさりげなく覆ってあったのを、最近になってだれかが取りのけたのだという印象があった。
　そういえば、堂下の周囲を囲んでいる石垣も、その内側を漆食か石灰のたぐいでしっかりかためてあるらしく、ただお美年ののぞきこんでいる個所だけが穴になっているらしい。
　その石垣も、漆食で固めてある内側も、一面にこけむし古びていることから、これが作られてからよほどの年月がたっているらしいことが想像された。
　いずれにしても、この石垣といい、漆食といい、また、穴やその口を覆っていたと思われる鉄板といい、偶然に出来たものではなく、だれかが何かの目的で作ったものに違いあるまい。
　どうしようかしら？
　と、さすがに一瞬ためらったが、親譲り、性根のすわった娘といわれるだけあった。
　ここまで来て、先をたしかめずそのまま帰っては、おとっつぁんに笑われる……。

やっぱり女は女だなアと、何かにつけて小娘あつかいされるのが大きらいなお美年だった。

穴の入り口が狭いのと、位置が低いのとで、どうしても四つんばいにならないと入れない。

もうちゅうちょはしなかった。きりっとすそをはしょり上げると、赤い湯巻きのすそからまっしろな脛をちらちらさせながら、お美年は四つんばいになってしゃにむに穴へくぐり込んだ。万吉が見ていたら、さぞ目じりをさげて喜んだであろう。

穴の口へはいよってのぞきこんでみると、深さ一間くらいの、まるで底の埋まった古井戸のような様子だった。その中も一面にこけがむしていて、湿気をおびた土のにおいがむうんと鼻をつく。

それだけでなんの異状もない。ただ、こけの一部がところどころはげおちているのが、どうやら、最近、何者かがこの穴を出入りしたらしいことを物語っているようだ。

その時、お美年は、自分が手にしているろうそくの炎が、ちらちらかすかにゆれ動いているのに気がついた。どこかから風がふきこんでいるらしい。

はじめは、いま自分が入ってきた石垣の口から風がふきこむのだと思って別に気にもしなかったが、よく注意してみると、炎は逆にその石垣の穴の方に向かってゆれている。つまり、今のぞきこんでいる井戸の方から吹きあげてくるらしいのだ。

お美年はためらいもせず、井戸の底へすべりおりた。

なるほど、分かった！　その井戸の底に、さらに三尺くらいのせまい横穴があいていて、そこから風が吹きこんでくるらしい。

お美年は、なにげなく身をかがめて、その横穴をのぞきこもうとしたが、とたん、ぎょっとしたように飛びのいた。

それは人間の声だったろうか。

うう、うっ、うっ……

と、まるで断末魔の苦悶を伝えるような、人声とも獣のほえ声とも、それとも何かの物音とも、しかとは分かりかねる陰惨な音が、けたたましいこだまをともなって、今度こそ、まざまざとお美年の耳をうったからであった。

うう、うっ、うっ……

と、二、三度断続して聞こえたと思うと、そのまま、ふっつりととだえてしまって、また、あとはしんかんたる地の底の静けさであった。

お美年は、思わず息をのみながら、帯際へ手をやった。そこには、鋼鉄で作った千枚通しが三本、こぎれいなあさぎの袋に入れてたばさんである。

以前、花屋の近くに住んでいた浪人で小柄使いの名手だといわれる人がいた。幼いお美年をかわいがってくれ、よく遊びにいったものだが、そうした折、なぐさみ半分でならった小柄術がすっかり身についてしまい、今では何かという時には、忘れずに千枚通しを入れた小袋を身につけていく習慣がついていた。

耳を澄ましたが、もうなんの音も聞こえてこない。しかし、花太郎様が夜泣きするというわさのなぞは、たしかにこれだと思いあたったお美年は、

よし！　いくとこまでいってみよう……。

と、とたん、決意して、横穴の中へもぐりこんでいった。

横穴は次第にひろがってきて、すぐ立ってあるけるほどになった。

灯火にぼんやり照らし出される周囲の土壁は、何者が何の目的で作ったのかは分からないが、それが掘られてからもう随分永い年月をへていることだけは確かだった。

ところどころ、水のしたたっている個所があって、足元が気味わるくぬるぬるする。つるりと足をすべらすごとに、その音が、があんがあんとけたたましく反響するのは洞穴のするいた

ずらであろう。
横穴はかなり長くて、だらだらと、上ったり下ったりしている。
とうとう、つきあたりまで来てしまった。
お美年は、ごくりとつばをのみながら、しばらくその場へ棒立ちになっている。
つきあたりの壁面に、二尺四方くらいのくぼみがうがってあって、そこに青銅で作ったらしい青さびたお厨子がはめこんである。
それはいいのだが、なんのためか、そのお厨子の中に、一個のどくろが納めてあるではないか。
灯火に照らし出されたどくろは、白々と歯をむき、うつろな眼窩を大きく影作って、まるでお美年をかっとにらみすえているようであった。
——そういえば、この辺を鬼塚とか首塚とかいい、悪鬼の首をうめたという言い伝えがあったが、では、これがその首だったのであろうか……。
お美年は、そう思いながら、さすがに膚にあわだつ思いで、いそいできびすをかえそうとした。
ところが、その拍子に灯火の位置が動くにつれ、つき当たりからさらに右手へかけてもう一つ横穴のあるのがちらりと見えたのである。
そっと近よって、灯火をかかげながら、ひょいとその奥をのぞきこんだとたん、今度こそ、さすがのお美年が、
「ああっ!」
と、たまげるように声をあげてしまった。
お美年ののぞきこんだ横穴の奥は、かれこれ四畳半ほどもある空洞になっていた。それがこの地下道の一番の行きづまりになっているらしい。
お美年を愕然とさせたのは、その行きづまりの壁に背をよせかけ両手をひろげながら突っ立った一人の老婆が、お美年の方をにらみすえながらかっと両眼をむいた形相のすさまじさを、ゆらめく灯火の中に一瞥した瞬間であった。

白髪をふり乱し、歯をむきたてて、いまにもお美年に向かっておどりかかってこようとする、この世のものとも思われぬ形相であった。
一瞬、お美年は一、二歩うしろへとびすさったまま、体を棒のようにこわばらせ、息をあえがせている。全身の毛穴がことごとく天に向かってそばだつ思いであった。
が——
それは永くはなかった。
老婆は直立したまま動かない。身じろぎもしない。死んでいるのではないか……。
お美年は勇をこして、三、四歩前へ歩み出て、手のろうそくの灯を高くかざした。
おお、たしかに死んでいる!
左右にひろげた手は、お美年に襲いかかるための姿勢ではなくて、その手のひらへ五寸くぎをぶちこまれ、うしろの土壁にぬいつけられたまま、虚空をかきむしっていたのだ。いや、額から血がしたたっている。はだけた襟元からのぞいているやせこけた胸の辺りにも、ざくろのような傷がぱっくり口をあけ、そこからあふれ出た血潮が、着物をとおして腰の辺りにまでしたたっていた。
その血の色の生々しさからみても、殺されてからいくらも時間がたっていないはずだ。
だれが、なんのために、こんなむごたらしいことをしたのか?
お美年は、まだどこかに加害者がひそんでいるのではないかというように、あわててあたりを見回した。
しかし、どこにも人の気配はなく、地下道の中は相変わらずしんかんたる静けさであった。
お美年は、どきっとしながら、もう一度、老婆の顔に目をやった。なんだか、そのまぶたがかすかに動いたような気がしたからだ。
そういえば、そのひとみは、お美年の動きにつれて、じっとこっちを凝視しているようではないか。

くちびるが動いた。ふっと、動くとも見えぬほどのかすかな動きであった。
ぐぐぐ……
と、妙な音がそのくちびるからもれはじめる。何かいっているらしい。
お美年を見つめながら、くちびるが動き、また、
ぐぐぐ……
と、妙な音がもれてくる。
たしかに、まだ息があるらしい。お美年に向かって、何か必死にいおうとしているのではなかろうか。
お美年は勇敢に、つかつかっとそのそばまでよっていった。
ぐぐぐ……
と、またくちびるが動く。
「しっかりしてください。何かおっしゃることがあるのですか？　さあ、しっかりして！」
お美年が思わず力をこめていった。
「花、花、花太郎さまに……」
と、老婆のくちびるから、今度こそ、かすかだがはっきりした言葉がもれてきた。
「花太郎さまですって？」
お美年は唖然(あぜん)としたが、老婆のくちびるは必死につぶやきつづけている。
「花太郎さまに……花太郎さまに……」
「花太郎さまにどうするのです？　さあ、しっかりして！」
「花、花太郎さま……花太郎さまに……」
なにかそのことによほどの執着があるのであろう。と思ううち、くちびるが奇妙な形にゆがんで、血のまじったつばがあぶくを吹きながらだらだらと流れ出した。
つばにまじって、何やらぽとっと足元へ落ちてころげたものがある。白く光る丸いものであった。
「それを、そ、それを……花太郎さまに……花、花太郎さまに……」

老婆のつぶやくような声が、やっとそれだけいって、はたととだえた。
「しっかりして！　それを花太郎さまにあげるのですか？　ねえ、しっかりして！　もっとほかに、何かいうことが……」
お美年は声をはげましていったが、
ぐぐぐ……
と、のどをかすかにならしただけで、老婆の首はがっくりと前へおちた。もう、まったく動かない。
見つめれば見つめるほど、その顔には死の色が深かった。とうの以前に死んでいたはずの死人の色である。胸をえぐった傷口のむごたらしさからいっても、そこからあふれ出た血の量から考えても、今、なにか口をきいたということすら、ありうべからざることのように思われた。
何かの執念が、死んだ肉体にむちうって、必死に生命力をもちこたえていたのであろうか。いずれにしても、よくよく必死だったに違いない。この老婆にとっては、その一言をだれかにいい残すことが、生命を越えての重大事だったに違いないと思われる。
お美年は、にわかに、物の怪(もののけ)に襲われでもしたように、とんで逃げていきたい衝動にかられながら、しかし懸命に心をおちつけて、今、老婆のくちびるから地上へ転げおちたものへ指をのばし、おそるおそる拾いあげてみた。
懐紙を出してつばやよごれをぬぐってみると、なんと、それは小さな一個の鈴であった。さしわたし五分か六分ぐらい、子供が守り袋と一緒に腰にさげたりするあの鈴である。
白く光っているのは銀製ででもあるのか、振ってみると、すばらしく澄んだ美しい音をたてて、りりりん……となった。
この鈴を、花太郎さまに――といったのは、地蔵尊の前へ供えてくれよという頼みなのであろうか。たったそれだけのことに、あれほどのすさまじい執着を示したのであろうか。

何にしても、ろうそくがまさに燃えつきようとしていた。ぐずぐずしていて、暗やみの中にとり残されては大変である。
きびすをかえしたお美年は、急いで地下道の出口に向かった。
と――
十歩とはいかなかったであろう。お美年の足が、また、はたとどまった。
地下道のかなたから、かすかな物音が聞こえてきたからだ。足音のようだ。だれかこっちへやってくるらしい。
ああ、おとっつぁんだ！
おとっつぁんが万吉の知らせでかけつけてきてくれたのであろう……。
お美年は、一瞬ほっとしたように、
「おとっつぁん、こっちですよう……」
と、もう少しで声をかけるところだった。
しかし、危うくその声をかみしめてこらえたのは、なにか予感があったのだろう。
足音が近づいてくる。どうも違う。
おとっつぁんなら、向こうからお美年の名を呼びかけてくるはずではないか。
では、何者だろう?!
お美年は、ぞっとしたように身をすくめながら、あわてて手の灯火を吹き消した。
近づいてくる足音にまじって、人声が聞こえてきた。
「石垣の石がはずしたままになっている。たしかに、この地下道に気づいたやつがあるのだ」
「そんなはずはないと思うが……この地下道に気づいたやつがいようとは思われない」
ささやきあっている男の声であった。二人いるらしい。
「いいや、たしかにそうだ。石垣の口があいている。だれかここへ入ったやつがある」
「もし、そうだとすれば、生かしては帰せん」
「きっと、この中にいる。まだ、この奥にかくれているはずだ」

「灯をつけるか。奥は暗い……」
「灯をつけると向こうで先に気づいてしまう。気をつけろ。しっ……」
お美年は、とっさに、どうしようかとあえいだ。狭い地下道の中だから、こうしていればいやでもぶつかって見つかってしまうだろう。
といって、うしろも行きどまりではないか。
やみの中を一歩一歩近づいてくる足音に、おされるようにして、お美年はじりじりうしろへさがった。
もう、行きどまりである。背中に堅い土の壁を感じた。あの、どくろをまつってあるお厨子の下の壁であった。
もうどうしようもない。足音は間近まで迫っていた。この地下道の案内をしりぬいているのであろう、暗やみの中を手さぐりに進む気配にも自信ありげであった。
暗やみの中だからしかとは分からぬが、お美年から一間ほどの間近まで来たと思われるころ、その足音はひたとどまった。
じいっと、やみをすかしてこっちの気配をうかがっているらしい。
行きづまりの壁の一隅にはりつくようにしながら、お美年は死んだように息を殺していた。
いつの間にか、帯にたばさんだ小袋をひらき、千枚通しの一本を堅く手に握っている。
随分、永い時間のような気がした。冷たい汗がお美年の全身をぬらしている。
「おかしい。なんの気配もない」
「うむ、だれもおらんらしいぞ」
つぶやきと一緒にまた動きだしたその男たちの足音が、すっとお美年の前を通り、右手へ折れて、老婆の死骸のある横穴へ入っていく。
だが、お美年のほっとする間もなかった。
「や！　女だ。女のにおいがする。ここに女のにおいが残っている！」
一人が鋭い声で叱咤するようにいった。
「女のにおいが残っている。たしかに、若い女

のにおいだ」
「たったいましがたまで、ここに女がいた証拠だな。若い女だ」
「まだそこらにいるかもしれん。生々しい女のにおいだ。間近のやみにひそんでいるかもしれん」
ふっと声がとだえると、やみの中をすかして、二人の男の目がじいっとお美年の方を凝視したような気配を感じた。
「いる！　たしかにいる。間近にいるぞ！」
と、だしぬけに男の声が叫んだ。
「灯をつけろ。早く、灯だッ！」
お美年は、かちっかちっとけたたましく火打ち道具をうつ音につれ、やみの中にとび散ったその火花の向こうに、一瞬、黒々と突っ立っている男の影を二つ、ちらっと見たことを覚えている。
あとはもう半ば無我夢中だった。
ただ、灯火がついて姿を見られたらもうおしまいだという恐怖にせきたてられ、とっさに、壁を伝って出口の方へ走り出していた。
しかし、暗やみのことだから、気ばかりあせって足はすすまない。
「いたッ！　向こうへ走っていく！」
背後に、そんな怒声が一時にわめくのを聞いた。
同時に、けたたましい足音が起こり、光がさっとお美年へおいすがるようにさしかけてきた。
ふり向いたお美年の目に、ふりかざした馬上ぢょうちんの灯を近々とあびて、歯をむき出したすさまじい男の顔が見えた。
距離は三間の余ある。それは地下道が曲線を描いた陰に半ばかくれていたので、お美年の姿はしかとは向こうの目には映らなかったであろうが、しかし、もうこのままここから逃げ出す余裕はとてもありそうには思われない。

とっさに、体をひねったお美年の口から、
「えいッ！」
と、一声、女とも思われぬ鋭い気合いがほとばしり、その手をはなれた千枚通しの一本が、きらっと光を放って宙をとんだ。
ほとんど無意識のうちに打ったすて身の小柄（こづか）である。
「うわ、わあッ！」
と、五体をふりしぼるような悲鳴と一緒に、ちょうちんが宙に舞い、一瞬あたりがまたやみにとざされたことだけ、お美年はしっている。
あとは、無我夢中で走った。走った。
気がついた時には、地蔵堂の床下からそとへ無事にはい出していた。
しかし、まだほっと息をつくひまはない。気のせいか、地下道の方から追いすがってくる足音が響いてくるようだ。
やっと、わが家の軒が見え出した時には、さすがに気丈なお美年も、全身の力が一時にぬけきって、くたくたっとその場へ座りこんでしまいそうな疲労をおぼえていた。
「あれッ、お美年ちゃん、ど、どうしたんです」
と、軒下に人待ち顔にうろうろしていた万吉が、目を丸くしてお美年を見すえた。
血の気を失った真っ青な顔に髪も乱れ、崩れたすそを地にひきずって、はだけた湯巻きの間からはひざ小僧の辺りまで白々と露出している。
「ねえ、どうしたんです？　な、何かあったんですか？」
と、目を丸くしてよってくる万吉を、お美年は押しのけるようにしてわが家へかけこむと、土間の片すみにあった手桶（ておけ）の中へのめりこむように首を近よせて、息もつかずに水をのんだ。
「ねえ、お美年ちゃん。何かあったんでしょう？　出たんでしょう、何か？」
と、万吉はすくんだような目つきでお美年の姿を見つめていた。

「だから、よしなせえっていったんだ。触らぬ神にたたりなしっていいますからねえ。それで……一体、何が出たんです？　これですか」
と、両手を前へぶらさげて、下手な幽霊のかっこうをしてみせる。
「おとっつぁんは？」
やっと一息ついたようにお美年が気ぜわしくきいた。
「それがねえ、まだお帰りがねえんです」
「仙太もかえ？」
「へえ……首を長くして待ちこがれていたんですがねえ」
「そうかい。でも、もうおっつけもどってくるでしょう。万吉さん、御苦労だったね。いいから、もう帰っておくれ」
「でも、何かあったんでしょう？」
「なんでもないよ」
「そんなことあるもんですか。花屋小町っていわれるいい娘さんがひざ小僧を丸出しにしてさ。向こう脛に血がにじんでますぜ。あ……草履をどうなすったんですか？　片っ方、はだしじゃありませんか」
と、しつこくじろじろ見つめている万吉の視線に、お美年はいまさらのように乱れた自分の姿に気づき、あわててすそ前をととのえながら、
「いいから、お帰りってば！」
「でも、お美年ちゃん、気になるんだ……」
「うるさいねえ。お帰りよッ！」
と、お美年は手荒く万吉を表へ押し出して、
「でも、お前、今夜のことは黙っておくれよ。花太郎さまのこと、だれにもしゃべるんじゃないよ。約束を破ったら承知しないから！」
と、一声浴びせて、ぴしゃりと戸をしめてしまった。
一人になると、急にはりつめていた気力が一時にすうっと抜けさっていくようで、上がりかまちへそのままくたくたっと座りこんでしまった。

なるほど、片方の草履をどこへぬぎおとしてきたか、素足のつまさきにはどろにまじって血のにじんだ色まで見えている。
お美年は足を洗い、上へあがって、どろにまみれた浴衣を着替えようと、すぽっと肩先からぬぎおとした時、ぎょっとしたように土間を見おろした。
草履に花という字の焼き印が押してあることに気づいたからだ。
うまく追っ手の手をのがれて逃げてはきたものの、もし、おとしてきたあの片方の草履を拾われたら、すぐ自分の素姓を感づかれてしまうだろう。
生かしては断じて帰さぬとわめいたあの二人の男の声が耳の底に鳴っている。
お美年は、にわかに新しい恐怖に襲われはじめたように、あられもない裸のまま戸口へかけおりていき急いで心張り棒をかった。
お美年は立ったり座ったり落ちつかない。なにか不安な予感がして仕方ないのだ。
――おとっつぁんはまだかしら？　一体、どうしたんだろう？
戸口へいっては耳をすませ、また、そわそわと行灯の前へ来てすわる。
だれかに事情を打ちあけて、父のもどるまでここにいてもらおうかとも思ったが、お美年の自尊心が承知しない。花屋の勘兵衛の娘ともあろうものがと、後で笑い話にされるのがいやであった。
それに、今夜の出来事をうかつに他人に話していいかどうか？　とにかく、おとっつぁんに相談するまでは……。
と、お美年はひたすら父のもどりを待ちかねていた。
さすがに勘兵衛の娘だけあって、あの地下道での出来事の陰にはなにか容易ならぬ事件が伏在しているに違いないと直感し、うかつに他人にはしゃべれないと決意したことがどんなに正

しかったかは、まもなく分かってくる。

お美年は、地下道から拾ってきたあの小さな鈴を、幾度となく行灯（あんどん）の灯にかざして目をこらした。

かわいらしい銀製の鈴で、よくみると、その表面に「花」という字が一つ彫りつけてある。

――それにしても、この鈴を、花太郎様に……と、くりかえしいったあの老婆の真意はどこにあるのだろうか？

花太郎様に供えてくれという意味だろうか？

この鈴を地蔵尊の前に供えることが、あんなに命がけのことだったのだろうか？

「今晩は、御免なせえまし！」

と、戸口をたたく音をきいたのは、その夜も大分更けてきた四ッ（十時）過ぎのことであった。

「駕籠辰（かごたつ）の者でございます。お美年さん、お留守なんですか？」

駕籠辰というのは、池の端七軒町にある呼びつけの駕籠屋で、今日、父が出かける時もそこの駕籠を呼んで乗っていったはずだ。

「おとっつぁんですか？」

お美年は待ちかねたようにとんで出た。

しかし、そこには駕籠の影もなく、顔見知りの若い衆が一人、額の汗をふきながら立っているだけであった。

「あらッ！　おとっつぁんは？」

「おことづてを伺ってめえりました。今夜はこちらへおもどりがねえそうで……」

「ええっ、なんですって？　どうしたってわけなんです？」

「いえね、品川までお供したんですが、そこで御用の筋に食い違いでもお出来んなったんじゃねえでしょうか。ことによると一両日帰らねえかもしれねえ、そう伝えてくれって親分さんから申しつかってまいりましたんで……」

「まっ、そう……困ったわ」

と、まゆをひそめたお美年の方へ、若い衆は

何思ったか、ついと顔を近よせてささやくような小声になった。

「お美年さん、お気をつけなさいまし。なんですか、今、その辺をうろうろしている妙なやつを見かけましたぜ」

「ええっ、な、なんですって？　ねえ、若い衆さん。なんですって？」

と、お美年の声は思わずせきこんでいた。

「妙なやつを見たって、それどこで？」

「そこですよ。その生けがきの辺ですよ。あすこに立って、こっちの方をじいっと見ていましたぜ」

「一体、どんなやつ？　男？　女？」

「それがねえ、あっしの足音を聞いたからでしょう、とたんにすうっと向こうのやみへ消えちまったんで……男らしかったね。それも、雲つくような大きな影法師でしたぜ」

「へえ……いやねえ」

と、さりげなくいったが、背筋をすうっと冷たいものが走るような心地だった。

「お気をつけなさいましよ、お美年さん。なにしろ、評判の御器量よしでいらっしゃいますからねえ。そうそう、ついおとついも、その先の坂下で、若い娘っ子が、よくねえやつらによってたかって手込めにされたってじゃアございませんか。なんでしたら、今夜一晩でもあっしが用心棒のお役をお引きうけいたしましょうか」

と、まんざら冗談でもなく真顔にいう。

「いいのよ。ありがとう。そのつもりで用心してるから……御苦労さんでしたねえ」

お美年は、強気にいって駕籠屋を帰して後、表戸も裏口もことさら厳重に戸じまりした。

行灯の灯をかきたてて明るくし、例の千枚通しのはいった小袋を改めてみたのも、もしもの時の用心からであった。

蚊帳をつり、夜具をしきのべ、寝巻きにきかえて横になったが、なかなかねつかれない。

耳をすますと、谷中の森でなくふくろうの声

がかすかに聞こえてくる。風もないしんしんたる静かな晩であった。
　もしもの時には、大声を立てればいいと腹をきめている。裏手はやぶつづきの寺の境内だが、そのやぶの向こうに寺男の寝泊まりしている家がある。なにか用でもある時には、少し声を高くしてよべば、すぐその寺男がとんできてくれる習慣になっているから、万一の時は助けになるであろう。
　一体、どのくらい時がたったであろうか。
　九ツ（十二時）のすぎたのは覚えているから、その後のことであった。
　一時、あまり緊張したために、かえってその疲れでいつの間にかうつらうつらしたらしい。
　何かの気配で、はっと目をさました。
　表の土間の方でけたたましい物音がしたと思ったのは、ねずみが棚の物をけおとして走ったためだったらしい。
　だが――
　おかしい。
　なにか変だ。
　と思う間もなく、表の土間に向かった障子に、なにか風でもそよぐように、ささささ……というかすかな音が伝わった。
　瞬間、その障子を背にしょってひとでのように大手をひろげ、ぴったり張りついている人影がもうろうと浮かび上がってきた。
「くせ者ッ！」
　と、お美年ははね起きざま叫ぼうとしたが、のどがつまったように声が出ない。いや、声ばかりではない。まくらもとの千枚通しを握り、蚊帳をはねのけておどり出ようとした手も足も、まるで呪縛にかかったようになえて動かなかった。
　ひとでのような人影は、まじろぎもせず、じいっと立っている。
　そこが丁度、行灯の灯から陰になっていたせいか、しかとは分からないが、巨大な雲つくよ

うな男の影法師であった。
　物もいわず、障子にはりついたような姿で、じいっとお美年の方を見すえている。見すえているその二つの目のすごい光だけが、不気味なくらいありありとお美年の目に映った。
　なぜだか、呪縛にかかったように動けない。叫ぼうとしたくちびるも、むなしく震えてあえいだだけであった。脂汗が流れてくる。
　蚊帳がさやさやと軽く波うった。勝手口の方から風が吹きこんでくるらしい。
　……ああ、勝手口から忍びこんできたのだな。あんなに厳重に戸締まりしておいたのに……。
　畜生ッ！
　そう思うと、勝ち気なお美年は、自分の体にのしかかって締めつけていた目に見えない何かの力をはねのけるようにして、がばっとはね起きた。
　とたん、だれかつり手をきったとみえて、蚊帳がぱさっと頭上から降ってきてお美年を包んだ。間髪を入れず、腰をけられて、どう！と前にのめったお美年の背に、ぐいっと重い男の体重がのしかかってきた。
　別の男である。黒頭巾に黒装束、手にひきぬいた白刃をきらきらさせている。
　かぶさっていた蚊帳をひきはぐと、のがれようともがいているお美年の手首をつかんで、力まかせにうしろへねじりあげ、肩ごしにお美年の目の先へ白刃の切っ先をぐいとつきつけた。
「声を立てるなッ！」
　くやしいと思ったが、手練の小柄を使うひまもなかった。
「女、貴様が花屋のお美年という小娘だな」
「そ、それがどうしたというんです？　畜生ッ、何をしゃアがるんだ！」
「これ、高声を出すなというに……命がないぞ」
　くやしがってははねのけようとするお美年の腕を、これでもか、これでもかと、逆に絞りあげ、
「娘、忘れはすまい。花太郎さまの地下道で会

ったな」
　と、低い含み声で威嚇するようにいった。
「な、なんのことです？　しりません。そ、そんなこと……」
「しらぬとはいわさん。地下道の出口で、花という字の焼き印のある草履をひろったのだ。当家のものに違いない。正直にいえッ！」
「しりませんてば、そんなこと！　第一、お前さんたち何者です？　女の一人寝てるところへ、前ぶれもなしにふみこんできやがって……あ、痛っつッ……な、何をしやがるんだ！」
　声こそ高くはたてないが、きかぬ気で身もだえするそのお美年の畳をたたく片方の手に、しっかり握られている千枚通しを、男は背越しにじろっと見た。
「うむ！　その千枚通しだ。それで荒井が片目をやられたのだ。先生、もうこの女に間違いございません……」
　と、障子際に立ったもう一人の方へ目配せした。
　その男は、さっきのまま物もいわず影法師のように突っ立って、身もだえしているお美年の横顔から、はだけた胸の辺りへじっと目をやっている。
「顔を見せろ」
　と、障子際に立った影法師が低くいった。しゃがれた太い声であった。
「はっ」
　と答えると、お美年の背に乗っていた男は、右手の大刀を畳に突き立て、その手でお美年のえり髪つかんでぐいと上半身をひき起こした。左手ではお美年の片腕をねじあげたまま……。
「お美年とやら、貴様、あの地下道へ何しに行ったのか？」
　影法師の目が、ぎらぎら光りながら、食い入るようにこちらをにらんでいる。
「そ、そんなこと、しりません！」
「しらんではすまさぬ」

「で、でも本当に……」
「女、この目を見ろッ」
　その目に見すえられると、みるみる手足がなえていくようで、声まで震えた。
「な、なんでもないのです。ただ……は、花太郎さまにお参りして……あの石垣(いしがき)に、妙な穴があいていたものですから……」
「では、あの地下道の奥を見たな？」
「……」
「くぎ付けになった老婆を見たのだな？」
「は、はい。ただ……ただ、もう……」
「老婆と貴様と、どういう関係か？　正直にいえ、女！」
「いいえ、いいえ。本当ですッ。本当に、なんにもしらず、ただ、好奇心からあの地下道へ入ったまでのことなんです」
「老婆が何かいったであろう？」
　と、しゃがれた声が、ぐっと匕首(あいくち)をつきつけるように迫ってきた。
「何を聞いたか、それをいえッ」
「なんにも……なんにもいやアしません。あの人は……もうまったく息が絶えてしまっていて……」
「いいや、何かいったはずだ。何かいって、何かを貴様に渡したはずだ」
「……」
「何をいい、何を渡したか、それをいえッ。その渡したはずのものをこれへ出せッ」
「そんなこと……本当に、なんにも……」
「本当に、なんにも知らんというのか？」
「本当です、本当です。本当に……」
「よしッ、その女を裸にしろ。裸にはいで調べてみろッ」
　あっと思ったが、男の力に逆手をとられているお美年の身もだえはむなしかった。
「何しやがるんだ。畜生ッ」
　と、争ったお美年の片手をはねのけて、男の指先が荒々しく腰帯をひきほどくと、とたん、

寝巻きが背中をすべりおちて、お美年の上半身が行灯の火影の中に白々とむき出しになった。
　いくら気丈でも、うら若い娘である。お美年は、はっとしながら、自由になる片手で両の乳房の辺りを覆いながら、必死に体を前にうつ向けた。
「先生、何もございません。身にはつけておりませんようで……」
「うむ……」
　といったまま、やみに光る目は雪のようにほの白いお美年の膚を上から下へ、下から上へ、なめるようにじいっと凝視しつづけていた。
「先生、どういたしましょう?」
　と、お美年の細腕をねじり上げた男が、影法師の方をうかがうようにしてきく。
「家探しをしろ」
「この女は?」
「どうせ生かしておけぬやつだ」
「花太郎様の地下道をかぎつけたやつです、断じて生かしてはおけません。しかも、仲間に手傷を負わした不敵な女です。命はとりとめましょうが、千枚通しをぶちこまれたあの片目はしょせん助かるまいと思います」
「さるぐつわをかませてひっくくっておけ」
「はい……」
　情け容赦もない荒々しいやり方であった。
　脱げて腰までおちていた寝巻きを着せ返すだけのことはしたが、はだけた胸元をよく合わせもせずに、ねじ伏せて後ろ手にぐいぐいくくりあげてしまう。
「ち、畜生ッ。何しやがるんだ!」
　わめいたお美年の口へ、しゃにむにまくら覆いの手ぬぐいをねじこみ、上から息も出来ないほど堅くさるぐつわをかませてしまい、まるで俵でも転がすように、部屋の片すみへどすっと投げ出した。
　あとは、土足のまま部屋中を歩き回り、布団をはぐ、戸だなをひきあける、押し入れをけやぶる。

「先生、どうもないようで……」
「鈴だ。小さな銀製の鈴だ」
「小さい品ゆえ、もし念を入れてかくしたとしたら、容易なことではみつかりますまい」
「もしそうだとしたら……念入りに秘密の個所へかくしたものとしたら、この女があの鈴の価値をしっている証拠だ。花太郎となにか縁故のあるやつかもしれん」
「たしかにそうでございます。不敵に白を切るところが怪しゅうございます。血へどをはくほど責めたてても、どうしても口を割らせずには……」
「うむ……時を移してはうるさい。この女をひっかついでいけ」
「手数をかける女め!」
　男は、転がされたまま身動きも出来ずうめいているお美年を、憎さげに足先で一つけころがすと、ぐいと横抱きにかかえあげた。
　同時に、障子を背にして地からはえたように立ちつづけていた影法師が、ゆらっと動いて灯火の中へ出てきた。
　同じような黒装束の、見上げるばかりたくましい男だった。ただ、黒頭巾(くろずきん)の陰からのぞいている目は、かなりの老人と思われる。
　部屋を横切り、勝手元へぬけると、その戸口が三尺ばかり開いたままになっている。
　お美年を横抱きにしたまま、つかつかっとその戸口まで行きかけた男が、どうしたことか、
「あっ!」
　と、一声低く叫んで、たたた……とたたらを踏みながら後ろへさがった。
　その胸元をおすようにして、
「おっとっと……御免よ」
　と、一人の男がぬっと入ってくる。
　若い、浪人ていの武士であった。
「すまんなア、じゃまをして……」
　と、にやっと笑う。暗がりの中に、すがすが

しいばかり白くさえた顔であった。
「うぬッ。貴公、何者だッ？」
と、お美年を横抱きにした黒頭巾がわめいた。
「これこれ、あまり大声をたてると人がくるぞ。やぶ一つ向こうに寺男の住まいがあるらしいからな」
　星明かりを背にあびて戸口に立ちはだかった浪人は、にやりにやり笑いながらいう。
「うぬッ。何者だというに！」
「何者？　分からんかなア。ご覧のとおり、尾羽うちからした浪人だ。ちょいとごきげんなのは酒のはいっているせいでな。ははは……」
「こやつ、なんでじゃまだてする。いや、何しに来たッ！　あいさつせい！」
「ほう！　これは驚いたのう。江戸というところは、よからぬ無頼の悪人どもをとりひしぐにいちいち礼を厚うしてあいさつせねばならんのか」
「うぬッ。こやつが！」
「この表を通りかかると、家の中でなにやら事ありげな物音が聞こえる。よって、裏手へ回ると、勝手元の戸があけはなしだ。見ると、奥の間では、はだもあらわな美女をとらえて、見るからに憎ていな悪党二人、まさに落花ろうぜきのていと参ったではないか。芝居の花道での一幕なら笑って見物も出来ようが、まさか見すてても通れまい。どうだ？　これがわしのあいさつだが、まだ気にいらんか？」
「そこをどけッ。いらざる腕立てすると命がないぞッ」
「皆、そういう。芝居の筋書きでは、悪党どもは皆そういうせりふをいうのう」
「うぬッ。許さん。表へ出ろ」
「よかろう。ここでは狭すぎる」
　浪人は、大胆不敵にも、二人の方へ背を見せたまま、ゆうぜんと表へ出た。すきといえばすきであった。
「ちっ！」

　とはげしく舌打ちした黒頭巾は、お美年の体を土間へ投げ出しざま、ぎらっと大刀をひきぬいた。
　抜いたのと、
「とうッ！」
と、鋭い一声を放ちながら、月明かりをあびてまさに戸口を表へくぐり出たばかりの浪人の背へ目がけて、もろ手突きのすさまじい体当りをぶつけていったのと同時だった。
　とたん、声もなかった。
　浪人の体が軽く右へ開きながら地へ沈んだと思うと、どこをどうしたのか、黒頭巾はその頭上を一回転しながら大きく向こうへ飛び、ずしん！　と地響きをたてて大地へ転がり、一度ははね起きようとしたが、そのまま向こうへ、たたた……と三、四歩のめっていって、
「ううう！」
　とうめきながら片ひざついてしまった。
「あと一人……」
　家の戸口の方をふり向いた浪人は、先生とよばれた巨大な人影をじいっと見すえながら、またにたっと薄笑いした。
　相手は、軒下に巨木のように突っ立ったまま、そればかりぎらぎら光って見える二つの目で、へびのように浪人の顔を凝視しつづけている。
　こうして向かいあうと、浪人も相手に負けないほどたくましい体つきだ。五尺八寸はあるであろう、まゆの秀でた、目のすがすがしい気品の高い顔つきであった。
　息づまるような切迫した沈黙であった。目と目が火花を散らすように凝視しあっている。
　とたん、浪人の方がふっと口を切った。
「さすがだ。貴公は大分腕がたつ。みだりに動かんのはとにかく賢い」
　目はキッと相手を見つめているが、口元にはにやりと薄笑いがうかんだ。
　腕に覚えがあるからだろうが、よっぽど不敵な土性っ骨だとみえる。

「殺すには惜しい男だのう……」
と、相手はしゃがれた太い声で応じた。
「面魂といい、腕っ節といい、なかなかの若僧と思われる。大事に使えば生涯の命だ。立身出世の道も遠くはあるまい。つまらん腕立てはよせ。手をひけ」
「ほめてもらって有り難う。だが、手はひかんぞ。手をひけば、あの娘があたらおおかみどもの餌食になる。芝居の筋書きにそういう仕組みはないことになっているらしいでな」
「じゃまだてすると、あたらつまらん目にあうぞ」
「そっちこそ、やめなさい。お手前は賢そうだから忠告する。今夜は娘さんをおいておとなしく引きあげた方がよさそうだぞ。相手が悪いからのう。このわしは、生来大声のたちときている。一声、呼び立ててみせようか……どろぼう！　火事！　本気に叫ぶと、一町四方へ楽に響く。やぶの向こうには寺男が住んでいる。寺の納所もそう遠くはない。あきらめなさい、あきらめなさい。悪いことは申さんぞ……」
ははは……と、浪人は肩をゆすって笑った。てこでも引かぬ面つきである。
「う、うぬッ！」
と、悔しそうにうめいたのは、やっと地面から立ち上がったもう一人の黒頭巾だった。
憎々しく歯をむいて大刀をとり直したのは、しゃにむに切ってかかろうつもりだったか。
「やめい！」
しかったのは先生と呼ばれる方である。
「貴公の手にはあわん。やめい！」
「さすがにのう。利口とバカの違いはこういうところに現れるものだ。そちらのびっこをひいている御仁、あきらめたり、あきらめたり……」
またにやりと笑った浪人の方へ、
「ただはすまんぞ」
と、軒下の男が鋭くあびせた。
「このままにはすまん」

「つづきがあるというわけだな。よろしい、二幕目はおおかた悪人滅びて善人さかえるという筋書きになっている」
「このままにはすまさん。覚えておかっしゃい！」
鋭い一声がすてぜりふであった。
ぐいとあごをしゃくったのは、引き揚げろとの合図であったろう。
軒下の影がつうっと横すべりに向こうのやみへのまれていくと、白刃をさげたもう一人も、ちっと舌打ちを残し、小走りにそのあとをおって、たちまち足音は遠ざかっていってしまった。
浪人は、それを見送ってから、ゆっくりと花屋の戸口へ入っていく。
土間には投げだされたまま身もだえしている青白いお美年の顔があった。帯もない寝巻き一枚のしどけない姿を、胸乳も二の腕もくびれ上がったように無惨に縛りあげられたまま……。
お美年があわてて寝巻きを浴衣に着かえている間、浪人は土間に立ったまま向こうをむいていた。
「前には花屋さんをしておられたそうだな？」
と、物珍しげにそこらを見回している。
「は、はい……」
お美年は、指先がふるえて、なかなか帯が結べない。
「失礼だが、勘兵衛どのは評判がよろしいな。えてして、岡っ引き不浄役人などという手合いは、よからん無頼の徒が多いそうだが、勘兵衛どのは情にもろく義理にあつい剛直な御仁だと、その評判は本郷下谷一円にまで高いそうな……」
「あのう、あのう……」
なにかあわてふためく思いで、うまい返事も出来ないお美年である。
「しかし、勘兵衛どのよりまだ評判の高いお人がいる」

「は?」
「花屋小町といえば、江戸中にひびいた名前だからな」
まあ!
といったが、声にはならなかった。なにか胸がどきどきして、顔が熱くほてってくる。
やっと身づくろいを終わって、
「どうぞ、お上がりあそばして……」
といった声は、虫の鳴くように低く、震えていた。
「そうそう、からすがたかを産んだという評判があるそうな……」
浪人は、まだ土間に立って向こうをむいていた。
「あのう、どうぞお上がりあそばして……ほんとにむさくるしいところで失礼ではございますけれど……」
「とんびがたかを……という俚言はあるが、からすがたかを産むとは面白い。鴉勘兵衛が花屋小町を産んだというしゃれか……うまいことをいうものだな」
「あのう、どうぞ、どうぞ……お上がりあそばして……」
と、お美年はおろおろ繰りかえす。
「そちらではお礼の申し上げようもございません。どうぞ……」
「ああ、もう礼などには及ばん。上がってもよろしいか」
「どうぞ、あなたさま、どうぞ……」
「実は、のどがかわいた。酔いざめの水を一杯所望したい」
と、浪人はゆったりと座敷へ通った。
お美年はあわてふためきながら茶わんへ水をくんでもどってくる。その茶わんをさしだす手が恥ずかしいほど震えているのは、乱闘直後のせいもあったろうが、何かほかにお美年をあわてふためかせるものがあったのかもしれない。
「お恥ずかしゅうございます。あのようなみじ

めな姿をお目にかけまして……」
と、消えも入りたげにいうのを、
「なんの!」
と、浪人は微笑でうち消した。
「寝入りばなを二人の屈強な男に襲われては、だれでもやられる。手込めにあいながら、毫もひるまぬあのしっかりしたきっぷ。うわさどおり、さすがだな」
「まっ。では、ずっと御承知なので?」
「うむ、ずっとな。地蔵堂のところからな」
「ええっ! では、あの地蔵堂から……」
「さよう、丁度あの花太郎さまの辺りを通りかかった折、あの裏手から、一人の美女が突然走り出てきて、まっしぐらに駆けさっていくではないか。驚いたのう。なにしろ美しい。あっと思うような美しい娘さんだ。あまりのだしぬけさに、世にいう狐狸のたぐいに化かされたというか、あるいは目のあやまりではあるまいかと、事実ちょっとまゆをこすってみたくらいだ」
ははは……と、浪人は軽く笑った。
端然と正座した姿は、さすが武士らしく堂々としているが、いかめしいというよりも、なにか人なつこい温かさが感じられる。
「すると、その直後、もう一人とび出してまいったな。これはまた似ても似つかぬ悪人面の男でな。そやつが、うぬッ、どこへ行きおったか、逃げ足の早い女め……などと、だみ声をあげながら、なに思ったか、手にさげていた紅緒の草履の片方を月明かりにすかしてみて、ははあ、花という文字の焼き印がおしてある。すると、待てよ。あの女は、花屋の勘兵衛の……などと独り言を申してな。失礼だが、あなたはお美年さんというお名前だな?」
「は、はい。美年と申します。でも、どうしてそれを?」
「それも、その時その男がちゃんと教えてくれたのだ。ははは……よしッ、生かしてはおけん女め……などと、悪党らしいせりふをはいて、

また地蔵堂の陰へ吸いこまれるように消えうせていきおった」
「まあ、さようでございましたか」
「どうも聞きずてならん。余計なことかもしれんが、先が案じられて、そのまま立ち去るわけにも参らんではないか。それから、この裏手のやぶ陰にずうっと立ち番をしていたが……お美年さん、この辺はまたひどく蚊が多いのう。これ、このとおりだ」
と、屈託もなげに二の腕の辺りをまくってみせる。松の木の根っ子を思わせるようなたくましい肉付きであった。
「まあ。それでは、あれからずっとそのやぶ陰に……どう致しましょう。申しわけございません」
「なんの、あなたのせいではない。いわば、わしの野次馬根性のせいであろうか」
にっと笑うと白い歯がのぞく。じいんと胸に響いてくるような温かい笑顔であった。
「ありがとう存じました。あなたさまにお助けいただかなければ、今ごろどうなりましたことやら……どうお礼申し上げてよろしいやら、わたくし……わたくし……」
「ああ、またそれをいう。やめなさい。わしもお陰で、評判の花屋小町をこのように直々と拝見することが出来た。蚊に食われたくらいはお安いことだ。ははは……」
まともにじいっと顔を見られ、お美年は真っ赤になってうつ向いてしまう。
「お美年さん……」
「はい？」
「あの悪党どもが、何やら申しておったな？　地下道とやらで、老婆に何かもらったか？　老婆から何か聞きはせなんだかと？　お美年さん、あなたは何か老婆からもらわれたのかな？」
さりげなくはいったが、その時、浪人の目にはある光がさっと流れた。
「お美年さん、地下道の中で会ったという老婆

から、本当に何も聞いたことはないのかな？」
重ねていいながら、浪人はじっとお美年を見つめている。清水のように澄んだすがすがしい目であった。
お美年が返事をためらったのは、その人を疑ったのではない。ただ、その人がなぜそんなことを熱心に尋ねるのか、それがふっと不審に思われたからであった。
「あなたは、あの悪党たちに事実をしらせてはよくないと思って、うそをいわれたのであろう。本当は、老婆から何か聞き、そして、何か受け取られたものがおありだな？」
「さ、さようでございます。おっしゃるとおりでございます」
お美年は声をひそめてあえぐようにその時のことを語った。
「花太郎さまが夜泣きするといううわさの本態は、そのお年寄りの悲鳴だったに違いございません。それが地下道を伝わって陰にこもって地上まで響いてきたに相違ございません」
「壁にくぎ付けされた老婆は、まだ死んではいなかったのだな？」
「てっきり息が絶えていると思いましたのに、恐ろしいほどの執念で、たった一言うめくように口をききました」
「なんといったのです、お美年さん？」
「これを、花太郎さまに……と申しました。これを花太郎さまに供えてくれという意味でございましょうか？」
「これとは何です？　何をさしていったのか？」
「口にふくんでいた——多分、口にふくんで敵の目からかくしていたのだと思いますけれど……それは小さな鈴でございました」
と、お美年は、つと行灯(あんどん)の方へ顔を向け、油ざらを出し入れする小窓をあけた。そこには、油ざらとならんで、あの銀の小鈴が無事に納まっていた。
「さっきの男たちは、布団をはぎ、そこらを打

ちこわして家さがししておりましたが、この行灯の中は気がつかなかったようでございます。行灯の灯にかざして、つくづく見つめていたあげく、ふとそこへ入れておいたのが思わぬ幸いでございました」

「これか？　この小鈴を花太郎さまに……と老婆がいったのか」

浪人は、小鈴を手にとって、しばしは言葉もなく、じいっと見入っていた。その顔に、なにか複雑な表情が、一瞬、影のように動いてまた消えていった。

お美年は、まぶしそうな上目づかいで、浪人の表情をそっとみつめていた。

このお人が、なぜ、こんな立ち入ったことまで強い調子でききただすのだろうと、不審さがお美年の胸の中に次第に濃い影を作っている。

「あの二人の悪党が、あれほどまでに執着しているものが一体何だろうと、いささか興味を感じたからですよ」

と、浪人はまるでお美年の腹の中を見すかしたようにいって軽く笑った。

「わしはあの悪党どもをしっているのです。どんな恐ろしい憎むべきやつかよく知っているからです」

「まあ。あなたさまがあの二人を！」

「向こうではわしのことを知らんらしいが、わしの方ではよく見知っているのです。あの頭巾の間からのぞいた目、あの特徴のある声音……知っている故、彼らのいった言葉に非常な関心を覚えたのです」

「まあ……」

「お美年さん、あなたは何もしらずに、うかうかと恐るべき事件の中へ巻きこまれようとしておられる。彼らの蠢動しているところには、必ずといっていいほど血なまぐさい出来事が起こるのです」

と、その浪人の声は、しみじみとお美年の身を案じる響きをこめていた。

「あの先生と呼ばれた背の高い男は千川万作といい、もう一人はその配下で、たしか志賀権太夫といったはずだ。共に、自分たちが一度こうとねらいをつけたことは、いかなる残忍酷薄な手段をめぐらしても、必ずやりとげずにはおかぬ恐るべきやつらです。当分は危ない。ねらわれていることを覚悟して、くれぐれも御用心が肝要であろう。父御勘兵衛殿にもよくよく御注意あるよう話された方がよいな」

と、しんみりいってから、問いかえす暇も与えず、

「どれ、おじゃました」

と、すっと立ち上がった。

「あっ、も、もし……」

お美年は狼狽しながら腰をうかした。

「も、もうお帰りでございますか。もうお帰りなので？」

「思わず長居いたした。そうそう、その小鈴は、申すまでもないことだが、父御のもどられるまで大事に保管なさるといいな」

「も、もうお帰りなのでございますか。でも、それではあまり……まだしみじみお礼も申し上げませぬうちに……」

「今夜のところは、彼らもよもや引き返してはこまいが、念のため、隣家の寺男のところへでも行かれた方が心安かろう」

「お願いでございます。せめて、お名前だけでもどうぞ……あなたさま、お名前なりとお教えくださいまし」

「いや、天下無禄の浪人です。あらためて名乗るほどの者でもない」

「でも、それではわたくし困ります。本当に困ってしまいます。ど、どうぞお名前だけでも……」

お美年が追いすがった時には、もう戸口まで来ていた。

「それほどおっしゃるなら申し上げるが、姓は加賀美、名は三四郎……やせ浪人です」

「では、お住まいは？　失礼でございますが、

お住まいはどちらなので?」
　と、そでへとりすがらんばかりにしていうお美年へ、胸の底までしみ入るような温かい微笑をちらっと投げ、
「また御縁があったらお目にかかりましょう。失礼いたした」
　と、もう引きとめる暇もなく大股にすたすたやみのかなたへ歩みさっていってしまった。
　お美年は、とたん、まるで全身の力が一時にぬけさったように、上がりかまちへくたくたっと崩れるように腰をおとした。
　なんだか、目の前にあった明るいものが急に消えてなくなったような心地で、ただぼんやりとその人の消えさったやみを見つめている。

花の通り魔

　ことによると二、三日留守にするかもしれないと使いをよこした勘兵衛は、思いのほか早く、翌日の八ツ半（午後三時）過ぎに、下っ引きの仙太をつれてもどってきた。
　気もそぞろに待ちかねていたところだから、お美年は、
「ああ、おとっつぁん、お帰りなさいましッ!」
　と、思わずはだしで土間へとびおりながら出迎えた。
「おっとっと……派手ですねえ、お美年ちゃん。赤いすそをけひろげてさ、かわいいまっ白なひざ小僧をちらつかせて……目の保養にゃアなりますがね、へへへ……」
　と、仙太がすかさずおひゃらかす。
「お黙りッ、背中かきッ!」
　気が立っているから、つい言葉が荒くなる。
「えっ? なんですい、その背中かきってのは?」
「お前のもってる十手は背中をかくのにしか使ったことがないってじゃないか。世間じゃそういってるよ、背中かきののみ食い仙太だって……」

「ごもっともさまで、へへへ……ごきげんが悪いんですねえ、お美年ちゃん。何かあったんですか?」
　と、目を丸くするのを、お美年はもうふり向きもせず、
「おとっつぁん、大変なんです。大変なことがあったんですよ」
　と、勘兵衛にせきこんでいう。
「静かにしねえか、いつものてめえらしくもねえ。とにかく、茶でも一杯もらおう」
　と、勘兵衛はすそをはらってゆったりと奥へ通った。
　お美年は茶をいれるのももどかしげに、父の前へきてぴたりと座る。
「お美年ちゃん、すいません。こっちへも熱いとこ茶をいっぺえちょうだいしたいんですが……」
「ぜいたくおいいでないよ。そこに手桶があるだろう。たんとお飲み」
「あれッ、足を洗ったこの水をですかい? ひでえなア」
　といいながらも、さすがお美年の様子のただならぬのに気づいてか、神妙な顔をして敷居間近までにじりよってくる。
「ねえ、おとっつぁん、花太郎さまでね」
　お美年は待ちきれないように、昨夜の出来事を物語った。
　茶をすすりながら黙ってきいていた勘兵衛は、ふと小首をかしげ、
「その地下道で殺されたという老婆は、年のころ六十五、六、ことによったら、前歯に一本、銀をかぶせてありゃアしなかったか?」
　と、なにげなくきく。
「あっ、そうです。そういわれて思い出しました。たしかに、黒いお歯黒の間から、前歯が一本、銀色に光っていました。おとっつぁん、どうしてそれを?」
「話の様子でもしやと思ったんだが、仙太、あ

りゃアたしかお高とかいったなア？」
「え？　だれのことですい？」
「毎月一の日をかかさずに、照っても降っても花太郎さまへ参詣にくるあのお年寄りのことよ」
「あっ、あのばあさんですか。熱心なばあさんでござんしたねえ。一、二年も前から……どころじゃねえ、ここで花屋をしてた五、六年も前からずっと花太郎様に通いつづけていましたっけねえ。そうです、たしかにお高っていいましたぜ」
「あら、じゃあ、あれがうわさにきいていた花太郎さま御信心のお年寄りだったのかしら？」
「前歯に銀をかぶせていたというのが本当なら、年のころといい、ほかに思いあたる女はいねえ」
　と、勘兵衛はお美年から渡された銀の小鈴を手にして、耳のそばで振っている。
　鈴は思いのほか高い澄んだ美しい音色をたててなった。
「お美年……」
「はい？」
「お前を助けてくださったという加賀美三四郎とおっしゃるお武家は、いったいどこにお住まいなんだ？」
「さあ。それがつい……」
　と、お美年はなぜともなしにぽっと赤くなる。
「お礼に伺うにも困りますからって、さんざんお尋ねしたんですけれど……」
「お礼もお礼だが、それを伺っておかなかったのはまずかったなア。そのお方にお尋ねしたら、何かこの事件の糸口がつかめたかもしれねえのに……」
「あら、なぜ？」
「そのお人が偶然花太郎さまの前を通りかかったというだけならいいが、その上お前を襲った二人の黒頭巾の名前まで御承知で、くれぐれも気をつけた方がいいとまで御注意下さったのを偶然とだけ聞き流せるか。ことによったら、そ

のお人も何か御存じで、花太郎さまの前に張りこんでいらしたのかもしれめえ。それに気がつかねえとは、いつものお前らしくもねえぞ」
「まあ、本当に！　本当に、そういわれてみると……」
「本当に本当に、いつものお美年ちゃんらしくござんせんねえ。そのさんぴんをちょっと小突いてみりゃア糸口が……」
「お黙り！　失礼じゃないの、さんぴんだなんて……わたしの命の恩人なんだよ」
「あいすんません。へへへ……」
「何を笑うのさ」
「よっぽどいい男でしたかえ？」
「知らないよ」
「水のしたたるような色のまっ白い？　それとも、きりっとした二枚目でしたかえ？」
「知らないってば！」
「かくしたってだめでさ。そうら、赤くなった。よっぽどどうかしてまさア」
「うるさいッ、お黙り！」
　と、つんと怒ってみせたが、ますます顔がかっかとほてってくるのが自分でもよく分かる。
　本当に、わたし、どうかしてるのかしら？
　と、お美年はあわてながら、そのくせ、いつとはなしに、あの若侍の面影をうっとりとまぶたの裏に思い描いていた。
「すてはおけめえ。お美年、ちょうちんを出せ」
　と、勘兵衛はさっと立ち上がった。
　心得たもので、仙太は素早く土間へおり、おろしたばかりのすそを、また、よいしょとはしょりあげた。
「真っ昼間のちょうちんとかけて花太郎さまと解く。心は、昼寝のはな、はな……鼻たれえちょうちん……とはどうだい。へへへ……親分、お供いたしやす」

出かけていった勘兵衛と仙太は、小半刻ほどするともどってきた。
「おとっつぁん、どうでした?」
と、お美年がせきこんできく。
「あの地下道はよほど以前に掘られた古いものに違いねえ。なるほど、つきあたりの土壁に、どくろをおさめたお厨子がはめこんであったが、問題の死骸はなくなっていた。お前に見られたとしっては、いち早く死骸をかたして行方をくらましたのであろう。予想していたとおりだ。ほかには目新しいことは何一つ見当たらねえ」
と、勘兵衛は言葉短く語ったきり、しばらくは腕を組んでじいっと考えに沈んでいた。
「ひどいことをしやがったもんだ。本当に手のひらへ五寸くぎをぶちこんで壁へ磔にしゃアがったんですね。壁も下もたっぷり血をすって、ぞっとするほど黒ずんでいやアがった。お美年ちゃん、あんたもねらわれてるんだ、気をつけてくだせえよ。髪の毛をちょんぎられるか、耳をそぎ落とされるくらいならまだいいんだが……」
と、仙太が声をひそめていう。
「いい加減におしよ」
お美年はつんとしてみせたが、仙太はひどく真顔だった。
「冗談じゃアねえんでさ。恐ろしいんだ、花太郎さまって化け物は……ねえ、親分……」
と、勘兵衛の方を向く。
「お美年、今だから話すが、実アな」
勘兵衛は、キセルをとって吸いつけながら、何かうかない顔をしてゆっくりと話しだした。
「これがこの事件とどういう関係があるのかまだ分からねえが、先ごろ来、妙なうわさをちらちら耳にしていたんだ。真夜中に、こっそり人の家の戸口へ、花とたった一文字かいた紙を張っていくやつがあるというんだ」
「まあ……じゃあ、花太郎さまと同じじゃアありませんか。花太郎さまにも、花の代わりに花とかいた紙を張っていく人もあるんでしょう。何か御利益があるんですか?」
「とんだ御利益さ。はじめは張られた家でも気にもとめずいたそうだが、それから三、四日もたたねえうちに、強盗が押し入って有り金残らずかっさらった上、女の髪を根元から切りおとし、男の耳を片方そぎおとして一緒にさらっていくっていうんだ」
「ええっ、髪や耳を? なぜ? どうしてそんなむごたらしいことをするんです?」
「さあ、それが分からねえ。しかし、花とかいた紙を張られた家は、どんなに用心しようが、五日と待たずきっとやられるんだそうだ。おれの耳に入ったうわさだけで三つある。芝の神明に住んでる御家人で麻場喜十郎ってお人がその筆頭よ。独り者だから、その人が耳を片方やられた。二番目は、浅草馬道の金貸しで伊勢屋権六。これが耳をやられて、居合わせた娘が髪を切られたんだ。三番目は品川御殿山下にすんでる博徒で片目の伍平。これが夫婦そろってやられてるんだ。うわさにきいたのはそれだけだが、つい一昨日のこと、今度は、黒門町の質屋、丸屋重右衛門さんの門口に花とかいた紙が張りつけてあったと、使いの者が青くなって知らせてきたんだ」
「まあ！　丸屋さんなら、まんざらしらない仲でもないのに、おとっつぁん、どうします?!」
「だから、すててはおけめえ」
「丸屋さんには、主人重右衛門さんに娘さんが一人いる」
勘兵衛はゆっくりと二服目をすいつける。
「ええ、しってます。お妙さんといってきれいな人ですよ。たしか、近々にお婿さんをお迎えになるんじゃなかったかしら?」
「そうなんだ。婿とりの祝言がもう三、四日の先に迫っている。その矢先に、不吉な前触れが舞いこんできたんだ」

「お気の毒に……さぞ大騒ぎなすったことでしょうねえ」
「しかし、うかつに騒いで世間のうわさが高くなったら店の信用にもかかわるというので、朝早く張り紙を見つけた番頭には堅く口どめして、重右衛門さん御自身、こっそりここへ訪ねてみえたんだ。これがその時もってきた張り紙だ。見な。人を食ってるというか、いまいましいほど立派な筆跡だ」
と、勘兵衛は懐からとり出したものを前にひろげた。
半紙判の白紙に、きちんとした楷書で花という字が太々とかかれている。
「なぜ、こんな張り紙を、前触れめかして張っていくんでしょうねえ、おとっつぁん?」
「分からねえ……が、とにかく人を食っていやアがる。わざわざ前触れして悪事を働くなんざ、どだい世間を盲にしやがるふてえ度胸だ。すてておけねえから、本腰を入れるつもりで、昨日御用の筋で出かけたというのは、前におこった『花』の字の事件をひととおりざっと洗ってみるためだったんだ」
「それで、何か?」
「いいや、これといって何一つつかめたものはなかったよ。大した悪党らしい。まるで、風のように音もなくやってきて、また風のようにさっと引きあげていくらしい。あっという間に女の髪をきり、男の耳をそぎおとして消えさってしまう……」
「だって、最初の場合はともかくも、二度目三度目の時には、襲われた方でもそれぞれ用心していたんじゃないかしら?」
「そのとおりさ。ことに、品川御殿山下の伍平は、ちっとは聞こえた博徒の親分で、家に身内が五、六人もいる。手ぐすねひいて待ちかまえていたらしいんだが……伍平夫婦の寝間の方で、伍平のぎゃっ! という悲鳴をきいて子分のやつらが駆けつけた時にゃア、もうあとの祭りだ

ったらしい。伍平は片耳そがれた血まみれ姿で、その上、当て身をくってぶっ倒れていたし、かみさんは髪の毛を根元からぶっつり切られて真っ青になってすくんでいたそうだ。金箱の金もそっくりやられていたという……」
「でも、下手人の人相ぐらいは見たんでしょう?」
「ところが、寝ず番していた子分たちの目をどうごまかしたのか、伍平夫婦が気がついた時には、真っ黒な人影がもう二人の上へのしかかっていたそうだ。ただ、真っ黒な人影をちらっと見ただけだという。まるで通り魔のようだったという」
「ねえ、おとっつぁん、妙ですねえ」
と、お美年は花という字をじっと見つめながら、
「花太郎さまにあげる花の代わりに、花とかいた紙をお堂に張っていくでしょう。あれとこれと、何か関係があるんじゃないでしょうか?」
「お美年、お前そう思うか? 子育て地蔵の花太郎さまと、この張り紙の通り魔と、何か関係がありそうだと、そう思うのか?」
勘兵衛はタバコの煙の間から娘の顔をさりげなく見やった。
「花太郎さまとその悪党と、どういう関係があるのかそれは分かりませんけど、同じように花とたった一文字かいた張り紙が、よく似ていると思うんです」
と、お美年は賢しげに美しい目をきらっと光らせる。
「それに、この楷書でかいた花という字……おとっつぁん、わたし見覚えがありますよ」
「ふうん……」
「ゆうべ、お堂のあたりをうろうろしている間に、あすこに張ってある紙をいまさらのようにつくづく見たんですけれど、その中の、ことに真新しい一枚の花という字が……よく似てるんですよ、おとっつぁん。この楷書がきの花の字

と、そっくりによく似ていたと思うんですよ」

勘兵衛は吸いおわったキセルを丁寧にはたきおとして、ゆっくりとタバコ入れにしまった。

「実ア、おれもそのことに気がついたんだ。花の通り魔のうわさは前からちらちらと耳にしていたが、大して気にもかけていなかった。が、丸屋さんからこの張り紙を見せられて、おやっとそのことに気がついてから急に興味がわいてきたんだ」

「じゃあ、おとっつぁんも気がついていたんですか?」

「前から花太郎さまに妙なうわさがとんでいる。それが頭にあったから、先日通りがかりにつくづくお堂を見てきたんだが、沢山ある張り紙の中で、あの真新しい一枚だけがとびぬけて達筆なんだ。お前でさえ気のつくことを、おれがうかつに見のがすと思ってるのか」

「やっぱり、一つ人間のやったことですね?」

「少なくとも、この張り紙をかいたやつは同一人らしい」

「すると、おとっつぁん、花太郎さまに願かけに使った張り紙を、一方では恐ろしい悪事の前触れに使っているというわけなんですね?」

「その辺のことはまだなんともいいきれねえが、お前のゆうべの話をきいて、こりゃアどうやら容易ならねえ事件だということだけは当たりがついたよ」

「それにしても、丸屋のお妙さん、かわいそうに、折角のおめでたい御祝言の矢先だというのに、どんなに恐ろしがっていることでしょうね」

「ところで、お美年、相談なんだが……」

と、勘兵衛は改まって娘の方へひとひざのり出した。

「ちょっとお前に手をかしてもらいてえ」

「わたしにお手伝い出来ることがあるんですか?」

「お前でなけりゃアまずいことなんだ。どうも前三つの事件の様子では、いくら外回りから見

張っていてもだめらしい。そこで、今日から二、三、四日、お前にこっそり丸屋へ住みこんでもらって、夜になったらお妙さんの寝間に……出来たら一つ布団の中に身をかくして見張っていてもらいてえのさ」

「まあ、わたしが?」

と、お美年はまじまじと勘兵衛の顔を見つめた。

「お妙さんの寝間に忍んでいて、とにかくあの娘さんの身だけは守ってくれ。重右衛門さんの方はおれがひきうける。どうだ、お美年?」

といわれて、お美年はにっこりうなずいた。

「ようございます、おとっつぁん。お妙さん、かわいそうですもの。おとっつぁんからお話がなくても、何かしてあげたくてたまらないところですよ。わたしみたいな者でも、そばにいてあげたら少しは気分をひきたたせる役にたつでしょう」

「しかし、いうまでもねえことだが、相手はよくよくのしたたか者らしいんだ、気をつけるんだぞ」

「分かってます。大丈夫ですよ、おとっつぁん」

「じゃあ、今日から、日暮れをまって、こっそり丸屋へ行ってもらうことにしよう」

話しているそばから、心配そうに首をつき出してきたのは仙太であった。

「いけねえよ、親分。そいつアいけねえよ」

「何がいけねえんだ!」

「何がって、いけませんや。なにもお美年ちゃんにそんな危ねえ橋を渡らせねえでもようがしょう。ほかにいくらだって人間はいるんだ」

「お美年でなくては出来ねえ仕事だよ。日ごろはちいっとおきゃん過ぎて苦い面をしてみせたこともあったが、その勝ち気がこんな時には役にたつ。仙太、第一、いざという時にゃア、てめえなんぞよりお美年の方がよっぽど役に立つらしいぜ」

「ごあいさつだねえ、親分」

「それに、ほかにも理由があるんだ。花太郎様の地下道からお美年をつけてきた千川万作、志賀権太夫という二人の怪しい侍が、なにか丸屋の事件に関係をもっていねえだろうか。頭巾で顔をかくしていたというが、少なくとも、そいつらの目つきや体つきはお美年がしっている。丸屋へもしも忍びこむやつがあったら、しかとその面をたしかめてもらうんだ」

「なるほどねえ……それから、加賀美三四郎っていう若い浪人者も怪しいや。お美年ちゃんならよくしってまさアね」

「何をいうんだい。あのお方は、絶対にそんな悪人じゃありませんよッ」

「でもさ、もしもってことがあるでしょう」

「お黙りッ！」

「へッ、またしかられた……でも、お美年ちゃん、くれぐれも用心してくだせえましよ」

「わかってるよ。うるさいね」

「いざっていう時は、仙太！ と一声よんでくだせえまし。影身に添ってお守りしていますぜ」

「とんだ頼もしい味方だねえ。ほほほ……」

「お美年ちゃんが丸坊主にされちゃったりしたら、江戸中の男が泣きますからねえ」

「勝手に泣いたらいいのさ。わたしゃ男なんて大きらい！」

大きらい！ と威勢よくいっておきながら、お美年ははっとしたように目をそらせた。

とたん、まぶたにあの若い浪人の面影がくっきりとうかびあがってきたからである。

でも違う。あのお方も男だけれど、ほかの男たちとは違う。さっぱりした、心の温かい、いいお方だわ……。

お美年がすすんで丸屋へ住みこむ役をかって出たのも、実は心に加賀美三四郎のことがひっかかっていたからであった。三四郎がこの事件となにか関係がありそうだという予感が、お美年をじっとさせておかなかったわけだ。

上野黒門町の丸屋といえば、その辺りで聞こえた質商であった。

店と奥と合わせると、奉公人も五、六人はいて、ことに一人娘のお妙は評判の器量よしである。

そのお妙に三国一の婿が決まって、いよいよ明日はその御祝言の式があるというので、店先も奥も、めでたいめでたいでごったがえしていた。

あの不気味な通り魔の来襲を予告する不吉な「花」の張り紙のことは、それを見つけた番頭の一人と重右衛門親子の間に秘密が保たれて、ほかの家人たちはだれ一人知らされていないらしい。

勘兵衛は、下っ引きの仙太をつれて、あの日から夜になるとおおっぴらに丸屋へやってきては詰めきっていた。

もと花屋を渡世にしていて、華道や茶道にも一通り心得があるのがこの際のいい口実になって、御祝言の飾りつけや作法を世話するというふれこみをだれ一人疑わない。

「しかし、親分、野郎は感づきますぜ。野郎は、おそらく、丸屋の様子をどこかからじいっと見通しているはずなんだから、あっしら二人がこうしてがんばっているのをおかしいと思わないはずはありませんや。まして、いくら祝言の手伝いだって、夜になるとやってきては泊まりこんでいくのを気がつかねえはずはねえ」

と、仙太は危ぶんだが、勘兵衛の考えは違っていた。

「世間さまはそうっとしておいて、野郎にだけ感づいてもらうのが、むしろこっちのつけめなんだ。相当うわさに立っている『花』の張り紙を見て、丸屋さんが平気でいるというのでは不自然だ。それこそ、野郎が用心してしまう。おれたち二人が張りこんでいると分かって、丁度野郎は手ごろだと思うだろう」

「でも、親分。そうすると、野郎は用心してや

ってこないかもしれませんぜ」
「音に聞こえた仙太兄いががんばっていては、とてもいけませんと、しっぽを巻いて逃げちまうというのか。バカをいえッ。それがこわかったら、予告めいた張り紙なぞするものか。どんな用心をしようとへとも思わねえくそ度胸のあるやつだからこそ、いやがらせの気味わるい張り紙をするんだろう。もし、これでやってこなかったら、とるに足りねえ小悪党だよ」
「でも、もう三晩張りこんでいて、なんのこともなかったじゃアござんせんか」
「祝言はあすだ。今夜が危ねえ。用心しろよ」
と、勘兵衛が重ねていったのは、よくよく相手を恐るべきやつと予感していたからであろう。
娘のお妙が寝間に入ったのは四ッ（十時）すこし過ぎたころであった。
お妙の寝間は、母屋から廊下でかぎの手に曲がった離れの十畳である。植え込みのこんもりと茂った奥庭に面した静かな部屋だから、もしくせ者が襲撃するとすれば、一番とっつきやすい場所だといえる。
「もし、お美年さん……今夜もおいでくださいましたか？　もし、お美年さん……」
お妙は青ざめた顔をおどおどさせながら、そばの押し入れの方をそっと見た。
「はい、来ていますよ。ちゃんとここに来ていますよ」
と、かすかにお美年の声が答えてくる。
「大丈夫ですとも。わたしが寝ず番で見張っています。さあ、落ち着いて、ゆっくりとおやすみなさいまし」
「でも、心配で……なんだか恐ろしくて恐ろしくて……」
と、お妙は青ざめた顔を押し入れの方へ向けている。
「わたしがここにかくれていることをさとられては、何もかも水のあわになります。そしらぬ

顔をしてお床へお入りなさいまし」
ふすま越しにもれてくるお美年の声はかすかだが、勝ち気な性分をみせてしっかりしていた。
お妙はおずおず寝巻きに着かえて床にはいった。
「灯は消さないでくださいまし。行灯（あんどん）は明るくしておいてくださいましね」
と、お美年の声が聞こえてくる。
「はい……」
「戸締まりはしっかりなさいましたか？」
「それは、もう……」
「重右衛門さんには父がついて見張っていますし、仙太が家の内外をのべつ注意して見回っているはずです。ちっとも心配ありませんから、安心しておやすみなさいまし。今夜さえ無事に過ぎれば、もう心配ないと思いますから……」
「本当にそうでございましょうか」
「なんだかそんな気がするのです。一番危ないのは今夜だという予感がするのです」
「ええっ？　今夜ですって、お美年さん？」
「ねえ、お妙さん。変なことを伺うようですけれど、どうして明日を御祝言の日にお選びになったのですか？」
「は、はい……」
「お盆はすぎたといえ、昨日送り火をたいたばかりの明日は十八日、おめでたい御祝言の日取りとしては随分変わっているように思いますけれど……」
「それは、母の遺言だったものですから……」
「まあ。お母さんの？」
「ええ……お美年さん、あなただからお話ししますけれど、母が気が狂って亡くなったのが、丁度三年前の七月十八日だったのでございますよ」
当時の悲しい記憶を呼びもどしてか、お妙の声は震えていた。
「どういう訳でございますか、母は、ずっと以前から、うら盆のころになりますと少し気が変

になりまして……まるで、何かにうなされるように、夜中にはねおきてお仏壇の前へいき、声をあげてむせび泣きながら必死に手を合わせておがんだりするのです。わたし、とても気味が悪うございました」

「それで、お妙さん、どうしましたの?」

「三年前のあの時は、前から加減が悪くて病床に臥せていたのでございますが、うら盆のお迎え火をたくころから急に容態がおかしくなりまして、夜も昼も絶え間なしに、あられもないうわごとを口走っておりました。そして、十八日になりますと、急にがっくりと気力が落ちまして、まくらもとにおりました父とわたしに向かい、お妙の御祝言を見られず死ぬのが心残りだが、この十八日には毎年きっとこの家へもどってくるから、御祝言は必ずこの日にあげてくれとそういって……そのまま息をひきとってしまいました」

「そうでしたか。それで、十八日を御祝言の日にお選びになりましたのね?」

「でも、お美年さん、あなたですからお話ししたのです。だれにも、決しておもらしくださいませんように……」

「だれにも話しはしませんけれど、どうしてそれを内緒にしておかなければいけないのですか?」

「父がそう申したのです。母のことは、絶対に、だれにもしゃべってはいけないと申したのです。遺言のことももちろんですけれど、母が気が変になったことも、出来るだけ内緒にしておけと、きつくそう申しているのです」

「いくら内緒になすっても、おうちの人たちには分かっているのでしょう?」

「いいえ……母が亡くなりましたすぐあとで、一番番頭だけを残して、あとの奉公人は残らずとりかえてしまいましたから……」

「まあ、どうしてそんなことまでなすったのでしょう」

「母の最期はとてもひどかったのです。とてもひどい狂いようだったのです。わけの分からないふしぎなことをしきりに口走ったりしまして……」

「まあ。どんなこと?」

「花太郎さまがくる……花太郎さまがくる……」

「ええっ、な、なんですって、お妙さん!」

「花太郎さまがくる、花太郎さまがくる、と夢中で口走りながら、虚空をかきむしって狂い死にに息がたえました。その恐ろしかったこと……」

と、お妙は布団の中でじっと息をひそめた。

「なんの意味だか分からないのですよ、お美年さん。わたしには何がなんだかちっとも分からないのです。でも、そんないやな思い出は少しでも早く忘れてしまおうと思いまして……このごろ、やっと忘れかけましてほっとしておりましたのに……お美年さん、聞こえますか? 聞いていてくださいますか?」

「ええ、伺ってます。すっかりここで伺っています」

「いやな思い出をやっと忘れかけてほっとしておりましたのに……先日、あの気味わるい張り紙が……わたし、その話をきいたとたん、ぞうっとなって、もう少しで倒れてしまうところでした。お分かりでございましょう、お美年さん。日暮らしの里に花太郎さまという子育て地蔵がございますね?」

「ええ、ええ、しっています」

「あの花太郎さまには、お花の代わりに、花とかいた紙をあげるそうではございませんか。花太郎さま……花太郎さま……母は狂い死にする間際に、花太郎さまがくると叫んだのですもの……ぞうっとしました。倒れそうでした。母が申した花太郎さまとは、あのお地蔵さまのことなのでしょうか? どういう関係があるのでしょうか? あの気味わるい張り紙は……だから、恐ろしいのです。気味がわるいのです。ね

え、お美年さん、ど、どうお思いです。どうしたらよいのでしょう?」
「大丈夫です。しっかりしてください、お妙さん。何が起ころうと、安心してわたしにまかせていてください」
と、お美年は口ではいいながら、むしろお妙以上になにか膚にあわだつようなものを覚えた。
お美年に元気づけられて、お妙もやっと少しは落ち着いたらしく、布団にえりをうずめてじいっと目をとじた。
といっても寝つけるわけはなく、庭木のこずえをわたる風の音にもびくっとしてはまぶたをふるわせている。
九ツ（十二時）近くなって、主人重右衛門はやっと寝間に入ったらしく、急に屋敷うちが静かになった。それでもまだ家人の幾人かは起きていて、明日の準備に何かやっているらしく、それらしい物音がとぎれとぎれに遠く聞こえてくる。
庭先をゆっくり歩いてくる足音がして、雨戸の前までくると、
「えへん……」
と、軽くせき払いの声をきかせた。
これは、仙太が外回りの見回りをはじめた合図である。
勘兵衛は、家の中のどこかで、重右衛門の身辺を見張っているのだろう。
お美年は押し入れの暗がりの中にじっくりと身をひそめていた。
片だすきをかけて、右そでを真っ白なひじの上まで惜しげもなく露出し、片だすきをたぐってその端を帯の間へきりっとはさんだのも、いざという時、いつでも飛んで出られる準備のためである。
例の、腕に覚えのある千枚通しの手裏剣を、右手に一本、さらに帯の前半に二本たばさんで、ふすまの間から漏れてくる火影に、ふるいつきたいような白いえり首をほんのり傾け、じいっ

とき耳をたてたその姿は、なまめかしくもまた見ほれるくらいかいがいしい。
もしやと思っていた花の通り魔と、御慈愛深い子育て地蔵の花太郎さまとの関係が、さっきのお妙の話でいよいよ疑惑深いものに思われてきた。
お妙の母がもだえ狂って死ぬ時に、花太郎さまがくる！　と叫んだのはどういう意味なのだろうか？　一方、あの地下道の奥で、両手を五寸くぎで壁へぶちこまれ、血みどろになって死んだお高という老婆が、口の中へかくしていた銀の小鈴を、花太郎さまに……と一言、必死にうめいてこと切れたではないか……。
もう真夜中であった。
さっき、九ツ半（午前一時）をしらせる火の番の拍子木が塀の外を過ぎていったのを聞いた。
もう家人も残らず寝静まったらしく、風の音さえ絶えた森閑たる静けさであった。
と——
お美年は、突然、何かの気配がかすかに家の中をすうっと動いたと感じた。
急に行灯の灯がまたたいて、いまにも消えそうに暗くなる。どこから迷いこんだのか、蛾が一匹、油つぼの上で舞っているらしい。
なんだか妙である。
ぐうっと胸をおされるような気がした。なぜだか分からないが、妙に胸苦しくなって、すうっと地の底へでも引きこまれていくような心地だった。
「あ——」
かすかな悲鳴とも、うめき声ともつかぬお妙の声が聞こえた。
はっとわれにかえったお美年が、ふすまの透き間から目をこらすと、行灯の向こうにいつの間にか黒々とした人影が一つ立っている。
いつ、どこから、どうやって入ってきたのか分からない。
前夜お美年を襲った侍とも違うお美年のしら

ない男であった。
　唐桟らしい着物の、高々とはしょったすその下から、紺の股引きをはいたたくましい脚が見えている。顔は柿渋色の手ぬぐいでほおかぶりしているのでもちろんしかとは分からないが、その間からのぞいた目がぞうっとするように冷たく光っている。
　お妙は、布団の上へわずかに上半身をもたげただけで、生きた空もなげにわなわな震えていた。
「おらア江戸の花太郎だ……」
　と、その男が低い声でのしかかるようにいった。若い、しかしすごくどすのきいた声である。
「てめえのおふくろが死ぬ間際まで、くるくるとうわごとにいいつづけていた花太郎さまだ。約束どおりやってきたぜ」
　と、行灯のそばをはなれてぐいと一歩寄った。
「あ――っ」
　と、お妙は、泣くように、かすかな悲鳴を一声あげただけ。
「命まではもらわねえ」
　と、また一歩寄りながら、ぎらっと匕首をぬく。
「あ――っ」
　お妙は顔をおおった。
「うらむなよ、それもこれも親の因果だ。命まではとらねえ。花太郎さまに花の代わりに髪の毛をあげて、せめても罪業消滅を願えッ」
　いうなり、つつつ……とすべりよってきた影が、お妙の上へのしかかるように身をかがめたとたん、
　がらりッ！
　お美年は、ふすまを引きあけ、押し入れからおどり出す。片ひざついたそのままの姿勢で、
「えいッ！」
　手中の千枚通しを投げた手練は目にもとまらぬ速さであった。
「ちっ！」

　舌打ちの声と一緒に、その男は少なくも五尺の余は一気にわきへはね飛んだであろう。ほおかぶりの目がかあっと火をふくようなすさまじさでこっちをにらんだ。
「御用ッ！」
　お美年は、女の声とも思えぬ鋭い叱咤をあびせながら、間髪を入れず、ひゅっと二本目の手裏剣を投げつけた。
　とたん、男の影は、反対の方向へ、また五尺の余もはねとんだ。
「女ッ！」
　憎悪に燃えた目が、かっと真っ向からお美年をにらんでいる。
「じゃまするなッ。命がねえぞッ」
　おどかしではない。匕首をかまえて、じいっとこっちをにらんだその挙動は、野獣が決定的な最後の一撃を加える時、えじきを見るそれとよく似通っていた。
「くせもの！　御用ッ！」
　お美年は、一歩もひかずたちはだかって、手中に残った最後の千枚通しをキッとかまえた。
どどどど……
　と、はせよってくる足音が聞こえる。勘兵衛が聞きつけたのだ。
　とたん、その男は、くるっときびすをかえし、脱兎のように走り出した。
　いつの間にか、渡り廊下の戸じまりが一個所あいている。
　男はそこから庭へとんで出たのだ。お美年もすかさずそのあとを追っていく。
　庭はかなり広くて、暗い植え込みの陰が多かった。夢中で追いすがっていくうちに、いつの間にか、その片すみの、ひときわこんもりと暗い木立の陰まで来てしまっていた。
　男が立ちどまってぐるりと振りかえる。
　追いつめたと思うから、しめた！　とお美年は気負い立った。
「待てッ、御用だッ」

千枚通しを逆手にかまえて、キッとにらんだその姿は、女と思えないほど鋭かったが、じろっとにらみかえしたほおかぶりの目は、まるで冷笑するように落ち着きはらっていた。
「女、静かにしろ。聞くことがある」
と、逆に一歩ぐいっとつめよってくる。
「分かった。お前は勘兵衛の娘だな」
「神妙におしッ。女とあなどるとけがをするよッ」
「さすがに評判の勘兵衛の娘だけある。手並みのほどは、さっきの手裏剣でよく分かっていらア」
と、気味わるいくらい落ち着きはらった目が、お美年を頭の上から足のつまさきまでじろっと見やった。
「だが、ほめてやったのは、お前の手並みに恐れ入ったんじゃアねえ。あの部屋からすなおに退散したのは逃げたんではなくて、お前を勘兵衛の娘と知って、ちいっとばかり聞きてえことがあったからだ」
「つべこべおいいでない。神妙にしないとけがをするよッ」
「かわいい顔をしておつなせりふをはくが、そっくりのしをつけて返上するぜ。この世の中に恐ろしいもののねえおれだ。女だてらにあれほどの手並みでじたばたしやがるととんでもねえ目にあうぜ」
と、またじりっと一歩よってくる。
「女一人と思ってバカにおしでないッ。神妙におしッ」
「おっとっとっと……気のつええ女だ。そこからうかつに動くとけがアするというに……そうだそうだ、じっとしているんだ。うん、知っているとも、勘兵衛が張り込んでいることは……あの足音が勘兵衛だ。おれたちをさがしていやアがる。ここを探しあてるまでには、まだ少しは時間があるだろう。命をとろうとはいわねえ。話のすむまで声を立てるなッ」

じろっとにらんだ目は、ぞっと膚にあわだつほどすさまじかった。
「勘兵衛の張り込みは先刻御承知だったが、お前のことを知らずにいたのはとんだ手落ちだった。といっても、そのためにあたら大事な仕事を仕損じたといってるんじゃアねえ。お前に会えたのがもっけの幸いだというんだ。だからこうしてここまでおびき出したんだ。やい、女。お前は、花太郎さまの地下道で、お高という老婆にあったろう？　え、図星だろう？」
「な、なんだって！」
「驚くにゃアあたらねえ。おらアちゃんとしってるんだ。そうして、お前がお高から何かあずかったということも……はっきりいおう。あずかったのは銀の小鈴だ」
といいかけて、ほおかぶりの間からのぞいた目がきらっと光った。
「どうだ、女。お高から、花太郎さまに……といわれて銀の小鈴をあずかったであろう？　図星だといえ、図星だと……」
「それがどうしたというんだえ？」
お美年は、寸歩もひかぬ気魄で、はったと相手をにらんでいる。
「その鈴を、おれによこせ」
「な、なにッ！」
「おらア江戸の花太郎だ」
と、その男はうそぶくようにいった。
「お高が、花太郎さまに……といってあずけた鈴だ。おれに渡せ」
「そ、そんなこと、知るものか！」
「知らねえはずはねえ」
「神妙におしッ！」
「すなおにしねえな……」
ぐうっとのしかかってくるようなその影をめがけて、お美年は手にしていた最後の千枚通しをはっしとばかり投げつけた。
「おっと、危ねえ！　その手をくうか……」
冷笑した目が、ふわりと宙にゆらいだと思う

と、お美年は、とたん、頭上からさっと舞いおりてくる黒いものを見た。
あっ！　と思ったが、もう避ける間もなかった。
恐るべき素早さで、一度どんと体当たりをくれ、うしろへのけ反っていくお美年ののどへ、声を立てる間もなく、その太い腕がぐっとからんで締めつけてきた。
「お美年、お美年！」
と、父の声がよんでいる。
「どこだ⁈　くせ者はどこだ、お美年⁈」
叫びかえそうと思った声も、ただ、
「ううう……」
と、低いうめき声になっただけである。
男は、お美年の首をうしろざまに締めつけたまま、ずるずる引きずるようにして、暗がりの奥へ奥へと歩んでいく。
呼んでいる勘兵衛の声がまた遠くなった。
「さあ、いえッ。銀の小鈴をあずかったであろう？」
と、男は少し腕をゆるめる。
「し、知るものかッ」
「おれが花太郎だ。花太郎さまに渡してくれとあずかった鈴をなぜすなおに渡さねえ」
「し、知らないッ。そんなもの、しるものかッ」
「いえるようにしてやろう」
男の目が残忍に光ったと思うと、片手の匕首（あいくち）をお美年のほおにぴったりとおしつけた。
「鼻をそごうか。耳を切りおとすか。さあ、好きな方をいえッ」
本当にそんなこともやりかねない悪鬼のような冷酷な目であった。
「鼻をそがれた花屋小町か。ふふふ……さぞ面白い面になるだろう」
と、冷たい匕首の刃先をお美年の鼻へひやりとふれてくる。
「さあ、いえッ。鈴をどうした？」
「しるものかッ。そんなもの、知るものかッ」

「おらア、こうと思ったことは、どうしても仕とげずにゃアおかねえんだぜ。よしッ」
その男の目に殺気だったものがめらめらっと燃えたったと思った瞬間、どうしたことか、
「あっ！」
と低く叫びざま、お美年を突きはなして、ぱっと一間の余もうしろへとびすさっていた。
突っぱなされてのめったお美年が、片ひざつきながらもとっさに振りかえった時、花太郎と名乗った怪盗は、お美年の方へ横顔を見せたまま立ち木を小盾にとってあらぬ方をキッとにらんでいた。
その向こうの二間とはなれていない暗がりの中に、いつ、どこからやってきたのか、もう一人の黒い影が立っている。だれか分からないが、勘兵衛でも仙太でもないことは確かだ。
二人とも、無言のままにらみあっている。物をいうすきもないほど緊迫した空気が立ちこめていたといった方がいいであろう。お美年でさえ、口もきけず、身動きも出来ないほどの重苦しい殺気を感じた。
花太郎は、小盾にとっていた立ち木をはなれて、右手へじりじり動いている。その右手に鋭く光っている匕首が、まるで不気味な生きもののようにかすかに動いていた。
「だれだッ？　うぬは何者だッ？」
と、花太郎の低く押し殺した声が、ぞっとするような殺気をこめてやみを走った。
「何しに来やアがった？　なぜ、じゃまをしやアがるんだ？」
向こうの影法師は無言だった。無言のまま、花太郎のほおかぶりの中の顔をじいっとさぐるように凝視しているという気配があった。
右へ動いていた花太郎の影が、今度は左へ左へとじりじりもどってくる。その動き方の中に、野獣が獲物に向かって襲いかかる直前の、たけだけしい冷酷な、あの鳴りをひそめたような不気味さがあった。

「やい、ぬかせッ、うぬは何者だッ?」
「聞きたくば名乗ってもやろう……」
　と、向こうの暗がりから落ち着きはらった声が聞こえてきた。
「その前に、ほおかぶりをとってその面を見せろ」
　あっ！
　と、お美年はもう少しで声をたてるところだった。
　その声が、夢にまで懐かしく思い出していた先夜の加賀美三四郎という浪人の声だったからである。
　一瞬、かあっと胸が熱くなり、ひざがしらががくがくと震えた、あまりにも思いがけないところでその声を聞いたからであろう。
「その顔の手ぬぐいをとれ」
　と、静かな声がまたいった。
「なにッ?」
　花太郎のほおかぶりの顔が奇妙にゆがんでにたりと笑った。
「この面が見たいと? おい、若僧、なんの必要があって、この面が見たいのだ?」
「当節、江戸をさわがしている不敵な盗賊の顔を、話の種に一度見ておきたい。とれ、ほおかぶりをとれ」
「ぬかしたな。この面にそれほど執心のあるやつは、生かしておけねえ。どこのどいつであろうと生かしちゃ帰さねえ。野郎！」
　お美年は、一瞬、あっと顔を覆った。
　花太郎の影が、おおかみのように宙を飛ぶのを見たからだ。
　何がどうなったのかよくは分からない。
　どうと二つの肉体がぶつかりあう鈍いがはげしい響きがおこって、次の瞬間、はじかれたようにまた二つに飛びすさった。
　さっきとは位置を逆にして、三四郎がお美年のすぐ前に、端麗な横顔を見せて立っている。
　三四郎の顔をありありと目の前に見た時、お

美年はわれを忘れて思わずその方へ走りよろうとしたが、わずかに手足をあがかせただけで、金縛りにあったようにすくんでいた。
　その場の空気がもはやお美年などの立ち入るすきを全然与えないほど緊迫していたからであろう。
　それほどにすさまじい殺気だった。そのくせ、だれ一人いないようにしいんと静まりかえっている。
　三四郎の表情は、キッとしてはいたが、落ち着きはらっていた。呼吸の音さえ聞こえないくらいである。その上、ふしぎなほど気品がある。
　――と、お美年はふっと思った。
　いや、お美年の感じだけではない。その青年武士には、どんな緊迫した瞬間にさえ、ゆうゆうたる落ち着きと気品の高さが、顔にも姿にもにじんでいるようであった。
「生かしてはおけねえやつだ」
　と、やみの向こうからほおかぶりの目がまた低くうめいた。
「なぜ、おれをつけ回す? おれの面が見てえと? ふん……この面を見るより前に、そっちの命が娑婆から消えるんだ。消えろッ、小僧ッ！」
　じりじりやみの底をうごめくように動く影法師が、まるで何かにとりつかれた執念の鬼のように見えた。
　相手は匕首をひらめかしているが、三四郎は素手のまま小腰をかがめて身構えている。
「だっ！」
　どっちかが叫ぶのと、また、二つの影が宙におどりあがるのと同時だった。
　ぶつかってはじけ、はじけてぶつかり合い、またはじけるように左右へとびすさった。
「ちっ！」
　はげしい舌打ちであった。
　花太郎の影が、片手で顔をおおいながら地へ低く沈むように身をかがめた。

「やりゃアがったなッ」
三四郎の手に、とけた手ぬぐいがにぎられている。相手のほおかぶりをはぎとったらしい。
片手でおおってはいたが、花太郎の素顔がちらっと見えた。三四郎とほとんど同年配らしい若い男の顔であった。
「ふうむ。それが花太郎の顔?」
三四郎の声である。
「それが世間をさわがしている江戸の花太郎の顔か……見たぞ」
「生かしてはおかねえ。金輪際、生かしておくものか。よくも、この面を見やアがったな。もう生かしてはおくもんかッ」
地に沈んだ花太郎の影が、なにかあやしい動作をともなってびくっと動いたようである。
瞬間、
「危ない」
叫んだ三四郎が、がばと地上へ突っ伏すのをお美年は見た。
それっきり、お美年には何がどうしたのか分からない。
轟然(ごうぜん)たる音響と一緒に、巨大な火の玉が立ちのぼって、目のくらんだお美年はあわてて地上へ身を投げた。
気がついた時には、あたりはふたたびやみにとざされ、ただむせかえるような煙のにおいが立ちこめていた。
その煙の中から、
「お美年、お美年ッ。しっかりしろ!」
と、勘兵衛の声がよんでいる。
「ああ、おとっつぁん!」
と、助けおこしてくれた勘兵衛の腕に、お美年は夢中にすがりついていた。
「あのお方は? あのお方さまはッ?」
「しっかりしろ、お美年。どうしたんだ?」
「あのお方を……は、早くッ、助けて……助けてあげてくださいましッ」
「しっかりしろというのに……いつものお前ら

しくもねえ」
「早くッ! あのお方を……」
「あのお方って、だれのことだ?」
「あ、あのお方です。加賀美三四郎さまです。先夜、わたしを助けてくださったあの御浪人ですッ。今夜も、危ういところを……また、あのお方が助けてくださいました」
「なに? あの御浪人が、またここへ?」
「そ、そうなんです。あのお方を早く……そ、そこに倒れておいででしょう?」
「落ち着け、お美年。そこらにはだれもいやアしねえ」
「え?」
お美年は光にくらんだ目を懸命に見開いてやみの向こうをすかし見た。
「あのものすごい音と光に驚いてかけつけた時にゃア、ここにお前が倒れていたきりだ。向こうへ……塀(へい)をおどりこえてだれか走っていきゃアがる。仙太があとを追ったが、もう間にあうめえ」
「じゃあ、あのお方は御無事だったのですね。おとっつぁん、大丈夫だったのですね、三四郎さまはッ?」
と、われにもなくとり乱した姿を勘兵衛はじいっと見つめたまま、
「おちつけ、お美年」
と、やさしくたしなめた。
「お前がくせ者をおって庭先へ走り出たまでは分かっている。あれからどうしたんだ?」
「あいつはわたしをこの暗がりへおびき出したんです」
「お前をおびき出したって? なんのために?」
「自分で、江戸の花太郎だといいました。お前は勘兵衛の娘だろう? 花太郎さまの地下道で、お高という老婆から銀の小鈴をあずかったはずだ。それを渡せ、といって、わたしの首をしめつけて……」
「ふうむ、野郎。江戸の花太郎と名乗ったの

か？」
「ええ。おとっつぁん、お妙さんから話をききました。丸屋さんには過去に何か秘密があるらしいんです。お妙さんのお母さんが亡くなる時、気が狂って、花太郎さまがくる、花太郎さまがくるとうわごとをいいつづけていたそうです。それと、これと、きっと何かの関係があるんですよ。だから、御主人の重右衛門さんを問いつめたら、きっとあのくせ者の正体が分かりますよ」
「ふうむ……」
と、低くいったまま、勘兵衛はしばらくやみのかなたをにらんでいた。
「どうやら、おれの思っていたよりもっと大きな事件になりそうだ。お美年、重右衛門さんは殺されたぜ」
「ええっ、な、なんですって？」
「あれほど、おれが目を光らせていたのに……あっというわずかの間だった。のどをえぐられてよ。まるで、通り魔のような野郎だ」
吐き出すようにそういった勘兵衛の声は、無念そうにしわがれていた。

迎え駕籠

丸屋の事件があってから数日がすぎた。
勘兵衛の考えから、事件の内容は極秘にふされ、世間にはただ強盗が入って主人の重右衛門が殺されたということだけが知らされている。
「お美年ちゃん、何をふさぎこんでいらっしゃるんです？」
と、上がりかまち近くに大あぐらをかいた仙太が、せっせと十手にみがきをかけながら、ほんのり行灯のともった奥の方へ話しかけた。
「何もふさぎこんでなんかいやしないよ」
「あの時の働きは大したものでしたぜ。親分の目さえかすめて重右衛門さんを殺してのけたふてえ野郎だ。お美年ちゃんは立派にお妙さんを守りとおしたんだからねえ。もっと威張ったっていいんだ」

「ふさぎこんでなんかいやしないってば！」
「へえ、そうですかねえ」
と、仙太は意味ありげににやっと薄笑いしたが、そのまま何食わぬ顔で、十手に息をふきかけてはこすりはじめる。
勘兵衛は留守だった。あれからは、事件の糸をたぐり出すため、連日方々駆け回っているらしい。
ところが、あの事件以来「花」の張り紙を残していく不敵な怪盗の活動も、ぴったり鳴りをひそめたようにとぎれてしまった。
「何にしても、容易ならねえ事件でさ」
と、ちょっとも黙っていられない仙太は、またしゃべり出した。
「お妙さんの話で、丸屋の過去に何かあの怪盗と関係のあるいざこざがあったにちげえねえと……こりゃアだれだって目当てのつくことなんで、親分は野郎に襲われた前の三人……芝神明の御家人、麻場喜十郎、浅草馬道の伊勢屋権六、それに品川御殿山下の片目の伍平と、そいつらのところを再三お回りんなって何か聞き出そうとなすったらしいが、みんな石のように口をつぐんでいて、何一つたぐり出せなかったそうで……重右衛門さんでも生き残っていたらなんとかなったと思うんだが……もう、片耳そぐだけじゃすまねえ、命までとっていきゃアがった。丸屋への恨みが一番深かったせいか、それとも重右衛門さんの口をふさいでしまう必要があったからか……何にしても、段々、手荒になってきやアがる。これから先、何がおこるかしれたもんじゃありませんや。だからね、こうして十手の手入れでも十分しておいてね、いまに目にもの見せてくれますぜ。よう！　ぴかぴか光ってきやアがった。どうでえ、このつやは……御用だッ！」
と、仙太は十手をふりあげて見得をきる。
「騒々しいねえ。ちっとは黙っていられないの

かい！」
「ごきげんがわるいんですねえ、お美年ちゃん。分かってますぜ。へへへ……」
「なんだよ、いやな笑い方をして……何が分かっているんだよ？」
「お美年ちゃんのふさぎの虫のいどころがさ。気にかかるんでしょう、加賀美ってあの野郎のことがさ」
「お黙り！　失礼じゃないか、あの野郎だなんて……」
「怒ったってだめでさ。ほうら、赤くなった。御用だッ。加賀美三四郎！」
「バカッ。おやめってば！」
　お美年は本気になってまゆをつりあげた。
　仙太のいったことは図星だった。
　お美年の胸の中は、加賀美三四郎のことでいっぱいになっている。
　二度も危ないところを助けていただいたのに、ろくろくお礼さえもいえないで――それが気がかりのもとなのだと、自分で自分にいいわけしているが、どうもそれだけが原因ではないらしい。
　加賀美といい、三四郎と聞いただけで、胸がどきっとする。何をしていても、いつのまにかふっと手がお留守になったと思うと、その若々しい顔が幻のようにまぶたにうかんできてぼんやりしてしまう。
「お美年ちゃんのほれた男なら、御用の時にゃア手加減して、なるべく痛くねえように縛ってやりますぜ」
　きれいな娘をからかって喜ぶのは男の癖だ。相手がむきになればなるほど面白がる。
　お美年は本気になって怒っていた。
「仙太のバカッ。何をいうんだい。どうしてあのお方になわをかけるんだい？　わたしの命の恩人だよ。バカもやすみやすみいわないと承知しないから……」
「折角のお美年ちゃんのお言葉だが、はい、さようでございますかって引き下がっていられねえ筋があるんでさア」

「偉そうにいうじゃアないか。大した御用聞きにおなりだねえ。そんなら聞こうじゃないか。さあ、その引き下がれないって筋を聞こうじゃないか。その代わり、下手な冗談で逃げなんてしたらただじゃアおかないよッ」
「ねえ、お美年ちゃん。あっしもこうして永年このお家の飯をくわしていただいているんです。ほかのことと違って、御用の筋ではつめのあかほどだって冗談やちゃらっぽこはいやアしません」
「だから聞こうといってるんだ。さあ、おいいってば！」
「じゃあいいますがね。あの加賀美三四郎て野郎……じゃねえ、お侍はね、この前にお美年ちゃんを助けてくんなすった時といい、今度の丸屋の時といい、ただ偶然通りがかったんだとお思いになりますかえ？　いいや、もう、だれが見たって、ちゃんと何かが起こることを見抜いていて張り込んでいなすったんだ。その上、お美年ちゃんを襲った二人のくせ者の正体までちゃんとしっていましたっけねえ。それに、丸屋の時、どえらい火薬の爆発する音をきいて、あっしと親分が駆けつけていくと、侍らしい人影が……はっきりいやア三四郎って男さ。あわをくらって、塀をとびこえ、待てッ！　といくら声をかけたって振り向きもしねえでずらかってしまやアがった。これが怪しくなくってどうなるんです？　親分も黙ってはいなさるが、しきりにあの男の行方をさがしていらっしゃるんですぜ」
「それがどうしたっていうんだい。それがどうして悪人だという証拠になるんだい」
「どうもこうもありませんや。怪しい野郎は一人残らずひっくくって調べてみにゃアならねえといってるんで」
「仙太、ことわっておくけど、もしもあのお方に失礼なことをしたら……承知しないよッ」

お美年は顔を真っ青にしてくちびるをふるわせる。

と――

その時、表の方から、けたたましい馬蹄の音が聞こえてきた。

「おやッ、馬ですぜ」

と、仙太は話の腰を折られたように、十手をみがく手をとめた。

お美年も思わず耳をそばだてる。

ここは通りに面しているといっても街道筋ではなく、それに夜のことだ。この時刻にこの辺りへ馬を乗りうちしてくるというのは珍しいことであった。

五、六騎はいるらしい。

走ってきた馬蹄の音が、花屋の戸口近くまでくると、急に手綱をしぼったように、足並みを乱しながら次々にとまった。

と思う間に、

「御免……」

といいながら、丸に花という字をかいた戸口の油障子をあけてだれか入ってくる。

陣笠に馬乗の袴、手にむちをもった遠乗り姿の一人の武士であった。

「花屋というのは当家か？」

「へへい、そのう……」

と、仙太はあわてて十手を懐へねじこんだまま、立ったり座ったりうろうろ、お美年の方へ助け舟を求めている。

相手を名ある藩の武士と見て、余計あわてふためいたらしい。

「さようでございます。花屋勘兵衛でございますが……」

お美年が進み出てきてあいさつした。だれの前に出ようと悪びれしない落ち着きが、その姿をいよいよ美しく見せている。

「勘兵衛は在宅か？」

と、その侍は家の中をずいっと見回しながらいう。

「あいにくとただいま不在でございますが、なんぞ父に御用でも？」

「いや、格別の用もない。遠乗りのもどり道、しばらく店先をかりて休息したいが……」

「さようなれば、むさくるしいところではございますが、どうぞ……」

「では……」

と、会釈しながら、

「御身分のある方だ。粗相のないように……」

と、小声でいいおいて、その侍は表へ出ていった。

お美年が奥から座布団をとってもどってくる間もなく、戸口から主従らしい二人の武士がつかつかっと大股に入ってきた。

先頭に立ったのは、年のころやっと二十一か二であろう、色の白い長身の若者であった。

表の方には、なお幾人かお供の武士がひかえているらしい。

お美年が上がりかまちへおいた布団へ、

「若殿……」

と、そばに従っていた白髪の小柄な武士がうやうやしく招じた。

無言で腰をおろした人は、物珍しげに家の中を見回していたが、お美年が茶を入れに奥へ入ろうとすると、

「これ……」

と呼びとめた。

若々しい気品のある声である。

「ただいま、お茶を……」

「いや、茶はもどりに所望しよう」

と、いまさらのようにお美年の顔へ目をとめて、

「そなたは当家の娘か？」

「はい、美年と申します」

「うむ……」

といったきり、しげしげとお美年を見つめている。

その風采から、供回りの様子から、どうやら大

名の若殿でもあるかと思われる人物であった。
「遠乗りの帰りに、ふと思い立って立ち寄ったが……」
　と、その人はいいながら、まだお美年を見つめていた。
　見れば見るほど身分ありげな人である。こんなところへ立ち寄ったのも、よくよくの気まぐれか物好きと思われた。
「むさくるしいところで、恐れ入ります」
　と、見つめられた目をお美年はそっとうつ向けた。
「歌にあるな。ここがその勘兵衛の花屋か？」
「はい、以前、花屋をいとなんでおりましたもので……」
「勘兵衛の花屋で花買って……歌の文句にある。おさなごがよくうたう歌じゃ」
「恐れ入りましてございます」
「懐かしい歌じゃ。わしも幼いころ、よく耳にしたことがある」
「町の子供たちは手まり歌にうたっておりますようで……」
「あの文句……はじめはどうであったか？」
「江戸の花太郎さまに……でございます」
「うむ、そうであった。江戸の花太郎さまに願かけた……そうであったな」
　といいながら、若殿はなぜかそばにいる白髪の武士とちらっと目を見合わせた。

江戸の花太郎さまに　願かけた
花さま花太郎さま　願かけた
よい子産むよに　願かけた
よい子育つよに　願かけた

江戸の花太郎さま　花あげた
花さま花太郎さま　花あげた
勘兵衛の花屋で　花買って
赤い花白い花　花あげた

　若殿は口の中でつぶやくようにいっている。そして、それをいい終わると、また白髪の武士とちらっと目を見合わせた。
「ここから花太郎地蔵まで近いか？」
「はい、すぐでございます」
「馬の乗りうちはできるか？」
「さあ……これから先は道も細く、草ふこうございますし、それに月もくろうございますから……」
「では、歩かねばなるまいな」
「まあ。花太郎さまに御参詣でございますか？」
「うむ。急に思いたって立ち寄った」
「道がくろうございます。夜になっては滅多に御参詣の人もございません」
「案内せい」
「さようなれば……暗い夜道におはじめてではお分かりにくうございましょう。仙太、仙太……どこにいます？」
　とよんだが、あわをくらった仙太は、どこへどうもぐりこんでしまったのか姿を見せなかった。
「地蔵尊に供えたい。花を用意せ」
「あのう、折角ではございますが、ただいまは花屋をいたしておりませんもので……」
「なんぞあろう。野花でよい」
　と、気短にいいすてて、もう立ち上がった。
　仕方がないから、お美年は裏庭へ出て、昔の花畑の名残に片すみに咲いている夏菊、ききょうのたぐいを一本折りとった。
　表へ回ってみると、そこらの立ち木につないだ数頭の乗馬のそばには口取り中間一人を残し、残りの五、六人は、もう手に手に馬上ぢょうちんをかかげ、若殿の前後をとり囲むようにして待っていた。
　由緒ある神社仏閣ならいざしらず、路傍に祭られた道祖神や地蔵尊は、おおかた庶民の信仰するものと相場がきまっていた。
　花太郎さまはこの辺りでは名前の聞こえた地

蔵尊でもあり、ときには武家で参詣する者もないではないが、夜中わざわざそれへ立ち寄るという例はほとんどない。

まして、数人の供をつれた大名の若殿とも思われる気品高い武士の参詣と聞いて、お美年は意外さに驚きながらも、世にも御奇特なお人もあるものと感心した。

歌の文句にある勘兵衛の花屋を覚えていて、わざわざ立ち寄ってくれたということも悪い心地はしなかった。

馬上ちょうちんの一つをかりて先に立ったお美年は、

「お足元にお気をつけくださいまし。これから道も細くなり、露しげくなりまする」

と、丁寧に、心をこめて案内する。

日ごろは男を男とも思わないほど勝ち気な娘だが、こんな時には折り目正しく優にやさしい。

ちょうちんをかざしたひじの辺り、紺地のひとえの襟元からなよなよと抜け出たうなじの辺り、火影の中で一際くっきりと白くなまめいたが、なにか物珍しくその目をひいたか、若殿は無言のまま、じいっと見つめていた。

だれも無言だった。

身分のある武家というものは、こんなにも堅苦しいものなのかとお美年が不審がったほど、だれ一人口をきくものもなかった。いや、ただ口をきかないという以上に、なにか妙に息づまるような緊張が感じられた。

自然、お美年まで、口を封じられたように、黙って歩くだけであった。そのあとから、五つのちょうちんの灯が粛々としてつづいていく。

あの白髪の武士が、若殿のすぐ背後にひたと寄り添って笠のかげから目を光らせているさまも、ただの警固という以上になにかものものしい感じでさえあった。

花太郎さまはやみに包まれてひっそりと立っていた。妙なうわさが立ちはじめてからは、夜中お参りする者はほとんどなくなっている。

「やっと参りましてございます。これが花太郎さまでございます」

お美年がそういって手にしてきた花束を堂前に供えると、

「御苦労であった。その方はあちらで控えておれ」

と、白髪の武士がいった。

「はい。では、ごゆるりと御参詣下さいまし」

お美年はすなおにいって後ろへさがっていく。

と——

二人の武士が、すっとそばへよってきて、右左からお美年をはさむようにして、

「もそっと下がれ」

と、ずっと離れた濃い木立の陰までつれていき、そのまままるで見張りでもするようにお美年のそばに立っている。

同時に、あとの三人が、つつつ……と小走りに四方へ散って、人目を警戒するかのようにキッとした姿勢に身構えた。

若殿は、白髪の武士とただ二人、うやうやしく堂前に手を合わせている。

いかにも心をこめた礼拝の姿だと、お美年が感心して思わず見つめていると、

「うしろを見るなッ！」

と、そばの一人が鋭い声で一喝した。

「うしろを見るな。いいか。絶対に、うしろを向いてはならんぞ」

武士はそういって、まるで左右からお美年をおさえつけんばかりに身をよせてきた。

彼ら自身も、地蔵堂の方へ背を向け、前方のやみへじいっと目をすえている。

よくよく人を警戒していることが、そのそぶりからも分かった。

おかしな話だ。いくら身分高い若殿であるとはいえ、お地蔵さまに参詣するのを人に見られることが、それほどまでにいとわしいのであろうか……。

と、美年の不審さが、その時あたりからふっと心の底にわだかまりはじめていた。
　お美年には、うしろを見なくとも、若殿たちが何をしているか、よく分かるような気がした。
　かすかにすだいていた虫の声が、その時ふっといっせいにやんだ。お堂の裏手の草むらで虫が鳴いていたことをしっているから、多分若殿と白髪の武士がお堂の裏手の方へ回ったのだろうと思う。
　そのまま、森閑たる静けさが永いことつづいていた。
　お参りにしては随分と永い。お堂の裏手は深い森で、それを抜け出ると、はるかに根岸下谷の田んぼを見渡せる断崖の端に出るのだが、昼間なら暑さをよけながらあたりの景色をながめるという風流もあろうが、このやみ夜では、いくら物好きでもそんなことをするはずはない。
　一瞬、お美年はどきっとした。
　お堂の裏手の石垣をはずして、その穴の口から地下道へ忍びこんだ時の、あの記憶がぱっと胸をかすめたからである。
　しかし——まさか！　と思う。あの身分高げな若殿が、あの地下道のことをしっていて、何かの目的でそこへ入っていくなどということは……そんなバカげた話はあるはずがない。
　第一、地下道をしっているくらいの人だったら、いくら夜道とはいえ、わざわざ勘兵衛の家をたずねてきて、自分に案内までさせるはずがないではないか……。
　お美年は自分のおかしな妄想を一笑にふして打ち消したが、しかし、かなりに永い時がすぎていった。
　何をしていたのか分からないが、そのうち、
「世にもふしぎなことがある」
　と、若殿の声がだしぬけに聞こえてきた。忍びやかに声を殺しているらしいが、針のようにとがったお美年の聴覚には、かすかながらにそれとはっきり聞きとれた。

「惣兵衛、そちの言葉にはうそはなかった。あれが鬼塚の首か？」
「さようでございます。かつて昔この辺りに塞を構え、世人を苦しめおりました希代の盗賊の首にございます」
「小源太春正がうちはたして、あれにまつったというそのどくろじゃな？」
「昔を今に、そのまま執念の鬼となりはてて白骨と化しおります首でございます」
「昔を今に……うむ、二百年の秘密か」
「しっ、お声がたこうございますぞ」
　そのまま、二人の声ははたととぎれた。
　お美年は見ていたわけではないが、若殿主従が何をしていたか、もうはっきり分かった気がした。
　おかしな話だが、二人が花太郎さまの地下道へ入り、何かしてきたに違いないと信じている。
　身分ありげなその若殿が、最近までほとんど知る人もなかったはずのあの地下道のことをどうして知っていたのか、不審なことである。
　しかも、遠乗りにかこつけて、この夜中を選んで花太郎さまへお参りに来たことも、実はこっそりと人目をさけてあの地下道へ入るためであったに違いない。
　どうした御身分のお人なのか？　どうして、地下道のことを御存じなのか？　なんの目的でその地下道をさぐりに来られたのか？
　折も折だから、お美年はぞくっと身のしまる思いであった。だが、それとはおくびにも見せず、さりげない風をしてひかえている。
「お女中、待たせた」
　と、そばへ来て白髪の武士がいった。
　帰りも同じであった。お美年が先に立つと、若殿の前後をかこんで、侍たちがさっと集まってくる。
　花屋へ帰りつくと、お美年はいそいで茶をたてた。
　花屋という商売は茶道にも関係が深い。幼い

ころから父母にしこまれて、お美年も一通りの心得があった。
　湯はいつでもわいているし、勘兵衛の唯一の道楽で身分に不相応な宇治茶の用意もある。
　上がりかまちへ腰をかけた若殿は、袱紗さばきから茶筅のあつかいまで、お美年の姿をじいっと見つめていた。
　お美年のさし出した茶わんを手にして、さすがにゆったりと飲みほしてから、
「見い、惣兵衛。茶といい、うつわといい、心にくい」
　と、老人の方へ茶わんを回す。
　惣兵衛といわれた白髪の武士は、それを一瞥二瞥、
「なるほど……高麗ものでございますな」
　と、感にたえたようにいって、ふとお美年の方へ目をむけた。
「お女中、花屋はやめたといわれたが、今なんぞ商売でもしておられるか？」
「はい、ただいま父は御用聞きをつとめておりまする」
「御用聞き？」
「お上から十手捕りなわをおあずかり申しておりますので」
「うむ。町方役人か」
　と、うなずきながら、ちらっと若殿と目を見合わせ、
「では、さらに好都合じゃ。職務柄、さだめしいろいろのうわさを耳にしていると思うが、このごろ、あの花太郎地蔵について、ふしぎなうわさをきかぬか？」
　聞かれてお美年はどきっとした。
　こっそりあの地下道へ入ったこの主従が、一体、花太郎さまの事件とどんな関係があるのだろうか。それとも、なんの関係もないのかと、今しきりに考えていたところだったからである。
「花太郎地蔵がなにやら夜な夜な化けて出るなどといううわさはきかぬか？」

　老人の目も、若殿の目も、お美年の額にじいっとくぎ付けになっていた。
「花太郎地蔵について、なにか奇妙なうわさなど聞いたことはないか？」
　と、老人は重ねて聞く。
「はい……いろいろうわさは耳にしておりますが、まさか、お地蔵さまが化けるなどと、そのようなこと……父はどのように思っておりますか存じませんけれど……」
　うかつなことはしゃべれないと思うから、お美年はさかしく話をぼかした。
「花太郎と名乗って、女の髪をきり、男の耳をそぎおとしていく不敵な怪盗が出没するといううわさも耳にしたが、役目がらさだめし父親はくわしいことも存じておろう。なんぞ話にきいたことはないか？」
「さあ。御用の筋となりますと、わたくしには何一つ話してくれぬ父でございますから……詳しいことは一向に……」
「ふうむ……」
　と、お美年を凝視した老人の目は、腹の底まで見とおすように鋭かった。
「役目がらみだりに話のならぬ事情はよく分かるが、わしらは怪しい者ではない。他言はせぬ。存じていることは正直に話してもらいたい」
「と仰せられましても、わたくし……」
「わしらの身分を明かせば、しかと話すか？」
「でも……なにゆえまたそのようなことお聞きあそばすのでございますか？　どうして、そのように花太郎さまのことが……」
「なに?!」
　と、老人の目が急にけわしくなった。
「お女中、わしらが夜中花太郎地蔵にもうでたことに、なにか不審な節でもあってそのように問いかえすのか？」
「いいえ、いいえ、別にそのような……」
「わしらの参詣に、なにかあやしむ節でも見てとったか？」

「とんでもございません。御信仰のあつい花太郎さまでございます。随分と御身分の高いお方さまの御参詣もございます。夜中の御参詣も珍しくはございません」
と、相手の秘密をしっているだけに、疑われまい、さとられまいとして、お美年はつい心にもないうそをいった。その顔を、怪しむように鋭い老人の目が見つめている。
「よいよい、惣兵衛、もうよい」
とさえぎったのは若殿であった。
「それよりも、惣兵衛、似ているとは思わんか?」
「は?」
「鶴(つる)にじゃ、鶴どのに似ておろうが」
若殿の目がお美年を見つめたままいっている。
「さようでございましょうか」
「よう似ている。ふしぎなほど似ているわい」
「わたしにはそう思われませぬ。お鶴さまは……格別の御身分のお方でいらせられます」
「身分のことではない。顔じゃ、姿じゃ。そちにはそれが分からんか?」
「若殿、おつつしみなされませ」
「なに?」
「場所柄をおわきまえくださりませ」
「なぜいかん。似ている者を似ていると、なぜここで申してはいかんのじゃ」
いいながらも、若殿の目はお美年の顔からはなれようとはしなかった。
「お鶴さまを町方の娘風情とお比較あそばすことは……これがもし世間へもれましても、お聞こえの程およろしかろうはずはございませぬ」
老人のたしなめる声を、若殿は笑ってうけつけない。
「鶴どのの美しさと、花屋の娘がよう似て美しいと申して、なぜ悪い?」
「お屋敷うちがとかく騒がしい折からも、お口をおつつしみあそばすよう申し上げているので

ございます」
「はははは、また年寄りの取りこし苦労か……老松のこずえに高く舞う鶴と、花屋の畑に咲いたききょうの一輪と、氏や素姓は違っても、似ていることにいつわりはない。世にもふしぎな楽しいことがあるものじゃと申しているのじゃ。この貧しげな住まいの中に、宇治の茶といい、高麗の茶器といい、また鶴どのによく似た佳人といい、心にくいものがそろっているのが珍しい。世にも楽しいことがあるとはそのことを申したのじゃ。はははは……」
と、若殿は闊達(かったつ)に笑って、お美年にもう一杯と茶を所望した。
そして、それをゆっくりと味わってから、
「よい日であった……」
と、一言いいすてて立ち上がった。
老人はお美年にまだ何かいいたい心残りがあったようだが、心せくのか、
「今宵(こよい)のことは内聞にせい。われらのこと、だれにもしゃべるな」
と、小声でささやいて、茶代を紙に包んで上がりかまちへおき、小走りに若殿のあとを追って出ていく。
表の方でけたたましく馬蹄(ばてい)の音がおこったと思うと、たちまち風のような速さでみるみる遠ざかっていってしまった。
とたん、
「驚き、桃の木、さんしょの木。とんちき按摩(あんま)がつえをつきか……」
と、ぶつぶついいながら、裏口からひょっこり顔を出したのは仙太である。
「驚きましたねえ、お美年ちゃん」
「驚きましたもないもんだ。なんだい、今ごろこそこそはい出してきたりしやアがって……按摩がどうかしたんだって?」
「へへ……とんちき按摩がつえをつきっていうんで。インチキこじきがびっこひき、お月さんのうさぎはもちをつき……きの字づくしでさ。

面白いでしょう」

「およしッ、バカバカしい。忙しい時に、一体どこへいってたんだい？」

「へへへ、あいすんません。だしぬけに二本差した妙なやつらがぞろぞろはいってきやアがったんで仰天しちまったんで……なにしろ、蒲焼きと侍と、二本差してるやつア生まれつき苦手でござんしてねえ。お美年ちゃん、大変なやつらがきたもんですねえ。あれがだれだかお分かりですか？」

「今、それを考えてるところだよ」

「ちょうちんにききょうの紋がありましたぜ」

「聞かないだって分かってるよ」

「ありゃア金森さまの若殿ですぜ」

「えっ、なんだって？」

「じっとにらんだこの目に狂いはねえ。美濃の郡上で二万八千石、ありゃア金森さまの若殿だってさ」

「本当かえ、仙太。美濃の郡上で二万八千石、あれが金森さまの若殿さまだって？」

「大地をうつ槌のはずれることはあっても、こうとにらんだ仙太の目に狂いはありませんや……」

「随分、偉そうにいうけれど、ききょうは金森さまのお控えの御紋所には違いないけれど、同じききょうの御紋は方々にあるんだよ」

「おっしゃるまでもありませんぜ。唐から渡った九尾のきつね、そんなこたアとうから分かっておりまさア」

「御身分ありげなお方とは思っていたけれど、まさか二万八千石の若殿さまが……」

「それほど疑うなら、種をあかしやしょう。お美年ちゃんが御案内して、あの連中がぞろぞろ花太郎地蔵へ参りましたねえ」

「お前、見てたのかい？」

「へへへ、裏口からこっそりね」

「あきれたね。あの時、あんなに呼んだのに、なぜ返事をしなかったのさ」

「まあ怒るのはあとにしてくださいまし。皆、留守になってしまったそのあとで、馬の番に残った口取り中間にね、それとなくかまをかけてみたんでさ。それはそれ、口数多いは下郎の常ってねえ。ペラペラしゃべったんでさ、自慢らしく。だから、間違いっこありませんや」

「なんだい、それじゃア、にらんだ目に狂いがあるとかないとか、ごたいそうな見得をきるほどのこともないじゃないか」

「でもさ、お美年ちゃん。いくら、遠乗りのもどり道とはいえ、身分ありげな若殿さまが、この夜中、わざわざ花太郎さまにお参りにくるなんざ、どうもおかしいとにらみをつけて、素早く正体をかぎ出したところなど、さすが仙太にぬかりはねえでしょう」

「じゃあ、折角だからほめておいてあげようか……」

と、お美年はさりげなく笑ったが、胸の中の疑惑はいよいよ深まるばかりだった。

二万八千石の大名の若殿が、夜中花太郎さまへお参りするだけでもおかしいと仙太はいったが、それどころではない。

たしかに、あの主従二人は、花太郎さまの地下道へ入ったに違いないとお美年はにらみをつけていたからだ。

父の勘兵衛が帰宅するのを待ちかねていたように、事の次第を報告する。

「はて、美濃の郡上の金森さまといやア、御当主は兵部少輔頼勝さまとおっしゃって、たった一人のお世継ぎの若殿は源之丞頼直さまといったはずだが……」

と、小首をかしげた勘兵衛に、

「それに、おかしいんですよ。わたしの顔を見つめて、鶴に似ている、鶴どのに似ていると、再三くりかえしおっしゃったんですよ」

お美年はなにか気味わるそうにささやいた。

「なに？　鶴だって？　鶴どのに似ているって？　お美年、お前がか？」

「ええ、わたしが鶴どのというお方によく似ているんですって……」
「鶴どのというのは、榊原家のお鶴さまのことではあるまいか？」
「なんです、おとっつぁん。その、お鶴さまというお方は？」
「金森源之丞さまのお許婚のお方と聞いている」
「へえ、あの若殿さまの？」
と、お美年は美しい目をぱっちりみはって父を見上げた。
「とにかく、この事件が容易ならねえことが、段々はっきりと分かってきた。二万八千石のれっきとしたお大名の若殿さまが、夜中こっそり花太郎地蔵の地下道を、なんのためかしらねえが、直々見においでになるというこたアただごととは思われねえ。どうやら、金森さまに関係のある事件らしい。金森さまの御内情をさぐったら、なぞをとく手がかりらしいものがつかめるかもしれねえ。久しぶりにやりがいのある事件にめぐりあったというものだ」
と、勘兵衛は腕を撫しながらそういったが、勘兵衛が自ら動き出すよりも早く、思いがけない出来事が降ってわいたように向こうからやってきた。
翌朝、夜の明けるのを待ちかねたように、花屋の戸口をたたいた見なれぬ若い侍があった。
「わしは、金森家の家臣、近江三郎兵衛と申すものだが……」
と、その侍は、勘兵衛親子を前にして、あたりをはばかるように声を低くする。
「昨夜は、若殿源之丞さまが遠乗りのもどり道、当家へ立ちよっていろいろと造作にあずかったそうな。ついては、あらためて勘兵衛殿にいろいろと話など伺いたいことがあり、一度、屋敷まで出向いてはくれまいかと、殿のたってのおぼしめしであるが、どうか？」

「わたくしに、でございますか？」
と、勘兵衛がきく。
「うむ。勘兵衛殿に是非……という御諚であった」
「昨夜お殿さまのお相手を申し上げましたのは、これにおります娘の方でございましたが……はて、わたくしにあらためてお話などと、一体どのようなことなので？」
「さあ、それは分からん。わしはただ使者だ。しかし、ちらと耳にしたところでは、お手前は花太郎地蔵についていろいろと深く存じよるところがおありだそうではないか？　どうも、そのことについて、なんぞ殿よりお尋ねになりたいことがおありのようだな」
勘兵衛はちょっと小首をひねって考える風だったが、すぐにっこり笑って、
「なるほど、分かりましてございます。それでは、折角のお招きでございますから、参上させていただきます」
「それは早速に承知してくれてかたじけないな」
「いつ、どちらのお屋敷へ参りましたらよろしいので？」
「若殿は四谷の中屋敷においでになる。人目については何かとうるさいので、今宵、日没ごろと、上司よりお話があった。その時刻を見はからって、迎えの駕籠をよこす」
「いいや、お迎えなどと、とんでもございません。こちらから直接参上いたします」
「そうでない。手厚く、粗相のないようにと、くれぐれも御注意があった。辞退されてはかえって困る」
「さようでございますか。どうもあまり晴れがましくて恐縮でございますが、では、お言葉に甘えて、お迎えをお待ちいたします」
「無理を申してすまんが、そうさせてくれ。では、今宵、日没ごろじゃ。たしかに約束したぞ」
と、侍は帰っていく。

「大丈夫ですか、おとっつぁん。あんなに安うけあいしてしまっていいんですか。なんだか、わたし気がかりなんだけれど……」
　お美年は、虫がしらすか、不安げに父の顔を見守った。
「おとっつぁん、わたし、なんだか気になってならないんです。不安でたまらないんです」
「何がそんなに不安なんだ？」
「だってそうじゃありませんか。二万八千石の若殿さまが、わざわざおとっつぁんを呼びよせて、直々なにか尋ねたいことがあるなんて、ちょっとありそうにもないおかしな話じゃありませんか」
「金森家の若殿さまがおれに聞きたいことがあるとおっしゃって向こうから出むいてくるならおかしいが、おれを呼びつけたって何もおかしいことはねえよ」
「聞きたいことがあるならば、お使いの人に聞かせたらいいでしょう。御身分のあるお大名の若殿さまが、わざわざおとっつぁんを呼びつけて直々話を聞くなんてことが、不審でならないっていうんです」
「ゆうべはお前にだって直々お言葉があったんだろう」
「でも、あれは場合が違います。遠乗りのもどり道に、花太郎さまへ御参詣を思いたたれて、ふと立ち寄ったとおっしゃるのだから、話の筋が通っています。お名前も御身分も明かされず、ただの御参詣人としてのお相手ですから、直々お言葉があってもふしぎには思いません。それが今度は違います。ゆうべ、ここからお帰りの間際に、御老人のお方から、このことは内密に……とくれぐれもお言葉があった矢先、今日は向こうから御身分を明かして、おとっつぁんをわざわざお屋敷へ……というお話です。どうもつじつまがあいません」
「お美年、金森家と今度の事件と、何か深いつながりがあるんじゃねえかとお前もいっていた

だろう。遠乗りにかこつけて、夜中こっそり花太郎さまの地下道を見においでになる必要のあったお方だ。家来にも頼めず、直々このおれに聞きただしたいことがおありになっても別にふしぎはねえ」
「そういえばそうだけれど……」
「実をいやア、こっちから出向いても、こっそり金森家の様子をさぐってみてえと思っていたところだ。こんな好都合な話はねえ。一体、何を尋ねる気なのか、その話の様子だけでも薄々何かかぎ分けられるだろう」
「じゃあ、おとっつぁん、今夜は本当に金森さまへ伺うんですね？」
「駕籠まで用意して迎えにくるってさ。丁重なごあいさつを無には出来ねえ。お美年、案じることアねえ。おれア花屋の勘兵衛だぜ」
　と、勘兵衛は闊達に笑った。
　そうまでいわれては、もうお美年に口をはさむすきはなかった。どんなことにも動じたことのない日ごろから尊敬している父が、こうと見込んだ御用の筋に、小娘の分際でもうとやかくいうことはないとは思ったが、それでもお美年の不安さはきれいにぬぐいさられはしなかった。
　その日の夕方、日が西に傾いて上野の森が暗くかげりはじめるころ、約束どおり迎えの駕籠がきた。
「勘兵衛殿、お迎えにあがった」
　と、今朝方使いにみえたあの若い侍が、
「人目をさけるため町駕籠を選んだが、御容赦くだされい」
「これはこれは、御丁寧に……お言葉に甘えてお供させていただきます」
　身支度をすませていた勘兵衛は、さりげなく、すぐ駕籠に身を移した。
　そのまま、駕籠は足を早めて走り出したが、とたん、物陰から滑り出てきた侍の影が二つ三つ、音もなくひたと駕籠わきによりそった。た

だごとは思われない……。
　勘兵衛は駕籠の中で、腕をくんだまま静かに目を閉じていた。
　駕籠が動きだすと、とたん滑りよってきて、ぴったりそのそばへくっついた侍たちの足音にも、もちろん気づいている。全部で三、四人はいるだろう。
　十手捕りなわをあずかる御用聞きといっても、たかが町人だ。その勘兵衛をどんなに丁重に迎えるとしても、この人数はあまりにものものしい。その上、まるで罪人でも護送するような緊張した気配さえ感じられる。
　勘兵衛は、それを感じると、まるで期待していたものがうまく図星にはまってきたとでもいうように、目を閉じたままにんまりと薄笑いした。
　お美年にいわれるまでもなく、この迎え駕籠になにか異常な深い意味があるに違いないと、とうからにらんでいた勘兵衛だ。だからこそ、こうやすやすと相手の手にのって、行くところまで行ってみようと、ずぶとく腹をきめていたのである。
　向こうが露骨に敵意を見せるなら、そこに事件の真相をたぐり出す糸口がある。そうならなけりゃア面白くないと、むしろほくそえんだ薄笑いであった。
　夜の町を駕籠はひた走りに走っていく。
　小石川橋の水戸邸の前を通って、外堀沿いに牛込御門、市ガ谷御門と、その前を走りぬけ、やがて四谷に入ったころは、もうとっぷりと宵闇がとざしていた。
　金森家の中屋敷は、箪笥町から横に切れ、武家屋敷と寺院の境内が塀から塀へと軒をつらねた寂しいところにある。
「着いた。おりさっしゃい」
　と、そういった侍の声も、心なしか語調が変わって厳しかった。
　そして、勘兵衛が駕籠からおりたつと、とたん、四人の侍がひしとその周囲をとりかこんで

しまう。
　駕籠がついたのは裏門らしく、一人がくぐり門を軽くたたくと、番士らしい男が外をのぞいて、一人一人しかと顔を見定めてから中へ通した。
　四人は勘兵衛を囲んだまま奥へ奥へと進んでいく。
　そのわずかな間にも、見回りの番士に二度も出会った。ひどく警固がきびしいらしい。
　しばらく行くと、中仕切りの土塀があって、そのくぐり門の前にも番士が立っていた。
「しばらく待たれい」
　といって姿を消した番士は、やがてもどってきて、無言のまま一同をくぐり門の中に入れた。
　その土塀から向こうは奥庭らしい。深い森から築山につづき、池を回ると、植え込みの向こうに奥御殿の火影がちらちら見えてくる。
　その辺でも、ひっそりと足音を忍ばせながら見回っている番士の影に出あった。もうただごととは思われない警固の様子である。
　近づいていくにつれ、火影のある部屋の縁先近く、一人の白髪の武士が端座しながら、こちらをじいっと凝視しているのが見えた。その部屋の奥の方へ、衝立に半ばかくれて、もう一人だれかいるらしい。
「御前じゃ、控えろッ」
　と、一人が鋭く勘兵衛の耳元にささやくと、それが合図のように四人の侍たちは勘兵衛をうながしながらいっせいに大地へ腰をかがめた。
「御重役、勘兵衛を召しつれましてございます」
「その方が花屋勘兵衛か?」
　と、白髪の武士は縁の上から鋭い目で勘兵衛を見すえた。昨夜、お美年のところへ馬を乗りつけた一団の中のあの老人である。
「はい、手前が勘兵衛にございます。お招きにより、参上いたしましてございます」
　勘兵衛はさすがに悪びれた風はない。
「夜中大儀であった。わしは、若殿源之丞さま

付きお側用人馬島惣兵衛じゃ。見しりおけ」
　といいながら目配せすると、勘兵衛のそばによりそっていた四人の武士たちは、はじめて警戒をといて、うしろのやみへさっと散っていった。
「勘兵衛、そこでは話が遠い。もそっと寄れ」
「では、失礼御免くださいませ」
　と、勘兵衛はくつ脱ぎ近くまですりよっていく。
　どうせここまできたからは、聞けるだけのことは聞き、見るだけのことは残らず見ておくのだと度胸をきめている。ただでは口をきくことさえはばかられる二万八千石の大名でも、御用の筋なら対等に顔を見合わせても恐れるところはないのだと覚悟も出来ていた。
「勘兵衛、昨夜はその方の留守に造作をかけたな」
　と、馬島惣兵衛は勘兵衛をひたと見つめたまいった。
　声はおだやかだが、目の光が冷たく鋭い。
「なにぶんにも突然のおでまし、その上、年若い小娘のこととて、思わぬ御無礼を申し上げたかと存じますが、なにとぞお許しくださいますように……」
「一部始終、娘に聞いたか?」
「茶器をことのほかおほめいただきましたそうで、恐縮に存じあげております」
「花太郎地蔵のことを聞いたか?」
「聞きましてございます。御信心おあついことと、陰ながらおうわさ申し上げておりました」
「ほかに?」
「ほかに、と申しますと?」
「地蔵堂でなにか奇異なことを見たと娘が申したであろう?」
　と、その目はいよいよ冷たく刺すように険しくなる。
　その部屋の奥の衝立の陰に半ば体をかくしたもう一人の人影は、無言のままじっと耳を澄ま

している気配であった。
「奇異なこと? はて、なんのことやら、わたくしにはわかりかねますが……」
「かくすな。勘兵衛、わしの目をあざむくことは出来んぞ。娘の目の色、表情のあやしさで、さては! とその時から感づいていたのだわ。娘は申したであろう、わしらがただの参詣ではなく、ほかに目的のあったということを?」
　のっぴきさせず畳みかけてくるのをとうから予期していたのか、勘兵衛は動じなかった。
「では、地下道のことを仰せられるのでございますか」
「すりゃ、娘がそう申したのじゃな? わしらが地蔵堂下の地下道に入ったのを、しかと見たと話したのじゃな?」
「多分そうであろうと、娘は申しておりましたが……」
「勘兵衛、容易ならぬことじゃぞ。許しがたいことじゃぞ。いや、ただではすまされん。あれを見たとあるからは、ただではすまされん」
　とたん、勘兵衛は背後のやみの中でざわざわっと殺気だつ気配を感じた。
「勘兵衛、その方は、町方役人の分際で、御当家の秘密をあばきたてようと、とうからさぐりを入れていたのじゃな?」
「これは滅相もございません。娘が皆さまがたにお目通りいたしましたのも昨夜が最初、それが金森さまの御一行とはっきり承知いたしましたのは今朝方お使いを頂きました時でございます。なんで、とうからさぐりを入れるなどと……」
「それならば、なにゆえあの時、娘がわれらのすることを盗み見た? うしろを向くなとしかと申しつけあったのを、すきをねらって地蔵堂の方を盗み見たのは、とうから何事か予期していたからであろうが?」
「娘の申しますに、決してうしろを振り向きなどいたしませんでしたが、お二人さまの御気配

やら、時間のうつり具合いから、もしやあの地下道に……と、そのようにおうわさ申し上げておりましただけでございます」
「見もせずなぜわかった？　だれしるはずのない地下道へ、われらの入ったことをなぜ察した？」
「わたくしも御用聞きのはしくれ、ましてあの地蔵堂は目と鼻の近くでございます。とうからいろいろと怪しいうわさのたっております花太郎さまを調べたあげくに、あの土台下にふしぎな地下道のありますことを見つけ出していたとしましても、なんのふしぎもございますまい。それ故、娘は、もしやと疑ったのでございます」
「もしやと疑って、当家の秘密をあばきにかかったのじゃな？」
「御当家さまの秘密をあばきたてるなどと大それたことを考えたこともございません」
「だまらっしゃい！　それならば、なぜ、乗馬の番に残しておいた馬屋中間をそそのかし、若殿の御名、御身分など、うまうまとさぐり出したのか？」
　と、惣兵衛は鋭くたたみかけてくる。
「御当家さまの秘密をあばきたてるなどと、そのような考えは毛頭ございませんが、花太郎さまについては近ごろ怪しい出来ごとが、頻々と起こっております。その真相をつきとめるのがわたくしの職務でございます」
「ならぬ。断じてならぬ！」
　と、惣兵衛はひざをたたいて叱咤した。
「勘兵衛、しかと聞け。しかと聞いて返事をせい。その方親子の命が、その返答一つにかかっていると承知して返事をせい。よいか、花太郎さまに関する事件に、これ以上立ち入ることは断じてならぬ。即刻、手を引け。以後、一切このことに関係をもたぬとはっきり誓えッ」
　そういった惣兵衛の表情は、一時の威嚇ではなしに、容易ならぬ決意のほどを示しているようである。

　勘兵衛は、その顔をじいっと見上げながら、ことさらおちつきはらっていった。
「なにゆえでございます？」
「理由はきくな。ただ黙って手をひくのじゃ。以後、一切立ち入らぬと誓うのじゃ」
「理由も伺わずに、御用の筋をすてるわけには参りませぬ」
「二万八千石の御当家を敵に回しても手をひかぬか？」
「どのように仰せられましても……」
「生きてこの屋敷を立ち出ることがかなわぬと分かってもか？」
　男と男の目が、真正面からひたと向きあった。
　勘兵衛の背後には、殺気だった気配がうごめいている。
　惣兵衛の下知一つで、いつでもおどり出てきて勘兵衛を切ってすてようと身構えている侍たちの影が、まるで目に見えるようであった。
「勘兵衛、もう一度よく考えて返事せい。ただ手をひけとはいわん。それだけの代償は払ってつかわす。望みがあらばその金高をいえ」
「失礼でございますが、納得のいきます理由さえございますれば、何も申さず黙って引きさがるでございましょう。しかし、勘兵衛、納得がいきませんでは、どのように黄金をたまわりましても手をひくことはいたしかねます」
「黄金よりも身分がほしくば、当家にとりたててしかるべき禄を与えてもよい。とにかく、黙って手をひけッ」
「口幅ったいことを申すようではございますが、下司下郎な岡っ引き風情のわたくしも、江戸市民が安らかに正業をいとなめますよう、お上からお預かり申しております十手捕りなわでございます。理由もなしにそれをなげうちましては、お上のおぼしめしに対しましても、また、江戸市民に対しましても面目がたちませぬ」
「その方も娘も、命がないぞ。死んでも手はひかんというのか？」

「たとえ勘兵衛親子は死にましても、その志をつぐ者は沢山ございます。失礼ながら、御当家さまは二万八千石のお大名、それに刃向かう勘兵衛はしがない下司町人でございましても、この十手捕りなわのうしろには天下の御法がひかえております」

相手が高飛車だから、思わず勘兵衛もひらき直ってくる。二万八千石をかさにきて、むりやりに握りつぶしにしてしまおうとするその態度に、勘兵衛の闘志がかえってかきたてられたようであった。

たかが素町人、下司な不浄役人とのんでかかった馬島惣兵衛も、しばらく声をのんだまま沈鬱な表情に沈んでいく。

「やむをえぬ」

と、吐き出すようにいって、ちらっとやみの向こうへ目をはせた。

「切れッ！　こやつを切れッ」

ざわッ！と動いたのは、声に応じて立ち上がった刺客の気配だったが、それよりも早く、

「待て、惣兵衛、待て……」

と、声が起こって、衝立の陰からゆらりと動いて若殿源之丞の姿が立ち出てきた。

「面白いやつだ」

と、縁先まできて、

「二万八千石を向こうに回して、一歩もひかぬ面魂に見どころがある。勘兵衛とやら、わしは源之丞じゃ。見知りおけ」

じいっと見おろされ、さすがに勘兵衛はひれ伏した。

「どうじゃ、勘兵衛。あらためてわしから頼むが、それでも手をひけんか？」

「恐れながら、どういう次第で手をひかねばなりませぬか、なにとぞそれをお聞かせくださいますように……」

「当家の秘密じゃ」

「秘密と仰せられますと？」

「世間に漏れては恥辱になる秘密じゃ。家の安

危にもかかわりかねない秘密じゃ。それ以上はいえん」

と、若々しい目がじっと勘兵衛を見つめている。

源之丞頼直から頼むといわれては、むげにいやだと拒絶するわけにもいかない。二万八千石の若殿が岡っ引き風情にそれほどいうのは、さだめしよくよくの事情があるからであろう。

だが、実をいえば、そのよくよくの事情にこそ、事件の核心がひそんでいると思われる。頼むといわれればいわれるほど、手をひけないのが職務の意地だ。威嚇にあって職責をなげうっては、お上にたいしても、江戸市民に対しても、二度と顔向けが出来ないと、勘兵衛の誇りがそれを許さない。

くちびるをかんだまま黙している勘兵衛の顔を、源之丞の目が見すえていた。

「勘兵衛、手をひけ。わしから頼む。それでも手をひくことはならんというのか？」

「恐れながら、当節、江戸の花太郎と名乗って出没いたします不敵な賊のうわさがお耳に達しておりましょうか？『花』という字をかいた張り紙を残して犯罪を予告し、傍若無人にそれをやってのけるくせ者でございます。御当家さまの秘密をあばくなどと、そのような大それた考えは毛頭ございませぬが、その賊を捕らえねばわたくしの責任がはたされませぬ」

「では、あくまで手はひかんというのじゃな？」

「その賊をひっ捕らえるために、もし必要なれば、御当家さまの秘密に立ち入ることがあるかもしれませぬ。お許しくださいますように……」

「命がないと分かっていてもか？　生きてこの屋敷を出ることがならぬと知れてもか？」

「お言葉にさからって恐れ多いことには存じますが……」

勘兵衛は、うしろのやみの中でまたざわざわっと殺気立つ刺客の気配を露骨に感じた。

命令一下、その場をさらせず切ってすてるは

げしい意気込みが読みとれる。
むざとは殺されぬ自信はあったが、檻に入れられたと同じこの屋敷うちで、しかも、十手のほかは身に寸鉄もつけぬ勘兵衛としては、無事にここから脱出出来ようとも思われぬ。
どうなるものか！
と、度胸をきめて居直ったような勘兵衛の姿をまじまじと凝視しつづけていた源之丞の表情が、ふっと崩れたと思うと、声をあげて笑い出した。
「面白い！　不敵な面魂が気に入った……勘兵衛、では、あらためてたずねる。どうじゃ、当家の味方になってくれんか？」
「は？　御当家さまのお味方と申しますと？」
「その方の申した江戸の花太郎とやらいう凶賊をひっ捕らえるというその方の志はさまたげぬ。いや、その凶賊は是非ひっ捕らえてもらいたい。捕らえねばならん。だが、当家の秘密はあくまで口を堅くして守ってもらいたい。いかなる事情によるとも、いかなる者の口より漏れるにせよ、それが世上にひろがることを絶対に防いでもらいたいのじゃ。どうじゃ、出来るか？」
源之丞は畳みかけるようにいう。
「花太郎を必ずひっ捕らえるのじゃ。しかも、永くは待てん。半月じゃ。八月五日までに必ず花太郎を捕らえてほしい。出来るか？　それ以上一日も待てぬぞ。必ず半月の間にきゃつをひっ捕らえることが出来るか？　どうじゃ、勘兵衛、それが誓えるか？」
当家の味方になって凶賊花太郎をひっ捕らえよという。それは分かるが、八月五日と日を限って、半月の間に必ず捕らえねばならぬという意味がのみこめない。
「とるにも足らぬ勘兵衛を見込んで、味方になれよとのお言葉、ありがたくお受けもいたすでございましょうが、なにゆえ、半月の間に花太郎を捕らえねばなりませぬか？」
「おそくも八月五日までに花太郎を捕らえてわしの面前に引っ立ててきてほしい。是非とも、八月五日という日までに捕らえねばならぬ」

「よろしゅうございます。きっと、お言葉に添いますでございましょう。しかし、その理由をお明かしくださいますよう……」
「勘兵衛、秘密を守ると約束するな？」
「必ずお言葉に添いますでございます」
「命にかけて、きっと守るな？」
「町方役人は武家に手入れはなりませぬ。まして、御大身の御当家さま、職責をこえて決していらざることはいたしませぬ」
「当家の秘密が世上に漏れることを、必ず防ぎとめてくれるのじゃな？」
「及ばずながら、全力を傾けて御希望にそい奉ります」
「では、話すが……」
と、源之丞は目を閉じた。何か心にかかる憂悶でもあってか、しばらくむっと口をつぐんでいたが、
「勘兵衛、もそっとちこうよれ」
いいながら、かっと見開いた目が刺すように勘兵衛を凝視した。
勘兵衛は、無言のまま、くつ脱ぎへ上がり、縁先へ手をかけてのび上がるようにした。
「聞け、勘兵衛。当家に『花』の字の張り紙を残していった不敵なやつがある」
あっ！
と、勘兵衛は口の中で叫んだが、顔には出さず、ただじっと源之丞の目元を見上げていた。
「今朝方じゃ。たった今朝方のことじゃ。しかも、あろうことか、わしのこの居間の、その雨戸の上にじゃ」
源之丞の声はささやくように低かったが、怒気をふくんで弾んでいた。
「しかも、勘兵衛、時を同じゅうして、榊原家にも同じような張り紙を残していきおったという。使いの口上でそれとしった。どう思うか、勘兵衛？」

「榊原さまと仰せられますと、恐れながら、鶴姫(つるひめ)さまの?」
「おう、鶴どのの屋敷じゃ。しかも、『花』の字の張り紙は、鶴どのの寝所の外に張ってあったという。どう思うか?」
「江戸の花太郎と名乗る凶賊は、『花』の張り紙を残して予告しては、その家の男の耳をそぎ、女の髪を切りとってまいります。いや、最近では、命さえうばって逃げる凶悪な手口を見せております」
「そのことは惣兵衛からきいた。思いあたることがある」
「思いあたることがおありでございますか?」
「うむ。ある!」
源之丞はいらだつように、
「きゃつを恐れるではないが、思いあたることがある。しかも、八月六日、鶴どのが当家にみえられ、しばらく滞在される。間違いがあってはならぬ故に、しかと警戒せねばならん。分かったか、勘兵衛……」
榊原家は八千石取りの旗本だが、格式高い家柄で、金森家とは遠い姻戚(いんせき)関係になっている。その榊原家の息女お鶴さまが、源之丞と許婚(いいなずけ)の間柄であることは勘兵衛もしっていた。
折も折、金森、榊原の両家に、不気味な犯罪を予告する「花」の張り紙が現れたというのはただごととは思われない。
「勘兵衛、その方は江戸の花太郎なる凶賊の筆跡に見覚えがあるか?」
「ございます。『花』の張り紙を、一度ではございますが、つくづくと見たことがございます」
源之丞が目配せすると、それまで黙然として控えていた惣兵衛は、懐をさぐって二枚の紙をとり出し、勘兵衛の方へつきつけるように差し出した。
「見い、勘兵衛。どうじゃ? その二枚の筆跡に見覚えがあるか?」
「たしかに見覚えがございます」

「一枚は、昨夜のうちに、この部屋の戸に張られていたものじゃ。また一枚は、鶴どのの寝所の外に張られていたという。たしかに、花太郎の筆跡か?」
「たしかに花太郎の筆跡に違いございませぬ」
「うむ……」
と、うめくようにいって、源之丞は惣兵衛とちらっと目を見合わせた。
「この屋敷に忍び入るさえ不敵なやつじゃ。ただのいたずらとしてすててはおけぬ」
「いえ、お殿さま。決してただのいたずらだけではございますまい」
「そう思うか?」
「花太郎のやり口として、ただのいたずらとは思われませぬ。必ず何事かたくらんでいるに違いございませぬ」
「たくらむとは何か? いかなることをたくらみおるのか?」
「何をたくらんでおりますか、それはわたくしにも分かりかねますが、御当家さまならびに榊原さまの御息女さまに悪意をいだいて、なにか恐ろしいことをたくらんでいるに違いございませぬ」
「すててはおけぬ。勘兵衛、是が非でもそやつをひっ捕らえよ。どうじゃ、出来るか?」
「事をわけてそれほどまでの仰せ、勘兵衛、必ず御意にそうようつとめまする」
「半月の間にじゃ。八月五日までには必ず捕らえるのじゃ」
「かしこまりました」
「しかも、当家の秘密はあくまで守ってほしい。このことが世上にもれては当家の恥辱じゃ」
「それもよく心得ております」
「それをきいて、わしも心強い。もし、当家の助力のいる時には、遠慮なく惣兵衛まで申し出よ。その方にかぎって、当家への出入りも自由にしてとらせる」
「一言、お尋ね申し上げたいことがございます

が……」
「なに?」
「花太郎なる人物につき、何かお心に思いあたることがおありでございましょうか?」
源之丞は、また、ちらっと惣兵衛と目を見合わせた。
そして、間をおいてから、
「思いあたることか……うむ、ある。しかし、何もきくな」
といいすてて、そのままつかつかと奥へ入っていった。
勘兵衛は、来た時と同じように、裏門のくぐり戸から送り出された。
「勘兵衛どの、御苦労であった」
と、見送った侍の言葉つきも慇懃に変わっている。
「用事の節は、このくぐり門の戸をたたき、御重役の名前を申されればすぐ中へ通れるようになっている。お送りはせんが、駕籠を待たせてある。自由にお使いなさい」
「御丁寧に恐れ入ります。しかし、勝手ながら、宵の涼風の中を歩く方が気持ちがようございますから……」
と、駕籠を辞退して、勘兵衛は夜の町をただ一人歩き出した。歩きながら、じっくり考えてみたいことがあったからである。
どういういきさつから今夜の出来事が起こってきたのだろうか、まずそれから考えてみなければならない。
若殿源之丞は、どういう理由からか、花太郎さまの地下道のことを前からしっていたに違いない。そして、それを実地に見てくる必要に迫られたのだ。なぜだか、それはまだなぞだが、遠乗りのもどり道、花太郎さまへお参りするために花屋へ立ち寄ったことはまったく偶然であったようだ。それまでは、勘兵衛親子のことなど問題の外にあったのであろう。
ところが、よもやと油断していたお美年に、

主従が地下道へ入ったことを悟られたと感づいた。折も折、花太郎と名乗る奇怪な賊の不気味な「花」の張り紙が、こともあろうにお居間の雨戸にはられていた。金森家ばかりではなく、許婚の鶴姫の寝所のそとにも同じ張り紙が出現した。
江戸の花太郎なるものにたしかに心当たりがあるとはっきり言いきった源之丞の口裏から考えても、また、今夜の屋敷うちのものものしい警戒ぶりからみても、金森家の驚きがよほどはげしいものであったに違いない。
そこで、まず勘兵衛をひそかに屋敷へ招きよせて、きびしくその口を封じようとしたのだ。世間に花太郎と金森家との関係がうわさにのぼることを極度に恐れたからであろう。
事と次第によっては、勘兵衛の命を断ってもその口を封じようとした気配から考えても、金森家の秘密がそとにもれることをどんなに恐れていたかは察しがつく。
――さて、一度この口から約束したからは、なんとしてでも半月の間に江戸の花太郎をひっくくらねばならないが、一体、どこから手をつけたらいいのか?
ひきうけましたとはっきりいいきりはしたものの、まだ勘兵衛にはなんの目安もついてはいなかった。
正体も、居どころも、まるで分かっていない幻のような花太郎が、向こうから姿を現すまでべんべんと待っている余裕はさらにないのだ。
どこから手をつけたらいいのか?
考えに沈みながら歩いていた勘兵衛の足がふとまった。
金森家の長い土塀がつきて、まもなく表通りへ出ようとする場所である。片側は寺の境内で、その築地塀の一角が小さくくびれて、ぽつんと一つ、野ざらしの地蔵尊が立っている。
その地蔵尊の前に、奇妙な男が一人、影法師のようにひっそりと立っているのを見たからだ。

顔半分を白々と包帯に包んだ着流しの武士であった。

――はて、今ごろ何をしているのだろう？

地蔵尊の前に供えてあるろうそくの灯が、ちらちら風に動きながら、その侍の人相のわるい横顔をてらしていた。

白々と見えている包帯は、どうやら傷でも負っているのか、その左側の目を覆っているらしい。

おや？

と、勘兵衛が息をひそめたのは、その侍が懐からとりだした紙きれを丁寧にひろげてから、地蔵尊の方へうやうやしげな手つきで差しだし、礼拝するように深く頭をさげるのを見たからだ。

やがて、きびすをかえすと、路地を横切って金森家の土塀の方へ歩みよっていく。

火影を背にしょっているのでよくは分からないが、紙を土塀の上へ張りつけているらしいことだけはおぼろに見てとれた。

それから、急に逃げるような足取りになって、すうっと表通りの方へ消えさっていった。

息をつめてその様子を見守っていた勘兵衛は、それを見ると、小走りに地蔵尊の前までいった。

土塀の上には、紙切れが小柄でしっかりと縫いとめてある。それをはがして、火影にかざしてみるまでもなく、「花」という字がたった一つ、筆太に大きく書かれていた。

それよりも、勘兵衛が、思わず、あっ！と声をあげかけたのは、その紙きれを縫いとめてあったその小柄を見た時であった。

――こりゃアお美年がいつも膚身はなさずもっている手裏剣代わりの千枚通しじゃねえか！

とたん、勘兵衛の脳裏にひらめいたのは、お美年が花太郎さまの地下道で出あった人影にこの千枚通しを投げつけたと話していたそのことであった。

たしかに、その千枚通しが一人の男の片目を射つぶしたということを聞いている。

――じゃあ、今の侍はその時の一人にちげえねえ。地下道で老婆を殺した千川万作の一味のやつだ……。

その侍が、なぜ花太郎のまねをして金森家の土塀へ「花」の張り紙を残していったのか？

それとも、花太郎の一味なのだろうか？

理由は分からないが、折も折、すててはおけないと、勘兵衛はにわかに闘志をわきたたせた。

こんなことがなくても、千川一味の行方をつきとめたいと願っていた矢先ではなかったか。

――願ってもねえ機会が向こうからやってきた。よしッ、こうなったら、てこでも行方をつきとめずにゃアおかねえぞ……。

走って表通りまで出てみると、包帯の侍は足早に見付の方へ歩いていく。人目をさけるように、陰を陰をと暗い辺りをえらんで歩いていくが、白々とうかび上がった包帯がその足取りをはっきりと見せている。

向こうでは何も気づかぬらしく、金森家から少しはなれると、ゆっくりと速度をおとした。

どこへ行くのか、二、三度、左へ右へと路地をまがった。と思ううちに、とある寺の壊れかけた土塀の透き間を、ひょいとまたぎ越えて中へ入っていく。

ひどい荒れ寺らしい。土塀をまたいで入ったところは墓地だったが、まるで手入れもしたことがないように草がぼうぼうと生いしげっている。

その草むらの陰に、ぽつんと一つ軒のかたむいた小屋が建っていたが、包帯の侍はのまれるようにその中へ消えた。

小屋の中へ姿を消した白包帯の侍は、そのまま姿を現す様子もないし、小屋の中もひっそりと静まりかえっている。

ただ、明かり障子にちらちら火影の映っているところからみると、たしかにだれかいるらし

い。
物陰にかくれてしばらく様子をうかがっていた勘兵衛は、やがてはうようにしてその窓下に忍びよっていった。
わずかにあいている障子の透き間からそっと中をのぞいてみると、そこはかつて寺男の住まいにでもなっていたのであろう、土間の片すみには鍋釜小鉢などの貧しげな炊事道具が転がっているのだが、空き家になってからもうかなり月日がたっていると思われる証拠に、その道具類は一面に厚いほこりをかぶっていた。
片側の、三畳敷きほどの破れ畳を敷いた座敷の方もやっぱり一面のほこりで、ただその破れ畳の中央辺りに裸ろうそくが一本たって、にぶい光をなげている。
だれもいない。
しかし、その侍がこの中へ入ったことは、畳を覆ったほこりの中に土足の足跡が点々とついていることでたしかだった。

一体、あの野郎、どこへ姿を消しゃアがったんだろう？　第一、何しにこんなところへやってきたのか？
勘兵衛は怪しみながら戸口の方へ回った。
たてつけのわるい雨戸がゆがんで二尺ばかり透き間をのこしている。
勘兵衛は、懐の十手を握りしめながら、一歩中へ踏みこんでそっと中をうかがった。
とたん、物もいわず、鼻先を白刃がすうっと横切って宙にとまった。
白包帯の侍が、火影のとどかない片すみへ、はりつくようにして立っていたのである。
不意をつかれて、
しまった！
と、うしろざまに戸口から外へとびのこうとした勘兵衛は、逆にその背をしたたか突かれて、上がりかまちまでのめるようによろけていった。
振り向いた時には、勘兵衛の背についてぱら

ぱらッとなだれこんできた四、五人の黒頭巾が、出口をいっぱいにふさいで立ちはだかってしまっていた。
「勘兵衛、声を立てるなッ」
と、ぐるっと取り囲んだ声が威嚇するようにいった。
「先生、いかがいたしましょう？　ひっくくってしまいましょうか？」
「まあ待て……」
と、白刃のうしろに立ったひときわ背の高い黒頭巾が、濁った太い声でいった。
お美年がその声をきいたら、すぐあの晩の恐ろしさを思い出したであろう。花太郎さまの地下道からつけてきて、お美年の寝込みを襲った千川万作という男に違いなかったからである。
「勘兵衛、夜中御苦労であったな。手間はとらせん、しばらく付き合ってくれ」
頭巾の間からきらきら光を帯びてのぞいている二つの目を、勘兵衛はじいっと見返しながら上がりかまちへどっかと腰をおろした。
「ごあいさついたみ入ります。ところで、あっしにどんな御用がおありなんで？」
「勘兵衛、ことわっておくが、尋ねることにすなおに答えんと命がないぞ」
と、千川万作が太いだみ声でおっかぶせるようにいう。
「貴様も少しは聞こえた岡っ引きだそうだが、うまうまと誘いにのってわなにおちたを不覚と思え。胸元につきつけられた白刃をよくよく見ながら返事をせい」
「どうもそうらしゅうございますな。見えすいたわなにかかったのは、勘兵衛一代の不覚でございました。それにしましても、御念の入ったお招きぶり、恐れ入りましてございます」
勘兵衛は落ちつきはらっていったが、容易ならない事態におちこんだことを感ぜずにはいられない。
ぐるっと周囲からつきつけられている白刃は

殺気をはらんで、いつでも血の雨をふらせる気配を見せている。
「勘兵衛、今宵金森家へ招かれて、若殿源之丞に直々あったのだな?」
「おっしゃるとおり、源之丞さまにお目通りいたしました」
「わざわざ貴様を招いたのは、どういう用事があってのことか? もちろん、花太郎のことに関してであろうが?」
「お祭しのとおりでございます」
「どんな話があったか、それをいえッ」
「一切他言せぬとお約束してまいりました」
「源之丞は、花太郎の素姓について語ったか?」
「いいや、そのようなこと、なんのお話もございませんでした」
「金森家の秘密についてもか?」
「はい、一向に……」
「昨夜、金森家へ江戸の花太郎が忍び入って『花』の張り紙を残していったといううわさが立っている。その話は聞いたであろう? 詳しくいえッ」
「さあ。そのようなこと、一向に伺いませんでしたが」
「では、何を話したのだ? 何を聞き、何を頼まれたのだ?」
「一切他言せぬとお約束いたしてまいりました」
「うぬッ、しぶといやつ!」
と、白刃の間から罵声が起こったが、万作は手で制して、
「では、あらためてきくが、貴様は、わしらが花太郎の地下道でお高という老婆を殺したことを、源之丞にしゃべったか?」
「ほほう、あなたさまはあの地下道のことを御存じなのでございますか? はて、お高と申しますと?」
「しらばっくれるな、こやつ! 貴様の娘が、このおれの片目をつぶしたのを知らんというのか! 見ろ、この目だ! この目を射つぶしたのは貴様の娘だぞ!」
わめいたのは、勘兵衛をここまでおびき出してきた白包帯の男だった。
「これはこれは……いつ、お美年がそのような粗忽をいたしましたやら……少しも存じませんでした。おわび申し上げますでございます」
「おのれ、嘲弄しおるかッ。先生、たたっ切ってしまいましょう。腹がいえません」
「騒々しい。静かにしろ」
と、万作はしかって、
「では、最後に一つきく。お高から貴様の娘がうけとった銀の小鈴はどこにあるのか?」
「……」
「勘兵衛、なぜ黙っている。銀の小鈴を渡せ。どこにあるのか、その場所をいえ」
と畳みかけてくるのを、勘兵衛はふてぶてしくそらとぼけた。
「はて、なんのことやら一向に分かりかねますが……」
「これだけは知らんではすまさぬ。是が非でも所望する」
「それほどお大切な品ならば、御自分でお探しなされたらいかがでございます」
「甘く見るなよ、勘兵衛。これだけは、いかなる手段をもってもきっと言わすぞ」
「わたしもちいっとつむじ曲がりでございましてな。虫が好かんと、どう申されましてもお返事したくなくなる性分でございまして……」
「目をえぐり、鼻をそぎ、手足の指を一本一本切りはなす拷問にかけられてもきっと言わぬか?」
「むだでございましょう、おやめなされませ」
「貴様一人ではすまん。娘の体を借りてもいわせずにはおかぬ。いいか、勘兵衛?」
勘兵衛はぎょっとしたようにのどをつまらせたが、顔では冷たくせせら笑った。
「娘まで引き合いにお出しになるのでございま

すか?」
「花屋小町と評判が高いそうな。先夜一瞥したが、器量といい、年ごろといい、申し分ない。貴様の面前で、娘の裸をとくと見せてやろうか」
「お武家さまらしくない仰せでございますな。女子供をなぶり者になさるなどは、ちと御身分のけがれではございませんか」
「貴様から指図はうけん。貴様がしゃべらねば、娘から聞くまでだ。お美年こそ、銀の小鈴をかすめとった張本人だからのう。どうだ、すなおにいってしまえ」
「恥をしらないお方には、何を申しても仕方ございません。お好きなようになさいまし」
「好きなようにしてくれというのか? 娘を裸にひんむいて、なぶりものにしてくれというのか?」
「どうされようと、おどしを恐れて御用の筋をまげるような勘兵衛ではございません」
「お美年を、貴様の前で、裸にむくぞ。身もだえして血へどをはくまで打ちたたくぞ。逆さにつるして、白い膚をなます切りに切りさいなむぞ。よいか?!」
「ええッ、やかましいやいッ。どうとも勝手にしやアがれッ」
わめいた勘兵衛の顔を、万作のへびのような冷たい目が、無言のまま穴のあくほどじいっと凝視していた。
「よしッ、こやつを屋敷へひったてていけッ」
ぴしっとむちでうつような鋭い叱咤の声と一緒に、周囲をかこんでいた三人が、わらわらっと勘兵衛に襲いかかってきた。
「やい、静かにしやアがれッ。だれも逃げようたアいやアしねえ。好きなところへ連れていけってんだ!」
どうなるものかと勘兵衛は腹をすえた。いや、これで労せずして千川万作の巣へ乗りこんでいけるのだ、望むところだと、くそ度胸をきめている。

墓地のやぶ陰に町駕籠が待っていた。手どり足どりそれへ勘兵衛を押しこむと、侍たちはぐるっとそれを取り囲んで、矢のようにやみの中を走り去っていく。

恋行灯

翌日になっても勘兵衛はもどらなかった。
一夜をまんじりともせず明かしたお美年は、日ごろの男勝りな気性をどこかへ置き忘れてでもきたように、今日は食事もろくにのどへは通らず、おろおろ表の方にばかり気をとられている。
「仙太、おとっつぁんが金森様のお屋敷を出たことだけはたしかなんだねえ?」
「ええ、もうそりゃア……幾度も申し上げますとおり、金森様の門番の方がはっきりこの門を出たとおっしゃいましたんで……」
「いくら向こうでそういったって、それがたしかな証拠になるとは限らないじゃないか。もし、あのお屋敷の中でなにか間違いでも起こったとしたら、そのお屋敷の衆が、勘兵衛をこれこれに処分したなんておっしゃるかどうか分かりゃアしないよ」
「だから、念のために、二人にも三人にも聞いてたしかめてみたんでさ。親分が今朝になってももどりません。もし、こちらさまで間違いでもありましたのなら、はっきりそうおっしゃってくださいましってね……そうしたら、そりゃアおかしい。そんなはずはない。たしかに昨夜、宵のうちにもどったはずだが……と向こうさまでもふしぎそうな顔をなさるんでさ。決してうそや作りごとではございませんぜ」
「それなら、おとっつぁんは、どうしたんだろう?」
「御用の筋で、急にどこかへお飛びになったんじゃアございませんか?」
「そんなことがあるもんか。どんな急ぎのご用でも、お帰りのない時には使いを走らせてきっ

と知らせてくださることお前だってよく承知してるだろう?」
「そういやアそのとおりだが……」
「のんきな顔をしてないで、さっさとおとっつぁんの行方を探しておくれな」
「そんな無理なことを、お美年ちゃん。あっしだって気がかりでならねえんだが、雲をつかむような探しもんで、どうにもならねえんでさ。金森様を出てからの親分をちらっとでも見た者がいてくれりゃアしめたもんだが、赤坂からここまでずうっと道順にそって調べてみたんだが、だれ一人、親分を見た者がねえんでさ」
「ああ、どうしよう。なんだか、虫がしらせるというか、心配でならないんだよ」
と、お美年は戸口までいって、落ち着かなげに表の通りをながめている。
すると、ひるを少し過ぎたころであった。
「ご免なさいまし。こちらが花屋の親分さんのお宅で?」
と、駕籠(かご)かきらしい風采(ふうさい)の男が、ひょっこりと戸口にたった。
「勘兵衛親分からお言づてを頼まれてまいりましたんで……」
「えッ、なんですって!」
と、転がるようにお美年はとび出た。
「おとっつぁんはどこにいるんです。おとっつぁんは元気でしたか?」
「さあ。親分さんにはお会いしませんでしたが、神田佐久間町の『花菱(はなびし)』っていう料理屋からお使いが参りまして……」
「それで、それで……どんな言づてを?」
「なんですか、えらいことがもち上がったんで、すぐ来ていただきたいそうで……お美年さんと仙太さんとお二人で大至急『花菱』までおいでくださるように……へい、それだけ申しつかってまいりましたんで……」
「そうれ、御覧なさい、お美年ちゃん。やっぱり、親分は御用の筋だったんだ」

「本当によかった。これでわたしほっとしたよ。でも、仙太、えらいことが持ち上がったって、一体なんだろう? 出先からおとっつぁんがわたしたち二人をよびつけるなんて、ついぞ一度もないことだからね」
「なんにしても急いで参りましょう。駕籠をよびましょうか?」
「そうしておくれ」
お美年は、とるものもとりあえず、よんだ駕籠へのめるように乗りこんだ。しりをしっぱしょった仙太がそのそばにつく。
神田の「花菱」というのは、そのころはやった小料理屋であった。二階には気のきいた小座敷があって、ちょっと気軽く一杯飲めるという家である。
「勘兵衛の家の者でございます。お迎えを頂いて参りましたが、父は?」
と、駕籠をかけおりたお美年は、玄関に立つなりせきこんで聞いた。
出迎えた女中が、
「ああ、親分さんでしたら、さきほどまでおいでございましたが、なにやら急用がおありとかで、家の者がみえたら至急その方へ来てくださるよう伝えてくれとおっしゃいまして……もうこちらにはおみえになりませんが……」
と、気の毒そうにいう。
「たしか、日本橋小舟町の番屋の裏にある夜泣き地蔵へ行くとそうおっしゃって、急いでおでかけでございました」
「まあ、そうでしたか……それで、父は一人でございましたか?」
「いいえ、お武家さまがお一人ご一緒でございました」
「お手数をかけました。では、小舟町の方へ参ってみましょう」
と、お美年は待たせてあった駕籠にまた乗った。
番屋の裏にあって、夜泣き地蔵とあだ名まで

ついているからはすぐに分かると思っていたのが、いざとなると探し出すまでにかなり手間どった。
「夜泣き地蔵なんて聞いたことがねえなア。どこか町の間違いじゃアねえのかえ?」
と、聞かれた人がけげんな顔をした。
「番屋の裏手にあるお地蔵さまと聞いてきましたが……」
「はてな。そんなら、この先にあるあの地蔵のことじゃアねえかなア。夜泣き地蔵とはいわねえし、それに番屋の裏といっても大分離れちゃアいるけれど……」
ほかにはこの辺に地蔵尊はないと聞いて、念のために行ってみると、それが尋ねる地蔵堂だった。
すぐそばに線香をうっている小さな店がある。その店のばあさんがしばらく二人の方をしげしげと見ていたが、
「もしや、あなたがたは勘兵衛さんというお人をたずねていらしたんではありませんか?」
と、声をかけた。
「勘兵衛さんなら、もうここにはいませんよ。たったいましがた、急いで芝の方へいらっしゃいましたよ」
「えっ、な、なんですって?」
「なんですか、芝神明前の『泉屋』というお茶屋さんへいって待ってるから、自分をたずねてくる者があったら、大急ぎでそっちへくるようにってね、そうおっしゃってでしたよ」
お美年は思わず仙太と顔を見合わせた。
「ねえ、仙太。一体こりゃアどうしたってわけだろうねえ?」
「そうですねえ。神田の『花菱』から小舟町の地蔵さま、次が芝神明の茶店『泉屋』ときては、こいつアてんで判じもんだ。なんにしても、よくよくのこってすぜ」
「たしかに容易ならないことが起こっているに違いない。こうしている間も気がせいてくる。

駕籠屋さん、御苦労だけれど、もうひと走り芝までいっておくれでないかえ」
「ようがす。飛ばしましょう。その代わり、少しゆれますぜ。しっかりつかまっておくんなさいまし」
日ごろから頼みつけの懇意になっている駕籠屋だから、人ごとならず気になるらしく、お美年を乗せると、また、ひた走りに走り出した。
ところが、芝神明前に駆けつけてみると、さあ「泉屋」という茶店が分からない。
「はて、そんな店は、ついぞ聞いたことがねえなア」
と、問われた人は口をそろえて首をかしげた。
仕方がないから、一軒一軒、勘兵衛という人が来ていないか、何か言づてでもなかったかと尋ねて回ったが、どこでも知らないという。
「おかしいねえ、仙太」
「おかしゅうござんすねえ。茶店という茶店は一軒残らず聞いて回ったんだ」
「おとっつぁんが小舟町の地蔵さままで来たことは分かっているけど、それから先、まるで煙のように消えてしまっている」
「なにか化かされたような気がしますねえ、稲荷のきつねに化かされたって話はあるが、地蔵さまが化かしたなんて初耳だ」
二人は途方にくれたように顔を見合わせたが、
「仕方がない。帰ろうじゃないか」
「ことによったら、留守宅の方へなにか使いでも来てるかもしれません。いや、今ごろ、親分、花屋でのほほんとタバコでも吸ってるんじゃありませんか」
「それだと本当に安心するんだけれど……」
帰りの足取りは重かった。駕籠にゆられながら、お美年の胸は不吉な予感にふさがっている。
勘兵衛が、小舟町から芝へ行く途中、何かの都合で急に行く先を変えねばならなかったとい

うことはありうることだが、あれほど人をせきたてて呼びよせておきながら、行く先々で一足違いでいつも父に会えなかったことの異様さが、お美年の不安さをかきたてているのだ。
「おやッ、半鐘がなってるぜ。とんまな野郎じやねえか、昼火事なんか出しゃアがって……」
駕籠屋の話し声がお美年の耳に入ったのは、上野の広小路にさしかかったころのことである。
池の端を回るころには、半鐘の音は近火を知らせるけたたましい「すりばん」に変わり、駕籠は同じ方向へ走っていく人波にもまれるようであった。
「近い近い、火元は谷中だぜ。それッ、向こうに煙が見えてらア……」
と駕籠屋がいった時、そばを走っていた火事装束の一人が、
「おいッ、そこへ行くのは仙太じゃねえか」
と、かみつくような声で呼びかけてきた。
「やい、何をぼやぼやしてやがるんだ。火元は花屋だぞ。てめえんとこが焼けてるんだぞ」
「ええっ。な、なんだって」
お美年と仙太が息せき切って駆けつけた時には、花屋はもう一面の火の海であった。
水をかけている竜吐水(りゅうどすい)も一向ききめはないらしく、かけ回っている火消したちも火の粉を防いで延焼をくいとめるのがせいいっぱいであった。
「な、何するんだ、お美年ちゃん!」
と、血相変えて火の海の中へとびこんでいこうとするお美年を、仙太が仰天しながら抱きとめる。
「大事なものがあるんだよ。焼いてはならない大事なものが……」
「大事もくそもあるものか。あの中へとびこんだら、お前さんが焼け死んでしまう。おい、待ちなせえったら!」
「おはなしッ。手をおはなしったら!」

と、お美年は死にもの狂いで身もだえする。
「おとっつぁんの留守に、焼いたらいいわけのたたない大事なものがあるんだよッ」
「この手をはなしてお前さんを火の中へとびこませたら、今度はこっちの申しわけがたちませんや。なんといおうとはなすもんか」
「畜生ッ、はなせってば! ああ、焼けてしまう。焼けてしまう。ど、どうしよう!」
と、身もだえするお美年の胸にあるのは、家の中に残しておいたあの銀の小鈴だった。
どんな価値のある品かさっぱり分からないが、千川万作も、凶賊花太郎も、必死の形相で鈴の行方を追い求めている。理由は分からないが、今度の事件の解決になくてはならない大事な品だと思うから、焼いてはすまないといちずに思いつめたお美年であった。
周囲をとり巻いた野次馬の中で、
「ありゃアてっきり付け火だぜ」
と、ひそひそ声が話している。
「真っ昼間のことだ、近くに人目がねえわけでもねえのに、あっと気がついた時は、もう家中一面の火の海だった。粗相火なんかであんな燃え方をするものか。だれか火をつけたやつがあったんだ」
「しかし、花屋の親分は評判のいい人間だぜ。人に恨みをかうような人じゃアねえ」
「いくらいい人でも、そこは商売柄のつらいところよ。とんだ悪党の逆恨みで、火をつけねえやつがねえともかぎるまい」
「そういやア、あの家のまわりをうろうろしているついぞ見かけねえ侍がいたそうだ」
「そいつだ。きっと、そいつが火をつけたにちげえねえ」
しゃべっている声もお美年の耳には入らなかった。
「はなしておくれ。後生だから、仙太!」
と、いくら頼んで争っても、男のくそ力で羽交いじめにされ、身動き出来ないうちに、どう

っと音たてて棟が焼けおちてしまう。
放火は人殺しにつり合う大罪であった。失火であっても重いおとがめがある。
お美年は番所にひかれて役人の取り調べをうけたが、留守中何者かの手によって放火されたものだという証人が沢山あった上に、上役人にも近所にも評判のいい勘兵衛の日ごろの徳がこんな時に報いてきて、すぐお美年も仙太も許された。
ところが、お美年がぼうぜんと番所を立ち出ると、とたん、物陰からすうっと姿を現して、そのうしろをゆっくりとつけてくる一人の浪人体の武士があった。
そういえば、その男はお美年が火事場へかけつけたころから、人垣のうしろにたってじっとお美年を見つめていたようである。
焼けあとへもどってきたころには、もうあたりはたそがれはじめていた。
「ああ、とうとうみんな灰になっちまいやがった」
と、くすぶっている焼け跡を見つめながら、仙太が情けなさそうな声でいった。
「お美年ちゃんも大事な品を焼いたでしょうが、あっしだって命にも換えられねえ大事な大事な物を焼いちまったんだ。まあ、お互いさまっていうところでござんすねえ」
「そうかい。お前もそんな大事なものを焼いたのかい?」
と、お美年はぼうぜんと立っている。
いってもかいないことだが、あの小鈴を焼いてしまったことが、はげしく心を責めつける。
「まあ、いいさ、仙太。どんな大事な品かしれないが、おとっつぁんにお願いして、また買ってもらってあげるから……」
「買いもどせるようなものなら、これほどがっかりしませんや。命を焼いたと同じだから、つい愚痴が出るんです」
「まあ。そんな大事なものがあったのかい?」

「へい、お玉ちゃんからもらった大事なものなんです」
「お玉ちゃんて……ああ、よくお前がうわさしていたどこかの岡場所の女の人だね?」
「どんな苦労を積みかさねても、末は夫婦と堅く約束して、二人でとりかわした大事な起請文を焼いちまったんでさア」
なんだと思ったらそんなものかい――と、いつもなら笑ってひやかしの一言もいうところだが、お美年はただぼうぜんと焼けあとを見おろしているばかりだった。
「仙太、これからどうしたもんだろう?」
「親方はお留守だし、弱りましたねえ。今夜のところは、隣の寺へでも頼んで泊めてもらいましょう」
「なんだか妙な日だった。おとっつぁんから呼び出しが来たのに、さんざんむだ足をさせられて、帰ったと思えばこの火事さ」
「ここに突っ立ってても仕方がありません。とにかく、寺へいってみましょうや」
と、二人が歩き出した時、それまで物陰にたってじいっと二人の方を見つめていたさっきの浪人者が、音もなく近寄ってきて、すうっと前に立った。
「お美年さん。わしだ。覚えていなさるか?」
「あっ!」
と、思わず一声あげて、お美年はみるみる顔を火のようにほてらせた。
覚えているかの段ではない。夜な夜な、夢にさえ見つづけていた加賀美三四郎だったのだから……。
「まっ、あ、あなたさまは……」
といったまま、お美年はすぐに言葉も出ないほどあわてふためいている。
「人目についてはまずい。こちらへおいでなさい」
と、先に立って木立の陰に入っていく。
ふりむいた三四郎の顔は、おだやかに微笑を

ふくんでいた。
「あまりだしぬけで驚かれたか？　これには子細があってな。わしは今朝方からずうっとこの付近にいた。勘兵衛どのから使いが来てあなたが駕籠で出ていかれるところもちゃんと見ていたし、その留守中に花屋の中で何が起こったかも見てしっている」
　意外な話に、お美年は唖然としてその人を見上げていた。
「お美年さん、勘兵衛どのから使いがみえたが、出かけた先で父御に会えたかな？」
　と、三四郎がきく。
　お美年は三四郎に二度も危ないところを助けられている。早くこのお礼を申し上げねばならないのにとどぎまぎしているが、気ばかりあせって言い出すきっかけがみつからない。
「は、はい……あのう、それが、行く先々で一足違いで父に会えませず、とうとうむだ足のままもどってまいりました」
「そうであろう。多分、その辺のことであろうと思っていた。予定の筋書きだった」
「まあ。予定の筋書きとおっしゃいますと？」
「あなたを表へ誘い出して、適当な時間だけ花屋を留守にさせる筋書きだったのですよ。もちろん、父御の御存じないことだ」
「な、なぜでございましょう？　だれがそのようなことを？」
「花屋を家探しして、あなたが秘蔵しておられたある品物を盗みとるためであった」
あっ！
　といった表情で、お美年と仙太は思わず目を見合わせた。
　いわれてみれば、いまさらのように思いあたることがある。父がお美年と仙太の二人を名指しで呼び出すことも珍しい出来事だったし、さんざん父の足取りをおいかけた上に、結局うやむやで行方もしれなかったことがすこぶる疑わしい。

「なによりの証拠に、一部始終をこの目で見ていたのだから……」
　と、三四郎の物静かな声がまたいった。
「あなた方が出ていかれると、まもなく三人の武士が花屋の中に忍びこむのが見えた。人目につくのを恐れてであろう、中から戸を閉めきってしきりに何かやっている。もちろん、家探しであった。家中をしらみつぶしに執念ぶかい探しようであった。はては、畳をめくり、床板をはがし、壁を崩し、家具調度を一つ一つ破壊して、家中足のふみ場もないほど手荒なことをやっていた」
「そ、それからどういたしましたか？　探すものを手に入れた様子でございましたでしょうか？」
「一度、表へ出て、なにやらひそひそ相談していたが、今度、家の中へとってかえしたかと思うと、まもなく家の中からいっせいにわっと火の手のあがるのが見えた。みすみす花屋を灰にしてしまったのは、わしの不注意であったかもしれぬ。それと気づけば、手のうちようもあったであろうに、気づいた時はもはや手のほどこしようもなかった。まことに済まんことをしたと、一言わびたく思っていた」
「まあ、そのようなこと……と、とんでもございません。あなたさまになんの御責任がございましょう。そんな、そ、そんな……」
　と、お美年はしどろもどろにあわてて制した。
「で、でも、家探しして飽きたらず、火まで放って家を焼くとは、あまりなひどいことを……」
「それというのも、目当てのものが発見出来なかった腹いせか。いっそのこと、家ぐるみ灰にして、だれの手にも渡さぬつもりでやったことか」
「目当てのものが発見出来なかったと、どうしてお分かりなのでございますか？」
「それは分かる……」
　と、三四郎は微笑しながら懐をたたいた。

「その品はここにあるからだ」
「ええっ！　ここにあると仰せられますと？」
「わしの懐にあるということです」
「その三人が探していた品が？」
「さよう……」
「も、もしや、それは、あの、銀の小鈴では？」
「そのとおり……」
　と、三四郎はなんでもないように物静かに微笑している。
「まっ！　ど、どうしてそれがあなたさまの？」
「彼らがあなたをはかって表へおびき出したからは、おそらくそれをねらって家探しに来るものと予想した故、一足先に花屋へ入ってそれをこちらへおあずかりしておいたのです」
「ああ……」
　と、驚きともため息ともつかぬ声をあげながら、お美年はまじまじと三四郎を見上げていた。すぐには言葉も出ない様子である。
「お美年さん、父御は金森家へ出向かれてからまだ帰宅されぬであろう？」
「はい……」
「お気の毒だが、勘兵衛どのはかどわかされたらしいぞ」
「もしや……もしやと案じておりましたが、加賀美さま、そ、それは本当でございましょうか？」
「間違いであれば重畳だが、どうもそう思われる節がある。かどわかしたやつは、先夜あなたを花太郎さまからつけてきた千川万作の一味らしい」
「くどいようではございますが、お間違いはございますまいか？　本当に、父はあの男の一味に？」
「勘兵衛どのがかどわかされたと知って、もしそれが事実なら、今度は、お美年さん、あなたの身が危ない。それで、実は、花屋のまわりを見張っていたのだが、あなたの留守に家探しした上に火を放ったのはたしかに万作の一味です」

　意外なことをあとからあとから聞かされて、お美年は驚きの余り、たかぶった気持ちの静めようもなかった。
　それにしても、おかしなことだが、たかぶった気持ちの中に、自分の身が危ないとわざわざ見張りにきてくれたという三四郎の言葉だけが、うれしいというのか、有り難いというのか、まるできらきら輝くようにはっきりと浮かび上がっている。
「わざわざここに残ってあなたを待っていたのは、事の次第を話しておきたいからでもあったが、一つには、父御（てご）のことをすててはおけぬからだ。折り入って相談せねばならぬし、それに、第一このままではあなたの身が危険だ。なんとかせずばなるまい。今、二人の話を耳にしたところでは、さしあたってたよっていくべき先もないようだが、どうか？　いっそ、わしの住まいにおいでにならぬか？」
　と、三四郎は淡々という。
「で、でも、そのような……あまりと申せばあつかましゅうございますし……」
「わしの方はかまわん。素姓のわからん男のところへ突然では心配もあろうが、少なくとも夜露はしのげる」
「でも……ねえ、仙太？」
　と、胸をあやしく弾ませながらあかくなった顔をちらと向けられて、仙太はしたり顔でいった。
「お美年ちゃん、だんなさまが折角ああおっしゃってくださるんでさ、ここのところはお言葉に甘えてさ。ねえ……」
　浅草の金竜山瓦町（きんりゅうざんかわらまち）がもう少しで今戸橋に尽きるあたりに「舟友」とかいたこいきな袖行灯（そであんどん）をかけた船宿がある。
　表の通りを越えて斜め向こうには待乳山聖天（まっちやましょうでん）宮（ぐう）の森がこんもりと高く夜空にそびえ、裏手は

もちろん隅田川に面している。

　船宿の造りはどこも大概似たようなものだが、玄関は広い土間になっていて、とっつきの小座敷には帳場があり、その小座敷のわきから土足のまま川端の桟橋へ出られる細い路地がもうけてある。

　船を待つ間のひとときを、帳場のうしろから二階へあがって水藻のにおいをかぎながら一杯かたむけるもよし、土間からまっすぐ路地をとおって河岸に待っている船にのってもよいという仕組みだ。

「友三、わしだ。今もどったぞ」

　と、帳場の方へ声をかけた三四郎は、そのまま路地を通って奥の方へ入っていく。

　その奥まった辺りに、路地をはさんで母屋とは反対側に、生けがきで仕切ったこぎれいな前庭をもった離れらしいものが建っているが、

「さあ、お美年さん、入りなさい。仙太も入れ。遠慮はいらん。といっても、わしも居候の身分だが……」

　三四郎は笑って枝折り戸をあけた。

　この離れは、この家の隠居が生きているころ道楽半分に建てたとか、せまいが凝った二階建てであった。

　その小座敷に招じ入れられて、お美年はなにか夢心地でぼんやり座っている。

　三四郎にはまだ二度しかあっていない。それも、一度はちらと見かけただけで、その時は言葉さえかわしていないのだ。見知っているといっても、危ないところを救われたという恩だけで、こんなお世話になる筋合いはさらさらないはずだのに、どうしてうかうかと二つ返事でここまで来てしまったのか、自分でもそれが分からなかった。

　夢にまで見つづけて、会いたい、お目にかかりたいと思いつづけていた人に突然出あったうれしさに、ただもうわくわくしてしまって前後の考えもなしにぼんやりついてきてしまったのであろうか。

　それにしても、まだしみじみお礼もいわず、ごあいさつさえ申しあげていないのに、このままずるずると御好意に甘えてしまって、そんなはしたないずうずうしさってあることだろうか。

　早く、なんとかお礼でも……。

　いわなければ恥ずかしくて身のおきどころもないのにと思いながら、一度きっかけをなくしてしまった言葉は容易にお美年の口から出てこずに、日ごろの気丈なお美年らしくもなく、ただうじうじと顔を伏せているばかりであった。

「これは、だんな。お帰りなさいまし」

　と、あとを追うように入ってきたのは、船宿のあるじ友三であった。

「これは、花屋の親分さんとこのお美年さんでいらっしゃいますね。あっしも十手捕りなわをおあずかりしており、同業のよしみで勘兵衛さんとはとうから顔見知りだし、それに、花屋小町と評判のお美年さんのことはよく存じておりますよ」

　と、お美年の方へ愛想よく会釈する。五十年配の、さも苦労人らしい温和な顔つきの男であった。

　三四郎は花屋が放火にかかって焼失したことを話し、

「友三、おぬしの許しもうけんうちに勝手だが、お美年さんたちをここへ連れてきた。すまんが、当分面倒をみてあげてくれぬか」

　と頼む。

「そいつア花屋さんはかさねがさねお気の毒なことでした。勘兵衛さんが行方しれずにおなんなすったという矢先に放火にあったとは、お気の毒という以上にただごととは思われません。だんな、よくお美年さんをお連れくださいました」

　と、友三はきっぷのいい江戸っ子らしく、早くも万事のみこみ顔に、気持ちよくうなずいて

みせた。
「友三、お美年さんはこんなきれいな優しい顔をしていなさるが、どうして男まさりのはげしい気性をもっている」
「だんな、それならもうよく存じておりますよ。だんなから、さんざんお美年さんのおうわさは伺っておりますから……」
「はて、そんなにお美年さんのことをしゃべったか?」
「そんなに……どころじゃアございませんや。その時以来、朝に夕に、日に少なくとも二度三度、おうわさの出ない日はありませんでしたからねえ」
「そうだったかなア……」
と、三四郎はお美年の方を見ながら声をたてて笑った。
「友三、おぬしのいうとおり、ただごとではすまない情勢になってきた。この次には、お美年さんがねらわれそうだ。男まさりな性分は見上げたものだと思うが、ときにはその性分が災いして、あまり無鉄砲なことでもやってうかと敵のわなにはまりはせんかと、わしはそれが心配でならんのだ。お美年さんをここへ連れてきたのも、当分姿をかくしている方がいいと思ったからだが、友三、おぬしもそのつもりで、お美年さんがここにいることは極秘にしておいてもらいたいな」
「よろしゅうございます。店の若いやつらにもいいふくめて、お美年さんのことはきっとおひきうけしましたから御安心ください。まあ、お美年さん、そんな訳だから、あなたも自分の家にいるつもりで、のびのび気軽にしてくださいましよ」
お美年をそっちのけで、三四郎と友三の二人でさっさと話をきめてしまったから、お美年にはいやおう口を出すすきもなく、ただ、
「あつかましゅうございますが、なにぶんともどうぞよろしくお願い申し上げます」

と、顔を真っ赤にしてうなだれるばかりであった。
そこへ、友三の女房のおきんが夕餉（ゆうげ）の膳（ぜん）を運んできた。
下にもおかないもてなしだが、お美年は、まるで見合いの席に出た小娘ででもあるように、ろくに箸（はし）もとれなかった。
行方のしれない父の安否を案じる不安さもあるにはあったが、それよりも、なにやらふわふわした雲にでものって漂っているような気持ちというか、悲しいような、うれしいような、それでいて身のおきどころもないような恥ずかしさに胸がいっぱいにふさがって、折角の美味もほとんどのどに通らない。
お美年は離れの二階を寝所にあてがわれた。
「もったいのうございます。わたくし、お勝手のすみで結構でございます」
と、当惑したように辞退するのを、
「まあまあ、そんなことおっしゃらず。母屋の方は、がさつな男たちが出入りして、お美年ちゃんなんか安心してねむれるもんですか……階下には三四郎さまがおやすみになりますけれど、ほほほ……あの方は、男は男でも、それはお堅くて……ちっとも御心配なんかいりはしませんよ。お美年ちゃんのようなきれいな人の用心棒としたら、腕っぷしは滅法強いし、かちかちの堅造だし、本当にうってつけの人ですよ」
と、如才のないおきんは、冗談まじりにいって、うむをいわせずお美年を二階へ押しあげた。
あとを追いかけて上がってきた仙太が、
「あっしは母屋の方で寝るんだそうでございます。おやすみなさいまし……」
といいながら、へへへ……と笑った。
「いやだねえ、何を笑うのさ」
「何がって、お美年ちゃん、ことわざなんてものはまったくうまく出来てるもんだってつくづく感心したところなんですよ。悪いことがあれば、そのあとでいいことがむいてくるんですっ

てねえ」
「へえ、そうかねえ」
「親分が行方しれずになる、花屋が焼ける……げっそりしているところへ、三四郎さんが現れて、ずるずるっと一つ屋根の下へ住むようになる。おまけに、離れの上と下、たった二人きりときやアがった」
「……」
「お祭ししますよ。お美年ちゃん、うれしいんでしょう?」
「しらないッ、そんなこと!」
「分かってまさア。さっきから、まるで人が変わったようにぼっとしていなさる」
「ここにお世話になるってこと、一番先に賛成したのはお前じゃないか」
「あっしが賛成したのは別に意味があるんだ。お美年ちゃん、悪いことのあとにはいいことがあり、いいことのあとには悪いことが起こるもんですぜ」
「まあ、縁起でもない。なぜそんなことをいうんだい?」
「はっきりいいましょう。加賀美三四郎は親分がねらいをつけていた星の一人なんだ」
「な、なんだって?」
「驚くことはねえでしょう。とうからあっしが申し上げていたんだ。あの男は、今度の事件と深い関係にあるにちげえねえ。たたきゃアほこりの出る体、とまではいわなくても、どこの馬の骨か素姓もしれねえ浪人ものでさ」
「お、お黙りッ」
と、仙太をさえぎったお美年の顔は真剣そのものであった。
「おきんさんがおっしゃってたよ。三四郎さまは友三親分御夫婦が前に大恩をうけたお方、御立派な……それは御立派なお方だと、それこそくりかえしおっしゃってたよ。なんてこというんだ、どこの馬の骨かだなんて……」
「おきんさんがどういおうと、あっしゃアそう

やすやすと人を信じねえんだ。三四郎さんは、千川万作の一味が花屋の留守を襲って銀の小鈴を盗もうとした上、火をつけて逃げたなんていってるが、考えようによっちゃア怪しいもんだ。そういう御当人が、銀の小鈴を横取りしたっていうじゃありませんか。ことによったら、野郎が花屋に火をつけたのかもしれねえ」
と、仙太はじろっとお美年を見上げた。
「仙太、バカも休み休みいうもんだ。なんだって? 三四郎さまが銀の小鈴を横どりあそばして、その上花屋へ火をつけたんだって?」
「そう疑えば疑える節があるでしょう?」
「冗談おいいでないよ。三四郎さまが決してそんなお方でないという証拠に……さあ、御覧」
と、お美年は懐から白紙に包んだ銀の小鈴を出して、荒々しく仙太の鼻先へつきつけた。
「三四郎さまがさっきこれを返してくださったんだよ。どうだい、仙太。目があったらよく御覧よ。これが、あのお方の潔白なによりの証拠じゃアないか。まだいうことがあるのかい、仙太?」
「なるほどねえ。御親切なこってすねえ。へへへ……」
「畜生ッ、なんだい、その口のききようは!!」
「考えてみりゃアふしぎ、けったいな話でさ。二度も忽然（こつぜん）と姿をあらわしてお美年ちゃんの危ねえとこを救ってくれる。お美年ちゃんとあっしが千川万作とやらのわなにかかってうかうかと誘い出されることをちゃんと知っていて、その留守宅の近所に半日立ちんぼうしてさ、家の焼かれるところまでちゃんと見ていて、大事な銀の小鈴を取り出してくれる……へえ、これがただの御親切ってやつですかねえ。何もかも、どうしてそんなに都合よく御存じなのかね。くせえ! どう考えたってくせえ野郎だ」
「何が臭いんだよ。何が臭いんだってば!」
「そんな御親切気があったなら、親分の行方もさぞかし御存じなんでしょう。さっさと親分を

もどしてくれりゃアいいんだ」
「お前ッ、まるで三四郎さまがおとっつぁんをかどわかしでもしたようなことを……」
「あっしゃア、だれがなんといおうと、親分の無事なお顔を見て、その口から何もかもはっきりするまでは、どこのどいつも信じませんから、そのおつもりで……」
「お前ッ、そんなことというと罰があたるよ。さっきも三四郎さまと友三親分が話していらしたけれど、お二人とも懸命におとっつぁんの行方をさがしていてくださるそうだよ」
「それで、親分はどこにいるんです？」
「さあ、それが……なんでも、この先の橋場の河岸に千川万作の住まいがあるんだそうだけれど、友三親分の調べたところでは、どうもそこにはおとっつぁんはいないらしい。といって、人一人かどわかしてかくすには、それ相応の場所もいるんだろうに、それがてんで見当がつかないって……」
「そうでしょう。そんなことだろうと思っていたんだ。ことによると、三四郎さんと友三親分と、一つ穴のむじなかもしれねえ」
「な、なんだって！」
「二人ともぐるで何かやってるのかもしれねえというんでさ」
「そ、そんな、仙太。お前、なぜぬけぬけとこのおうちへごやっかいになったんだ？」
「だからさ、お美年ちゃん。虎穴に入らずんば虎児を得ずっていいますアね。渡りに舟だ。内懐へとびこんで、三四郎という男の正体をあばいてやろうと思ったんでさ」
「お、お黙りッ。お、お前、変なことでもしたら、あたしが承知しないよッ」
と、お美年はもう真っ青になって、きりきりまゆをつりあげながら仙太をにらんだ。
「お美年ちゃん、ことわっておきますが、あまり三四郎さんとなれなれしくなさらねえ方がいいでしょう」

「余計なお節介をおやきでないッ」
「お美年ちゃんほどのしっかり者でも、女ってやつアほれるとてんで盲になるもんですからねえ」
「そ、そんな……あたしがどうしたというんだい。あ、あたし……そんなんじゃないんだ」
「そんならようございます。お断りしておきますが、あっしゃア三四郎さんだろうとだれだろうと、すっかり得心のいくまでは、ほし（犯人）の一人とにらんでてこでも動きませんから、そのおつもりで……とんだ雑言をはきまして、もしお気にさわりましたら御勘弁くださいまし。じゃあ、お美年ちゃん、おやすみなさいまし」
いいすてて、仙太はすうっと姿を消していった。
お美年は、一時はむしゃくしゃして、体がぶるぶる震えるほどだったが、その怒りが鎮まっていくにつれ、勘兵衛思いの仙太のいうことにも一応の理屈のあることを認めないわけにはいかなかった。
まさか、三四郎が大それた悪人だなどとは思いはしなかったが、今度の事件に容易ならぬ深い関係をもっているらしいことはわかっていた。
第一、いくらおきんの言葉はあったとしても、お美年としては素姓もよくわからぬほんの行きずりの人にすぎないような三四郎である。
それをどうして、こううかうかとこの家まできてしまい、一つ建物の中にねるようなことにまでなってしまったのだろうと、自分の気持ちのいぶかしさが胸を責めつける。
しかし、それもほんの束の間であった。
階下で読書でもしているらしい三四郎の気配に耳をすましているうちに、お美年はぼうっと夢心地になった。
三四郎の顔がまぶたにうかんでくる。
自分を見るとき、いつでも微笑している、やさしげな、澄んだ、そして男らしい目……。

夜具をのべ、おきんの出してくれた浴衣に着替えてそっと横になったが、ねむれない。

階下でかさっと音がしても、思わずその方へ注意が向いて、胸がどきどき弾んでくる。

「お美年さん、もう寝たか？」

と、三四郎の声がした。

「はい、あのう……い、いいえ、まだ……」

三四郎が立ち上がって階段を上ってくる足音がした。

お美年はあわててはねおきると、浴衣の胸をかきあわせ、髪をなでつけ、うろたえた。

しかし、三四郎は上までは来ず、

「退屈であったら、これでも読みなさい。なかなか面白い」

と、草双紙らしいものを階段の上へおいてそのままおりていく。

お美年は、何かがっかりしたように、ぺたりと座りこんでしまった。行灯の灯に照らされた横顔が真っ赤にほてっている。

胸がどきどきはげしく鳴っていて、乳房のあたりがうずくように痛かった。

屋形船

一夜あけると、お美年にとって世の中ががらりと一変したような気持ちであった。

二階の窓から見える隅田川の流れも、庭に茂っている草木の色も、ことさらつやつやしく物珍しげに見えるのもふしぎであった。

父勘兵衛の安否を忘れたわけではない。そのことは、終始心にかかって忘れることはないのだが、それにもかかわらず、うきうきしてくる自分の気持ちをどうすることも出来ないのだ。

父にも仙太にも、すまない、恥ずかしいとは思うのだが、それも一瞬間のことで、何がなしそわそわと夢見心地になってしまう。

世話になっているこの家に済まないと思うから、朝早くはねおきると、早速母屋の方へいって、水くみ、ふき掃除から台所の仕事まで、せ

っせと精出した。

「まあ、お美年さん。そんなに働いてくださらないでいいんですよ。困ってしまいます。わたしが三四郎さまからしかられてしまいますよ」

と、女房のおきんもいうし、

「遠慮気がねはいらんのだ。自分の家と思って、大きな顔をしてのさばっていてもらいたいな」

と、三四郎もいってくれたが、

「わたくし、働くこと慣れていますし、大好きですから……どうぞ、勝手にさせてくださいまし」

お美年はそういって、いよいよまめまめしく働く。

「お美年さん。わたしゃア本当に思い違いしていましたよ。勘兵衛さんのお話では、男まさりもいいけれど、とんだはねっ返りで、女らしいところが少しもないって……ほほほ、御免なさい。勘兵衛さんからそう聞いていたんだけれど、とんでもない。お美年さんみたいにすなおで女らしい人、めったにあるもんじゃないと、さっきもつくづく家のと話したところなんですよ」

と、おきんは手ばなしでほめちぎった。

そういわれるとお美年は恥ずかしくてたまらない。

少しでも自分が女らしく見えるようになったとすれば、それは三四郎さまのためなのだと思っている。

自分でもよくわからないが、三四郎と一つ家に住んでいるのだと思うと、なぜだかしおらしい気持ちになって、だれにでも優しく、親切にしてやらずにはいられなくなるのだ。

三四郎の食事や身の回りの世話はお美年がする。おきんからそうしろといわれた時には、心の中を見すかされたような気がして、顔から火が出るように恥ずかしく、ただもううろうろしてしまったが、もちろん、願ってもない幸せだと思った。

今も、丁度離れへ御飯をはこんで、三四郎のために給仕をしている。

盆をもってつつましくうつむいているお美年の姿には、啖呵をきって仙太を追い使う日ごろのそぶりはまるで感じられない。
顔もあげられず、話しかけることも出来ず、ただもう夢心地でうっとりしているお美年の耳に、戸口の方から突然なれなれしく弾んだ女の声が聞こえてきた。
「三四郎さま、御免くださいまし。入ってもようございます?」
若々しい、いかにもあだっぽい声である。
返事も待たず、がらっと戸口を開けて入ってきたのは、年のころ二十歳ぐらいの若い女であった。
矢絣の着物や髪形から、どこか武家屋敷の奥に奉公している人と思われる。
「やあ、だれかと思ったらお徳さんか。珍しいな。今日は宿下がりか?」
と、三四郎は他意なげな微笑で迎えた。
「はい。丁度、お屋敷の御用もございまして、今日一日お暇を頂きました」
といいながら、女は横目をつかってじろじろ探るようにお美年を見ていた。
「まあ、急がんのだろう。上がりなさい」
「では、三四郎さま、ちょっとおじゃまさせていただきます」
と、上がってきた女はなれなれしく三四郎のそばへぴったり座って、
「本当に、おひさしぶり……お目にかかりとうございました」
と、なまめかしくにっこり笑いかけた。
「いつの間にかすっかり武家奉公のお女中らしくなったな。さすがに、みがきあげたとみえ、格段に美しくなった」
「まあ、あんなお上手を……随分お目にかかりませんもので、わたくし、お会いしたくて……今日は御用にかこつけて飛んでまいったのでございますよ」
と、お美年の方を横目で見ながら、聞こえよがしにいう。

「では、おさげさせていただきます」
お美年は顔を伏せたまま、膳部をもってそっと立ち上がった。
「ああ、お美年さん。別に気のおける人ではない。急いで立たんでもいいのだ」
と、三四郎がいったが、
「でも、あちらに御用もございますから……」
と、お美年は逃げるようにして離れを出てしまった。
この女が、さっき母屋へ来て、友三と何か話していたのは知っている。
随分美しい人だとは思っていたが、まさか三四郎とそんなに懇意な人とは知る由もなかった。
三四郎のそばへさもなれなれしげに身をよせて、これ見よがしにあだっぽく笑いかけたあの姿を思いうかべると、なにか物悲しいような切ない気持ちにうたれて、じいんと体中がしびれてくるようである。
お美年は生まれてはじめて嫉妬というものを感じた。
おきんの話をそれとなく聞いてみると、あのお徳という人は、以前一年ほどこの舟友に奉公していて、おもに三四郎の身のまわりの世話などしていたという。
それが、今から三月ほど前、急にお屋敷奉公がしたいといい出し、それには三四郎の熱心な口ききもあって、主人の友三の世話でさるお屋敷へ奥女中にあがることになったのだという。
聞いてみると、自分のような三四郎と昨日今日知りあったという仲ではなく、ことに、屋敷奉公に出る時、三四郎が口をきわめてお徳をほめ、是非世話してくれと友三に頼みこんだということが、お美年の胸につかえた。
母屋にいても、もうおちおちと仕事が手につかない。はしたないとは思ったが、たまりかねて、お美年は裏口からそっと離れに入り、二階

へ上がった。

「随分久しぶりだ。お徳さんの顔を見るのは、幾日ぶりであろうな？」

「まあ。幾日ぶりだなんて、二月前に一度お目にかかっただけではございませんの」

お美年の耳に、階下の二人の話し声がはっきり聞こえてくる。

人の話を盗み聞きするなんて、そんなこせこせしたことは大きらいだったはずのお美年が、今は自分のしていることに気がつかないのもいじらしい。

「御奉公の方はもうなれたか？」

「はい、お陰さまで……本当に、あの節はお世話になりました。三四郎さまの御恩、死んでも忘れはいたしません」

「つらいこともあるだろうな？」

「そんなことございませんけれど、でも、三四郎さまにお目にかかれないことだけが……寂しくて寂しくて……本当に、夢にまで見るんですのよ」

三四郎の声もやさしいが、お徳の声は鼻にかかって、まるで甘ったれるようにお美年に聞こえた。

「今日はなにかお屋敷の用で来たそうだが？」

「はい。若殿さまが大川へ船を浮かべて夕涼みをあそばしたいと申されまして……それで、お出入りの舟友へ御用命ということになりましたので……わたくし、もっけの幸いと思って、たってそのお使いの役をお願いしたんでございますよ。だって、ちっとも三四郎さまにお目にかかれないのですもの。寂しゅうございましたわ」

と、お徳の言葉つきは段々はすっぱに弾んでくる。

「そうそう、そういえば、お徳さんの奉公先は、金森家の中屋敷であったな？」

「ほほほ……いまさらしく、そんなこと……はい、中屋敷の若殿源之丞さま付きでございますよ」

「では、ひょっとしたら知っているだろうが、先夜、御用聞きの花屋の勘兵衛があの中屋敷へ招かれていったであろう？」

「ええ、そうでございますって……若殿さまと御重役の方がこっそり奥のお庭先でお会いしたそうで、わたくしども全然しらなかったのですけれど、あとでちらっとうわさを耳にいたしました」

「その節、どんな話があったか、そのうわさは聞かなかったか？」

「三四郎さま。なぜ、くどくどとそんなことお聞きになりますの？」

「さあ、別に……」

「三四郎さまの意地悪！　そんなしらばっくれたりあそばして……わたくし、ちゃんと知っています。さっきここにいらした人、花屋小町って評判のお美年さんという人でしょう？」

「ははは……知っているか？」

「あんなうれしそうに笑ったりして……知りません。もうなんにもお話ししませんから！」

「まあ、そう怒らず話してくれ」

「正直に御返事なさればお話しします」

「正直に？　どんなことだ？」

「とってもおきれいな人。女のわたくしだってほれぼれするくらい……ねえ、三四郎さま。お好きなのでしょう、あの方が？」

「うむ、好きだ」

「まあ、憎らしい。あんなにはっきりと……」

「ははは、正直にいった。約束だから話せ」

「いや、いやッ、いやです」

と、お徳は三四郎にしなだれかかったらしい。

「お徳さんが、正直にいえ、あの人が好きだろう？　というから、正直にいったのだ」

「いやッ、人の気もしらないで、あんなにはっきりと……」

「むずかしいなア、お徳さんは……」

「わたくしのことも好きだとおっしゃってくだ

さらなくてはいやでございます。もうなんにもお話ししてさしあげません」
「では仕方がない。いうとするさ。お徳さんも好きだ。これでいいか？」
「そんな、お義理みたいに、仕方がないだなんて……わたくし、もう存じません」
「困ったなア、ごきげんを損じたか。いや、お徳さん、この舟友の離れで、以前永いこと親切に世話してくれたことは忘れん。だから、金森家へ奉公に出たいといった時にも、友三にあんなに口添えして推挙したのではないか」
「ええ、それはよく存じています。御恩は忘れません」
「さあ、きげんを直して話してくれ」
「もっと優しくしてくださらなくちゃいや……」
「どうしろというのだ？」
「ねえ、この手を……握ってくださいましな、三四郎さま」
と、声が鼻にかかってますます甘くなる。
「こうか？」
「もっともっと……もっと、しっかりと……」
「これでいいのか？」
「あら、邪険ねえ。離さずに、いつまでも握っていてくださらなくちゃ……」
「勘兵衛が金森家へ招かれた用件は、一体どんなことだったのだ？」
「実を申しますと、それもよくは存じませんけど、でも、三四郎さま、あの金森家の中屋敷に、このごろ世間でうわさにたっている不吉な『花』という字の張り紙がはられていたんだそうでございますよ」
「ふうむ……」
「それと一緒に、源之丞さまとお許婚の間柄でいらっしゃる榊原様のお鶴さまのお寝間の戸口にも同じ張り紙が……」
「ええっ、それは本当か？」
「なにぶんにも、お屋敷ではひたかくしにあそ

ばして外へもれないようになすっておいでなくらいですからよくは分かりませんけれど、そういううわさをちらっと耳にいたしました」
「なるほど……」
「来月初めには、そのお鶴さまが中屋敷へお越しあそばすという矢先でもあり、勘兵衛親分さんをお招きしたのは、きっとそのことに関係があるのではないのでございましょうか？」
「うむ、ありそうなことだ……」
といったまま、三四郎の声がふっととだえた。
「三四郎さま、何を考えていらっしゃいますの？ ああ、分かりました。また、あのかわいいお方のことでございましょう？」
「いいや、違う。そんなことではない」
「いいえ、分かっています。三四郎さま！」
「なんだ？」
「わたくし、あきらめはいたしません」
「はあ？」
「そんな顔して、おとぼけになって……わたくしの気持ち、よく御承知のくせに……わたくし、あきらめません。どんなことがあってもあきらめません。わたくし、あなたさまが好きなのですもの。好きで好きで、気が変になるくらい……お分かりでしょう？ ねえ、ねえ……」
二階にかくれているお美年は、思わず耳をおおった。
「三四郎さま……」
「なんだ？」
「今夜一晩お暇が出た体でございます。今夜、ここへ泊めていただいてようございますか？」
と、暗に何かにおわせたむせ返るようなつやっぽい声でお徳がいう。
「それは困る。二階がふさがっている」
「あら、あんなこと……ええ、分かっています。お美年さんでございましょう。わたしが泊まってはさぞおじゃまなんでございましょうね」
「久々の宿下がりではないか。家では呉龍角も待っているであろう」

「あんなことおっしゃって、ていよく追い払おうとなさるのでございますね。ええ、わたくしもここへくるまではそのつもりでしたけれど、お美年さんの顔を見てからは……ねえ、三四郎さま、わたくしの気持ちも分かってくださいましな。とうから、これほど……お慕いしていたわたくしの気持ちも少しは……お願いでございます。奥さまにしてくださいなどと大それたことは申しません。せめて……せめて、一度でも、かわいそうだとおぼしめしましたら……」
と、お徳の声はしおらしく涙ぐんでいる。
「お徳さん、その気持ちはありがたいが、だれかれの区別なく、当分わたしは女どころではないのだ」
「あんなことおっしゃって……本当に?」
「本当だとも」
「それなら仕方ございません。でも、もし、お美年さんを奥さまになどなすったら、わたくし本当に気が違ってしまいますよ。何をするかしれませんでございますよ。ええ、もうただではおきません。めちゃめちゃにして差し上げます。お美年さんを殺して、わたくしも死んでしまってあげますから……」
「こわいんだなア、お徳さんは……」
「ええ、ええ、こおうございますとも。ほれた女は、鬼にも蛇にもなりますからね……」
「しかし、そういうお徳さんには、呉龍角というれっきとした御亭主があるではないか」
「あら、またそんなことを……あれは亭主でもなんでもございません。肉親の伯父だと、幾度も申し上げているではございませんか」
「そうかなア……」
ははは、と三四郎は笑った。
「お疑いになるなら、あの人をつれてきて、はっきり伯父だということを証拠だてて御覧にいれます」
「まあ、そうむきにならんでもいい」
「だって、三四郎さま、あんまりなことおっしゃるのですもの……」

と、お徳はまた涙声になる。
「それはそうと、わしはまだかけ違って、呉龍角にまだ一度もあっておらん。一度、会ってみたいものだが……」
「伯父もそう申しておりました。舟友さんにはお出入り願っているのに、さんざんわたしがお世話になった三四郎さまにはかけ違ってお目通りしていない。折があったら是非一度と、よく申しておりました。丁度よい折、三四郎さま、これからわたくしが御案内申し上げます。ねえ、御一緒に……」
と、いそいそというお徳の声にせきたてられて、どういう風のふき回しか、
「では、そうするか……」
と、三四郎が気軽く立ち上がる気配がした。
母屋へもどってきたお徳は、このままのなりでは気やすく外が歩けないといって、髪を解き流して、手早くうしろで丸め、お屋敷着の矢絣を、この家にあずけてある町娘の着物にきかえた。
着かえている間もうきうきと弾んでみせているのが、お美年にはまるで自分にあてつけているように思われた。
「お美年さん、あなたも一緒に行きなさい」
と、三四郎がすすめる。
「でも、わたくし……」
お美年がためらっているのを、
「家にばかりとじこもっていても気がめいるであろう。幸い、呉龍角は浅草寺の境内に出ているそうだから、父御の行方の早くしれるよう、観世音に参詣してはどうか?」
と、ことごとに淡泊な三四郎がこの時にかぎって執拗にすすめるのが、何か訳ありげに聞きとれた。
「そうでございますよ、お美年さん。三四郎さまが折角ああおっしゃるのですから……」
と、お徳は如才なく笑顔を見せながら、その

くせ、すぐそのあとから、
「三四郎さまはわたくしみたいな醜女がお供ではお気に召さないんだそうでございますって……うらやましい。おきれいな方はお得ですものねえ」
と、冗談まじりに毒気のあることをちくっという。
お美年はことわりきれず、二人のあとについて舟友を出た。
神経が太いというのか、女の気持ちに鈍感だというのか、三四郎はうわべにこそ出さね、腹の中ではにらみあっているような女二人をつれてゆうゆうと歩いていく。
お徳が伯父だといった呉龍角という男は、そのころ江戸で評判になっていた唐人飴屋だった。
盛り場にたって胡弓をひきながらおどけた歌をうたい、はては曲芸やら奇術をやってみせては唐人飴をうる。
盛り場にたつばかりではなく、江戸中を流して商売して歩くからいろいろうわさをききこんでいて、その聞きこみが思わぬ役にたったりするので、いつのころからか友三が目をかけて使うようになった。
そんな縁で舟友に出入りしているうち、姪のお徳が金森家に奉公に出るようになったというのがそもそものきっかけだが、かけ違って呉龍角にまだ一度もあったことのない三四郎が、急に会いたいなどといい出したのは、ただの気まぐれであったろうか。
浅草寺の裏手へ回ると、いろいろの物売りにまじって、だぶだぶの唐人服をつけ、ちょこんと頭にのせた唐人帽のうしろから長い辮髪を垂らし、間のびた唐人ひげをのばしたおどけた顔の四十男が、胡弓をひきながら身ぶりおかしく歌っているのが見えた。

龍さん龍さんなぜ泣くね

かわいい親豚飼ってたね
その豚子豚を産んだよね
ぞろぞろ、ぞろぞろ、産んだよね
うれしいね、親豚喜んだね
うれしいね、龍さん喜んだね
アチャメチャ、チャカメチャ喜んだね

歌の合間には、胡弓をひきながらすとんと見事にとんぼ返りをうって、ぎょろっと大目玉をむく。
人相も身ぶりも道化ておかしいが、歌の文句も節も一風変わって奇妙だった。
唐人服の男が、アチャメチャ、チャカメチャ喜んだね……と、とんぼ返りをうつと、前をとりまいていた人垣の中の子供たちも、声をそろえて、アチャメチャ、チャカメチャ……と相づちをうつ。
その歌がはやって、方々で子供たちが歌っているくらいだから、よほど人気があるのだろう。

それでも龍さん、なぜ泣くね
生まれた子豚死んだよね
一匹二匹死んだよね
三匹四匹死んだよね
ぞろぞろ、ぞろぞろ死んだよね
親豚哀号泣いたよね
龍さん哀号泣いたよね
アチャメチャ、チャカメチャ
泣いたよね

歌いながら、また、すとんととんぼを切る。
「哀号、哀号、龍さん泣くあるよ。子豚死んだ、かわいそうあるね。親豚悲しい、かわいそうあるね。子豚沢山うまれた。皆売って、お金どっさりもうかる。皆だめになって、龍さん一番一番かわいそうあるね。哀号、哀号……」
と、唐人ひげをふるわせておおげさに泣いてみせる。

「龍さん、飴売る、お金もうかるね。かわいそうないよ」
　と、子供の一人がまぜっかえしたので、見物人はどっと笑った。
「その子、利口あるね。日本の人、皆利口ある。情け深いある。龍さんの唐人飴、沢山買ってくれる。龍さん、お金沢山もうかる。悲しくないあるよ」
　いいながら、にたにたっと笑った顔は、いかにも毒気のないあいきょうのある顔つきだった。
「これから、沢山唐人手妻やる。芸当やる。皆さん、沢山飴買うよろしね。龍さんの唐人飴、これたべる、子供たち、龍さんの子豚のよう丸々太るよ。娘さん、この飴たべる、きれいになる。お婿さん、どっさりくるね。おかみさん、これたべる、赤ちゃん、たくさんたくさん生まれるね。買うよろし。皆、買うよろし……」
　口上も面白おかしく、前においた小箱から唐人飴と称するものを出しては、とりまいた人たちに売りつける。
「お徳さん、伯父御の唐人飴は、なかなかの繁盛らしいのう」
　と、三四郎が感心したようにいう。
「ええ、お陰さまで……どうせしがない大道の飴売りですから、大したこともないようですけれど……」
　お徳は、話しかけられたのをいいことに、ぴったり三四郎によりそって、甘ったれたような鼻にかかった声で答えた。
「龍さんは本当の唐人なのか?」
「いいえ、三四郎さま。それじゃア姪のわたくしまで唐人ってことになってしまいます。ほほほ、いやですわ」
「ふうむ、どう見ても日本人とは見えんがのう」
「伯父は長崎の生まれで、幼いころみなし子になったのを、ある唐人のもとにひきとられて育ったそうでございます。あら……そろそろ商売も終わりらしゅうございますわ。あちらへ参り

ましょう」
　と、お徳はあまり呉龍角の身の上話はしたくないらしく、ようやく人の足の散りかけた唐人服の男の方へ歩き出した。
「このだんなさん、加賀美のだんなさんあるか。これ、うれしいね、おめでたいあるね。お礼、沢山沢山いいたいことあるよ」
　と、お徳に紹介された呉龍角は、満面を笑み崩して至極ごきげんであった。
　脂ぎった赤黒い顔に、長く垂れさがった唐人ひげがあいきょうたっぷりである。
　遠くから見た時には、まるで烏天狗のように見えた口元が、近寄ってみると、なるほど、恐ろしい出っ歯で、それがヤニで茶色にそまっている。
　その上、小鼻がかえるの横腹のようにおかしくふくらんでいるせいか、妙にふがふが鼻にかかったような声を立てるのが一層ごあいきょうを添えているようであった。
「舟友のだんなさん、いいだんなさん、わたし、さんざんごひいきあるね。舟友、ちょいちょい行く。でも、加賀美のだんなさん、会えない。悲しいね。お徳わるい。会わせないあるよ。わたし、ごあいさつ出来ないね。お徳わるいあるよ」
「何いってるのよ、伯父さん。三四郎さまにはわたしがさんざんお世話になってるんですよ。早くお礼でもいったらいいじゃないか」
　と、お徳がまゆをしかめて口を出す。
「それ、分かってる。今いう。女の子、口うるさい。わたし、きらいあるよ。わたし、お徳、舟友さん奉公出した。せいせいしたあるよ。今度、お屋敷奉公出した。もっとせいせいしたあるよ」
「うるさいねえ。伯父さんこそ、うるさいじゃないの。ねえ、三四郎さま」
　と、お徳は色っぽい目でにっと三四郎に笑いかける。
「今いう。お礼いう。だんなさん、ありがと。

百ぺん、千べん、お礼いう。ありがと、だんなさん」

「お徳さんは陽気な伯父さんをもって幸せではないか。こういう伯父さんと一緒にいたら、ふさぎの虫などとんと起こらんで楽しいであろうが」

ははは……と、三四郎は屈託なさそうに高笑いした。

「お徳、よく聞くよろし。だんなさん、龍角ほめたあるよ。お徳、幸せあるね。だんなさん、いった、よく聞くよろし」

「何いってるの。ほめてくださったんじゃアありませんよ。いやんなっちゃう。ひやかされたのも分からないのねえ」

と、お徳は苦笑いした。

「ときに、龍さん、友三から話があったろうが、花屋の勘兵衛が行方しれずになった件だ。おぬしはそういうことをつきとめるになかなかいい勘をもってるそうだが、一つたのむ。わたしからも頼んでおく」

と、三四郎は真顔になっていった。

「それ、心得てる。大丈夫あるよ」

と、龍角はおぎょうに体を反らせて、ぽんと胸をたたいてみせた。

「この鼻、ちゃんとかぎ分ける。すぐ見つかる。大船、乗った気よろし」

「大変な大船だねえ。大丈夫なの、伯父さん」

と、お徳が心もとなそうにつぶやいてるすきに、

「じゃあ、お徳さん、これでわかれよう」

といいすてて、三四郎はくるっときびすをかえした。

「あら、三四郎さま、もう？　ちょっと……ちょっとお待ちになって……」

と、お徳は鼻を鳴らしながら引きとめようとしたが、三四郎はいさいかまわず歩き出した。

「三四郎さま……加賀美さま……」

とよんでいるお徳の声を気にして、

「三四郎さま、あのように呼んでいらっしゃいます。あの方、まだなんぞ御用があるのではございませんか？」

と、お美年がそっと声をかけたが、

「なあに、ほっておきなさい」

と笑って、三四郎はさっさと歩きつづけた。

「ちょっと呉龍角という男を見ておきたかっただけでな。その目的を達したから、もう用はない。それよりも、お美年さん、さあ、観世音にお参りしよう。わしも一緒に勘兵衛のことをお願いしておく」

と、微笑を含んだ目でちらっとお美年の方をふりかえった。

優しい目であった。お美年が夢の中にさえ何度も見つづけたあの優しい目であった。

その目に見つめられ、いたわるように声をかけられて、とたん、今まで胸の中につかえていたものが、一時にすうっとさがっていくような心地がする。

そうだ、さっき、お徳さんの目の前で、三四郎さまはわたしのことを、はっきり好きだとおっしゃってくださったではないか。

仮に、それが冗談半分にしろ、決して悪くは思っていてくださらないのであろう。それを、わたしとしたことが、お徳さんのことをやいたりして……と、とり乱した自分が急に恥ずかしくてたまらなくさえ思われてくるお美年であった。

今までふさぎこんでいたのが、急にいそいそとなって三四郎のあとについていく。

一緒に石段をのぼり、一緒にお堂のみあかしの前にたち、一緒にお賽銭（さいせん）をあげ、手を合わせたのも一緒だった。

自分ながら気持ちの変わりようがおかしかったが、人からじろじろ見られるような気がして、それさえうれしいような恥ずかしいような、それでいて妙にうら悲しいような気がしておちつかない。

三四郎のうしろについて仁王門の方へ歩いて

いく。
「お美年さん、どう思うか?」
と、突然三四郎が話しかけてきた。
「は?」
「あの、呉龍角という男だ」
「どう思うかとおっしゃいますと?」
「どこかで見たことのあるような気はしなかったか?」
と、奇妙なことをいう。
実をいうと、なれなれしく甘え声で話しかけるお徳のことが気になって、心浮かないまま、そんな唐人のことなどほとんど見もしなかったお美年である。
「あのう、以前、谷中の方へ飴売りに参りました折、一、二度、遠くからちらっと見たことがございますけれど……」
「そうではない。もっと別の……妙なところで見かけた覚えはないかと聞くのだが?」
「妙なところ、とおっしゃいますと?」
「いや、いいのだ。別になんでもない」
と、三四郎は笑った。
「さて、出たついでに、どこかでお美年さんにおいしいものでもごちそうしようかな」
お美年の胸はまたどきどき弾んできた。
三四郎と二人っきりで、どこかの小座敷で食事する。思ってもいなかった。なんという幸せであろうか。
でも、あまり幸せすぎると、そのあとで不幸がやってくるというけれど……。
「この先に、川魚料理をくわせる家がある。お美年さんは川魚料理はきらいか?」
と、三四郎が聞く。
「はい……いいえ、あのう、大好きでございます」
「それとも、蔵前まで行けば、近ごろ評判の鳥鍋をくわせる家がある。そこにしようかな。そこなら静かな小座敷もあるが」
「……」

三四郎さまはどうしてこんなに優しく親切にしてくださるのであろう。父の行方が知れないというのに、自分ばかりこのように幸せに酔っていていいのだろうか。と、そんなことばかり考えているから、なんと返事をしたかそれさえ覚えていない。
顔をぽっと上気させ、目をうるませている。
そんなお美年を仙太が見たら、きっと歯がゆがって、三四郎の悪口をとばし、水をさすであろう。
ところが、仁王門を出はずれて少し行った時だった。
向こうから来かかった女が、三四郎を認めると、はっとしたように足をとめ、
「あ、もしッ。そこへおいであそばしますのは加賀美さまではいらっしゃいませぬか?」
と、だしぬけに声をかけてきた。
どこか武家屋敷の老女と見える風采の女で、供の女中を一人つれている。
お美年がそれを認めるより早く、三四郎がぎょっとしたように足をとめた。
「おう、加賀美さまでございますね。お見忘れでございますか? わたくし、市の瀬にございます」
と、老女が小走りによってくる。
とたん、三四郎はものもいわずきびすをかえした。
「あっ、もしッ。加賀美さまッ。三四郎さまッ、お待ちくださいましッ」
と、けたたましくいいながら追ってくるのを、あろうことか、三四郎はふり切るように足早に走り出した。
びっくりしたお美年は、訳もわからずあとを追っていく。
「加賀美さまッ。もしッ、お願いでございますッ。ちょっとお待ちくださいましッ」
と、老女の声は必死だったが、
「いかん。お美年さん、逃げろッ」

と、三四郎は久米平内のやしろわきをぬけ、茶店のうしろを走り、右へ左へと折りくねって走りつづけた。

やっと老女の追跡をふりきって足をゆるめた三四郎は、

「ひどい目にあった」

と、独り言のようにいって笑った。

余計なことを探りだてするものではないと思いながらも、お美年はつい、

「あのお方は?」

と、思わずきく。

「いや、なに、借金取りでな」

三四郎は笑っていいすてたが、それが冗談であることはしれきっている。

お美年の気になったのは、心なしか三四郎のまゆが曇り、なにかじいっと考えに沈んでしまったことであった。

そして、鳥鍋の小座敷へ通っても、三四郎の憂悶は一向晴れる様子がなく、ほとんど黙々として箸をとっていた。

あの御老女はどういうお方なのであろう?

あまり幸せすぎると、そのあとで不幸がくるというけれど……。

と、お美年の気苦労がまた一つふえたようであった。

江戸開府の当時、下谷浅草は一面の沼沢地であった。それが、江戸が繁盛し、町家がふえるにつれておいおいと埋め立てられて下町の形が出来上がっていったというが、今でも当時の面影が各所に残っている。

下谷の三味線堀の辺りもその例だ。少し裏地へ入ると普段でもじくじくした低湿地が多く、雨が降ればすぐ水が出る。

唐人飴の呉龍角の住まいもそんなところにあった。

裏が寺のやぶつづきで、前が、あしの生いしげった水たまりのような古池である。ぽつんとたった一軒、町家からはなれて建ったそのあばら家は、一風ふけばたちまち崩れて落ちそうに軒がかたむいていた。

今日は商売は早じまいだといって、お徳をつれてわが家にもどってきた龍角は、暑いのに雨戸をぴったり締めきった。

「お徳、今日、なんの用あって来たね?」

「若殿様が船遊びをなさりたいんだとさ。それで、舟友へお使いにきたんだよ」

「それで安心したあるよ。お徳、急に帰ってきた。殿様怒ってお暇出たあるか、わたしびっくりしたあるよ」

「その辺、如才があるものかね。どっちもこっちも大変なお気に入りようで、これお徳、それお徳って、そりゃア大したもて方さ」

「お徳、如才ない、働きもの、それに色気沢山、それでもてるあるね」

「ほほほ、色気沢山はよけいだろう、伯父さん」

「それにしても、殿様船遊び、のんきあるね。それ、本当あるか?」

「本当だとも。あしたの晩、舟友から船が出て、浜町河岸までお迎えに行くのさ」

「本当にのんきあるよ。あの殿様、もうじき花嫁さん迎える。それ、お鶴さまいったあるね。殿さま、あまりのんき、お鶴さま怒るないかね?」

「ところが、伯父さん。その御縁談のこと、あまりうまく話が運んでいないらしいんだよ。お約束はもちろん出来てるらしいんだけれど、どういうものか、お鶴さまの方があまりお気がおすすみにならないらしいんだとさ」

「来月はじめ、お鶴さま、金森家中屋敷へ遊び来る。それ、本当なのか?」

「さあ。その話だって、お鶴さまを金森家へお迎えして、若殿さまとお親しくお話でもなさったら少しは御気分がむいてくるのではないかということから運んだ話らしいんだけれど、それも今の様子じゃアどうなるか分からないんだとさ」

「ふうむ。おかしい話あるね。折角、お嫁さんの話きまったお鶴さま、なぜ気がむかないあるかね？」

「伯父さん、暑くるしいじゃないか。ここにゃほかにだれもいやしないよ。片言の唐人の寝言のまねなんざもうおやめよ。あたしだって、気分が出やアしない」

「お徳、いやがる。わたし、やめるよ」

龍角はつと立って裏口から出ていった。井戸端で水でもかぶっているらしい物音が聞こえてくる。まもなく、

「ああ、さっぱりした。この暑さに、唐人鬘と唐人服ときちゃア、てんで人間のふかし芋が出来上がらア」

いいながら、ぬっと入ってきたのは、下帯一本の見るからに精悍な若者であった。

抱えていた唐人服をそばへほうり出し、

「ああ、いい気持ちだ、せいせいしたぜ」

と、裸のまんまどっかりあぐらをかいた若者は、二十三、四か、それとも五、六か。

色の浅黒い目じりの切れ上がった、唐人龍角とは似ても似つかないいい男である。ふしぎなことに、烏天狗のように出っぱっていた龍角の口元がいつの間にか男らしい尋常な口に変わって、あのヤニで薄汚くそまった醜い出っ歯があとかたもなく姿を消していた。

「龍太郎さん、素顔のお前はやっぱりいい男だねえ。いつものことだが、あたしゃアつくづく見ほれるよ」

「何をいいやがる、お徳。調子のいい女だ。その手で方々の男を口説くんだろう」

「あれ、冗談おいいでないよ。あたしがほかの男を口説いたって？　バカも休み休みおいいな。あたしがこんなに苦労してお前に実を見せているのが分からないのかい？」

「かくしたってだめだ。てめえ、あの加賀美三四郎というさんぴんにほれていやがるんだろう？」

「まあ。龍さんたら、何をいうんだい……」

「見ろ、どきっとしやアがった。さっき、あの若僧をじいっと見ていたてめえの目つきをただじゃアねえとにらんでいたんだ」

「なんだい！　そういうお前こそ、さっきあの小娘を見詰めていた様子がただじゃアなかったよ」

「お徳、あの娘は花屋勘兵衛の娘のお美年っていう女だな？」

「そうら！　語るに落ちるってそのことだ。紹介しもしない小娘の名前までちゃんと知ってやがる。浮気しやがったら、あたしゃただじゃおかないから……」

「そんなんじゃねえ。お美年に前に一度あったことがある。それを思い出していただけなんだ」

「何いってんだい！　前に一度会ったことがあるって？　さあ、お前さん、どこであったんだい？　どこであの娘といちゃついたんだよう」

と、わざとこわい顔をして、男のそばへにじりよってくる。

そのお徳のまぶたには、まだ三四郎の面影がこびりついていた。

以前はそばにいてさんざん親しくした仲だったのに、そのころはただ好いたらしい人だと思っていただけなのが、久しぶりであった今日、なぜこんなにむしゃくしゃするほど慕わしいのか自分でも分からない。

お美年という恋の強敵が現れたため、かくれていた思いが急に表へ現れ出てきたのであろうか……。

「ねえ、龍さん、浮気したら承知しないよ。もしも変なことしやがったら、お前もお美年も一緒に殺して、あたしも死んじまってやるから……」

と、わざと男にしなだれかかっていくのも、半分は男に三四郎のことを問いつめられてうろたえたその心の中を見すかされまいとする用心からであった。

「お徳、ごまかそうたって、その手にゃア乗ら

ねえぞ」
　龍角――ではない、龍太郎に変じたその男は、やにわにお徳の手をつかんで、己のひざへひき倒し、
「てめえ、もう三四郎と寝たか?」
　と、おっかぶさるように顔を近づけてじろっとにらんだ。ぞっとするような冷たい目だった。
「何をいうんだよ、あたしが三四郎さまとどうかしたんだろうだって?」
「抱かれて寝たかと聞いてるんだ」
「まあ、なんてことを! いやらしいことおいいでないよ。あたしにゃアお前というれっきとした亭主(ていしゅ)があるんじゃアないか」
　はね起きようとするお徳の体を仰向けに引き倒してしめつけてくる龍角の腕の力は、いよいよきびしかった。
「亭主に抱かれて、なぜ逃げようとするんだ。そうむきになって言いわけするのがくせえというもんだ」
「いい加減におしなね、男らしくもない……あたしゃアくどい男が大きらいなんだ。いくら好きで一緒になったお前さんでも、あまりしつこくいうと、だんだんきらいになってくるよ」
「そんなら、てめえにやってもらいてえことがある」
「なにッ? なんだい? 三四郎さまのことかえ?」
「そう顔色かえて驚くにゃアあたるめえ。あの野郎を殺してくれとは頼みゃアしねえ。殺す時にゃア、てめえに頼むまでもねえ、おれが自分でずばっとやらア」
「お、お前さん。まさか、三四郎さまに……変なことをする気じゃないだろうね?」
「ほれた男でないというなら、三四郎がどうなろうと顔色かえるにはあたるめえ」
「だって、お前、あのお方にはさんざんお世話になったんだよ。恩をあだで返しちゃア申し訳ないと思わないのかえ」

「いいってことよ。てめえに頼みてえのは、あの男の素姓だ。あいつの素姓を、それとなしに探ってもらいてえのだ」
「そんなことなら分かっているじゃアないか。三四郎さまは親御さんの代からの御浪人だとさ。親御さんは、奥州中村で六万石、相馬家のれっきとしたお納戸役だったってことだよ」
「そんな甘手にのるおれか。とうに調べてみたんだが、相馬藩に加賀美なにがしなどという家来は、近年一人もいなかったとよ」
「へえ……そりゃア変だねえ」
「舟友の主人夫婦が下にもおかぬ若様あつかいで永々居候させておくことから見たって、ただ者じゃアねえ」
「一体、お前さん、なんのために三四郎さまの素姓なんか……」
「つべこべいわずに、いわれたとおりすりゃいいんだ」
「そんな……がみがみいわないだって話アわかるよ」
「もう一つ、銀の小鈴だ」
「ああ、あの『花』という字を彫りつけてあるっていう? 一体全体、そんなものをどうして血眼になってさがしているんだい?」
「あの小鈴にゃア、金森家二万八千石にからまる二百年の長い秘密がかくされているんだ」
「へえ……」
「同じ小鈴が三つあるはずだ。一つはたしかに金森家に秘蔵されている」
「お前さんにたのまれて金森家へ御奉公にあがってから随分心がけて探したけれど、そんな小鈴のあることさえ知っている人はほとんどないようだね」
「そうだろう。容易なことじゃア分かるめえ。そのはずだ。金森家の当主になる男と、譜代の重役三、四の者がしっているだけだからな」
「それを、お前さん、どうして?」
「しってるのがふしぎだというのか……」

龍角はにやっと笑った。

「あの金森家にはな、遠い昔からふしぎないい伝えと習慣がつたわっているんだ。跡取りなる長男が生まれら、幼名をきまって花太郎とつけること……」

「へえ、花太郎って名前をねえ?」

「その長男をはじめとして、生まれる男の子には、殿様手ずから、守り袋に添えて、家伝の銀の小鈴を一つずつ腰にさげてやる、これがしきたりとなっている」

「なぜまた、そんなしきたりが出来たんだろうねえ?」

「くわしいことは知らねえが、金森家の先祖は江戸氏だということになっている」

「江戸氏って、それ、だれのこと?」

「徳川が江戸城をひらくずっと昔、この辺りに勢力をふるっていた豪族のことさ。その江戸氏の中に、江戸花太郎なにがしっていう大した傑物が出たらしい。それ以来だ、その男にあやかるように、生まれる子供に花太郎という名をつけ、家伝の小鈴を守り袋につけてやるようになったのは……」

「その小鈴が三つあるっていうんだね?」

「一つはたしかに金森家にあるはずだ」

「なんの役にたつのかしらないが、お前さんのいいつけだから、あたしゃアきっとその鈴のありかをつきとめるよ。なに、こうなりゃア意地だもの、きっとなんとかしてみせるから、まあ、少し気長にまっておくれよ」

「ところで、もう一つの小鈴のありかがわかったんだ」

「おや、そりゃアどこだえ?」

「お美年だ、勘兵衛の娘のお美年がたしかにもっているはずだ」

「へえ、あの小娘が?」

「お徳、すきがあったらそいつをこっちへ取り上げてくれめえか」

「いいともさ。さも殊勝らしいおしとやかな顔

をしやがって、三四郎さまのそばにばかりへばりついていやアがる。どうも虫の好かない娘っ子だもの、鼻をあかしてやったらせいせいするよ」

「恋敵はそんなに憎いか」

「あれッ、またそれをいうよ。お前さん、本当にしつこい」

と、龍角の腕からすりぬけて起き上がろうとするのを、

「お徳、しばらく見ねえうちに、お屋敷の水がしみこんで、おつに色っぽくなったじゃねえか……」

と、肩さきから伸びた指先が襟元(えりもと)をくぐってついと乳房の上へのびてきた。

「まあ、お前さんたら……」

「じっとしてろ」

「だって、まだ外は明るいんだよ」

「夫婦が何をしていようと、天道さまは文句はいわねえよ」

「あれッ……」

と、身もだえするお徳の腰から、するっと帯がとけておちた。

「お前さんてば! だれか来たらどうするんだよ」

「雨戸がしめてある。だれがくるものか」

花の散るように、赤い膚につくものの間にお徳は崩れた。

目を閉じた。体が燃えてくる。燃えてくるものの中に、なにかちらちら動いている。

お徳は自分を抱いている男の顔の向こうに、幻のように三四郎の微笑する顔をぼんやり見つめていた。

翌日、「舟友」では朝から大騒ぎであった。

いくらお忍びといっても、二万八千石の大名の若殿の船遊びである。酒肴(しゅこう)は金森家の内膳職(ないぜんしょく)が用意するし、もちろん、いくらなんでも町芸者のたぐいは御用命がない。手はかからないよ

うなものの、もし粗相でもあってはと、気苦労が大変であった。
　特に大型の屋形船二艘（にそう）が用意され、すみずみまでみがきあげるし、船頭も素姓のしれたえりぬきの腕ききが選ばれた。特に、御座船になる方には友三自身が乗り込んで指揮をとる。
　二艘の屋形船は、たそがれをまって浜町河岸へくだっていった。
　源之丞の一行がそこへ到着するのが六ツ半（七時）から五ツ（八時）までの間。そこから船に乗ってゆっくり大川をのぼりながら涼をとろうという予定である
　ことによると、「舟友」の桟橋（さんばし）へ船をつけ、座敷へあがって御休憩するよう、急な御下命があるかもしれないと、使いにきたお徳のふれこみであったから、残ったおきんたちも、その用意やら、ほかの客人を断るやらでてんてこ舞いのありさまであった。
　お美年も黙って見てはいられないから、一緒になってまめまめしく働いている。
「お美年ちゃん、すみませんね。助かります」
「いいえ、なんにも出来ないで……ただまごまごするばかりで、かえっておじゃまじゃございません？」
「なにさ、お美年ちゃん。あたしゃあなたを頼みに思ってるんですよ。もしも、殿さまがお座敷へおあがりあそばしたら、御接待役、よろしく頼みますよ」
「でも、おかみさん、ほかに女中さんが幾人もいらっしゃいますのに……」
「いくらいたって、人さまの前へ出たらろくに口もきけないがらがら者ばかりさ。あたし一人じゃどうしようもありゃアしない。ねえ、よろしく頼みますよ」
「でも、わたしなんか……」
「勘兵衛さんはもとお武家だったとかきいてるけれど、お美年ちゃんは器量も器量ながら、立ち居ふるまいから行儀作法まで、本当によくお

仕込みになったもんだって、うちの人だってつくづく感心しているんですよ。お美年ちゃんなら、殿さまの御接待役はおろかなこと、どんな立派なお武家さまの奥さまになったってちっとも恥ずかしいことがないくらい。そうそう、今のうちに着物でもきかえておいてくださいな。あたしの若いころ着たもので気持ちが悪いかもしれないけれど……」
　と、おきんは取っときの衣装を一重ね出してくる。
　お美年はいやともいえない羽目であった。
　これも世話になっているこの家へのお礼だと思い、いわれるまますなおに着物をきかえているそばから、
「まあ。お美年ちゃんたら、見れば見るほどきれい。本当に、どんな大家の何さまのところへお嫁さんにいったって、ちっとも恥ずかしくはないわねえ」
　と、おきんは吐息まじりにいった。
　お美年はぽうっと上気したように顔を赤くしている。
　どんな立派なお武家さまの奥さまになっても恥ずかしくない――とそういったおきんの言葉から、いつとはなしに、またふっと三四郎のことを思い出していたからだ。
　二艘の屋形船が「舟友」の桟橋（さんばし）についたのは、五ツ（八時）を大分回ったころであった。
　しかし、御休憩の御沙汰（ごさた）はなかったらしく、船からあがってきたのは、友三とお供の人数に加わっていたお徳の二人きりである。
「おきん、お美年さんはどうした？　どこにいなさるね？」
　と、友三がせきこんできいた。
「お殿さまの御接待役をひきうけてもらって、その用意をしているところさ。今、向こうでお化粧をしていなさるよ」
「そりゃア丁度よかった。源之丞さまが、是非ともお美年さんに会いたいから、船へ呼んでこ

いという仰せなんだ」
「そう、わざわざお殿さまがねえ。そりゃアまたありがたいお話だこと。お美年ちゃん、どんなに喜ぶだろう」
と、おきんはわがことのように喜んで、いそいそとお美年を呼んでくる。
「まあ、わたしが？」
お美年は浮かない顔だった。
「源之丞さまが、たってとおっしゃるんだ。お美年さん、御苦労だが頼みますぜ。なに、ちょっとお話のお相手でもすりゃアいいんだから……」
「でも、わたくし、とてもそのようなお席には……」
虫がしらせるのか、お美年はまゆを曇らせながらしりごみする。
「なにもそんなむずかしいことなんかありゃアしませんよ。こんながらっぱちのあたしだって御奉公がつとまっているくらいですもの」
と、お徳もそばから口を出して、
「勘兵衛親分さんも御関係のあるお屋敷筋ですもの。お美年さん、きっとその辺のお話でもあるんですよ。ありがたいじゃアありませんか。若殿さま直々のお名指しで、たってお会いしたいなんて、滅多にあることじゃアありませんよ」
「そうだ。きっと勘兵衛さんのことがお気にかかっておいでなんで、そのお話でもなさるおつもりなんだろう。日ごろごひいきにあずかっている金森さまへ、わしの面目も立つってものだ。お美年さん、ちょっとでいいんだ、顔を出しておくんなさい」
世話になっている友三にそうまでいわれては、お美年はいやだといいはるわけにもいかない。
「さあさあ、お美年さん。源之丞さまはお待ちかねだから……ほほほ、わたしはまるで恋のとりもち役みたい。割にあわないねえ」
と、お徳はおどけながら、いなやをいわせずお美年の手をとってせきたてた。

桟橋には二艘が横付けになっていた。
一艘には、若殿源之丞に老臣の惣兵衛、それにお小姓の一人のほかは、お徳をまぜて五、六人の侍女がのっているだけ。もう一艘の方には、警固の供回りがぎっしり乗っているらしい。
お美年はなぜともなく植え込み越しに離れの方をちらっと見やったが、三四郎はいるのかいないのか、火影もなしにしいんと静まりかえっていた。
お美年がせきたてられるままに船へのると、とたん、待っていたように、ついと流れの中へ滑り出た。
老臣や侍女たちにとりまかれ、源之丞は着流しのくつろいだ体をゆったりと脇息によせかけていた。
「美年か。先夜は世話をかけたのう」
と、きげんよく声をかけながら、その目はしげしげとお美年を見つめている。
絹行灯の明るい火影に近々と見るその顔は、病的なくらい青白くつり上がったまゆと、きゅっと一文字に結んだ薄いくちびるが、見るからに癇癖な性格を思わせた。
「先夜は、しらぬこととは申せ、失礼申し上げました。なにとぞお許しくださいますように……」
お美年は、浮かない気持ちを無理にひきたてながら、つとめて笑顔を作ってあいさつする。
「いや、なに、心きいたもてなし、うれしく思っている。ことに、あの折、そちのたててくれた茶はことのほかうまかった。のう、惣兵衛……」
と、わきへちらっと視線をむけ、
「市井の笑い話に、目黒のさんまとやらいうおかしな話があるそうじゃが、茶をのむなら谷中の花屋にかぎると、折にふれては笑い話も出たほどじゃ」
はっはっは……と笑いながら、その目はやっぱりお美年を見つめていた。
遠く近く、涼み船がすれちがっていく。

芸者をのせて陽気にさわいでいる囃子の音を流していく船もあるし、ひっそりと灯を暗くして流れにまかせてゆられていくいき筋らしい屋形船もある。
灯籠流しはうら盆の川施餓鬼にやるのがことの起こりだが、風流人がいるものとみえ、盆過ぎの今ごろになっても、地口や俳諧など書いた灯籠が、ほんのりと水へ火影をなげながら、船のそばを流れすぎていく。
しかし、源之丞はそんなものには大して興味もないようで、こわい物なしに育ってきた若殿らしく、無遠慮な目で真っ向からお美年をながめていた。
「美年、勘兵衛はどうしたか？ 先夜、屋敷のもどりになにやら思わぬ災難にあったときき、案じていたが、安否はしれたか？」
「ご心配をおかけいたし、申し訳なく存じます。案じてはおりますが、いまだに行方がしれませぬ」
「不憫にのう。いや、しかし心配はいらぬ。今、きびしく命じて行方をたずねさせているぞ。金森家の名誉にかけ、いかなる犠牲をはらってもかならずつれもどす。美年、心安うまかしておけ」
「お屋敷へご迷惑をおかけいたしましたのもおしかりなく、ありがたいお言葉に存じます」
「うむ、よいよい。事の起こりと申せばわが屋敷にある。これ、美年に杯をやれ」
「あのう、お言葉ではございますが、わたくし、不調法者でございまして……」
「よい、一献やれ」
「さあ、お美年さん。お受けするものでございますよ。お言葉にそむいては恐れ多うございます」
と、そばにひかえていたお徳が、とりすました顔で、無理におしつけるようにお美年の手へ酒杯をとらせた。
仕方なしに一杯のむと、

「うむ、見事。もう一杯やれ」
お徳が手加減なしに三杯四杯とつぐ。
酒に弱いお美年は、たちまち酔いを発して、最後の一杯をのむ時はさも苦しそうであった。
透きとおるように白い皮膚の下から、早くも酔いが浮いてきて、目の辺りのぽっと赤らんだのがいまさらのようになまめいて美しい。
源之丞の目はそのお美年の顔にまだくぎ付けになっていた。
「惣兵衛、似ているのう」
と、源之丞はお美年を見つめたままいった。飲めば飲むほど沈んでくる酒とみえ、いよいよ青白くさえてきた顔に、さすがに目だけが気品高く澄んでいる。
「鶴どのに似ている。そう思わんか？」
「仰せのとおり、他人のそら似とやら申しますか……」
「よう似ている。ふしぎなほど似ている」
「しかし、若。お鶴さまの気品お高いお美しさはたぐいないものでございます。何者にも似ようのないお美しさでございます」
「同じことじゃ。美年にはまた格別の美しさがある。その生きいきした命ある美しさは鶴どのにはない」
「場所柄もございます。お鶴さまのおうわさはなるべくおひかえくださいますように……」
「なぜわるい？ 鶴どのは鶴どの、美年は美年じゃ」
と吐きだすようにいって、なぜか源之丞はいらいらと杯を重ねた。
お美年は、先夜、花屋へお忍びでお成りのあった時にも、このお人が同じようにわたしを見つめて同じようなことを仰せられたが……と、その時のことを思い出しながら妙に重苦しいうっとうしさを感じていた。
見もしらないお鶴さまとやらに似ていようと似ていまいと、余計なお世話だと思う。露骨にじいっと見つめるその目つきがいやだった。

普通の相手なら、とうに啖呵の一つもきってしかりつけてやるのだが、相手が相手だと思うからじっと我慢している。

なぜだか、急に三四郎のことが思い出されてきた。

出がけに見ると、離れの灯が消えていたようだが、もうおやすみになったのであろうか。それとも、どこぞへお出かけになったのであろうか。

そういえば、今日は忙しさについまぎれて、昼御飯のお膳を運んだ時お目にかかっただけだったけれど……。

と、お美年のまぶたにはしきりに三四郎の幻が浮かんでは消え、消えてはまた浮かんでいた。

人目をはばかるためか、船の周囲にはすだれが深く垂れ回してあったが、お美年のそばにある一枚が風を入れるため半ばめくってある。

飲みなれない酒にほてったほおを冷やすためか、それとも、三四郎へのおもいが思わずその人のいる舟友の方をのぞかせたのか、お美年はなにげなくちらっと外へ目をやった。

船は中州へかかっていて、あたりには涼み船の影もとぎれたか、ひっそりと宵闇が流れを包んでいた。

と——

だしぬけであった。

しゅっ！

と、大気を切りさくように響いた鋭いその物音を、とっさに矢羽根の音と聞きとったのはお美年だけだったのであろうか。

瞬間、腰を浮かしたお美年のそでが火影の中に赤くひらめいたと思うと、かかげたすだれのすそをくぐって真一文字に飛んできた矢が、その白々とさえた小手先に、ぴしっ！　とたたかれて落ちた。

「くせ者じゃ！」

叫んで立ち上がったのは、惣兵衛とお徳とまったく同時だった。

惣兵衛の叫び声をきいて、うしろに従っていた警固の供回りをのせた屋形船はたちまち騒然と色めきたった。

「騒ぐなッ。矢を射かけたくせ者がいる。周囲に気を配るのだッ」

と、艫へ走り出た惣兵衛は、早口に叱咤しながら、しきりにあたりへ目を配った。

「船頭、怪しいものを見なかったか？　友三、あたりに船の影を見なんだか？」

「うっかりいたしておりました。よもや、こんなところで……と、油断しておりまして申しわけございません」

友三も、突然の出来事にがくぜんとしたらしく、あわてふためきながらやみのかなたへ目を凝らしていた。

「その先のあしのしげった陰辺りからだしぬけにこぎ出してまいりました猪牙らしい影をちらっと見ましたが、まさかと思って見すごしておりますうちに……ほかの船の影はございません。岸は遠うございますし……あいつに違いございません。あれ、御覧なさいまし、向こうへとぶようにこぎくだってまいります。間島さま、追いましょうか？」

「うぬッ、あの猪牙か……いや、待て。追ったとてもう間にあうまい。幸い、若殿におけがはなかった。それより、あたりへ目を配って、急いで浜町河岸へこぎもどせ」

「へえ、かしこまりました。おい、皆、お帰りだ。息のつづくかぎり精いっぱい力をこめてこげ」

と、友三も事の重大さに色を失ったように、われから先に棹をとった。

だれもかもがうろうろとあわてふためく中に、さすがにただ一人、源之丞だけは泰然として酒杯をあげている。

「美年、見事な手並みだのう。感じ入った」

と、お美年をみつめたまま、

「そちはよほど武芸に心得があるな？」

「滅相もございませぬ」

「いや、そうでない。ことわざにも暗夜のつぶては防げぬというが、だしぬけに射かけてきた矢を身をかわして防ぐさえ容易ならぬに、とっさに払いおとした手練は並々ならぬものじゃ。弓をやったか？　それとも小太刀か？」
「いいえ、もう、そのような……」
「申し上げます。お美年さんは父御譲りに手裏剣の術に達しておいでと伺っております」
　と、そばからお徳が口をだす。
「ふうむ。手裏剣か……珍しいのう」
「お恥ずかしゅうございます」
「皆の者、見い。町家に育った小娘でさえ、あれほどの心得がある。矢は間違いなくわしの胸板をねらって飛んできたのだぞ。もし、美年のとっさの働きがなくば、矢はわしの胸板をつらぬいていたかもしれん」
　お美年のほかにはまるで頼むに足る者が一人もいないというような言い方であった。
「礼を申さねばならぬ。いわば、美年はわしの命の恩人じゃ」
「まあ、もったいのうございます。そのようなこと……」
　お美年はほめられても少しもうれしいとは思わない。それよりも、船が帰路についたと知って、急にうきうきと胸が弾んできたのは、もうすぐ三四郎のそばへもどれると思うからであった。
「美年、礼に何かとらせたい。望みはないか」
「いいえ、わたくしもう……ただ、父の行方が一日も早く分かりますように、ただそれだけが……」
「よい、そのことは心得ている。そのほかに、なにかそちのために報いたい。どうじゃ、美年。そちの一身をわしに預ける気はないか？」
　そういって、源之丞はじいっとお美年を見つめている。
「……」
　お美年は、その意味がよくのみこめず、怪し

むように源之丞を見上げた。
「美年、うわさにきいたが、花屋は放火にかかって焼けたそうじゃな？」
「はい……」
「かさねがさねふびんにのう。それもこれも、どうやら金森家のことにかかわりがあるように思われて心苦しい。頼るべき身寄りもないのか？」
「ただいま『舟友』へごやっかいになっておりまする」
「そのことは聞いた。どうじゃ、しばらくわしの屋敷に参っておらぬか？　勘兵衛の行方も必死にたずねている。焼けた家も新たに建ててとらせたい。それまで金森家に参っておれ。どうじゃ？」
「まあ……」
　と、お美年は当惑の色をありありとみせた。
「そのようなこと……ありがたいお言葉にはございますが、あまり果報にすぎまして……滅相もございませぬ」
「遠慮はいらん。わしの礼と思ってくれてもよい」
「でも、わたくしのような者、とても御大家さまにご奉公出来るような者ではございませぬ」
「ゆかしいことをいうのう。そちに出来なくて、だれが金森家へ奉公がかなうか。いや、奉公せいと申すのではない。客人として迎える」
「それでは、わたくし、ますます心苦しくて……」
「よいというに……のう、美年、承知せい。是非、わしにまかせてくれ」
　わしにまかせてくれとまでいわれ、お美年はすげなくはねつける言葉をしらなかった。
「美年、異存があるのか？　わしの申し条に不足があるのか？」
「い、いえ、滅相もございませぬ」
「では、承知してくれるな？」
「でも、わたくしの一存にもなりかねることで

ございますから……」
「ふうむ。勘兵衛がおらぬに、まだだれぞ、相談し、許しを請わねばならぬ者がいると申すのか」
「は、はい……あのう……」
「よい。即答せいとはいわぬ。一両日中にあらためて使いをつかわす。惣兵衛、よきにとりはからえ……」
と、源之丞はゆっくりと惣兵衛の方をふりかえった。
惣兵衛は、さっきからお美年が払いおとした矢をとってしげしげとみていたが、その時、黙ってそっと源之丞の前へさしだし、矢羽根の一点を指で示した。
真っ白な矢羽根の一部に、何か文字らしいものが一つ書いてある。
「花……」
と、源之丞は口の中で読んで、いまさらのように惣兵衛と目を見合わせた。
「ふしぎでございます。今宵のお船遊びは極秘のうちに取り扱いましたものを……まして、深くすだれをさげたこの船を、どうして若の御座船と見極めつけましたか。痴れ者め」
惣兵衛はうめくようにいいながら、じろっとあたりを見回した。
浜町河岸へ帰りを急ぐ船を、お美年を送るためわざわざ「舟友」の桟橋へ着けさせたのもよくよくのことながら、桟橋へあがるお美年を源之丞はすだれをかかげてじいっと見送っていた。
お美年は、あまり気のすすまない役目をやっとおえ、三四郎の身近く帰ってきたということがうれしくて、ただもうそわそわしているばかり、源之丞のことなどまるで気がつかない。
桟橋まで送ってきたお徳が、
「ようございますか、お美年さん。一両日中に、またわたしがここへ伺います。それまでに、きっと決心していてくださいましよ。源之丞さま

があれほど仰せくださるなんて、よくよくのことですもの……それも、客人としてお迎えくださるなんて、まあ、そんな結構なお話めったにあるもんじゃありません。折角の御厚意にもしそむいたりなすったら、それこそ勘兵衛親分さんのお身にまでどんなお怒りが降りかかってくることやら……ようござんすね。きっと、心をきめていてくださいましよ」
と、脅し半分にくどくどとささやいたが、その言葉さえお美年は半ばうわの空できいていた。
というよりも、金森家に居候するなんててんから頭になかったといった方がいいであろう。
花屋が焼けたって、当座の居どころに困るほど狭い世渡りはしていないという誇りがあった。
十日や二十日、喜んで世話してくれる家はいくらだってある。それを、二つ返事でうかうかとこの「舟友」へきてしまったのも、その時は自分で自分の気持ちがよく分からなかったが、今となってみれば、三四郎のせいだったと、考えるのも恥ずかしいくらいはっきり分かっていた。
三四郎に優しくすすめられ、その人と一緒に暮らせる家だからと分かっていればこそ、あつかましくもこの家の世話になっているけれど、何を無理して金森家になんぞ行くものかと、お美年はもうちゃんと腹をきめていた。
それよりも、三四郎さまはどうなすっておいでだろう?
早くおそばへ行きたいと、歩いていく足も地につかないようすだった。
母屋へもどっておきんに報告する間ももどかしげである。それを、おきんがくどくどと礼をいったり、疲れたでしょうね、さあお茶を入れるからなどと、ねんごろにねぎらってくれるのさえ迷惑だった。
今宵にかぎって、なぜこんなにも三四郎が恋しいのであろうか?

日一日といえないほど、三四郎への思慕が火のように燃えたってきたのも事実である。今日半日、三四郎の顔を見なかったというのも一つの理由であろう。

しかし、その時は、まだお美年自身気づいていない別の理由があったはずである。

それは、源之丞のじいっとお美年を見つめるあの目だった。優しく話しかけてくるあの声であった。お美年は無意識のうち、それらから源之丞の心の動きを敏感に感じとっていたに違いない。

いちずに思いつめた娘心は源之丞の心の動きに本能的な嫌悪(けんお)を感じ、それがことさら三四郎への思いをひたむきにかき立てていたのだと、あとになってはたと思いあたることがあった。

お美年はやっと離れへかけつけた。

三四郎は真っ暗な部屋の中に黙然と座っていた。

お美年が行灯(あんどん)に灯を入れると、三四郎ははじめて気づいたように、

「やあ、お美年さんか……」

と、顔をふりむけた。

いつもと変わりない温かい微笑をふくんだ顔だが、しかし、気のせいかさえない顔の色である。

昨日の観音様の帰り道以来、どうも三四郎の様子がおかしいと、お美年は気になってならない。

「金森家の若殿さまのお船遊びだったそうではないか。御苦労だったなア、お美年さん。無事にすんだのかな？」

「はい、ただいまお帰りあそばしましてございます」

「随分のんきな若さまもいるものだ。やせても枯れても大名とあるからは、めったに大川の船遊びなぞ軽々しく出来るものでないのに……ことによると、船遊びは表向きの口実で、その実、お美年さんの顔が見たかったのではないかな？」

ははは……と、三四郎は屈託なげにいったが、お美年はどきっとしたように目を伏せた。

始めから終わりまで、ほとんどじいっと自分の方へくぎづけになっていた源之丞の視線を思い出したからである。

「お美年さん。あててみようか」

「まあ、何をでございます？」

「若殿がなんといったか、そのことさ。美年、そちはよう似ているな、鶴どのにそっくりじゃ……」

まねしていって、三四郎はまた、ははは……と笑った。

そのまねのしかたのおかしさに、お美年はつりこまれたように顔を真っ赤にしてそで口でくちびるをおさえたが、しかし、それも一瞬のことであった。

「まあ、三四郎さま。どうしてそれを？」

「図星をあてられて、びっくりしたか？　なあに、お美年さん。わしもお鶴さまという人を見たことがあるのでな。通りがかりの行列を遠くの方からちらちらっと見て、それでも印象にのこるくらいだから、よほど美しいお人であったのだな。それ、あの晩……お美年さんにはじめてあった時、おや？　とわしでさえお鶴さまという人の顔を思い出したくらいだから、許婚(いいなずけ)でおいでになる若殿なら、さぞため息まじりでそう仰せられたであろうと推量したわけさ。わざわざ船遊びにかこつけてお美年さんに会いにくるくらいだから、よほどお気に召したのであろうなア、お美年さんが……」

「そのようなこと……まさか、わたくしなんかを……お鶴さまとおっしゃるお方さまもいらっしゃいますのに……」

「さあ、どうかなア。お美年さん、ここへ来てごらん」

と、三四郎は裏手の窓際へお美年をつれていく。

「わしはここから見ていたのだ。お美年さんが手をとられて船へ乗せられるところから、お美年さんが酒杯を頂いて飲んでいる姿なんかを……なんだか変な気持ちであった。お美年さんが、そのまま行ってしまって、もう二度とここへは帰ってこないような気がしてのう」
「まあ、三四郎さま、なぜそのようなことを……わたくし、どこへも参りはいたしません。そ、そんな、金森様のお屋敷へだなんて、だれが……」
と、お美年は急に泣きそうな顔になってせきこんだ。
「お美年さんはお屋敷奉公はきらいなのか？　お徳のような女でさえ、切にと願って奉公にあがった、その金森家に行くことが好かんのか？」
「いやでございます。わたくしに、堅苦しいお屋敷勤めなど出来ません」
「たって来てくれと、若殿から所望があってもか？」
「いやです。いやでございます！」
と、だだっ子のように首をふりながら、お美年は力をこめて叫ぶようにいった。
「いやだといっても、それでもなお来てくれとひざづめ談判に来られてもか？」
「まあ、三四郎さま。なぜ、そのようなことを……」
と、まゆをひそめながらちらっと三四郎を見上げて、
「わたくしをおなぶりになるのでございましょう。そのようなことばかりおっしゃいまして……」
「いや、わしには源之丞という人の気持ちがわかるような気がするのでな。うわさにきくところでは、お鶴さまという許婚の方との間がうまくいかんのだそうだ。恋しい人にそむかれていらだつ気持ちの時に、その人と生き写しのお美年さんを見たら、丁度、渇した時に水を前にした気持ちであろう。お美年さんをそばにおいて寂しい心を慰めたいと思うのは当然のなりゆき

であろうな」
「それでは、わたくしがお鶴さまとおっしゃるお方の身代わりになるのでございますか。おお、いや！　若殿さまがお寂しかろうと、そんなことわたくしの知ったことではございません」
と、お美年はしらずしらず窓に近より、三四郎に肩をよせていた。
話のなりゆきと火影の暗さがついそうしたのであろうが、三四郎に対してこんなになれなれしく甘えた口のきき方をしたことはかつてない。
「お美年さんはお鶴さまに似ている上に、もっと美しくてもっと優しい。若殿がそば近くおいて心の慰めにしたいといってもふしぎはない」
「そのようなお話、もうおやめになって……」
「賭けてもいいと思うな。金森家からきっとお美年さんを迎えにくる」
「分かりました！　三四郎さまは、美年が金森家へあがることを望んでおいでなのでございましょう？」
「いや、そんなことはないが……」
「いいえ、そうでございます。きっとそうに違いございません。わたくしがここにいてはおじゃまなのでございましょう。わたくしがおきらいなのでございます」
「お美年さん、それは違う、それは……」
「いいえ、いいえ、そうに違いございません。それだから、いやだと申し上げておりますのに、そのようなことを……」
と、お美年は涙声でいった。がんぜない子供のように肩をゆすぶって訴える。
何がお美年をそんなに大胆にしたのか。甘えているのだ。ゆさぶる肩が三四郎の胸に触れている。
そういえば、いつもは冷淡すぎるくらい淡泊な三四郎が、妙にそのことにこだわってくどくどとくりかえすのもおかしいといえる。
「お美年さん……」

三四郎の手がお美年の肩を抱いた。三四郎の手がお美年の体にふれたのはこれが最初のことであった。

お美年の手足ががくがくっと震えた。

「お徳の話では、舟友にお美年さんがいるといううわさをきいたとたん、金森家の若殿が船遊びのことを言い出されたそうだ。お美年さんを屋敷へひきとってやりたいがと、その時から重役方に漏らしていたそうだ」

「そんなこと、わたくしの知ったことではございません」

「金森家から迎えにきてもことわれるか?」

「そんなお屋敷へ行くのはいやでございます。けれど、ここにはおりたくてもおられません。おじゃまでございましょうから出てまいります」

「だれも出ていけとはいっていない」

「金森さまへでもどこへでも、わたくし行ってしまいます。三四郎さまのおじゃまになるのでは、出ていくほかはございません」

「じゃまだとだれがいった?」

「でも……でも、三四郎さまは……」

と、甘えてすねた声が涙声になっている。

「お美年さん、分かったか……わしはお美年さんが金森家へ行くことになにか不安でならなかったのだ。何かよくないことがおこるのではないかと気になってならぬ。お美年さんをそばにおいて、じいっとこの目で見守っていなくては、なにか安心出来ない気がしてならないのだ」

「金森さまなどへちっとも行きたくございません。たとえどのようなお迎えをうけてもいやでございます」

「分かった。分かったからそれでよい。わしもお美年さんにここにいてもらいたいのだ。お美年さんのためばかりではない。わしも……その方がうれしい気がするのだ。お美年さんがここにいてくれると、なぜだか心のやすまる気持ちがする。不快なことも、悲しいことも、何もかもわすれてやすらかな気持ちでいられる。親も

なければ身よりもなく、世事に追われながらただうかうかとすごしていたわしにとって、この両三日ほど心やすらかにくつろいだ日はかつてない。お美年さんがそばにいてくれたからだ」

三四郎の手はお美年の肩に触れている。その手の中で、お美年はわなわな震えていた。

いつも、野末のすぎの木のように独り高くそびえていて、とりつく島もない感じであった三四郎が、珍しくも心の中にあるものを吐き出した。

淡々と語るその言葉が、お美年の胸には雷鳴のように響く。今まで手のとどかぬ高いところにいた人が、すぐ鼻先にまでおりてきた感じだ。

今だ……と思う。

好きです! 好きです! あなたさまが死ぬほど好きです……。

と、たった一言いってしまえばそれでいい。

そう思いながら、お美年はただわなわな震えていた。

一度、ひしとすがりついてしまえばいい。その人の手や胸がすぐ目の前にある。今だ……と思いながら、お美年は情けないくらい意気地なく、ただ震えていた。

「えへん……」

と、突然、やみの向こうから、わざとらしい聞こえよがしのせき払いが聞こえてきた。

「やあ、これは三四郎さま。おや、お美年ちゃんもそこにいらしたので……へへへ、どうもむし暑い晩でございますねえ」

と、庭先の植え込みからぬうっと出てきたのは仙太であった。

「お美年ちゃん、探していたんでさ、ちょっと来ておくんなさい。用事があるんです」

お美年を物陰へさそい出した仙太は、

「ねえ、お美年ちゃん。三四郎だんなはどんな様子でしたい? 変なそぶりはありませんか?」

と、声をひそめて聞く。

「なにさ、変なそぶりだなんて……」

と、とんだじゃまをされて、お美年は腹立ちまぎれにつんつんしていった。

「変なそぶりといったって、別にだんながお美年ちゃんを口説いていたのなんのってことじゃアねえんです」

「なんだって？　三四郎さまが何をなすったって？　もう一度いってごらん。変な口をきくと承知しないよ」

「へへへ……お腹が立ったらあやまりますがね」

「仙太。このごろお前は大体おかしいよ。三四郎さまっていうと妙な目つきをしたりして……」

「妙な目つきもしましょうさ。あのだんなはただのねずみじゃアねえと、ちゃんとお断りしておいたとおりだ。あっしゃアね、この家へ来てから、間がなひまがな、だんなのすることを陰からじっとこの目で見ていたんでさ」

と、仙太はじろっと離れの方を横目で見た。

「だんなは、いましがた、離れで何をなさっていましたね？」

「灯の消えたお部屋で、ぽつんとお一人、何か考えごとをなすっていらしたよ。それがどうかしたってのかい？」

「そうだろう。しらばっくれて、そんななにげねえふりをしていたんだ。きまってらア」

「おや、妙なことをおいいじゃないか？」

「お美年ちゃん、あっしゃアちゃんと見ていたんだ。この離れにも別の桟橋があって、いつも小舟がつないである。さっきね、金森様の御座船が桟橋を出てこぎ出すと、間をおいて、だんながたった一人、小舟にのって、そっと御座船のあとをつけてこぎ出していきましたぜ」

「えっ、なんだって？」

「そうら、お美年ちゃんだって驚いたでしょうが……」

「本当かい、仙太？　たしかな話なんだろうね」

「あっしゃアけちな三下野郎だが、うそととうがんは生まれつき大きらいなんでさ。さて、帰

ってくる時も御座船より一足早かったね。なにげないふりをして、さっと離れへ入っちまってね。灯を消したのは、出かける前でさ。人目につかねえ用心だろうが、この仙太は盲じゃねえ」

「……」

「御座船が中州にかかったころ、大変なことがあったんですってね？　友三親方が、これは極秘のことだが、てめえは勘兵衛さんの身内でこの事件にかかわりあいがある、参考のため話しておくがって、たったいましがたそっと耳打ちしてくださったんですが、若殿さまをめがけて矢を射かけたやつがあったってねえ」

「お、お前、まさか、三四郎さまがそのようなことを……まさか、お前そんなこと疑っておいでじゃないだろうね？」

「あっしゃア何もいっていませんよ。ただ、だんなが御座船のあとをたった一人でこっそりつけていったのを見たといっているだけなんでさ。友三親方の話じゃア、なんでもその矢羽根に『花』という字がかいてあったんですって？」

「あのお方じゃアない。三四郎さまじゃアありません。あの方、そ、そんなことを……そんなこと絶対に！」

「絶対になかったとはいいきれませんぜ」

仙太は吐き出すようにいった。

「三四郎さんが源之丞さまの御座船のあとをこっそりつけていきなすったことはたしかなんです。しかも、聞くところによると、源之丞さまを殺そうとして矢を射かけてきた野郎は、中州の向こうのあしの茂みにたった一人でこっそり舟をかくしていたそうで、ほかには一つも舟の影はなかったってねえ……」

「お前、まるで三四郎さまがその下手人のようにおいいじゃないか。そんなことありません。絶対にそんなこと！」

「じゃあ、お美年ちゃん、三四郎さんに聞いてごらんなさいまし。御座船をつけていったかどうか、行ったとしたらなんの目的であったのか

……まさか、夕涼みについふらふらと……なんて見えすいた言いわけじゃアすみますめえ」
「仙太、やめて……もう、そんな話、聞きたくないよ」
「ついでだから話しときますが、三四郎って人には、まだまだ疑わしい節がたんとあるんだ」
「後生だからやめておくれってば……」
「聞きたくなけりゃ耳をふさいでおいでなさいまし」
と、仙太は横目でお美年をにらんでいる。
勘兵衛の行方不明という不幸をよそにして、一番しっかりしてくれなくてはならないお美年が、それも日ごろは男を男とも思わない勝ち気な性分なのに、この家へ来てからなにかぼうっと魂がぬけさった人のようにたよりない。それもこれも三四郎のためだと思うから、余計気にくわないらしい。
「お美年ちゃん、三四郎さんが、ゆうべ皆が寝しずまってから、こっそり離れをぬけ出していって、明け方ごろにやっともどってきたことを御存じですかい？」
「え？　なんだって？」
「そうだろう。だれも気がつきゃしめえが、あっしだけはその手は食わねえ。ずうっと跡をつけて残らず見てきたんだ」
「おかしいねえ。そんなこと、何もおっしゃらなかったけれど……」
「言うはずがありませんや。言えねえ筋合いでさ」
と、仙太は薄笑いして、
「まず、出かけていったのは上野車坂、あの寺町のはずれにある植甚という植木屋でさア。そこには、以前、お高っていうばあさんが奉公していたらしい。お高ですぜ」
「お高って、お前、あの花太郎さまの？」
「そうらしいねえ。花太郎さまの地下道でむごたらしい殺され方をしたばあさんのことに違いありません。くわしいことは分からねえが、な

んでもお高ってばあさんの身寄りの者のことを植甚に尋ねていましたぜ。身寄りのものの居どころがわかったら知らせてくれと頼んでいましたがね。ゆうべがはじめてではなく、植甚へはもう何度も行って顔見知りらしい口のきき方でしたぜ」
「まあ。そんなことがあったのかえ？」
「それから三四郎さんがどこへ行ったと思いなさる？　驚いちゃいけませんぜ。花太郎さまだ。花太郎地蔵の、お美年ちゃんが見つけなすったあの地下道へ……」
「ええっ？」
「こっそり中に入ったきり、何をしてるのか長いこと出てきませんでしたぜ」
「……」
唖然として息をのんだお美年の顔を、仙太はじろっとにらみながら、声をはげましていった。
「お美年ちゃん、しっかりしてくれなくちゃア困るなア」

お鶴さま

翌朝、お徳が金森家の使いとして、また舟友にやってきた。
昨夜の労をねぎらって、友三はじめ船頭の末にいたるまで、行きとどいた過分な下されものがある。
「おれア、あんなとんでもねえ出来事があったんで、どうなることかと案じていたんだ。すんでのところで若殿さまに矢があたるとこだったんだ。どんなおとがめがあるかと思って、内々覚悟をきめていたのに、こんな過分な下されものがあるなんて……お徳、お怒りの御様子はなかったのか？」
と、友三が憂い顔できいた。
「ええ、そりゃアもう大変でございますよ。若殿さまはもとよりですけれど、御重役など血相お変えになりましてね。きびしく詮議せよと、きついお言葉がありました」

「そうだろうなア。ただじゃアすむめえと思っていたのさ」
「でも、親方さん、船遊びは至極お気に召された御様子で、だからこそ、こんな下されものがあったのです。というのも、つまりは……お美年さんのお陰ですよ」
と、お徳は意味ありげにお美年の方を見た。
「よっぽどお美年さんがお気に召したのですねえ。その上、矢面にたって危ないところを防いでくれた格別の働きに、望みどおりのごほうびを下されるそうです。そのためにも、是非お屋敷へお連れするようにって、若殿さま直々のお言葉でした。どう、お美年さん。御決心がつきましたか?」
「決心……といいますと……なんのことでございましょうか?」
お美年は、ありありとまゆをよせながら、迷惑そうにいった。
「ほほほ……分かってるじゃアありませんか? お屋敷へあがることですよ」
「それでしたら、どうぞお断り申し上げて下さいまし」
「ごほうびを下さるとおっしゃるのに、ちょっとそれをちょうだいするだけでもいいから、行ってくださいよ。それでないと、わたし困ってしまいます」
「ごほうびだなんて、なんにも望みはございません。よろしくお礼申し上げてくださいまし」
「そうはいきませんよ」
「なんとおっしゃられても……わたくし、お屋敷へは……」
「お美年さん、ちょっと……」
と、お徳は意地のわるい目つきでお美年を物陰へさしまねいた。
「あなた、どうしても若殿さまのお言葉におそむきになるつもり?」
「でも、いやなものを無理に……」
「では、聞きますけれど、昨夜、御座船が出た

あとから、一隻の小舟がつけてきたのを見た人があるんですってね。なんでも、この家の離れの桟橋からその舟はこぎだしたらしいって……そんなうわさ、お聞きになりまして?」
お美年は、あっ! と思わず叫ぶところだった。
畜生ッ! 仙太のやつ、しゃべったな!
と、胸の中で歯ぎしりしながら、みるみるその顔は青白んでいく。
その顔を、お徳は刺すような目つきでじろっと見やった。
「殺気だっている金森さまの御家中へそんなうわさがちらりとでも聞こえたら、一体どうなるとお思いになりまして?」
「……」
「お美年さん、断っておきますけど、わたしは、そんなうわさ、死んだってしゃべりゃアしませんよ。第一、そんなこと信じたくありませんものね。でも、うわさっていうものが、いつどこから、どうやって漏れたりひろがったりするか……わたし、それを心配してるんですよ」
と、お徳はまるで針で刺すようにちくりちくりという。
「一度、そんなうわさが金森家に聞こえたら……さあ、どういうことになるかしら? そうした時に、若殿さまのごきげんがよろしいか悪いかで天と地ほどの違いの出来ること、いわないだってお分かりでしょう? ここは一つ、お美年さんによく考えていただきたいもんですわね。若殿さまはあれほどお美年さんがお気に召しているんですから、もしあなたが気軽くお屋敷へいってくだすって、若殿さまのごきげんさえとりむすんでくだされば、よしんばそんなうわさがお耳に入ったとて、そこはそれ、どうともうまくいくでしょう。物は考えようっていいますから、同じ灰色の紙を見てもそう思って見れば白くも見えるし、また黒くも見えるものですもの……若殿さまのごきげんを損じたら……

わたし、それが心配でならないんです。お美年さん、お分かり?」
　お美年はくちびるをかんでうつむいていた。
　お徳がこんなことまでもち出してくどくいう腹の中は、源之丞のきげんを損じまいというよりは、自分を三四郎のそばからむりやりひきはなしてしまおうとする魂胆だとしれている。
　口では死んでもそんなうわさはしゃべりはしないというけれど、時と場合によっては、面当てに何をするかしれた人ではないと、お美年の胸が震えた。
「もしものことがあったら、そのお人のお身に大変なことがふりかかるばかりでなく、『舟友』にだってどんな難儀がかかってくるかしれやしません。ねえ、ここのところは、すなおにわたしの顔を立ててくださいましょ。源之丞さまはじりじりしていらっしゃるんです。今の話の妙なうわさがぱっとひろがってからではおそいんですよ」
　と、お徳はしつこくくりかえして、
「とにかく、明日もう一度出直してきますけれど、その時までにはきっと決心していてくださいましよ。若殿さまには、明日は大丈夫お連れしますって……よろしく申し上げておきますからね。いいですか。きっとですよ」
　と、くぎをさすようにいいおいてやっと帰っていった。
　だれがその手にのるものか、とお美年は内心じりじり腹を立てていた。
　昨夜、いつにもなく親しげにしみじみ話してくれた三四郎の一語一語がまだ耳の底に残っている。はっきりそうとはおっしゃらなかったが、わたしに好意をもっていてくださることは間違いないのだと信じている。
　肩に触れたその人の指先の感触もありありと皮膚にやきついていて、思い出すたびに切ないくらい体がふるえた。
　もう死んでもおそばをはなれないのだ。だれ

が金森家なんかへ行くものか……。
　と、そう舌打ちする心のすみには、やっぱり、いちまつの不安と疑惑がわだかまっていた。
　三四郎という人の正体がまだよく分からない。その素姓と行動には、なにかとんでもない秘密がかくれているのではなかろうか……。
　お徳の話を残らず三四郎に打ち明けて相談してみようかとも思ったが、いざとなるとやっぱりためらわれた。
　もし、源之丞に矢を射かけた犯人が本当に三四郎であると分かったらどうしよう!
　と、それを考えただけで目の前が真っ暗になったような気持ちがする。
　仙太から話にきいた三四郎の奇妙な行動から思いめぐらしてみて、ひょっとするとその不安が事実なのかもしれないと、お美年の恐れはますます深くなるばかりであった。
　もしも金森家へ行くことをこばみつづけて若殿さまのごきげんを損じたら、お徳のいうとおり、本当に三四郎の身にとんでもないことが降りかかってくるのではあるまいか。それくらいなら、いっそ死んだ気で金森家へあがった方がいいのではなかろうかなどと、日ごろのお美年らしくもなく、くよくよと気弱な悲しいことを考えたりした。
　どうしていいのか分からない。時のたつのも忘れたように、ぼんやりとりとめもないことばかり案じすごしていた。
　ひる少し過ぎのことである。
　お美年は近所まで用足しに出た。とある路地の角までくると、
「もし……そこへおいでになるお方……」
　と、突然物陰から呼びとめられた。
　一目で武家屋敷の中間としれる風采（ふうさい）の男であった。
「あなたは今、そこの船宿から出てきましたね?」

「はい。わたくし、舟友の者ですが……」
と、お美年はけげんそうに相手を見た。
「つかぬことをお尋ねするようだが、あの船宿に、そうさなア……お年のころは二十四、五、がっちりしたお体つきのお武家さまがいらっしゃいませんか?」
と、声をひそめてきく。
「お客さまですか?」
「いいや、ずうっと永い間、寄宿していらっしゃるそうで……お名前は、加賀美三四郎さまとおっしゃるんですがねえ」
「ああ、三四郎さまでしたら……」
と思わずいって、お美年は何かはっとしたように目をみはった。
その中間の背後にたっていたもう一人の武家屋敷の御老女風の女の顔に、なにか見覚えのあることに気づいたからである。
「じゃあ、三四郎さまはあの船宿にいらっしゃるのですね」
と、中間は合点して、あわてて背後をふり向いた。
「やっぱりそうでした。市の瀬さま、やっと分かりました。あの船宿でございました」
「おう。そうでしたか。ありがたい。これで肩の重荷がやっとおりました」
とうなずきあった二人は、お美年の方へ会釈して、そのまま路地の向こうへ足早に立ち去っていってしまった。
そのころになって、その御老女が先日三四郎と観世音へ参詣のもどり道でばったり出会ったその時の人であることに、お美年はやっと思いあたった。
——そうだ。あの時、あの人はたしか市の瀬と名乗ったはずであった。三四郎さまは、それと気づくと、物もいわず逃げ出してしまわれたけれど……一体、あれはどういうお方なのであろう?
なぜか、ただでも重苦しくとざしていたお美

年の胸に、また一つ不安なものが覆いかぶさってきたようである。
この季節の船宿にとっては、灯ともしごろがかき入れ時だ。流れへ舟をうかべて涼を取ろうという客も、吉原へくり出していこうという粋人も、時刻をはかったようにどっと押しかけてくる。
いっときはねこの手もかりたいような忙しさだが、それがひと区切りついてしまうと、とたん、うそのように静かになる。
若い者もあらかた客のお供をして川へ出てしまったらしく、しいんとした「舟友」の店先では、友三がただ一人ぽつんと座って帳面づけをしていた。
すると、丁度その時、まるで人影の絶えるのをねらってでもいたように、一人の女が音もなくすうっと店先に入ってきた。友三でさえ声をかけられるまで気がつかなかったくらい忍びやかな気配であった。
「失礼ながら、ちと物をおたずね申しとうございますが……」
と、慇懃に小腰をかがめながらいう。
こんな店にはおよそ縁のない武家屋敷の御老女風のその人を、友三は、おやッ? というように見上げながら、金森家のお使いならお徳が来そうなものだのに、といぶかった。
「あなたは御当家の御主人でいらっしゃいましょうか?」
「へえ、友三はわたくしでございますが、何か御用でも?」
「では、内々でお尋ね申し上げとうございますが、御当家に加賀美三四郎さまとおっしゃるお方さまがおいでと承知して伺いました。御在宅でいらっしゃいましょうか?」
「ああ、三四郎さまでしたら、たしかに御在宅でございますよ。三四郎さまに何か御用でも?」
「では、折り入ってお願い申しとうございます。

市の瀬と申す者がお目通り申し上げたいと申し、参ったと、さようお伝え願えませぬか」

「市の瀬さまでございますな？　では、ちょっとお待ちくださいまし。御都合をお伺いしてまいりますから……」

「あ、もし、ちょっと……なにとぞ御内々に……勝手ながら、なるべくほかの方に知れませぬようお取り次ぎ願いとうございます」

と、老女は声をひそめて、

「実は、先日、浅草観世音御境内でちらとお姿をお見かけ申し上げましてから、たしかにこの辺りにお住まいのことと存じ、それ以来、所々方々をさんざんお探し申し上げ、やっとこれまで参りましたと、さようお申し添えくださいますように……是非是非、まげてお目通り願いとうございます。お目通り願えぬうちは、このまま立ちもどることもなりかねますと、さよう申しておりましたと、どうぞ、くれぐれもお申し添えくださいませ」

言葉は至極物静かだが、思いつめるそのひとみがすがりつくように友三を見つめていた。

友三は、何事かと怪しみながらも、離れへとんでいって、かくかくと伝える。

「なに、市の瀬？」

と、三四郎はとたん露骨にまゆをよせた。

「とうとう来たか。困ったやつだのう……」

「だんな、ありゃア一体どうしたお方ですえ？　会えないうちはてこでも帰らないと申しておりますぜ」

「すまんが、なんとかうまく追いかえしてくれ。おらんといって断ってくれ」

「そりゃアいけませんや。たしかにおいでになると返事をしてしまったんで……とてものことに帰りゃアしませんぜ、あの様子では……」

「友三、困る。会いたくないのだ。なんとかうまく追いかえしてくれんか」

「なぜ、そんなにお困りになるんです？」

「あの女に借金があるのだ」

「冗談はよしましょうや」

と、友三は苦笑いして、

「あんなに思いつめているんです。ちょっとでもいいや、会っておあげなさいまし」

「どうしても会わねばならないか？」

「あの様子じゃアてこでも動きませんぜ」

「観世音境内でぱったり出会ってまずいことをしたと思ったが、まさかこんなに早くかぎつけてくるとは思っていなかった」

と、三四郎は浮かない顔をして、なにか嘆じるようにそういったが、

「仕方がない。とにかく会ってみよう。通してくれ」

と、しぶしぶいいながら、やっとうなずいた。

友三がとってかえすと、老女はさっきの場所に身じろぎもせずじっと立っていた。

「お待たせしました。三四郎さまがお会いなさるそうでございますよ」

「さようでございますか？　お会いくださいますか？　ああ、ありがとう存じます。お手数をおかけいたしました」

と、老女は愁眉(しゅうび)をひらいたようにほっと吐息しながら、一足店の外へ引きかえし、

「お嬢さま、さあどうぞ……お会いくださるそうでございます。三四郎さまがお会いくださるとおっしゃってだそうでございます」

と、向こうのとある暗い物陰へそっと手招きしながら、忍びやかに声をかけた。

その暗がりには、人目をさけるように乗りすてた駕籠(かご)が一つ。

と――

その、駕籠の陰から、伏し目がちに、そっと歩み出てきた人影があった。まだうら若い、しかるべき武家の御息女とも見える人であった。

老女は、その人の手をとり、抱きかかえるようにして店の中へ導き入れ、

「しっかりあそばしませ。三四郎さまにお目にかかるのでございます」

と、はげますようにその耳元へささやいた。
何事もしらぬお美年は、そのころ、丁度離れへ用事があって行き、裏口から奥の間にあがった拍子に、友三に案内されながら表口から入ってくる人の足音をきいた。
ふすまが少しあいていたので、自然、見るともなしにその人をちらっと透き見した。
その時のお美年の衝撃をなんと形容したらいいのか。たった一目ちらっと見ただけだが、まるで落雷にうたれでもしたような驚きであった。
その人の顔も姿も、自分を鏡に映したようによく似ている。老女がお鶴さまと小声で呼びかける声も耳に入った。
お鶴さま?! お鶴さま?! 源之丞さまが再三うわさにしておられたあのお鶴さまなのであろうか?!
そのお鶴さまが、なにゆえにまたここへ?! 三四郎さまのところへなど、何しにおいでになったのか?!
なぜ?! なぜ?!
お美年は、なぜかはしらず、かあっと全身に火がついたような衝撃を感じながら、夢中で逃げるように二階へかけのぼり、すくんだように棒立ちになってしまった。
胸が早鐘をうつように鳴っている。
きちんと正座した三四郎の前に、その人——お鶴さまは、両手をついて深く頭をさげたまま、物もいいえぬ風情で体を堅くしていた。
肩先がかすかに震えているのは、こみあげてくる激情を懸命にこらえているためであったろう。
「鶴どの。お変わりもなく、三四郎、何よりうれしく、お喜び申し上げる」
三四郎がやさしいひとみで見つめながらふっと口をきった。
その声と一緒に、お鶴さまの肩先の震えがひときわはげしくなって波をうつ。
「お鶴さま。お話しあそばしませ」

と、片すみにひかえた老女市の瀬が、はげますように声をかけた。
「あれほど願っておいであそばした二度とない機会ではございませぬか。さあ、しっかりあそばして……」
お鶴さまはおずおず顔をあげたが、
「三四郎さま、お、お懐かしゅう存じます。鶴は……鶴、鶴は……」
といったきり、くちびるをかんで、またがっくりうなだれてしまった。
「皆さまにもお変わりはないか、市の瀬……? 父君、母君、大助どの、そのほか皆々御壮健か?」
と、三四郎は目をそむける。
「はい、お変わりはございませぬ。皆さま御壮健にわたらせられます。もし、お鶴さま、どうあそばされました? しっかりなさいませ。お話しあそばしませ」
「は、はい。市の瀬、分かっています」
「二年もの間、あれほどお会いしたくおぼしめされてお探し申し上げていた三四郎さまにお目にかかれたのではございませぬか?」
「そうですね。二年です。もう、あれから二年たったのですね」
お鶴さまはやっと顔をあげ、涙にうるんだひとみでまぶしそうに三四郎を見上げた。
「そう、二年になるかのう。わしが榊原家を出奔して、もう二年になったか?」
「三四郎さま、二年でございます。あなたさまが急に屋敷をお去りあそばしてから、もう二年になりまする。あれからというもの、鶴は、せめてもう一度お会いして、一言お尋ね申し上げたいことがあるばかりに……どれほど……ど、どれほどお行方をお探ししたかしれませぬ」
「行方は決して探してくれるなと、手紙に堅く書きおいたはずだ」
「それはあまりと申すものでございます、三四郎さま。行方を探すなと仰せられても、しかとした理由もお話しくださらず、突然屋敷をお立

ち去りになりました。幼いころから、たったお一人の……兄上さまとも思いつめ、お慕い申し上げて暮らしておりましたこの鶴に、どうしてそのままにしておけましょう」

「それにはもちろん事情がある。いずれ分かる時も来ようが、今は明かせぬ。問うてくれるなと書きおいたはずだが……」

「あまりでございます。あまりにもむごい仰せでございます。それとも、三四郎さま、この鶴が憎いとおぼしめしなのでございましょうか？　鶴が憎くてそのような……」

と、三四郎を凝視したその目には、いっぱい涙がたまっていた。

旗本八千石、榊原家の御息女が、人目を忍んで、しかも夜中、こうしたところへたずねてくるのはただごととは思われない。

その上、三四郎を兄とよんでいる——それには三四郎の過去に秘密があった。

三四郎は五つの年から榊原家のかかり人となり成長した。

実父は相馬家の浪人とあとで聞かされて知ったほどで、その人がどうなったのか、どうした事情で榊原家で養われるようになったのか、詳しいことは何一つ知らなかった。

なぜか、そのことについてはだれ一人答えてくれる者がなかったからである。

当時、榊原家には生まれて間もないお鶴さまが一人いただけであったから、場合によってはゆくゆく三四郎をお鶴さまの婿に迎えて榊原家の跡継ぎにするような考えがあったのかもしれないが、二年ほどしてお鶴さまのあとに大助という男の子が生まれた。

三四郎の身分は、表向きかかり人ではあったが、その実、実子と同様に大事にされ、いつくしまれながら成長した。

実父母が三四郎を兄として立てるようきびしくお鶴さまや大助をしつけたせいもあるが、二

人も心から三四郎になついて、知らない人たちは三人を実の兄弟と思いこんで少しも疑わないくらいであった。

ことに、お鶴さまは幼いころから何をするにも三四郎にまつわりつき、三四郎と一緒でなければ承知しなかった。

「わたくし、大きくなったらお兄上さまのお嫁さまになりますのよ。だって、お兄上さま、大好きなのですもの。好き、好き！　大好き——」

などと、幼い口からよく誇らしげに言い言いしたものである。

三四郎のあとを追って高いかきの木のてっぺんまでのぼってしまい、お付きの女中を腰を抜かさんばかりにびっくりさせたこともあるし、池のふなをつるといって、二人とも抱きあったまま池へ落ち、屋敷中の大騒動になったこともある。

養父、榊原右京太夫は、そんな時でもしかりはしなかった。

「三四郎が一緒か。子供はそれくらいでなくてはいかん。元気でよい。しかるな、しかるな」

と笑っただけである。

お鶴さまや大助にはしかることはあっても、三四郎には格別の気持ちを抱いていたのか、激しい言葉一つ浴びせたこともなかった。

少し長じてからは、きびしい武家屋敷のこととて、二人の部屋は遠くへだてられたが、お鶴さまは何かと口実をつけては三四郎の部屋へ遊びにきた。

もっと長じて、娘心にそろそろ恥ずかしさというものを知りそめるころとなっては、それまでのように露骨に甘えるようなことはなくなったが、その代わり、庭先のそぞろ歩きの時など、侍女の目を盗んで木の間越しに三四郎の部屋の方をじいっと見つめていることがしばしばであった。

やがて、三四郎は養父に願って蘭学勉強のため九州長崎へ留学した。彼が十九歳、お鶴さま

が十五の年のことである。

　留学三年、久々で江戸の屋敷へ帰ってきた三四郎は、どうしたわけか、数日たったある日、忽然と榊原家から姿を消してしまって、二度と帰ってこなかった。

　あとに残っていたのは、養父右京太夫とお鶴さまにあてた二通の書きおきだけだったのである。

「鶴どの、まだ幼かったころ、わしのあとを追って高いかきの木の頂までのぼられたことを覚えておいでか？」

　と、三四郎の優しい目がお鶴さまの涙にうるんだひとみを見つめながらいった。

「わしの花嫁になる人はかきの木にのぼるほどの勇気をもたなくてはならぬと、冗談を申したのを真にうけて、あなたはむきになってのぼってこられた。覚えておいでか？」

「は、はい……よく覚えておりまする」

　お鶴さまは、ちらっと羞恥の色を見せながら、かすかな声でやっと答えた。

「一緒に庭の池に落ちたこともあったな」

「お池のふなをつっておいであそばす三四郎さまに、わたくしにも竿を貸してくださいますようにしつこくおせびりして争っておりますうちに、あやまって池におちました」

「思いのほか深い上に、水藻がしげっていて、そのまま死ぬのではないかと思っていたところを、駆けつけて助けてくれたのは、市の瀬、お身であったのう」

「あの時の三四郎さまの御沈着さ、お鶴さまをおかばいあそばす温かいお気持ち、わたくしほとほと感に入りましてございます」

　と、市の瀬が口を添える。

「三四郎さまは、水藻にお足をとられ、水に沈んでお苦しみになりながらも、お鶴さまをしっかりお抱きあそばして、水をお飲ませ申さぬように必死に宙に支えておいであそばしました」

「お陰でわたくしは一口の水も飲みませずすみましたものを、三四郎さまは……三日もお医師のお手当をおうけあそばすほどのお苦しみでございました。わたくし、幼心にも……このお方はわたくしの命の御恩人でおいであそばす、この御恩は生涯忘れまいと……その時、もう、胸がいっぱいで……」

「鶴どの、お分かりだな。わしがなんであなたをきらって屋敷を出たであろう。天涯孤独のわしにとって、実の弟妹にも等しいあなたや大助どのを、懐かしく思えばとて、仮にもきらうなどということがあるべきはずはない」

「でも、三四郎さま、三年の長崎御留学からおもどりあそばしてからは、がらりと御様子がお変わりでございます。久々の御対面に喜び勇んでお待ち申しあげておりましたわたくしにまで、すげないくらいよそよそしくあそばし、数日ならずして、なんのお言葉さえなく、突然屋敷を出ておしまいあそばしました。あの時のわたくしの気持ち……もう目の前が真っ暗になってしまったような……」

「本当に、あの時のお鶴さまの御落胆おなげきは、なんと申してよろしいやら、痛々しくてわたくしどもまで胸がつぶれる思いでございました。あまりと申せばお情けないなされかたでございます」

　と、市の瀬までうらめしげに涙ぐむ。

「父君はなんと申されたか？　お父上はわしのことをどう申されたか？」

「父上さまに申しあげましても、人にはそれぞれの運命というものがある、彼が自ら選んだ道じゃ、いたしかたない、そっとしておけ……とだけおっしゃられて、少しも御相談にのってくださいませぬ」

「そのとおり……父君の仰せられたとおりだ。わしにはわしの運命がある。少なくとも、わしはあのまま榊原家にとどまってはならぬ男であったのだ」

と、三四郎の声もいつか暗く沈んでいた。
「のう、鶴どの。わしは榊原家にいてはならぬ人間だったのだ。あなたや大助どのとはもともと別の世界にすむべき運命の人間だったのだ。分かってくれるか?」
「いいえ、いいえ、分かりませぬ。鶴にはあなたさまのお心が分かりませぬ。なぜ、な、なぜでございましょう? なぜ、榊原家にいてはならぬと仰せなのでございますか?」
「わしがいては、榊原家のためにならぬ。榊原家に平和がつづかぬ。いや、榊原家のため……などとおためごかしをいうのではない。この三四郎は、しょせん榊原家におられぬ人間であったのだ。いたくなかったと思ってくれてもいい。わがままなやつだと思ってくれ。榊原の恩義……ことに鶴どのの温かい心を決して忘れはせぬが、わしのわがままをゆるしてくれ」
「なぜ? なぜ? なぜでございましょう? あれほどお優しく、誠実でおいであそばした三四郎さまが、なぜ急にそのようにお変わりあそばしたか、それが得心ゆきませぬ。あれほど平和でたのしく、幸せにかがやいておりましたわたくしたちの生活が、なぜ急にそのように打ちこわされねばなりませんでしたか、それが得心ゆきませぬ。なぜ、なぜでございましょう? それをお明かしくださいませ」
「榊原家はいついつまでも平和で幸せにみちているではないか。わしのようなとるに足らぬ男一人どうなろうと、榊原家の生活が少しでも乱れていいはずはない。わしは、出奔した後、うわさにきいたが、大助どのの榊原家跡目相続の件もすでに公儀へお届けもすんだと聞いたし、鶴どの、金森源之丞どのとあなたとの御婚儀のことも……内々ながら、すでにお約束がすんだときいて、三四郎、陰ながら喜んでいた」
「では……で、では、三四郎さま、あなたさまは、鶴と源之丞さまとのことをお喜びなのでございますかッ?」

と、つと顔をあげながら、まじまじと三四郎を見つめたお鶴さまのひとみには、さすがにはげしい詰問するような光があった。
「金森家はやせてもかれても二万八千石の大名だ。その跡とりでいられる源之丞どのからたってといって申し込まれた縁組みが、鶴どのにとって幸せでなかろうはずはない。源之丞どのも、あなたの婿どのとして恥ずかしからぬ人物だと聞いている」
「では……では申し上げます。三四郎さま。金森さまからこの鶴を望んで御縁組みのお申し出のございましたのは、あなたさまが御留学からおもどりあそばします半年ほど以前のことでございました。なるほど、金森さまは二万八千石の御大身でもあり、榊原家とは縁戚浅からぬお間柄でもあります上に、金森さまからは数々御援助をお受けしました御恩義もありますとやら、父上さまもむげにお断りも出来かねるが……と、さようお言葉でございました。で、でも、鶴は……鶴は、せめて三四郎さまがおもどりあそばしますまでお返事をお待ちくださるようお願い申し上げまして……お待ち申し上げておりましたものを、それを、三四郎さまは……おもどりあそばすと、しみじみお話し申し上げる暇さえお与えくださらず、屋敷を……屋敷を出ておいであそばしました。も、もう鶴には、なんと申してお返事を引きのばすことが出来ましたでございましょう。それを……そ、それを、三四郎さま、鶴が幸せだと……幸せだとお思いなのでございますかッ」
　切なくこみ上げてきた涙が、お鶴さまのひとみからはらはらっと落ちた。
「三四郎さまは屋敷をお出あそばしたままお行方がしれず、金森様からはたってとのお申し越しがいよいよきびしくて、父上さまも仕方なしに金森さまへ御内諾遊ばされたと、さよう申されてございました。でも、鶴は……もう一度、三四郎さまにお目にかかり、はっきりお言葉を

お伺いせぬうちは、死んでも金森さまへは参らぬとそう言いはり、無理をとおして……今日まで……三四郎さま、今日まで、必死にお行方をさがしておりましたものを……」
と、お鶴さまの語尾は涙にかすれてとぎれがちになる。
「それを、三四郎さまは、鶴が金森さまへとつぎゆきますことを幸せだと仰せられるのでございますか？　本当に、めでたいとお喜びあそばすのでございますか？」
「父君はなんと仰せか？　あなたの御婚儀のことをどう仰せられてか？」
三四郎は顔をそむけながらきく。
「父上さまは……それは何事も運命じゃ。三四郎さまのことは、すでにないものと思いあきらめ、新しい幸せの道を探せよと、さよう仰せではございますけれど……」
「鶴どの、父君の仰せのとおりだ。三四郎のことはもう忘れてもらいたい。あなたにふさわしい人を夫に定めて、新しい幸せの道へ踏み出してもらいたい。あの時、置き手紙にもそう書いたが、わしのいいたいことは今も変わらぬ」
「で、では申し上げます。女の身として、恥ずかしくはございますが申し上げます。鶴は、幼いころから、三四郎さまをまたない兄上さまと思い通して成長し……物心ついてからは、このお方をおいてわたくしの夫となるお方はないものと……思いつめ、思いつめ……ただただそう思いつめておりましたものを。父上さま母上さまも、お口にはお出しあそばされずとも、内々お許しくださっておいでのことは明らかでございましたし、それを……そ、それを、三四郎さま、あなたさまも御存じないはずはなかったのではございませぬか。それを……それを、あまりでございますッ」
「鶴どの、あなたの気持ちはよく分かっていた。ありがたいとも、うれしいとも思っている。ただ、それだけに、かえって榊原家にいられなく

なったともいえる三四郎であったのだ」
「なぜでございましょう？　なぜ、三四郎さま？」
「なぜと今、はっきりは説明出来ぬが、つまりは、わしは榊原家にいてはならぬ人間であったのだ。わしとあなたとは別の世界に生きねばならぬ人間と知ったからなのだ」
「またそのようなことを……それでは鶴には納得出来ませぬ。いえ、三四郎さまが榊原家にお住みになれぬとならば、鶴は……三四郎さまのおいであそばすところへ、どこへなりとも参ります。三四郎さま、鶴をお連れくださいまし。どこへなりと、地獄のはてへなりと……お供いたします。お願いでございます。三四郎さま、お願い……お願いでございますッ。も、もし、鶴がおきらいでなくば……どうぞ、どうぞ、お願いでございます」
「鶴どの、なんと申されても三四郎の心は変わらぬ」
「……？！」
愕然（がくぜん）としたように、お鶴さまは血の気のない蒼白（そうはく）な顔をキッと上向けた。
「鶴どの、よう考えてみられい。八千石のれっきとした旗本の御息女を、このやせ浪人が妻にめとってどうして世間が黙っていようか」
「たとえ世間がどう申そうと……鶴は、三四郎さまのおそばにさえおいていただけますならば……どのような陰口も、どのような苦しみも、決していとわぬつもりでございます」
「あなた一人がどうあっても、父君母君のことをどうされるか？　八千石の榊原のお家をどうするか？　おそらくただではすむまいと思うが、どうお考えか？」
「たとえ父母に不孝でも……鶴は、もう、鶴は……」
「第一に、この身一つの世すぎもままならぬやせ浪人に、大家の御息女など妻にめとって養う力はない。たとえ、あなたがどんな苦しみも貧

乏もたえ忍ぶといいきられても、わしにとってはその力がない」

「で、では、どうあっても?」

「鶴どの、わしのことはあきらめてくれ。屋敷を出たその時に、すでにこの世から去ったものと思いあきらめてくれ」

「いいえ、あきらめませぬ。鶴はあきらめませぬ。いいえ、どうあっても、あきらめることなど出来ませぬ」

「聞き分けのないお人だのう」

「鶴は、今日、屋敷を出てまいります時、場合によっては二度と生きては屋敷へもどらぬ決意をしてまいりました。陰ながら、父上さま母上さまにも、おいとまごいもしてまいりました。鶴にはもう行くところがございませぬ」

「いや、まだおそくはない。屋敷へもどりなさい。ここへ来たことを人にしられてはならぬ。そっともどればだれも怪しむ者はないはずだ。そして、父君の仰せられたお言葉をよくよく考えてみなさることだ」

「……」

お鶴さまはくちびるをかみしめながらただ泣いている。

「人間の生涯には、思うにまかせぬことも幾度となくあろう。わしが去りたくもない榊原家を去らねばならなかったのも、つまりはそれだ。人間の運命というものだ。その運命に負けてはならぬ。運命に負けぬとは、それに逆らうことではなくて、そのつらさをじっと忍んで耐えながら、新しい幸せの道をきりひらいていくことなのだ。お分かりか?」

「……」

「たとえ榊原家を去って一緒に暮らすことはならなくとも、このとおりわしは元気に生きている。鶴どの、あなたにもそうあってもらいたい。金森家へとつがれてよい妻となり、よい母となって幸せな生涯をきずいていてもらいたい」

「三四郎さま……」

お鶴さまの目がじいっと三四郎を見つめた。

「かくさずに仰せられてくださいませ」

「何を?」

「もしや、お奥さまにお迎えあそばす……お、お好きなお方でもおありなのでございませぬか? そ、それで、鶴を……」

「いいや、そのようなものはない」

三四郎は首をふった。

「ほ、本当に? 三四郎さま、本当に?」

「うそはいわん。わしにはいま命にかけてしなければならん仕事がある。妻を迎えるどころではないのだ」

まもなく、お鶴さまは来た時と同じように、こっそり人目をさけながら帰っていった。

お美年は灯を消した二階の窓からぼうぜんとその姿を見送った。

誇り高い大家の御息女が、まるで打ちのめされたように哀れにうなだれて、しおしおと帰っていく。

お美年の胸は悲しみでふさがっていた。お鶴さまに同情したためばかりではない。

その人の姿に、なにかわが身の運命をそのまま見たような気がしたからであった。

悪いとは思いながら、三四郎とお鶴さまの話をこっそり盗み聞いてしまった。折々声が沈んで、聞こえてきたのはとぎれとぎれであったが、あらかたのことはのみこめた。

三四郎がただの朽ちはてた素浪人ではなくて、榊原という由緒ふかい家柄に育てられ、今でも三四郎の意志一つでその屋敷に帰れる身分であり、屋敷の人たちはこぞってそれを望んでいるのだということが、まずお美年を愕然とさせた。

今まで、なんの気もなしに、自分の隣へ並べて親しく思いすごしてきたその人が、たちまちはるかに高いところへとびさったような心地がしたからである。

その上、三四郎には、思いもかけないお鶴さまという人がいた。はっきりは言わなかったが、お鶴さまと三四郎が暗黙のうちに許された許婚同様の間柄だったことも察しがつく。

そのお鶴さまは、三四郎に恋いこがれ、姫御前のあられもないと恥じながら、必死にかき口説いていたではないか。

大家の御息女が、夜中人目を忍んでこんなところへまで男をたずねてくるというのは、それだけでもよくよくのことだと察して余りあるし、娘の身で男に向かってあれだけかき口説くのは、一層よくよくのことだと、お美年はわが身の思いにひきくらべた。

お美年は気の遠くなりそうな思いでそれを聞きながら、それでも、

——わたしの恋だって、お鶴さまに負けはしない。わたしはもう三四郎さまなしには生きていかれないとさえ思いつめているのだもの。わたしは三四郎さまをはなさない。だれがなんといおうと、負けてなるものか……。

と、必死にわれとわが胸に叫びかけていた。

口ではそれとすっきりいってくれたことこそないけれど、三四郎さまはわたしを好いていてくださるのだと、そう信じているひとことに、お美年は懸命にすがりついていた。

三四郎さまさえそのつもりでいてくれるなら、自分はどんなつらい恥ずかしいことでも我慢する。お鶴さまに情けしらずとののしられようが、むちうたれようが、三四郎への恋がみのると考えれば堪え忍べる。

お美年は化石したように体を堅くし、無我夢中で階下の話に耳をすましていたが、そのお美年の耳に落雷のような響きを伝えたのは、三四郎が最後にいった一言であった。

——わしは妻などめとる気はさらにない。それどころか、わしには命がけでしとげねばならぬ仕事がある……。

お美年は、とたん、足元の大地が音をたてて

崩れおち、たちまち底知れぬ暗黒の穴の奥へおちこんでいくような衝撃をうけた。

——三四郎さまは、お鶴さまとのお許婚のお約束をお破りになったと同じように、ほかのだれも愛そうとなすっておいでにはならなかったのだ。こ、このわたしも……。

お美年は、これまで三四郎に対していた自分の考えが、まったく独りよがりであったと感じた。

三四郎が自分によせてくれた好意も、ただ自分の境遇をあわれんで優しくいたわってくれたにすぎないのだとも思った。

お鶴さまのような身分の高い美しい許婚があってさえ、何かの事情でそれをふりきって屋敷を出奔されたという三四郎が、どうして自分などの恋をうけ入れてくれるだろうか。

もし、事情さえ許せば、明日にも榊原家へもどられる身分のお人だったのだと気がついた。

お鶴さまという人がたとえいなくとも、到底自分などの手のとどくお方ではないのだとも思った。

お鶴さまが去りがけに、木戸のところまで送って出た三四郎の方をふりむいていっぱい涙をたたえた燃えるようなひとみでじいっとその人を凝視しながら、

「お待ちしております。いついつまでもお待ちしております。鶴は……鶴は、いつまでも三四郎さまをお待ち申し上げております」

と、切なげにあえぎながらいったその声も耳の底に焼きついたように残っている。

その夜、お美年は、床ものべず、着替えする気力さえなく、悶々として明かした。

この世にこんな悲しみがあったのだろうか。母が死んだ時でさえ、これほどのはげしい絶望に打ちのめされはしなかったのに……。

と、かき口説く思いに、われとわが身を切りきざむようであった。

いつの間に、夜が白み日が昇ったか、それさ

えはっきりと意識になかった。
　勝ち気な性分が、こんな時によく現れる。だれに話せることでもなかったし、吐息一つ人に聞かせはしなかったが、その胸の中はばったり灯が消えたように暗やみにとざされていた。
　いつものとおり、ちゃんと髪をととのえ、きりっと帯をしめ直し、いつものとおりまめまめしく働いている。しかし、だれにもさとられまいと歯をくいしばっているだけに、心の中の苦痛ははげしかった。
　お徳が約束どおりまたやってきた。
「ねえ、お美年さん、決心つきましたか?」
　と、今日こそはうんといわないうちはてこでも動かないというそぶりを見せた。
「若殿さまはもうじりじりしておいでなんですよ。別に、お側妾にあがれ、お手かけになれっていうんじゃなし、そりゃアお美年さんがたいそうお気に入りだからこそおっしゃるには違いないけれど、ただただご親切から、勘兵衛さんの行方が分かるまででもお屋敷へ身をよせていたらどうかっておっしゃってくださるのに……なにもそんなにしりごみなさることないじゃアありませんか。勘兵衛さんのお行方をさがすことだって、花屋の建て直しにだって、その方がどんなに好都合かもしれやしないでしょう。第一、あなた、昨日もいったとおり、三四郎さまのためにだって……ねえ、そうでしょう。あたしだってお役目の意地がありますもの、あまり分からないことおっしゃると、何もかもぶちまけてしまいたくなりますアね。どうなの、お美年さん」
　お美年は、まっすぐお徳の方を見ながら、声は低いがきっぱりといった。
「いろいろご親切に……わたくし、お言葉に甘えて、お屋敷へあがりとうございます」
「ええっ、なんですって? お屋敷へ来てくださるんですって?」

　と、あまりにすらっと返事をきいて、お徳の方で耳を疑ったくらいであった。
「はい。それほど皆さんが御心配くださるものを、むげにお断りするのもなんでございますから……」
「そ、そう、そうですとも!」
「それに、あまり長くこの家にごやっかいになっておりますのも心苦しゅうございますし……でも、お徳さん、お願いですから、三四郎さまのことは……なんにもおしゃべりになりませんように……」
「ええ、ええ、もう……あなたさえその気になってくだされば、だれが余計な口出しをするものですか……まあ、これでわたしもお使いの役目がはたせてほっと一安心というものですよ。そうときまったら、さあ、少しでも早い方が……」
　と、お徳はもう腰をうかしてせきたてる。
　お美年は、昨夜のうちから思いつめ、決意していた。
　少しでも長くここにいたいのは山々ではあるが、もう恋してはならぬとさとった三四郎の顔を、今では見ることさえも胸がつぶれる思いであった。
　だから、今朝の食事さえ、用事にかこつけて、ほかの女中に離れへ運んでもらった。三四郎の顔を見たら、もう意地も張りもなくなって、きっと泣き出してしまうに違いないと恐れたからである。
　ここにいたら三四郎に会わないわけにはいかないであろう。いっそよそへいってしまったらと、思い悩んだあげく決意はしたが、いざとなると、とんだことを承知してしまったと、いまさらのように後悔の念がはげしくわいてくる。
　用意をする手も思わず渋りがちだったが、いつまでも引きのばしているわけにはいかない。
「さあ、早い方がいいですよ。駕籠をおごります。ほほほ、わたしだってお役がはたせてうれ

しいんですものね。お屋敷って、そりゃアいいところですよ。まして、お美年さんはお客人としていらっしゃるんですもの。本当にうらやましいくらい……さあ、早くね」

と、お徳にせきたてられて、友三夫婦と仙太にだけそっと別れのあいさつをした。

「その方がいいですとも。あっしゃア大賛成だ。ちょいちょいお目にかかりに行きますぜ」

と、なんにもしらない仙太は、二万八千石のお屋敷へあがるお美年をとんでもない出世でもしたように喜んでいる。

そうしている間にも、お美年は、ひょっとして三四郎がどこかから顔を見せはしないかと、思わず離れの方へ目をやりがちであった。

お徳が呼んだ町駕籠が二丁待っている。

押しこめるようにそれへ乗せられながら、さすがにお美年は胸がつぶれるようであった。

これで三四郎さまと御縁がきれるのだ。せめて、もう一目、お顔が見たかったのに……。

と、後ろ髪ひかれるように家の奥をのぞき見ているお美年の鼻先へ、じゃけんに垂れがばさっとおりて、駕籠はそのままひた走りに走り出してしまった。

首(くび)塚(づか)由来

たそがれも間近い日ざしの傾いた街を、三四郎と仙太がなにか用事ありげに足をいそがせて歩いていく。

昨夜おとずれてきたお鶴さまのことが胸にあってか、さすがに今日一日、三四郎は暗い顔をして部屋にとじこもっていた。

なんといっても、幼いころから温かい手ではぐくみ育てられてきた榊原家のことは、容易なことでは断ち切りがたい思い出となっているのだろう。

まして、どんな事情があって出奔したのかしれないが、兄妹(きょうだい)さながらに親しくしてきたお鶴さまに涙をながして必死にかき口説かれては、

日一日憂愁にとざされていた三四郎の心の中もさこそと思われる。

そのことに心をとられていた三四郎は、お美年が金森家へ行ってしまったことをまだ知らない。

一日中姿を見せなかったお美年のことを、ふっと不審に思わぬでもなかったが、家人も進んでそれと知らせぬし、一、二度顔をあわせた仙太が、

「ああ、お美年ちゃんなら、なにか用事で外出しましたぜ」

とそらとぼけたのを、深くも疑わずにしまった。

その三四郎から、

「仙太。ちょっと外出する。一緒に来てくれんか。ちと力をかりたいことがある」

といわれた時、仙太はぎくっとしたように息をつめた。

三四郎のことをさんざんあしざまにお美年に吹きこんでいた上、ほとんどけしかけるようにして金森家へやってしまったそのうしろ暗さがあるから、はてな？　と胸にきたわけである。

「大事な仕事だ。余人には頼めんことでな。仙太兄い、ひとつ手をかしてくれ」

と、三四郎は気さくに笑って否といわせない。

仕方なしにこうしてあとについてきたものの、日ごろに似げなくむすっと黙りこんでいる三四郎の様子が、なにか意味ありげで不気味でしかたがなかった。

仙太はお鶴さまのことを知らずにいる。友三夫婦がそれと察して、だれにも知られないよう懸命に骨折ったからだが、仙太は気味わるそうに時折ちらっちらっと三四郎の気配をうかがっている。

第一、出がけにちょうちんを用意しろといって持たされたのからして変な気がした。

「だんな、一体どちらまでいらっしゃるんです？　この道をまっすぐいけば谷中……谷中も

谷中、花屋の前へ出てしまいますぜ」
「花屋の焼け跡を見たいと思ってな」
「へえ？　本当ですかい、だんな？」
「ことによったら、勘兵衛どのにひょっこり出会わんともかぎらぬ」
「ええっ？」
「ということになったらうまいと思っているが、どんなものかな」
　ははは……と三四郎は久しぶりに彼らしい闊達さで笑った。
　この辺りまでくると、三四郎は今までの物憂げな様子からすっぱりとさめきったように足早になっていた。
　花屋の焼け跡まできたが、わき見をせずにすっと通りぬけた。
「あれッ、だんな。ど、どこへ行くんです、一体？　その道を行くと花太郎地蔵へいっちまいますぜ」
「仙太、実は花太郎地蔵に参詣したいのだ」
と、三四郎はまた笑った。
　仙太はしぶしぶ三四郎のあとについていく。
　一体、いまさらなんのために花太郎地蔵へ行くのか、三四郎の腹の中がさっぱり分からないだけに薄気味わるくて仕方がないが、ここまで来てまさかいやだとふり切っては帰れない。
　花太郎さまの前についた時には、もうすっかりたそがれていた。
　花太郎さまに妙なうわさがたってからというもの、めっきり参詣の人も減った上、ましてこの時刻になると、あたりはまるで深山にでもはいったように物寂しく静まりかえっている。
　仙太は、へえ！　という顔をした。
　まさかと思ったのに、三四郎は地蔵堂の前に立ってうやうやしく手を合わせた。
　仙太があきれるくらい長い間、しかも、冗談でないきまじめな顔をして何か祈っている。
　と思っているうちに、三四郎は、ふっと顔をふり向けて、仙太の顔をじいっと見た。

「仙太、聞こえるか？」
「え？　な、なんですって？　おどかしちゃアいけませんぜ。また、妙な化け物のうめき声でも聞こえるんでございますか？」
「いいや、あの胡弓の音だ。そら、耳をすましてみろ。歌声まで聞こえている」
　と、三四郎は暗い森にさえぎられた谷中の方角を指さした。
　なるほど、そういわれてみると、奇妙な胡弓の音につれて、歌声らしいものまで風にのってかすかに聞こえていた。
「なあんだ、だんな。ありゃア唐人飴屋の歌ですぜ。このごろ、盛り場に立ったり、ときには町中を流して歩いたりして評判になっている呉龍角っていう唐人飴屋ですよ。御存じねえんですか？」
　と、仙太は急に雄弁になった。
「唐人の寝言たアよくいったもんで、あいつの歌ときたひにゃア、まったくあきれたもんでしてねえ。

　龍さん龍さん、なぜ泣くね
　かわいい親豚飼ってたね
　その豚子豚を産んだよね……
　ぞろぞろ、ぞろぞろ産んだよね
　かわいいね、親豚喜んだね
　かわいいね、龍さん喜んだね
　アチャメチャ、チャカメチャ喜んだね

アチャメチャ、チャカメチャとくるんだからまったくアチャメチャでさア……」
　仙太のしゃべっているのが聞こえるのか聞こえないのか、三四郎は森の方を見つめながらじっとたっていた。
「だんな、どうなすったんで？　いや、あの唐人の野郎は、あっしもどうも虫がすかねえんでしてね。なんだか、あいつの面を見てるとむかむかっとしてくるから妙でさア。そうそう、そういやアこの二、三日、あの野郎『舟友』の前をよくうろうろしてましたぜ。もっとも、友三

親分にはかわいがられて、『舟友』へもよくお出入りしてるそうですがねえ。なんだか虫の好かねえ野郎でさア」
「どれ。仙太、ちょうちんに灯を入れろ」
と、だしぬけに三四郎がいった。
「え？ まだちょうちんのいるほど暗かアござんせんでしょう。帰りに谷中の知り合いで灯をもらいやすから……」
「いいから、灯をつけろ。これから地下道へはいるのだ」
「あ！」
と、仙太は思わず声をあげた。
「だ、だんな、地下道へ入るんでございますって？ あっしも御一緒にですかい？」
「仙太は前にもそこへ入ったことがあるのだろう？」
「そりゃアねえ、たった一度、勘兵衛親方と一緒に入ったこともありますがねえ」
「案内してもらいたいのだ。頼みたいというのは、実はそのことさ」
「およしなさいましよ、だんな。つまりませんぜ。中にゃアなんにもありゃアしません。すぐ行きづまりになっていて、ただもう湿っぽい土の壁ばかりでさア」
「仙太ほどのいい若い者がそんなにしりごみするのはおかしいのう。笑い者になるぞ。お美年さんでさえ、たった一人で入ったそうではないか」
「ありゃアだんな、なんにもしらねえから入ってしまったんでさア。お美年ちゃん、命からがら逃げ出してきたんですぜ」
「それは面白い。そうすると、中になにか恐ろしい異形のものでもあったわけだな？」
「い、い、いえ、なんにもありゃアしません。ただもうつまんねえ土の壁ばかりです」
「それならそれで、仙太兄いほどの男がなにもしりごみするにあたらんではないか」
と、ちょうちんを手にした三四郎は、笑いな

がらさっさと堂の裏手へまわっていく。
「たしか、この土台下の石がはずれて入り口が出来るのだな。仙太、手をかせ」
「だんな、どうしても入るんですか？ よした方がいいんだがなア」
と、仙太は仕方なさそうにしぶしぶ手をかして、石垣の石をとりのけた。
三四郎は先にたって、ためらいもなく中へ入りこんでいく。
堂の床下のたて穴の口も、お美年が入った時と同じように、ぴったり鉄板でふさがれていた。
三四郎は時々、穴の奥の気配に耳をすましながら、勝手しった物慣れた様子で先に立っていく。
「だんな、この地下道へお入りんなったのは今夜がはじめてじゃアござんせんね？」
と、仙太がうさん臭そうににらんだが、
「そうさなア、前にも一、二度入ったことがあるが……」
と、三四郎は澄まして答えた。
「仙太、しらなかったのか？ そなたはちょいちょい外出するわしの跡をつけてきたことがあるから、そのくらいとうからしっていたのかと思った」
「えっ、な、なんですって？ あっしがだんなのあとをつけたって？ 冗、冗談じゃアありませんや。そ、そんなこと、あるもんですか」
「うそをつけ。先夜など、車坂の植甚へ行く時から、花太郎地蔵へやってくるまで、丁寧至極につけてきたぞ」
「だ、だんな、知っていなすったのか？」
「知っていたとも。仙太兄いはあまり腕のいい岡っ引きではないらしいな。あの尾行の仕方では、だれだって気がつかずにいるものか」
「腕の悪い岡っ引きでお気の毒さまでござんした」
「怒る前にもう少し聞け。金森家の船遊びのあったあの晩などは、わしが離れの桟橋から舟を

こぎ出していくところを、植え込みのかげにかくれながら目を光らせてじいっと見ていたのう。わしの方から丸見えだ。まずいのう……」

仙太は妙にうすら寒そうな顔をして、じりじりあとずさりしていく。

薄気味わるそうにあとずさりして土壁へぴったり張りついてしまった仙太の方を、ちょうちんの明かりにすかしながら、

「どうした、仙太兄い?」

と、三四郎は笑いながら見つめた。

「こんなところでしりごみしてしまっては困るなア。問題の起こるのはいよいよこれからだ」

「な、なんですって?!」

「もう少し奥までいく。さあ、歩いたり歩いたり……」

「分かったよ、だんなッ」

と、仙太はのどの奥でうめくようにいった。

「殺る気だな? だんなはあっしをやっつける気だな?」

「なんだ? その、やっつけるというのは?」

「なんだもくそもあるものか。うめえこといってあっしをこんなところへおびき出し、ばっさり切ってすてる気なんでしょう?」

「ははあ、なるほど……」

「もうこうなったらかくしゃアしねえ。おっしゃるとおりだよ、だんな。あっしゃアやせても枯れても岡っ引きのはしくれだ。くせえとにらんだやつは、てめえの色女だって容赦は出来ねえのだ。おっしゃるとおり、あっしゃアだんなの様子をじいっとにらんでいましたぜ。その上、することなすこと一つ一つお美年ちゃんに報告させてもらいましたぜ。じゃまんなるうるせえ岡っ引きだ。たたっきるというのなら、さあ、切りなッ」

「ふうむ、さすがに見上げたいい度胸だ。おとなしくわしに命をくれるというのだな?」

「どっこい、そうはいかねえぜ。こっちもぴんぴん生きているいきのいい人間だア。やすやすと命を召し上げられるまで指をくわえて見ているものか。どうするか見やアがれッ」

「ははは……」

と、三四郎は笑った。笑った声が地下道の奥へいんいんとこだまして伝わっていく。

「仙太兄い、命をわしにくれるという気前のいいところで、もう少し奥まで付き合ってくれ」

いいすてて、さっさと歩き出す。

「のう、仙太。わしがおぬしを憎んで殺すつもりだったとでも思っているのか。おぬしなど切ってすてるのに、なにもわざわざこんなところまで足を運ぶ必要はなかろう。とうにどこかで片付けているわい。うむ? そう思わんか?」

「そ、そんなら、だんな、なんの用があってあっしをこんなところへおびき入れたんだ?」

「おいおい分かってくるはずだよ、仙太兄い。勘兵衛親分の行方がしれるまでは、おぬしをまあその代理だと思っている。つまり、話し相手だな。大事なことは、親分に代わってすっかり見ていてもらいたいのでな。どうだ、分かったか?」

「そ、そんならうめえことをいって、油断させといてばっさりやろうなんて、そうはいきませんぜ」

「兄いは疑い深い性分とみえるのう。そんな調子では女がほれんぞ。まあ待て。もうじき、面白いものを見せてやる」

と、三四郎のそぶりはあけすけで、少しも毒気が感じられない。

時のはずみで力んでしまった仙太は、少々拍子ぬけの体ながら、まだ半信半疑でしぶしぶあとからついていく。

地下道はまもなく行き詰まって、赤黒い土壁が前をさえぎっている。

その突きあたりの土壁に、青銅製の厨子がはめこみになっていて、さらにその中に、うつろな眼窩を、かあッ! と見開いて、こっちをにらみつけているような形相の一個のどくろが気

味わるくおさめてあるのも、お美年が見た時とそのまま同じであった。

その突きあたりから、右手へくぼんだ洞穴のような空所がある。三四郎はちょうちんをかざしてその中をのぞきこんだ。

「お高という老婆が殺されていたというのは、たしかそこだったな?」

「へえ、お美年ちゃんはそういってましたよ。断末魔の苦しい息の下から、必死の形相で、これを花太郎さまに渡してくれって、口の中にかくしていた銀の小鈴をぽろっと吐き出したそうで……ぞうっとするような執念だったって、さすがのお美年ちゃんも話す度に身ぶるいしていましたぜ」

と、仙太はまだ半分逃げ腰になりながら、三四郎の横顔を見つめている。

「実は、どうもわしに分からんことがあってなア。お高という老婆が、なにかよくよく大事な秘密を知っていたことはたしかだし、千川万作の一味が、その秘密を吐き出させるためと、もう一つ、なんの御利益があるのかしれんが、例の銀の小鈴をせしめるためにお高をここへ連れこんで責めさいなんだあげく、なぶり殺しにしたことは想像がつく。仙太兄いの言葉ではないが、ここならどんな手荒なことをしても人に知られる心配がないからのう」

「だ、だんな。いやな話はよしにしましょうや」

「ははは、なにも仙太兄いをなぶり殺しにしようというのではないさ。お高をここへ引きずりこんだことは分かるが、そのお高の死体をどこかへ運び出した理由が、どうもわしには分からんのだ」

「へえ……だんなもそれが御不審ですかい? 勘兵衛親分もそういっておりましたぜ。お美年ちゃんにお高の死体を見られている。いつ追っ手がかかるか分からねえ危険な場合に、死んでしまったお高をどうして運び出す必要があったのだろうってね。とにかく、親方とあっしがこ

こへかけつけてきた時にゃア、きれいにお高の死体は消えてしまっていたんですからね」

「ほほう、そういっていたか? さすが勘兵衛親分だのう。それでは聞くが、親分はこうもいっていなかったか? お美年さんが地蔵堂の外で聞いた怪しい悲鳴は、一体どこから聞こえてきたのか? お高がなぶり殺しのめにあっている時の悲鳴が、地下道をくぐって陰にこもって漏れてきたに違いあるまいが、それなら、その時はお高のそばに悪党の一味がいたはずだ。ところが、おかしいことに、お美年さんが地下道へはいっていった時にはお高しかいなかった。狭い一本道だから、何者かいればいやでも出会わねばならんわけであろう。お美年さんはお高のほかだれにも会わなかった。悪党の一味に出会ったのは、お高のところからもどる途中だったそうではないか」

「そ、そ、そうでさ、だんなッ。親分もそっくり同じことをいっていましたよ。それでね、ことによったら別に抜け道があるんじゃねえだろうか? やつらはその道からこっそり出入りするんじゃねえか。お高の死体もそこから運び出したんじゃねえだろうかって……」

「それで、抜け道はあったのか?」

「いいや、だめでした。そんなものはありゃアしません。勘兵衛親分は、真剣になって、この地下道を、とば口からこの奥まで、二度も三度も行きつもどりつ随分調べていましたが、とうとうおあきらめになりました」

「結局、この地下道に抜け道はないというわけだな」

「なにしろ、そう長くもねえ一本道ですから、調べるにしたってたかが知れてまさア。してみると、お高ばあさんの死骸は、すきをねらって地蔵堂の床下から運び出したんだろうって、そういっていましたぜ」

「ところが、仙太、そういうわけにはいかないぞ。地蔵堂の床下から運び出したはずは絶対に

ないという証拠があるのだ」
と、三四郎は仙太の方をふり向いてにやっと笑った。
「な、なんですって?」
「今だから話すがな。仙太兄いを勘兵衛親分の名代と思ってかくさず話すがな……あの晩、わしは地蔵堂の近くに立って、お美年さんがこの地下道から飛び出してくるところをじいっと透き見していたのだ」
「驚きゃアしませんよ。おおかたそんなことだろうと思っていました。だんなはそらっとぼけていなすったが、とうから花太郎さまの事件に深い因縁のある——つまり、くせえお人だとにらんでいたのさ」
と、仙太も負けずに三四郎の顔を見返しながらにやっと笑った。
「それがどうしたんです?」
「わしは、あの晩、とうから目をつけていた千川万作という悪党の手下のやつに道で出会ってな。そのあとをつけて、偶然地蔵堂の前まで来たというのがほんとうのところだ。あいつら二人は、地蔵堂まで来て、土台石がはずれて入り口の穴が口をあけているのを見ると、おそろしくびっくりした様子で中へ入っていった。つまり、その時、地下道でお美年さんにばったり出会ったというわけであろう。と思っているうちに、飛び出してきたのがお美年さんだ。驚いたのう。あのようなところから、あのように美しい娘さんが飛び出してこようなどとは……月明かりの中に、髪を乱してすっくと立った美しい横顔を一瞥(いちべつ)したとたん、さすがのわしも、思わずぞくっとしたなア。いや、驚いたというよりも、思わず見ほれていたといった方が正直であろう」
「だんな、だんなッ。見ほれた話はまたゆっくり伺いまさア。それからどうしたんです?」
「お美年さんが走りさると、すぐつづいて出てきたのはさっきの悪党二人だな。一人は目を射

つぶされたらしく、うんうんうめいていた。畜生、逃げようといってもそうはさせん。あの女は花屋の小娘だ。ただはおかんと、一人がすごい形相でわめいている。もう一人がそれをなだめて、それよりも早く千川さんに報告し、手の回らんうちにお高の死骸(しがい)を片付けねばならん……そういって、二人はまた地下道の中へもぐりこんでいった」
「それで、お高の死骸をかつぎ出してきたんでしょう?」
「いいや、今度出てきた時も、男二人だった。千川万作と志賀権太夫という配下のやつだ。いよいよ花屋を襲撃に出かけるらしい。千川が、配下の者に向かって、もうこの地下道はうかつには使えん。お高の死骸は片付けたか? ときくと、はい、取り片付けました。痕跡(こんせき)も残さぬよう血の跡をぬぐっておきましたと、一人が答えた……分かったか、仙太。やつらは地下道を出ないで死骸を処理してしまったとしゃべっていたのだぞ」
「そう伺ってみると、この地下道には秘密の抜け道がなければならねえことになるが、おかしいですねえ。親分とあっしが二人して調べてみたところでは、そんなものは見つかりゃしませんでした。いや、大して長い地下道でもねえ。こうしてぐるっと見回しただけでも、そんなものがあるかねえかすぐ分かるじゃございませんか。おかしいですねえ、どうも……」
「おかしいのう、仙太。こうなっては、お伺いでもたててみるより仕方あるまいのう」
「へえ? お伺いをたてるって、だれにですえ?」
「この地下道を見張っておいでの御仁にだ」
「だんな、変なこと言いっこなしにしましょうや。冗談じゃアねえ。こんな地下道を見張っているような物好きはいやしませんぜ」
「ところがあるのさ。ちゃんと、そこにおいでになる」

「ええっ、ど、どこに?」
「仙太、それ、おぬしの丁度まうしろのところに……」
「い、いやだねえ、おどかしっこなしだってば、だんなッ。だ、だれもいやアしねえじゃアありませんか」
　あわをくってふりむいた仙太の鼻先へ、三四郎はちょうちんをさしつけながら壁の一郭を指し示した。
「それ、そこにおいでになる」
「ああ、びっくりさせるじゃアありませんか。あ、ありゃアどくろでしょう」
「うむ、あのどくろさ。あのどくろが何もかも見ていて御存じのはずだ」
「冗談じゃねえや。いくら伺いを立てたって、どくろが口をききゃアしませんぜ。だんなも見かけによらねえ。人をかついだりして、とんだいたずらがお好きなんですねえ」
「いいや、わしはまじめだぞ。甲羅へては狐狸のたぐいでさえ妖怪と化し、人をたぶらかすという。まして、万斛の恨みをのんで白骨と化した人間のどくろが、年経て神通力を得、いかなる神変不可思議をあらわすかしれたものではないからのう」
　三四郎はまじめくさってどくろの前へ歩みよっていった。
「仙太、このどくろのいわれを存じているか?」
「残念だが、だんな、あっしゃアどくろと付き合いがねえもんですからね」
「それでは話そう。参考のため聞いておけ。このどくろこそは、花夜叉と呼ばれ、世に恐れられた凶賊のなれのはてなのじゃ」
「へえ……だんなはまた随分妙なことを御存じなんですねえ」
　と、仙太は話に引き入れられたように、いつの間にか三四郎のそばへ身をよせていた。
「時は鎌倉幕府のころというから、話は随分と古いのう。当時、関東に名をとどろかせていた

豪族に武蔵七党というものがあり、その一族である秩父太郎太夫重弘の五男、江戸太郎重継という者が、はじめてこの地に来て館をかまえ、それがそもそも江戸の起こりだと歴史に伝えている」
「どうもおそろしくむつかしい話になってきましたが、一体、それが花夜叉っていう盗っ人のどくろとどういう関係があるんでございます?」
「まあ、そうせかずに黙ってきけ」
　と、三四郎はちょうちんをかざして、壁面の厨子におさまったどくろをじいっと見つめている。
「江戸氏は、江戸をひらき館をかまえてから随分長い間この辺りを領していたが、その後十余代の末にいたって、江戸を太田氏に譲って多摩郡木田見へ移り、江戸とは縁が切れてしまったようだな。今から約三百年足らず以前のことだが、そのあとをうけて江戸を領したのが太田道灌だ」
「ああ、ああ、あの笠だか蓑だか借りにいって、その家の女の子からやまぶきの花をおしつけられて目を白黒したっていうあの人ですね」
「ほほう、仙太兄いもなかなか学があるな」
「へへへ、それほどでもありませんや。ついせんだって、大道講釈で聞いたばかりなんで……」
「ところで、詳しい時代は分かってはおらんが、江戸氏が木田見へ移る以前、上野から飛鳥山につづく丘陵地帯を根城にして、世間を騒がせていた凶賊の一団があったというのだな。凶賊とはいっても、腕力のある者が弱者を切りしたがえて勢力をのばし、やがては一国一城のあるじとなることが当然のように行われていた時代であるから、つまりは土豪ともいうべきやからであったのであろう。
　これが、江戸氏に手向かって、しかも神出鬼没、容易にとりしずめることも出来ないありさまであった。その首領を花太郎なにがしといい、

世間では花夜叉と呼んで恐れていたそうな。すると、江戸氏の一族の末に小源太春正という剛勇の武士があって、これが花夜叉の討伐を自ら買って出、一夜、単身その巣窟に乗り込んでいき、ものの見事に花夜叉の首を打ちおとしてしまったのだ。その功によって、小源太春正は上野から飛鳥山へかけての一帯の土地をたまわり、花夜叉の巣窟のあとに館をかまえて子々孫々までそこに住みつくことになった。

　しかも、江戸小源太の末裔は本家の江戸氏が木田見へ移ったあともなおその地に居座ったまま、後には土豪となって徳川家江戸入府当時まで残っていた。美濃の郡上で二万八千石、金森家の祖先がこの江戸小源太だといわれている」

「へえ……なんだかよくは分からねえが、それでもなんとなく分かりかけてきたような気がしますねえ。それで、だんな、一体、花夜叉のどくろの話はどうなったんですえ?」

「花夜叉を切って首を打ちおとした小源太は、彼の巣窟のあったあたりにその首をまつり、首塚をもうけたといわれている。世によんで、それを鬼塚ともいうそうだが……ところが、その後、小源太がその辺りを領して館をもうけるころになって、なにかあやしい怪異が次々と起こってきて心の休まる時がない。おそらく、花夜叉のたたりでもあろうかというので、新たに首塚の前に地蔵堂をまつり、花夜叉の供養をつとめることになったのだな」

「ははあ。それがつまり花太郎地蔵だというわけなんですね」

「そのとおりだ。しかも、その地蔵堂をまつり、花夜叉の供養をつとめるにいたってからは、今までの怪異が起こらぬようになったばかりか、反対にめでたいことがしきりにつづいたのだという。毒薬変じて霊薬になるたとえのとおりだな。それ以後、花太郎地蔵は江戸氏の守り仏となり、かつまた小源太の遺言で、その家に生まれる長男には花太郎という幼名をつけるならわ

しになったという」

「なるほどねえ。悪に強いは善にも強いっていうが、花夜叉もすっかり成仏して江戸様の守り仏になったっていうわけですかねえ。でも……だんな、いくらなんでも、大事なあととり息子に花太郎という幼名を必ずつけろなんて遺言するのは、ちと話が出来すぎていやアしませんか」

「そう思うか、仙太?」

「もとはといえば自分で切り殺した凶賊でしょう。そいつの名前をわざわざ自分の子供の名前にするなんて、どうもあっしにゃアその気持ちが分かりません。石川五右衛門がかりに神様にまつられたとしたって、あっしゃア自分の子供にそんな盗っ人の名前をつけるなア御免だね」

「さすがにのう、仙太兄い。三四郎、いまさらながらおぬしを見直した。うむ、勘兵衛親分の片腕といわれる男だけのことはある」

「ちぇっ、からかっちゃいやですぜ。だんなにほめられると、わきの下をなめられたようにくすぐったくって仕方ありませんや」

「いや、からかったわけではない。わしはまじめだ。仙太、今度の花太郎事件の秘密はそこにあるらしいぞ」

「え? なんですって?」

「小源太春正がなぜ生まれ出る長子に花太郎という名前をつけろと遺言したか、それを疑ってみるところに、この事件の秘密をとくかぎがある」

「さあ分からねえ。また話がややこしくなってきやアがった……」

「まあ、仙太、このどくろを見ろ。幾百年、恨みをのんで地下にうもれていたあの形相のすさまじさ。あのうつろな眼窩は、幾百年の間、この世の興亡、栄枯盛衰、そしてまたこの地下道に起こった一部始終をじいっと凝視しつづけてきたものすごさが感じられるではないか」

「ねえ、だんな、お話は分かりやした。首塚の由来はとっくりと伺いやした。もういい加減に

ここを出ましょうや。どんな怪物のどくろかしらねえが、いくらお伺いをたてたってどくろが口をききゃアしませんぜ」
「そうかな。本当にそう思うか?」
「じゃあ、だんなはそのどくろに、事実お伺いをたてようっていうんで?」
「そうとも、今、伺いをたてている最中だ」
と、三四郎は一、二歩ぐいっとその方へ顔をよせた。
「この辺りは、もともと花夜叉の巣窟の跡だったに違いない。盗賊、野武士の住み家を造るにはうってつけの森の茂った丘陵地帯だからな。この地下道も、おそらくそのころからのものであろう。そのあとをそっくりうけついで小源太春正が館をたてたが、地下道も多分そのまま残してあったであろう。首塚をつくったというのは、その地下道の一部に花夜叉の首を供えてまつったことをいったもので、後に花夜叉のたたりを恐れて地下道の一方に花太郎地蔵を建て入り口をふさぎ、立ち入り禁止にしたと思われる。ありそうなことだな。しかし、仙太、こういう種類の地下道が一方口ということはあるべきはずがない。必ず他方に抜け口をもうけるのが常識というものだ。おう、お告げがあったぞ、仙太。花夜叉のどくろがお告げを垂れたもうたぞ」
「ええっ!」
三四郎は手をのばしてゆっくりとどくろを抱きおろした。
「だ、だんな、冗談じゃアねえぜ。どうするんです? そ、それこそたたりがありますぜ。どくろをどうするんです?」
「たたりがあるかないか、ものはためしだ。なにしろ、どくろがそうせいとお告げを下されたのでな」
と、三四郎は落ちつきはらって、手にとったどくろを足元へおき、さらに厨子へ手をのばした。
岩のように堅い土壁にしっかりとりつけてあ

るらしい厨子はびくとも動かない。
「仙太、これを持って厨子の中を照らしてくれ」
と、ちょうちんを渡し、のび上がるようにして厨子の奥をのぞきこんでいたが、やがてその奥の両側を指先でなでさぐり、太い青銅製のくさびを抜きとった。
「どれ、これでよかろう」
えいっと声をかけながら、三四郎は両手を厨子にかけてゆさぶった。
三尺四方もある上に、分厚い青銅製の厨子は、かなりの重さがあるらしいが、それでも少しずつ動き出して、やがて三四郎の腕にすっぽりと抜きとられた。
「あっ! だ、だんなア。その奥に穴があきましたッ」
と、思わず叫んだのは仙太である。
厨子の背後の土壁が、そっくり四角く切られて口を開けていた。
「どうだ、仙太。どくろのお告げはかくもあらたかではないか」
ははは……と笑った三四郎は、ちょうちんの灯にすかすようにして穴の奥をのぞきこんだ。
「うむ、予想のとおりだ。風が流れてくる。この穴の奥がどこかに抜けている証拠だな」
「へえ、驚きましたねえ。まったく、今度という今度は一言もありませんや。感心いたしやした」
「ありがとう。仙太兄いにほめられて、三四郎一代の名誉だのう。ははは……」
「でも、だんな、だんなはとうからこの抜け穴を知っていたんじゃアねえのですかえ?」
と、仙太はまだ三四郎の素姓を疑って、うさん臭そうにいう。
三四郎はもうそんなことにとりあわず、
「さあ、仙太兄い、いよいよ、おぬしに見せたいものがある。わしの予想に違いがなくば、これから面白いものが見られるぞ。ちょうちんの灯を消さぬよう、よく注意してあとからついてこい」
といいすてて、穴の口へ手をかけ一躍すると、

そのまますると穴の中へはいこんでいった。

「だ、だんなア。そんなところへ、どうしてはいこんでいくんです？　ねえ、あっしに見せてえもんて、一体どんなものですよう？」

と、仙太は一瞬いやな顔をしてためらっていたが、三四郎がいさいかまわず穴の奥へはいこんでいってしまうので、とうとう度胸をきめたようにおそるおそるあとを追いはじめた。

入り口は狭かったが、まもなく立って歩けるほどになる。

「仙太、見ろ。この周囲の土壁の様子で、地蔵堂下からどくろのところまで続いている地下道と同じに古いものだということが分かるだろう。花夜叉当時からあった抜け穴だな」

三四郎はいいながら、急に足をとめて、つと足元を指さした。

「蠟涙が点々と落ちている。まあたらしいものだ。最近、ろうそくをともしながらここを通ったやつがある証拠だ」

足元におちている蠟涙ばかりではなく、注意してみると、何者かここを頻々と往来したらしい痕跡が認められる。

「仙太、そろそろ気をつけねばならんぞ。大声をたてるな」

と、そういった三四郎の顔にも、ようやく緊張の色が濃くなってきた。

「だんな、この地下道は一体どこへ通じているんです？」

「そのようなことは分からんな。ただ、目下は地蔵堂の北にとなった森の真下を北に向かって抜けていることはたしかだが……」

「いやにじめじめしてきたじゃアございませんか。壁から水がしたたり落ちていますぜ。

道がくだっている。そうだ、地蔵堂の北の森は、傾斜を作って浅い谷をまたいでいる。地下道もそれなりに下へくだっているらしい。さすが、花夜叉なんて大どろぼうの巣窟の跡だけありますさア。なんてまた念入りな穴を掘りゃアがったもんだろう」

と、ぬるぬるする土に足をとられてよろめきながら、仙太はぶつぶついってついてくる。

一度下へ向かっておりていた地下道が、やがてまた上りになる。谷の底を越えたのであろう。

ちょっとその辺りまできた時、地下道が左右二つにわかれている個所にぶつかった。

「こうした地下道には、幾つも抜け道をつくっておくのが定法だ。この一本の道は、どこか思いもかけない別のところへ抜けているのであろうが、はて、本道はどっちか？」

小首をかしげながらじいっと耳を澄ましていた三四郎は、やがて、

「よし、左だ」

と、大きくうなずいた。

「大丈夫ですか、だんなア？」

と、仙太が心細そうにいう。

「わしは前もってこの辺りの地理を調べておいたが、右へ行けば谷中田んぼに望む崖へ出てしまう。目差すのは左だ」

いいながら、三四郎は何思ったか、小柄をぬいてそばの土壁へぐさと突きたてた。

「仙太、断っておくが、この先どのような危険に出会わんともかぎらん。至急この道をとってかえさねばならぬこともあろうし、ちょうちんの灯が消えて手さぐりでもどらねばならぬこともあろう。万一に備えて、ここに小柄を突きさしておく。もしもの時は手さぐりでこの小柄をたしかめ、道を間違うな。さあ、しっかりと小柄の位置を見定めておけ」

「へえ、だんな、分かりましてございます」

仙太はごくっとつばをのみながらいった。もうこうなってはのっぴきならない。覚悟をきめたというおそろしく真剣な顔つきであった。

そこから地下道はだらだら上りにあがっていく。

まもなく、

「しっ！」

と、三四郎が小声で鋭く制した。
「仙太、灯を消せッ」
その気配の鋭さに容易ならずと感じてか、仙太はあわててちょうちんの灯をふき消しながら、思わずぶるぶるっと武者ぶるいした。
灯が消えるとあたりは真のやみである。
「ど、どうしたんです、だんな?」
「仙太、耳をすましてみろ。聞こえるであろう」
と、話しあう声もささやくように低かった。
「あっ、なるほど……人声だかなんだかしらねえが、地獄の底からでも響いてくるように、陰にこもってかすかに聞こえてくるものがありますねえ」
「気をつけろ。音をたてるなよ。わしの背にしっかりつかまって離れるな」
それからの一歩一歩は、やみの中を手さぐりに、まるではうような忍び歩きだった。
少しいくと、地下道が左へゆるく曲がっている。
その角までくると、行く手にあたって、かすかにぼうっと火影のにじんでいるのが見え出し、同時に、人声らしい物音が急に高くなりはじめた。
何者だか分からぬが、声高にわめいている声である。一人二人ではないらしい。それが入りまじって、地下道の壁にこだましながら陰々と波打つように響いてくるのだ。
ここまで来ては、もう度胸がすわったか、仙太は灯を消したちょうちんの柄を腰にはさんで、代わりにぎゅっと十手を握りしめた。
高くなっていったその声がやがて怒号のようにはげしくなったころ、先頭を行く三四郎が急に地下へ腹ばった。
すぐ鼻先のところで、地下道は下へむけて深くくびれているらしく、その下の方からさしてくる火影が地下道の天井に明々と照りかえしている。怒号も同じようにその底の方から響いてくるのだ。

三四郎は、ゆっくりとその縁までにじり寄っていき、わずかに目を出してじいっと下をのぞきこんだ。
深さ一丈はあるであろう。四方の土壁を垂直にそぎおとして、二間四方くらいの真四角な穴蔵になっている。地下道からは狭い足場を切って斜めに下へおりる階段がついていて、丁度三四郎の正面にあたる反対の壁にも、同じような階段から向こう側の地下道へ上れるようになっている。いわば、地下道の途中を掘りさげて作った穴蔵のようなものだ。
なんのために作られたものか分からぬが、その土壁の古さからみて、おそらく花夜叉当時からのものであろう。
その穴蔵の中央に、手燭をもった侍の影が一人。ほかに同じような侍の影が二つ見えている。そして、彼らの足元に近い片すみの壁に背をもたせて、一人の男があぐらをかいて座っていた。
その座っている腰の下には、腐ったような古むしろが一枚あるきりで、うしろ手にくくった太い麻なわの先が土壁へ深くぶちこんだ鉄の輪にむすびつけてある。
三四郎のうしろからそっと首をのばしてその方を一瞥した仙太が、とたん、
——おっ、親分だッ!
と叫びかけて、あわてて口をおさえた。
あの晩、金森家の中屋敷から帰る途中、行方しれずになっていた勘兵衛であった。
髪は乱れほおけ、ほおもげっそりやせこけて見る影もなかったが、そのきらきら光る目の生気だけが日ごろの勘兵衛らしい面影をそのまま残している。
三四郎が無言のまま仙太の手首をぐっとつかんで、その手のひらへ指先でゆっくりと字をかいた。
——見ろ。あの、中央に立っているのが千川万作、そして左右が志賀権太夫に近江三郎兵衛だ……。

「勘兵衛、そろそろ往生して、どろをはいてしまったらどうだ」
　勘兵衛を見おろしながら、太いだみ声でゆっくりしゃべっているのは千川万作であった。
「なにもむずかしいことを聞いているのではない。江戸の花太郎と名乗るあの不敵な男の正体を、ちょっとでいいから漏らせといっているのだ」
「いくら聞かれても、知らねえことは返事出来ません。花太郎の正体が分かっているくらいなら、とうにこの事件は片づけていますア。だんな、こっちで聞きてえくらいだよ」
　勘兵衛はやせおとろえたその体にどうしてこんな気魄がこもっているのかと疑うほどのはげしい調子でやりかえした。
「そうはいわさん。貴様が内々でとうからこの事件にさぐりの手を入れていたことが分かっている。貴様は花太郎の正体をしっているはずだ。聞きたいのは、それと、もう一つ銀の小鈴のかくし場所だ」
「くどいねえ。知らねえものは知らねえんだッ！」
　と、勘兵衛の声が辰巳上がりにはげしくなる。
「こやつ、なめているなッ。先生、手ぬるいです。お美年をひっさらってきて、こやつの前でたたきのめしてくれるのが一番です」
　と、そばの一人がわめきたてた。
「聞いたか、勘兵衛。皆、しびれをきらせている。お美年の体に聞けといっているのだ」
　万作は意味ありげににやっと笑った。
「女子供にまで手をふれるは大人げないと遠慮していたが、やむをえねばそうするぞ。小娘一人、ここへさらってくるくらいはたやすいことだ。一度ここへ連れこめばただではすまん。よしんば、その時になってどろをはいても、お美年の体が無傷ですむと思うなよ」
「どうせ鬼畜のようなお前さんがたのするこった、おおかたの想像はついてるよ。好きなようにしたらいいだろう」
「ほほう！　これはいい度胸だな」
　万作は薄笑いしながら左右の配下の男たちをふりむいた。
「下世話にも、売り言葉に買い言葉というのがある。鬼畜のようなわれわれ故、おおかたの想像はついている。好きなようにしろというのだな。のう、志賀、近江。そうまでいわれては、わしらもお美年をそのまますておくわけにはいかんのう」
「そうですとも、先生。あの小娘をひっさらってきて、こやつの気のすむまで痛めつけてやりましょう」
「いやいや、鬼畜といわれたわしらが、ただ痛めつけるくらいの手ぬるいことをしたのでは勘兵衛の気に入るまい。鬼畜という以上は、もそっと念入りなやり方があるであろう。丁度色づいた年ごろの娘だ。まして、花屋小町といわれるほどの美女だ。裸にむいたら、貴公らもさぞ目の保養になろうぞ。打つもたたくもその上のことだ。逆さにつるして、髪を火にやくという法もある。両手両足の指先の生づめを一つ一つはがしていくという手段もある。あぐらに組ませた両足首を縛りあげ、そのなわじりを首にまわして力まかせにひきしぼり、己の足首をなめるほどに体をへし曲げるえび責めという見事な手段もある。どうじゃ、これはなかなかに面白かろう。退屈はせんぞ」
　万作は、一語一語くぎるようにゆっくりいいながら、横目でじろっと勘兵衛を見おろしている。
「勘兵衛、どうだ？　この辺でもう一度考え直した方がよくはないか？　わしらは一度やるといえば必ずやる！　娘のむごたらしい姿をどうでもみたいか？」
　万作の声は毒気をもっている。おどしでなしに、一度ねらいをつけたらどんなことでもやりかねない男だ。

「花太郎の正体をおしえろ。銀の小鈴のありかを言えッ。それさえいえば、即時そのなわをといてやる。貴様は自由だ」

「だんな、あっしゃアくどいことは大きれえなんだ。もう一度はっきりいっておくから、二度といわせねえでもらいてえね。いいかい、あっしゃアなんにも知らねえよ。いや、よしんば知っていることがあろうとも、一度いわねえといったらてこでもいわねえんだ。お美年をさらってきてどうするって？　ふん！　お前さんがたのやりそうなことだ。好きにしろいッ」

　勘兵衛はかみつくような形相でわめきかえした。

「よしッ」

　万作の顔から笑いが消えた。

「すぐ手配しろ。いかなる手段をめぐらしても、お美年をさらってこい」

　と、そばの二人へ目配せしてから、ことさらゆっくりと穴蔵の四すみを見渡した。

「花夜叉の昔から、この穴蔵では幾人となく人が死んでいる。男も女ものたうち回りながら血をながし、流れた己の血潮の中で狂い死にに死んでいったのだ。土は血をすって乾き、乾いた土にまた血が流れる。見い、この土の黒ずんでいることを……その土が、また久々に血を吸うか。みめうるわしい娘の血だ。真っ白な女の体が、血にそまってこの土の上をもだえ狂う……ふふふ、さぞすごい見ものであろうよ」

　いいすてると、万作はくるっときびすをかえした。

　出ていったのは、三四郎たちが身を伏せているそれと反対側の口であった。狭い階段をのぼり、やがてその足音は手燭（てしょく）の火影と一緒に地下道の向こうへ消えた。

「よいところへきた。案じていたが、まにあってよかった」

　と、三四郎がいった。

「むごいことをしやアがる！　親分をあんな目にあわせやアがって、畜生ッ、いまにどうするかみていろッ」

　仙太の声はうめくようだ。

「仙太、静かにしろ。地下道というやつは、思いもかけぬ遠いところまで声がとどくものだ。さあ、静かに急げ」

　と、三四郎はむっくり起きあがって、滑るように階段をおりていった。

「勘兵衛どの、静かに！　仙太も来ている。安心してまかせておかれい」

　いうよりも、小刀をぬいて勘兵衛のいましめを切りはなった方が先だった。

　降ってわいたような二人の姿に、唖然（あぜん）としている勘兵衛になんにもいわさず、

「一人歩きは無理だ。仙太、親分を背負えッ」

「へい、合点だッ。さあ、親分しっかりしてくれッ」

　背負った仙太に力をかし、階段を上まで押しあげる。

　あっという間にてきぱき片付けてしまう素早さは、胸がすくようであった。

「仙太、親分のことは頼むぞ」

　と、三四郎は早口にいった。

「灯はつけるな。どこに目があるかもしれん。道順はわかっているな？　いま来た地下道をそのまま引っかえすのだ。途中に一個所分かれ道がある。壁に小柄（こづか）をさしておいた故、間違わんように地蔵堂の下へ出ろ」

「へえ、かしこまりました。でも、だんな、あなたはどうなさるんで？」

「わしか……わしは、あいつらのあとをつけて、もう少し様子をさぐってみる。またとない機会だ」

「大丈夫ですかア、だんな？」

「わしのことより、おぬしこそ気をつけろ。油断すると危ないぞ。まっすぐ地蔵堂からぬけ出して、出来るだけ近いところへ親分をかくまえ。花屋の近くには適当な家があるだろう」

「そんなところはいくらでもありまさア。親分のことはひきうけました。御安心くだせえ」
「では、頼んだぞ。さあ、早く行けッ」
「合点だ」
と、仙太は勘兵衛を背負ったまま、早くも地下道の奥へ走りこんでいく。
まっくらやみだが、たったいましがた通ってきたところだから勝手はしれていた。
地下道はゆっくりと下へさがっていて、やがて谷のところへ出た。道が三つまたに分かれている。
念入りに手さぐってみると、壁に突きさしてある小柄が指先にふれてきた。もう間違いない。あとは一本道だった。
勘兵衛は、さすがに気がゆるんだか、なえはてた体をぐったりと仙太の肩にもたせて死んだように身動きしなかった。
もうまもなくどくろをまつったあの穴の口に近いというところだった。
人一人背負ってやみの中を走りつづけてきた仙太は、息が苦しくなってふっと足をとめた。
——おやっ?
と思ったのはその時のことである。
なんだか、うしろの方で足音のようなものをちらっと耳にしたからだ。気のせいか、だれかあとから追ってくるような気がしてならない。
——なんだ、三四郎だんなはあんなことをいいながらもう引っ返してきなすったのか……。
と、そんなことを思いながら、じいっと耳をすましたが、しかし、もうその時はなんの物音も聞こえてこなかった。
——おかしいなア。気のせいかな?
とにかく、ここを抜け出してしまわねばどうにもならねえと、仙太は勘兵衛の体をゆすりあげながらまた走り出した。
まもなくどくろの穴へたどりつき、そこをくぐりぬけた。
ここまでくればもう大丈夫だ。とにかくちょうちんに灯を入れよう……。
そう思った仙太は、勘兵衛を背負ったまま地上へ身をかがめ、腰からちょうちんを抜きとり、火打ち道具をとりはずした。
かちっかちっと、二、三度火打ち石をうった。
その仙太の手が、突然、ぎくっとしたように宙にとまったのは、だしぬけに、すぐ背後の方にあたって、もうまぎれもない明らかな人の足音をきいたからである。
「おやッ、だんなですかえ?」
と、ふりむこうとしたとたん、うしろからどすっとのしかかるような衝撃と一緒に、
「うわあッ!」
という勘兵衛のけたたましい悲鳴がおこった。
仙太は勘兵衛を背負ったまま突きとばされたように地にのめった。
「ううッ、う、うッ……」
と、勘兵衛のはらわたを引きさくようなうめき声がやみの底をはっている。
その苦悶をうったえる指先が、仙太の二の腕にからみついて肉に食い入るほどつめをたてた。
「親分ッ、どうしたッ? しっかりしてくれッ」
と、はねおきざま勘兵衛の体を抱きかかえた仙太の指先に、ぬるっと生温かい血潮が感じられた。
「野郎、やりゃアがったなッ!」
キッとやみの向こうをにらみすえながら、思わずわめいたその声は、地下道の中をゆるがすほどにけたたましかった。
「やみにかくれた不意打ちなんて、なんてひきょうな野郎だッ。うぬは何者だッ? さあ、名前をいえッ」
さすがに激怒した仙太は気負っている。十手をひきぬいてそれと分かったらすぐにもおどりかかっていく気構えを見せながら、やみの中をキッと見渡した。

地下道の中はただやみだった。答えもなく、呼吸の音さえ聞こえてこないのだ。

そのくせ、そのやみの中のどこかに――しかも、すぐ間近に、何者か立ってこっちをじいっと見つめている気配があった。

「野郎ッ、出てこいッ。おれが相手だッ。よくも親分をやりゃアがったな。もうただはおかねえ。畜生ッ、名前をいえッ」

わめきたてる仙太の声がいたずらにがんがん反響するだけで、相手は身じろぎする気配さえなかった。

しかし、いる。たしかにいる。すぐ目と鼻の先に、そやつが立っている。

仙太は手さぐりして火打ち道具をひきよせた。

この暗さではどうにもならない。一瞬でもそやつの姿を見定めたら、もう容赦はしねえのだと、そっと十手を口にくわえかえ、両手に火打ち道具をとった。

かちっ！

火花がとぶ。

一間ほど向こうの土壁にぴったり背をよせて立っているらしいなにやら人影らしいものをちらっと見たような気がした。

もう一度、かちっ！　と火打ち石をうった。

その火花をすかして、相手の姿と位置をたしかめるため、じいっと向こうをにらんだ。丁度その瞬間であった。

火花の中に、宙をけっておどりあがる黒々とした影を見た。仙太がはねおきるより一瞬早かったようである。

すさまじい力でうしろの壁際までしたたかはねとばされた仙太は、起き上がる間もなく、頭上へはげしい一撃をくらった。

それっきり失神してしまったらしく、何一つ覚えてはいない。

ふっとわれにかえったのは、かなり時がすぎてからであった。

両手にはまだ火打ち道具をしっかり握っている。手さぐると、ちょうちんが指先にふれた。

灯をつけた。

あたりにはだれ一人いない。勘兵衛の姿も消えていた。

夢見る心地でさっきの出来事を思いかえしながら、勘兵衛の倒れていたと思われる辺りをすかしてみると、おびただしい血のあとがべっとり残っていて、その血潮の中に血にまみれた一本の小柄がおちていた。

「あっ、こりゃア三四郎だんなの小柄だッ」

仙太は、さっき、火花の間から、ちらっと黒い人影を認めている。

なにやつだろう。

と、懸命になって記憶をさぐってはみたが、はっきりした姿はうかんでこなかった。

ただ、そやつがうしろからつけてきて、勘兵衛を刺したことだけが分かっている。すさまじく敏捷（びんしょう）で、すさまじく体力のあるやつだ。しかも、武芸にも達していると思われる。

何者だろう？　千川万作の一味だろうか？

いや、そんなはずはない。

よしんば、彼らに気づかれたところで、地下道は一本道なのだ。うしろから追ってくれば三四郎に行きあたるはずだし、前からくれば前向きに行きあわねばならない。

第一、万作の一味だとしたら、堂々と名前を名乗るだろう。少なくとも、やみにまぎれて襲撃し、やみにかくれて姿を消すような面倒なことまでやるまい。ここはやつらの根城なのだから……。

それに、勘兵衛を刺したあの小柄はどういうわけなのか？

あの壁に突きさしておいた三四郎の小柄のことは、三四郎と自分のほか、知っている者がないはずではないか。他人が暗い壁に柄元までつきさしてある小柄に偶然気づいて、それを抜いてきて凶器に使うなどということはあるもので

はない。
仙太は、あっ！　という表情をしながら、思わず、
親分をやったのは、三四郎じゃアねえだろうか……。
一本道の地下道をあとからつけてこられた者は三四郎のほかなかったはずだし、小柄のことをしっているのも、自分のほかは三四郎一人のはずだった。
そうだ、あいつだ！　三四郎の野郎ッ、あいつがやりゃアがったにちげえねえんだ！　だからこそ、顔を見せるのを恐れて、やみ討ちなんてひきょうなまねをしやがったんだ！　おれが火道具をうって火をつけると思うと、とたん襲いかかってきて、おれを殴り倒しゃアがったんだ！
なにか親分を生かしておけねえ理由があって、うまくたくらんだにちげえねえ。
そうだ、そうにちげえねえとも！
じゃまな親分を殺しておいて、自分は知らん顔の半兵衛をきめてみながら、お美年ちゃんにうめえことをしようって了見なんだろう。ところが、どっこい、そうは問屋がおろすもんか。
畜生ッ、見ていやアがれッ！
一度そう思いこむと、三四郎のこれまでの言動が一つ一つ胸におちてくる気がして、仙太の確信は深くなるばかりだった。
足元を調べてみると、勘兵衛の倒れていた血だまりから地蔵堂の出口の方へむけ点々と血がしたたり、その体を引きずっていったらしい跡が残っている。
野郎、瀕死（ひんし）の親分をどこかへつれ出して、息の根をとめてから、死骸（しがい）をこっそりかくすつもりなんだな。ぐずぐずしちゃアいられねえ……。
仙太は、しゃにむに地下道を走りぬけ、地蔵堂の真下までできた。その角にひっかかって、勘兵衛の着物の片そでのはしが裂けておちている。
表へとび出したが、しかし、あたりはしいん

と静まりかえっていて何者の影もなかった。
勘兵衛を仙太に託した三四郎は、その姿が地下道の向こうへ消え去るのを待って懐から用意の火なわをとり出し、火打ち石をうって火をつけた。
その、ほたる火のような灯をたよりに、一度穴蔵へおりてから向こうの階段を上へのぼると、また地下道がつづいている。千川万作の一味が姿を消したのはその地下道であった。
一本道がだらだら上りに長くつづいている。
花夜叉の当時には、この辺り一帯にかけ、広い敷地をとりこんでとりでといっていいような館（やかた）が出来ていて、地下道はその下を走る秘密の道路だったと推察される。
やがて道がつきた。
そこから狭い階段を一間ほど上へのぼったところに、重い木のとびらが行く手をふさいでいた。
分厚いかしの板に鉄わくをはめこんだおそろしくがんじょうなとびらで、これは昔からのものではなく、近ごろになってとりつけられたものらしい。押しあげてみるとかすかにちょうつがいのきしみを響かせながら上へ開いた。
そこは建物の一部だった。床も、天井も、四方の壁も、木張りになっていて窓もない。一見地下室とも思われる小部屋で、片すみからさらに上へのぼる階段がついているほか、何一つ家具らしいものもなかった。
三四郎がその部屋の中央に突っ立った丁度その時、階段の上の方から人声が聞こえてきた。
「おかしい。池の水がひいていく」
「みるみる干上がって、底が出てしまった」
「水門がこわれたのではない。だれか水門をあけたやつがある」
「だれがそんなことをした？　あの水門をひらいては一大事だぞ」
「さあ、だれか分からん。なにやつか忍び入っ

たやつがあるのではないか?」
「だれが、なんのためにそんなことをする? あの水門をあければ、池の水が地下道へ流れこむ以外、なんの利益もあるまいが……」
「それはそうだが、とにかく、池の水が干上がっている」
「一大事だ。地下道がどうなったか、すぐ調べねばならん」
「そうだ、そのことだ。先生がそう仰せられたのだ。おいッ、皆こいッ。地下道に何か異変が起こったのかもしれんぞ」
しゃべっている声と一緒に、どやどや入りまじった足音が階段に近づいてくる。
三四郎は、とっさに地下道へ走りおり、とびらをとざした。
相手が幾人いるかしれないし、こんなところでむだな争いは不利とみたのだ。
三四郎を追うようにして足音が近づいてきた。
いきおい、三四郎は、今きた一本道の地下道をひきかえすより仕方がない。やみの中を火なわのほたる火をたよりに歩く三四郎より、手燭(てしょく)をかざした追っ手の方がはるかに早かった。
勘兵衛がとじこめられていた穴蔵へかけおりたころには、もうすぐうしろまで追っている。こちら側の階段をのぼって地下道へ行こうとすれば、当然姿を発見されるであろう。
三四郎の視線が、ふと、穴蔵の一隅(いちぐう)にとまった。さっきは気づかずにいたが、勘兵衛を抱いてのぼった階段の下の辺りに、壁をうがって横穴が口をあいている。
三四郎は、とっさに、その横穴へ身をすべりこませた。
手に手に灯火をかかげながら穴蔵へかけおりてきた人数は七、八人いたであろう。
「や! 勘兵衛の姿が見えん」
と、すぐ気がついたように一人が叫んだ。
「なわが落ちている。逃げたなッ」

「なわを切りすててあるぞ。一人であのなわが切れるはずはない。何者か勘兵衛を救い出しにきたやつがある!」
「さては、そやつが水門をきって、追っ手の道をふさいだのかもしれん」
「とにかく一大事だ。おいッ、貴公ら、水門口を見てこい」
わめきたてる声と一緒に、二人ばかり階段をかけのぼって、地蔵堂へ通じている地下道へけたたましく走りこんでいったが、まもなくもどってきて、
「水びたしです。とても通りぬけ出来ません。か、勘兵衛の姿も見えません」
と、息をはずませながら報告する。
「案じていたとおりだ。勘兵衛を逃がしてはあとがうるさいぞ。きゃつはわしらの正体をしっているし、この地下道の秘密もしっている」
「いや、あの体では、おそらくまだ遠くまでは逃げますまい。表から地蔵堂へ回りましょうか」
「よしッ。地蔵堂へ回れッ。草の根わけても勘兵衛をさがし出せッ」
それッと色めきたちながら、男たちは今きた地下道をとぶようにひっかえしていく。
間をおいて、三四郎は身をかくしていた横穴からのっそりと姿をあらわした。
一度もみ消した火なわへあらためて火をつける。
池の水門がどうしたとか、地下道が水びたしになっているとか、彼らの話の中に気にかかる言葉があった。
階段をのぼって、地蔵堂に通じている地下道をだらだら下りに進んでみると、まもなく、火なわの光の中に、きらっと照り返す水の影をみとめた。
水は、地下道をいっぱいにひたして、しかも刻々と上へのぼってくる。
三四郎の記憶では、一番低いあの谷の三叉路(さんさろ)

のところまでまだ十間以上もあると思われるのに、水はその底の方から大きな力で押しあげられるようにぐんぐんのぼってくるのだ。

　そのすさまじい水の勢いを見つめながら、三四郎の胸をふっと横切ったのは、花夜叉当時の山砦の構図であった。

　古代の築城法には、万一の場合、水によって敵の侵入をふせぐ手段はしばしば行われている。花夜叉がこの地下道を造った時、そのことに留意しなかったとはいいえない。

　つまり、谷間に近いどこかに池を造って、谷川の水や泉の水を堰いてそれにためておき、いざという時、水門を開いて地下道を水びたしにして遮断してしまう。

　さっき、一番低い谷合いの部分に地下道が三叉路をなしていたが、あの一本は、平時は抜け道の一つに使うが、万一の時には池の水を地下道に誘い込む水路になるのであろう。

　そうしている間にも、水は刻々と高まってきて、三四郎の足先までぬらした。

　こうなっては、地蔵堂へ抜け出ることは不可能だ。出口はさっきのとびら口しかない。あのとびらがどこへ通じているのか分からないが、もはや一瞬のちゅうちょも許されない。

　三四郎はいそいでとってかえした。

　しかし、鉄棒をはめこんだかしのとびらは、もう押せども引けども小ゆるぎもしなかった。

　押せども引けどもびくとも動かないとびらを前にして、三四郎はしばらくじいっと耳をすましていた。

　とびらの向こうから、かすかに人声が伝わってくる。

「勘兵衛の行方がしれんらしい。やつの行方がしれるまで、このとびらは錠をおろして絶対に開けてはならんという指令だ。その上、先生は当分ここへ見張りをおけとおっしゃっておられる」

「地下道の秘密が明るみへ出ては、いつ、このとびら口から襲撃をされるかもしれんからな」

「池の水門も開けたままにして、どんどん水を流しこめということだ。水が地下道をふさいで、このとびら口を守ってくれる。その上、いよいよ面倒となれば、地下道を崩して埋めてしまう手はずもととのっている」

「なんにしても忙しいことになった。こうなっては、勘兵衛がお美年と出会う前に、いっときも早くお美年に手をつける必要がある。あの女を人質にさらいとってこねばなるまい」

「もうその手はずはととのっている。今夜のうちにやるさ」

「では、まもなく、あの美女の顔が拝めるのだな」

「顔どころか、あられもない玉の膚まで拝めるかもしれん」

　ふふふ……と下卑た笑い声が、三四郎の耳につきささるように聞こえた。

　勘兵衛は無事に逃れたらしいが、今度はお美年が危ない。ぐずぐずしてはいられないと、三四郎の顔にはにわかにあせりの色が見えはじめた。

　どこかに地下道から脱出する口はないのか？

　もう一度、地下道をとってかえしてみると、水量はいよいよ増して、さっきよりはるかに高い位置までのぼってきていた。

　いくら調べてみても、この間の地下道はまったく一本道で、抜け道らしいものはどこにもなかった。そうかといって、土壁を掘り抜いて地上へ抜け出すということも簡単には出来そうもない。この辺はおそろしく堅い粘土質の赤土で、その上、地表までどのくらいの距離があるか、それさえ皆目分からないからだ。

　その時、三四郎は、さっきとっさに身をかくしたあの穴蔵のすみの横穴のことを思い出した。

　そうだ！　あの横穴をしらべてみる必要がある！

　三四郎は急いで穴蔵へかけおりていき、横穴

の中へ上がりこんだ。

さっきは、とっさの場合で気づかなかったが、四、五尺奥へくびれこんだ横穴は、この先で垂直に下へおりていて、のぞきこむと鼻をさすような異臭がむうんと襲ってきた。

ためらってはいられない。三四郎は、火なわをふりかざしながら、ひと思いにその中へ滑りおりた。深さは一間くらいあったろう。

おりたとたん、ぐにゃっと気味わるく足の裏が何かをふんだ。顔を近づけてみると、それは人間の死骸だ。

全身腐乱しているが、その白髪をふり乱したすさまじい形相は、そのままありありと残っている。

——お高だ！

いや、お高の死骸ばかりではない。その近辺には、おびただしい人骨が、完全に白骨となって散乱している。

そして、その穴はそこで行きどまりだった。花夜叉の昔から、死人を投げこんだ墓場だったらしい。

寝化粧

金森家へあがってから、お美年はすっかり陰気な女になってしまった。

特別に奥まった一間が与えられ、お付きの侍女が二人までつきそっている。

若殿源之丞から陪食のおふれがない時には、居間まで侍女が膳を運んでくる。髪をあげることから、着替えまで一人ではさせない。侍女の手がさっと左右からよってきて帯をとき、ぬがせ、そして着せかえてくれる。その髪飾りから、身につけるものは膚着の末まで、ことごとくお屋敷からの賜りものであった。

源之丞が客分としてもてなすといったことはうそではなかったが、そんな姫君にもまごうはでやかな暮らしも、お美年の気持ちを少しも引きたてはしなかった。

それどころか、わずらわしくて、ほうっておいてください、わたしだって手も足もあるんですよと、日ごろなら啖呵の一つもきりたいところだが、それを口にする元気もないようなお美年だった。

自ら三四郎のことをあきらめて、そのそばからはなれてさえいれば少しは忘れることも早かろうと、ついうかうかとこの屋敷へきてしまったのだが、忘れるどころか、時のたつにつれ、お美年の苦しさははげしくなるばかりだ。

いっそ、その人のそばへ飛んでかえりたいと、せきあげるようなはげしい思いにかられ、思わず庭先へ走りおりたことも幾度となくあったが、しかし、とたんにお鶴さまの幻が目の前をさえぎってお美年の足をはたと引きとめてしまう。

侍女の一人にお徳が加わっていることが、お美年のわずらわしさをひとしおひどいものにしていた。さも親切らしく、かいがいしくかしずいてくれるようふるまってはいるが、その目がじいっとお美年を監視しているのだということが分かっている。ちょっと庭先を遠くまでいくと、いつの間にかそのうしろ近く姿をあらわして、変な笑いをうかべた目つきで、どこへおいでになりますか？　と皮肉ないい方で引きとめる。

源之丞は、中屋敷にいるかぎり、朝に夕に、美年を呼べといいつける。

朝の庭前の散策にも、夜の酒宴の席にも、お美年を召さないことはない。

それが幼いころから恐れや遠慮というものを知らずに育てられた大名の若殿の習性というものなのか、いやになるくらいしつこい目つきで——よくいえば子供のように赤裸々な目つきで、じいっとお美年を見つめている。

「美年にはその着物がよう似合う。大大名の姫といっても恥ずかしゅうないほど見事な姿じゃ」

と、ほめてはそばへひきよせて、
「生まれも育ちも違っても、美しさといい、気品といい、鶴どのにごうもひけはとらんぞ」
と、飽かずにながめ入るのだ。
お美年はその言葉から源之丞のお鶴さまに対する恋心がよくよく深いことを察している。
しかし、そうしたあとで、お徳が源之丞のそば近くすりよって、そっとささやきかけていることを気がつかない。
「若殿さま、それほどお気にお召しあそばされましたのなら、お美年さんに夜のことをおいいつけあそばしましては……いいえ、御遠慮には及ばぬことと存じます。お美年さんも御寵愛を賜りますことをもとから承知しまして、それは喜んでこちらへ上がりましたのでございますから……若殿さま、あのお人はそのおつもりでお屋敷へおあがりなされたのでございます。もしお気に召しましたなれば、さようお申しつけくださいますよう。すぐ、夜のことを……取り運ばせまするでございます」
と、お徳はそのかすように告げ口する。
若い源之丞は、少し面はゆげに目をそらして聞かぬふりをしていた。
「卑しい身分の自分らが、恐れ多くも御身分高いお方さまのお目にとまり、お情けをおうけしておそば近く過ごすことの出来ます幸せは、まるで夢のようだと申しておいででした」
「なに？　幸せじゃと申したか？　美年がそう申したか？」
と、源之丞は思わずつりこまれてお徳の方へ向き直る。
「さようでございます。お美年どのが申されました。御身分高く、りりしいお姿の若殿さまのお目にとまった幸せを涙ぐんで喜んでおりました」
「わしは……わしは、そのようなことを命じた覚えはない。ただ、鶴どのによう似たあの娘を……しかも、父親の行方はしれず、住まいを焼

かれて難儀いたしおる不運な美年を、ただ、しばらく屋敷に招いてなぐさめてとらせいと申したまでじゃ」
「そのお情けが、お美年どのに、よほどありがたく響いておりますことと存じます。温かいお情けは、女の心をゆさぶるものでございます。さればこそ、先夜、痴れ者がお座船めがけて射かけてきました矢を、命を的にして防いだものかと存じます。若殿さまには身も心もおささげ申して悔いないと申しておりました」
「射かけた矢を、命を的に防いでくれた心根を、わしは恩義に感じておったが、ふうむ、美年はそう申しておるか？」
「お美年どのは、すぐにも夜のお召しがあるものと、そのおつもりでお屋敷へあがったはずでございます」
「いや、わしはそのようなことを命じた覚えはない。徳、だれがそう申した？　だれが、美年をわしの側妾にすると申したのか？」
「御老女花村さまが、そうわたくしにお申しつけなされました」
「なに、花村が？」
「若殿さまのお気持ちを御推察申し上げられ、お屋敷へ上がるについてはその気持ちがあるかどうか、お美年どのにしかとたしかめよと、わたくしにお申しつけなされました」
「待て、徳。わしはそのようなつもりではなかった。わしには鶴どのというお人がいる」
「お言葉返しをいたすようではございますが、お鶴さまは若殿さまの奥さまにおなりあそばすお方でいらせられます。それも、お鶴さまの御事はなぜか手間どりおりまして……恐れながら、若殿さまのお気色のお晴れあそばさぬこともあろうかと、花村さまは御案じ申し上げておいでございます。せめて、それまで、お心晴らしのおなぐさみにも……」
「一時のなぐさみに、美年を側妾にぜひと申すのか？」

「ほほほ……若殿さまとなされましたことが……もしお気に召されましたなれば、生涯おいつくしみ賜れば、お美年どのもどのようにお幸せか……」

と、お徳は底意を含んでねちねちとそそのかす。

「わたくしごときがこのようなこと申し上げましては、分にすぎるとおしかりをこうむるかも存じませぬが、若殿さまはあまりにも御潔白、お身持ち堅くいらせられます。御身分と申し、お年がらと申し、世の常の殿方なれば、とうに和子のお一人お二人はお持ちあそばすはず……また、それでこそ、お家のおためにもなろうことかと、花村さまはじめ皆様御案じ申し上げているかと存じます」

「いや、わしにはとうから鶴どのというお人があった。わしの心は鶴どののほか受け入れるべき者がなかったのじゃ」

「そのお心は、女の身にとり尊くもありがたいものに存じあげます。さだめし、お鶴さまもお感動あそばす時もございましょう。けれども、それとこれとは別、お好きなお方をお側妾にお持ちあそばし、一日も早く和子をおもうけあそばすのも、お家のおためではございますまいか」

「美年は好きじゃ。鶴どのによって満たされぬわしの心を、埋めてしかも余りがあろう」

「なれば、すぐにも御下命くださいませ。さよう取りはからわせていただきまする」

「待て、徳……しかし、美年は屋敷へ参ってから沈んでいるのう。病気とも思われん。心にそわぬことでもあるのではないか？　いや、あれほどに美しい娘じゃ、とうから父の定めた許婚でもあるのではないか？」

「いいえ、許婚などとそのようなお方は決してございませぬ」

「では、心ひそかに言いかわした好きな相手でもあるのではないか？」

「ほほほ……なんでそのようなことがございましょう。もし、そのような者がございますなれば、進んでお屋敷へ上がるはずがございませぬ。若殿さまのお情けをおうけいたします喜びを、なによりの幸せと進んで上がりましたのがなによりの証拠でございます」

「うむ……」

と、源之丞は目をそらせた。若い顔にほんのり血の気がさしている。

「女の幸せは、お慕い申し上げる殿御のお優しいお胸に抱かれることに過ぎるものはございませぬ。お美年どのの浮かぬ様子は、若殿さまがあまりによそよそしくあそばされるからではございませぬか」

世間を渡りあるいて色事のあの手この手を知りつくしているお徳が、毒気を含んでそそのかす。

初対面のその時から妙に敵意を感じているお美年を、どうあっても源之丞の手に抱かせてしまって、いきおい三四郎との間をしゃにむにひきさいてやりたい。あの美しいお美年の顔が、のっぴきならないわなにおちて、思わぬ男に膚をまさぐられながら、どんなにもだえ悲しむかと、憎々しい想像がお徳の血をかきたてている。

お徳は、源之丞の血が動いているのを横目で見上げながら、

「お美年どのは、今あちらにひかえて、御沙汰をお待ち申し上げております。夜のお支度、申し伝えてよろしゅうございましょうか？」

と、あおり立てるようにささやいたが、

「まもなく、鶴どのがみえる。屋敷へ遊びにみえられてしばらく滞在される。約束の日は、あと四、五日じゃ」

源之丞はそういいすてて、つと立ち上がった。

お美年は、お徳が源之丞の耳にそそるような毒気をふきこんでいるなど、まるでしらなかった。

お徳の方でも、お美年の前へ来てはそんなことはおくびにも出さない。

ただ、お美年は、源之丞の自分を見つめる目つきが、いっとはなしに少しずつ変わってきているのには気づいていた。

前には、じいっと真っ向から見つめて悪びれるところがなかったのに、このごろでは、視線が合うと、ちらっと向こうから避けて目をそらせたりする。

そのくせ、おそばへ召されることはいよいよはげしくなり、それも二人きりの場合が多かった。近習や侍女たちも、意識して同座をさけている気配がある。

「美年、焼けた花屋を建て直してつかわしたい」

と、源之丞がいった。

今にはじまったことではなく、お美年がここへきた当座から度々出た話だが、その度にお美年は断っている。

「わたくしがこのようにお手厚いお世話にあずかっております上に、重ねてそのようなこと、あまりにも果報が身に過ぎます。御辞退させていただきとうございます」

「辞退には及ばん。勘兵衛はわしの頼みをひきうけて不運な目に出会ったのじゃ。いわば、花屋の焼けた責任の一端もわしにある」

「お言葉、身にしみてありがたく存じますが、でも、それればかりはどうぞ……」

「わしはそなたに一命を救われた恩義もある。その礼心からも、せめて焼けた家を建てさせてくれ。わしはそなたが好きじゃ。美しく、けがれない清いすなおな顔も心も好きじゃ。そなたのために、何かしてやりたい」

と、熱っぽくいってじいっと見つめる。

男のように育ってきた色恋をしらぬお美年であった。三四郎に恋はしたが、淡泊なその人のお美年を見返す目つきは、いつもあっけないくらい淡々としていた。

そんな熱っぽい男の目というものをはじめて近々と見て、それとは知らぬお美年も、本能的に心が震えた。

「美年、わしはそなたの喜ぶ顔が見たいのじゃ。何かしてやりたいのじゃ。遠慮せず受けてくれ」

「美年はこのように喜んでおりまする。御恩をしみじみありがたく存じておりまする」

「しかし、そなたの顔は、なにか物憂わしげじゃ。何か心の浮かぬことがあろう？」

いわれて、どきっとしたお美年の心に、その時でさえわだかまっていたのは三四郎のことである。

「いいえ、別に……ただ、父のことが……」

と、お美年は絶え入るようにいった。

「この上、父の安否さえしれましたなら、これにすぎる幸せはございませぬ」

「うむ……そうか。勘兵衛のことが気がかりであったのか。無理もない。今、金森家をあげて勘兵衛の行方をさぐっている。ふしぎなことに、ようとして知れんが……しかし、しばらく待て。きっと、そなたの望みをかなえてつかわす。わしを信じていよ。信じられるか、美年？」

と、吐く息がお美年のほおを焼くように熱い。お美年は心の中で震えていた。なぜか恐ろしい。逃れたい。逃れることが出来るなら、すぐにも走って去りたいと思いながら震えていた。

明日はいよいよお鶴さまがおいでになる。

前々から準備の手はすすめられてはいたが、明日と迫って、金森家の中屋敷はその準備に追われて朝からざわめくほどの人の行き来であった。

今度はただお遊びにお立ちよりになるという前触れではあるが、やがては若殿の奥方になられるお方だし、ことによると、そのまま長いお滞在になるかもしれない。

御縁組みのことは家と家との間でとうからきまっていたことだが、なぜかお鶴さまのお気がすすまず、お二人で御対面のことさえのびのびになっていたのが、いよいよこの屋敷へお立ち寄りとあれば、御祝言もこの秋には早々あげら

れるのであろうと、侍女たちの間でもうわさがはなやかにかわされている。

榊原家からお使いがきたのが、その日の五ッ半（午前九時）ごろのことであった。

いよいよ明日の前触れであろうとお末ではうわさがしきりだったが、そのうち、客間の方から、使者を迎えた源之丞のあらあらしい声がふすまの外にまでもれてきた。

「では、鶴どのはおみえがないのか？」

「は、まことに申し訳ないことでございますが」

「なぜか？　あれほど堅い約束をされ、当家でもそのつもりで準備をいそいでいたに……いや、今にはじまることではない。これまでにも、何度となく破約を重ねられたではないか？」

と、高くなる源之丞の声にまじって、お使いの冷や汗を流さんばかりの恐れ入った声がぼそぼそと聞こえてくる。

「なにぶんにも、御病気にて……お気分がすぐれませぬ故、また日を改めましてと、さようお鶴さまが……」

「御病気か？　うむ、よい。では、わしがお見舞いに伺う」

「い、いや。それが、お医師もつとめて御安静にと申しておられ、姫にも病みやつれた見苦しいお姿をどなたにもお見せ申したくないと、かよう申されておいでございます。なにぶんにも、御病気のこと故……」

「見舞いもならぬか？　わしがお鶴どのの病気を見舞うこともならんというのか？」

「なにとぞ、お許しくださいますように……」

「うむ、分かった。鶴どのはこの源之丞をきろうてであろう。かさねがさねの違約は、さだめしこのわしがいやで、事をもうけてはのびのびにいたすのであろう。よい！　それまで言われては、この源之丞の顔がたたん。いやならいやでよい。当家から破約にしようぞ。鶴どのにそう伝えさっしゃい。この縁組みは今日限り……」

「あ、もし、若殿、お言葉がすぎましょう。お怒りをおしずめください」

と、そばにひかえている老臣があわててたしなめる声がした。

使者はひたすら言葉をつくしてわび入っている。

なだめられて、次第に怒声の低くなってきた源之丞は、やがてぷいっとその部屋から出てきた。

足音あらく廊下へ立ってきて、

「馬ひけッ！」

と叫んだその顔は、まゆをぴりぴり震わせながら蒼白であった。

庭先までひき入れた馬へ飛びまたがるやいなや、はっしとむちをくれて植え込みの中をけたたましくつっ走っていく。

あわてふためく供の連中をはるかに後へのこし、その姿は裏木戸からたちまち消えさってしまった。

今朝まで、お鶴さまを迎えるといって、お末のはしにいたるまで笑いさざめいていた屋敷うちが、とたん、しいんと静まりかえってしまった。

源之丞の怒りが、そのまま屋敷のすみずみにまでぴりぴり響いてくるようである。

お鶴さまと源之丞の許婚のお約束が出来たのは三年前だとだれでもしっている。それ以来、源之丞から榊原家を訪れることはあっても、お鶴さまから金森家へのおいではついぞなかった。

御祝言の日取りものびのびになっている。くわしいことは分からないが、なにかお鶴さまのお気がすすまないのだとうわさは専らであった。

まだお年若くて、女心が熟しておいでなさらぬためであろうと、のびのびになっていたのが、いつまでもそれでは困ると、金森家からきびしいかけ合いがあって、やっときまったのが今度の中屋敷へのおいでのことであったが……。

源之丞の腹立ちをさこそと察するだけに、その怒りが恐ろしい。屋敷内が息をひそめたよう

にひっそりしてしまった。

着のみ着のまま、怒りにまかせて駿馬をけたて屋敷から走り出ていった源之丞が、やっと立ちもどったのは、そろそろたそがれ近いころであった。

ふうふういいながらもどってきたお供の話では、品川宿から神奈川の先までむちゃくちゃにつっ走らせたため、さしもの駿馬もとうとうのめってしまったほどだったという。

屋敷へもどりついた時には、さすがにはげしい憤怒の形相は消えていたが、しかし、その不気味に沈んだ青白い顔色が内心の忿懣をまだありありと示している。

ふろを召されてから、

「酒だッ。美年を呼べッ」

と、吐き出すようにいいつけて、あらあらしく部屋へ入られる。

侍女たちはもちろんのこと、近習の若侍たちまで、ただもうはらはらして若殿の御気色をうかがうのに汲々たるありさまであったが、そうした一座の中で平然としているのはお徳とお美年の二人だけだったろう。

男の数をしりつくして、思う女にふられてやけになっている若い男など、うまくあしらうことはねこの子をあやすよりたやすいと思っているお徳はさることながら、お美年は、この屋敷へきた時から、心は屋敷のそとにおきわすれてきていた。

自分の周囲で何が起ころうと、そんなことはお美年にとってなんの価値もないし、関係もない。体は金森家の中にありながら、心は遠い今戸の空へくぎ付けになっていて、身のまわりで起こることにはまるでうわの空だったからである。

源之丞の酒の飲み方は尋常ではなかった。

おそばの者がちょっとでも手間どると、

「つげ、つげッ」

と叱咤する。

自分ばかりではない。周囲の者にも、飲めと強制する。いつもは無理をいわぬ若殿なのに、年若い侍女の末にまで大杯を押しつけて、必ず飲めと厳命する。

お徳は、大杯であろうと、けろりとして受けて、

「さあ、今度はお美年どのの番でございます。若殿さまの下されたお杯、お飲みにならぬという法はありません」

と、無理無体におしつける。

源之丞の酔った目が、そのお美年をじいっと見つめていた。

飲め飲めと酒を強いられて、お美年も三度に一度は受けねばならない。

飲んだふりをしてそっと杯洗へすてようとすると、

「あれ、何をなさいます。若殿さまの下されたお杯でございますよ」

と、お徳の目が意地わるく光っている。

そんな時、いつもなら、

「飲めぬものを強いるな」

と、そばからたしなめてくれる源之丞が、今夜にかぎって何もいわない。お美年を見つめる目つきにも、いつにも似げない荒々しいものが影を作っていた。

飲めない酒だから、お美年の顔はみるみる桜色に紅潮し、胸をはずませて吐く息も苦しげであった。

「よい色だ。酔うた美年はことさらに美しい」

と、源之丞の酒に血走った目が見すえている。露骨な男の目であった。

「ほんに、今夜のお美年どのは、日ごろにいやまさってお美しゅうございます。お鶴さまのお美しさにそのまま似通ったお生まれつきが、本当に幸せというものでございます」

と、そばから侍女がお追従らしくいったが、

「よせッ、鶴どののうわさを申すなッ」

と、源之丞の声は胸の中の鬱憤を吐き散らす

ように荒々しかった。

「飲め、もそっと飲め。酔うてわれを忘れたその美しい顔が見たい。酔って苦しくば、わしが介抱してとらせる。美年、飲め」

手ずから杯をさされては飲まないわけにはいかぬ。

源之丞の飲み方も浴びるように異常であった。酒宴がはじまってから、すでに二、三刻(四、五時間)もたったのに、源之丞は杯をはなそうともしないし、お美年を去らせもしない。

「美年は男まさりの気性じゃ。わしをねらって射かけた矢を、体を的にして防ぎくれた女じゃ。わしの側近に、だれ一人、美年の剛毅にまさる者がいるか」

と、その声も姿もいよいよ酔っている。

「しかも、その心根は優しい。それほどの手柄を、ごうも鼻にかける風情がないほど、女らしくつつましい。その心の美しさが、そのまま顔に照りかがやいているのじゃ。もし、出来るものならば、その身も心も、そのまま食うてしまいたいほどに美しい」

と、酔いがいわせる露骨な言葉だった。

すると、そばにすりよったお徳が、源之丞だけに聞こえるように、そっとささやく。

「お食らいあそばしませ」

「なに？　徳、なんと申したか？」

「お思いあそばしてままにならぬこととてないはずの御身分でいらせられます。ましてや、お美年どのは、とうから……このお屋敷へあがります時から、もうそれを待ちこがれておいでなのでございます。さよう、御意のほどを申し伝えますでございましょうか？」

源之丞は、お美年から目をそむけ、杯の酒をぐいとあおった。

その目が、すでに庭前をとざした宵闇の方をじいっと見つめている。

そのやみの辺り、もうろうと浮かび上がったのはお鶴さまの姿である。が、その姿はすぐ消

えさった。

「うむ……」

と、源之丞はふりむいて、お徳の方へ一つうなずいてから、さっと座をたった。

お徳が、してやったりというように、にやっと笑ったのをだれも知らない。

源之丞が部屋から出ていくと、お徳が老女花村のそばへすりよって何事か耳打ちする。

何もしらないお美年が、

「これでお部屋へさがらせていただきとうございます」

と、花村の方へ一礼し、座を立とうとすると、さりげなく老女にとめられた。

「ああ、これ、お美年どの。あなたはお部屋へさがらず、もうしばらくこちらに……」

「でも、わたくし、少々御酒を頂きすぎまして、苦しゅうございますから、これで……」

「案じはいりませぬ。お酒の酔いは、おふろを頂けばすぐなおりましょう。これ、お徳、お美年どのをお湯殿へ……」

お美年が何もいうすきも与えず、

「さあ、お美年さん、こちらへ……本当に、おふろへ入ると悪酔いはすぐさめますよ。御老女さまが折角ああおっしゃってくださるものを、御遠慮は失礼というものでございましょう」

と、うむをいわさずせきたてる。

案内された湯殿が、いつも入る召し使いたちの使うそれとは違って、ひときわ奥まった、お美年のはじめてみる場所にあった。

「本当に、お美年さんは御運のいい方……この湯殿は、お鶴さまがおいであそばすにつき、今度新しく建て増されたものなのでございますよ。御覧なさいまし、木の香もすがすがしいばかりお見事な……」

「まあ。これはあまりにもったいのうございます。わたくし、いつものあちらのお湯殿を拝借させていただきますから……」

と、まゆをひそめてしりごみするのを、ぐい

ぐいと中へ押し入れて、
「源之丞さまの折角のおぼしめしではございませんか。お断りするなどと……」
そんなことは絶対に許せませんといわんばかりにおさえつけてはなさない。
もう一人のお美年づきの侍女も待っていて、お徳と二人がかりでお美年の体へ手をかけ、もうするすると帯を解きはじめた。
お美年は、この屋敷へきてから、どんなに恥ずかしいと思い、うっとうしいと思っても、大概のことは我慢して、侍女たちのするように身をまかせていなければならないことを思いしらされていたし、それもしばらくの間の辛抱だと思って、じっと我慢する習慣がついていた。
湯舟はもちろん、床から壁まで結構な総ひのき造りの広々とした湯殿は、新しい木の香を豊かにたたえて、その豪華さを楽しむよりも、わが身の置き場にさえためらうほどお美年には息苦しい。
湯舟から出ると、待っていたようにお徳がうしろへ回って体を流しにかかる。
物心ついてからこのかた、親にも膚をさわらせたことのないお美年は、意地わるいほどくまなく全身をはい回るお徳の指先のこそばゆい恥ずかしさに、思わず身のすくむような思いでさえあった。
湯殿から出ると、隣が化粧の間になっている。
「では、お化粧を……」
と、お徳がまたうしろへ回った。
「わたくし、寝る間はお化粧はしない習慣でございますから……」
「いいえ、今宵は寝化粧をなさらねばなりません」
と、きっぱり申しわたすように言われた時、お美年ははじめてなにか異様なものを感じてはっとしたが、それでも間近に迫りつつある己の運命にはまだ気づかなかった。
「お徳さん、なぜそのようなことおっしゃるのです？ 今夜にかぎって、なぜお化粧をしなければならないのでございますか？」
と、お美年は思わず拒むようにふりかえったが、
「若殿さまのおぼしめしです」
と、お徳はすましていいながら、お美年をおさえつけて自由にはさせない。
「折角これほどの準備をあそばしてお待ち申し上げておりましたお鶴さまが、急においであそばさないことになりました。源之丞さまの御失望もさこそと御推量申し上げられましょう。折角の用意がむだになりました。お鶴さまによく似ておいでだと、とうからあれほどごひいきのお美年さんに、せめても今宵一夜、お鶴さまの代わりにその用意のものを使わせたい……と、源之丞さまがそう仰せ出されたのでございますよ。おたわむれと申し上げてはもったいないほど、ありがたいおぼしめしではございませんか。本当に、あやかりたいくらいです」
「まあ。そ、そのような……お鶴さまのお身代わりになど、そのようなもったいないことを……罰があたります。お徳さん、わたくし御辞退しとうございます。お願いですから……」
「ほほほ、何をおっしゃるのです。いまさら、おぼしめしにそむくことなど出来るものですか。なにも遠慮なさることなんかありません。今宵一夜ですもの、榊原家の姫君におなりになったつもりで、のうのうと手足をのばしておやすみなさいまし。さあ、じっとして……お鶴さまに負けないほど、お美しくお化粧なさらなくては……」
と、お徳はお美年をおさえつけたまま、さっさと仕事をすすめていく。
髪をとき流してうしろに結んだのは、閨へ入る大名の側妾が髪の中に凶器をかくしておかないために行う習慣だと、お美年は知りはしない。
気恥ずかしいほど濃いおしろいや紅の色も、いつの間にか、その膚にしみこんだ麝香の香気

も、お鶴さまの身代わりにこうまでしなければならないのかとうっとうしくは思っても、まさか男心を引くための化粧とはまだ気づかないお美年であった。

　化粧がすむと、また着替えをさせられる。肩につく緋色の縮緬から、白綸子の寝巻きまで、

「皆、お鶴さまのお召しになるはずだったものですよ」

　と、お徳がしたり顔にささやきかける。

「さあ、用意がととのいました。あちらへ参りましょう」

「どこへ行くのです?」

　と、さすがに虫がしらせるか、お美年は立ちすくんだようにいった。

「いいえね、ちょっと……源之丞さまにごあいさつに――」

「ええっ、なんでございますって? このような姿で、源之丞さまに?」

「ほほほ、びっくりなさることはありません。源之丞さまは、お鶴さまの衣装をめされて、お鶴さまそっくりになったお美年さんを、是非一目見たいとおっしゃってなのでございますよ」

「でも、そのようなこと、わ、わたくし、いやです」

「何をおっしゃるんですよ」

　と、お徳は小突くようにしてお美年を次の間へ押し出した。

　そこには老女の花村が待っている。

「おう、支度が出来ましたね?」

　と、花村はお美年を、頭の上から足のつまさきまで、じろりと見回した。

「お美年どの、用意がよくば、さあ、こうおいでなされ」

　と、花村は先に立って廊下へ出た。とたんに、お美年の背後にお徳たち侍女二人がぴたりとより添う。

　御老女の表情は、何を話しかけ、どう拒むすきさえないほど厳かであった。

　廊下を二つ三つ曲がって、とあるふすまの前に立った。お美年がはじめて見る奥まった一間である。

「お美年どの、まかり出ましてございます」

　と、花村はそういって、ふすまをあけるなり、

「心得ておろうが、粗相があってはなりませぬぞ。くれぐれも若殿さまの御意にそむかぬように……」

　と、お美年の耳元でささやいた。

　お美年は、その部屋の奥に明々ともっている絹行灯を見た。垂れた御簾越しに夜具がのべられ、そのそばに白衣の寝巻き姿の源之丞が座っている。

　瞬間、さすがにお美年の顔色が変わった。疑惑と恐怖がむらむらっとこみあげて、思わず一、二歩うしろへずりさがる。

「何をためらっているのです。恐ろしいことはない。若殿さまはお優しいお方じゃ。なされるよう、すなおにしておればそれでよい」

「で、でも、わたくし……」

　と、お美年が拒むようにいおうとするのを、お徳がうしろからとんと突きやるように中へ押し入れた。

　ふすまがしまる。

　宿直の侍女たちであろう、部屋の片すみにひかえていた女が二人、同時に左右から寄ってきて、お美年の両手をつかんでうむをいわさず御簾の中まで連れていった。

　源之丞の酒に濁ったひとみが真っ向から見つめている。

　男のひとみであった。男が女を求める時のあのひとみであった。

「美年……」

　と、源之丞が熱っぽい声でいった。

「そなたは、わしが好きか?」

　好きかと聞かれて、いいえとはいえない。

「は、はい……」

お美年は真っ青になった顔を伏せ、石のように体を堅くした。
「そうか、よい。それでよい。美年、こちらへよれ」
「わ、わたくし……わたくし……」
「恥ずかしいことはない。恐れることもない。わしはそなたが好きじゃ。鶴どのの身代わりに、一時の慰みものにすると思うな。鶴どのは鶴どの、そなたはそなたじゃ。いや、鶴どのなど、もうどうなろうとかまわん。わしがそなたをどのように愛しているか証拠を見せたい。一時のみだら心と思うな。分かってくれるな、美年」
源之丞の手が伸びて、お美年の肩先をつかんだ。
「あ！　おはなしくださいませ」
と、お美年は身をもんであとずさりした。
「おぼしめしは身に余るほどありがたいことには存じますけれど……で、でも、わたくし、存ぜぬことでございます、い、いえ、お許しくださいませ。御意……御意には、お従いなりかねまする」
「な、なにッ？　美年、なんと申した？　もう一度申してみい！」
「お許し下さいませ。このまま、下がらせていただきとう存じまする」
お美年の顔は死人のようであった。
「なに？　このまま下がらせてくれと？　すりゃ、そなたはなんでここへきた？　なんのために、そのような姿をして、わしの寝間まで出向いてきた？」
「何も存ぜぬことでございます。何も存ぜぬまま、ただお鶴さまのお身代わりに……」
「鶴どのの身代わりなどと申した覚えはない。そなたはそなたじゃ。好きな女を側妾（そばめ）にする。美年を閨（ねや）に呼べと申したのじゃ」
「何も存じませぬ。ただ、お鶴さまのお身代わりに、そのお召し物をまとってごあいさつをせいと申しつかりまして……」

「黙れッ。鶴どののことを申すなッ！」
源之丞の形相が変わってきた。
「美年、そなた、わしを好きだと申したことは偽りか？　わしの愛をうけようと、望んで屋敷へ参ったのは偽りかッ？」
「なんで偽りなど申し上げましょう。身に余る御親切をお恵みくださいます若殿さまをおきらい申し上げるなどということがあってもよいものではございません。好きと申しあげました心に偽りはございませぬが、で、でも……」
「はっきり申せッ。美年、はっきり言えッ」
「で、でも、お側妾にあがろうなどと、つゆ思ったことはございませぬ。ただ、父勘兵衛の行方のしれるまで、家を焼かれて住むところもないわたくしの身をお哀れみくださいまして、屋敷へ参っていよと仰せくださいましたお情けのお言葉に甘え、こちらにおじゃましておりましたものを……」
「花村はおらぬかッ。花村ッ、徳を呼べッ」
と、わめきざま源之丞はすさまじい形相ですっくと立ち上がった。
とうから予期して待っていたのだろう。
「徳はこれにひかえておりまする」
と、ふすまの向こうで、お徳の落ち着きはらった声が答えた。
「徳、うぬはわしをたぶらかしたか？　美年の存じもよらぬことを、ぬけぬけとわしにつげ口したのかッ？」
「滅相もございませぬ。お美年どのはたしかにそう申されました。若殿さまのお情けをお受けし、おそばに暮らせるほど身にすぎた幸せはないと、たしかにさよう申されました」
「しかとそうか。間違いないか？」
「なんで偽りなど申し上げてよろしゅうございましょう。もし、それが偽りであらば、八つ裂きの御処刑をうけましてもお恨みには存じませぬ。若殿さまの御寵愛（ごちょうあい）をおうけし、そのまま金森家の奥に暮らせるよう、なにぶんよろしく頼

みますと、二度三度くりかえし申されたほどでございます」

「まあ、お徳さん……」

お美年は啞然として、しばしは口もきけない様子であった。

「わたくし、い、いつそのようなことを……」

「いやでございますよ、お美年さん。あんなにはっきり二度も三度もおっしゃったのに……いまさら、そのようなことをおっしゃって、きっとわたくしに何か恨みをふくんで、わたくしをおとしいれるおつもりなのでしょう。あんまりです、あんまりです」

と、白々しい涙声になる。芝居をやらせては一枚も二枚もうわてのお徳だった。

「騒がしい、やめろッ。徳、さがれッ」

と叱咤した源之丞は、血走った目でかあっとにらむようにお美年を見おろした。

「美年、そちゃこの源之丞をだましたのかッ?」

「い、いいえ、滅相もございませぬ。なんでおだましなどいたしましょう。で、でも、わたくしの存ぜぬことでございます」

「徳の申したこと、しかと聞いたか? 徳が根も葉もないことを故意に作って、わしをいつわったというのかッ?」

「存じませぬ。存じませぬ。わたくし、何一つ、そのようなこと、お聞きしたこともお答えしたこともございませぬ。お、お許しくださりませ。わ、わたくし、本当に存ぜぬことでございますッ」

と、お美年は必死に訴える。

濃い化粧の下に青ざめた女の顔が美しい。石のように体を堅くしながら、しかし、あまりのことに気もうわずったそのひざの辺りがしらずしらずゆるんで白綸子の寝巻きがはだけ、膚につくものの緋の色がちらっとのぞいている。

お鶴さまのつれない仕打ちにやり場もないほどむしゃくしゃした忿懣を、お美年を愛することによってまぎらわそうと、思いつめてこのどたん場まで来てしまった男の目には、おびえてすくんだ女の姿さえ心をそそる以外のなにものでもなかった。

「よい、知らねばそれでよい」

と叫んだ源之丞の声はうわずっていた。

「そちゃこのわしを好きというたのう?」

「……」

「しかといえ。好きかきらいか? 好きというたが偽りではないか。しかといえッ」

「は、はい……」

と、お美年は死人のように青ざめた顔を恐怖にひきつらせながら、あえぐようにかすかにいった。

「よしッ。では、あらためて所望する。その体と心をわしにくれッ」

「ああ。そ、それは……」

「金森源之丞があらためて所望するのじゃ。今宵かぎり、そちをわしのものにする」

「も、もし、若殿さまッ。お、お願い……お願いでございますッ」

「一時の慰みにすると思うな。この源之丞はさような男ではない。終生、誓って情けをかけよう。異存はないなッ?」

「そ、それは……お願いでございますッ」

源之丞の腕がのびて、ぐっとお美年の手首をつかんだ。

「あ! お、お許し……」

とあえいだ声も、引き倒された男のひざの上にあった。

もだえる女の姿態はかえって男の目に悩ましい。酒の勢いをかりた男の心に、ここまできては理も非もなかった。

今朝からのやり場もなくいらだっていた忿懣を、お美年をめちゃめちゃにもみつぶし、征服することでみたそうとする源之丞の目も腕も足も何かに憑かれたようであった。

もみ合う男と女の間から、緋の色が崩れるようにぱっと散った。

「あっ！」
とお美年が叫んだのは、男の指先が膚にふれたとたんである。
それまで、相手を身分高い男と思って、こらえにこらえていたお美年のつつしみが、その時、思わずけし飛んだ。
男の胸を突いたお美年の力はすさまじかった。かつて、無頼漢二人に組み伏せられ、危うく手込めになりそうになりながら、その男たちを突きのめして逃げた女の力であった。
「う！」
と、源之丞の体がうしろへのけぞった。
「うぬ！」
と、わめきざま突ったった源之丞は、満面憤怒の形相であった。
胸を突いたお美年の力には、男というものを憎悪する女の怒りが思わずこもっていた。
こんなはげしい抵抗をうけたことはかつてない。いや、源之丞にとっては、それは抵抗ではなくて、敵対行為ともうけとられた。
「美年ッ！　おのれ、この源之丞を突きのめしたなッ！」
「お、お許しくださいまし……」
と、お美年は真っ青な顔をふるわせてあえいでいる。
「このわしをだれじゃと思う？　小娘の分際をもって……優しくすればどこまでつけあがるかッ」
「御、御無礼、お許しくださいまし。わ、わたくし……」
「よってたかって、このわしをなぶりものにする気じゃなッ。偽りたばかって笑いものにする気じゃなッ」
「滅相もございませぬ。わ、わたくし……若殿さまを、なぶりものなどと……そ、そのようなことを、なんでわたくしが……」
「だまれッ。好きというたその口の下から、よくもこの源之丞に恥をかかせたなッ。このわし

を突きのめすほどきろうたうぬが、そらぞらしくなんで好きというた？　いやさ、なんでそのような姿でぬけぬけとわしの閨まで参った？」
「わたくし、本当に……ほ、本当に、何も存じなかったのでございます。若殿さまを、お好きとお答え申し上げましたのは、決して偽りではございませぬが……」
「それで、このわしを突きのめしたのか？　このわしに恥かかせたのかッ？」
「お、お許しくださいませ」
「わしも男じゃ、おのれに突きのめされて、このままはひかん。美年、覚悟しておろう。意地にかけても、わしの女にするッ」
「あっ、お願いでございます。お、お願いでございます」
「あくまでいやか？　あくまでさからうか？　よしッ。わしの意に従わねば許さん。そこへ直れッ。成敗してくりょうッ」
源之丞は、やにわにまくら刀をひっつかみ、ぎらっと鞘をはらった。
お鶴さまのことでいらだっていたものが、お美年にまであざむかれたという怒りに重なりあって、理も非もなくたけりたった源之丞の顔も姿も悪鬼のようであった。
「美年ッ、そこへ直れッ」
と、仁王立ちになって白刃をふりかぶる。
「お、お許しくださりませッ」
と、お美年は青白な顔を必死に源之丞の方へ向けた。
「若殿さまを好きと申し上げましたことに、つゆ偽りはございませぬ。ただ……ただ、わたくしには、お、お許しくださいましッ。すでに夫と決めたお人がございますッ」
「な、なにッ？　夫と決めた男があると？」
朱をちらしたような源之丞の顔がみるみる青白んでいく。
「そやつはだれだ？　何者だ？」
「三四郎とおっしゃるお方でございます。加賀

美……加賀美三四郎と……」
思わずお美年の口をついて出たのは三四郎の名であった。
「美年、その三四郎とやらは何者かッ？　武士かッ？」
と、源之丞は仁王立ちのまま、うめくようにいった。
憤怒の目ににらみすえられて思わず口にしてしまった三四郎の名を、いまさら取り消すわけにはいかない。
「御、御浪人でございます。相馬藩の御浪人のお方でございます」
と、顔を伏せながら、ためらいがちにいうお美年の肩先は、目に見えるほど震えていた。
「しかと、そうか？　しかと、約束をかわした夫じゃな？」
「は、はい……」
「父も承知の上か？　勘兵衛も許した許婚者かッ？」
「父も……父も、承知の上にて未来の夫と約束したお方でございます」
「美年、顔をあげろ。わしの顔を見て返答せい。しかとそれに相違ないなッ？」
「は、はい……しかと……」
「もし、偽りであらば許さんぞッ。ただはおかんぞ、美年ッ」
「決して、偽りごとではございませぬ」
「うむ……」
歯をかみしめながら仁王立ちになっている源之丞の顔は、もう真っ青であった。
仮にも夫と決めた男のある女に、無体をしたとあっては源之丞の誇りが許さない。しかし、ままにならない女としって、かえってそれをわがものにしたい恋情が、ことさらむらむらっとこみあげてくるのもどうしようもなかった。
夫があるならばあるで、なぜもっと早くそれを明らかにしなかったのか。このぎりぎりの瀬戸際まで、男の心を引きつけあおりたてておい

て、どたん場へきてくるっと身をひるがえすとは、なんの遺恨があってのことか！
わがままになれた男の心は、ましてや怒りに狂って理も非もなく、抱くこともならず切ることもならない目の前の女が、ひたすら憎くてならなかった。
「さがれッ！」
と、源之丞ははき出すようにわめいた。
「けがらわしい女めッ、さがりおろうッ！」
どうなることかと、生きた色もなくおろおろしていた宿直の侍女二人が、と聞くと、走るようによってきて、お美年の両手をとって引ったてた。
廊下へ出ると、騒ぎをきいてはせつけたのか、老女の花村が二、三のお付きをともなって立っていた。
物もいわずお美年をとりかこんで、小突くようにして歩いていく。
引いていかれたのは、お美年の部屋ではなく、窓一つないじめじめした納戸らしい一間だった。
お美年をつきのめすように押し入れた花村が、
「とんだことをしておくれだね。そなたのしたことがどのように大それたことかお分かりか？」
と、血相の変わった顔をぶるぶる震わせながら前に突っ立った。
「ただではすまぬ。いいえ、ただではすませませんぞ。それとも……美年、思い直して若殿さまにおわび申し上げるか……さあ、返答をしッ」
と、手にした扇の先でお美年の肩の辺りをぐいぐいっと小突きあげる。
しかし、お美年は、もう覚悟したのだろう、石のように黙したまま何もいわなかった。

飛龍の香箱

今戸の「舟友」から北へ四、五町いった橋場

の長昌寺に近い辺りに、「神伝一刀流　千川万作」という大看板をれいれいしくかけた町道場がある。

　神伝一刀流なるものがどんな剣法かはしらぬが、ここの道場の主、千川万作の腕っぷしの強いのと、そのけいこの荒っぽいのは近所でも評判であった。

　もともと、江戸もはずれの、しかも寺町の間に出来た道場である上、けいこがやたらに荒っぽいというのでほとんど新規の弟子入りなどはないらしく、道場ではめったに竹刀の音もきこえないような寂しさだが、それにもかかわらず、素姓もよくは知れないような人相のよくない食客らしい浪人者がいつもごろごろしていて、ときにはその数が十数人を数えることがあるという。

　一体、それだけの人数がどこをどうして食っているのか、どうせ筋の通った話ではあるまいとは思っても、別に近所をいたぶるわけでもないから、近所の人たちも敬遠するだけで、さして悪いうわさも立ってはいない。

「万作、結局、勘兵衛の行方はしれんのだな？」

　と、そういったのは正面にどっかり座っている五十年配の赤ら顔の武士であった。

　金森家の江戸お留守居役で、柴田新五右衛門という男だ。もともと、小納戸役の小禄から経上がって、ここ二十年ほどの間にたちまちお留守居役にまでついた一癖ある男だった。

　その隣には、中屋敷の若殿源之丞さま付きの老女花村が座っている。これは新五右衛門の姉にあたる女である。

「さよう、手をつくして探させるだけは探しましたが、花太郎地蔵の地下道から消えたまま、いまだ行方がしれませぬ。残念なことをいたしました」

　と、万作は舌打ちしながら答えた。

　道場の奥まった一間、部屋の二方をとりかこんだ庭が長昌寺の墓地につづいている。密談にはうってつけの場所であった。

「勘兵衛はたしかに花太郎の正体をしっていたはずだ。少なくとも、うすうす感づいていたと思われる」

「花太郎の正体を明らかにして、きゃつさえ仕留めてしまえば、あとぐされがなくてのうのうと仕事が出来ましたものを、まことに面目次第もございませぬ」

「まったく、まずいわい。貴公らしくもないまずいことをしたのう。しかし、勘兵衛一人で脱走することが不可能であるとすれば、なにやつか手引きしたやつがあるはずだが、万作、心当たりはないか？」

「それにつきまして、とうから目をつけておりました加賀美三四郎という素姓不明の浪人者が、勘兵衛の部下であった仙太と申す下っ引きをつれましたまま、先夜、寄寓先の舟友を出まして行方がしれませぬ。二人とも舟友へもどった様子のないところから見ますと、あるいはきゃつらのしわざかもしれませぬ。ともかくも、勘兵衛を自由に泳がしておいてはあとがうるそうございます。それには、何をおいても、中屋敷にあがっております娘のお美年という女をこちらへ召しあげて人質にとっておくほかないと思いますが、なんぞよい工夫はございますまいか？」

「そのことよ、万作。今日、わしらがここへ参った話というのも、実はそのことだが……」

　と、新五右衛門は意味ありげに花村とちらっと目を見合わせながら薄笑いした。

　額に刀傷のあとがある。笑うとその傷跡がゆがんで陰気な影を作った。

「万作、わしはのう、常々も申しているとおり、小大名の留守居役などで生涯を終わりたくないなどと、そのようなけちなことに満足しているわけではないのだ」

　と、新五右衛門は脇息へ身をもたせながら、糸のように細いその切れ長な鋭い目を、じいっ

と庭先へ向けた。

「しかも、わしが金森家の留守居役などに安閑と居座っているのは、別に目あてがあってのことと思え。思えば遠い昔だのう。今からいえば、すでに二十数年前。そのころ小納戸役であったわしは、ふとしたことから、金森家の古文書を整理中、容易ならざる秘密につきあたったのだ」

「例の銀の小鈴のことでございますか？」

と、万作は息をのんで新五右衛門を見つめている。

「そうだ。銀の小鈴のことだ。金森家に男子が生まれると、なぜ長男に花太郎という幼名をつけ、しかも、男の子それぞれに家伝の小鈴を守り袋に添えて与えるのか？

　金森家のしきたりとしてだれ一人怪しむこともなかったそのことに、ふと疑惑を抱いてから、わしは懸命になってそのことを追及してきたわい。

　じゃま者があれば、手段をめぐらして、そやつもしりぞけた。あらゆる方策をめぐらして、二十数年、ただただその秘密をとくことに全精力をかたむけてきた。あらかたのことはすでにわかっている。

　わしの野心は、その金森家の秘密をつきとめ、だれ一人しる者もないその真相を己のものにすることにつきている。語って聞かせれば、万作、貴公などさだめし目をむいて驚くほどのことだわ。

　あの花太郎地蔵の地下道をつきとめ、谷を越えた向こうの出口の真上にひそかに小屋を建てもうけて、貴公らに花夜叉以来の秘密の道路をくまなく調べさせたのも、つまりは問題の核心を明らかにするための一つの手段であったと思え」

「しかし、新五右衛門さま、あの地下道では、花夜叉のどくろを一つ発見しただけで何一つ得るところございませんでした……」

「たずねるもののなかったのは、わしの眼鏡ちがいであっていたしかたはない。しょせんは、問題の銀の小鈴を手中に入れるしかないことが分かっている。しかも、金森家に伝わる銀の小鈴は三個あるはずだ。二十余年前その内二個が紛失し、所在の明らかなのは、殿から源之丞さまに賜ったその一つだけである」

「もう一個、お高という老婆の手から勘兵衛の娘お美年の手に移ったものがございます」

「うむ。あのお高がいかなる素姓のやつかはまだ知れんが、近ごろ江戸の花太郎と名乗るくせ者が出没すると聞き、きゃつに出会って秘蔵していた小鈴を手渡すために、いつかは花太郎が地蔵堂の前に来ることを予想して、あの辺りをしげしげと行き来していたのに違いない。してみると、お高は花太郎にゆかりのものであり、花太郎の正体も小鈴の価値もよく知る女であったと思われる。いずれにしても、花太郎と名乗るくせ者が出没するようになってはもう猶予はならん。しかも、きゃつが『花』の字の予告をしておびやかしている相手は……いずれも、かつて金森家の秘密に連座したやからだからのう。やがては、このわしの身辺にも姿をあらわすであろう。猶予がならんとは、万作、そのことなのだ。

　いや、危険なのはただ花太郎一人のみではない。加賀美三四郎とやらいう素姓のしれん浪人者もこのことに立ち入ってきたというし、勘兵衛のこともある。いやいや、それ以上に危険なのは……若殿、源之丞さまだ。お付きの間島惣兵衛辺りの差し金であろう。先夜、直々、地蔵堂下の地下道へ立ち入られたそうではないか。

　惣兵衛は昔のことを存じているはずだ。とうからわしのことを白目をもって盗み見ているやつだ。いつ、どのような手をうって、わしをこのことから突き放そうと企てるかもしれん。もはや、ぐずぐずはしておられぬ」

　新五右衛門は表情を動かさずいった。その冷たさが、心の中で何を考えているか分からない

という底の知れない不気味さをもっている。
「しかも、良し、小鈴の行方が二つまで明らかになった。一つはお高の手からお美年にわたり、もう一つは源之丞さまのお手にある。三個だ。この二個を手に入れて突き合わせれば、わしの求めているものを得るのもさして難事ではあるまい。少なくとも、その小鈴を手に入れておけば、秘密のかぎを独占したに等しい」
「さればこそ、いっときも早くお美年を引っさらってしまった方がよいと申し上げているのです」
「しかし、そう簡単にもいくまい。のう、姉者?」
と、花村の方をふりかえる。
「そのとおりです。お美年には源之丞さまがきつい御執心、しかも、御意を損じて今きびしく監禁されておりますものを、そうやすやすと屋敷のそとへ誘い出すことはなりますまい」
花村はそういって肩をよせた。
「その上、お美年は小鈴を持ってはいないのです。屋敷へ参った当座から、係の女に意をふくめて、事にかこつけては、その膚につく最後の布の一枚までくまなく調べさせましたが、小鈴の影もありません。屋敷へあがる以前、どこかへかくしおいたものと思います」
「お美年のことはいそがんでもよい。お美年が中屋敷にあるかぎり、何者も小鈴を手に入れることはなるまいし、また、お美年など望めばいつでもどのようにもなろう。それよりも、もう一個の小鈴の方だ」
「と仰せられますのは、源之丞さまの?」
「そう……」
新五右衛門はにやっと歯を見せて笑った。
「あの小鈴は、以前、本屋敷の御宝蔵の中にあったものだが、ある時、人を使ってひそかに盗みとらせようとはかったことがある。しかし、それを仕損じて以来、惣兵衛辺りの入れ知恵であろう、源之丞さま自ら中屋敷にお持ち去りに

なり、お身近く厳重に御秘蔵するようなことになった。お居間の隣室にある三重にかぎのかかる御用箪笥の中に、飛龍を浮き彫りにした黄金の香箱があるはずだ。小鈴はその香箱に納められていると知るだけで、ちょっとやそっとでは手をふれることもならん」
「では、絶望だと仰せなので?」
「いいや、そうではない。どのように厳しく保管されあるものでも、ねらえばすきはあるものだ。しかも、万作、今こそそれをねらう絶好の機会だと思え。のう、姉者、そうであろうが?」
と、新五右衛門は花村と顔を見合わせ、またにやっと笑った。
「万作、話というのはここだ。よう聞かっしゃい」
と、新五右衛門はひとひざのり出しながら声をおとした。
「貴公も知ってのとおり、過ぐる夜、源之丞さまのお居間の雨戸へ『花』のはり紙をしてうせたくせ者があった。また、若殿が隅田川へ船を浮かべられてのお夕涼みの折、御座船めがけて矢をいかけたやつがあったときく。その矢羽根にも『花』という字がしたためてあったとのう。なにやつの仕業か、その詮議はどうでもよろしい。このことこそ、わしらのつけめだ。
中屋敷は目下そのことにとりつかれ、おびえている。少なくとも、花太郎とよぶ怪物が何かしでかしはせぬかと疑心暗鬼のほど、およそ推察もつこうというものだ。
さあ、ここだ、わしらの乗じるすきと申すのは……」
「なるほど、新五右衛門さま。では、われらが花太郎になりすまし、中屋敷を襲って小鈴をかすめとれと、さよう仰せなのでございますな」
「ははは……さすがにのみこみが早い。花太郎が襲撃したと見せかけ、屋敷中が驚き騒いでいるどさくさの最中なれば、それほどの仕事をするのはさして難事でもあるまい。しかも、わし

らに疑いのかかるおそれもない」
「それに、源之丞さまは、お鶴さまのこと、お美年のことで、心も空の御様子です。周囲のものもそのために心をとられ、お屋敷中が落ち着きを失っています」
と、花村が口をはさむ。
「その上、姉者にも中からひと働きしてもらう。外と呼応して騒ぎたて、あらぬ方へ注意をそらせ、何かと貴公らの手引きもしよう」
「なるほど、よくのみこめましてございます」
「万作、ひきうけるか?」
「必ずお引きうけいたします。万が一にも仕損じなどはいたしませぬ。ただし、事と次第によっては、多少の手荒なことも致しましょうが、お許しいただけますか?」
「やれ……」
といって、新五右衛門は糸のように細い目をぎらっと光らせた。
「じゃまなやつは残らず殺ってよい。ことに……ことに、あの白髪首はじゃまなやつだ。間島惣兵衛は、機会があったら、どさくさにまぎれ、見事に息の根をたってしまえ」
「かしこまりました。花村さま、よろしくお手伝いくださいますよう……」
「分かっています。あの屋敷うちには、わたしの息のかかった腹心の者が幾人もいます。ことに、お徳と申すのは、新参者ながら若殿さまのお気に入りでもあり、心のきいた女。とうから手なずけてありますから、そのお徳にいい含め、きっとうまくお手引きさせます」
あとは三人額を集めてのひそひそ話がつづいている。
やがて、頭巾に顔を包んだ新五右衛門と花村が、万作の案内で、庭から裏木戸の方へそっと出ていこうとした時、どこからともなく面白おかしく弾きたてる胡弓の音がかすかに聞こえてきた。
「あれは?」

と、新五右衛門が怪しむように耳をそばだてたが、
「ああ、あれは呉龍角と申す薄ぎたない唐人の飴売りでございますよ」
と、万作はこともなげに笑った。

その日、源之丞は一日中酒びたりであった。どうにもならない鬱憤を、酔いによってまぎらわすしか手段がなかったのかもしれない。
夜更けて、酔いつぶれた源之丞を寝所へ移した時には、近習も侍女たちもくたくたに疲れきっていた。
屋敷の灯が消えたのは九ツ(十二時)すぎであったろう。とたんに、屋敷中が熟睡におちたように森閑と静まりかえった。
しかし、そうした連中にひきかえて、ことさら緊張して邸内を見回っている一団があった。先頭にたって指揮しているのは間島惣兵衛である。
「花」という字をかいた不吉な張り紙が現れて以来、毎日毎夜の警戒ではあったが、ことに今夜はひどく緊張している。
予定どおりいけば、今日こそお鶴さまがこの屋敷へおいでになるはずであった。なんのためか、源之丞の居間と、お鶴さまの寝所のそとへ、同時に同じ張り紙を残していったということは、偶然であるはずはない。おそらく、源之丞とお鶴さまの二人を目あてに、何かたくらんでいたとしか思われない。
今日という日が一番危険だと、とうから予測していたことだ。お鶴さまのおいでがなくなった今となっては、あるいは、不敵なくせ者も計画を変更して事も起こらないかもしれないが、油断は出来ないと、惣兵衛は自ら警固の連中の先頭にたって指揮している。
九ツ半(午前一時)——
もう、江戸中が熟睡におちた時刻である。
金森邸内には灯の気もなく、風のそよぎさえ

聞こえなかった。

　惣兵衛は、邸内の要所要所に人数を配った上、自ら数人の若侍を引き具して、足音を忍ばせながら順次見回っていく。

　丁度、中庭に近い御宝蔵の間近まできた時であった。

「間島さまッ、間島さまッ……」

　と、声を忍ばせながらやみの底をはうようにして走ってきた若侍が、

「怪しいやつが……たったいましがた、土塀(どべい)をのりこえて御邸内へ……」

　と、息をはずませながら訴えた。

「黒装束。しかと分かりませんが、屈強な男の影でございます。ただいま同役が見張っております」

「よしッ」

　と、惣兵衛は声を殺しながら、うしろの侍たちをふりかえった。

「あくまでさとらせるな。無人と思わせ油断させて、十分に引きつけておいてから、一気にひっくくってしまうのだ」

　いいすてて、われから身を低く沈め、小走りに歩き出した。

　宝蔵の陰までくると、その個所をうけもった警固の侍が二人、植え込みを盾にとって、じいっと向こうを見張っている。

　惣兵衛の姿を見ると、その一人が、急いでかなたの塀際のやみを指し示した。

　しかとは分からないが、たしかにそのやみの中にうごめいているものがある。

　と思う間もなく、黒々とした人影が、やみをはなれて、月明かりの中をまっすぐに宝蔵の前まで走りよってきた。

　彼は、あたりの気配をうかがってから、ゆっくりと懐をさぐり、とり出した紙切れを土蔵の白壁へ張りつける。

　その白紙にかいた「花」という字が、ちらっと惣兵衛たちの目に映った。

　それから――くせ者は宝蔵のとびらの前へたって錠前に手をふれた。

　ぴいん……と音をたてて錠前がはずれた。

　かすかにきしみながら土蔵のとびらがあく。

　その奥にももう一枚網戸があって、錠前がとりつけてある。

　とたん、その人影は、ぎくっとしたように背後をふりかえって、あたりのやみへじいっとさぐるような目をむけた。なにか怪しい気配を感じたのであろう。

　その影が大地をけたてて走り出したのは、まったくだしぬけであった。

「あっ、逃がすなッ！」

　と、思わず叱咤(しった)した惣兵衛の声は夜気をつんざくようであった。

「出あえッ、出あえッ、くせ者だッ」

「御宝蔵にくせ者が立ち回ったぞうッ」

　気負いたってそのあとを追いながら、若侍たちが口々にわめきたてる。

　ぴぴぴッ……！

　と、けたたましく吹きたてたのは、事態の急をしらせる呼び笛であった。

　くせ者はまっしぐらに走っていく。

　もう、土塀(どべい)をのりこえる余裕がなかったのであろう、中庭をつっ切って、建物が入り組んで濃い影を作っている表回りのやみへ逃げこむつもりらしい。

「くせ者だッ！　かたがた、出あえッ！」

　と、叫びあう声があなたこなたからわきあがるようにその行く手をふさいだ。

　すると、その時、その騒ぎにまるで呼吸をあわしたように、屋敷の中の御用部屋と思うあたりが突然かあっと明るくなり、つづいて、めらめらっとはげしい勢いで炎をふきあげるのが見えた。

「火ッ！　火だッ！」

「火事じゃ！　火事じゃぞうッ！」

　と、あわてふためいた叫び声が入り乱れて聞

こえてくる。

いつの間にこんなに大きな火の手になったのか、火勢はたちまち御用部屋を焼きぬいて次の間へ広がっていく。

何もかも予測しないだしぬけのことだったから、みるみる屋敷中が混乱にまきこまれてしまった。

「落ち着けッ。くせ者にはかられまいぞッ。火につられるなッ。くせ者を見失うなよッ」

惣兵衛はやっきになって叱咤したが、その混乱が手足まといになって、いつの間にかくせ者の影を見失ってしまったらしい。

「遠くは行かん、この辺りだ。どうでもくせ者をさがし出せッ」

惣兵衛はじだんだふみながら、しかし、はっと気づいたのは源之丞のことであった。

あの火の発した様子では、ただの失火とは思われない。だれか御用部屋に放火したやつがあるのだ。くせ者は一人ではない。屋敷の中にもいるはずだ……。

手近にいた二、三の者に、

「わしに続けッ！」

と、一言わめいてきびすをかえすなり、奥庭めがけてまっしぐらに走り出したが、とたん、間近に大気を引き裂くようなひゅっという矢羽根の音をきいた。

どこから射かけてきた矢か、皆目見当もつかない。身をかわすすきもなかった。

「うっ！」

とうめきながらのめった惣兵衛の太腿の辺りに、白羽の矢が深々と突きたっている。

気丈に起き直って、その矢をひきぬいた惣兵衛は、羽根の上に「花」とかいた一文字をかっとにらみすえながらせきこんでわめいた。

「貴公ら、早く、奥へ！　若殿を御守護せいッ」

花太郎の襲撃をそれと予期していた人たちでも、まさかこれほどの事態が起こるとは想像してもいなかったし、まして、なんにも知らない

連中が手もなく混乱のうずにまきこまれてしまったのも当然のことであったろう。

その上、惣兵衛が傷ついて指揮する者を失っては、くせ者を追う者も、火を消す者も、ただわけもなく右往左往するばかりである。

騒ぎをきいて起き出てきた源之丞は、不興げな顔を露骨にむうっとさせて、寝所の縁先近く突っ立っていた。

宿直の侍女や近習、それに若殿の身を危ぶんではせつけてきた番士たちが、ひしとその周囲をとりかこんでいる。

しかし、その連中も中庭から向こうの騒ぎに気をとられているばかりで、すぐ間近に起こりつつあったことにはだれ一人気づいた者もなかった。

源之丞の寝所からほど遠からぬ渡り廊下の戸が一枚、音もなくこっそりと開いた。

同時に、手燭をもった女の影が、そっと庭先をうかがいながら、その灯を何かの合図でもあるように、二度三度、宙に円を描きながらゆっくりと動かした。

と――

ほど近い植え込みの陰からむっくりと立ち上がった真っ黒な人影がある。やみよりも濃い黒装束の武士であった。

まるで、合図を待ちかねてでもいたように、滑るように戸口まで寄ってくる。

「だれ？　万作さまの？」

と、早口に尋ねた手燭の主は、まぎれもないお徳の声であった。

「うむ。志賀権太夫……」

と、男の声がささやくように答える。志賀権太夫といえば、千川万作の配下で、かつて花屋を襲い、お美年を誘拐しようとした男だ。

「うまく参りました。花村様のお指図どおり、御用部屋に放った火がお屋敷中の人をその方へ集めてしまっております」

「うむ。表の方もうまくいったらしい。この辺

りには人影もない」
「御案内いたします。さあ、お早く……」
と、お徳は落ち着きはらって指図する。
黒装束は、ひらりと身をおどらせて、渡り廊下の中へ消えた。
廊下を渡りきると、奥とよばれる源之丞の居間や寝所のある一郭であった。
お徳は手招きしながら、そっと一間へ入っていく。
「ここが若殿さまのお居間……あれが問題の御用箪笥でございます」
と、声を忍ばせて、
「かぎをお持ちですか？」
「うむ。柴田新五右衛門さまからお預かりした合いかぎを持っている」
「では、わたくしはこれで……」
お徳は手燭をわたすと足早に部屋から出ていった。
黒装束は、壁の中へ厳重にはめこみになっている大きな用箪笥の前に歩みより、用心ぶかくかぎをつかって錠前をはずした。
とびらをあけると、またかぎのかかった中とびらがあり、さらにその奥の引き出しにもかぎがかかっている。
黒装束は苦もなくその小引き出しをあけた。
一間おいて隣が御寝所である。その縁先には、源之丞を囲んで十人近い人間の目と耳があったはずだが、だれ一人気づいた者はなかった。
探すまでもない、小引き出しの中には一目でそれとしれる小箱が入っていた。
唐国から渡来した由緒のある品でもあるのだろうか、黄金のふたには飛龍の姿を浮き彫りにしてある。
さすがに万作の片腕といわれる男だけあって、落ち着きはらっていた。
ふたをはらって中をたしかめる。真綿にくるんだ銀の小鈴が一つ、たしかに入っているのを認めた時、はじめて覆面の陰でにやっと笑った。

開いた引き出しやとびらを一つ一つしめてもとどおりかぎをかけるのも、ふてぶてしいくらいの落ち着きようであった。
ふっと、手燭の灯を吹き消す。
廊下へ出た。
しかし、その瞬間、権太夫はなにかぎくっとしたようにやみの中に棒立ちになった。
思いもかけず、だれかすぐ間近に立っている人間の気配を感じたからだ。
息をとめて、じいっとやみの中をすかしてみたが、何者か分からない。しかし、たしかに、だれかがやみの中に突っ立って、こちらをまたたきもせず凝視しているという気配を感じた。
権太夫は次第にいらだってくる。
くそッ！
片手を腰の刀の柄にかけたのは、事と次第によったら一気に切ってすてるつもりだったのだろう。
鯉口を切りながら、ぐいと一歩前へ出る。
とたん、夜の大気がふわっとゆれた。
横へ一歩飛び抜けながら抜きうちに一刀をさっと横に払ったのは、さすがに腕に自信のあるやつであった。
しかし、刀は空を切って、むなしく、前へたたた……とのめっていく。
ふわっとゆれた夜気が頭の上からのしかかるようにかぶさってきたと思ったのが、その男の意識に残った最後のものであった。
「うっ！　ううう……」
鋭く、低く、一声うめいて、権太夫の体が前のめりに崩れていく。急所に当て身をくらったらしい。
崩れていく体を、だれかが宙でしっかりと抱きとめた。
それっきり、かさっとも音をたてない。
「お前さん、大丈夫かい？　あったかい、飛龍の箱が？」
と、少しはなれたやみの中からささやくよう

に聞こえてきたのはお徳の声である。立ち去ったと思ったお徳は、さっきからそこに身をひそめて様子をうかがっていたらしい。

「たしかにちょうだいしたぜ。これが、ぬれ手にあわというやつだ」

ふふふ……と、別の男の声が低くあざわらった。

「江戸の花太郎を看板に大芝居をうってうまくやったつもりの連中が、あとでそうと分かったら、さぞしょっぱい顔をするだろうねえ」

「おれの名前をかたりアがって、横合いからちょろっとうめえ仕事をしようなんざアふてえ了見だ。ざまア見やがれ」

「お前さん、そいつをどうするつもりだい?」

「かまうもんか。そこらの庭先へ転がしておけ。いずれ夜露にぬれて息をふっかえすだろう。うまく逃げ出すとも、どじを踏んでふんづかまろうとも、お好きなようにしてもらうさ」

いいながら、権太夫の体を庭へ投げ出すつもりだろう、開いた雨戸の透き間へ月明かりを浴びながらひょいと立った人影は、濃い唐桟縞のしりっぱしょりにほおかぶり。いつか上野黒門町の質商丸屋の奥座敷へ忽然と姿を現した江戸の花太郎と名乗る不敵な男だった。

「お徳、勘兵衛の娘のお美年はどこにいる?」

と、その奇怪な男がきいた。

「母屋の方のお納戸にとじこめてあるのさ。そとからかぎがかけてあるから、どんなにじたばたしたって逃げられるものかね」

「よし、分かった」

「お前さん、一体あの子をどうする気だい?」

「おれの素顔を見しっている女だ。そのままにゃアしておけねえ。行きがけの駄賃にさらっていくんだ」

「ふん。うまいことをいって、妙なことをしたら承知しないよ」

「とんだどたん場の痴話げんかか。愚痴や悋気はゆっくり聞くぜ」

「それに、あの子は小鈴をどこかへかくしているんだよ」

「人目のねえところへさらっていって、言わせることをいわせたら、きれいさっぱりと片付けてしまう。それに、てめえのためもある」

「なぜ?」

「考えてもみろ。これだけの騒ぎをおこしたんだ。あとで詮議がはじまれば、屋敷の中に通謀したやつのあることはすぐ知れらア。真っ先に嫌疑のかかるのは、お徳、てめえだぜ。どさくさの最中に、お美年の姿を消して、その方へ疑いを向けるんだ」

いいかけた男の声がぷっつりととぎれた。

けたたましい足音が、母屋の方からこっちへむけて走ってくる。

「お徳、消えろッ」

小声でささやいたのとほとんど同時に、やみの中に突っ立っていた二人の気配が、ふっとかき消すようになくなってしまった。

走ってきた家臣の一団は、なんにも気がつかず、灯をかざしながら御寝所の方へなだれていく。

花太郎の影は大胆不敵な落ち着きはらった足取りで屋敷の中を横切っていった。

納戸部屋の辺りには人けもない。その板戸の前に立った花太郎は、おもむろに錠前へ手をかけた。

すさまじい力である。めりっとかすかな音をたてただけで、錠前はねじ切れてしまった。

板戸をあけた。中は真っ暗であった。

その暗い片すみに、お美年は化石したように座っている。思いもかけないいまわしい運命に見舞われて、さすがに意地も張りも砕けたのか、それとも思いつめた何かに心をうばわれていたのか、屋敷中の騒ぎも耳に入らぬ様子であった。

だれか板戸をあけたことはしっている。しってはいたが、あれ以来、屋敷中の者のお美年に対する態度ががらりと変わった。だれに会うこと

もいとわしい。顔を会わせるのもいやであった。

背後にだれか立っている。何もいわない。

さすがに、お美年は怪しんで、つと顔をふりむけたが、とたん、頭上からどっと覆いかぶさってくる男の気配を感じた。

「あ!」

と、たった一声叫んだだけである。

男の腕が首にまきつき、そのままぐぐっと力をこめて絞りあげてきた。

さからう暇もない。むなしく手足をあがかせたまま、たちまち意識を失っていった。

男は落ちつきはらっていた。

権太夫の手から奪いとってきた御用簞笥の合いかぎと、小鈴をぬき去った香箱の空き箱とを片すみへ投げやると、お美年を横抱きにしたまま、のっそり部屋から立ち去った。

一瞬、その姿は吸いこまれるようにやみの中に消えさってしまう。

金森邸内には、まるで暴風のあとのような静けさが立ちこめていた。

ただ、騒ぎが大きかったのと、屋敷内に内通者がいたといううわさがぱっと広がって、やがてはきびしい詮議がはじまるだろうと、だれもかれも気味わるそうに顔を見合わせてすくんでいる。

居間に入った源之丞は、かさねがさねの不快な出来事に、周囲の者がぴりぴりするほどふきげんであった。

「間島さまはただいまあちらでお医師のお手当をうけておいでございますが、思いのほかおけがは軽いようにうけたまわりましてございます」

と、老女花村は心労にさも疲れはてたという表情で報告する。

「そのほかにはけが人もなく、御用部屋の出火もぼやでことすみまして、ほっと安堵いたしましてございます」

「花村ッ、火の気のない用部屋からなぜ火が出たのか? 何者か放火したとのうわさを耳にしたぞッ」

源之丞はかみつくように叱咤した。

「恐れ入りましてございます。仰せのとおり、何者か油を注いで火を放った様子でございます」

「屋敷のうちに内通者がいたのじゃ。吟味せい。仮借なく取り調べよッ」

「間島さまからもその旨申しつかりましてございますが、若殿さま、それにつきまして御覧に入れたい品がございます。これ、徳、その品を御前に……」

その言葉を待っていたように、うしろにひかえていたお徳が源之丞の前へうやうやしく差し出したのは、飛龍の香箱と御用簞笥の合いかぎであった。

一目見るなり、

「う!」

と、うめいた源之丞の顔は、たちまち憤怒に赤黒く変わっていく。

「それをいかがいたしたか? だれがみだりに取り出したか? その香箱には、わしにとって……いや、当家にとって……かけがえない貴重な品が納めてあるのじゃぞッ」

「恐れながら、騒ぎにまぎれ、何者かそのかぎをつかって御用簞笥をひらき、この香箱をとり出した者があると存じます。念のため、御用簞笥の中をお調べ願わしゅう存じます」

さも心配そうにおろおろしながらいう花村の声に、源之丞はいよいよいらだって、

「これ、だれぞ調べてみい。早くせいッ」

と、気ぜわしくわめいた。

近習の一人がそのかぎ束をとって御用簞笥をひらいたが、引き出しの中はからである。

「若殿さま、その香箱の中にはどのような品をお納めあそばしてございましょうか?」

「鈴じゃ。当家に伝わる家宝の小鈴じゃ」

「まっ?」

と、花村はおおぎょうに身をふるわせてみせた。

「そ、それは一大事でございます。若殿さま、この中は、か、からでございます。鈴なぞ、影も形もございません」

「花村、申せッ。事の次第をいえッ。その香箱はどこにあったのじゃ？　何者が手にかけたかッ？」

「そ、それが……も、申しわけございませぬ」

「花村ッ、ありていにいえッ」

「申し上げます。も、申し上げます。その香箱とかぎ束は、あ、あのお納戸部屋の中に……お美年をとじこめておきましたお納戸部屋の中に……」

内通した悪事がばれるかどうかの瀬戸際だから、花村の芝居は真に迫っていた。

「徳、申し上げなさい。香箱を見つけた時のことを、そなたから直々に申し上げなさい」

と、花村はお徳の方へ意味ありげに目配せする。

しゃにむに、嫌疑のすべてをお美年におしかぶせてしまえという合図であった。

「恐れながら、申し上げます。さきほど、御用部屋の火を消すために駆けつけます途中、お納戸部屋の板戸がはずれかかっておりますのをふと見かけ、もしやと思いのぞいてみましたところ……その香箱とかぎ束が……」

と、お徳のせりふのうまさは、花村へ輪をかけて真に迫っていた。

「美年はいかがいたしたか？　納戸部屋にとじこめてあったという美年はいかがいたしたのじゃ？」

「お、お美年どのは……存じませぬ。お納戸部屋はからでございました」

「なに？　美年がおらん？　納戸部屋にはかぎがかけてあったのであろう？」

「錠前はねじ切られてすててございました。恐れながら……何者かが錠前をねじ切って、お美

年どのを逃がしたのではございますまいか？」

「すりゃ、今宵のくせ者と美年が通謀していたと申すのかッ？」

「若殿さま、申し上げます」

と、花村が口をはさんだ。

「今にして思えば、一つ一つ胸におちる節がございます。美年は、徳やわたくしに対しまして、若殿さまの御寵愛をえたい、お側妾にあがりたいなど申しながら、その実、あのような……まことに不埒な御無礼を申し上げ、わたくしどもまことに心外に存じておりましたが、とうから、今宵のことを目当てに、うまうまとわたくしどもをたぶらかし、お屋敷へあがったのではございますまいか。そして、いつの間にやら外と通謀し、御用箪笥の合いかぎを作りあげ、示しあわせてあったくせ者と力を合わせて御家宝を盗みとり、騒ぎにまぎれて逃げさったのではございますまいか」

「これ、花村ッ、徳ッ、美年をさような女と思うか？　そのような悪事をたくらむ証拠があるか？」

「申し上げます」

と、ちゃんと前から打ち合わせてあったとおり、お徳が口をはさんだ。

「承りますところでは、お美年どのは父の許した許婚の男があるなどと申し上げた由にございますが、それは真っ赤な偽りで、わたくし、よく存じておりますが……ありていに申せば、私通していた男は別としまして、晴れて夫と呼べるようなお人は決してなかったはずでございます」

「すりゃ、美年がわしを偽ったというのか？　徳、しかとそうか？」

「決して偽りは申しませぬ。しかも、お美年どのが親の許した夫と申し上げました加賀美三四郎というお人は……先夜、若殿さまお船遊びの折、矢をお射かけ申し上げたくせ者ではないかという疑いのかかっている男でございます」

「な、なにッ？　徳、しかとそうかッ」
「なにとぞ、勘兵衛の部下の仙太と申す男をお調べくださいませ。その男からきいた話でございます。お美年どのがその矢を防いでさも若殿さまのお命をお救い申し上げたようなそぶりをしましたのも、実はこのお屋敷へ住み込むための不敵な策略ではなかったろうかと……」
源之丞は怒髪天をつく形相でわめいた。
「草の根わけても、美年をさがし出せッ。う、うぬッ！　あの痴れものめが！」

非人小屋

麻布の台を南へくだって吉田神道屋敷を出はずれると、もう人家はばったりとだえて、ただ一望、ゆるやかに起伏する雑木のしげった丘と、田畑、荒蕪地がつづいている。三田村と呼ばれる一帯だ。
ただでも寂しい辺りだのに、ことに近ごろたちのわるい非人の一団が移住してきたといううわさもあって、昼でも避けて通る人が多いくらいだから、夜になれば人っ子一人影も見かけない。
その雑木林のしげった丘と丘の間のことに寂しい辺りに、掘っ建て小屋が三つ四つたっていて、その中間にたき火がもえている。
「平六、いるか……」
と、そのたき火の火影の中へぬうッと入ってきたのは、さっき金森家の中屋敷からぬけ出してきたほおかぶりの男であった。
その片腕にはお美年を抱えている。
後ろ手にくくりあげ、さるぐつわをかましてあるのは、途中で正気づいて声をたてられるのを防ぐためであろう。
「おう、龍兄いじゃございませんか」
と、たき火のそばにいた男がふりむいた。
小牛のように肩のはったひげ面である。
たき火の向こうにも、同じように人相のよくない男が四、五人、車座になって酒をのんでいる。

近ごろ、この辺へ移住してきたたちのわるい非人とうわさされているのはこの一団であろう。
風采も小屋もさも非人らしく住みなしているが、その実、そこを根城にしてよくないことを重ねている盗賊の一団だとはだれも気づいていない。
その男――龍太郎は、お美年の体をわきへ投げ出しながら、どっかりたき火のそばへ座って、ゆっくりとほおかぶりの手ぬぐいをとった。
ひどくのどがかわきやがって。一杯くれ」
「兄貴、どぶろくですぜ」
といいながら、平六は茶わんをわたす。その目が、物ほしげにじろじろとお美年をみつめていた。
一目で武家屋敷の奥女中としれる。その胸元もすそ前もはだけたままに赤いものが崩れ散り、むき出している白い膚がたき火の火影にことさら白々とさえかえっている。
平六ばかりではない。残った四、五人の露骨な視線が、いっせいにその方へくぎ付けになっていた。
「珍しいねえ、兄貴。今夜は一体どうした風のふき回しです？　え、浮気はいけませんぜ。お徳のやつはすごく悋気ぶけえからなア」
ひげ面をにやっと崩しながら、お美年の方へあごをしゃくってみせた。
この平六というのは、お徳の兄にあたる男だ。
「つやっぽい話じゃねえんだ。この女ア大事な金のつるなんだ。例の、江戸の花太郎の一件のな……」
龍太郎はむすっとしてどぶろくをあおっている。
「当分あずかってもらうことになるだろう。どうせ、いてえ目にあわせねえでは吐くものも吐くめえし、ちょいと手間のかかることは覚悟せずばなるめえ」

「結構なお話でさア。手間がかかるほど面白いやね。だいぶ女っ気のきれていたとこだ。念を入れて、ゆっくり泣かせてもらおうじゃアありませんか」
と、平六はにやりにやり笑っている。
お美年は正気にかえっていた。
お納戸部屋でだしぬけに襲われて、しゃにむにのどを絞りあげられ、そのまま気を失ってしまって何一つ覚えてはいない。
すごい力で情け容赦もなく絞られた首の辺りがまだはげしく痛んでいて、正気にかえってももがく力もなかった。
わずかにあえいでいるお美年の姿を、どぶろくをあおっている茶わんの陰からじろっと見流して、
「平六、さるぐつわをとれ」
と、龍太郎がいった。
「おいきた……かわいそうにねえ。かわいいほっぺたに食いこんでいるじゃアねえか」
と、手をのばしてさるぐつわをはぎとった平六は、思わず、うむ……と低くうめいた。
「こりゃアすげえようないい女だ」
龍太郎は冷たくせせら笑っている。
「こいつア花屋の勘兵衛の娘だぜ」
「へえ、うわさにきいた花屋小町ですかい。なるほど、いい女だ。すげえような器量だ」
と、平六はうめくようにいいつづける。
「おい、お美年、こっちを向け」
龍太郎は、お美年の髪をわしづかみにして、その顔をぐいと自分の方へねじむけた。
「この面を見ろ。ようく、おれの面を見るんだ。どうだ思い出したか？」
きゅっとくちびるをかんだまま、きかぬ気でにらみかえしたお美年のひとみには、みるみる愕然たる驚きの色がひろがってきた。
「先ごろ、黒門町の質屋で会ったことがあったなア。おれだ、江戸の花太郎だよ」
夢中ではねおきようとしたが、髪をわしづかみにされている体は、むなしく足先で宙をけっただけである。

「じたばたするなッ」
と、龍太郎は、髪をつかんだ腕に力をこめ、その細い首が今にもねじ切れるかと思うほど小突きあげて、
「騒ぎゃア騒ぐだけ、痛い目にあうだけだ。どうで、おれの面を見知ったやつをそのままにゃアしておけねえが、すなおにすりゃア別に思案もある。おい、お美年、おれのいうことをよく聞くんだ」
かっとにらんだ目のすごさは、さすが男を男とも思わないお美年でも、思わずぞっとするくらい殺気だっていた。
「おれにゃア二つ野心がある」
と、龍太郎はどすのきいた太い声でいった。
「まず、金森家のだれかれだ。憎い野郎どもだ。恨みをもっているんだ。その恨みに応じて必ず返礼をせずにゃアおかねえのさ。もう一つは、金森家の秘密をあばきたてて、当然おれの所有になるはずのものを残らずこっちへもらいてえのだ。いいか、おれア江戸の花太郎だ。遠い昔から、江戸の花太郎のために伝えられた遺産は、当然おれがもらっていい権利があるんだ。その二つの野心は、何がどうあろうとやりとげずにはおかねえ。おれが、今日という日まで、明けても暮れても思いつめてきた望みなんだ。だれであろうと、それをさまたげることは許さねえ。勘兵衛もそうだ。てめえもそうだ。加賀美三四郎というあの素姓のしれねえ浪人者もそのうちだ。おれの仕事のじゃまだてするやつは生かしちゃおかねえんだ。いいか、お美年、よくそれを覚えておけ。覚えておいて、おれのきくことに返事をしろ。その体をなますに切りきざんでも、いわせることはいわせずにゃアおかねえのだ。さあ、しっかり覚悟をきめて返事をしろ。お美年、銀の小鈴をどこへやった？　どこへかくしたのか？　さあ、どろをはけッ」

と、小突かれながら、
「な、何をするんですよッ。その手をおはなしッ」
と、お美年はくやしそうに歯がみする。
「さあ、いえッ。すなおにいってしまえッ」
「お黙りッ。手込めにあって、だれが口をきくものですかッ。そ、そんなこと、知りません。たとえしっていたからって、教えるものですかッ」
「あの小鈴は、当然おれの所持に帰するものなんだ。お高が江戸の花太郎に渡してくれとあずけたものを、なぜ横取りする？　おれのものをおれがさがしているんだ。すなおにいえッ」
「ち、畜生ッ。はなせッ。そ、その手をおはなしったら！」
「おれア気がみじけえんだ」
龍太郎は、片手で匕首をぎらっと引きぬき、それをお美年の顔の先へ触れんばかりに近づけた。
「くどいことはやめだ。さあ、すなおにどろをはくか、それともいやか？　返事によっちゃア、この匕首がものをいうぜ。鼻をそぎおとすか、それとも目をえぐりとるか？　さあ、性根をすえて返事をしろいッ」
　目の先で匕首の切っ先がぎらぎら光っている。顔をそむけようとしても、男の片手に髪をわしづかみにされた首は、大地へぬいつけられたようにびくとも動かない。
「ち、畜生ッ。何をしようとむだだからおよしッ。一度いわないといったら、どうあろうと言やアしないんだ」
「きっとか、お美年。いわせずにゃアおかねえぞ。その顔を切り刻んでも、必ずいわせずにはおかねえぞ」
　匕首の先がちくっとほおにふれた。おどしではない。その男の目は、どんな残忍なことでもやりかねない殺気をおびていた。
　しかし、相手が高飛車に出れば出るほど、あとにひけないのはお美年の気性である。無法な手込めにあっているという屈辱が、怒りになって全身に燃えた。
「お美年、もう一度きく。さあ、いえッ」
「いやだッ。畜生ッ、死んでもいうものかッ！」
　ぐいっと男の指先に力が入った。つかまれた髪の毛が、そのまま根先からむしりとられるかと思うような力であった。
　一度お美年の顔からはなれた匕首の先が、ぴりぴり震えながら、さっとひとみに向かっておちてきた。とたん、
「おい、待ちねえよ、兄貴……」
　と、薄笑いをうかべながら制したのは平六であった。
「兄貴は気が短くていけねえ。大事なことを聞き出す前に死なしてしまったら玉なしじゃアねえか。だめだ、だめだ。その娘っ子は、どうして、そんなことくらいじゃア口を割りっこねえよ。娘っ子を責めるには、もっとやわやわと辛抱強くやるんだな。まあ、おれにまかしておけ」
　と、平六は龍太郎をおしのけて、そのひげ面をにやにやさせながら、ぬっとお美年の顔の方へ近寄せてくる。
「おい、ねえさん、心配するなよ。恐ろしい目にあわせてかわいそうになア。なアに、おれが痛くねえようにやんわりと聞いてやらアな。
　ねえさん、念のために聞くが、どうだい、すなおにしゃべってしまうかい？　その方がお前のためだと思うんだがなア……」
　と、ねこなで声でいいながら、酒くさい息をかっと鼻先へ浴びせかけられて、お美年は返事をするさえ腹が立つというように、さげすんだ目つきできっとにらみつけていた。
「なるほど、気の強い女だ。そうかい、どうでもしゃべらねえ覚悟だというんだな。そんな目つきでにらみつけたりして、あとで後悔するんだぜ。いいのかね？　え、どうしても手数をかけたいというんだな？　かわいそうだが、仕方

がねえさ。おい、皆、ねえさんのなわをとくんだ。丁寧にするんだぜ。痛くねえようになア……」

ふふふ……と薄笑いしながら、そばにいた手下の連中に目配せする。

心得顔にばらばらっと飛び出してきた荒くれ男が三人、きれいな娘っ子の体をなでさするのも時にとっての役得とでもいいたげに、先を争って手を出し、足をふんがけ、まるで子供が人形でももてあそぶ時のように、お美年の体を向こうへ転がし、こっちへ引きよせして、その胸に食いこんでいるなわを解きすてた。

なわをといたといっても、お美年を自由にしてやる親切気からではもちろんない。

よってたかって大地へおさえつけながら、その背の下に押しまげられてかくれていた両腕をつかんで引き出すと、あらためて両の手首を一つにして縛りあげ、その腕を頭上へ高くのばしたかっこうのまま、一人が大地へ縫いつけたようにおさえつけた。

胸にからんだなわはなくなったが、お美年は仰向いたまま起き上がることも出来ない。そうまでされて、悲鳴もあげなければ哀れみも請わず、かっと両眼を見開いて荒くれ男どもをにらみつづけているお美年は、よくよく気性のかったたちなのであろう。

「安心しな。いてえことはしねえ。兄貴みてえに、目玉をえぐるの、鼻をそぐのと、色消しな乱暴はやらねえから安心していなってことよ」

平六は薄笑いしながら、手ごろな青竹をとりあげて、仰向いているお美年の上へのり出してきた。

両手を頭上へのばしているから、たもとの陰の八つ口が開いて、膚につく赤いものの間から雪のように白い皮膚の色がちらっとのぞいている。

平六の手にした青竹の先が、八つ口をくぐってその膚にふれた。

「そら、ちっともいてえことはねえだろう?」

「ああ、あーっ!」

と、お美年の口から思わず鋭い声がほとばしったのはそのとたんであった。

青竹の先が、わきの下へ、ぐいぐいっとえぐるにつれてめりこんできたからだ。

「痛かアねえよ。なあ、お美年ちゃん、そうだろう。痛かあねえさ」

すうっと膚の上をくすぐるように滑った青竹の先が、着物の中をくぐって、今度は胸乳のふくらんだ辺りをぐりりっとえぐる。

「う、うっ、ううう!」

悲鳴なんぞあげるものかと、必死に食いしばった歯の間から思わず漏れて出るうめき声には、まるで五臓六腑をひきさかれでもするようなむごたらしさがあった。

平六は、えぐりつけた青竹の先をそのままにして、ぐいぐいっとこね回すように力をこめる。

ぴりっ! と音がしたのは着物の裂けた音であった。

「痛かあねえよ、痛くねえさ。のう、ねえさん、ちっとも痛くなんかねえやなア……」

平六は薄笑いしながら、青竹の先をまたわき腹の辺りへ滑らせている。

「う、ううっ!」

うめきながら、お美年の体ははじかれたようにのけ反っては、またぐたっと地面へ落ちた。

逃れようとして体をねじっても、両手首を大地へ縫いつけられているから、ただ下半身をむなしくあなたこなたへとのたうち回らせるだけだ。

平六は落ち着きはらって、青竹の先を上へ下へと滑らせては、ぐりぐりっとえぐりつける。

その度に、すそをけって宙にもがき狂うお美年の脛が、たき火の火影の中に無惨なくらい白白とさえていた。

息が逼迫し、胸のあえぎが波をうつように高まってくるにつれ、そのうめき声はかすれたよ

うに低くなってくる。
　歯をくいしばり、目をつりあげたその顔は、べっとりと一面の脂汗であった。
「驚いたなア、強情な女もあったものだ。大概の女なら、この辺であらかた恐れ入るもんだが……」
　と、平六は龍太郎の方をふりかえった。
「兄貴、このまま続けてると気を失うぜ」
「いいから、やれ。何がなんでも、どろを吐かせてしまえ」
　酔いの回ってきた龍太郎が吐き出すようにいう。
「そうかね。やるかね。お美年ちゃん、お聞きのとおりだ。かわいそうだが、もうちょっとかわいがらせてもらうぜ。早く吐き出すものを吐き出してしまった方がためなんだがなア」
　よいしょと腰を浮かしたのは、その青竹の先にもっと力を入れるためであろう。
　もうお美年の口からはうめき声ももれなかった。うめき声の代わりに、くくくっとのどの奥からかすれたような音がもれてくる。
　平六ががらっと青竹を投げ出した。
「やれやれ、とうとう気を失ってしまやアがった」
　男たちの目がぐったりと動かなくなったお美年の姿をいっせいに見つめていた。
「とうとう一言もしゃべりゃアがらなかった。こんな女ははじめてだ。驚いたねえ」
　と、平六が落ち着きはらっていう。
「しかし、正気づいたらもうひと責めやる。これはきくんだぜ、兄貴。どんな強情なやつだって、二度目にやられたら、もう意地も張りもなくなるもんだ。まあ、おれにまかせておけよ」
「きっとやるか？」
「乗りかかった舟だ。兄貴の気のすむようにやってみせる。まあ、正気づくまで少し待ってもらうんだな」
　平六は手下の男たちに目配せした。

「女を向こうの小屋へほうりこんで、逃げられねえようにしっかりくくっておけ。すてておいてもすぐ正気にかえらア。さあ、兄貴、その間にゆっくり飲み直そうじゃアねえか」
　男たちがお美年を抱えて小屋の方へ運んでいくのを、龍太郎はふきげんな目つきでじろっと見送りながら、
「どうせ、生かしちゃアおけねえ女だ」
　と、独り言のようにいった。
「おれのじゃまをするやつア、皆同じ運命に落ちこむんだ。花屋の勘兵衛ももう死んだぜ、平六」
「え？　兄貴がやったのか？」
「いいや、加賀美三四郎という浪人者にやられたんだ」
　冷たい声でぽつりといった。
　暁は迫っていたが、まだ雑木林の中は暗かった。
　その暗い林の陰から、草むらの中をはうようにして、小屋の方へじりじりにじりよってくる人影がある。勘兵衛の下っ引きの仙太であった。
　花太郎地蔵の地下道で勘兵衛を刺し殺し、その死骸(しがい)をさらって逃げたと思われるくせ者のあとを追って飛び出して以来、この男はこの男なりに必死だった。
　勘兵衛を殺したのは三四郎だと思いこんでいる。
　何をおいても、そのことをお美年に知らせなくてはならない。
「だからいったことじゃアねえんだ。おれの目に狂いはなかったんだ。お美年ちゃん、今度こそ性根をすえて親分のあだをうってもらわねえじゃなりませんぜ」
　と、お美年に会って胸の中にあるふんまんをたたきつけてやりたい衝動にいきりたっている。

それ以来、金森家の中屋敷の周囲をうろついて、なんとかお美年に会う機会はないかとねらっていたが、屋敷の奥深くていのよい監禁同様にとじこめられているお美年に会う手段などは皆目なかった。

ところが、今宵、その中屋敷に思いもかけない奇妙な騒ぎが起こった。

仙太は物陰からその一部始終を見つめていたが、その騒ぎの正体をはっきり判断するより先に、怪しい男の影がお美年をさらって脱け出てくるのを見かけた。

そのままあとをつけてきて、今までの出来事も物陰からじいっと見つめていた。

じっと辛抱していたかいがあって、失神したお美年をたった一人小屋の中へ投げこみ、男たちがたき火を囲んで酒をのみはじめたのは絶好の機会であった。

仙太ははいずりながら小屋のうしろへ近づいてくる。暗やみと深い草むらが都合よくその姿をかくしてくれた。だれも気がつかない。

しめた！

と、小躍りするような胸騒ぎをじっとこらえながら、仙太は後ろ口からこっそり小屋の中へ忍びこんだ。

「お美年ちゃん、お美年ちゃん……」

真っ暗な小屋の中をすかすようにして、そっと声をかける。

「おれだ。仙太だ。分かりませんか。おれア仙太ですぜ」

やみの中で、お美年がこそっと体を動かす気配が聞こえた。投げ出された時、正気にもどっていたお美年は、まだもうろうとしている知覚の中でその声を聞いたのだ。

「お美年ちゃん、仙太ですぜ。仙太が助けにきましたぜ。聞こえませんか、お美年ちゃん」

手さぐりに忍びよってきた仙太の指先が、その肩先にふれた。

「ああ、仙太さん……」

と、まだあえぎの静まらない声で、お美年がかすかに答えた。

「もう大丈夫だ。気をしっかりもつんですぜ」

と、仙太は気ぜわしそうにお美年を縛ったなわめをたぐっている。解きすてようとするのだが、手首と足首をくくったなわが小屋の柱につないであって、おそろしくむすびめが堅い。

仙太はあせりながら、

「お美年ちゃん、大変なことが起こったんだ。気をしっかりもって聞いてくだせえよ」

と、いっときも黙ってはいられないように、熱い息を吐きかけてきた。

「びっくりしちゃアいけねえぜ。勘兵衛親分が死になすったんだ」

「……」

「お美年ちゃん、親分は死んだんですぜ」

と、仙太はあえぐようにくりかえした。

「……」

お美年はごくっとつばをのんだだけで黙っている。仙太のいったことがすぐには理解できないというふうであった。

「しっかりしてくだせえよ。お美年ちゃん、勘兵衛親分はおなくなりになったんだ。しかも、人手にかかって殺されなすったんだ」

「えっ……な、なんですって？　仙太、なんですって？」

「しっ！　声をたてちゃアいけねえ。すぐ向こうに大勢いるんだ。今、なわをときます。畜生ッ、暗くて分からねえ。いやに厳重に縛ってありゃアがる」

仙太はあせっている。あせればあせるほど、なわの結びめは手に余った。

「仙太、お、おとっつぁんがどうしたって？　殺されたんだって？」

「気をしっかりもってくだせえ。性根をすえて聞いておくんなせえ。そうなんです、親分は人手にかかって殺されたんです。むごたらしい。野良犬でもやっつけるように、ぐざっとやられ

ちまったんです」
　その時の無念さが一時にこみあげてきたように、仙太のいい方ははげしかった。
「本当かい？　お前、ほ、本当なんだろうね？」
「お美年ちゃん、こんな場合にだれがうそや冗談をいうものか。あっしゃア、そのことを、いっときも早くあんたに知らせてえばかりに、ここ幾日間どんなに苦労したかしれやしねえんだ。いっときも早くお美年ちゃんに知らせて、いっときも早く親分の敵をうってもらわねえじゃア……ああ、動いちゃいけません。畜生ッ、このなわをぶちきる匕首(あいくち)でもあったらなア」
「仙太、それはどこのどいつだい？　おとっつぁんを手にかけたって、その男はどこのだれなんだい？　仙太、それはだれだい？　だれだってば?!」
　やみの中で、お美年の体ががくがく激しく震えおののくのが分かった。
「さあ、一つだけなわがとけた。もう一個所だ」
「仙太、仙太ってば！　お、おとっつぁんを……」
「お美年ちゃん、三四郎だ。加賀美三四郎だよ」
　仙太はぶすっとした声で吐き出すようにいった。
「……」
　お美年は、ごくっとつばをのんで、しばらく黙っていたが、やがて、
「冗談じゃないよ。何をねぼけてるのさ」
と、かすれたような声でつぶやいた。
「あっしゃア本気だ。三四郎が親分をやっつけたんだ。あっしゃア、ちゃんとそばにいて、たしかにこの目で見ていたんだ」
「……」
　お美年がまたごくっとつばをのむ気配がした。
「花太郎地蔵の地下道ですぜ。あっしが親分をかついで走ってくるところを、うしろからぐざっとひと突きに……」

「仙太、お、おやめ！　おやめってば……」
「いいや、やめねえ。あっしゃアいうぜ。お美年ちゃんが得心するまで何度でもしゃべりつづけるぜ。あっしが証人だ。三四郎が親分をやりゃアがったんだ。ちゃんと見ていたんだ。ほかにはだれ一人いねえ地下道の中の出来事なんだ」
「ああ、三、三四郎さまが？　ほ、本当？　仙太？」
　お美年の声は、まるで悲鳴のように語尾がかすれた。
「そんなこと信じられない。三四郎さまがおとっつぁんを……手にかけるなんて……そ、そんなこと……そんなバカなこと……」
　お美年が泣くような声で訴える。
「いいや、あいつが親分をやったんです。だれがなんといおうと、あっしが証人なんだ」
「何かの間違いじゃアないのかい？　ねえ、仙太、そうだろう。何かの間違いだろう？」
「間違いじゃねえ、間違いようがねえんです。親分とあっしと三四郎のほかにだれ一人いねえ地下道の中の出来事なんです」
「だ、だって、あのお方が……なぜ、おとっつぁんを殺すわけがあるんだろう？　そうだろう、仙太。なぜ？　なぜ？　そんなことを？」
「そんなこたアあっしにも分からねえ。三四郎にお聞きなせえ」
　仙太は憤怒にもえた声できめつけるようにいう。
「お美年ちゃん、だからあっしがいってたんだ。さんざ注意したでしょうが……あの野郎、どこかくせえとこのあるいやな野郎だって……」
「でも、信じられない。あたしには信じられないよ。仙太、そんなこと……」
「お美年ちゃんをあざむいて、信じられねえようなむごいことをしやアがったあいつが憎くて仕方がねえんです。しっかりしてくれ、お美年ちゃん。だまされちゃアいけねえ。あっしがこ

の目で見たんだ。あいつが親分の敵なんだ。いいか、しっかりしてくんなせえよ。ここからあんたを救い出したら、その足ですぐ野郎をさがす。ひっくくって、その筋へ突き出すんだ。それをお美年ちゃんにやってもらいてえ。あんたの手で、野郎をひっくくってもらいてえのだ。それが、せめてもの親分への手向けだと思って……あっしゃアもうこのことだけを思いつめて、今日という日まで……」

柱にくくりつけてあるなわの最後の堅い結びめがやっとゆるんできた。

「さあ、もう少しだ」

と、仙太が結びめへ歯をあてて、しゃにむに解きすてようとあせっている時、小屋の表の方から草むらを踏んで近づいてくる足音が聞こえてきた。

「ちっ！　しまった……」

仙太は無念そうにいって、一瞬様子をうかがうように耳をすましたが、

「いけねえ。お美年ちゃん、あっしが見つかったら百年目だ。しゃくにさわるが、ちょっと退却しますぜ。なに、すきをねらって、すぐやってきます。ちょっとの辛抱だからこらえていてくだせえ。もう小鈴もへちまもあるもんですか。そんなことより、いっときも早くここをずらかって、親分のあだをうつことが第一なんです。野郎どもが小鈴のありかとやらをたずねたら、やせ我慢をはらねえで、なんでもしゃべってしまいなさいまし。その方はまたの機会にどうでもなることだ。いいですか、分かりましたね、じゃあ、あっしゃアいっとき姿を消しますぜ」

お美年の耳元へ早口にいいすてると、仙太はやみをはって素早く小屋の裏口から出ていってしまった。

ほとんど入れちがいに、表の入り口にぬっと立ったのは平六である。

灯火がわりに手にした薪（まき）の燃えさしをかざし

て、うさん臭そうにお美年の様子をじろじろ見下ろしている。

その視線が、解けかけたなわの結びめへじいっととまった。

とたん、にやっと笑った表情が、何もかも分かったぜとあざわらっているようであった。

「ねえさん、どうだい、そろそろ了見がついたかい？　それとも、まだ強情をはる気かね？」

平六は突っ立ったまま大声でいった。

「そっちがそのつもりなら、こっちもこっちだ。根気よくかわいがってやるぜ。もう一度、さっきのやつをやってやろうか。わきの下の、肉の柔らかい辺りをぐりぐりっとねえ。脂汗を流して、もう一度、気を失うまでやっつけてやろうかえ？　それとも、お気に入らにゃアもっと手のこんだのもあるぜ。恥ずかしさだけで気の遠くなるようなやつをなア。どうするんだよう、お美年ちゃん？　返事をしねえかッ！」

わめきながら、そのくせ戸口の方へちらっと目を配り、素早くお美年のそばへかがみこんだ。

「かわいそうになア。あんな目にあわせたのも仕方がねえんだ。ああでもしなけりゃア、龍兄いになぶり殺しにされてしまうにきまっているからよ。お美年ちゃん、おれが助けてやるぜ。いいか、おれのいうとおりにするんだ」

と、ささやくような早口で、

「ともかく、龍兄いを納得させてお帰りを願わねえことにはどうにもならねえ。小鈴のありかをいってしまえよ。いいや、本当のことをしゃべる必要はねえんだ。口から出まかせでいいさ。もっともらしいうそをいいな。おれがそばから相づちをうってやる。兄貴さえ納得して行っちまやアこっちのものさ。いいか、分かったな？　下手をやったら命がなくなるぜ。ここが了見のしどころってものよ。おれにまかせておけ。いいな、分かったな？」

お美年はたったいましがた仙太から聞いたことで胸がふさがれていた。

三四郎が父勘兵衛を殺したなんて、そんなことと絶対にあるはずはないと、必死にかぶりをふってみるが、仙太のあの真剣さを思いだすと、みだりにうそだ間違いだと否定してしまうわけにはいかない。

いずれにしても、勘兵衛になにか重大な間違いが起こったことは確かだし、もしも本当に勘兵衛が人手にかかって殺されたのなら……そして、それが三四郎なら、一体どうしたらいいのだろう。

何もかももうおしまいだ。いっそわたしも死んでしまいたいと、もだえ狂うような思いであった。

とにかく一刻も早くそのことをたしかめたい。事の真相をしりたい。もう一瞬もじっとしてはいられない……。

「おい。おれを出しぬいて妙なまねをしようなんて考えたら、そいつア悪い了見というものだぜ。おれア盲じゃねえんだ」

平六がとけてすててあるなわの方へじろっと目をやった。

お美年の手首と足首を別々に縛って柱につないである。その足首の方だけ解けているのを、平六はにやにやっと薄笑いしながら見つめている。

「おれア気がついていたよ。しかし、やぼな詮議はしねえつもりさ。どうだい、おれにまかせて助かるつもりはねえか？　助けてやろうっていってるんだぜ。え？　了見がついたら、うんと首をたてにふるんだ」

お美年にとっては渡りに船であった。この男がどんな悪党かはしれないが、なんとでもしてこの場から逃れたい。仙太のことまでちゃんと気づいていて助けてやろうというその言葉には、従うより手段はなかった。

「お願いします。御恩に着ます」

お美年はかすかな声で訴えるようにささやいた。

「よしきたッ。お前の口から、助けてください、御恩に着ますといってくれるなら、話アはええというものさ。大船に乗った気でおれにまかせておけってことよ」

「本当に……本当に御恩に着ます。お願いします」

「ようし、分かった」

平六は、匕首を抜くと、柱にくくりつけてあるなわを中途でさっと断ちきった。

「さあ、いいかえ、いよいよ芝居にかかるんだ。いてえだろうが、一つたたくぜ。そこんところで、一声、思いきり大きく悲鳴をあげてくんな」

いいながら、平六は片足あげてお美年のわき腹の辺りを強くけりつけた。

思わず、

「あっ、あーっ！」

と、お美年がうめき声をあげる。

「やいッ、どうするんだ！　すなおにしゃべってしまう気か。それとも、まだいてえ目にあいてえのかッ！」

きこえよがしに声を高くしながら、お美年の方へ片目をつぶってにやっと笑ってみせた。

「なに、しゃべる？　本当にどろを吐く気なんだな？　本当だな、ねえさん。だからよ、いわねえことじゃアねえんだ。はじめから、そうすなおに出りゃア、いてえ目にあわずにすんだものを……おい、本当だな？　本当にしゃべってしまうんだな？　ようし……」

さあ、立ちなよ、心配はいらねえぜと、これは耳元でささやきながら、立ち上がったお美年を小突くようにして小屋から連れ出した。

たき火のそばまで連れてくると、

「兄貴、おれのいったとおりだろう。娘っ子は気長にじっくりと責めねえじゃアうまくいかねえのさ。お美年ちゃんが小鈴のありかとやらを申し上げるってさ」

と、何くわぬ顔でいって、

「さあ、申し上げちまうんだ。ぐずぐずしてる

と、今度こそ素裸にむいて、恥ずかしさに気の遠くなるような目にあわされるんだぜ」
　と、目配せするようにお美年の方をじろっとにらみすえる。
　うそでもいい。作りごとでもいいから、まことしやかにしゃべれば助けてやると聞いているから、お美年はすなおだった。
「あの小鈴は、お高さんから受け取って以来、ずうっと膚身はなさずもっていたんです」
「それで、今はどこにあるというんだ？　まさか、その懐の中じゃアねえだろう？」
　と、平六がうまく相づちをうつ。
「舟友にいる間も膚につけておりましたが、金森様へあがることになって、それを……」
「ははあ、どこかへかくしたというのかい？」
「ええ……そ、それが……」
「さあ、はっきりいうんだ。かくさずいうんだ。でたらめいったら承知しねえぜ。何度でもたしかめて、小鈴がちゃんと出てくるまでは、生かさず殺さずのなぶり責めにあうことを承知していなよ」
「いいえ、いまさらうそはいいません。あれは……あの小鈴は、舟友の裏庭にあります一番大きなしいの木の根元に……」
「きっとそうだな？　しいの木の根元にうめてあるんだな？　もしそれがうそだったら、今度こそ、この平六が承知しねえ。うそを一つつくたびに、耳を一つずつ、指を一本ずつ切りおとしていくが、それでいいのう？」
「うそではありません。決してうそはいいません」
「兄貴、どうやら本当らしいですぜ」
　と、平六はしたり顔にいった。
　龍太郎は冷たい目つきでお美年を凝視していた。まかり間違ったら、どんな冷酷なことでもしかねない目つきであった。
「兄貴、舟友のしいの木の下だとよ。後がこわいから、まさかうそじゃアあるめえと思うな

ア。早いとこたしかめてきたらどんなもんですい？」
　と、平六はたくみにたきつけてる。
「きっとだろうなア、お美年？」
　龍太郎はうさん臭そうにじろっとお美年を見すえたままいう。
「は、はい。舟友のしいの木の下にあの小鈴を……」
「おれの目を見ろ。おれの目を見つめて返事するんだ。うそじゃアねえなア？」
「うそじゃアありません。決してうそはいいません」
　お美年は必死だった。
「よし。もしうそだったら、平六、いやおういわさずこの女の耳をそげ」
「ようがすとも。第一、あっしが承知しませんや。耳をそぎおとしてから、素っ裸にむいて、そこの立ち木へ逆さ大の字につりさげてやりまさア」
「お美年、小鈴が手に入るまでは、何度でもここへもどってきて、きっとどろを吐かせるから覚えておけよ」
　龍太郎は立ち上がった。
　立ち上がりながら、平六の方へじろっと一瞥をくれて、
「もどってくるまで、その女をてめえにあずけておく。妙なまねをすると、てめえもただではおかねえからそう思っていろ」
「じょ、冗談じゃアねえや、兄貴。この平六を信用してくれねえじゃア話になりませんや。兄貴とあっしのながえ仲じゃアありませんか。ええもう、このねえさんはしかとおあずかりしやした。もしも毛ほどでも間違いがあったら、この素っ首はのしをつけて差し上げまさア。その代わり、うまくいったら、せめて酒ぐらいたんまりふるまってやっておくんなせえよ」
　へへへ、といってらっしゃいましと、平六はぬけぬけといって龍太郎を送り出した。

五、六歩いって、龍太郎がもう一度こっちをじろっと振りかえったのは、なにかうさん臭いにおいをかいだのであろう。

しかし、まさか平六とお美年とがそこまで打ち合わせして手のこんだ芝居をうったとは思わない。

やがて、その姿は飛ぶように早くなって、たちまちはるかなやみのかなたに消えさってしまった。

「ああ、あーっ」

と、一つ大あくびをやった平六の顔は、してやったりというように笑っていた。

「ちょっ、何をえばりくさりゃアがるんだ。お徳との縁で、兄貴兄貴とたてまつって付き合ってりゃアいい気になりゃアがって、とんでもねえ青二才め。笠にかかってこき使やアがる。こう見えたって、この平六はちっとは世間さまに騒がれている悪党なんだ。ふん、ざまア見やがれ」

毒づいてからお美年の方をふりかえり、

「ははは、お美年ちゃん、心配はいらねえよ。とんだ目にあったなア。おお、かわいそうに。その手をこっちへ出しな。なわをといてやるぜ」

と、ひげ面が柄に似合わぬねこなで声でいった。

「おうおう、手首が紫色に変わっている。かわいそうなことをしたのう」

と、平六はお美年の手首にくいこんでいるなわをとき、

「どこかけがでもしてはいやアしねえか。なんなら傷薬があるぜ」

と、いやに優しい声でいう。

鬼面仏心というか、平六がどんな悪党であるにせよ、現に危ないところを助けてくれた好意は明らかであった。

それまではまだ相手の思惑に疑心をいだいていたお美年も、こうまでされてはすなおにその好意を受けとらずにはいられない。

無法に対してはてこでも承知しない勝ち気な

お美年も、人の善意に対しては人一倍感じやすいたちであった。

地獄で仏にめぐりあった思いで、

「ありがとうございます。本当に……本当に御恩に着ます」

と、くりかえし礼をいう。

「なに、そんなにいわれちゃア、恥ずかしくて穴があったらはいりてえくらいさ。それよりも、ああでもしなけりゃア、龍兄いの目をごまかしてお前の急場を救えなかったからだが、とんだひでえ目にあわせてすまなかったなア。悪く思わないでくれよ」

と、平六は殊勝なことをいう。

「いいえ、そんなこと……よく分かっています。本当に、助けていただかなければ命がなかったかもしれません」

「おれの志がわかってくれりゃアそれで結構。もう安心しな。おや、いつの間にか空がしらんできたようだぜ。おい、野郎ども、龍兄いのひっかえしてこねえうちに、そろそろここを引き揚げようじゃねえか」

と、平六はのっそり腰をあげた。

「御恩は忘れません。いずれ、きっと、あらためてお礼を申させていただきますけれど……それでは、わたし、これで行かせていただきます」

「まあ待ちねえってことよ。なにもそうあわてることもあるめえ」

「でも、気にかかることがあるんです。父が人手にかかってはてたという……妙なうわさを耳にしました。一刻も早くそのうわさをたしかめて……」

「そうだってねえ。おれもきいたぜ。勘兵衛親分は人手にかかって殺されたんだってねえ」

「ええっ。じゃあ、あなたもそれを?」

「うん、聞いたとも。たったいましがた、あの龍兄いから聞いたんだ」

「で、では、やっぱり本当だったんですか? 本当に、父は……」

「間違いじゃアねえらしいな。龍兄いはめったに間違いはいわねえ男だからな」
「そ、それではなおさら心がせきます。もういっときもじっとしてはいられません。これで行かせていただきます」
「まアさ、あわてなさんなってことよ。いくら騒いでも、いまさら亡くなった勘兵衛親分が、生き返ってくるわけじゃアあるめえし……」
「で、でも、わたし、下手人を一刻でも早くつきとめて……」
「お美年ちゃん、お前、御恩に着ます、お礼しますと、くりかえしいったのう?」
「ええ、それはもう、たしかに……」
「御恩に着てもらいてえんだよ。お礼をしてもらいてえんだよ。いくら物好きでも、この平六が、龍兄いという恐ろしい野郎を裏切ってまで、なんのあてもなしに余計なお節介をするとは思っていねえだろうなア」
じろりと見おろした目に、意味ありげな薄笑いがにんまりと浮かんでいる。
　お美年ははっとした。
　おつにからんだ平六のせりふが、とたん、ぐっとお美年の胸にきたが、しかし、考えてみると平六のいうことも無理だとはいえない。
　自ら悪党だと名乗っているその男が、なんの代償もなしに自分を助けてくれたと思いこんでいた方が浅慮だったともいえる。
　たしかに、助けてくれた義理は義理である。
「たしかにお礼はさせていただきます。いってください。お望みのほど聞かせてください」
「怒っちゃいけねえよ」
「怒りはしません。いわれるまでもなく、お礼はするつもりでした。ですから、聞かせてください。お金でよろしいのですか」
「けちな野郎だと笑いなさんなよ。なにしろ、このところしけているのさ。ちょいとまとまった金が入ったら、江戸をずらかって、どこか遠くへ落ちたいと思ってねえ。なにね、ほんの五十両ばかりありゃア足りるんだ。どうだい、お美年ちゃん、都合つけてくれめえか?」
「よろしゅうございます。すぐとはいかないでも、そのくらいならなんとかなります。きっと、五十両、お礼にもってあらためて伺います」
「冗談じゃねえや。あらためて伺いますなんて、そんな悠長なことじゃア話にならねえ。考えてみな、まもなく龍兄いが血相変えて舞いもどってくるんだぜ。第一、おれア世間のやみを渡る裏暗い体だし、お前は御用聞きの娘さんだ。お前がどんな了見でいようと、お前がもどっていったら、まわりの野郎たちがすなおに承知しねえかもしれねえ」
「といっても、今すぐにとは、それは無理な話じゃアありませんか」
「そんなことにゃアぬかりはねえよ。お美年ちゃん、さっきあの小屋へ忍びよってお前を連れ出そうとしたやつがあったのう?」
「……」
「ははは、かくすこたアねえや。別にそのことをどうこういうんじゃねえのさ。そいつに、ちょいと使いの役をたのみてえのさ。あいつア何者だえ?」
「仙太という花屋の若い者です」
「そうか、下っ引きか。おい、仙太さんとやら、そんなところにもぞもぞかくれてねえで顔を出しな。え、蚊にくわれるぜ。顔を出せってことよ」
　と、平六は薄笑いしながら、かなたのやみの中をじろっとにらんだ。
「大丈夫だ。お聞きのとおり、すらすら話が運んでるんだ。怖いこたアねえや。兄い、さあ出てきなよ」
　仙太は少しはなれた草むらの中から渋い顔をしてぬっと立ち上がった。
「兄い、五十両の金がいるんだ。その金と引きかえにお美年ちゃんの体を渡すぜ。急いで金をもってもどってきな」

「うぬ！　しゃらくせえことをぬかしゃアがる。盗っ人（ぬすっと）に追い銭か。そううまかア問屋でおろすか。野郎ども、ひっくくってお白州の砂利をかませてやるからそう思え」
　仙太は歯がみしながらいきまいたが、平六はあざわらっている。
「おっとっとっと……分からねえ野郎だのう。お美年ちゃんが、御恩に着ます、お礼をしますといってるんだぜ。さすがに物の道理が分かってらア。それをなんだ、お白州の砂利をかませると……ふふふ、三下野郎はやっぱり三下野郎だけのせりふしきゃ吐けねえとみえる」
「な、なにをッ！」
「やい、じたばたするなッ。妙なまねしやアがると、お美年ちゃんがかたわになるぞッ」
　平六がわめいた。
「仙太兄い、そこを動くなよ。じいっとしてよく聞いてるんだ。おれア五十両ほしいんだよ。どこでもいい、とっとと才覚してきな。それまで、ちゃアんとお美年ちゃんの体をあずかっておくぜ」
　平六はせせら笑った。
「仙太、お聞きのとおりだよ。お前、大急ぎで『舟友』さんへ行って、事情を話して五十両拝借しておくれでないか」
　と、お美年もいう。
「畜生ッ、お美年ちゃんはそんな野郎に五十両もくれてやるんですかい？　どうせ一つ穴のむじななんだ。いめいめしいったらありゃしねえ」
「いいから、わたしのいうとおりにおし。この人に助けてもらったことはたしかなんだから、そうした方がわたしの気もすむんだよ」
「野郎ッ。平六とかいったのう。仕方ねえ。いめいめしいが、五十両つくってくる。それまで、たしかにお美年ちゃんをあずけておくぞ」
「安心しなよ。五十両、金さえ手に入りゃ文句はねえんだ。それまでは大事な人質だから、蚊にも食わせねえであずかっておくよ」

「正午までにはきっとここへもどってくる。きっとだぞ」
「分かったよ。龍兄いが怖いから、一時ここは引きはらうが、ちゃんと見張りの野郎を伏せておいて、お前が来さえすりゃアすぐ連絡のつくようにしておくさ」
「正午までだ」
「よし、正午だ。その代わり、その時刻までに金を作ってこねえと……」
「な、なんだと？」
「ふふふ……別の手段で金を作るってことよ。お美年ちゃんを宿場女郎にたたき売るかもしれねえぜ。これだけのべっぴんだ、いっそその方が金になるかもしれねえ」
「や、やいッ。そんなことはさせねえ。そんなこと、させてたまるかッ」
「分かったよ。五十両さえ手に入りゃいいんだ。いいか、正午までだぞ」
「よし、きっともどってくる」
「男と男の約束だ。安心して金を作ってこい」
「じゃあ、お美年ちゃん。あっしゃアひとっ走り舟友へいってきます。いや、もっと手近にもそれくらいの金なら出来るあてがありますさア。安心して待っておくんなせえ」
　仙太は、それだけいいすてると、きびすをかえして風のように走りさっていった。
「どれ、おれたちもぼつぼつ出かけようかい。どうせこの瀬降りもぽつぽつうるさくなってきたところだ。河岸を変えるんだ。野郎ども、たき火を消せ」
「おう……」
　と答えた三、四人が、よってたかって、たちまちたき火を踏み消してしまう。
「お美年ちゃん、さあ、出かけるぜ」
「どこへ行くんです？」
「まあ、いいってことよ。安心してついてきな」
　平六が目配せすると、配下の男たちがお美年の周囲をぐるっととりかこんだ。

お美年は、その時、なんということもなしに、ふっと奇妙な胸騒ぎにうたれた。なにか虫がしらせるというのだろうか。

江戸も南のはずれに近い三田村から、北のはずれ近い浅草今戸まで、てくてく歩いていったら五、六時間はかかってしまう。

仙太が清水の舞台からとびおりる思いで身銭をきって三丁だての早駕籠を頼んだのは、一つには正午までに金を作って非人小屋までもどってこなければならないためもあったが、もう一つには一足先に非人小屋を出ていった龍太郎という男を途中で出しぬきたいためであった。

仙太はその男を、金森屋敷からずっとつけてきた。

はじめはお美年を案じる思いでいっぱいだった胸が怪しく震え出したのは、その男が自ら江戸の花太郎と名乗るのを耳にした瞬間からであった。

遠くはなれた草むらの中に身を伏せていたから、その顔までは分かりかねたが、声は一語一語はっきりと聞こえていた。

こやつがいま江戸中をさわがしている怪盗かと思うと、思わずがくがくっと身震いしたほどである。

お美年ちゃんのことさえなければ、あの時すぐにあとをつけていき、機会をねらって一気にひっくくってしまったのになア……。

と、仙太は早駕籠にゆり立てられながら歯がみしていた。

しかし、まだおそくはねえ。あいつはお美年ちゃんの言葉につられて、小鈴のありかをたしかめに舟友へ乗りこんでいくに違いねえ。野郎より一足先にさえ舟友へつけば、もう野郎は袋の中のねずみ同然なんだ。くそッ、もう逃がすものか。江戸の花太郎をひっくくるんだ。このおれがよ。このおれが江戸の花太郎をよ……。

岡っ引きにとって、これにすぎる冥利はない

のだろう。気負いたった仙太は、暁の路上にそれらしい人影はないかと目をすえながら、

「早くしろッ。御用の筋だッ。酒手アはずむぞッ」

とせきたてる。

今戸についた時は、もう、すっかり夜が明けはなれている。

「親分、親分！　友三親分。まだお目ざめじゃアねえんですかい？」

と、店先に立ってけたたましくわめく仙太の声に、びっくりしたように出てきた女房のおきんが、

「まあ。だれかと思ったら、仙太さんじゃないかえ。朝っぱらから大きな声で、びっくりするじゃアないか……」

「ああ、おかみさん。親分は？　親分さんは？」

「親分なら、ゆうべからちょっと用事があってお留守だけれど……何か親分に御用ですかえ？」

「いいえね、親分でなくったっていいんですが。ねえ、おかみさん、妙なことを伺うようですが、今朝方、ここへ見なれねえ客人がやってきませんでしたかえ？」

「なんだか分からないけれど、今朝はまだお客さんは一人もありませんよ」

「客でなければ、妙な野郎でもその辺をうろうろしてはいませんでしたかえ？」

「どうしたのさ、仙太さん。たった今、店をあけたばかりなんですよ」

「ちょっと失礼しまさア」

と、勝手知った裏手へ回って、庭の、中でも一番太く高いしいの木の前までいったが、とたん仙太は小おどりして叫んだ。

「畜生ッ、しめしめしめ、しめ子のうさぎだ。おかみさん、野郎、まだここへ来ちゃアいませんぜ」

「どうしたんだよ、仙太さん。本当に、今朝はどうかしてるんじゃないのかえ？」

「いいや。おかみさん、まあ、ちょっと顔をかしておくんなさい」
　と、仙太はおきんを物陰へさしまねいて、
「なんでもいいから、見なれねえ妙な野郎がやってきたら、よくよく目を光らせていていただきてえので……ことに、目鼻立ちのきりっとした江戸前のいなせな若い野郎には、絶対に油断しねえでおもらい申してえので……」
「だからさ、それが一体どうしたってのさ」
「びっくりしちゃアいけませんぜ。いま江戸中で大騒ぎしてる江戸の花太郎が……」
「ええっ? な、なんとおいいだえ、仙太さん? 江戸の花太郎だって?」
「しいっ! いけませんぜ、そんな声をたてちゃア。そうなんですよ。たしかに、花太郎の野郎がこの舟友へやってこなくちゃならねえ筋合いがあるんでして……しかも、今日でさ」
「バカバカしい。お前さん、あたしをかつぐ気だね?」
「冗談じゃねえや、おかみさん。実は、こうこうしかじかで……」
　と、仙太は事のあらましを物語りながら、横目で庭のしいの木の方をじろっと見やった。
「お美年ちゃんはうそをついたんだが、野郎はそれがうそか本当かたしかめずにはいねえでしょう。きっとやってくるにちげえねえから、妙な野郎がやってきたら気をつけていておくんなさい。なに、あのしいの木を見張っていて、そこに近づくやつがあったら、そいつが花太郎だ。すかさずふんじばっておもらい申してえもので……」
「なるほど、そう聞いて話が分かったよ。親分が留守で困ったけれど、若い者もたんといることだし、すぐ手配しておくから安心しておくれ。それより、仙太さん、お美年ちゃんの方、大丈夫かい?」
「あれほど堅い約束がしてあるんでさ。向こうじゃのどから手が出るほど金が欲しいんです

よ。おかみさん、すみませんが五十両拝借させていただきてえもので……これからすぐに三田村まで引っかえしていかざアなりません」
「御苦労だねえ。くれぐれも頼みますよ。三四郎さまがお留守の間にこんなことが起こってしまって、お美年ちゃんにもしものことでもあったら、あたしゃアおわびの申しようもない」
「へえ、三四郎さんはお留守なんで?」
　と、仙太は横目でおきんの方をじろっとうかがった。
「それがさ、仙太さん。お美年ちゃんが金森さまへあがったあの日、どこかへぶらっとお出かけになったまんま、今日という日までなんの音さたもなし、お帰りもないんだよ。なにかとんだ間違いでもあったんじゃアないかと心配してるんだけれど……あらッ、そういえば、仙太さんもあの日からずうっとここを留守にしていたじゃアないか。ひょっとしたら、三四郎さまと御一緒じゃアないかと思っていたんだよ」
「いいや、あっしゃアしりませんねえ。御一緒なもんですか……」
　と、吐き出すようにいって、三四郎がこの家へ帰れねえのはあたり前だ、野郎は勘兵衛親分を手にかけた下手人じゃアねえかと、腹の中で毒づいている。
「じゃあ、仙太さん、向こうへ来ておくれ、お金を出すから……」
　と、おきんが歩き出そうとした時、
「おかみ、いいお天気あるね。おはようさん」
　と、にこにこの毒気ない顔で笑いながら、ひょっこり姿を現したのは唐人飴屋の呉龍角であった。
　呉龍角は相変わらずの道化た風采であった。おそろしく出っ歯のために口元が烏天狗のように突き出ていて、その上、薄よごれた唐人ひげがだらりとさがっている。
　しゃべるたびにぱくぱく動くその口元と、唐人ひげを見ているだけで、大概の者がふき出し

てしまう。

「おかみさん、親分さんいるか。龍さん、会いたい用事ある。急ぎの用事ね、駆けてきたあるよ。びっくりして犬ほえる。びっくりして龍さんどなる。犬もっとほえる。龍さんもっとどなる。犬もっともっとほえる。ああ、苦しいね」

おおげさに息をはあはあ弾ませ、目を白黒させてみせるおかしさもこの男の身についたあいきょうであった。

「おやまあ、そりゃア気の毒でしたねえ。どんな用事かしらないが、あいにくとうちの人は留守なんですよ」

と、おきんも一瞬お美年のことへの心配を忘れ、つりこまれたように思わず笑った。

「親分さん、留守あるか？ それ困る。龍さん困る。一大事起こるよ」

「まあ落ち着きなさいよ、龍さん。一体、どうしたっていうんです？」

「金森さま、いってるお徳ね。大いそぎ、使いよこしたよ。大事件起こったよ」

「ええっ、お徳さんが？ お徳さんが何か知らせてきたっていうんですか？」

と、おきんはあわてて仙太と目を見合わせ、

「それなら、あたしが聞いておきます。あとで親分に伝えるから……ねえ、どんなこと知らせてきたんです？」

「ちょっと、こまるあるよ。人に聞かれる、それ困るよ」

と、呉龍角は横目でうさん臭そうに仙太の方を見ながら、おきんのそでをひいてこそこそと物陰までつれていった。

なにか虫の好かないいやな野郎だと、仙太の方でも思っている。

ことによったら、花太郎が自分でやってくる代わりに、こんな野郎が手先になってくるかもしれねえ。一歩でもしいの木の方へ近寄ってみろ、ただはおかねえぞ、と、仙太はそしらぬ顔をしながら呉龍角の一挙一動に目をすえていた。

しかし、おきんに何かささやきかけていた彼は、やがてペコペコッと二つ三つ頭をさげてから、

「御苦労さんだったねえ。お徳さんにもよろしくいってくださいよ」

と、ねぎらうようにいうおきんの声に送られて、しいの木の方へは行かず、さっさと出口の方へ去っていった。

ただ、通りすがりに、仙太の方をちらっと見て、声もたてず出っ歯をむき出してにたにたっと笑ったのが、なんともいえず胸くそが悪かったが……。

「ちぇっ、いやな野郎だッ」

仙太が吐き出すようにいうと、おきんが笑った。

「ほほほ、龍さんの方でも同じようなことをいってましたよ」

「へえ、なんとですえ？」

「仙太さん、あんたのことをさ、あんな目つきの悪い人には、くれぐれも気をつけなさいって……」

「畜生ッ、ぬかしゃアがる」

「ことによると、ああいうのが花太郎の手先になる男だって……」

「ええっ、な、なんですって？ そりゃアこっちでいいてえせりふだ。畜生めッ！」

「でも、お二人とも、まさかねえ。仙太さん、あの龍さんはね、あんなおかしな道化た顔はしているけれど、なかなかどうして役に立つ人なんだよ。うちの人も、とうから目をかけて下っ引きがわりにつかっているけれど、こまめによく働くし、第一とても忠義ものでねえ」

と、おきんはとりなし顔にいって、ふくれっ面の仙太をなだめた。

「あんただから話すけれど、今もあの人、お徳さんから知らせがきたって、とるものもとりあえずここまですっ飛んできてくれたのさ。金森

さまへ忍びこんだ花太郎が、若殿さまの大事にしていらっしゃる銀の小鈴を盗みとった上、お美年さんをかどわかして逃げてしまったってね。仙太さん、あんたの話を裏書きするような知らせだったがね。その上、お美年さんをかどわかしていったのは、お美年さんがもっているはずのもう一つの銀の小鈴を手に入れる目的だったのではないかと思われる……。

　ところが、お美年さんは金森さまへあがる時、この舟友へその小鈴を残していったと話していたそうだから、そのうち、花太郎のやつがきっと舟友へのりこんでくるに違いない。花太郎は、色の浅黒い、きりっとしたいい男前だそうだから、そういう人相の、年の若い見なれぬやつがこの家の辺りをうろうろしてたら、すかさず引っ捕らえてくれってねえ……龍さんの話はこんな風だったよ」

「虫の好かねえ野郎だが、その話に間違いはありませんや」

「それに、もう一言、妙なことをしゃべっていったけれど……」

「なんです、妙なことって？」

「あんた、決して他言しておくれでないよ」

「御信用くださいまし。御用の筋なら、口を裂かれてもしゃべりはいたしません」

「あの三四郎さまね……」

「へ？　三四郎だんながどうかしましたかえ？」

「昨夜、金森さまへ忍び入った花太郎の一味に、あの三四郎さまが加わっていたのではないか……三四郎さまを捕らえて糾明しなければならないって、いま金森さまでは大騒ぎしているんだってさ。でも、ねえ、仙太さん。まさか……まさか、そんなバカな話はありゃアしまいさ。なんぼなんでも、あのお人がそんな……ねえ、きっと何かの間違いだとは思うけれど……」

「おかみさん、お言葉中だが、そいつアまんざら根も葉もねえ話じゃアねえかもしれませんで

すぜ」

「何をいうのさ、お前さんまで……」

「三四郎だんなが花太郎の一味かどうかはあっしの知ったことじゃアねえですが、たった一つ、あっしがはっきり申し上げられることがあるんでさ」

「仙太さん、そんな怖い顔をして……どうしたっていうの？」

「滅多に人にゃアしゃべらねえつもりでしたが、もうかくしてはおけません。申し上げます。三四郎は勘兵衛親分を殺しゃアがったんだ」

「な、な、なんだって?!」

「三四郎が花屋の勘兵衛を刺し殺したと申しているんです」

「お、お前さん、ちょっとお待ちッ。どうしてそんなことをいうの？　何を証拠に？」

「あっしが証人でさ。あっしのすぐそばで親分がやられなすったんだ。三四郎の小柄(こづか)でぐさっとね」

啞然(あぜん)として棒立ちになっているおきんの前へ、仙太は丁寧に頭をさげていった。

「恐れ入りますが、五十両お貸しくださいまし。三田村まで駆けつけにゃアなりません」

　仙太が三田村の非人小屋へとってかえしてきた時には、まだ約束の正午に間があった。

　しかし、とうにお美年をさらって姿を消してしまった平六一味が、その辺りにうろうろしているはずがない。

　龍太郎を小鈴のことで追っ払い、仙太に五十両の金策をいいつけて追っ払ったのも、あとくされをなくしてあっさりお美年をかどわかすためであった。

　まだはかられたと気のつかない仙太は、おういッ、おういッ……と呼びたてながら、小屋の周囲をうろうろしていた。

　小屋から小道が森のしげった丘をこえて向こうへ走っている。仙太がその小道をたどって森

のとっつきの辺りまで来た時であった。

　ずぶっと片足が地面へめりこんだとたん、足元の土がどどど……と一息に崩れおち、それと一緒に穴の底へ落ちこんだ仙太が、思わず、

「ぎゃあ！」

　と、けたたましい悲鳴をあげた。穴の底にしかけてあったくま狩りにつかうわながはぜて、鉄の輪がぴしっとその片足をはさんで食いこんでしまったからである。

　落とし穴をもうけ、その上、くま狩りのわなが仕掛けてある。まさか、この辺りにくまが出るはずもないが、ひでえことになったと、仙太は泣きっ面で助けをよんだ。

　と――瞬間、

「小僧ッ、静かにしろいッ……」

　と、鋭く叱咤（しった）するような声がどこともなく聞こえてきた。

　仙太は、身の丈の没する穴の中にはまりこんでいるから、どこから聞こえてくる声か見当もつかない。

「だれだかしらねえが、ちょっと手をかしてくれよう。くま狩りのわなにひっかかってしまったんだ」

「騒ぐのはよせッ。じたばたしたってどうなるものか。だれが手を出そうと、そのわなはかぎがなけりゃアはずれっこがねんだ」

「いてえ、い、いてえッ。脛（すね）が折れそうなんだ。なんとかしてくれようッ」

「平六一味が、小屋に忍び寄るやつをふせぐため、ときにゃア追いはぎもかねて、人間をおとすために作ったわなだ。それに落ちたのも自業自得だと思えッ」

「そ、そういうてめえは、だ、だれだッ？」

「おれか？　この声が分からねえか？」

「あっ、あ、その声は……」

「江戸の花太郎だ」

「うぬッ、てめえかッ。野郎、ひきょうなやつだッ。このわなにかけやアがって、このおれ

を……」

「静かにしろいッ！　じたばたしやアがるとたたっ切るぞッ」

　わめいた声は、すぐ頭上にあったが、やはり姿は見えなかった。

「おとなしくしてりゃア命までとろうたアいわねえ。てめえなんぞ殺したところで、なんの足しになるものか。小僧、安心して、おれのいうことをよく聞くんだ」

「ち、畜生ッ。はかりゃアがったなッ」

「分からねえ三下奴（さんしたやっこ）だのう。てめえなんぞ、手間ひまかけてはかったところでどうなるものか。はかりゃアがったのは平六。てめえもおれもはかられたんだ」

「な、な、なんだと？」

「てめえ、後生大事に五十両の金を作って舞いもどってきたが、それ、もう約束の正午だぜ。いま聞こえてるのがひるをしらせる白蓮寺（びゃくれんじ）の鐘だ。見ろ、平六なんざ影形も見せやしめえ」

「じゃア、平六はこのおれまでだましやアがったのか？」

「疑うなら、一日でも二日でも、なんなら五日十日でもその穴の底で待っていな」

「五十両とひきかえに、きっとお美年ちゃんをわたすと約束したんだ。五十両だ……」

「五十両五十両と、うるせえ野郎だ。てめえのような三下野郎にゃア五十両は後光のさすほどの大金だろうが、平六はそんなはした金に目の色を変えるほど欲の小せえ悪党じゃアねえんだ。おれにゃア分かってる。野郎が、てめえやおれをたぶらかし、あとくされなくゆうゆうとお美年をさらっていった目的が胸におちるんだ」

「ど、どうするてんだよ？　お美年ちゃんをどうするんだよッ？」

「いっそひと思いに息の根をとめる方が、よっぽど慈悲ぶけえとなげきてえような、聞くだけでぞっとするほどのむごい目にあわせているだ

ろうよ」
「な、な、なんだって？　やいッ、はっきり言えッ」
「聞け、仙太。おれア平六にだまされたことをとうから感づいてここに舞いもどってきたんだ。小鈴が舟友のしいの木の根元にねえことも気づいていたんだ。何もかも感づきながら、ここへもどってきて平六を待っていたのは……いいか、仙太。おれアてめえを待ちかねていたんだぞ。というのは、ここのところしばらく、てめえとこのおれと手を握る約束をするためなんだ」
「冗談ぬかせ。貴様とおれが……」
「黙れッ。聞けッ。てめえの命の瀬戸ぎわだぞ。てめえばかりじゃねえ、お美年の命にもかかわる話だ。いいか、仙太。てめえとおれと手をにぎるんだ。おれに出来ることは、お美年の行方をつきとめて連れもどしてくることだ。これはおれにしか出来ねえ。てめえなんぞに出来るものか。いいか、おれがお美年を連れもどしてかえしてやる。その代わりに、てめえはてめえの出来ることをやるんだ」
「なんだ、その出来ることとは？」
「お美年の小鈴は、身につけていないことだけはたしかだ。してみると、そのかくし場所は、しいの木の根元にはなくとも、舟友のどこかでなければならねえ。それをてめえがさがすんだ。そっと、だれにもしらせずさがすんだ。それをさがし出しておれに渡せ。引きかえだぞ。引きかえに、きっとお美年をかえしてやる」
「いやだ！　あほうぬかせ。やせてもかれても、この仙太は花屋の身内だッ。盗っ人人殺しの手先になって、ちり一つでも動かすもんか」
「てめえの命がなくなるぞ」
「くそッ！」
「お美年がどうなるかしってるか？　平六のために、どんなむごい目にあわされるかしってるか？　五十両の金でさえ引きかえない平六の真

意が貴様にわかるか？」
「うぬッ、そんなおどしに乗るものか！」
「小僧、てめえ、このおれの恐ろしさをまだ知らねえな。ただのおどかしと思っているんだな」
　声がぷっつりととだえると、それに代わって、穴の周囲から突然さらさらさら……と土砂が崩れおちてきて、みるみる仙太の足先を埋めはじめた。
「あっ、な、何をしやアがるんだッ！」
　しかし、返事もなく、土砂だけがひっきりなしに崩れおちてくる。
「ま、待てッ。待ってくれッ」
と、やせ我慢をはっていた仙太も思わず悲鳴をあげた。
「てめえ、ほ、本当におれを殺す気かッ？」
「おれア目的のためにはなんでもする男だ。本当に死ぬるかどうか、もう少したてば分かるはずだ。百と数えねえうちに穴はうまるだろう」
「待て、待ってくれよう。話にのる。相談にのる。生き埋めだけはかなわねえ。おいッ、てめえのいうとおりにする。やめてくれッ」
「すなおにすりゃア手数がかからずにすむんだ。小僧、分かったのう。これからもあることだ、よく覚えておけ」
「分かった。分かったから、このわなをはずしてくれ。いてえ、いてえんだ」
「いいか、仙太。だれにもしゃべっちゃならねえぞ。てめえは、だれにも知れねえように、そっと舟友を家探しするんだ」
「でも、舟友になかったらどうする？　お美年ちゃんが小鈴をかくしたのは、あの家じゃアねえかもしれねえ」
「野郎ッ、黙って聞けッ。舟友を家探しして、どこにもなけりゃア三四郎だ」
「え？」
「うん、三四郎かもしれねえ。お美年が三四郎にあずけるということは多分にありうることだ」

「畜生ッ、あの三四郎は親分の敵なんだ。親分を手にかけて殺した野郎だッ」
「……」
「あいつは勘兵衛殺しの下手人なんだ。とんでもねえ食わせ者なんだ」
「そんなことアおれに関係のねえことだ。おれのほしいのは銀の小鈴だ。いいか、仙太。舟友になければ三四郎がもっているにちげえねえ。なんでもいいから、小鈴を探し出してもってこい。それまでに、きっと、お美年はおれがとりもどしておいてやる」
「引きかえだな。きっとだな」
「きっとだ。約束したかぎり、絶対に破りはしねえ。仙太、その代わり、それまでに、妙なそぶりをしやアがると……お美年もてめえもただはおかねえぞ」
「何をぬかしゃアがる。おれも男だ、一度約束したかぎり、じたばたするものか。その代わり、ことわっておくが、小鈴とひきかえにお美年ちゃんをうけとって、その取り引きがすんだかぎり、どこでてめえの素っ首へなわをうつかしれねえぞ。ここではっきり断っておくがのう」
「ふふふ……小僧、そりゃアこっちでいいてえせりふだ。取り引きがすんだそのあとは、てめえもお美年もよく気をつけるがいい。おれのことをちらりとでも見知ったやつは生かしちゃアおかねえしきたりなんだ」
「あッ、いッ！　いてえ、いてえ。早く、わなをといてくれ」
「仙太、じゃア、しかと約束したぞ。小鈴を手に入れたら、舟友の板塀に、花と書いた張り紙をしろ。それを合図に、きっとお美年を引きわたす手段を知らせる。きっとだぞ」
「きっとだとも。いいか、お美年ちゃんのこと、きっとだぞ。あッ、いてえ、いてえ！　早くわなをはずしてくれッ」
「仙太、目をつぶれ。おれの面を見るとぶった切る。よしというまで、金輪際、目をあくなッ」

いいながら、その人影は、ひらりと穴の底へ舞いおりてきた。唐桟の着流しに手ぬぐいのほおかぶり、ちらりとのぞいた口元も絵にかきたいような男前の、あの花太郎と名乗る男であった。

地底の幽鬼

三四郎はどうなったのであろうか。
彼が花太郎地蔵の地下道にとじこめられてしまった当時まで話はさかのぼる。
地下道の二つの出口は、とびらと水とにそれぞれふさがれてしまっていた。
とびらは破ろうとして破れないこともあるまいが、その向こうには千川万作の配下のものが見張りについているはずだから、とびらが破壊されるまでむざむざと手をこまねいて傍観しているはずはない。
水に閉ざされた他方の口も、いざという時には水をくぐって泳ぎぬけるという手段もあるが、しかし、どれだけの長さを潜水して通りぬけねばならないかも分かってはいないし、その向こうの出口がはたして無事に通りぬけられるか、それとも何かによってふさがれてしまっているかも予測出来ない。
水にふさがれた狭い地下道を泳ぎぬけることは、広い水中をくぐりぬけるのとは比較にならない難事であることが予想される上、もしも出口までいって引き返すようだと溺死する危険さえもある。
——何者が水門を切っておとしたのだろう？　だれが自分をわなにおとしたのか？
三四郎は、さっきからその疑惑にとりつかれ、やみの中に凝然と立ちはだかっていた。そのまぶたには、あの唐人飴屋呉龍角の道化た顔がありありとうかんでいる。
——水門を切ったのが万作一味の仕業でないとすれば、呉龍角のほかにはない。
仙太をつれてここの地下道へ入る直前、風に

のって伝わってくる飴売りの歌を聞いたのも、今にして思えば、まるで挑戦としか思われない。尾行してきたのだ。その上、やつはこの地下道のことを詳しくしっていたに違いない。今、水の流れこむ水道になっているあの枝道から忍びこんできて、われわれの一挙一動を盗み見ていたのだろう。

そして、逃げ出す際に、水門を切っておとしてここへとじこめてしまったのだ……。

きゃつならどんなことでもやりかねない。先日、浅草寺境内で出会った時、さも愛想よげににこにこ笑っていた目の中に、水のように冷たい敵意のひそんでいるのをまざまざと感じとった。三四郎を恐れ、警戒し、敵視している底意地のわるい何かを、道化た笑いの中にそっとかくしているのを、ありありと見抜いたと思ったのだ。

――ぐずぐずしてはいられない。一刻も早く、ここから脱出しなければならない……。

三四郎があせりを感じたのは、ふっと呉龍角の底意に気づいたからであった。

――勘兵衛が危ない！　水門を切ってわしの退路を遮断したのは、きっと勘兵衛が目的だったからだ。やつは勘兵衛をねらっていたのだ。危ない！　仙太などでは防げる相手ではない……。

三四郎はいらだつようにあたりをにらんだが、脱出する手段は何もなかった。

手にした火なわが、かすかにやみの中をてらしている。さっきまで、勘兵衛が監禁されていたあの穴蔵の底であった。

その片すみにはもう一つ小さな横穴があいていて、その奥は死骸を投げこむ墓穴になっている。さっき、三四郎が身をかくした場所だ。

突然、三四郎はぎくっとしたように目をみはった。

その墓穴に投げこまれ、土壁に上半身をよせかけていたあの老婆お高の死骸が、急にびくびくっと動くのを見たからである。

老婆の死骸が、たしかに、びくっびくっと動いている。

火なわの灯をかざしてその方へ向けると、かっとうつろに見開いたさも無念そうなそのひとみが、ちかちかっとまたたくように影を作ってかすかに動いた。

ほおも動いている。首の辺りも動いている。

びくっ、びくっ、びくっと……。

三四郎は、つかつかっとそばへ寄っていき、横穴から上半身をのめりこまして、じっと目を凝らした。

横穴の奥が井戸のように垂直に掘られ、その中には白骨がるいるいと積み重なっている。その白骨の間に老婆の死骸がはさまっていた。

動いている。たしかに、老婆の死骸が動いている。顔も、胸も、手も、足も、露出した体中が、むくっむくっと動いている。

「ああ……」

と、さすがの三四郎がうめくようにいって、思わず目をそむけた。

動いているのは、老婆の体ではなくて、その膚の上を、皮膚の下を、一面にうごめきまわっている無数のうじ虫だったのである。

三四郎は、心ひかれるのか、いまさらのように老婆の姿を見直した。

ふしぎな女であった。

上野車坂の植甚という植木屋に下宿して、縫い物の賃仕事などで生活をたてていたそうだ。

植甚の話では、二年ほど前、栃木の田舎から出てきて、それ以来ずっと同居しているというだけで、詳しいことは分からない。

折りめ正しい物腰に、もしや屋敷奉公でもしたことがある人かと尋ねてみると、昔、金森様の奥へ御奉公にあがったことがあると言葉少なに物語った。

なにか桐の小箱に入れてひどく大事にしていたものがあり、絶対に他人には手をふれさせな

かったが、なんだか音の具合いでは鈴でも入っているのではないかと思われた。
　ほとんど外出もしないし、訪ねてくる人もない。ところが、江戸の花太郎と名乗る奇妙な人物が出没するといううわさが立ちはじめると、どういう訳か急に外出しがちになった。いつも出かけていくのは谷中の方面で、それも夕方から夜にかけてが多い。
　お高の話では、信心ごとがあって、花太郎地蔵へお参りに通うのだといっていたが、どうもだれか尋ねる人でもあって、しきりにその人をさがし求めているという様子があったと――植甚がそう語った。
　お高について三四郎の調べあげたことはそれだけであったが、もし、この人さえ生きていてくれたら、この事件はたちどころに解決していたかもしれないのに……と、三四郎はそのむごたらしい死にざまにあらためて合掌せずにはいられなかった。
「このままでは成仏もなるまい。いずれ、折を見て、ねんごろに埋葬し、供養もして進ぜよう。南無阿弥陀仏……」
　いや、老婆一人ではない。何十年何百年、年経たかはしらぬが、このうずたかくつまれた白骨の霊も、このままではよも浮かばれまいに……。
　と、三四郎は胸の中でつぶやいたが、とたん、その顔にかっと血の色がさしのぼってきた。
「おう、そうだ！　なぜ、このようなところへ墓場を造ったのだろう？　いかなる理由があって、ここへこのようなおびただしい死骸を？」
　なぜ、こんな地下道の奥深く墓場を造ったのか？
　怪盗花夜叉当時からの習慣だったのであろうか？
　花夜叉当時、この山砦の地下道は、むしろ彼らの常住のすみかであったろうと思われるのに、そのすみかの中に墓場をもうけるだろうか？

　いや、そんなはずはない。現に、今このお高の死骸一つあるために、地下道中に堪えがたい腐臭をみなぎらせてしまっているではないか。だれがこのんでわが家の中に腐臭をもちこむことをしようぞ。
　してみると、ここが墓場になったのは、花夜叉以後この地下道がもはや常住のすみかとして必要でなくなってからのことでなくてはなるまい。つまり、江戸氏がこの辺りに館をもうけてからのことだ。
　当時は、永いこと戦乱の時代がつづいたから、暗々のうちに殺害し、暗々のうちにその死体を処置せねばならない敵も多かったことであろう。そういう死骸を投げこむ墓場としては、この地下道はうってつけだったと思われる。
　ただ、それならば、なぜ、特にこの一個所だけが墓場に使われたのか。地下道は長く、至るところが墓場になりうる。それを、わざわざこの広い洞穴の一隅から狭い横穴をうがって墓場を造ったのであろう？
　このように狭い窮屈な横穴をくぐって死骸を運びこみ、小さな縦穴の中へこのおびただしい死骸を次々に投げこんだのであろう？
　三四郎ははたとわが手でひざをうった。
――これは何か意味がなくてはならぬ。丁度、あの厨子の中に祭りこまれてあった花夜叉のどくろと同じ意味があるのかもしれない。
　あの行きづまりと思われていた土壁が、花夜叉のどくろによって巧みに出入り口をふさいであったと同じように、この墓場の底に投げこまれているおびただしい人骨が、その向こうにある何物かをひそかにかくしおおせているのではあるまいか？
　そうだ。花夜叉のたたりを恐れてその首をまつり、首塚をもうけたなどと言い伝えているのも、実は事の真相をかくすための作り話であって、あのどくろは、もともとなんの仕切りもなく直通していた地下道を、何かの目的があって

——多分、みだりに人を奥へ立ち入らせぬために、巧妙に遮断してしまうためのものであったに違いない。

　そして、それとまったく同じように、この墓場も、同じ時代に同じような目的をもって故意に造られたのではあるまいか。

　どくろや人骨というものが人間の目をそむけさせ、足をとめさせるになによりの効果をもっていることはたしかなことだから……。

　三四郎は、火なわをかざしながら、縦穴の底へとびおりた。

　さっき一度、そこへ身をひそませて一応は調べてある。まったく行きどまりと思ってはいたが、もう一度、徹底的に調べ直すためであった。

　白骨がきわめて古いものであることは一目でそれとしれた。積み重なった具合いから、だれ一人——万作の一味でさえ、ここへ手をふれた者のないことも明らかであった。

　白骨を次々と片よせていく。

　三四郎の目が、にわかにきらきら光り出した。

　そこに投げこまれていた人骨は、ばらばらに砕けていてはっきりは分からないが、どくろの数から見ても、少なくとも十体近くはあったはずである。

　狭い穴の底にそれだけの人骨が折りかさなっているのだから、足のふみ場もないくらいであった。

　それを一つ一つ片寄せていくうちに、底の一隅から青黒い岩膚がちらっとすけて見えているのを認めたのだ。

　その膚色が、天然自然に埋没していた岩とは思えない。人手で削ったと思われるのみのあとがあった。

　三四郎は手早く周囲の土をかきのけてみた。かぶっている土の厚みは三、四寸から一尺くらいあった。その下に、平らな岩膚が一面に大きくひろがっている。ひと抱えほどもある大きな石と石との透き間は漆食を使ってかためてある

らしい。

　もはや、それが人工的に造られている石壁の層であることは疑いもなかった。

　墓場の底へ、こんな厳重な石壁を作ったのはなんのためであろう？　この下に、何かかくしてあるのではあるまいか？

　三四郎は、足に力をこめてその上を踏んでみた。一個所だけ音の違うところがある。なにかその向こうに空洞でもあるような、響きをともなった音がした。穴の底の一番片すみによった個所であった。

　三四郎は、もう一本残っていた小柄を抜いて、石と石の間の漆食の部分へさしこんだ。漆食をはがして透き間をこじっていく。

　はじめは盤石のようにこゆるぎもしなかった石が、やがて少しずつ動き出してきて、三四郎が満身の力をこめた指先に、とうとうすっぽりと抜きとられた。

　とたん、その穴の口から、すうっと風が吹きこんできて顔にあたった。はたして、その向こうには新しい別の空洞があるらしい。

　三四郎は腹ばって、その穴へ顔をよせながら、火なわの先を長くたらしこんだ。

　よくは分からないが、壁を石垣に組んだかなりの広さがある洞穴らしい。床までの深さはどうやら一丈くらいあるだろう。

　三四郎はちゅうちょしなかった。

　そこが行きどまりであろうがなかろうが、また、どんな危険が待っていようが、いまさらためらってはいられない。ためらっていたところで、娑婆へ引きかえしていく手段は何一つなかったからだ。

　両刀を腰からはずし、さげ緒にくくって、先に洞穴へたぐりおろした。それから、穴の口へ足先からもぐりこんでいく。やっと、どうやら抜けられるほどの広さがあった。

　脚が宙にういた。と思う間に、一丈の高さをひらりと舞いおりて、その底に立っていた。

火なわをかざして見渡すと、天井も、床も、ぐるりの壁も、全部石垣造りにして、その透き間を厳重に漆食で固めてあるらしい。

どのくらいの広さがあるのか？　いや、一体、ここはなんのために造られた洞穴なのか？

火なわの灯は、ほんのわずか体の周囲をてらしているだけで、三、四歩先はもうやみであった。

三四郎はなにげなく火なわをかざしながらそのやみの方へ歩みよっていった。

「う！」

三四郎がのどの奥でうめいたのである。

行く手のやみの中に、かあっ！　と両眼をむいてこっちをにらんでいる男がいた。

その男は、一隅の石壁にそっておいてあるなにやら朱色をした細長い長方形の棺のようなものの上に腰をかけていた。

よくは分からぬが、黒っぽい紋服に袴をつけ、黒頭巾で顔を深々と覆っている。

その頭巾の間からのぞいている顔はぞっとするほど青白く、こちらをじいっとにらんでいる両の目は、まるでうつろな穴のように黒々と影を作っている。

三四郎が、瞬間、かすかに火なわの火影の中にちらりと認めたのはそれだけであった。

三四郎も棒立ちになったが、相手はなおそれよりもじいっと動かない。身じろぎもせず、ただじいっとこちらを凝視しているのだ。

その時、

おやっ?!

と、三四郎が急にそんな目つきをした。

彼は、何思ったか、突然、大股にその方へつかつかっと歩き出した。

相手の体がゆらりと動いたのはそれと同時である。まるで、三四郎の歩き出したのに誘われでもしたように、急にゆらゆらっと動き出したと思ったとたん、その上体は横ざまに倒れはじめ、崩れ、小さくなり、そして、くたくたにし

ぼんだ衣類だけを残してあとともなく消えさってしまった。

いや、消えてしまったと、一瞬、三四郎の目にそう見えたのである。それは衣類をまとい、棺の上に腰をかけ、背を壁にもたせかけたまま、完全に白骨と化し去っていた死体だったのだ。

おそらく、それが三四郎の近づいてくる震動によって急に均衡が破れ、倒れると一緒に、骨がばらばらに砕け崩れてしまったのであろう。

しかし、そんなことよりももっと奇妙な出来ごとが同時に起こって、さすがの三四郎を愕然と立ちすくませた。

白骨が横ざまに倒れかけた瞬間、その体のどこかから何か小さな白く光るものが棺の上へぽとっと落ち、さらに転げて、床の石畳の上に小さく弾んで静止した。

りりん……。

り、り、りりん……。

すばらしく澄んだ美しい鈴の音であった。

三四郎はすぐ手をのばしてそれを拾いあげてみた。

銀製と思われる小鈴であった。

「花」という文字が、たった一つ彫りつけてある。

それは、形といい、音色といい、お美年から見せてもらったあの小鈴と寸分たがわずまったくうり二つであった。

つまり、金森家において、男子が出生する時、必ずその一個を与えて守り袋につけさせると伝えられている同家の家宝とも称される三個の鈴のうちの一個に違いない。

そのうち一個は金森家の嗣子源之丞頼直の手にあり、一個は思いもかけずお高という老婆の手から今はお美年の手に渡っている。

残り一個は、とうから行方不明と伝えられ、金森家でも必死に探しもとめていたと聞いた。

なぜ、その小鈴が、この白骨の男と一緒に、このような何百年も浮き世と隔絶されている地

下穴の中にかくれていたのだろうか？
いや、そもそもこの白骨は何者だろうか？

体は白骨と化していても、衣類がそのままの形を残しているところでは、とても何百年もの月日がたっているとは思われない。長くともこの白骨は二、三十年以上はたっていないはずだ……。

三四郎はあらためて洞穴の中をたんねんに調べてみた。

広さは十畳くらいあるであろう。四方ぐるりから、天井、床まで石を組み、漆食で固めてあることは前に見たとおりだが、一番奥の一隅に、壁の中央を三尺四方ほどえぐりとって、そこにとびらがついているのに気がついた。

青銅を鋳流して造ったおそろしく分厚い一枚板で出来ているらしい。その青さびた様子からも、非常に永い年月を経たものとしれるが、向こう側へ開くようになっているらしいそのとびらは、押してもたたいてもびくともしなかった。

ところが、よく見ると、そのとびらのわきの部分が石垣を掘りくずしてぽっかりと穴があき、足元にその石塊や土砂がうずたかくつもっている。人ひとりやっとはいこめるほどの狭い穴であった。

はいこんでいってみると、その曲がり具合いで、どうやら青銅のとびらの裏側へむけて掘りぬくつもりだったらしいことが分かったが、その辺りでおびただしい岩石の積み重なった層につきあたり、やむをえず別の方向へ掘り進んでいる。

そして、四間近くも進んだと思うと、ばったりと土壁につきあたり、そのまま横穴はとまっていた。

その行きづまったところに、二つに折れた小刀が、真っ赤に赤さびたまま落ちている。さらに、もとの洞穴までひきかえして掘り口のあたりをしらべると、そこにも、幾つにも折れたまま、赤さびた大刀が土にうもれたなりにすてて

ある。

それらのことから、ある想像が三四郎の胸にうかんできた。

今、目の前で崩れ散った黒頭巾の武士らしい男は、何かの目的をもって、ただ一人、ひそかにこの洞穴の中へ忍び入ってきたらしい。朱塗りの棺の上に、もえつきたろうそくの死骸が残っていることからも、彼が何事か調べる目的をもってここへ来たことは明らかだと思われる。

入ってきたのは、その青銅のとびらからであろう。三四郎が入ってきた花太郎地蔵に通じているあの口は、漆食にかためられた石畳にふさがれていて、三四郎以前にだれ一人通過した痕跡がないのだから、青銅のとびらから入ったと想像するほかはない。

ところが、彼が洞穴へたどりついた直後に何事かが起こったのだ。何かが起こって、とびらは開かなくなり、その上、とびらから向こうへ通じている横穴がおびただしい岩石を含んだ土砂をもってふさがれてしまったのだ。

それが、自然の崩壊によるものか、それとも何者かが故意にやったものかは分からないが、結果として、彼はこの洞穴の中へとじこめられ、完全に娑婆と遮断されてしまったに違いない。

彼は花太郎地蔵へ抜ける道を知らなかったのだ。探したかもしれないが、四方は漆食でかためられた石壁だし、たった一個所しかない狭い道路——つまり、三四郎の入ってきたあの天井の一角は、十尺余も高い、しかも片すみの、たった一個の岩石だから、容易なことでは発見出来なかったのであろう。

やむをえず、彼はとびらの背後へ抜け穴を掘ろうとする。しかし、とびらの背後もすでに完全にふさがれてしまっていた。彼は、もう死にもの狂いで、ただ掘りに掘ったに違いない。

彼がどんなに死にもの狂いで必死にそれをやりつづけたか、幾つにも折れてむなしくおちている赤さびた二本の刀がなによりもよく物語っ

ていた……。

その白骨の主は、すでにぼろぼろにはなっていたが、その身につけていた衣類の様子や、さびてすててあった刀の柄の作りなどから見て、しかるべき主人もちの武士と思われた。

いかなる素姓の男だろう？

何か身元を知る手がかりはないかと、三四郎はあらためて崩れて伏している白骨の衣類の間をさぐってみた。

と——出てきたのは、紙入れと一通の封書である。

紙入れは、その博多織の布地もすでに苦もなく引き裂けるほど性がぬけていたが、その中には小判で五両と数枚の小銭とがはいっていたし、さらに、その間から、小さく畳んだ名札らしいものが出てきた。

ひろげてみると、

——美濃郡上、金森兵部少輔頼勝家臣、納戸役　木暮五郎蔵直信

と書いてある。

果然、三四郎ははげしく動悸がうってくる胸をおさえることが出来なかった。

この男も金森家ゆかりの武士であったのだ。花太郎地蔵と無縁の武士ではなかったはずだ。

封書を手にとってみた。

厳重に封をしたまま、開いた形跡はない。

上書きに「美濃国郡上八幡、金森家家中、木暮五郎蔵内きよ殿」としたため、裏をかえすと「金森家、江戸屋敷内、木暮五郎蔵」とかいてある。

つまり、この木暮五郎蔵と称する白骨の主が、金森家の領地である郡上の八幡にいるきよ女という人にあててかいた書状らしいのだ。

三四郎は用心しながら封を切った。よほど長い年月をこの湿けた地下におかれていたため、用心していてもともすれば裂けて千切れそうになる。

名札をかいたと同じ筆跡で、よほどあわただしくしたためたと思われる走り書きであった。

火急の文、よくよく驚かれ候ことと存じ候。詳しき事情あいしたため候余裕もこれなく、まことに本意なく存じ候えども、ひたすら夫を信じられ候て、この文の指図に従い、すべて遺漏なきこと切に願い上げ候。

江戸屋敷において思いもかけざる騒動突発いたし候なり。これ、同役柴田新五右衛門ならびにその一味の陰謀に起因いたすものにて、すべてはそれがしに対する嫉妬のためと存ぜられ候も、なにせ新五右衛門は御台所お茂の方さまにとり入り候ての悪辣なる画策、無念には候えども一時は身を避けるにほかなき仕儀と相成り候。このままに許しがたき儀方々なれども、隠忍し、時を待たず候ては、何事もなしかね候儀にこれあり候。

さだめし驚かれ候ことと存じ候も、それがしを信じ、その辺よろしく御推察これあるべく。

さて、この文一見次第、即刻、郡上を引きはらい、木曽福島の恵林寺へ立ちのかるべく候。他言一切無用。家財その他そのままに打ちすてられ、夜陰を待って、右近一人のみつれ、立ちのかれたく候……。火急を要し候。つゆうたがわず、即刻になしくだされたく候。

右近はまだ二歳の幼弱、くれぐれもおいといなされたく、ともかくも福島なる恵林寺まで至急立ちのかれ候よう願い上げ候。

なお、それがし儀は、おそくとも数日後、早くば明後日江戸をたち、そのまま恵林寺へ直行し、お会いいたすべく候。

くりかえすようなれど、屋敷の家財その他一切、心をかけられずすておかれて、ひたすら一刻も早く立ちのかれたく候。なお、あるいはすでにお耳に入り候やと思い候につき申し上げ候も、花太郎さまに関するうわさ、すべて根も葉もなきことなり。

さる三月、江戸屋敷において御誕生これあり

候、御男子花太郎さまには、あらためて申すまでもなく、殿と御愛妾水尾さまとの間にお生まれあそばされ候御子にて、それがしと水尾さまと不義をなし候てもうけたるひそか子などとの風聞は、これまたすべて新五右衛門一味の根も葉もなき捏造にて、金森家のおんためにも断じて許しがたき儀に候。

思うに、御正室お茂さまにまだ御子なく、花太郎さま御誕生のため、御後嗣を妾腹にうばわれ候ことを嫉妬したもうお心につけこみ、新五右衛門が巧みに捏造いたし候ものにて、あわせてそれがしに不義の汚名をきせ失脚させ候わんの、まことに許しがたき策謀にこれあり候。申し伝えたきこと多々これあり候えども、今はそのいとまもなく、いずれ恵林寺にて万々お話し申し上ぐべく候。

重ねてかき添え申し候。この文一見次第、即刻郡上を立ちのかれ、福島の恵林寺へ向かわるべく候。　　以上

享保二年五月四日

五郎蔵

きよ殿

読み終わった三四郎は、それを丁寧に畳んで、先刻ひろいとった小鈴と一緒に懐におさめた。

享保二年といえば元文四年のこの年から数えると丁度二十三年前にあたる。

二十三年前に書かれた文が、そのまま開かれもせず、書いた本人の懐の中で朽ちはてようとしているのは、つまり、この五郎蔵なる白骨の主がこの地下の洞穴にとじこめられたのが二十三年前だということになるのではないか。

二十三年前、金森家の江戸屋敷で、なにか容易ならざる事件が起こったのだ。

それにまきこまれ、重罪にとわれようとしたこの五郎蔵は、いち早く脱藩してその難を逃れようとしたらしい。

そして、この文をかき、郷里の妻子を一足先に福島へ避難させ、おそくも数日後、早ければ二日後に、己も江戸を出奔して妻子のもとへ走るはずだったのだ。

ところが——

そこでまた何か起こったのだ。

そのために、折角かいた書状を急飛脚に託して郷里へ送る余裕もなく、彼はそれを懐にしたまま屋敷を出て、だれかに誘拐されたか、それとも、己自身の意志をもってこの洞穴にはいりこむ。

そして、それっきり洞穴から出ることはなかったのだ。二十三年間、幽鬼となってこの地下に悲愁の声をあげていたのだ……。

三四郎の視線は、いまさらのように朱塗りの細長い棺の上にくぎ付けになった。

その上には、たったいましがたまで、五郎蔵の白骨が腰をかけていたのである。まるで、だれにも指一本触れさせせぬぞと、白骨と化してまでどっかり腰をかけていたという印象があった。

もし、三四郎の想像にして誤りなくば、二十三年間、彼はその上にがっきと腰をおろしつづけ、そして、はかなく崩れ散った今でさえ、なおその棺をひしと抱きしめているように思われる。

幅は三尺に足りないが、長さは六尺近くあるであろう。朱漆で厚くぬりかためられている。その朱漆のところどころに亀裂が生じて下の木膚が見えている様子から、相当に長い——おそらく何百年という年月を経たものらしいと想像される。

しかし、三四郎の目を奪ったのはそういうことではない。火なわの灯を近づけてさぐっているうちに、その棺の一部に、金泥をもって、丸の中へ花という字をかいた紋章のようなものを認めたからであった。

この紋章は一体何を意味しているのであろうか？

金森家の御曹子花太郎様のことか。花太郎地蔵の意味か。それとも怪盗花夜叉をさしているのか？　いずれにせよ、その棺の作り具合いからして、その中にはよくよく貴重なものが秘蔵されているに違いないと思われる。

三四郎はまず五郎蔵の白骨を丁寧にわきへ抱きおろした。

棺のふたは、もともと朱漆をもって塗りこめられ、中へ空気の入らぬよう密封されていたらしいが、後になってだれか刃物をつかって切れ目を入れ、ふたをはいだ形跡がみとめられた。

三四郎は用心ぶかくふたに手をかけ、静かにそれをとりのけた。

中に納めてあったのは、ただ一体の人間の白骨であった。白衣をまとって仰臥し、両手を胸の上に組んでいる。

ただ、異様なのは、その首のないことであった。しかも、その首が生前に刃物をもって断ち切られたらしいことは、白衣の襟元からのぞいている頸骨の先端が、斜めに鋭くそげていることでも察しがつく。

――花夜叉の死骸だ！

と、三四郎はすぐ直感した。

――遠い昔、江戸小源太春正に捕らえられて首級をはねられたという怪盗花夜叉の死骸がこれだったのだ……。

白骨は、首がないままに、六尺近い長さの棺いっぱいにのびている。生前はおそらく六尺をはるかに超えるたくましい男だったに違いない。剛勇をもって関東にその名をとどろかしていた花夜叉にふさわしい姿ではないか。

ただ、いかにも奇妙なのは、花夜叉の首だけ花太郎地蔵に程近い地下道の壁へ厨子におさめて祭りこみ、この首なし胴体だけをわざわざどうしてこの奥深い個所に埋めたのだろうか？

しかも、地蔵堂から通じている地下道とは、漆食でぬりかためた石畳をもって厳重に遮断したのはなぜだろうか？

いやいや、それよりも、二十三年前、金森家の納戸役木暮五郎蔵は、脱藩して木曽へただ逃れるあわただしい直前に、なんの目的をもってここへ忍びこみ、そして、花夜叉の白骨をおさめた棺の上で悶死しなければならなかったのだろうか？

まだ解けない疑問は幾つもわだかまってはいるが、しかし、この洞窟内で発見したことから、今まで空白だった事件の重要な部分がおぼろげながらも満たされかけてきたと三四郎は思った。

もう一度、この事件のそもそもの発端から筋道をたてて思い出してみよう。

武蔵野の大部分がまだ雑木林と荒地で覆われていた遠い昔、この丘陵地帯を占領して花太郎とも花夜叉ともよばれる大盗が住んでいた。

数十人の部下をかかえ威力をほこっていたたいわば野武士の総大将であって、この辺り一帯に点在する村落の人たちも心から信服し、常に物見、通報の役をかっていたため、江戸館に覇をとなえていた江戸氏の武力をもってしても、容易に彼を捕らえ殲滅することが出来なかったのだ。

その神出鬼没、豪勇無双と伝えられた花夜叉を、ついに捕らえて斬首の刑に処したのが、江戸氏の一支流、小源太春正だったといわれている。

彼は、花夜叉の山砦あとに館を造って住み、その子孫は太田氏が江戸城の主となってからも引きつづいてその地にあり、のち徳川氏が江戸入りするに及んでその勢力下に属し、姓を金森氏と改め、さらに戦功あってやがて、美濃郡上に二万八千石の大名となったというのが、金森家の歴史のあらすじである。

ところで、花夜叉を切った小源太春正だが、彼は、そこに館を造って移り住むようになってから、花夜叉の怨霊に悩まされるとか称し、彼の首級を祭って首塚なるものを造り、さらに供養のための地蔵尊を建立した。

ところが、その実、花夜叉の首級は地下道内の壁面へ厨子に納めて埋めこまれてあり、しかも、その厨子は、その背後につづく地下道の口をふさぎかくすためではなかったかと思われる。

さらに、この最後の洞窟の入り口も同じ手段によっておびただしい人骨の山でそれをかくし、その上、石と漆食で周囲をぬりかためてしまったのだ。そして、そこには花夜叉の首なしの遺体と思われるものをうるし塗りの棺に納めて安置し、しかも、このことはよくよく極秘の間に行われたとみえて、小源太の子孫がその館に住みついている間はもちろん、金森氏と姓を変えて他国へ移っていった後々まで、だれ一人そこに近づいた者もなければ、おそらくその事実を知っている者さえなかったように思われる。

さて、一方、いつのころからか——言い伝えによれば、小源太春正の遺言によって——その子孫は、家督をつぐべき長子をもうけた時に、花太郎なる幼名をつけ、さらに生まれた男子の一人一人に銀の小鈴を与えるというふしぎな習慣を生じ、現に、金森家においてはそれが実行されているらしい。

もちろん、その伝来の小鈴は三個しかなくて、それを与えられた男子も長じて一家をなす時には、また金森家の当主の手元へそれを返却するしきたりになっている。

ところが、二十三年前になって突然異様な事件が突発した。金森家の納戸役、木暮五郎蔵という人物が、この花夜叉の遺体を納めた洞穴へ、別のだれも知らないはずの通路から忍び入り、その遺体を納めた棺の封をはいで内部をあばき、そして、己はその棺の上で餓死し、白骨と化してしまったのだ。

しかも、彼は金森家の男子にのみ与えられるという銀の小鈴を所持していたし、当時、生後間もなかった金森家の後嗣、花太郎とよばれた幼子は、彼が側妾水尾なる女と情を通じてでもうけた子であろうという疑いまでかかっていた……。

そもそも、二十三年前に側妾水尾なる人が産んだという男子、花太郎君はどうなったのか？

今、金森家には源之丞頼直という若殿がいるが、彼が御正室の腹に生まれた男子であることは明らかな事実で、ほかには男子はもとより一人の子供すらないと聞いている。

三四郎は、突然、いま江戸の花太郎と名乗って世間をさわがしているあの怪盗のことをふっと思いうかべた。

——そうだ！　ぐずぐずはしていられない。ことによると、勘兵衛とお美年の親子が危ない。二人はあまりにあの花太郎のことをしりすぎているからだ。その上、お美年は銀の小鈴をもっている。危ないッ、命をとられるかもしれんぞ……。

さて、どうやってここから脱出すべきか？　地蔵堂に通じている地下道の出口が二方とも完全にふさがれていることは分かっている。

よくても悪くても、この洞窟の戸口から——いや、五郎蔵が掘り進んだ抜け口を、さらに向こうへ掘りぬくよりほかに手段はないであろう。五郎蔵がその方角へ掘り進んだということは、なんらか脱出する可能性を認めたに違いないからだ。

その時、三四郎は、棺の上のかぶせぶたの表に、何か彫りつけてあるのに気がついた。

朱漆でぬりかためたその表面を、石のかけらのとがった先端ででもひっかくようにして彫りつけたと思われる。じっと目を凝らしてみて、やっと読みとれるような乱雑な文字であった。

——享保二年五月四日
燭火つきて以来、
幾日幾十夜。
飢餓、疲労。
抜け穴、いまだ通ぜざるに力すでにつきたり。

野心はたさず、
怨恨胸を裂く。
この暗さ、この暗黒、このやみ……。
いま聞く、花夜叉の呪咀、執念のすさまじき声を……。

享保二年五月四日といえば、五郎蔵が郷里の妻女にあてて文をかいた日だ。

はたして、彼はその夜、この洞窟に潜入し、灯の絶えた暗やみの中で飢餓と疲労に責めたてられながら抜け穴を掘ることに狂気のようになり、そしてとうとうむなしく白骨と化したのだ。

その死の直前、その無念さを必死の思いで棺の上になぐり書きしたものであろう。

三四郎は、愕然とし、そして慄然とした。

自分の手にしている火なわがもはや残り少なくなって、まもなくあたりから一切の光が消えさろうとしているのに、いまさらのように気づいたからだ。

灯の消えさったあとに何がくるのか。

飢餓か、死か……。

五郎蔵の運命が同時に三四郎自身の運命でないとだれもいいきれはしない。

もはや、手段はただ一つしかないのだ。

息のあるうちに、抜け穴が掘りぬけられるかどうか？

三四郎は、わずかに余光を保っている火なわをかざして、あらためて洞窟の中をじいっと見回した。

これがこの世で目にする最後の光景になるかもしれない。

それから、彼は五郎蔵の掘り残していた横穴へ突進するようにはいこんでいった。

三四郎は、木暮五郎蔵の遺志をついで、彼がやりかけたままむなしく中絶した抜け穴を掘りすすむ仕事にとりかかったが、すぐそれが容易ならざる困難をともなう仕事だということに気がつきはじめた。

五郎蔵がそれを掘るために使ったらしい折れて赤さびている小刀の残骸をひろって土壁にいどんでみたが、やっと腹ばって進むしか余裕のない狭いところでは、不自然な姿勢の上にひじがつかえて力が入らず、仕事は遅々として進行しないし、そうかといって、穴を大きく広げるには、またそれだけの時間と労力がかかるわけだ。

やっと掘り崩した土は、その都度、洞窟まで運んですてねばならず、少しそれをおこたっていると、今度は掘り崩した土で穴がふさがってしまう。

三四郎は、洞窟の中に山積みになっているそうした土砂の間に、羽織の腐ってひきさけた残骸らしいものが残っているのを見た。

おそらく、五郎蔵は羽織をぬいで、掘りとった土砂の運搬用につかっていたのだろう。

ちゅうちょしている場合でないから、三四郎もその知恵にならった。羽織は着ていないから、膚襦袢をぬいでそれにあてる。

その時、三四郎は、山積みになった土砂の間から、なにやら紙くずらしいものがちらっと顔を出しているのに気がついた。

手にとってみると、何枚か重ねた紙をそのまなわのようにひねって燃やした残骸らしく、思うに、木暮五郎蔵は、ろうそくの灯がまさに消えなんとする時、持ち合わせていた紙束をひねって火を点じ、一時の急場をしのぐ灯火に使用したのであろう。

わずかに燃え残っている紙の部分に、なにやら文字らしいものが見えた。用心しながら、そっと広げてみる。

やっと、これだけの文字がよみとれる個所があった。

……小源太春正、突如発狂し、そのまま狂死す。遺言なし。すなわち、その秘密を知る者なし……。

これは一体、どういう意味なのであろうか？

いや、そもそも、五郎蔵が灯火の代用に焼いたこの書きものは、いかなる種類の、何を書きしるしたものなのか?
　数枚の紙を重ねたままひねってある。おそらく、一冊の書物の形体をなしていたものだったに違いない。
　その下の焼け残っている部分にも、なお読める個所が幾つかあるようである。
　三四郎が急いでその部分をはがし、開こうとした時、火なわの灯は二、三度まばたくように明滅して、そのまま命つきたようにふっと消えさってしまった。
　あたりは暗やみに包まれた。暗い、暗い……まったく、何一つ見えない真のやみであった。何百年もの間、花夜叉の遺骸を包んでいたやみ、そして、二十三年前に五郎蔵を死に誘いこんだやみがこれであった。
　さあ、もうわしに出来ることはただ一つしか残っていない。掘るだけだ!
　三四郎は、手さぐりで抜け穴へはいこんでいき、営々と掘りはじめた。
　掘っては、その土を運んですて、またはいもどって掘りつづける。
　幾時間たったろう? いや、それとも、もう幾日もたったのだろうか?
　飢えと渇きが、悪夢のようにしつこく襲いはじめてきた。
　飢えはともかくも、のどの渇きは堪えがたい苦しさであった。
と——
　ちらっと脳裏をかすめたのは、花太郎地蔵への地下道を遮断したあの水のことであった。
　ああ、あすこに水がある!
　と思い立っては、もう矢も盾もたまらない。やみの中を手さぐりで、記憶をたどりながら、地下道への出口の真下へきた。石一つとりはずしたその出口の穴まで、一丈余の高さがある。
　三四郎は、花夜叉の棺を移動してきて足場に

し、さらに石壁のところどころへ足場をきざんだ。といっても、直立した一丈余の壁を登ることは容易なことではない。
　どうして登りきったか無我夢中であった。やみの中を、どうやってはい進んだかもはっきりとは覚えていない。
　はっとわれにかえったのは、地下道の一郭をひたひたと閉ざしている水辺に座って、その水を一息にむさぼり飲んだ直後のことであった。
　三四郎は蘇生したように気力がいきいきとかえってくるのを感じた。
　——たとえ食うものはなくとも、この水さえあれば、十日や二十日で死ぬるものではない。五郎蔵を見よ。彼こそは、水の一滴にさえ恵まれず、しかも、少なくとも数日、あるいはそれ以上あの洞窟に生きていた形跡があるではないか。その間には、あの抜け穴をどこかへ掘り抜くことが出来ないはずはないのだ……。
　三四郎は、飲めるだけその水をのみ、さらに手ぬぐいにまでずんぶり水をひたして、これでよしというように、また手さぐりで洞窟へひきかえしてきた。
　こうして、またわき目もふらず穴掘りにとりかかった。
　渇きを覚えてくると、ぬれた手ぬぐいを口にふくんで耐えられるだけ耐えている。地下道の水のあるところまで往復するのは、非常に体力を消耗するし、時間の浪費だと思ったからだ。
　さらに、幾時間、幾十時間たったであろう。手ぬぐいの水気もまったくかわききり、渇きもいよいよ堪えがたくなったので、もう一度、水のある個所へ行こうと、石壁へよじのぼるために手をかけた。
　しかし、飢えがその手足の萎えを次第にひどいものにしたのであろう、前にはどうやらよじ登れた石壁を、どうやっても二度と登ることが出来ないのだ。
　それからのことは、もう三四郎の記憶にはほ

とんどのこっていない。残っているのは、ただただ飢えと渇きに責めたてられるはげしい苦悶だけであった。

明けてもくれても、その周囲にあるのはやみである。幾日たったか、もちろん分からない。

三四郎は気力だけで、

――死ぬものか！

と、歯をくいしばってこらえている。

しかし、どこからも救いは来ず、飢えと渇きはいよいよはげしく、ついには立って歩くことも出来ないような深い疲労と衰弱がきた。死は目前に迫っていたのである。

と――

丁度、その時であった。

死力をふるって突きたてる刀の先端が、ぐざぐざっと土砂を崩して向こうへ抜けた。

そして、そこから星くずのきらめく夜空を明らかに見たのだ。

――助かった！

と思ったとたん、三四郎は精魂つきはてたように気を失った。

三四郎がふとわれにかえった時、農家の一間らしいところに寝かされている自分に気がついた。

天井や柱の様子では、よほど古い大百姓の住まいと思われる建物であった。

窓の向こうに、年ふりたすぎの森が天を摩し、そのこずえごしに朝の光がさんさんとさしこんでいる。

「あ、お気がつかれましたか。本当にようございました。ああ、お動きになってはいけません。そっとしておいでなされませ」

と、まくらもとから心配げにのぞきこんでいた老人が、起き上がろうともがいている三四郎をあわてておしとめた。

そして、ふすまの向こうへ、

「これ、加代、加代はいないか。お膳を早くこちらへお持ちするのじゃ」

と、声高に呼びかけた。

年は七十を幾つか超しているであろう。その白髪にも、顔のしわにも、人生の苦労がしみついているような老人であった。

「ここは？」

と、三四郎はあえぐようにかすかな声で聞いた。

「道灌山下の尾久村と申すところでございますよ」

と、老人はにこにこしながら答える。

「それで、わしは？」

「ゆうべ、その庭先に倒れておいでなのを、孫娘がお見つけ申しましてな」

「かたじけない」

三四郎は、やっとそれだけいうと、また重くまぶたをとじてしまった。

花夜叉のひつぎのある洞窟から脱出しようとして、掘りぬいていった抜け穴の先に、ぽかっと穴があいて星のきらめく夜空を見たことまではっきり覚えている。

疲労困憊その極に達していた自分は、とたんに気を失ってしまったのだろうか。はっきりしないが、なにか深い井戸の底へでもおちこんでいったような感じが、記憶の中にかすかに残っている。

一体、それからどうなったのか。この家の庭先に倒れていたというが、ここまでどうやって歩いてきたのか。

その辺は何一つ覚えていないが、だれかに抱きあげられたことや、くちびるへ水をそそがれてむさぼるようにのんだことや、衣服をぬがされて、冷たい水で全身をぬぐってもらったことが、まるで遠い遠い昔の夢のように、かすかに記憶に残っている。

――そうだ、夢ではなかったのだ……。

と、三四郎は、いまさらのように寝床の中にあるわが身を指先でなでまわした。

穴を掘り、それをくぐりぬけたのだから、さ

だめしどろまみれであったろうと思われる衣服が、いつの間にかこざっぱりした寝巻きに変わり、髪もとき崩して、すがすがしく櫛を入れてあった。

「おそくなりました」

と、十三、四と思われる少女が、にこにこしながら膳をささげて入ってきた。

膳の上には、程よく温めたかゆがさもうまそうに湯気をたてていた。

「おじさま、お起きになってはだめ！　あたし、食べさしてさしあげます」

と、こざかしくもたしなめながら、にじりよってくる。

三四郎はいいなりにまかせているよりほかなかった。全身にどろのようなはげしい疲労と衰弱がまといついていて、片腕を動かす気力さえ残っていなかった。

「さあ、おじさま、お口をおあきなさいませ。少しずつ、幾度にもおあがりになるのがいいのですって。一度に沢山召しあがると、かえってお体に毒なのよ」

と、加代とよばれた小娘は、利口そうな目をくりくりさせながら、かわいらしいおませな口をきく。

程よく人膚にあたためてあるかゆのうまさが、極度の飢餓におとろえきっている三四郎の気力を一箸ごとに引きたてていくようであった。

「はて、今日は幾日であったかな？」

と、三四郎はふと気にかかったように尋ねた。

「まあ！　今日が幾日か、お忘れになりましたの？」

加代はさもおかしそうに、くっくっとのどの奥で笑いながら、

「今日は三日でございますよ」

「三日？　三日とはいつの三日か？」

「ほほほ……おじさまがあのようなことを……三日には二つはございませんわ。八月の三日に

きまっておりますよ」

「えっ？」

と息をのんだ三四郎は、胸の中で素早く指を折ってみた。

あの花太郎地蔵の地下道へ忍び入ってから、それではもう十日に近い日数がすぎていたのであろうか……。

飢餓に責めたてられ、ことに渇きの苦しさにのたうちながら、死にもの狂いで抜け穴を掘りつづけていたが、それが無限の長さにも思われたし、またたく間の出来事だったような気もしていた。

助かったのだ——という思いに、いまさらのようにうたれながら、

「お礼を申し上げたい。ごあいさつをしたい」

と、老人の方へ目を向けると、

「いえもう、そのようなことはどうぞ……」

と、老人は急いで手をふって制した。

「分かっております。あらかたの御事情は、もうよくのみこめております。もう、何もおっしゃらずに……」

「分かっておいでとは、わしがどこから来たかということもですか？　わしはどろまみれの姿で倒れていたはずです。どこから、どうしてやってきたかお分かりなのか？」

「あなたさまはこのすぐ先の庭に倒れていらしたのでございます。それをこの加代がお見つけ申しましたので……それでよいではございませぬか。それ以上、何もおっしゃる必要はございません。いえ、決して何事もおっしゃってはなりません」

一切しゃべってはならないと、なにか意味ありげな目配せのしかたであった。

「それよりも、どうぞお心安くゆっくりとお休みくださいまし。御体力、御気力の御回復なさるまで、幾日でも御遠慮なく……加代、よくお世話申し上げるのだぞ」

といいすてて立ち上がろうとした老人は、さ

りげない様子でふと三四郎をのぞき込むようにして、
「だんなさま、失礼ではございますが、これはあなたさまの御所持の品でございますか？」
　と、まくらもとからとりあげた三四郎の守り袋をそっとさしだした。
　とたん、終始優しげに微笑していたその目が、気のせいか、きらっと鋭く光ったようであった。
「仰せのとおり、それはわしの膚守りだが……」
　と、いぶかしげに答える三四郎を、老人のひとみがじいっと見つめていた。
「重ねて失礼ではございますが、御幼少のころからずっと御所持なので？」
「もちろん……亡き両親のたった一つの形見なのですから……」
　いいながら、三四郎は怪しむように問いかえした。
「なぜ、そのようなことをお尋ねか？　何か不審なことでも？」
「さようでございます。失礼ながら、さきほどここへお連れ申し上げました時には、どなたか知るべのお方へ至急お知らせ申さねばならぬのではないかとも思い、御無礼とは存じながら、お身元を知るよすがに、御所持の品を拝見させていただいたのでございます。ところが、そのお守り袋の中に入っておりました御神符、「ほこら大明神」というお名がありまして、はてまあ、珍しい守り神よと存じましたもので……つい失礼なことをおたずね申し上げました。だんなさま、その「ほこら大明神」と申し上げる神様は、一体どちらにあるのでございましょうか？」
「御老人、出来ればわしこそそれを知りたいと思うのです。それが分かれば、亡き両親のことももっと詳しくいろいろと知れてくるのではあるまいかと、永年、心にかけてたずねているが、そのようなお名の神社をどこにも探しあてることが出来ずにいるのです」
「では、御両親のことも詳しくお分かりではな

いので？」
「母には生後まもなく死別し、父にもまもなく生き別れしたと、養家で話にきくのみです。父が相馬家の浪人であったとは伝えても、母の名前さえ分かっていません。せめて、膚守りにあるほこら大明神の所在でもしれれば、きっと何かさぐり出す手がかりになると思うのだが……」
「なるほど、御不運なお生まれでございますなア」
　と、老人はしみじみとした目つきになって、しばらくは物もいわずにじいっと三四郎の横顔を見つめていた。
「いや、よしないことをお尋ね申し上げ、まことに失礼申し上げました。では、おやすみなされませ。なお、くどいようでございますが、何事も一切御他言無用でございます。むだなことをおしゃべりなされてはなりませぬぞ」
　いいすてて、静かな物腰で部屋から出ていった。
「あのお方は、どういうお方か？」
　と、三四郎が目でその姿を追いながら少女にたずねた。
「ここは農家と思われるが、立派な御人品にお見うけしたが……」
「わたしのおじいさんです。林久左衛門っていうんです。この辺りの名主なの。お百姓だけれど、将軍さまよりももっともっと古い家柄なんですって……」
　と、少女は自慢らしく、かわいい目をくりくりさせながらいう。
「今、久左衛門どのがふしぎなことをくりかえしいわれたのう」
「え、どんなこと、おじさま？」
「わしに、何事も一切しゃべるなといわれたことだ。わしが、どこから、どうしてここへやってきたか、それを一切しゃべってはならぬと申しわたされたように思う。なにゆえであろう？」

「そんなこと、わたししらないわ」
少女の顔から、笑いの影がふっと消えさってしまった。

三四郎は、正気にもどった三日の日から、さらに四日五日と林家の離れに世話になっていた。

四日といえば、その夜金森家の中屋敷に騒動が起こり、若殿源之丞の用箪笥に入っていた銀の小鈴と一緒にお美年が姿を消したその日にあたるし、五日といえば、そのお美年が無頼漢平六にかどわかされてさらにどこかへ姿を消しさってしまった当日にあたる。

しかし、三四郎は神ならぬ身の知る由もなく、ただただ極度の衰弱から一刻も早く立ち直ろうとする努力でせいいっぱいであった。

いつでも三四郎のそばにいてまめまめしく世話してくれるのは加代であった。年よりませていて、朗らかな愛らしい娘であったが、ひとたび三四郎の話が林家の内情や三四郎が助けられた当夜のいきさつなどにふれてくると、急に口をつぐんで、つんと横を向いてしまうのだ。

久左衛門は、朝夕、時折姿を見せて見舞ったが、
「何もおききなさいますな。お話しもなされますな。口はわざわいの門とも申します」
と、いつもくりかえすだけで、あとは優しい目元で静かに三四郎を見つめている。

ほかにも家人は沢山いるはずであった。少なくとも、老人にとっては子供であり、加代にとっては両親であるはずの人たちや、男女の召し使いたちも多いはずである。

しかし、三四郎のいる離れの方へは、久左衛門と加代のほかはだれ一人近づく者もなく、まるで無人の屋敷のようにひっそりしていた。

三四郎がはじめて起きあがったのは五日の午後のことである。どうやらもう歩けるほどに元気が回復していた。

まくらもとに洗たくしておいてあった衣服や、すっかりぬぐい清めておいてくれた大小刀などを身につけながら、三四郎ははじめて気がついたようにまゆをよせた。
「加代さん、そなたしらぬか? この紙入れの中に、一通の書状と、銀の小鈴を入れておいたのだが見あたらん」
「あらッ、そんなもの、はじめからなかったでしょう、おじさま……」
加代は首をふった。

首をふったとたん、その耳の辺りにちらっと血の色が走ったことを三四郎は見のがさない。この娘はうそをついているなと、すぐ感づいた。
「本当にしらんかね。小さな鈴と、古い赤茶けた手紙だがなア」
「いいえ、知りませんのよ、おじさま」
「うむ、そんなら仕方がない。どこかへおとしたのかもしれんな」
なにげなくいいながら、これは小娘の知恵ではないなと思った。

小鈴だけなら少女がふっと欲しくなるということもあるが、あんな古手紙に興味をおぼえるはずはない。つまり、久左衛門の意志が背後にかくれているのだと直感したが、思えばそれがこの林一族に対して三四郎が解きがたい深い疑惑を覚えはじめた最初のきっかけだったのである。

そして、奇妙なことが、やがてあとからあとからと起こってきた。

その日、夕方近いころになって、三四郎ははじめて足ならしに表へ出た。

もちろん、衰弱もまだ残ってはいるが、しかし、もう足元はしゃんとしていた。

この林家というのは、さすがこの辺の名主を通している旧家だけあって広い敷地をもち、ことに離れから裏手へかけては、まるで深山を思わせるようなすぎの森に覆われていた。

加代は嬉々として三四郎を案内していく。出

会う男や女が、二人に向かって慇懃にあいさつしていく様子から、この林家の格式の高さや、受けている尊敬の深さが自然に分かってくるようであった。

ぐるりと母屋を回って裏手へ出た。

何百年という歴史をしのばせて、すぎの巨木が森をなしている。その森のこずえが夕空の中に高々とそびえたっている様子を見ているうちに、三四郎の記憶の中へ突然よみがえってきたのは、花夜叉の洞窟から脱出した瞬間、ぽっかりあいた抜け穴の向こうに、きらきら星くずのまたたいている夜空と、その空を摩するようにそびえたっていたすぎのこずえを見たことであった。

「加代さん、わしはどうも不審でならんのだが、あなたがわしを助けてくれたというのは、本当にあの離れに間近い庭の中だったかね?」

三四郎はなにげなく加代をふりかえった。

「はい、おじさま、本当ですとも。あすこに倒れていらしたのを見つけて、大急ぎでおじいさんを呼んできたんですわ」

と、加代は三四郎の手にすがりながら、じっとその顔をふり仰ぐ。

「どうも、それがふしぎでならんのだ」

「なぜ、おじさま?」

「わしは、すぎの森のそびえている夜空を見たとたん、まるで地の底へでもおちこんでいくような気がしてな。同時に、どこかへ脾腹を打ちつけたのだろう、衰弱もしていたし、そのまま気を失ってしまったのだが、あの庭先まで歩いてこられるはずはない」

「でも、おじさまはあすこに倒れていらしたのよ」

「そうかなア。だが、加代さん……」

と、三四郎はじっと少女の顔を見つめていた。

「本当は、そうでなかったのではないかね? あのすぎの森の向こうには、道灌山のそぎ立ったような崖がそびえている。どうも、わしは、あの崖の途中から下へ転げおちて、そのまま気を失ってしまったように思えてならんのだが……そうであろう、加代さんがわしを見つけてくれたのは、あの道灌山の崖下ではなかったのか?」

「いいえ、おじさま!」

と、加代は強く首をふった。

そして、急に声をひそめながら、こざかしげにあたりをそっと見回した。

「おじさまはあのお庭に倒れていらしたのよ。そうでなければならないのよ。そうでないと、大変なことになるのよ」

「ふうむ。どうして?」

「どうしてだか、おじいさんがそういいました。決して、おじさまが森の向こうの崖下に倒れていらしたなんていってはいけないんですって。そんなことをしゃべったら、それこそおじさまのお命がどうなるかも分からないんですって……」

おかしなことをいう少女だ。

加代のいっていることを聞いていると、事実はどうあろうとも、うわべは三四郎の倒れていたところが離れ屋敷の前でなければならないと主張しているようである。

いいかえると、失神した三四郎が発見されたのは道灌山の崖の真下であったかもしれないが、それを世間にしられては一大事であるから、是非とも林家の庭先に倒れていたことにしなければならないのだといっているようでもある。

なぜだろう?

おかしなことを言いはるものだと思ったが、深くは問いかえしもせず、三四郎はゆっくりと森の中へ歩み入った。

近づいてみると、すぎの木の年古りていることは驚くばかりで、その上、ここへはめったに足をふみ入れる人もないとみえ、下草は茂るにまかせ、ともすれば道を見失いそうになるほどだ。

「見事なすぎだ。おそらく、何百年もたってい

るのであろう。斧（おの）を入れた様子さえ見えないが……」
　三四郎が思わず立ちどまってこずえを見上げると、
「そうでございましょう、おじさま。うちの御先祖さまがここへ住むようになった時には、もうちゃんと立派な森だったんですって……」
　と、加代が自慢そうに口をはさんだ。
「すると、太田道灌が江戸に城を築いた時よりもっと古いかもしれんな」
「ええもう、それよりはずっと古いんですって……」
「この森の向こうに切り立っている丘一帯を道灌山と呼んでいるのは、かつて太田道灌が砦（とりで）を築いたからだといわれているが、その実、あの丘に館（やかた）を建てて住んでいたのは江戸小源太という豪族であったそうな」
「まあ、おじさま、そんなこと御存じ？」
「知っているとも。いや、まだまだ知っているぞ、加代さん。江戸小源太が館を築く以前、この丘の主であったのは、花夜叉とよばれていた希代の怪盗でな」
「しっ！　お、おじさまッ！」
　と、加代があわてて制したが、三四郎は聞こえないふりをしてしゃべっている。
「身の丈、六尺有余。腕力五人力と称され、関東にならぶ者もない豪勇無双の男であったという」
「いけません。おじさん、黙って！」
「一時、花夜叉はこの丘陵地帯一帯に山砦（さんさい）を築き、武蔵野（むさしの）を睥睨（へいげい）していたが、ついに江戸小源太に討ちとられてしまったのだな。一説には、毒酒をもられてだまし討ちにされたのだともいっている」
「お、おじさまったら！　しっ！　黙って！」
　と、たまりかねた加代は三四郎の腕にしがみついてゆさぶった。
「どうしたのか、加代さん？」

「いけません。花夜叉のこと、しゃべってはいけません」
「なぜ？」
「たたりがあるんですって……絶対に花夜叉の名前を口にしてはいけないんですって……どんなことがあっても、火が降ろうが槍（やり）が降ろうが、決して、決して、その名前を口に出してはいけないのよ」
　加代は、さも恐ろしそうに首をすくめ、こっそりとあたりをうかがいながら、あえぐように力をこめていった。
　奥へ進むにつれて森は深く暗くなり、茂るにまかせた下草に覆われて次第に細くなっていった小道は、やがてふっととだえたように見えなくなってしまった。
　その辺りまでくると、
「おじさま、帰りましょうよ。もう道がありませんのよ」
　と、加代はしきりに三四郎のそでをひいた。
　しかし、三四郎はそでを引かれればひかれるほど好奇心をかきたてられる様子で、
「もう少し、もう少し……」
　と、雑草をかき分け、踏みこえながら進んでいく。
　ついに小流れの前へ出た。幅二間ほどの小川が、北から南へ向け、森をくぐりぬけながらうねうねと流れている。
　流れの対岸は、一層ひどい下草のやぶと、真っ暗な森のつづきであった。倒木がそのまま朽ちてこけむし、立ち枯れた下枝には蔓草（つるくさ）がぎっしりからみついて、まるで人跡未踏の深山を思わせる原始さながらの荒れはてようであった。
　小川には橋らしいものもかかっていなければ、渡るよすがの飛び石のようなものも見あたらない。
「加代さん、この川はどこから流れてくるのかな。知っているかね？」
　と、三四郎がきいた。

「よく知りませんけれど、飛鳥山のずっと向こうから流れてくるんですって。そして、道灌山のすそをまわって、根岸から山谷堀を通り、隅田川までつづいているんですって……」

加代は、なにかあたりをはばかるように、声を低くしていう。

「昔、道灌山に砦があったころは、この小川が大事な外堀の役目をしたことがあるんですって……でも、今では、尾久、根岸、下谷一帯の田んぼにとって大事な大事な用水なのよ」

「なるほど、道灌山に砦を築くとすれば、この小川と向こうの深い森がさぞ大事な守りの役目をしてくれたであろうな。ところで、加代さん。この森の奥には何があるのかね?」

「なんにもないのよ」

と、加代はきつい声で答えた。

「なんにもないはずはないのだがな」

「でも、おじさま、本当になんにもないのよ」

「では、この奥へ入ったことがあるのだね?」

「いいえ! この小川から奥へは、だれも入ってはいけないの」

「だれも入ってはいけない——加代さんは入ったことがないというのだね。なるほど……それだのに、どうしてなんにもないということが分かったのかね?」

「でも、なんにもないのよ!」

加代ははげしくいいはった。

「分かった、分かった」

といいながら、三四郎が微笑したのは、この奥にきっと何かがあるに違いないと思ったからだ。

「この小川は橋がないのだね。どこにもないのかな?」

「いいえ。ずっと流れにそって南へいって、森を出はずれると、崇福寺っていうお寺があります。その境内には橋がかかっているの……」

いいかけて、加代はぎょっとしたように三四郎の手にとりすがった。

「だめよ、おじさま! 決して、決して、向こうへ渡ってはだめよ!」

その夜、屋敷うちの寝静まるのを待って、三四郎はこっそりと離れをぬけ出した。加代は次の間に眠っていて、まるで気がつかなかったらしい。

淡い月影が足元を照らしてくれたのも森のとっつきへ行きつくまでのことで、一歩中へ踏み入ると、昼でも暗い樹影が上から上へと覆いかぶさって、昼間通った道をたどるにもほとんど手さぐり足さぐりであった。

例の小川の前へ出た。

ここばかりはわずかに森がひらいていて、さしこむ月明かりがかすかに流れの行方を照らしている。

三四郎は、先刻の加代の、あのふしぎなくらいはげしい真剣さを思い出した。

「この奥にはなんにもないの。おじさま、向こうへいってはだめ! 決して、向こうへ渡ってはいけませんわ!」

と、三四郎の手にとりすがって行かせまいと争った時の加代は、いまにも泣き出しそうなくらいむきな顔つきであった。

ということは、この流れの向こうに何かがあって、しかも、それは決して人に見せてならないものに違いないということを語っているのと同じことなのだ。

何だろう?

とにかく、この屋敷——ことに、この森の奥にはなにか奇妙なものがかくれているに違いない……。

一度、地上へ低く沈んだ三四郎の影は、突然地をけって月明かりの中へ高く飛びあがった。

その跳躍が、彼の体力がほとんど旧に復しつつあることを証明しているようである。

川幅二間がその下にあったが、がさっと音たてて向こう岸の草むらがゆれたと思うと、すで

にそこには彼の影法師がうずくまるように舞いおりていた。

三四郎は腰をさぐって、小さな油壺をとりだした。その壺の口にはちゃんと灯心がさしてある。

彼は、あたりの気配をうかがいながら用心深く火打ち石をうち、灯心に灯をともした。その細々とした灯火がほとんどじいっと動かないくらい風のない晩であった。

三四郎は、そでで火影をかこいながら、ゆっくりと森の奥へ向けて歩き出した。

草はすでに腰を没するほどである。

巨樹の根がるいるいと波のように高まり、その間に倒木が朽ちてねっとりとこけむしている。

まるで人跡未踏のように見えていて、その実、時折は、たしかに何者かが通るらしい一本の道らしい跡が、その樹間をぬけて奥へ奥へ走っていることに三四郎は気づいていた。

道は少しずつ高く登っていく。それが道灌山の断崖にいよいよ近づいてきた証拠だと思った。

と思っているうちに、急に密林がとだえ、その向こうに淡い月明かりをあびて切りたっている絶壁を見た。

「おう、ここだ!」

と、三四郎が思わず口の中でうめいたのは、その絶壁のすそに、崩れておちた真新しい土砂が雑草を押し倒して山をなしているのを見たからだ。

「そうだ。思い出した。わしが抜け穴の口から夜空を見たと思った瞬間、急転直下奈落の底へおちこんだようにかすかに記憶にのこっているのは、たしかにこの場所だったのだ!」

三四郎はしばらく崩れおちた土砂の山を見つめていた。

――しかし、妙だ。このおびただしい土砂の量は、まるで山崩れのあとを思わせる。それとも、わしがずりおちてきた時に、どこかの土壁

を突き崩しでもしたのであろうか……。

見上げると、二丈ほどもあろうかと思われる位置に、もと大きな土塊が突起していたらしいのが、崩れ落ちて生々しいあとを残しているのが認められた。

なぜか、三四郎はそれが気になってならない。

あたりを見回すと、少しはなれたところから岩角や草の根株にすがってその崩壊した突起のあとまでどうやら登っていけそうな足場がつづいているのに気がついた。

何を思ったか、三四郎はすぐその足場をたどって上へ上へと登りはじめた。

途中は急斜面をなしていて危険であったが、崩壊した突起のあとまでたどりつくと、どうやら楽に立っていられる足場が見つかった。

ここまで登ると、淡いけれども月影がおしみなく照りかけている。

そこには、以前かなり大きな土の突起が庇のように出張っていて、それが何かの拍子に崩れおちたらしいことは明らかだが、なぜか、三四郎の目には、それが故意に突き崩されたのではないかと思われてならなかった。

突起の根元に、故意に鍬目を入れ、てこでこじりでもしたような痕跡を見つけたからである。

なぜ、そんなことをしたのだろうか?

三四郎は、土砂の崩れおちていった跡を、上からじっと見おろした。

もともとその辺は一面に草で覆われていたらしいが、土砂崩れのため、その草が土にうもれたり、もぎとられたりしている。

三四郎は、何を見たのか、そこから五、六歩下へ、はいずるようにして伝いおりた。そこらはもともと少しくぼんでいたらしく、一番深く土砂にうもれてわずかにのぞいた雑草の先端がもとの姿を物語っているだけである。

三四郎は、その雑草の先をつかんで、ぐいとひいてみた。わけなく抜けてくる。そこに生え

ているのでなく、上から落ちてきたものか、それとも、故意にそこへ生えつけたもののどっちかに違いない。
三四郎は、大刀を鞘ぐるみ抜いて、その鞘の先を崖の斜面へ直角にぐいとさしこんでみた。
あっ！　と思うくらい、鞘の先はずぶずぶっと深くもぐりこんでいく。
今度は腕をまくって突っ込んでみた。
分かった！
その土砂の奥の斜面に二尺四方くらいの穴があいていて、それを、石塊土塊などでふさぎ、さらに草の根っ子をかぶせ、そして、その上から崩れおちてきた土砂が厚くかぶさっていたのである。
——そうだ、やっぱりそうだったのだ。わしが、花夜叉の洞窟からぬけ出し、星のきらめく夜空を見たと思った瞬間、もんどりうって落ちたのはこの穴であり、そしてこの崖であったのだ……。
三四郎が想像していたとおり、彼が花太郎地蔵の土台下から地下道へ入り、道灌山の下をくぐりぬけてから尾久田んぼに面した断崖の横腹をえぐり抜いて脱出してきたことは、もはや間違いないことと思われる。
ただ、不審なのは、その抜け穴の口が、いつの間にだれの手によってふさがれたのであろうか？
自然に埋まったのではなくて、土塊や石塊で口をふさぎ、その上へ草の根株を丹念にはりつけて、そこに穴のあることを巧みにかくそうとした跡が歴然としている。
しかも、三四郎の見たところでは、その穴の上部にあたる位置にあった土塊の突起を故意に崩して、崩壊する土砂をもってさらにその上を覆いかくしてしまっている。
つまり、いくら穴をふさぎ、草の根株をはりつけても、それだけではなにか不自然な跡が残ってかくしきれないと感じたのではないか。か

つまた、三四郎が抜け穴を突きぬいて下へ転落した時には、当然土砂も崩れ落ちたであろうし、転落する途中の草にもそれらしい痕跡が残ったであろう。
そのままにしておいては当然怪しまれ、抜け口の存在に気がつかれる。
そこで、上部にあった土塊の突起をさも自然崩壊したように突き崩すことによって、それらの痕跡を一度に覆いかくしてしまおうとしたに違いない。
事実、崖の下に立って見上げると、自然な地崩れと見えるだけで、抜け穴をさとらせる痕跡などどこにも残ってはいなかった。
ただ、だれが、なんの必要あってそんなことをしたのだろうか？
だれ？——いや、おそらく、あの加代の祖父久左衛門のやったことに違いあるまい。
彼は、きっと三四郎がこの崖下に落ちて失神しているのを発見し、当然抜け穴にも気がついたのであろう。
彼は、何かの理由から、その事実を余人に知らせてはならぬと決意したのだ。そこで、三四郎を住まいの離れへ運び、加代には三四郎がその庭先に倒れていたものと堅くいいふくめ、己はここへとってかえして、急遽抜け口をふさぎ、その痕跡を覆いかくす丹念な仕事をやってのけたのだ。
ただ、なんのためにそのようなことをしなければならなかったのか、分からない。なぜ、三四郎がそこに抜け穴をうがって脱出してきたことを知られてはならないのか？
——とにかく、この密林の奥には何かがある！
と、三四郎の好奇心はいよいよはげしく高鳴るばかりであった。
彼は崖のすそに立って歩き出した。
もちろん、道などない。腰を没する雑草の深みと、こけむした倒木と、怪獣のわだかまるよ

うな巨樹の根株の高まりが行けども行けどもつづいている。

崖から水がしたたり落ち、落ち葉の底に水だまりを作っているところもあったし、そういう幾つかの水だまりからあふれ出す水が集まって、細い流れをなしているところもあった。

ちょっと崖が奥へくぼんで、頭上から巨岩が庇のようにつき出しているところへ出た。

その辺りは特に森が深く、雑草が息づまるほど濃く高く密生していた。

三四郎は、なにげなく行きすぎようとして、突然、おや？　と目をみはりながら足をとめた。

三四郎が怪しんだのは、思いもかけない間近い辺りにきらっと光る火の色を見たからである。

それは本当に、何かのはずみに雑草の茂みの間から一瞬間すけて見えただけであり、しかもかすかなほたる火のような火影ではあったが、やみに等しい暗がりの中では、まぎれもなく鮮やかに三四郎の注意をとらえてはなさなかった。

三四郎は怪しみながら、茂みの向こうにかくれた火影の正体を見極めようとするように、雑草を押しわけてその方へ歩みよっていた。

見えた。まぎれもない燃える火であった。小さな油ざらの中に浮かんだ灯心が、またたきもせず静かなそして小さな炎をあげて燃えていたのである。

断崖が奥へ浅くくぼんで、上から巨岩が庇のようにつき出している。その庇の下に小さな堂宇が建っていた。

いかなる神仏を祭るのか分からないが、非常に長い年代をへたものであることが一目で知れるほど、あちこちが朽ち、こけむしていた。

油ざらはその堂前の縁先に供えられ、まるでその堂と歴史を共に経てきたかのように、静かに、無心に小さな炎をあげて燃えつづけているのである。

三四郎は凝然とその前に立った。立った彼の姿が、そのまま半ばかくれてしまうほど草むらは深く、堂に接して生いしげっていた。

堂は背を断崖にぴったり密着し、頭上からは石庇がせり出し、まるで浮き世から隔絶したような姿であった。三四郎でさえその灯火の影を認めたからこそ気づきはしたが、昼であったらおそらく前を素通りしてしまったであろう。

もちろん、堂前に人の通る道などはない。

ただ、ここに灯がともっている以上、だれかがここへ通ってきたことは明らかであり、子細に目をこらすと、断崖に密接した辺りの草むらに、折々人が通るらしい痕跡が認められた。

何にしても、常人のくるはずのない密林の奥にこんな堂があること自体妙でもあるし、いっそそれが現世からまったく置き忘れられた廃堂であるというなら話は分かるが、供えられた灯火の明るさが、ひそかにここへ通う人のあることを証明している。

一体、何を祭ったのだろう？　御神体は何であろうか？

三四郎は縁先に足をかけ、とじていたとびらをそっと開いた。そのとびらが何年にも、いや、おそらく何十年にも開かれたことがないらしいことは、さびついて容易に動こうとしない蝶番の堅さでも推察出来た。

三四郎は、ほたる火をかざして、堂の中をじいっと見回した。

中はがらんとしていて、何一つ置いてない。

ふと気がついたのは、その一隅になにか横長い板切れのようなものが立てかけてあることであった。

手にとってみると、扁額らしい。おそらく、以前は堂前にかけてあったのを、何かの理由からか、とりはずしてしまったのであろう。

よほど古いものらしく、もとは墨で何か書いてあったのが、もうすっかりはげてしまってしかとは読みとれない。

三四郎は、さんざんためつすがめつしていたあげく、やっとその五つの文字を判読した。
「ほ、こ、ら、明神……あっ！」
と叫んだ三四郎の声は、思わず高かった。
「ほこら明神?! な、何ッ！ ほこら明神だと?!」
彼は、まるで自分の目をうたがうように、その扁額の文字へしがみつくような目を寄せた。
三四郎は、実の父母のことに関してはほとんど何もしらされていない。ただ、わずかにしっていることといえば、父が相馬藩の浪人だったということと、母の形見として伝えられた膚守りだけである。
しかも、相馬藩に加賀美という武士はもともといなかったということが分かったから、父が相馬家の浪人だということはうそとなり、真実両親と彼とを直結しているのは、その膚守り一つということになるのだ。
三四郎は、物心ついてから、その膚守りを幾度開いては、中に納めてある守り札を見つめたことだったか。
そして、守り札にかかれてある「ほこら明神」というやしろを、機会あるごとに、どんなに探したずねたことだったか。
その結果、だれ一人「ほこら明神」などというものを知る者もなく、このごろでは、三四郎自身、そういうやしろの存在を疑いはじめていたくらいである。
しかも、それをなんと奇妙なところで見つけ出したではないか。
三四郎は、再三再四、扁額の文字へ目を凝らしたが、もう間違いない。たしかに「ほこら明神」と読みとれる。
それが、自分の守り札のやしろと同じであるかどうかは分からないが、たしかに宿願の「ほこら明神」の一つをたずねあてたのだと思った。
三四郎の胸はあやしい興奮にうずきはじめた。

自分が久左衛門老人に救われ、あの離れ座敷でわれにかえった時、老人が真っ先に問いかけたのは守り札の「ほこら明神」のことだったではないか。
老人はいかにもさりげない態度を作ってはいたが、その実、非常な疑惑をもって自分を見つめていたことが分かっている。
一体、これはどういうことなのか？ 守り札の「ほこら明神」と、一体、このやしろとは同じものなのだろうか？ どういう訳でこんな森の奥に秘められているのであろうか？
胸を波立たせながら思いにふけっていた三四郎は、その時、なにかぎくりとしたように顔をあげた。
なんだか分からないが、何者かにじいっと見つめられているような、ぞっとするようなものを襟首に感じたからだ。
三四郎は、顔も姿勢もそのままにしてじっと動かさず、目の片すみから右うしろのやぶの方をじろっと見やった。
そこまでは火影が十分とどかないのでしかとは分からないが、やぶの間からぎらぎら光る二つの目が、まるで餌食をねらう野獣のそれのように殺気立ちながらこちらを凝視していた。
しいんと、風もないし、声もなかった。
その凍りついたような静けさの底を、漂うともなく流れてきたのは、火なわの焼けるにおいであった。
鉄砲がねらっている！
三四郎はことさらにおちつきはらっていた。みだりに動けばたちまち襲撃をくらうことが知れきっている。それほど、その場の空気が殺気立っていると感じとったからであった。
何者だろう？
いつの間に忍びよったのか？
なんのために自分をねらっているのか？ し

かも、鉄砲までかまえて……。
　三四郎には何も分からない。分かっていることは、それが一人でないらしいということであった。
　何者か分からないが、やみの中にかくれてぐるりと自分をとりまき、いっせいにこちらへ向けてひとみをこらしている数が、二人や三人でないことだけは直感した。
　じっとしている。いやになるほど静かだった。かさとも音がしない。呼吸の音さえ聞こえない。その静けさが、やみの中にかくれている敵のしぶとさをまざまざと教えているようでもあった。
　三四郎は容易ならぬ危険に直面していることを知った。いつ鉄砲が発射されるか分からない。どこにかくれているとも知れぬ敵が至近の距離から射かけてくる弾丸を防ぎきることが、到底むずかしいことはいうまでもないことだからだ。
　三四郎は、やしろのとびらをしめ、縁から下へおりて、目をとじたまま、うやうやしく手を合わせた。
　少なくともこうしている間は敵の襲撃がない、安全だとさとっている。ここから一歩動いた瞬間が危機なのだ。
　三四郎は、背に数知れぬ敵の視線の集中を感じながら、その敵の位置を知ろうと必死の勘を働かせていた。ことに、鉄砲の位置だけは明らかにしておかねばならない。
　三四郎は目を開いた。かしわ手をうち、礼拝した。それから……。
　だしぬけにわきへとびすさった。一躍の幅は一間の余もあったであろう。
　だだあーん！
　ほとんど間髪を入れず銃声がけたたましく鳴った。
　弾丸がその片そでを裂いて鋭く飛びすぎたのを感じながら、三四郎はそのまま脱兎のようにやぶの中へ走りこんでいった。
「うおーっ……」
　というまるで餓狼の群れが襲撃にうつる直前に発するような不気味ななり声が森にこだまし、三四郎の前に幾つかの人影がわらわらっと立ちふさがった。
　もう灯は消えている。人影はやみにのまれてしかとは見えなくとも、宙にきらめく刃物の光がその位置をしらせた。
　三四郎は、走りざま、一人をはねとばし、一人をたたき伏せ、かえす肩先で一人を下からすくい上げて投げとばし、そして、走った、走った、走った……。
　勝手の分からない、しかも暗がりの密林中である。走っても走っても思うように道ははかどらず、あるいは同じあたりをぐるぐる回りにむだ足をふんでいたのかも知れない。
　やっと、さっき出会った小流れまでたどりつき、それをおどり越えた時、森のかなたから、さも急をしらせるようなけたたましいほら貝の音が高々と鳴り出すのをきいた。
　ほら貝の音は、いんいんと森にこだましながら、危急をつげるようにあわただしく鳴りつづけている。
　その音がまるで森を眠りから呼びさましたようであった。森のあちこちにときならぬざわめきが起こり、それがいっせいにこちらへ向けて押しよせてくるようである。
　背後にも追っ手の足音がつづいていた。しつこい。ぞっとするような執念深さが感じられる。
　まさかと思うような事の成り行きに、いまや三四郎も必死であった。何か分からないが、容易ならない危機に直面していることだけは感じていた。
　暗い密林の中を、どう走ったらいいのか見当もつかない。しかも、四方に敵の気配があった。うしろに足音が迫っている。走るより仕方がない。ただもう、今は足にまかせて走るだけであ

った。
「お客人！　加賀美さまッ」
　と、だしぬけにその声を聞いたのは、丁度、三四郎が危機のまっただなかにいた時であった。
「お客人！　わしです。久左衛門ですッ」
　と、忍びやかな、しかし鋭く呼びかける老人の声が、わきからさっと走り出てきて三四郎の手をつかんだ。
「危ない！　一刻の猶予もなりませんぞ。さあ、こうおいでなされませッ」
「おう、御老人か……わしを救いに来てくださったのか？」
　と、さすがに三四郎も暗夜に光を認めた思いであった。
「あなたはあのやしろを御覧になりましたなッ？　あのやしろに近づいて、中をのぞかれましたなッ？」
「あのほこら明神のことか？」
「しっ！　お声が高い」
　と、老人とも思えぬ鋭い声がしかった。
「立ちどまってはなりませぬ。苦しくとも、走れるだけ走ってくださいましッ」
「御老人、あのほこら明神とはどういうおやしろか？　どういう神をまつられたのか？」
「ほこら明神です。ほこら明神と申しあげる神様です。あすこの崖がくぼんで、ほこらの形を作っているので、昔からそう呼ぶのです。ただそれだけなのです」
「しかし、それなら、わしがあれをのぞいてなんで悪いのか？」
「悪いのでございます。のぞいてはならないのでございます。土地の者以外、あのおやしろをうかがうことは絶対に許されぬ昔からのしきたりなのでございます。それを犯した者には、だれであろうと、恐ろしい神罰がくだるのでございます」
「なぜ？　御老人、なぜかッ？」

「なぜとも申し上げられません。昔からのしきたりなのでございます。きびしいこの土地のおきてなのでございます。だれも犯すことの出来ないおきてなのでございます」
　老人は三四郎の手をとって、暗がりの中を野猿のように走りながらいいつづけた。
「彼らは森中を囲んでございます。あのほら貝の音が、ほこら明神のそのおきてが破られたことをしらせたからでございます。お客人、あれほど堅く申しあげておきましたのに……いや、捕らえられたらもうおしまいでございます。さあ、早く！」
　いつの間にか、森のはずれまできていた。
　追っ手の気配も、ほら貝の音も、うしろに離れて遠くなっている。
「もうここまでくれば大丈夫でございます。御安心なされませ」
　と、久左衛門はほっと息をつきながら、あたりを見回した。
「加代。加代はどこにいるのじゃ？」
「はい、おじいさん。ここよ」
　と、少女の影が走りよってくる。
「包みはもってきたか？」
「はい、このとおり、しっかりもって走ってきました」
　と、加代は胸に大事そうに抱いているふろしき包みを指し示した。
「お客人、これにあなたが部屋へ置いたままにしていらした品が入っております。それから、おあずかりしていたほかの品々も……木暮五郎蔵といわれるお方の御書面も……どうぞ、お受けとりくださいまし」
　と、久左衛門の声はあらたまった。
「そういう品々をあなたさまが御所持しておいであそばすことが世間にしられてはならぬ事情があって、無断でそっとおあずかりしておりましたが、こうなりましては、もはやその心遣いもむだでございます。御無礼お許しくださいま

すよう。では、加代。これから先は、お前が御案内申せ」

「はい、おじいさん」

「もはや危険はあるまいが、くれぐれも気をつけるのじゃ。下谷の灯の見え出す辺りまで、しかと御案内するのじゃぞ」

「はい、分かりました」

と、少女はさかしげににっこりする。

「では、お客人、お別れ申します」

と、久左衛門はあらためて頭を下げ、

「ただ、くれぐれも申し上げておきたいと存じますのは、もう二度と決してこの辺りへおいであそばしませぬように……かつまた、ここ幾日かの出来事を、一切他言あそばしませぬように……いや、あなたさまがどういう御身分のお方であり、なんの目的でこの辺りへおいでなされたか、何をあそばされたか、一切お尋ねしませんのも、また、二度とここへ来るなと指図がましいことを申し上げますのも、ただただあなたさまのお身を思うからでございます」

「御老人、お言葉しかとうけたまわりました。立ち寄るなと申されるならそういたそう。他言するなとあらば守りましょう。しかし、是非、もう一つだけおききしたいことがあるのです。それは、あのほこら明神のこと。ただほこらがある故ほこら明神と名付けたとばかりではお返事になりません。いかなる神をまつられたか、せめてそれだけお聞かせ願いたい」

「……」

老人は石のように口をとじていた。

「ただの好奇心から聞くのではない。わしにとっては、亡き両親のことをしるたった一つの手がかりがそこにあることはよく御存じではないか」

「……」

「では、わしから申そう。あのやしろは、花夜叉をまつったのであろうが?」

「そこまでお察しでは、もはやかくしようはありません」

と、久左衛門は沈痛な声で、

「おっしゃるとおり、ほこら明神の御神体は花夜叉様です」

といいすてると、そのままきびすをかえして森の奥へ去っていった。

月がかげり出したので、加代は用意してきたちょうちんに灯をつけた。

そのちょうちんを高くかざしながら、男の子のようにすばしこく先を走っていく。

「おじさま、ひどいわ」

と、加代は三四郎をにらむまねをした。人なつこい少女であった。

「あたしたちがねてる間に、こっそり出かけてしまうんですもの。おじいさんに起こされた時、びっくりしたわ。おじさまは森だ、危ない！　って、おじいさん真っ青になっていうんですもの。そのうち、ほら貝が鳴り出したでしょ。もうだめだと思ったのよ」

「すまんなア、心配をかけて……」

と、三四郎も加代の人なつこさに答えるように微笑した。

「心配かけるつもりではなかったが、ああでもしないと、加代さんがんこにわしをひきとめて森の奥へ行かしてくれんからなア。しかし、そのお陰で、わしにとってはただ一つの母の形見である守り札のほこら明神のありかがしれたような気がするのだ」

「ふしぎねえ。あのほこら様のお守り札は、決して部落のそとへは出ないはずなんですって……そのほこら様のお守り札をおじさまが持っていらっしゃるのを、おじいさんはとてもふしぎがってるのよ。ふしぎがりながらも、とてもおじさまのことを心配して、無事に部落から帰っていかれる日がくるように一心に祈っていらしたのよ。おじさまが崖から落ちて倒れていらしたことや、古いお手紙をもっていらしたことを一切ないしょにしていたのも、そんなことが部

落にしれると、おじさまのお命が危険になるかもしれないと案じていたからなのよ」
「ありがとう。久左衛門どのや加代さんの親切は決して忘れはせぬ。本当にありがとう」
「ああら、そんなこと……あたしたち、とてもおじさま好きなんですもの、あたり前よ。おじいさんは、おじさまのことを、なんだか他人とも思われないような気がするなんていってたわ。ほほほ……」
「しかし、加代さん、それにしてもおかしいのは、花夜叉やほこら明神のことを、なぜあのように秘密にしているのか——それがわしにはふしぎでならないのだ」
「ああ、もうじきよ。あれが谷中の森……すぐ町へ出るわ」
　と、加代はさかしげに話をそらせた。その表情の硬さが、こんな少女にまでその秘密を守るべき戒律がよくよくきびしく仕込まれている証拠であった。

「あら、珍しい。駕籠らしいわ」
　と、加代がふっとつぶやいた。
　なるほど、道を向こうから北方へむけて小急ぎにやってくる駕籠が一つ。こんな真夜中に何事ぞ。しかも、それから先は田んぼ荒地つづきで人家にもほとんど行きあわない寂しい場所だ。
　両方とも急いでいるので、たちまち距離がつまってくる。
「あらッ!」
　と、思わず声をあげて立ちどまったのは加代であった。
　その声に、向こうでも驚いたらしい、ぎくっとした表情で駕籠がとまった。
「おやッ、そこへいらっしゃるのは加代さんじゃアありませんかえ?」
　と、駕籠わきから叫んだほおかぶりの男——三四郎は知る由もないが、三田村の掘っ建て小屋からお美年をさらって姿を消した平六であった。

　そういえば、駕籠の垂れの間から赤い女のそでがちらっとのぞいている。
「どうしたの、平六さん、こんな夜中に、こんなところへ?」
「そういや、加代さんこそどうしたんです?」
　と、平六は三四郎の方を素早く横目で見ながら、なんとなくにやにやっと笑った。
「いやねえ。実アちょっとお屋敷へ用がありましてね。久左衛門さん、いますね?」
「いるけど、いま少しごたごたしてるかもしれないわ」
「へえ、ごたごたって?」
「あんたの知ったことじゃないわ」
　と、加代はきめつけて、
「おじいさんに用があるなら、もう少しあとにした方がいいことよ。もう一刻もすると安心だわ」
「へえ、ありがとう。どうせ駕籠つきだ、ぶらぶら行きやしょう」
　と、平六はもう一度三四郎の方へにやにやっと薄笑いをなげてから、駕籠をせかせて歩みさっていった。
「いやなやつ。あたし、大きらいなの」
　と、加代は三四郎に身をよせながら、ませた口をきく。
「おじさま、あの人、何者だと思う?」
「さあ……」
「どろぼうよ」
「おやおや……」
　三四郎は笑った。
「加代さんがどろぼうに仲よしがいるとは驚いたのう」
「ううん、そうじゃないのよ。ひどいわ!」
　と、加代はほっぺたをふくらませて、
「あの人、うちへどろぼうに入って、おじいさんにつかまったことがあるの。もう半年くらい前だったわ。その時、おじいさん、あの人を許

して逃がしてやったのよ。それから、なんの用があるのだか、時々うちへくるんです。そうしちゃ、あたしにまでぺこぺこお世辞いったりするんだけど、あたし、とてもあの人の顔見るのいやでいやで仕方がないのよ」

　加代の話はそれでとぎれたし、三四郎も別に深く尋ねる興味もないようであった。

　駕籠のすそから女のたもとがちらとのぞいているのを目ざとく見てとって、怪しいやつとは思ったが、まさかお美年とは気がつかない。

　まもなく町の灯が見え出すところまできて、加代は別れて去っていった。

「これでお別れよ。もうお会い出来ないのね」

　といって、さようならと、ぺこりと頭をさげた時、なにかそのまぶたにうっすらとにじむものがあるようであった。

　ところで、奇妙なところへ姿を現した平六はどうなったであろう。

　加代がわが家へ立ちもどったころ、一時は森をゆさぶったあの騒ぎもすでにはたと鎮まって、まるで暴風の去ったあとのようにしいんとしていた。

　ただ、離れの雨戸の透き間からちらちら火影がもれていて、祖父と平六が額を集めてなにやらひそひそ話をしているらしい。

　駕籠は——とみると、ほど近い植え込みの陰にひっそりとおかれていて、そのそばには人相のよくない駕籠かきが二人、タバコを吸いつけながらぎょろっと目玉を光らせている。

　加代はその時になってはじめて、垂れの下からのぞいている女のそでにはっと気がついた。

「こんな夜中にお騒がせ申して、なんともはやまことに相済んません」

　と、久左衛門の前へ神妙にかしこまって座りながら、平六は頭をかいている。

「でも、だんな、お差し支えがあったんじゃァございませんか？　なにかお取り込みの御様子でしたが、もうおよろしいので？」

「なに、取り込みだって？　妙なことをおいいだねえ」

　と、まゆをしかめてじろっとにらむように見返した久左衛門へ、平六は、へへへ……といやな笑い方をした。

「おかくしなさるのは水くそうございましょう。へへへ……なにね、種をあかせば、こちらさまへ伺う途中、こちらの加代嬢さまにばったりお会いしたんでございますよ。この夜更け、まだ子供子供した娘さんが若い侍と二人きり、訳ありげに道を急いでやってくる。驚きましてねえ。驚かねえ方がむしろおかしなもんでございましょう？　それが加代さまだったので……だんなさまにお目にかかりに行くところだがと申し上げると、今こちらさまで取り込み中だから、もう少し時をすごして後にした方がいいとおっしゃってくださいましてねえ。それでまあ、ぶらりぶらりと油を売りながらこうしてゆっくりとお伺いしましたんでございますが、へへへ……御安心くださいまし。こっちだって脛に傷もつ身分でして、いえもう、決してつまらねえことをしゃべったりはいたしやせん」

「平六さん、お前なにかゆすりのつもりでわしのところへ来なすったのか？」

　ぐっと開き直った久左衛門の険しい気配は、三四郎のしっているあのただもう気のいい親切な老人とは似ても似つかない。

「ことわっておくが、このわしは、この辺り尾久村一帯のしめくくりをしている久左衛門だ。やせても枯れても、人からゆすりをうけるような弱みはみじんも持ってはいない。お前さんがそんな了見なら、もう二度とこの家の敷居をまたいでもらうまい」

「と、と、とんでもございません。まあまあ、ちょっとお待ちくださいまし」

　と、平六はおかしいほどあわてふためいた。

　加代が三四郎に話したとおり、平六は、半年ほど以前、この家へ盗みに入って、久左衛門の

ために見事にとっておさえられてしまったことがある。

　金でも身分でも腕ずくでも、また、そういう弱みをつかまれているという点からも、てんで歯のたたない相手だと百も承知している平六であった。

「け、決してそんな了見で申し上げたんじゃございませんので……黙ってりゃアいいものを、つい下司根性でぺらぺらしゃべっちまって本当に申し訳ございません。ど、どうかごきげんをお直しくださいまし」

「もういい、分かったよ。まあ話を聞こう。この夜更け、一体どんな用事で来なすったのか？　金か？」

「察しがいいなア、だんな。へえ、実アちょっとばかりまとまった金が……」

「幾らほどいるのかね？」

「三百両ほしいんでございます。もちろん、ただ頂こうとは申しません。買っていただきてえものがありますので……」

「話してごらん」

　と、久左衛門はまゆも動かさずいった。

「だんなは谷中に住んでいた花屋の勘兵衛という御用聞きを御存じでございましょうか？」

　と、平六が切り出した。

「その娘のお美年というのが評判の器量よしでしてねえ。世間では花屋小町なんて呼んでいます。御存じじゃアございませんですか？」

「お目にかかったことはないが、うわさは聞いています。その人がどうしたのかね？」

「買っておもらい申したいのはその娘さんでございます。お美年というその娘を三百両で、ひとつお買いとりいただけねえもので？」

「ほほう、ふしぎな売りものだが、お前さんがこの夜中わざわざ売りに来たところをみると、さだめし訳があるのだろう。詳しく話を聞こうではないか？」

　久左衛門は、さして驚いた様子も見せず静かな声でいった。

「この春でございますなア、あっしがよくねえ了見をおこし、御当家さまへ忍びこんで盗っ人を働こうとしたところを、だんなに苦もなくふんづかまってしまいましたのは……普通ならばその筋へ突き出されて、今ごろアどこかの遠い島へ流されて餓鬼のような暮らしをしているのがせいぜいでございましょう。あの時、助けていただいたお慈悲は、本当に骨身にしみてありがてえと存じておりますんで……。

　その上、だんなはおっしゃってくださいました。盗っ人なんぞしねえでも、小遣いかせぎをさせてやる。てめえはどうせやみからやみへと生きてきた人間だから、その世界には顔が広かろう。ついては、このごろちらちら妙なうわさの立っている江戸の花太郎というふしぎなくせ者について、どんなことでもいいから調べてこい。その都度、小遣いくらいは恵んでやる――とおっしゃってくださいました。そこであっしゃア、その後も時々こちらさまへ伺って、花太郎という盗っ人のうわさをあれこれと申し上げ、その度ごとにお恵みを頂いてまいりました。ところが、だんな、あっしゃア突然、急いで江戸をずらからにゃアならねえ仕儀になりましてねえ。

　今だから申し上げますが、あっしゃアね、実ア、江戸の花太郎の情婦のお徳って女の兄貴にあたっておりますんで……だから、やつのことをだんなに申し上げ、いくらでも金にする蔓はもっていたわけなんでございますが、なにしろ、肝心なことをうかつにしゃべったら最後、この江戸を高飛びするか、それとも命はねえものと覚悟しなきゃアなりません。花太郎は人殺しを平気でやる世にも恐ろしいやつですからねえ。

　ですから、これまでは、知っていながらほんの当たりさわりのない事しかお耳に入れてはおりませんので……。

　ところが、今度こそ、やつと縁を切ったんで

ございます。縁を切った以上、江戸から高飛びする覚悟ですから、もう洗いざらいぶちまけて、だんなに買っていただきてえと、まあ、こう思って伺いましたような訳で……」

「分かったよ、平六さん。三百両の値打ちがあればすぐにも買おう。聞きましょう」

久左衛門はタバコ盆をひきよせると、すっかり手ずれてがん首までゆがんでいる真鍮のなたまめギセルをとり出して、ゆっくりとタバコをつめ、吸いつけた。

「だんな、あの花太郎という野郎は別名を龍太郎っていいましてね、生まれはれっきとしたお侍――どころじゃねえ、さるお大名の跡取り息子だったんだそうでございますよ。まったくもって突拍子もねえ話だが……といっても、こりゃア野郎のいってることで、うそか本当か保証のかぎりじゃありませんがね」

平六は何もかもぶちまけて金にする覚悟でいる。

久左衛門はなにげないそぶりで黙々と聞いているが、タバコの煙の向こうにある表情が、瞬間どきっと動揺したようであった。

「だんな、御存じでいらっしゃいましょうか？　美濃の郡上に領地をもっている金森様っていうお大名を？　花太郎が跡取り息子に生まれたっていうのが、その金森さまなんでございますよ。今、金森さまの跡継ぎに座っていらっしゃる源之丞さまって若殿様の、まあ、一つ違いの兄貴にあたるわけでさアね。野郎の話じゃア、今から二十三年前の春のことだったそうでねえ……だんな、話が少々くどうございますかしら？　花太郎のことはなんでも聞き出してこい、小遣いにしてやるっておっしゃる。詳しいほどいいってことだから、今日はなんでもかでも知ってるかぎりしゃべっちゃうつもりなんですが、くど過ぎるようでしたらはしょって先へ飛ばしますが……」

「いいから話してごらん。詳しい方がいいのだ

から……」

と、久左衛門は動揺の色をかくしながら、強いて物静かな声でそういった。

「じゃあ、勝手につづけます。金森家には、たしか水尾――とかいう御愛妾がいましてね。その人の腹から生まれたのが花太郎だっていうんです。なんだか知りませんが、あのお屋敷にゃア長男が生まれると花太郎という名前をつける昔からのしきたりがあるんですってねえ。

ところが、よくある例だが、女の嫉妬心というやつから、金森家でもお定まりのお家騒動がぶっぱじまったんだそうですよ。というのは、本当の奥方さまにまだお子さんがなかったんでさ。そこへ、妾腹の男の子が出来た。ほうっておけば、その子が金森家の跡とりになってしまう……これが、なんとしても悔しくてならなかったんでしょうねえ。

そこで、花太郎を産んだ水尾という御愛妾をよくよく洗ってみると、なんと、その女が木暮五郎蔵とかいう若侍と出来ていて、生まれたのは殿様のお胤どころか、なんとその若侍の子供だってことがわかってしまった。

しかも、証人が幾人も出ました。当の木暮五郎蔵という若侍が、いち早く風をくらって逃亡してしまった。御愛妾の水尾って人にはもう言い訳のしようもありません。とうとう責めさいなまれ、最後に自害して果ててしまったそうなんです。

そこで、花太郎はどうなったかというと、水尾という女についていた忠義な侍女がおりましてね……たしかお高って名前の女です……その女が、花太郎を抱いたままお屋敷から逃げ出した。行く先は分かりません。生きてるのか、死んでるのか、だれにも分かりませんが、しかし、多分、花太郎はもう死んでしまっただろうとだれでも考えていたんだそうですが、どっこい、こいつが生きていた……」

話しながら平六は横目でちらり久左衛門の表

情をうかがっている。この話が三百両になるかならぬかの大事な瀬戸際だと思っているからであろう。

「死んだはずの花太郎は、ちゃんと生きながらえていたんです。野郎、子供のころのことはしゃべりたがらねえのでよくは分かりませんが、さんざん苦労のかぎりをつくしたらしいんでさ。物心ついたころにゃア、名前も龍太郎と変わってこじきの仲間にへえっていたそうだし、大きくなってからは盗っ人の仲間入りもした……。

それから、野郎は、死んだおふくろさんのことを知りたいばかりに、こっそりと金森家の内情について調べはじめたんですね。それはもうとても執拗に調べに調べ抜いたっていってまさア。

分かってみると、自分こそ金森家の跡取り花太郎に間違いなく、水尾って女が木暮五郎蔵という若侍と不義をして出来た子供だなんてことはまったくの作りごとだってことがはっきりしたっていうんです。

もともと、水尾って人は五郎蔵の世話で金森家へ奉公に出たんです。だから、二人が懇意だったことはたしかだが、そこへ目をつけて、二人が密通したの、花太郎がそのむくいで出来た子だのと、うまく事をでっちあげたのは、柴田新五右衛門という男だそうでしてねえ。

その男が嫉妬に狂っている奥方さまにうまくとり入って、あることないことつきまぜた上、もっともらしい証人まででっちあげたんだそうですよ。へえ……二人がちちくりあってるのをたしかに見たとか、密会の席をかしたとかいう証人までもねえ。本当とすりゃアひでえもんでさア。ねえ、だんな。

花太郎のやつがただはおけねえと狂いたったのも、まんざら無理でもねえでさア。あいつは復讐の鬼になったんです。

御存じでしょうなア、だんな、花太郎がこれまでに『花』の張り紙を送りつけちゃア襲った連中のことを……。

花太郎はね、一番憎いやつを最後にばらすんだといってます。『花』の張り紙を送りつけては、耳をそいだり殺したりする。下手人は江戸の花太郎とだけ名乗る——世間のだれにも分からないでも、憎いやつらにはそれで分かりすぎるほど分かる。だれがなんのためにそういうことをやってるのか十分に分かっている。そうして、段々にてめえの番が近づくぞと震え上がらせるのが、花太郎の復讐のやり方なんでございますよ。

そんなわけで、だんな。花太郎は恐ろしい野郎だが、そのすることにゃア一応筋が通ってはいるんでさ。憎いやつが残っているかぎり復讐をやめやしませんね。奥方さまは数年前に亡くなったそうですが、その腹から生まれた源之丞さまがいらっしゃる。どんな文句をつけるかしれやアしません。一番憎いなア柴田新五右衛門て人でしょう。ありもしねえ罪をでっちあげておふくろを殺し、野郎を路頭に迷わせた張本人がその男なんですからね。その上、なんでもその人は今お留守居役に出世して、大した羽振りだっていうから、ただじゃア納まりませんですぜ、こりゃア……。

随分長っ話になりましたが、だんな、今夜という今夜は、本当に知ってるかぎりをぶちまけてしまいましたんで……口幅ってえようだが、この話をしってるなア、野郎自身のほかにはお徳とこのあっししかいやアしません。

その代わり、こいつをしゃべったと分かったが最後、とたんにこの首がふっとんでしまいまさア。野郎、恐ろしいやつですからねえ。まったく、冗談でなしに命がけなんです。へへへ……だんな、どんなもんでございましょう。三百両の値打ちがございますでしょうか?」

平六はずるそうな目つきでちらっと久左衛門の方を盗み見る。

その視線を感じながら、久左衛門はそしらぬ顔でゆっくりとタバコをくゆらしていた。

「お美年さんとかいう娘さんを話に添えて売りたいということだったが、そのお人のことはどうなるのだい？」

「ああ、それでございますか……肝心なことがあと回しになっちまいまして……いい器量の娘でございますぜ。煮て食おうと焼いて食おうと、どこへすて値でたたき売ってもお美年一人で三百両の値打ちはたっぷりあろうと思ってるんですが……」

「ちょっとお待ち、平六さん。その娘さんは花屋の勘兵衛さんのお娘御なのだろう。それを煮てくうのたたき売るのと、お前さん、まるで自分の持ち物のようにいうが、そうはいくまい？」

「お堅気衆の理屈はそうでございましょうが、あっしたちの仲間のしきたりでは、もうあっしの持ち物同然なんでして……」

「なぜ？」

「なあにね、花太郎の野郎がすんでのところでなぶり殺しにしかねねえのを、命がけで助けてやったのがこのあっしなんでございます。つまりは一度死んだ女でさア。それを助けてやったのはあっしの慈悲。生き返ったも同然の女は、もうあっしの自由にしていいんでさ。いいや、それがあっしたちの仲間の理屈というやつでしてねえ」

と、平六はここで小悪党らしくぐっとすごんでみせた。

「実をいいますとね、はじめは花太郎の野郎にこき使われていましたが、いつまでたってもうだつはあがりゃアしませんし、下手したら獄門にもなりかねねえ危ねえ仕事でさア。つくづくいやんなって、ここが良い折だと思って、ずばっと手を切っちまったんです。

つまり、お美年を助けたその足で、花太郎の野郎を出し抜いてずらかってしまったというわけでさア。なぜお美年を助けたかとおっしゃる

んでございますか？　こう見えても、あっしゃア人殺しだけはしねえつもりです。それに――まあ、ざっくばらんにいやア、一目見てぞっこんお美年にほれちまったんでございますよ」

へへへ……と笑って頭をかく。

「お恥ずかしいが、あっしゃアこの女となら欲得はなれて一苦労してもいいと思ったんでございますよ。口説きましたし、口説いてもうんと言わなきゃア腕ずくでもとむきになったんですが、お美年みてえに強情な気性のはげしい女にゃア、まったくはじめてぶつかりました。まかり間違やア、すぐにも舌をかみきってしまうという形相のすごさに、あっしゃア思わずぞっとしましたねえ。つくづくもう手を焼いちまったんでさ。とたんに、色気がすうっとさめちまって、むらむらっとこみあげてきたなア、正直のところ欲気の方なんです。もうこうなったら、この女を金にかえて江戸をずらかるよりほかに道はねえ。花太郎を裏切ったかぎり、今度野郎にぶつかったが最後、もう命はありませんからね。

まあ、花屋小町といわれたほどの娘でさア。どこの宿場女郎にたたき売ったって五十や百にはなる女だと、はじめはそう思ってましたが、いざとなってみるとまずいんでさ。なにしろ、音に聞こえた岡っ引き花屋の勘兵衛の娘と分かっては、どんな悪玉だって二の足ふみまさアね。それに、あっしだって一度はほれた女です。同じことなら、あまりむごい目にあわせたかアありませんやね。

というわけで、ふっと思い出したと申しあげちゃア、へへへ……まことに相済んませんですが、こちらさまにお願いして、是が非でもお買いあげいただきてえと、まあ、勝手な理屈ですが、そう思案して、おじゃまにあがった次第なんでございます。いかがでしょうな、だんな……」

「それではなにかえ、お前さん、そのお美年さ

んというお娘御に慈悲をかけ、このわしに三百両で買いとってやってくれと、そうおいいなのかえ？」
「さようでございます。宿場女郎にたたき売られるよりは、たとえどんなにつらかろうとも、こちらさまに引きとっていただけば、当人にとってもどれだけ幸せかしれやしません。と申し上げても、なにもお慈悲だけにすがろうなんて申してるんじゃアございませんぜ。だんなは前から、一度花太郎に会ってみたい、いや、それとなく顔だけでもいいから垣間見してみたいと、こうおっしゃってでございましたねえ。お美年が役に立つんでございますよ、そのことに……」
「花太郎に会うことにか？」
「へえ、さようで……花太郎はどうしてもお美年が必要なんでございます。お美年がどこかにかくしているあの大事な品のありかを、どうしてもお美年の口から聞き出さにゃアならねえからなんでございます。ですから、だんな、お美年のいることをにおわせさえすりゃア、野郎、とたんにすっ飛んできますぜ」
「しかし、花太郎の居どころが分からぬではないか？　お美年さんのことをどうやって花太郎ににおわすのだ？」
「そいつアわけはありません。だんな、このごろ江戸中の評判になっている呉龍角っていう唐人飴屋を御存じじゃアございませんか？」
「うむ、うわさはきいているが？」
「その呉龍角に伝えれば、とたんに花太郎へ通じるんでございますよ」
「ふうむ……その唐人飴屋と花太郎と、一体どういう関係があるのかね？」
「そ、そ、そりゃアだめだ。そりゃア言えません！」
と、とたんに平六はあわてて手をふった。
「平六さん、なぜそれが言えないのかね？」
久左衛門は、のみおわったキセルをタバコ入れへ納めながら、おだやかな声で聞きかえす。

「その唐人飴屋と花太郎とが、よくよく深い関係のあることは想像出来るけれど、そういうことを言ってもいけないのかえ？」
「そ、そりゃア、だんながどう御想像なさろうとなんとおいいなさろうと、そりゃア一向にかまやアしませんが、あっしの口からはもう何も申し上げるわけにはいかねえんでございます。ど、どうか、それぱっかりは御勘弁下さいまし。へえ。命にかかわりますんで……」
「それほどいうのなら、これ以上聞くまいが、しかし、呉龍角に連絡すればすぐ花太郎に通じるというのは本当なんだね？」
「本当でございますとも！　でもねえ、だんな、お断りしておきますけれど、どういう次第で花太郎にお会いになりてえのか知りませんけれど、およしなせえましよ。出来ることなら、野郎に近づかねえ方がいいですぜ。野郎は気ちげえ同然の恐ろしいやつでさ。どんなことでとばっちりがくるかもしれませんからねえ。触らぬ神にたたりなし……でさア。
　本当に、余計なお節介をやくようですが、野郎の顔をそっと見るにしても、やつをおびき出す時に、出来るだけうまくねえ、だんなのことをしられねえように御用心なさらねえといけませんぜ」
「分かったよ、平六さん」
　久左衛門はちょっと立って隣の部屋までいったが、紙包みを盆にのせてもどってきた。
「お美年さんを買いましょう。さあ、ここに三百両ある……」
「うへッ！」
　というと、平六は一間の余もうしろへずりさがって、顔を畳にすりつけるほどはいつくばった。
「だんな、も、もう、なんにも申しやせん。ありがとう存じます。御恩に着ますッ」
　内心、三百両とふっかけて、少なくとも二百両には値切られるだろう。旧家、大家といった

ってたかが土百姓なんだ。そうそう金のありようはないから、まあ、ぎりぎり百五十両まではまけてもいいと思ったのが、ずばりといい値どおり手をうたれて、思わずぞうっとしたくらい、平六というのは小悪党であった。

「さあ、お金を渡す前に、その娘さんを連れておいで……」

「へ、へっ、ただいま、ただいまッ！」

と、あわてふためきながら戸口へとんでいき、

「おい、早くッ。早く女をこっちへ連れてくるんだッ」

と、木陰に待ってる駕籠（かご）の方へせきたてる。

連れこまれたお美年は、手も足もくくりあげられた上にさるぐつわ。

ここ一両日、ほとんど食うものも食わず、さんざん方々を引き回されでもしたのだろう、あの気丈な娘が、座敷へ置かれた拍子に、ぐたっと崩れたまま起き上がる気力さえないようであった。

「ああ、かわいそうに……」

と、思わずまゆをひそめながら、久左衛門がそのなわめを切りにかかったこっちでは、生まれてはじめて手にしたずしりと重い三百両を、ろくに数えもせず、がつがつと懐へねじこんでいるのは平六であった。

平六は金さえもらってしまえばもう用はない。ぐずぐずしていて相手の御意が変わったら面倒だと思うから、金を懐へねじこみねじこみ、いつの間にか戸口までずりさがっていくと、

「へい、ありがとう存じました。だんな、御恩に着ます。いえもう、こちらさまへ足を向けてさえ寝るもんじゃアございません。へいへい、とんだお騒がせを申し相済みませんでございました。おやすみなさいまし」

ぺらぺら一息にしゃべりまくって、逃げるようにさっと戸口からとび出していってしまった。

「兄貴、うまくいったのかい？」

と、駕籠のわきに首を長くして待っていた仲間の二人がよってくる。

「だれだと思ってるんだ、このおれさまを……え、驚くな、てめえたち。仕事は上々吉。辻占（つじうら）以上だってんだ。さあ、あとでたんまり分け前をやらア。人目についちゃアいけねえ。二人とも先に、とっとと帰ってろ」

と、平六はえらい鼻息で二人を追っ払った。

ふっと一人で足をとめたのは、小悪党によくある例で、欲の皮が張っている。なんだか今となっては三百両では少々安すぎたというような気がしてきたからだ。

二つ返事ですらっと三百両出した久左衛門の様子では、ふっかけ次第でもう五十や百は出したかもしれねえ。どうも、あの花太郎のことをしつこく聞きたがる様子がただごとではねえぞ。

何か訳があるんだ。たたきゃアほこりの出るってやつにちげえねえのだ。このままむざむざ引きあげてしまうのももったいねえってものではなかろうか。もう一度、引っかえしていって、恐れながらとしりをまくってやろうか……。

いや、待てよ。それより、この場はおとなしく引きさがって、またという日の金の蔓（つる）に、楽しみに残しておこうか……。

平六は、懐の中のずしっと重い小判を指先でなでまわしながら、意地きたなく迷っていた。

と——

その時、すぐそばの暗がりの方から、かさっと何かが動くかすかな気配を感じた。

ひょいと、なにげなしにその方を見ると、茂みの間からぎらぎら光りながらこっちを凝視している二つの目玉があった。

三四郎が見たらすぐ気づいたはずである。あのほこら明神の前で、やみの中から仇敵（きゅうてき）のように三四郎をにらんでいたあの二つの目と同じものであった。

平六はぎょっとしながら、

「だ、だれだッ。そ、そこにいるのは何者だ

ッ！」
と、思わずうめくようにいった。
　その暗がりの中に底光りしていた二つの目玉は、しばらく身動きもせずじいっとこっちを見すえていたが、やがて、茂みを分けて、一歩二歩、ぬうっとこっちへ近よりはじめた。
　やみの中に立ったのは六尺に近い大男。ぐうっと食いしばった白い歯が憎悪をむき出しにしている。
「だれでえ？　お、お前さん、だれだってば？　だれに用があるのかよう？　え、なんとかいえやい！」
　平六は虚勢をはって叱咤したが、相手はなんにもいわず、じりりっとつめよってくる。
　さすがの平六もすくみ上がったようにたじたじとあとずさりをはじめ、やがてぱっときびすをかえすと、そのままあとをも見ずに逃げ出してしまった。
　やみの中から影法師のように姿をあらわしたその男は、与助という林家の奉公人であった。年配は五十歳に近いであろう。
　彼は、同じ村の由緒ある家に生まれながら両親をなくし、幼少のころから林家に育てられ、今では作男たちの支配頭というような役をしている。
　うわさによると、なんでも、昔、久左衛門に加奈とよばれる美しい娘があり、与助はその加奈の婿になることにきまっていたそうだが、夫婦になる以前に加奈が死んでしまい、以後、彼はだれにすすめられても妻をめとることをがんとして承知せず独身で通している。おそろしくがんこな偏屈者だということだ。
　与助は、憎悪に燃えるひとみで平六の逃げ去るうしろ姿をにらんでいたが、やがて思いかえしたように離れの方へ近づいていった。
「だんなさま、御免くださいまし。与助でございます」
　と、戸口から入った男は、上がりかまちの前

に頭をさげてうやうやしく立っている。
　お美年のなわをとき、布団を敷いて、疲れきってぐったりしているお美年を横たえ介抱していた久左衛門は、まゆをよせながら、しかしおだやかな微笑をこっちへふりむけた。
「ああ、与助か。何か用かえ？」
「だんなさま、大変さし出がましいことをお尋ね申し上げるようでございますが、その女は何者なのでございますか？」
　与助は、お美年の方をじろっと見ながら、陰気な声でいった。そういえば、この男の姿にも声にも、陰気ななにか狂気じみたものがしみついているようである。
「与助、お前は心配してくれないでいいのだよ。この娘は、お前にはなんの関係もないお人なのだ」
「いいえ、だんなさま。失礼でございますが、陰で様子を拝見しておりました。前々から申し上げておりましたように、なぜあの平六などという素姓のよくない男をお近づけになるのでございますか？」
「お前には関係のないことなのだ」
「だんなさま、そうは参りませぬ。二十三年前のことをよもお忘れではございますまい？　あの木暮五郎蔵とやらいう侍をみだりにお近づけなされたばかりに、あのような恐ろしいごたごたが起こったのではございませんか。昔から、余人をみだりに近づけてはならないというのが、お家の——いえ、この村の堅い厳しいいいつたえになっております。その禁を破り、おきてを犯しますとたちまち恐ろしいことの起こるのは、二十三年前の出来事でよくお分かりのはずでございます」
「与助、何をいうのだ。この娘さんとそのことがどういう関係があるというのか？」
「いいえ、分かっております。だんなさまはよくそれを御存じのはずでございます。その女も二十三年前の事件と関係があるに違いございま

せん。そして、つい先刻までその部屋にかくまっておいでになりましたあの加賀美三四郎という浪人者も……だんなさま、わたくしが何もしらないとお思いなのでございますか。あの三四郎という男が、花夜叉さまの洞窟から抜け穴を掘りぬいてあの森の奥へ抜け出てきたことを、わたくしはちゃんとしっております。あの男は、花夜叉さまのおひつぎを犯したやつです。そして、執拗にほこら明神の秘密をさぐりとろうとしていた、生かしておけぬ不敵なくせ者でございます」

　与助は上がりかまちの前の土間に凝然とたったままいいつづける。その執拗な声音には物狂わしい不気味さがただよっていた。

「与助、静かにせぬか！」

　と、久左衛門はお美年に聞かれるのをはばかるように、しかりながら上がりかまちまで寄ってきた。

「あいすみません、だんなさま」

　と、与助は小腰をかがめたまま上目づかいにじいっと久左衛門を見つめている。うらめしそうな陰気な目つきであった。

「でも、おうかがい申さねばなりませぬ。これだけはお返事をうけたまわりませぬうちはさがれませぬ」

「与助、お前さんには関係のないことだと、あれほどいっているではないか？」

「いいえ、それでは納得出来ませぬ。先日のあの浪人者は何者でございますか？　なんであのように大事にあそばし、わたくしどもに秘しかくしなさったのでございますか？　その上、花夜叉さまのおひつぎを犯した恐れ多いきゃつめを、先刻はだんなさま御自身お手引きしてお逃しあそばしました」

「与助。もうあの御仁は二度とはここへおいでにはならぬ。安心しなさい」

「過ぎたことでございます。あの男については、もはや何も申し上げとうはございませんが、も

し、きゃつめが今度あの森へ近寄りましたら……もう許してはおきません。とたんに、おきてどおりきゃつめの命を詰めますでございます。それがわれわれの遠い御先祖さまからのおきてなのでございますから……」

　与助は何かをのろいでもするようにいった。

「あの浪人のことは申し上げません。でも、だんなさま、あの娘はどうなさるおつもりでございますか？　よからぬ男から大枚の金をお出しになってお買いとりあそばしたあの女をどうなさるので？」

「どうするという考えもない。哀れなお人だからお助けしたまでだ」

「そうではございますまい。だんなさま、あの女も、たしかに花夜叉様の御霊をお騒がせ申し上げるよからぬ女でございます」

「そのような心配はない。お前さんはわしが信用出来ないのか？」

「申しわけございませぬ。お腹立ちでございましたらお許しくださいまし。でも……だんなさま、お願いでございます。どうぞあの女を追い払ってくださいまし」

「よしよし、大分弱っておいでだから、体が快復するのを待って、ここから出ていっていただく」

「いえ、それはいけません。即刻に……すぐこの場からあの女を……」

「たわけなッ。そのようなことが出来るか」

「では、だんなさま、あの女をわたくしにあずからせてくださいまし」

「おまえさんに？　あのお人をあずかって、どうするというつもりか？」

「納屋へとじこめて、そばについて見張っております。あの女が、決してほこら様の森を犯したり、けがしたり出来ないように、きびしく見張っているつもりでございます」

「もう用はなかろう。いいから、さがりなさい。向こうへ行きなさいッ」

久左衛門はたまりかねたようにしかった。
与助は、一瞬、恨みをこめたひとみで久左衛門を見つめ、それから向こうに横たわっているお美年の方をじろっと見やったが、やがてなんにもいわず出ていった。
出ていったが、離れから去りはしない。近くの茂みの中に凝然と突っ立ったまま、執念ぶかい視線を離れからもれ出す火影の方へじっと注いだまま動こうとはしなかった。
床から起き出て鏡台の前に座ったお美年の髪を、加代が幼い手つきでとかしつけてやっている。
窓の明るい障子に朝の薄日がさしていた。光のせいか、お美年の顔にげっそりとやつれた青白い影が見えている。
お美年の心労はひどかった。父勘兵衛が行方不明になったのがきっかけで、家を焼かれる。三四郎という人を知って天にも昇る心地だった喜びも束の間、生涯にただ一度の恋と思いつめた三四郎への恋情も、お鶴さまという人のあることを知っては、思いあきらめねばならないと、むりやりに自分に言いきかせねばならなかった苦しさは、今でもいよいよ激しくなればとて、薄れて消えていく暇もなかった。
そのことが原因で、強いられるままにこうかと身を寄せた金森家での思いもかけない不快な出来事も、愚痴のようだがかえって三四郎への思慕をかきたてられるだけであった。花太郎という怪物にかどわかされ、平六といういやらしい男の手に移り、死ぬかと思うような苦しみがつづいたが、しかし、お美年をたきのめすほど絶望させたのは、そんなことではなく、やはり三四郎のことであった。
父、勘兵衛が人手にかかって殺された。しかも、あろうことか、その下手人が三四郎だと、あの非人小屋でささやきかけた仙太の言葉が、ぐさっとお美年の心臓に突きたったのだ。
そんなバカなことがあるはずがない！――

と打ち消すそばから、おれが証人だ、証拠もある。たしかにこの目で見たのだ、という仙太のはげしい怒りをこめた声が悪夢のようにのしかかってくる。いくらそそっかしい仙太でも、あした火急の場合にわざわざそんな冗談をいうはずもなし、根も葉もないことを手柄顔にしゃべりちらすほど薄っぺらな男とは信じられないからである。
三四郎に悪意があろうとは思われない。そんな人で絶対にあるはずはない。しかし、何かの間違いで、ひょっと父を？　という疑惑が、恐ろしい真っ黒な澱のようになってお美年の胸の底に残っている。
そのことが、お美年をくたくたにたたきのめしてしまったのだ。男まさりといわれた気性の勝ったお美年も、さすがに生きる気力さえ失ったようであった。
「お姉さま。まだお気分が悪うございますか？　お薬さしあげましょうか？」
と、髪をとかしながら加代がそっとお美年の顔をのぞきこむ。
「いいえ、よろしいのです。もうすっかり気分もよくなりました。加代さん、あなたにも本当にお世話になります」
お美年の声は力がなく、心の奥の憂悶がそのままにじみ出すように寂しげであった。
「おじいさまもあなたも、本当におやさしい方ね。おじいさまにお助けいただかなかったら、わたし、どうなっていたか分かりません。御恩は忘れません」
「もうそのことはいいっこなしって今も申したでしょう。お姉さま。わたし、お姉さまが大好きなんですもの。一目お顔を見た時から大好きになってしまったのですもの。あの優しいお侍さまが行ってしまわれて、とてもさみしいと思っていたのに、また好きな方が来てくださって、わたし大喜びなのよ」
「優しいお侍さま？」

と、お美年はなにげなく鏡の中の加代を見つめた。まさか三四郎のこととは知る由もない。
「加代さん、そんなお優しいお侍さまがこちらにいらしたのですか？」
いいながら、お美年のふっと思い出すのは、やはり三四郎のことであった。
優しいお方であった。御立派な、心の温かい、好きで好きでたまらないお方だった。その三四郎さまが、どうして父をお手にかけるようなことをあそばされたのであろう……？
「はい、お姉さま。そのお侍さまも、ずっとこのお部屋に泊まっていらしたのですよ、御病気で……」
と、何も知らない加代は、好きだったおじさまのことをしゃべりたくてたまらないようにいう。
「とても男らしくさっぱりしていらして、それでとてもお優しいお方なの。わたし、自分のお兄さまのような気がして、お別れする時は悲しくてもう少しで泣き出してしまうところでしたわ。お姉さまだって、きっと好きにおなりになってよ」
そうだ、まるで三四郎さまのようなお方だ……と、お美年もその人のことを思いつづけながら、
「そうですね。加代さんがそんなにお好きになったお方なら、わたしもお目にかかりとうございました。なんとおっしゃるお方？」
と、なにげなくきいた。
「お姉さま、お髪がきれいにすけましたわ。でも、わたし、うまく結えませんの」
「ありがとう。そのままひもで結んでおいてくださいな」
「こうでございますか？」
と、加代は髪の根元を結びながら、
「では、この着物をお召しになってくださいましな。着ていらしたものはあまりよごれているので、一時これをお召しになっていただくよう、

おじいさまがおっしゃってでございました」
「ありがとう。まあ、結構なお召し物ですこと……どなたのお召し物なの？」
「亡くなった加奈叔母さんのよ」
と、加代はお美年につきそってかいがいしく着替えを手伝ってやりながら、
「加奈叔母さんは、わたしの父の妹なの。わたしの名前も、その叔母さんの名前から加という字を頂いたんですって……」
「そう。そのお方、お亡くなりになったの。お気の毒にねえ。いつごろ？」
「丁度、お姉さまくらいの年ですって、とてもとてもきれいな人だったんですって……わたしの父と二人兄妹で、与助おじさんのお嫁さんになるはずだったんですって……」
と、加代はお美年と話すことがうれしくてたまらないようにしゃべりつづけている。
「ところが、加奈叔母さんが急に亡くなってしまったんでしょう。それからというもの、与助おじさんは少し気が変になったらしいのよ。おじさんは、いま小作人頭をしてますけれど、とても正直な働きものなの。ちょっとがんこすぎるけど、いい人よ。けれども、時々、気が変になるらしいの。好きで好きでたまらないお嫁さんになる人が急に死んだりすると、だれでもそうなるんでしょうか、お姉さま。おじいさんも、かわいそうだかわいそうだっていっていますわ」
「そうですよ、加代さん。その与助さんとおっしゃるお方の気持ち、わたしよく分かるような気がしますわ」
と、お美年は身につまされたように思わずつぶやいた。
二人とも知らなかったが、その時、窓の障子の透き間から、じいっと食い入るように中をのぞきこんでいるへびのような目があった。与助であった。
「さア、お支度が出来ました。お姉さま、鏡を

御覧になって……きれい、きれい、すてきだわ!」
　と、加代は無邪気に手をたたいて喜んでいる。
「きっと、加奈叔母さんとそっくりよ。父が見たら、きっとそういってびっくりしますわ」
「お父さまは?」
「今、母と二人で、お伊勢参りにいって留守ですの。残念だわ、お見せ出来ないのが……」
「ごあいさつ申し上げたいと思いましたのに、それではお目にかかれないのですね」
「でも、おじいさんには見ていただけますわ。きっときっと大喜びよ」
「久左衛門さまはいつお帰りなのでしょう?」
「多分、夕方になるだろうと申しておりました」
「わたし、一言お礼申し上げてからおいとましたいと思っていましたのに、それは困りました」
「まあ、お姉さま。いやよ、そんなに早くお帰りになってしまっては。加代、いやです!」
「でも、わたし、こうしてはいられないのです。お世話になりっぱなしで、本当に申し訳ないのですけれど……」
　お美年は一時もじっとしてはいられない。少しでも早く三四郎にあって、父の死に関する真相をたしかめずには、居ても立ってもいられない気持ちだったからだ。
「いけません、お姉さま。おじいさんが、自分が帰るまでどんなことがあってもこの部屋から一歩も外へお出になってはならない。よく申し上げるようにと申しつかっておりますもの。第一、わたし、いやよ。折角、こうしてお友達になっていただいたのに、寂しくなってしまいます。三四郎さまは行っておしまいになるし……」
「ええっ?!」
　お美年はぎょっとしたように振りかえった。
「なんですって? なんとおっしゃったの、加代さん。三四郎さま? 三四郎さまですって?」
「はい。昨日までこの部屋にいらしたお方よ。三四郎さまとおっしゃるお侍さまですよ」

　三四郎さま? あのお方であろうか? いやいや、そんな偶然がやたらにあろうとは思われない。三四郎という名のお侍は、ほかにも沢山いらっしゃるはずだ……。
「どうなさいましたの、お姉さま。お顔が真っ青ですわ」
「ええ、あのぅ……なんでもないのです。でも、加代さん……その……三四郎さまとおっしゃるお方、肩幅のがっしりとした、色の浅黒い?」
「はい、そうです。おっしゃるとおりよ」
「目元のすがすがしい、ものをおっしゃる時その目元でやさしく微笑なさる?」
「ええ、ええ、そのとおりです」
「もしや……も、もしや、加賀美さまとはおっしゃいませんかッ?」
「まあ、よく御存じ……そうですわ。加賀美三四郎さまですわ」
　あっ!
　と口の中でいったまま、お美年はくたくたっとその場へ座りこんでしまった。
　一瞬、かっと火のように赤らんだ顔が、みるみる紙のように青ざめていく。
「まあ、どうなさったのですか、お姉さま?」
　と、さすがにまゆをよせた加代が、心配そうにお美年の顔をのぞきこんだ。
　お美年は、懸命に平静をよそおいながら、無理に微笑を作っていう。しかし、その声は震えを帯びていた。
「なんでもないの。なんでもないのです」
「加賀美三四郎さまを御存じですの?」
「ええ。ことによると、わたしの知っている方と同じ三四郎さまかもしれないと、今ふっと思い出したところです。加代さん、そのお方、どうしてこちらさまへごやっかいになっていたのですか?」
「それはいえないのですわ。おじいさんが、だれにもしゃべってはいけないと、きびしくいっていましたから……」

と、加代は当惑したように言葉を濁らせたが、
「この庭先に倒れていらしたのを、おじいさんがお助けして御介抱したのです。とても弱って倒れていらしたのです。御病気だったのです」
「どうして？　どうしてそのような御病気に？　御重体だったのですか？　おけがでもなすっていらしたのですか？　ねえ、加代さん、お願い。話してくださいッ」
「いいえ、大丈夫なの。もうすっかりよくおなりになって、昨夜、元気にお帰りになったのです。わたし、車坂の近くまでお送りしていきましたわ。そうそう、お姉さまと丁度行き違いでしたわね」
「行き違い？　ああ、行き違いでしたのね。もう少しでお目にかかれたのに……もう少しで……」
　お美年は深く深く吐息するようにいった。一時、全身をかけめぐっていた血液がみるみる冷えかたまっていくように、全身からがっくりと力が抜けさっていくのが目に見えるようであった。
「お姉さま、まだお体がお悪いのよ。本当によくなってはいらっしゃらないのです。さあ、もう少しお休みなさるといいわ」
　加代は心配そうにいって、
「ね、ゆっくりと休んでくださいまし。ちっともお気兼ねはいらないのです。少しでも長くゆっくりしてくださる方がうれしいのよ。とにかく、おじいさんが帰るまで、どこにもいらしてはいやよ」
「ええ、分かりました。久左衛門様にごあいさつもせずに帰るわけにはまいりません」
「大丈夫？　きっとよ」
「ええ、うそはつきません。本当に、加代さん、御心配かけてすみません」
　お美年はぼうぜんとしながらいった。
　心は半ばうつろだったが、とにかく久左衛門に会わねばならないと思っている。久左衛門に

会えば、なぜ三四郎がここへきたか、なぜそんなに弱りはてていたか、三四郎の身に何が起こったか、何もかも分かるかもしれないと思ったからである。
　加代が去っていったあと、お美年は長いことぼうぜんと座りつづけていた。ただもう三四郎のことばかり思いつめて、何が起こりつつあったかも気がつかない。
　いつの間にか、与助が足音を忍ばせて背後まで近寄ってきていた。
「御免くださいまし。ちょっと失礼させていただきとうございます」
　与助はかしこまって手をついた。
「わしは御当家の作男頭をしております与助と申すもので……だんなさまから、お留守の間、お客人のお世話を申し上げるよういいつかっておりますので……」
「ああ、あなたが与助さんですか。それは御苦労さまです。お世話になります」
と、お美年もなに疑わずあいさつした。
　妙に陰気な、何かにとりつかれでもしているような影を背負っている男だと、ちらっと気味わるく感じたお美年も、その名前をきいて、ああ、この人が許婚（いいなずけ）の美しい人を亡くしたばかりに気が変になり、いまだに妻も迎えずその人に操を立て通している人だったのかと、思わず哀れむような思いやりが先に立った。
「何か御用でしょうか、与助さん？」
「へえ、別に用というわけでもないのですが……お客人、もしやあなたは加賀美三四郎というお武家さまを探すためにこちらへおいでになったのではございませんか？」
「いいえ、そのお方を探すために参ったのではありませんけれど……」
「でも、御存じなのでございましょう、そのお方を？」
「ええ。あのう……」
「お会いになりたいのではございませんか？

そのお方に御用があるのではございませんか？」
　意味ありげに問いかける与助の顔をお美年はしばらくまじまじと見つめていたが、
「も、もしや、与助さん、あなたは三四郎さまのおいでになるところを御存じなのではございませんか？　いいえ、ことによったら、三四郎さまはまだこのお屋敷に？」
「さようでございます。おっしゃるとおりなんでございます」
「じゃあ、やっぱりこのお屋敷うちに？」
「へえ。お客人、三四郎さまとおっしゃるお方は、たしかにここにおいでになります」
「まあ！　どうして加代さんはうそをおつきになったのかしら？」
「なぜでございますか、だんなさまが、堅く口どめなすっていらっしゃるからでございますよ。わしも口どめはされておりますが……丁度この窓の外を通りかかり……御免くださいまし。お客人の話し声がちらっと耳に入りまして……何か訳がありそうだと存じたものですから、さし出がましいとは思いましたけれど……」
「そ、それで、あなた、三四郎さまはお屋敷うちのどこに？」
「向こうでございます。森の向こうにある建物の中にいらっしゃいます。おけがをなさいまして……」
「ええっ、おけがを？　御、御重体なのですか、与助さんッ？」
「いいえ、大したことはございません。でも、寝ていらっしゃいます」
「お会いしたいのです。わたし、どうしても、ちょっとでいいのです、お会いしたいのです」
「お会わせしましょう、お客人……」
「会わせてくださいますか？　ほ、本当に？」
「お会わせしますとも……さあ、すぐわたくしの後についておいでなさいまし。でも、人に見られてはまずうございます。どうぞ、加代さま

にも気づかれませんように……」
　そういって立ち上がりながら、お美年の横顔へじろっと投げた与助のぞっとするような不気味な目の光に、お美年はまるで気がつかないようであった。
　与助のあとについてこっそり離れを抜け出したお美年の姿に気づいた者はだれ一人なかった。
　お美年も、だまされるとは知らず、言われるままに人目を避け、立ち木の陰、建物の陰とくぐり抜けては与助を追っていく。
　森に入った。
　昨日、三四郎が加代に案内されて入った道とは違って、ずうっと右手に曲がっていく。しかし、この道もやっぱり下草が生い茂って、めったに踏み入る人もない様子であった。
　例の小流れのふちに出た。この辺までくると、この密林中としては珍しく立ち木が切りはらわれ、青空ののぞいている一郭があった。
　そこに、一見土蔵造りと見える土壁の、おそろしく古びた家が一棟（ひとむね）ぽつりと建っている。
「御先祖さまがこの土地へお住みつきなさいました時、はじめてお建てになった古い古い土蔵なのでございます」
　と、それまで黙々として先に立っていた与助が、ぽつりと口をきっていった。
「以前は、もう一棟、母屋がついていたそうでございますが、とうに建ち腐れて、今ではあの土蔵だけになってしまいました」
「御先祖と申しますと、林家の？」
「はい、林家の御先祖さまで。そうして、この辺り一帯に住んでおります尾久村の百姓どもの御先祖さまでもございます。でございますから、わしらにとっては忘れることの出来ないありがたい尊い建物なのでして……」
「三四郎さまは……その建物の中にいらっしゃるのでございますか？」
「まあ、お客人、中へお入りなさいまし。入っ

てみればよくお分かりでございます」
と、与助は腰を没する雑草を押し分け押し分け、その建物の前に立った。
もとは白壁だったのかもしれないが、今は見る影もなく荒れはて、土台から屋根の上までこけがむし、その上、つたかずらがべた一面にまといつき、生い茂っている。
こんな古い土蔵にも、まだ何か大事なものでもしまってあるのか、とびらには、そればかりは新しい大きな錠前ががっちりととりつけてあった。
与助が腰から取りはずしたかぎでその錠前をあけている。
さすがにお美年は不安なものを感じはじめていた。
親切な人ばかりいる屋敷と安心しきっていた上に、三四郎に会わせてやると聞かされて、なんの疑いもなくここまでついてきたけれど、この原始林を思わせるような深い森の中にぽつんと建った古い土蔵のなにか薄気味の悪いふんいきもさることながら、加代がすでにここにはいないといった三四郎が、なぜこんなところにいるのか、それがふっと胸に疑惑をよびさましたのだ。
ぎぎぎ……
と、不快な音をたててきしみながら、おそろしく重そうなとびらがやっとあいた。
「さあ、お客人、お入りなさいまし」
「三四郎さまは？　もし、あなた。本当に、三四郎さまはここにいらっしゃるのでございますか？」
いいながら、急にあとずさりしようとしたお美年は、いきなり強く背を押されて、あっ！　と声をあげながら中へよろめきこんだ。
ぎぎぎ……と、うしろでとびらがしまる。
だまされた！
と気づいた時には、すでにとびらはとじ、表の方からがちゃりッと錠のおりる音がかすかに

聞こえてきた。
「与助さん！　何をなさるのですッ？　なぜとびらをしめるのですッ？　開けてくださいッ。とびらをお開けなさいッ」
お美年はとっさにとびらに飛びついていったが、もはやかたりとも動かず、叫んだ声が聾(ろう)するばかりけたたましく反響しただけであった。
真昼だというのに土蔵の中は足元も定かでないほど薄暗く、何十年――あるいは何百年もの長い間、森や雑草に埋もれ、とびらをとざしたままに建ち腐れていたらしい。湿けた腐臭がむうんと鼻をつくようによどんでいた。
もちろん、三四郎はおろか、だれの姿もそこにはなかった。
「与助さん、あなたはわたくしをだましたのですね？　三四郎さまはどこにいらっしゃるのですか？　うそです。何もかもうそだったのです。わたしをだましたのです！　あなた、なぜそのようなことを……なぜ、わたしをだましたりなさるのです？　さあ、ここをお開けなさいましッ」
「だましはしません、お客人……」
と、与助の声が聞こえてきた。
厚いとびらと土蔵を通して響いてくる声は、まるで別世界から伝わってくるかのように、かすかで陰気だった。
「うそです！　ここにはだれもいはしません。三四郎さまに会わせてくださると、わたしにうそをついたのです！」
「きっと、お会わせしますよ。きっと、あの加賀美三四郎というお人に会わせてさしあげますよ」
「いいえ、もうだまされません。お開けなさい。開けてくださらないと、声を立てて人を呼びますよッ」
「むだだからおやめなさいまし。ここでこうしてお話ししているわたしの声さえ、どんなにかすかにしか聞きとれないかお分かりでございま

しょう。この辺はだれも立ち入ることのない禁制の場所でございます。よしんば、だれかがお客人の声をきいたとしても、このとびらをあけることは、わたしのほかにはだれにも許されていないのですから……」

「なぜ、わたしをこのような目にあわせるのです？　なんの恨みがあるというのです？　いいえ、ここを開けてくださいッ。さあ、開けてくださいッ」

「お客人、あなたは三四郎というお人とよほど御昵懇の御様子ですな。とても会いたがっていらっしゃいました。ですから、あのお人に会わせて差し上げようと思っているのでございますよ」

「そ、それがあなたの口実ですか。それでわたしをここへ閉じこめたというのですか？」

「口実ではありません。三四郎はきっとここへやってきます。きっとです。あなたがここにいらっしゃるとしったら、なおさら、きっとやってきます」

「もうそのようなことはどうでもよいのです。とにかく、ここを開けてくださいッ」

「いいや、開けられません。三四郎がここへやってきて、そして、あなたと三四郎が会うまでは……」

「なぜ、なぜ、なぜですッ？」

「この森のおきてを守るためです。二十三年前のあの恐ろしい不幸を二度とくりかえさないためです」

　壁をもれて響いてくる与助の声は、何かに憑かれでもしたように陰々と鬼気を帯びていた。

「二十三年前だ。二十三年前に、あの恐ろしい不幸な出来事が起こったのだ。たった一人の無法な侍がこの森へやってきたばかりに……」

　と、与助は、何かをのろいでもするように、はげしい憎悪をこめて叫んだ。

「お客人、その侍はね、はじめはだれも名前さえ知らない男だったのですよ。ずっとあとになってから、金森家の納戸役、木暮五郎蔵という男だということが分かりましたがね。分かったのはずうっと後のこと、恐ろしい不幸が起こってしまった後のことだったのですよ。

　その男がこの森へやってきました。二十三年前です。そして、この森のおきてを犯し、この村のきびしいしきたりを破って、お嬢さま加奈さまに接近しようとたくらんだのですよ。それがあのいまわしい不幸のはじまりだったのだ。そして……死んだのですよ、みんな死んだのです。森のおきてを犯した罪の報いとして、みんな死にたえてしまったのですよ、その木暮五郎蔵も、お嬢さま加奈さまも……。

　そうして、二十三年……同じようなことが起ころうとしている。いや、だれがなんといおうと、わしにはちゃんと分かっているのだ。

　御覧なさい。あの加賀美三四郎という若侍だ。

　あの男は、二十三年前に五郎蔵がやってきたと同じような目的をもってこの森へやってきました。そして、森のおきてを破りました。

　お客人、あなたもそうです。あなたはなんのためにここへ来たのですか？　なんのために、加奈さまのお召し物をお着になったのですか？

　いいや、いい訳は聞きますまい。何もかも、わしにはよく分かっているのです。つまりは、二十三年前と同じことが起ころうとしているのだ。御覧！　あなたは加奈さまとそっくりだ。二十三年前のあのお人とうり二つといいたいくらい、よく似ていらっしゃる。そのお召し物、そのお姿、そのお美しさ……。

　二十三年前とそっくり同じだ。あの三四郎はまたきっとやってきます。この森へ必ずやってくると誓ってもいいのだ。加奈さまにそっくり同じなお客人に会うためにね。

　分かりますか、お客人。二十三年前と同じことが起ころうとしているのです。わしもまた、二十三年前と同じように、この森のきびしいお

きてを守らねばなりません。
わたしのなすべきことはたった一つです。森のおきてを守って、無法な侵入者を殺すことです。お分かりか、お客人？　三四郎が今度この森へ足をふみ入れたとたん、命がなくなるのです。そうして、あなたもまた、加奈さまと同じようにね……」
ふっと、声がとだえた。それっきり、とびらの向こうはしいんと静まりかえってしまった。
お美年は、ぞうっと寒気だった面持ちで、土蔵の中の暗がりに棒立ちになっていた。
お美年には、その男のいっていることの意味が分からない。ただ、分かったのは、たしかに与助が何かに憑かれて正気を失っていること、少なくとも狂気じみた執念と妄想のとりこになっているらしいことだった。そして、もしかすると、三四郎や自分の命まで危険に瀕するかもしれないということも……。
お美年はいまさらのように土蔵の中を見回した。
暗い。窓一つなかった。
いや、以前は窓もあったらしいが、いつのころか、それをふさいで土壁に塗りつぶしてしまった形跡があった。
中は二階造りになっている。二階というより、物を納める都合で狭い屋根部屋が造ってあるらしい。
一隅に、その屋根部屋へ上るための急なはしごが立てかけてあって、その上り口から淡いかすかな光が流れこみ、穴室のようなこの土蔵の中を、かすかに照らし出していた。
そのかすかな光にすかしてみると、なわ、箱、何かの道具らしいものなどが一隅にうずたかくつんである。よほど遠い昔から積みっぱなしになっていたとみえ、何もかも一面にほこりをかぶり、腐れ朽ちて、それがなわであり、箱であることを見定めるまでには、よくよく目を凝らさねばそれと判じかねるくらいであった。

あの老人、久左衛門は自分を助けてくれるために安々と三百両という大金を投げだしてくれたという。してみると、林家がよくよくの豪農であり、この辺きっての長者といわれる家柄であることは想像がつくが、その林家の敷地の中にこんな古い建物が人しれずみじめな姿で建ち腐れているということが、お美年の胸をふっとゆさぶった。
なにか不気味なものが漂っているではないか。
それに、あの与助の正気の沙汰とは思われない奇妙な言葉が、この不気味さの上に疑惑の影をいよいよ濃くなすりつけてくるようである。
なんとかここから抜け出す工夫はないものだろうか？
お美年の目が屋根部屋に通じているはしごにとまった。
奇妙なことに、ほかの箱や道具類にくらべると、そのはしごはそう古いものではなかった。しかも、さしてほこりにもまみれず、その上、手のふれる個所が淡い光の中に油光りしているのは、最近でもちょいちょいだれかがそれをのぼり降りする証拠だと思われた。
上には何があるのだろう？　なんのために、はしごが油光りするほどのぼり降りするのだろう？
お美年は、意を決して、そのはしごに足をかけた。
古いはしごだが、しかし、まだしっかりしている。ほとんど垂直に近いそのはしごを、お美年は一歩一歩上っていく。
上りきった屋根部屋は、人ひとりやっと立っていられるくらいの天井の低さだった。ここにも窓はなく、ただ屋根と壁の接するところに通風用の狭い透き間が出来ていて、そこからわずかに光が流れこんでいるだけである。
この屋根部屋にも、何に使ったのかしかとは分からぬような古びた道具類がぎっしりとつま

ったまま手も触れかねるようなありさまだったが、しかし、はしごを上りきったところから道具類の間をぬけて、きれいにほこりのぬぐわれた一本の道が奥へ向けてずうっと続いているのをお美年はすぐ見てとった。

一体、そこの奥に何があるのだろう？

お美年は、一、二歩その方へ歩みかけたが、とたん、ぎくっとしたように棒立ちになってしまった。

その行き詰まった奥の辺りに、ぽつんと一つ灯明が小さな炎をあげてともっているのを見たからだ。

こんな人けもないはずの建ち腐れた土蔵の中に、なぜ灯火がともっているのか——

一瞬、お美年は立ちすくんだように息をつめて、その灯火のさしてくる方を見つめていたが、やがて用心深くそろそろとその方へ近寄っていった。

屋根部屋の一番奥まった辺り、うずたかく積まれた古道具類の間に、まるで人目を忍ぶようにこっそりとその灯火はともっていた。

古ぼけて傷だらけになっている経机が一つ置いてあって、その上に油ざらがおかれ、細い灯心が小さな炎をあげている。その左右には、摘みとってから間もないと思われる野花のひと握りと、清水をもった欠け茶わんとが供えてあった。

おそらく、だれかが毎日のようにここへきてはこっそりと祈りでもささげているという形跡があった。

ただ、なんのために、こんな荒れはてた古土蔵の、しかもほこりにうもれた奥の奥をえらんで、このような供えものをささげ、灯明をともしているのか分からない。

おそらく、だれかの霊を供養しているものと思われるが、これほどまでにして人目を避け、こっそりとやみの中へ忍びこんできて何かを祈っている人影を、それと想像してみただけでお

美年はぞっとするほど不気味だった。

いまさらのようだが、どうもこの林家には奇妙なあやしいものがひそんでいる。三四郎がここへやってきたということも、今にして思えばただごとではない何か深い事情があってのことに違いないし、少なくとも、あの与助という気違い男と、そしてこの土蔵との関係には、何かがきっとひそんでいるのだ、とお美年はそう思った。

お美年の勝ち気な性分がむらむらっとこみあげてくるのはこうした時である。

よし！　相手が相手なら、こっちでも性根をすえてあやしいものの正体をとことんまでつきとめてやろう……。

お美年はあらためてあたりへ目を配った。

どこもかしこも、一面にうずたかくほこりをかぶっているのに、お美年の立っているところだけが、始終だれかが出入りするためだろう、きれいにほこりが払いのけられている。

経机と、その上に供えてあるものもそうだ。ほこりがつもっていないのは、毎日だれかが手をふれるからである。

ふっ——と、お美年の視線が経机の向こうへとまった。そこには横に細長い木箱がおいてある。古い、すっかりすすけきった木箱であった。

はてな？

と、お美年が首をかしげたのは、何年——あるいは何十年も動かしたことさえないのだろう、その木箱の外側から下部へかけてはほこりがびっしりとまといついているのに、ただその表面のふただけが、ほとんどほこりのあとをとどめていないことであった。

ということは、毎日ここへきて灯火を供えるだれかが、同時に、毎日のようにそのふたを払いのける習慣があるということを物語っている。

お美年は、虫がしらすというのか、なにか胸騒ぎをおぼえながら、そっとそのふたをとりの

けてみた。
箱の中は暗い。そこで、灯明を手にとって、ぐいと中をのぞきこんだ。
とたん、灯火がいまにも消えそうにはげしく動いたのは、お美年が危うくそれを取り落としそうになったからだ。
さすがのお美年が、一瞬、色を失ってがくがくっと身震いした。声さえ出ないくらい、その顔は恐怖にこわばっている。
箱と見たのは寝棺であったらしい。
棺の底に横たわっていたのは女の死骸であった。
白衣の死に装束をまとい、仰向いている。若い美しい女であった。
ただ、その美しい目を半眼にし、くちびるをひきゆがめて堅く食いしばった歯をむき出しにしている。その表情は、断末魔の苦悶を伝えているというよりは、はげしい恨みをこめて何かをのろってでもいるようであった。
のどの真下から右うしろへかけて、鋭い刃物で切られたあとがぱっくりと大きな傷口をあけ、そこからほとばしり出た血潮が白衣の胸元を一面に赤黒くそめて、その辺りにさも無念そうに虚空をつかんだ両手の指先があった。
息たえてからかなりの時間がたっているらしく、そのほおにも指先にも血の気はなく、白蠟と化したかのようなその五体からは、むうっと屍臭の漂ってくるような心地さえした。
お美年は気丈にもじいっとこらえてその死に顔を凝視している。次第に心が落ち着いてきた。
「ああ、これは人形だ！」
と、お美年はだしぬけに声をあげてつぶやいた。
暗い光線の中で、ちらっと一瞥した瞬間には、たしかに人間の死骸だと見えたが、それほど巧みに刻まれた人形であったのだ。
木を刻んで、それに彩色をほどこし、頭にはちゃんと髪まで植えてある。

いかにも奇妙なのは、その人形が生きた美女の顔や姿をうつしたものではなくて、無限の恨みを抱いて息たえ、まさに屍臭を発して腐汁と化しさろうとしつつあるあやしい死人の顔や姿をそのまま入念なくらいありありとうつしとった人形だったということだ。
しかも、よく目を凝らして調べてみると、それは昨今作られた人形ではなくて、少なくとも十年、あるいは二十年以上もの年月を経たものらしいことも推察された。
だれかが——多分あの与助であろうが、毎日のようにこっそりとこの土蔵へやってきては、だれにも知らせずこの寝棺の中におさめてある奇怪な人形に向かって、花や水、そして灯を供えつづけていたと思われる。
いやいや、もっとよく調べていくうちに、しばしばこの人形が棺から外へもち出され、しかも、だれかの手によってしかと抱きしめられ、散々に愛撫されたに違いないという痕跡を、お美年ははっきりとさぐりとってしまった。
なぜかというに、そのほおやくちびるの辺りには、生きた人間がほおずりしたりくちびるをよせたに違いない脂じみたあとがあり、また、抱きしめたと思われる人形の背や腰の辺りの白衣には、手あかとその脂によごれた跡が歴然と証拠をのこしていたからだ。
これはまさに異常であった。そこにはなにか狂気じみた非人間的な恐ろしいものが感じられた。
と——
その時、みしりっとはしごの方で何かがきしむ音がした。
異常な出来事に心をうばわれ、背後の気配にまったく気づかずにいたお美年が、その音にはじめてはっと我にかえりながら振り向いた時には、その音の主——真っ黒な男の影は、もうはしごを上りきって、そこにぬうっと立ちはだかっていた。

はしごの上り口に立った人影は与助であった。彼は、土蔵の前から立ちさると見せかけて、その実、お美年の行動をじいっとうかがっていたらしい。
「お客人、その棺の中を御覧になりましたね？」
と、彼はお美年を見すえながら、詰めよるようにゆっくりと近づいてきた。
「いいのですよ。御覧になってもよろしいのです。おそかれ早かれ、いつかはそういうことになると存じておりました。けれども、お客人……わしは見ていましたよ。あなたはまっすぐ二階へ上ってきて、そして、まっすぐに灯火の前までいらっしゃり、そのあげく、なんのためらいもなくその棺の中をのぞきこみになりました。
いいや、分かっています。わしはちゃんと見ていたのですから……ねえ、そうでございましょう。それが、若い娘さんのなさることでございましょうか？ うら若い娘が、そんな度胸のよいことをずばずばなさるものでございましょうか？
わしにはすぐぴいんときました。あのようにためらいもなしにつかつかとあすこまで行くお客人は、先日この森へ忍びこんだ加賀美三四郎という御浪人と同じように……そして、二十三年前、この森に恐ろしい不幸をはこびこんできた木暮五郎蔵という御侍と同じように、この森の秘密をかぎつけ、大事な大事な花夜叉さまの宝や富を一手にせしめてしまおうとたくらんでやってこられたに違いないとねえ……。
そうでございましょう？ お客人、あなたもやっぱり、われわれの敵のお一人だったのですね？ そうですとも！ それに違いないのだ！」
与助は目前までつめよってきた。
目がぎらぎら光っている。ありありと狂気を思わせるぞっとするようなあやしい光であった。
「与助さん、あなたのおっしゃることは分かりません。わたしはなんにも知りはしません」
「いいや、かくしてもだめだ。あなたのやってたことを、わしはちゃんと見ていたのだから……」
「わたしはこの土蔵から出たかったのです。逃げ口をさがしていただけです」
「逃げ口をさがして、この棺をあけたのですか？」
ふふふ……と、あざけるように笑った。
「逃がしはしません。絶対に、逃がしはしませんよ、もう……」
「与助さん、一体、わたしをどうなさろうというのです？」
「ああ、あなたは加奈嬢さまそっくりです！」
と、与助の狂った目が食い入るようにお美年の姿を見上げ見下ろしした。
「二十三年前の加奈さまそっくりです。お客人、加奈さまは死んだのですぞ。そ、その棺の中が……加、加奈嬢さまなのだ！」
まるで、むせび泣くように語尾がふるえた。
「御覧なさい、お客人。それが加奈さまです。御覧なさい。じっと御覧なさい。そうして……あなたにも、加奈さまそっくりなそういうお姿になっていただくのです。白衣をお召しいただいて、のどをえぐって、全身真っ赤に血まみれた、そ、そういうお姿に……」
いいながら、いまにもその手をのどもとへのばしてこようとする。
お美年の背後には逃げ場はなかった。
「お客人、もう一度よく加奈さまのお姿を御覧ください。加奈さまはそういうお姿でお死になったのですよ。血にまみれ、虚空をかきむしり、のたうちながら、恨みをのんで死んでいかれたのですよ。いいえ、死んでもまだそこにいらっしゃいます。加奈さまは、その恨みとともに、二十三年、じいっとそこに身をひそませていらっしゃったのでございますよ」

与助はいいつづける。

ぎらぎら光る目は、いよいよ狂気じみ、ひたとお美年の顔にくぎ付けになってはなれない。

「わしは加奈さまをここへお連れし、だれにも知らせず、そこへそっとお寝かせしたのです。あの桜色をしていたお美しいお顔もすでに白蠟(はくろう)のように青ざめ、おやさしいお手も氷のように冷えきってしまっておりました。

わしは、加奈さまと御一緒に恨み、そして泣きましたので、はい……毎日、毎晩、幾度となくここへ参っては、加奈さまに話しかけ、そのお体を抱きしめては泣いたのでございますよ。はい、毎日、毎晩、幾度となくねえ……。

悲しいことに、その加奈さまは次第に腐れておゆきになりました。そのお顔も、お胸も、お手も、抱きしめるたびに皮膚が破れ、肉が崩れ、うじに食い荒らされて段々に消えておゆきなさるのでございました。そこで、わしはそのお姿を木に彫って、その人形を作ったのでございますよ。まぶたにしっかりやきついた加奈さまのお姿がうすれてしまわないうちに、必死になって木を彫り、彩色をほどこし、そして、加奈さまの腐れ崩れてもうほとんど形のなくなってしまっていたお体からとったお衣装をお着せ申し、長い長い月日をかけて、やっとその人形を作ったのでございます。

いいえ、人形ではあっても、わしにとっては本当の加奈さまと同じでございます。わしは、毎日毎夜のように、その加奈さまを抱き、お話をし、泣きつづけて二十三年をすごしてきたのでございますからね……」

与助は、そこまでいうとふっと口をつぐんで、表の方へ耳をすました。

しいんと音のとだえた静けさの底に、なにかかすかな人声らしいものが伝わってくる。

「お姉さま――ッ……お美年さまあ……」

加代の声であった。

「お美年さまア……いらっしゃいませんか。加

代がお迎えにきましたのよう……」

呼びたてながら、段々こっちへ近づいてくる。

――ああ、わたしを探しにきてくれたのだ！

と、お美年はほっと蘇生(そせい)した思いであった。

「ここですッ、加代さん。わたくし、ここよ！」

お美年はだしぬけに声かぎりに叫んだが、それをすべていい終わらぬうちに、どすっとうしろの壁へたたきつけられたように転げた。

肩幅がお美年の倍もあろうかと思われる巨大な男の体重が、おどりかかり、のしかかり、そのまま片腕で胸をしめつけながら、もう片方の手がむずとお美年の口をふさいでしまったのだ。

「お美年さまア、お姉さまア……」

と呼びたてる加代の声は間近に迫っていた。

助けを求めるなら、今をおいて機会はない。

お美年は死にもの狂いになって身をもがいたが、上から小牛のような体でのしかかり、ぐいぐいしめつけてくる与助の腕の力は、まるで万力にかけたようにびくともしなかった。

「お美年お姉さまア」

と呼んだ加代の声は土蔵のすぐ前であった。

「おかしいわ。なんだかこっちの方で声がしたように思ったけれど、やっぱり御返事がないわ。気のせいだったのかしら？」

お美年のくちびるは男の手でふさがれている。ふりはなそうとしたが、てこでもはなれない。おさえつける力に、お美年の首がねじ切れそうであった。

お美年は死にもの狂いに、がぶりとその手にかみついた。生温かい血がぬるぬるくちびるの間からのどの奥へ流れこんできたが、しかし、男の手はまるで無感覚のようにびくとも動かなかった。

「お美年さまア、お美年さまア……」

と、土蔵の中へ向かって呼びかけている。

「返事がないわ。中はしいんとしてるもの……やっぱりここでもなかったのね。ひょっとした

ら、庭へお遊びにお出ましになって、この森の中へでもお迷いこみになったのかと思ったけれど……それにしても、この土蔵の中へお入りになるわけはないんだわ。これだけお探ししても見つからないところをみると、屋敷から出ていっておしまいになったのかもしれない。なんだかとても急いで三四郎さまにお会いしたいらしかったから、きっとそうなのよ」

加代はさも失望したように独り言をいいながら、ついに土蔵の前をはなれて歩き出し、やがてその足音も声もふっつりと聞こえなくなってしまった。

お美年はなぜかしら、たった一度の機会が去ってしまったのだ、もう二度とここから表へ逃れ出る機会はないのだと、ふっとそんな暗いことを思った。

はりつめていた気がゆるみ、闘志がうせていく。

ぐったりと無抵抗になったお美年から、与助はその口をふさいだ手だけははなしたが、体を抱きしめている腕を解こうとはしなかった。

奇妙に光る目が、いまさらのようにお美年の全身を見渡していた。

「そっくり同じです。二十三年前とそっくり同じです。わしはこうして加奈さまをお抱きしたのです。いや、それ以来、二十三年間、毎日のようにこうして……」

そういう声の調子が前と変わっている。のどにひっかかるひからびたような声であった。

「そのお美しさ、そのお体、そのお召し物……そっくり同じです。そうして、そら……その美しい白いおのどのあたりにべっとりとしたたっている血！　のどを刺してお死になった加奈さまとそっくり同じです。ああ、同じだ！　加奈さまそっくりだ！　ただ、加奈さまのお体は氷のように冷たくひえていたのに、あなたの体は温かい！　火のように温かい……」

お美年を抱いている与助の腕がわなわなっと

震えた。その震えの中に、二十三年間くすぶりつづけていた男の奇怪な情炎をちらっと感じとって、お美年は思わずぞうっと寒気だった。

声をたてさせまいとして、しゃにむに抱きしめおさえつけていたお美年の体から、与助はなにか忘れていた遠いものをふっと呼びさまされたらしい。

若い女の体の弾力、体温、体臭、そして髪油のにおい――それらは、与助が二十三年間抱きつづけてきたという、氷のように冷たく、しかも腐れ崩れていく屍とはこと変わり、ましてや、木彫りの人形からは求めても得られなかった、遠いある日の、ある時の、切なくもはげしい記憶を突然呼びさまし、かき立てたらしい。

「加奈さまだ、加奈さまだ。加奈さまとそっくり同じだ。このお姿、このお召し物、このお美しさ、この温かさ、このにおい……ああ、加奈さまとそっくりそのままだ……」

与助は憑かれたようにお美年を凝視したまま口の中でつぶやいている。その腕は、まだお美年を抱いたままおののきつづけていた。

「加奈さま、なぜお死になったのでございます。お恨みに思います。はい、与助は終生お恨みに存じます。たとえ加奈さまが御自害あそばし、冥途へ旅立たれるおつもりでも、与助は絶対そうはおさせ申すまいと思いつめました。ですから、加奈さまのお死骸を墓場の底から掘り出し、うばいとって、だれ一人知らない、そしてじゃまの入る心配のないこの土蔵の中へ運んでまいりました。そして、お約束どおり……このわしと、久左衛門さまがお許しくださったとおり、夫婦になっていただきました。

はい、加奈さま。加奈さまは御自害なさっても、そのお体も魂も、わしは絶対この手からはなさぬ覚悟をしたのでございます。決して、お勝手に冥途へおやり申さぬ決心をしたのでございます。

村の衆はわしのことを気が狂ったと申しまし

た。そうかも分かりません。加奈さま、わしの気が狂ったとすれば、それはあなたさまがなすったことでございますぞッ。ですから、わしはあなたを一人で冥途へはやるまいと決心したのでございます。

気が狂ったといわれようが、なんといわれようが、わしは加奈さまを毎日毎晩のようにこの腕でお抱きし、お話をかわして二十三年すごしてきたのでございます。加奈さま、加奈さま……」

加奈さまと呼びながらお美年を見つめたひとみには、明らかに狂った心と、その心にむらむらっと燃え立ちはじめた男の欲情が影さしていた。

「加奈さま、あなたは加奈さまとそっくり同じだ。いいや、加奈さまだ。加奈さまがよみがえっておいであそばしたのだ。加奈さま、お嬢さまッ。あなたはわしの妻じゃ。だれにもやらぬ。もう離さぬぞッ！」

お美年は目の前にはげしい息をあえがせながらどっと覆いかぶさってくる男の顔を見た。

もう、死にもの狂いだった。

「な、何をするんですッ！」

ぴしっ！　とはげしく鳴ったのは、お美年がやっと振りほどいた片手で男のほおへ力まかせの一撃をくれた音であった。

花笠問答

ふっと目をさました三四郎は、久しぶりに、耳元近く岸を洗うさざ波の音をきいた。そういえば、満潮が近いのであろう、水藻のにおいが濃く漂っている。懐かしい……。

この「舟友」の離れに寝るのも随分久しぶりのような気がしながら、安心したせいか、たった二、三刻の間だが、ぐっすりと眠ったらしい。

真夜中にここへたどりつき戸をたたいた時、起き出てきたおきんは、びっくりしたように目をみはり、何か問いたげでもあり、また話したげでもあったが、

「何もかも明朝のこと。さあ、三四郎さま、おやすみなさいまし」

と、なんにもいわず離れへ導いてくれた。

おきんが敷きのべてくれた夜具の中へ、欲も得もなく身を投げ出すと、とたん、前後不覚の眠りにおちてしまったのは、三四郎自身、よくよく疲れていたのだなアと、いまさらのように感心するばかりであった。

――お美年さんはどうしたろう？　元気かな？

と、三四郎は二階の方へじいっと目をやった。

おかしなことだが、ここへ帰りつくと一緒に、あれほど心を労していた疑惑の数々がすべて一瞬のうちに消えさってしまって、ただお美年のことだけが、しらずしらず胸いっぱいにみちみちてくるのがふしぎだった。

どうもお美年は二階にはいないらしい。自分が留守にしていた間、女一人が離れへねるのも心細いことだろう。きっと、母屋の方に休んでいるに違いない――などと、なんにも知らない三四郎は、ただ無性にお美年を懐かしがっている。

かさっ……。

と、ふすまの方でかすかな音がした。

もう表の空は白みはじめたのか、行灯の消えた部屋の中にどこからともなく薄明かりがさしている。

そのほの暗い片すみのふすまが、そろりそろりと開く気配がした。

三四郎は、身じろぎもせず、まっすぐ天井を見つめていた。いましがたふっと夢からさめたのも、なにか怪しい気配を感じたからであった。

――まさか、お美年さんではないだろう。

と、三四郎の思いはまたそぞろにお美年の上へとんでいる。

――まさか、お美年さんではあるまいが、もし、あれがお美年さんだったら、わしはもう我

慢が出来ず、きっと節度を忘れて力まかせに抱きしめてしまうに違いない。ああ、会いたいなア……。

　などと、そんなとりとめもないことばかり思いつづけているのだから、その時の三四郎はよくよくどうかしていたらしい。

　男の影であった。

　そうっと、畳をはってこちらへにじりよってくる。

　——どうして、本職だ。少なくとも素人ではないぞ……。

　と、三四郎は感心しながら横目で見やっている。

　男は、とうとうまくらもとまではいよると、すうっと手をのばして、そこに脱いであった三四郎の衣類や懐中物へそっと手をかけた。

　だが、その手へさらに三四郎の手がむずっとかかったのは間髪を入れなかった。

　素寒貧のやせ浪人をねらうなんて、随分目先のきかないどろてきがいるものだと思って、三四郎は思わず苦笑した。

　それとも、「舟友」の銭箱でもねらうつもりで忍びこむ場所を間違えたとすれば、これはまたとんだそそっかしいしろものである。

　恐れ入って泣き言でも並べ、わびでもするならそのまま放してやるつもりだったが、そやつはがんとして口をきかなかった。それどころか、おそろしくくそ力のあるやつで、それが死にもの狂いになって抵抗し、逃げ出そうとじたばたする。

　三四郎は、そやつを引きずって窓のそばまで行き、組み敷いた背中をひざがしらでぐいっとおさえつけながら、窓の雨戸を五、六寸引きあけた。

　暁の薄明かりがさあっとさしこんできて、その男の姿をほんのり浮き上がらせた。

「やっ！」

　と、さすがの三四郎が唖然としたように手を

はなした。

「なんだ、仙太兄いではないか……驚かすのう。これは一体どうしたわけなのかね？」

「さあ、どうしたわけでござんしょうねえ。ああ、いてえいてえ……」

　と起き上がった仙太は、むうっとふくれっ面をしながら、ねじ上げられた片腕をさすっている。

「兄いは夜中に寝ぼける癖でもあるのかね？」

「さあ、どうでございましょうかねえ」

　と、仙太はふてくされたような上目づかいでじろっと三四郎を見やりながら、

「だんな、つかぬことを伺うようですが、そのまくらもとにあるお荷物の中に、一体、何がへえってるんでございます？」

「さあ、何が入ってるんでございましょうかねえ……兄いのまねをすると、こういうことになるらしいな。はっはっは……」

「へへへ……そういうことになりますかねえ。でも、あっしにゃア分かっておりますぜ。手をふれたとたんちりりりとなったあの音は、たしかに鈴が入ってるらしゅうございますね。え、そうでござんしょう、だんな？」

「ははあ。そうすると、兄いは寝ぼけたのではなくて、わしの所持品の中身をさぐるために夜中わざわざ出向いてこられたのだな？」

「まあ、そんなところらしゅうございますねえ。てっとり早くいやア、その鈴を盗みとりにきたんでございまさア。いいや、盗むんじゃアねえ、返していただくんでございますよ、へい……」

「妙なことをいう。わしは兄いからあずかりものをした覚えはないがのう」

「そりゃそうでございましょう。あっしはお美年さんの使いで参ったんでございます。お美年ちゃんがだんなにおあずけした例の銀の小鈴をお返しくださいまし。ねえ、返してくだせえましよ」

「どうも分からんなア。わしはお美年さんから

何もあずかりはせん。まくらもとにある鈴は、鈴は鈴でも別のものだよ、兄い」

「その手は食いません。いやさ、三四郎さん、絶対、だまされりゃアしませんぜ。いいから、黙って鈴を返してくださいまし。返してくださらねえうちは、てこでもここから動きませんぜ。命にかけても返してもらいますぜ。さあ、返しておくんなせえッ！」

と、仙太の声は肩上がりに高くなる。その様子がどうもただごととは思われなかった。

「わしが鈴をあずかっているなどと、迷惑だのう、仙太。それはいいがかりというものだぞ」

「いいがかりですって?!」

ふん、何をいいやがる——というように、仙太はぎろりと目をむいた。

「じゃあ申し上げますがねえ、だんな。あの鈴はよくよく大事な品なんですぜ。お美年ちゃんとしたって、自分でしっかり持っているか、起きふししている離れの中の安全なところへかくしておくか、それとも信頼してる人間にあずけておくか、そのうちどれかの手段をえらんだことでしょう。ね、そうでしょう？ ところが、持ってもいねえ、かくしてもいねえとすりゃア、残るところはだんなの懐の中だけなんだ。なんの因果か、お美年ちゃんはひどくだんなを信用してましたからねえ」

「おぬしのいうとおりだよ。あの小鈴が、わしの手にもなく、お美年さんも所持していないとすれば、残るところその離れの中にかくしてなければならないということになる」

「分からねえなア、だんな。ここにはかくしてねえといってるんですぜ。あっしゃ、一日一晩、この離れを徹底的に探したんだが出てこなかったんですぜ」

「それは、お美年さんがすばらしく頭のいい娘さんだという証拠だな。仙太兄いが一日一晩かかっても探しあてられないうまいかくし方をしたということだからのう」

「あっしゃア、天井裏から根太の下まで、洗いざらい調べたんですぜ」

「そこが面白いところだな。わしはお美年さんのそばにいてそれをかくすところを見ていたが、なるほどと感心したものだ。大丈夫だよ、仙太。ゆうべわしがここへもどってきたときに、真っ先にそのかくし場所をちらっと見たが、たしかにもとのまま、そっくり手つかずに残っていた」

「ええっ、この離れの中にですかえ？」

「うむ、すぐ目の前さ。だれでもこの離れへ出入りするものは、その度ごとに、いやでも二つの目で見ているはずなのだ」

「ふうむ？」

と、仙太はまだ半信半疑で、

「そんなはずはねえんだが……あっしゃア根太まではがして探したんですからねえ」

「お美年さんはだれかにそれをねらわれるかもしれんことをちゃんと予期して、その裏をかき、ふしぎなところへかくしたのだな」

「だんな、それは一体どこなんです？」

「だれにでも楽々と見えるところだ。すぐ目の前、鼻の先だよ」

「だから、どこだって聞いてるじゃありませんか」

「ははは……まあ、それはそれとして、ちとすがすがしい朝の空気でも吸ってこよう」

三四郎は、のっそりと立ち上がって、玄関へおりたった。

表へ出ると、乳色の朝もやが薄潮のにおいをふくんでしっとりと垂れこめている。

「だんな、どこへいくんです？」

と、うろんげにじろっと目をすえる仙太の方へ、

「下町に住んでみて、何が楽しみといって、祭礼にまさるものはないようだな。女房を質に入れても祭り衣装——などというが、そういう気持ちも近ごろやっと分かるような気がしてきた

わい。今年の三月、三社祭りのにぎわいなどというものは……」
　と、三四郎はそしらぬ顔をして、そっぽなことをしゃべりはじめた。
「大人も子供も、男も女も、垣をはずしてただただ楽しげに祝いさざめく祭礼というものは、堅苦しい屋敷ぐらしの侍どもには到底味わえんよいものだな。わしも、この『舟友』のやっかい者になるようになってから、なにやら子供のように祭りが待ち遠しくてのう。ことに、今年の三社祭り、にぎやかだったのう」
　と、三四郎は朝霧の中をゆっくりと歩いていく。
　仙太はそれどころではなく、
「だんな、鈴の方はどうなったんです？　鈴のかくし場所はどこなんですよう？」
　としつっこい。
「あるじの友三は、もともと生きのいい江戸っ子だから当然だが、内儀のおきんがまた似たもの夫婦だ。それに、以前堀で鳴らした芸者だったというだけあって、祭りともなれば、何もかもそっちのけで、先にたって遊び騒ぐのが好きだ」
　と、三四郎はそしらぬ顔で歩きながら、
「毎年、神輿の先達をつとめる手古舞は堀の芸者の吉例だが、またその手古舞の先頭を切るのがおきんの自慢だ。そろいの衣装に伊勢袴、左手に金棒、右手に牡丹を描いた黒骨の扇、それに、そろいの花笠を背にかけたところが、見なれた姿でもなかなかにいきなものでよろしい。なにしろ、おきんはあの男そこのけの恰幅だし、その上、あの美声で音頭をとる木遣りがまたすばらしいのだ。亭主の友三が、川柳に――初春やうぬが女房にちょっとほれ――などと申しますが、うちでは祭りのたびにちょっとほれ直しますと、酔った勢いでぬけぬけとのろけを申したが、なるほど、無理はなかろうて、ははは は……」
「だんなア、そんな話を聞いてやしません。鈴

の方はどうしたんですよう」
　と、仙太はじりじりしながらいった。
「兄いは気が短くていかん。まあ、しまいまで人の話を聞くものだ」
　三四郎は足をとめた。
　そこはもう離れの庭はずれで、母屋の方へ通じている木戸が目の前にある。
　その木戸に近くぽつんと立っているのは、小さな石の地蔵尊であった。
　数年前にこの先の流れに面した石垣を工事した時どろの底から掘りだされた地蔵尊だとかいうことで、それ以来ここに安置され、毎日の供物供養がかかされず行われている。
　型どおり赤いよだれかけを召され、慈顔豊かな石仏であった。
「見い、仙太。仏様も数多くおいであそばすが、地蔵尊ほど女子供に親しまれ、身近に感じるお方はほかにはあるまいな。ああした赤いよだれかけなども、あのようにかわいくお似合いなさっておられる。それそれ、ひもを首にかけ、背中へこいきに背負われた花笠もよくお似合いではないか。あれは、この三月、三社祭りの手古舞におきんがかぶった花笠だそうだ。だれかがたわむれに地蔵尊にお着せ申したのだろうが、あまりによくお似合いなので、ついそのままになったときいている」
「だんな、いい加減にしてくだせえ。あっしゃア腹をたててるんだ」
　と、とうとう仙太が声をあらくした。
「鈴はどうしたんです。え、だんな。あっしをごまかそうたって、そうはいきませんぜ」
「だから、あれを見ろといっているではないか。鈴はあすこにある」
　と、三四郎はすました顔で、石仏の背にかかっている花笠を指さした。
　三四郎は、うやうやしく一礼しながら、地蔵尊の首にかけてある花笠をとりはずした。
「この三月の三社祭りに、おきんが手古舞に使

った花笠がこれだそうな。だれのいたずらか、華やかな花笠を石仏に参らせたのが、思いのほかよく似合ってかわいくさえお見うけすると評判がいいままに、ずうっとお首にかけたままになったのだ」

　三四郎が手にとって動かすうちに、ちちち……と鈴のなる音がした。笠の頭に数個の小鈴がとりつけてあるからだ。

「あっ、分かった。そ、その鈴の中に、お美年ちゃんのあの鈴が……」

　と、仙太がかみつくようにいいながら顔をよせてくる。

「そのとおり……大勢出入りする人たちが、だれでも通りしなに拝んでいく地蔵尊だ。花笠も、この鈴も、だれの目にも楽々と映るであろう。目には映っても、だれも気がつかない。いや、あまりやすやすと目に映って見慣れすぎているから、まさかと思うのだな。あの大事な品を露天にひとしいこんなところへ……わしだってそう思うな。お美年さんが、大事な品ゆえしばらくお地蔵さまへおあずかりいただきます——とそういいながら、にっこり笑ってこの笠へ小鈴をくくりつけるのをそばで見ながら、その頭のよさと度胸のよさに、こりゃア大した娘さんだと、わしは思わず舌をまいたなア。そら、仙太、これが、あの時の鈴だ……」

　と、三四郎が一個の鈴をもぎとった。

「そ、そ、それだ。だんな、その鈴をあっしにおくんなさい」

「分かるか？　見えるか？　ここに花という文字が彫ってある。間違いなかろう」

「う、うん、それにちげえねえ。だんな、それをくだせえ。返しておくんなせえ」

　と、仙太は血相かえてつめよってくる。

「やらんとはいわぬ。なぜ、急にこの小鈴がそう必要になったのか、その理由を聞きたいな」

「それが聞きてえっておっしゃるのかね？」

「さっき、気になることを申したな。お美年さ

んがここから出ていくとき、小鈴をもっていなかった、うんぬんと申したな。お美年さんはここにはおらんのか？　もしや……なんぞ間違いでもあったのではないか？」

「ふん、聞きてえとおっしゃるなら話しますぜ。そうなんでさ。だんな、その、もしやの口ですよ」

「な、なにッ?!」

　と、三四郎の声が高くなる。きゅっとつり上がった太いまゆの下に、いつもは柔和な微笑をたたえているひとみがぎろりと光った。

「間違いも間違い、とんだ悪党にかどわかされ、行方しれずになってしまったんですよう」

　と、仙太は思わずこみあげてくる悔しさに、まるで三四郎に食ってかかるような調子で一部始終をしゃべりまくった。

「花太郎と約束したんでさア。小鈴を探し出したら、それと引きかえに、きっとお美年ちゃんの行方をおしえてやるってねえ。もうぐずぐずはしていられねえんです。お美年ちゃんがどんな目にあってるやら、考えただけで、あっしゃア目がくらくらしてくるんだ、さあ、文句いわずに、その鈴をけえしてくだせえッ」

「それは一大事だ！」

　と、三四郎がうめくようにいった。

　彼がこんなにも動揺したことは珍しい。顔色が変わっていた。

「仙太、おぬしはみずくさい男だのう。それだけのことがあったなら、なぜとっとと打ちあけて相談してくれぬ。なぜ、こそこそ盗賊のまねなどするのだ？」

「水くせえ？　ふん！」

　何を抜かしゃアがるんだといいたげに、仙太は鼻先で笑った。

「だんなに頭をさげたかアなかったからさ。面をあわせるのも、口をきくのも、へどが出そうにいやだったんですよう」

「わしと顔をあわせるのがいやであっても、こ

とはお美年さんの一大事ではないか」

「そうとも！　お美年ちゃんの一大事だからなんだ。だからこそ、余計にいやなんだ。胸くそがわるいんですよう」

「分からんなア。今朝の仙太兄いはすこぶるごきげん斜めだが……」

「だんな、しらばっくれるのもいい加減にしてくだせえよ。あっしゃア我慢しているんですぜ。むかむかこみあげてくるやつを、やっとこらえているんだ」

「しらばっくれる？　はあ。わしがなにかしらばっくれているか？」

「よしゃアがれッ」

と、仙太はとうとう甲高くわめいた。顔をひきつらせて、怒りにがたがた震えている。

「も、もう、我慢が出来ねえ。おらア言うぜ、わめくぜ。だんな、お前さんはお美年ちゃんの敵だ。このおれの敵なんだ」

「これこれ、敵とはおだやかでないことをいうではないか？」

「おきゃアがれッ。しらばっくれるのもてえげえにしてくれてんだ。花太郎地蔵の地下道で、やみにまぎれて勘兵衛親分を刺し殺したのはだれなんだ？　だれなんだよう、だんな。さあ、返事をしなッ。親分を手にかけやアがったのは、どこのどいつなんだッ?!」

「あっ！」

と、口の中で小さく叫びながら、三四郎は半ば唖然としながら、仙太の顔をまじまじと凝視しているばかりだった。

「さあ、だれだ。親分を殺しゃアがったのはどこのどいつだ？　だんな、さあ、そいつの名前を聞かせてくんなせえ」

「ふむ！　それはまことか？　親分は人手にかかってはてられたのか？　ああ、知らなんだ……」

「けっ？　ここまで言わせて、まだしらを切ろうっていうのかい？　侍らしくもねえ男だ。こ

う、だんな。あっしゃア親分のすぐそばにいたんだぜ。おれが証人だッ。おれが見ていたんだッ。さあ、はっきりといってやろう。下手人はお前さんだよ。加賀美三四郎っていう浪人者だよッ」

「これ、仙太、静かにしろ」

「くそッ、おれの地声だいッ！」

「見ていたというのか？　おぬしは、わしが親分を手にかけるのを、しかと見ていたというのか？」

「これが証拠だッ」

と、仙太がぬっとつきつけたのは、すでに血さびのついている一本の小柄であった。

「これに覚えがねえとはいわさねえぞ。地下道の壁へ突きさしただんなの小柄だ。こ、これで、親分は背中からたったひと突きに……。おれア親分を背負ってやみの中を走っていたんだ。すると、うしろから来やアがって、いきなりぐさりッ……と。思うだにぞうっとすらア。むごたらしいことをしやアがる。ひきょうな野郎だッ。え？　だれがやったというんですよ。だんな、いい分がありますかえ？　あの時、親分とおれとだんなのほかに、一体、だれがあすこにいたっていうんですよ。さあ、いい分があるかよッ？」

「……」

「ふん、いえめえ。返事がなるめえ。そうだとも。第一、あの真っ暗な地下道の壁へ、だんながつきたてたこの小柄を、ほかのだれがやすやすと探りとれるっていうんだ？　だまし討ちにしやアがったんだ。そして、ぬけぬけとそしらぬ面アしてやがるんだッ。おいッ、お前さん、覚えがねえとはもういわさねえぞッ」

「はじめてきいた。わしの知らんことだ。しかし、仙太、今いいわけはせん」

と、三四郎は暗然とした表情で腕をくんでいる。

「そうだとも！　いうことがあったら白州で聞

こう」
　仙太はこみあげてくる怒りにわなわな震えながらわめきつづけた。
「ことわっておくがね、だんな。おれのこの懐にある十手がお前さんの眉間をたたき割らねえのは、なにもお前さんが恐ろしいからじゃアねえぜ。義理にからんで鼻じろんでいるんでもねえぜ。おれアお美年ちゃんを待っているんだ。が、せめてもの親分への手向けだと思って、じりじりするのをやっとこらえて我慢してるんだ。おい、三四郎さん。お前さんも侍のはしくれなら、いまさらじたばた逃げかくれはしめえなッ」
「逃げもかくれもせぬ。もし、このわしに罪があるのなら、いつなんどきでもおとなしくなわをうける」
「よしッ、いったなッ。その一言を忘れなさんなよッ。さあ、これで何もかも分かったろう。分かったら、その小鈴をけえしてくれ」
「かえせというなら返しもしよう。しかし、仙太兄い、むだであろうな」
「むだだと？　何がッ？」
「花太郎は小鈴をとりあげても、お美年さんの行方は教えてくれはしまい」
「な、なんだとッ？」
「彼はお美年さんの行方を知っているわけがないから、教えたくとも不可能だというのだ」
「なぜ、なぜ、なぜだッ？　なぜ、野郎がそれを知っているわけがないのだ？」
「考えてもみい。もし、彼がお美年さんの行方をしっているならば、なにも仙太兄いをそそのかしてこの離れを家探しさせたり、わしの懐までねらわせる、そのような迂遠なことはよもすまい。自らお美年さんをとらえて尋問し、小鈴のありかを吐かせるのが一番てっとりばやいことをよく知っているはずだからな。つまり、彼が仙太兄いをそそのかし、そんな見えすいた交

換条件など持ち出すというのは、彼がお美年さんの行方さえ分からず、しかもぐずぐずはしておられんというあせりがあってうろたえたものに違いないのだ。うかうかその手に乗ると、いい笑い者にされそうだのう」
「いらねえお節介だ。指図はうけねえよ。さあ、だんな、いいからその小鈴をこっちへくだせえ。それでいいんだ。それさえくれりゃア、今日のところは文句をいわずに帰っていくといってるんだ。黙って渡しなせえ」
　三四郎は、いわれるとおり、黙って小鈴をさしだした。
　ひったくるように受けとった仙太は、そのままきびすをかえすと、つんのめるような勢いで走りさっていった。
「舟友」から通りを斜め向こうへへだてた辺りに「おととい屋」というとぼけた名前の菜飯屋があった。
　この野郎、おととい来やアがれッ――というけんか文句があるが、その家の亭主が気っぷの荒い男で、だれをつかまえても気に入らないことがあるとすぐ、おととい来やアがれを連発するので、いつの間にかそれが屋号になったというのだが、どうもあてにはならない。
　一説には、隅田川をはさんで川向こうに、例の言問というところがあるので、それをもじって、おととい屋としゃれたんだなどともいわれている。
　吉原通いの表通りは、大川を舟で今戸まで上り、そこで舟からあがって、あとは山谷堀の土手伝いに大門へくりこんでいくという寸法だ。
　だから、今戸は吉原通いの重要なターミナルともいうべきところで、自然「おととい屋」もはやったらしい。
　二階もあるが、店先の土間にはちょっと腰かけて手軽に一杯という設備も出来ている。
　仙太は今朝方からこの店に入りきりだった。
　もっとも、そうそう飲みつづける銭もないか

ら、一本の銚子をだらだらとのばせるだけ引きのばして気長にのみつづけ、合間には女中をからかったり、ねむそうな目つきをしてうっとり壁によりかかったりしている。

店でも仙太の素姓は薄々しってるし、その上、大事な顧客の「舟友」のかかり人だと思うから、いやな顔も出来ないで黙っている。

仙太は、今朝、三四郎からお美年の小鈴をひったくって駆け出すと、何よりも先に舟友の店先の袖塀へ「花」とかいた紙を張りつけた。

花太郎との約束があったからだ。小鈴を手に入れたら舟友の店先へ花の張り紙をしろ。それと引きかえに、きっとお美年をかえしてやると、花太郎はあんなにもきっぱりと断言したではないか。

三四郎は、それは危ない、もし花太郎がお美年の居どころをしっているくらいなら、やつのことだから、お美年を責めて直接小鈴のありかをつきとめるだろう。なにも手間暇かけて仙太とそんな危ない取り引きをするはずがないというのである。

いわれてみれば、なるほどそうとも思えるが、畜生ッ、三四郎のいうことなんぞだれが信用してたまるもんか！　と、仙太はむきになっていた。

早くお美年ちゃんをつれもどして、その手に三四郎をひっくくらせるんだと、そのことばかりいちずに思いつめている。

よしんば、三四郎の予言があたったにしたところで、だれがむざむざ花太郎にしてやられるようなへまをやるもんか。それならそれで、それをきっかけに花太郎にかみついてやるんだと、ただではおかない腹をきめている。

ただ、顔を見られることを極度に恐れている花太郎が、あの張り紙を見てから自分とどういう手段で連絡をとるのか、それが興味深かった。

仙太が朝からここにとぐろを巻いているのは、斜め向こうに見える舟友の塀を見張っているためだった。塀には、普通の人にはちょっと気がつかないほど小さく、花の張り紙がはってある。

あれを見に来てから、野郎め、どういう具合いにおれのところへ連絡に来るだろうか？

「あら、仙太さんじゃアありませんか」

と、通りがかりの女がのれん越しにちらっと中をのぞいた。

「いいところであったわ。ちょっと……とてもいい話。ね、出ていらっしゃいよ」

呼んでいるのはお徳であった。

「やあ、お徳さん。珍しいですねえ。今日はお宿下がりですかい？」

と、表へ出てきながらも仙太はきょろきょろあたりへ目を配っている。

「ええ、久しぶりにお暇が出ましてね。今、伯父さんとこへよってきたとこなの」

「伯父さん？　ああ、あの唐人飴屋ねえ」

と、仙太はいやな顔をした。こんな器量よしの愛想のいいお徳の伯父に、なぜあんなまずい面のなにか薄っ気味悪いところのある野郎がついてるんだろうと、日ごろからいまいましく思っている。

「お徳さん、その節ア、いろいろとすんませんでした。お美年ちゃんのことでは、あんたもとんだとばっちりを食って、えらい迷惑をなすったそうですってねえ。随分御親切にしてくださいましたのにねえ」

と、なんにもしらないから仙太がペコペコ頭をさげれば、お徳はお徳で、

「いいの。そんなこと、お互いさまですもの。それより、まだお美年ちゃんの行方がしれないんですってね。わたし、心配で心配で、時々思い出しちゃア泣きたくなることさえあるんですよ」

と、ぬけぬけと調子のいいことをいう。

「ところで、お徳さん。なにかあっしに御用でも？」

「ちょいと、仙さん……」
お徳は、肩先で仙太の胸を軽く小突きながら、いたずらっぽくにやっと目で笑った。
「あんたって人、見かけによらないすみにおけない人だったのねえ。驚いた！　あんなきれいな娘を夢中にさせちゃうなんて……」
「え、なんですって？」
「ほほほ……あんなしらばっくれようをするんだから、憎らしいったらありゃしません」
「だから、そりゃなんの話だって聞いているんでさ」
「ついこの先の角で、その娘さんに声をかけられてねえ」
「娘さんて……だれです？」
「さあ、だれかしら？　年のころは十八、九、色の白い、食べちゃいたくなるようなかわいい人……失礼ですけど、以前舟友さんにいらしたお徳さんて方じゃアございませんかって聞くんですよ。ええ、そのお徳ですけれどって答えると、それでしたらすみませんけれど、ちょっと頼まれてはいただけますまいか。あの舟友さんにいらっしゃる仙太さんていうお人のところへ、あのう、この文を……ってねえ、かわいい顔をぽうっとさせながらおずおずさし出すじゃアありませんか、この文を……」
「へえ？」
「へえじゃアありませんよ。そらっとぼけて……恥ずかしくてたまらないんでしょう、これを渡すと一緒に、ぱっと顔をかくして逃げていってしまったんですよ。本当に、初々しくて、かわいいったらありゃアしません。でも……ああ、ああ、これでわたしはすっかり失恋よ。仙さんにとうからおかぼれしてたんだけど……」
ただじゃアすみませんよ、よくって！　と、にっと笑いながら、お徳はさっさと舟友の方へいってしまった。
残された仙太は、しばらくぽかんとしながら、渡されたやの字結びの文へ目をやっていたが、

きれいな女の子からの文とあっては、まんざら悪い気持ちはしなかったのであろう。
なにかいそいそとしながらあわててそれを開いたが、とたん、その顔がぎょっとこわばった。
――今日の暮れ六ツきっかり。待乳山の表参道。
と書きながして、その下に花とたった一文字名前がかいてある。いわずと知れた花太郎からの通告であった。
待乳山は舟友からすぐ鼻の先にある。
山ともいえないほんのしるしのような丘だが、頂上に江戸一番といわれた聖天宮があるのと、隅田川越しの向島一帯の眺望のすばらしさで名前が高かった。
今戸橋をこえてすぐ向こうにある慶養寺の鐘が暮れ六ツをうちはじめた。
仙太は花太郎から指示されたとおり聖天宮の表門の前に立っている。森に囲まれた参道は、ここから曲がりくねった石段で頂上の社殿の前までつづいている。
仙太は緊張していた。
花太郎から連絡があったということは、やつが約束を忠実に守ろうとしている何よりの証拠ではないか。
お尋ねものの凶賊が、みすみす目の前に姿を現すというのに、御用の声もかけないで向こうのいうなりに取り引きに応じるのも考えてみると実に業腹だが、お美年ちゃんの命にはかえられねえと、じっとこらえてあきらめている。
それにしても、本当に野郎、ここへ来るだろうか？
舟友という名前の聞こえた岡っ引きの住まいから目と鼻のこんなところを待ちあわせの場所にえらんだ大胆不敵さが、仙太に舌をまかせていた。
時をつげる鐘の音は、そろそろ終わり近くを数えていた。
参詣の人がちらりほらりとそばをすぎてい

く。
はて？　文には表参道とあったっけなア。この門前は、いわば参道のほんのとっつきだ。ことによったら、野郎、もっと奥の方で待ってるんじゃアねえだろうか？
　仙太がひょいとそんなことを疑って歩きだしたのは、最後の鐘の音が長く余韻をひいて空の向こうへ消えていこうとしている時であった。
　社殿へ向かって石殿を上りかける。
と――その時、背後の方になにか風のようなものがすうっと寄ってくるのを感じた。
「声を立てるな！」
と、とっさに、どすのきいた含み声が、のしかかるように頭上からふってきた。
　ぞうっと冷水をあびたような戦慄を感じたのは、こそとも音をたてずに背後へ迫ってきたその気味わるい狡猾さが、あの花太郎地蔵の地下道で勘兵衛を刺したくせ者の挙動をふっと連想させたからであった。
「いいか、うしろを見るな。うしろを見るんじゃねえぞ」
と、その声がいった。
　わき腹の辺りへ着物を通してちくっとかすかな痛みを感じたのは、匕首の切っ先がつきつけられているらしい。
「よしッ。おとなしくしてりゃア何もしやしねえ」
「何をぬかしゃアがる。したけりゃどうとでもしてみやアがれ。その代わり、銀の小鈴は金輪際てめえの手へ渡りゃアしねえぞッ」
と、仙太も負けてはいなかった。一声わめけば舟友がすぐ鼻先だからという気強さがあったからである。
「むだ口をきくな。まっすぐ歩け。歩きながら用談をするんだ」
と、うしろのひじが仙太の横腹を小突く。
　すれ違った参詣人も二人を怪しむ様子はなく行きすぎてしまった。

「まっすぐ前を向いて、とまらず歩け。歩きながら話すんだ」
と、背後のふくみ声が威嚇するようにいいつづける。
　その度にわき腹へちくりちくりとさわる匕首の切っ先が、なんとしても薄気味わるかった。一つ間違ったら何をしでかすか分からない相手なのだから……。
「てめえ、たしかに小鈴を手に入れたんだな？」
「手に入れたからこそ、約束どおりこうしてお前を呼び出したんじゃねえか」
「舟友の離れにあったのか？」
「ああ、そうだよ。それがどうしたんだ？」
「あすこはおれも留守をねらってとうに家探ししたことがあるんだ。あすこには絶対かくしてねえとにらんでいたんだが……本当だろうなア、仙太。ぺてんにかけるような妙なまねしやアがると、てめえはもとよりお美年までただじゃアおかねえぞッ！」
「そうだろう、お前なんぞにゃア見つかるはずはねえんだ。お前なんざ、どすをきかせて偉そうな口こそきくが、どうせ頭の回らねえ小悪党よ」
「ほほう。兄い、御大層もねえ口をきくじゃアねえか」
「御大層か御大層でねえか、悔しかったら聞いてみろ。話はこの三月の三社祭りにはじまるんだ。舟友のお内儀が、手古舞の音頭をとったいきな姿を見せてえよう。祭りが終わってから、その花笠を、離れの庭の片すみに立ってござるぬれ仏、地蔵さんの首にひょいとかけてからというもなア、朝晩だれだってそば通るたびに見ほれてしまわアな。その花笠の数ある鈴の中へ、まさかあの大事な鈴が結びつけてあるなんてだれ一人思うめえ。お美年ちゃんのその度胸のよさ、頭のよさ。そこらにいる小悪党よりちょいとばかり違っていたというものよ。ざまアみやがれッ」

と、仙太は三四郎にやられたとおりをやりかえして、とんだところでいい気持ちになっている。

「そうかい、仙太。なるほど、そう聞いて、てめえの手に小鈴の入ったことが信じられてきたぜ。しかし、兄い、そいつアてめえの手柄じゃなさそうだな。だれかの知恵がへえってる。うむ、そうだ！　あの野郎がもどってきたな。三四郎が帰ってきたんだな⁈」

「そんなことはどうでもいいだろう。え？　取り引きの方はどうするんだ？　おれア気がみじけえんだぜ」

「よし、取り引きは約束どおりだ」

「お美年ちゃんをしっかりとこの手へけえすまで、鈴は金輪際渡さねえからそう思え」

階段をのぼりつめ、聖天宮本殿のうしろへきていた。

狭いねこの額大の境内をとりまいてこんもりと森が茂り、その向こうに隅田川の流れがゆうゆうと姿を見せている。森も川面（かわも）もすでに薄紫の夕もやにとざされていた。

「明けの七ツ（四時）上野池の端の弁天島で会おう。お美年は駕籠（かご）へのせてつれていく」

「よし、明けの七ツ、池の端だな」

「一人と一人だ。妙なまねしたらお美年の命がねえぞ」

「いいとも。しっかと約束したぜ」

「さあ、まっすぐ前を見て十歩あるくんだ。うしろを見るなよッ」

仙太はいわれるとおり十歩あるいた。

ふりむくと、森をくぐって、のめるような急傾斜でうねっている裏道を、飛ぶようにもやの中へ消えていく男のうしろ姿をちらっと見ただけであった。

仙太が待乳山の境内で花太郎のやってくるのを首を長くして待っている同じころ、すぐ目と鼻の「舟友」の離れでは、お徳が三四郎のそば

へぺったり張りついていた。

「そんなわけで、お美年さんは行方しれずになってしまいでしょう。わたしもうどんなに心配したかしれやしません。気が気じゃなかったんです。それを、三四郎さまときたら、のんきにずうっとここを留守にしていらしたんですってねえ。やっとゆうべお帰りになったんですって？　かくしてもだめ。わたし、おきんさんにちゃんと聞いてきたんですから……」

と、ねこなで声でいいながら、体をくずして三四郎の肩へしなだれかかってくる。

「ねえ、どこへ行っていらっしゃいましたの、そんなに長いこと？　さぞかしお楽しみだったでしょうねえ。ねえ、どこへ行ってらしたんですってば⁈」

「わしはなんにもしらんのだよ、お徳さん。今もいったとおり、わしはお美年さんが金森家へ行ったことさえしらなかったのだ」

「そうらごらんなさいまし。あれからずっと留守にしてらっしたんじゃありませんか。よくよくのことですよ。きっと、いい人のところでしょう。白状なさい、憎らしい！」

「お徳さんはやきもちやきで困るのう。そんなんではないといっているのに……」

「それならそれで、さっさと白状なさればいいではありませんか」

「これではまるでお白州でお取り調べをうけているようだ」

「そうですとも！　どうせわたしはやきもちやきですからね。白状させずにはおきませんから……どこのなんて人？　娘さん？　玄人？　きれいな人？」

「ああ、鐘が鳴りだした。もう、暮れ六ツか……日がつまったのう。お徳さん、すまんがそろそろ行灯（あんどん）に灯でも入れてもらおうか……」

「いや！　そんなことおっしゃってごまかそうとなさるんですもの。ああ、分かった！　きっと、そのお相手はお美年さんでしょう？　どさ

くさにまぎれて、お美年さんはお屋敷をぬけ出して、お二人でどこかでこっそり水入らずの楽しい思いをさんざんしていらしたんでしょう？　そうです、きっとそうですよ。まあ、くやしいったらありゃアしない……」
「これこれ、しようがない人だなア。そんなことはないと、あれほどいってるではないか。それでなくて、だれがこのようにお美年さんのことを質問したりするかね？　お美年さんが行方不明になったこともここへもどってからはじめて聞いて、びっくりもし、心配もしているのだ」
「どうせそうでしょう。さぞご心配でしょう。ああ、くやしい！」
「あ、痛ッ！　これ、何をするのだ。ひどいことをするなあ、お徳さんは……」
「だって、三四郎さまはわたしの気持ちをちっとも分かってくださらないんですものね。わたしがどんなに三四郎さまのことを思って心配しているか。三四郎さま、申し上げますが、大変ですよ。お屋敷では、あの晩御用箪笥（ごようだんす）から鈴をぬすみ、お美年さんをつれて逃げたのは三四郎さまの仕業だと思って、今やっきになってあなたさまのことを探しているのですよ」
「ええっ、それは本当か？」
「若殿さまがお船遊びの晩、矢を射かけて危うく源之丞さまのお命をつめようとした下手人が三四郎さまらしいって……」
「どうしてそんなことをいいだしたのか？」
「仙太さんですよ。あの人があなたさまのあとをつけていて、たしかにそれを見たって……そういううわさをまきちらしたんですよ。ねえ、三四郎さま、悪いことは申しません、今のうちに逃げましょう。あたしと一緒に逃げてください！」
と、お徳は三四郎の腕にすがりつく。
「この家の友三親分は太っ腹なお人だから、まだなんにもお話しなさらないかもしれませんけれど、お屋敷へお呼び出しをうけ、三四郎さま

のことでさんざんお調べをうけたんですよ」
「ふうむ、それは知らなかった」
「このままここにいらしたら、舟友さんにもご迷惑がかかるでしょうし、第一、いつ金森様から追っ手が向かうかもしれません。ねえ、悪いことは申しません。逃げてくださいまし。逃げましょう、三四郎さま。ご一緒に逃げましょう」
「そうか。そう聞いては、たとえ身に覚えのないことでも、もうこれ以上ここにやっかいになっているわけにもいくまい。といって、行くところもないしのう」
「いいえ、行くところぐらいいくらだってあります。三四郎さまさえその気になってくだされば、わたし、どうだって都合します」
「本当か、お徳さん」
「でも、本気になってくださらなくちゃいや！　本気になって、わたしをどこまでもつれていってくださるのでなくてはいやです」
「しかし、そんなことをしたら怒る人があるだろう？　だれか怖い顔をして……」
「まあ、だれのことをおっしゃってるんです？」
と、お徳はぎくっとしたように、さぐるような目でちらっと三四郎を見上げた。
「だれってことはないが、お徳さんほどのきれいな人を、世間でほうっておくわけがあるまい。とうにいい人が出来ているだろう？」
「ほほほ……あんなこと！　こんなおかめをだれも相手にしてくれやアしませんよ」
「お徳さんがおかめなら、この世に美人などというものは一人もおらんことになるな」
「まあ、お人がわるい。あんなことといっておからかいになる……」
「本気だよ、お徳さん。わしは本気でそう思っているのだ」
「ねえ、三四郎さま、本気でわたしと逃げてくださるおつもりなら、わたし、どんな苦労したってかまやしません」
「しかし、わしのようなやせ浪人には、女房を

養うような力がないのでなア」
「そんなこと……あなたさまお一人くらい、わたし、どんなことしたって立派にお養いします。ねえ、本気？　三四郎さま、本気でそれおっしゃいますの？」
と、お徳は冗談でない目つきで、じっと三四郎を見つめた。
「本気だとも……」
「では、あたし、本気であてにしますよ」
「うむ、わしも本気でそれを考える」
と、三四郎はまじめくさっていいながら、なにげなくふっと思い出したようにいった。
「そうそう、お徳さんの田舎は、美濃の郡上だったそうだのう？」
「ええ。それがどうかしましたか？」
「いや、ことによったら、そこへ逃げていって、二人くらいの暮らしは立つだろうなアと思ったところだ」
「そうなんです。あすこへいけば知りあいだってあるし……」
「それに、兄さんが一人いたはずだのう。たしか平六とかいった？」
「ええっ、そ、そんなこと……」
と、お徳はぎょっとしたように急に顔色を変えた。
「だ、だれにお聞きになったのです？」
「あれ、いつぞやお徳さんがわたしに話したことがあるではないか？」
「そうかしら？　そんなことお話ししたことありましたかしら？」
「その平六さんは、今どこにいるのかね？」
と、三四郎は何食わぬ顔でふっとたずねた。
「三四郎さま、どうしてそんなことお聞きになるのです？　兄のことなんかどうだっていいではありませんか」
お徳は急に興ざめた顔つきで、ついとそっぽを向く。
「そうではないさ。これからお徳さんとわしと

がどうかなれば、いろいろ兄さんのお世話にもなるであろうし……」
「そんなたよりになるような兄ならいいんですけれど……」
「一度、会ってごあいさつしたいのう」
「およしなさいまし、そんなこと……」
「どこにいるのか？　住まいはどちらかな？」
と、三四郎はそらとぼけながらなにげなくきく。
お美年をかどわかした平六の行方をもしさぐり出すあてがあるとすれば、それはお徳のほかはないと思っている。だから、うわべはそらとぼけているが、内心真剣であった。
「のう、お徳さん。一度、兄さんに会わしてくれぬか。それでないと、本気でお徳さんを口説くのが気がひける」
「いいじゃありませんか。兄は兄、わたしはわたしですもの。ねえ、三四郎さま、あなたがそれほどおっしゃってくださるなら、わたし、明日にもお屋敷からお暇をいただきます。なんだか、お美年さんのこと以来、わたしも御奉公がしづらいんです。皆からにらまれているようで……ねえ、本気でそうしていいんでしょうね」
と、ひざへしなだれかかった手をそのまま三四郎の指にからませてきゅっと力をこめてにぎりしめる。
「しかし、わしとしては、兄さんに会ってからでないと気がすまんのだが……」
「堅苦しいことばっかり……いいえ、その実、それが逃げ口上なんでございましょう。分かってます。わたしをおもちゃにしてらっしゃるんです」
「そういうお徳さんこそおかしいではないか。なぜ、兄さんのことを話してくれんのだ。実があるなら、話をそらさないで、住まいでも教えてくれそうなものだのに……」
「お恥ずかしいことですけど、兄はしようのない無頼漢なんですよ。居どころなんかも分かり

ゃアしません」
「しかし、日ごろ立ち回る先とか、懇意な友人とか……何か会うあてはあるであろう」
「それがねえ」
「お徳さん兄妹は、もと郡上の生まれで、小さいころから江戸に出てきて……そんな縁から、お徳さんも郡上の殿様の金森家へ奉公したいと、いつかわしに話したのう」
「そんなことお話ししたかしら。覚えていないんですよ」
「兄さんもたしか昔金森家のなんとかという人のところに奉公かなんかしていたんだそうだのう」
「……」
瞬間、お徳の顔がぎょっとこわばった。
三四郎が勘で放った矢が、どうやら的を射抜いたらしい。
「そうそう、たしか納戸役の木暮五郎蔵とかいう人だったかなア」
と、三四郎が追いうちをかける。
かまをかけられたともしらず、
「三、三四郎さまッ、そんなこと、だれがいいました?!」
と、思わずお徳の形相が変わった。
「三四郎さま、だれが兄のことをお話ししたんでございます? ねえ、だれからお聞きになりました?!」
と、つめよってくるお徳のひとみには、疑惑と警戒の色がにわかに濃くなっていた。
「だれからって、お徳さんのほかにだれがそのようなこと話してくれるかね?」
「いいえ、わたし、お話ししたことはありません。ありませんとも、絶対に!」
「おかしいのう。お徳さんから聞かないとすると、わしが知っているわけがないではないか」
三四郎は他意なさそうににこにこ笑っている。
「そうおっしゃればそうですけれど……でも、

わたし、決してそんなことお話しした覚えありませんもの」
「話してくれたのを忘れたのではないか?」
「いいえ。だって、三四郎さま、兄は……そんな木暮なんかという金森さまの御家中の方へ御奉公したことなんかないのですよ」
「いや、たしかにそう聞いたがのう。それでなくて、わしが金森家だの、木暮なんとかだの、そんな名前まで記憶しているはずがないのだがなア」
「兄とわたしは二十も年が違います。兄が江戸へ出てきましたころは、わたしはまだ生まれたか生まれないかのころですから、くわしいことは知りはしませんけれど、でも、木暮なんとか様はもとよりのこと、金森様へ御奉公なんかしたことのないことだけはたしかなんですよ。そりゃア、兄がどこかの御家中に中間奉公をしていたことは本当ですから……三四郎さま、きっとそのことをなにかお聞き違えになったのではございませんか? そうですよ、きっと、そうでございますよ」
「そうかなア、聞き違えだったかなア」
「そうですとも! 兄が金森様御関係の方に御奉公したなんて、そんなことないことだけは絶対間違いありません」
と、お徳がむきになればなるほど、三四郎は思いもかけないなりゆきに、おや? と内心すっかりびっくりしていた。
もしやと思った直感から山をかけてみたのが、あまりにうまく当たりすぎた。お徳が否定すればするほど、山があたったという印象が強くなるばかりである。
つまり、お徳の兄の平六という男が、かつて金森家の納戸役木暮五郎蔵——あの花夜叉の地下穴で白骨になっていた人物のもとに中間奉公をしていたらしいことは、どうやら動かしがたい事実のようである。
一体、このことは何を意味しているのであろ

うか？
「あら、すっかり暗くなってしまって……今、お灯をおつけしますわ」
　と、立ち上がりかけたお徳が、ひょいと窓の方を見た拍子に、ぎくっとしたように目をみはった。
「あら、だれかしら?!」
「どうしたんだね、お徳さん？」
「今、庭の向こうの植え込みの中に人影が……わたしが見た拍子に、あわてて逃げていったんです」
「なんだ、そんなことか。それなら心配するには及ばんさ。世間にはやきもちやきは多いからのう。お徳さんとわしがあまり仲がよすぎるから気がもめたのであろう」
　と、三四郎は笑ったが、
「そうかしら？　でも、いやねえ……」
　と、お徳は急にうかない顔になった。
　お徳がうかないのは、そのことよりも、三四郎がなぜ兄平六の過去をあんなによく知ってるのか、それが気がかりになったらしい。
　お美年の行方をつきとめるには、是非とも平六の居どころを聞き出さねばならない。三四郎はなんとかしてお徳の口を割らせようとしたが、お徳の方ではもうすっかり警戒してしまって話にのってこなかった。
　行灯に灯を入れると、
「ああ、もうお屋敷へもどらねばなりません」
　と、あげかけた腰をそのまま、なに思ったか三四郎の耳へついと口をよせ、意味ありげな調子でささやきかけた。
「お屋敷っていえば、三四郎さま、御存じですの、いよいよ近々に、お鶴さまが金森さまへお輿入れあそばしますことを……」
「はあ」
　と、三四郎はとぼけた顔をする。
「お鶴さまというのはだれのことかなア？」
「何をしらばっくれていらっしゃるんですよ。

きまってるじゃアございませんか、榊原さまのお姫さまですのに……」
「ああ、あの金森家の若殿とお許婚でいらっしゃるお方か？　それはめでたいな」
「本当に、近々御祝言ってことにお話がすすんでいるんでございますよ。いいんですか、そんなことおっしゃってて……」
「いいにも悪いにも、わしに関係のないことだからなア」
「うそおっしゃい！」
　お徳はにやっと笑った。
「ちゃんと知ってますよ、先夜、お鶴さまがこっそりこのお離れへたずねていらしたことを……だめだめ！　お鶴さまは、三四郎さまのおひざにとりすがって、かき口説いていらしたんですってねえ」
「これこれ、冗談も休み休みいいなさい。知らんなア、わしはそのようなこと……」
「そんな風におかくしになるから、よけい憎らしいんです。ちゃんともう、わたし、たしかな筋のうわさを聞いて知ってしまっているのに……」
「だれから聞いたうわさかしらんが、そんな御身分のある姫君が、こんなやせ浪人を相手にするはずがないではないか」
「ないはずのことが現に起こってるからふしぎだっていってるんですよ。ねえ、白状してしまいなさいッ」
「またやくのか、お徳さんは？」
「あら、憎らしい、にやにや思い出し笑いなんかして……白状なさいってば！」
「白状するもしないも、お鶴さまが金森家へとつがれてしまうなら、もう何もいうことはないではないか」
「よろしゅうございます。そんな風にみずくさいんですからね。さっきわたしとの駆け落ちの話なんかも、どうせ口から出まかせのうれしがらせなんでございましょうよ。覚えていらっし

ゃいましッ」
　にらみながら、三四郎の腕のあたりでもきゅっとつねったらしい。
「おっ、ひどいことをする」
「ほほほ、いい気味」
　と、はすっぱに笑いながら、お徳はそのまま離れから出ていった。
　三四郎は急に真顔になって目をとじた。目を閉じながら、じいっと澄ました耳が庭に向いている。さっきからその庭前にひそんでうごめいている何者かの気配があったからだ。
　お徳の足音が遠のくにつれて、その気配も同時にあとを追って動き出したらしい。
　三四郎ものっそり立ち上がった。あとをつけていく気らしい。
　舟友をぬけ出したお徳は、そのまま、とっぷりと暮れはてた町筋を、人目を忍ぶようなひっそりした足どりで歩きはじめた。
　いつの間にか、頭巾で頭から顔まですっぽり包んでいる。
　三四郎はかなり間をおいてつけていく。その三四郎とお徳の中間に、もう一人別の人影がはさまっていた。先刻から離れの庭先に身をひそませていたその男であった。
　お美年の行方をつきとめるには、どうしてもお徳に口を割らせるか、あるいはその行動を徹底的に追及するかして、兄平六の所在をさぐり出すほかに手段はない。
　しかも、お美年の安否を思うと一刻もぐずぐずしてはいられない場合だし、状況次第ではちっとは手荒な非常手段にも訴えねばならないと、三四郎の覚悟はとうからきまっていたが、折も折、そのお徳を尾行する別の人物が出現した。
　さっきから庭に身をひそませていた気配から察しても、また今お徳を尾行していくそぶりから考えても、そやつがなにかよくよく重大な目的をもってお徳をねらっていることが分かる。

「何者だろう？」
「おとどい屋」という例の菜飯屋の前を通りすぎた。
　すると、お徳をつけていく前方の男がつとその店先へ滑りよって、店の中へなにやら合図した。
　そこで網をはって待ちかまえていた連中があったらしい。五つ六つ、侍の影が吐き出されるように戸口から出てきて、そのまま尾行の仲間に加わった。
　彼らがよくよく気負い立っていることは、そのきびきびした身ごなしでもそれと知れた。それに、極めて慎重な用心ぶかい尾行ぶりであった。
　お徳は何も気がつかない。
　馬道を突っ切って浅草寺の裏手を上野の方角に向かって抜けた。
　その辺は本願寺を中心として一面に寺院が塀をつらねたいわゆる寺町とよばれる辺りだ。
　どこへ行くのか、お徳はその寺の間をあちこち抜けていく。
　と——
　もうすぐ車坂の表通りへ出ようとする辺りに、寺の土塀と土塀にはさまれて「駿河屋」というそで看板が明々とともっているのが見えた。
　昼間は寺参りの人が目当て、夜は夜で近所の寺男などがちょっと一杯ひっかけにくるという、よくこうしたところに見かけるありふれた小さなわのれんの店である。
　お徳は、ちょっとあたりへ目を配ってから、すうっと店の中へ姿を消した。
　尾行していた侍たちにさっと緊張した気配がみなぎった。そで看板を見つめながら足をとめてしきりになにか耳語していたと思うと、手に手に黒布をとり出し、素早く顔を包んだ。
　刀の柄につばをふきかけ、あるいは衣類のすそをぐいとはしょりあげている者もある。

「せくなよッ。獲物は網にかかっているのだ。じっくりと待てッ」
と、一声鋭く制したのが三四郎の耳にまで聞こえてきた。
聞き覚えのある声であった。
――はて、だれだろう？
と、小首をひねっている三四郎の目の前で、その数人の侍たちは足早に四方へ散ってやみの中へ身をひそませてしまった。

駿河屋の店先を奥へ通り抜けると小座敷が一つ二つある。
「お徳、おそかったじゃねえか」
「あら、そうかしら？」
「ほれた相手だ。とんだいい折だと思やアがって、あの野郎とたんといちゃついていやアがったのだろう？」
「いやだねえ。顔を見る早々からいやみかい。仙太と待乳山で大事な話をしている間、じゃまされないように三四郎を舟友の離れへひきとめておいてくれって、そう頼んだのはお前さんじゃアないか」
と、座敷へ入ってきたお徳は、頭巾をとりながらぺたりと座った。
手酌でちびちびやっていた男は、大店の手代らしく、さも堅気そうに作ってはいるが、その実、龍太郎と呼ばれ、花太郎と名乗るあの若者であった。
「そういうお前さんこそ、今度は一体、何をたくらんでおいでなのさ。え？ 仙太なんか呼びよせて、一体どんな用があったんだね？ このごろは、わたしをあごで使いこそすれ、何も話しちゃアくれないじゃないか」
「てめえの知ったことじゃアねえ。黙っていわれたとおりすりゃアいいんだ」
「そりゃア、どうせここまできてしまった腐れ縁だもの、わたしゃお前さん次第。お前さんのしたいようにするがいいさ。でも、なんだか少

し足元が危なくなってきたんじゃないのかい。早いとこなんとか片をつけて手をひいてしまわないと、とんだことになるんじゃないのかえ？」
「だから急いでいるんだ。もうぐずぐずはしていられねえ」
と、龍太郎はぬっとお徳の方へ杯をさす。
「お徳、三四郎とお鶴さまのことは分かったか？ お鶴さまがこっそり舟友へたずねてきたっていう聞きこみ、ありゃア間違いじゃアなかったのか？」
「本当だよ。今日もそれとなく当たってみたけれど、おきんがちらっと口をすべらせてね。三四郎はしらをきっているけれど、以前あの男が榊原家のかかり人になっていて、お鶴さまとはほれあった仲らしいということは、もう間違いないさ」
「どうもあいつはただのねずみじゃアねえととうからにらんではいたが、それが事実とすると、野郎、金森家の秘密にもよくよくくせえ関係のあるやつだぞ」
「そうなんだよ。あんなのほほんとした顔をしているけれど、とんだ食わせ者かもしれやアしない。何か薄気味わるい男だよ。今日だって、あたしゃアぎょっとさせられてねえ」
「なに？ 何がどうしたと？」
「いいえね、三四郎が変なことを聞きたがるのさ。あたしの兄の……そら、あの平六のことさ。平六が今どこにいるかと、そりゃアしつっこく聞くんだよ」
「……」
龍太郎が冷たい目つきでじろっとお徳を見つめた。
「龍さん、あんた、何かあたしにかくしてやアしないのかい？ 兄さんに何かあったんじゃアないの」
「お徳ッ、野郎は平六のことについてもっと何かいったか？」
「ああ。あの男は、いろいろしってるんだよ。

兄さんが以前金森家のお納戸役木暮五郎蔵のところへ奉公していただろうと、ずばりといわれた時には思わずぎょっとしてしまったよ」
「な、なにッ?!」
と、思わず叫んだ龍太郎の顔色はみるみる変わっていく。
「あれほど堅く口止めしておいたのに、お徳、てめえ、よもやつまらねえことをしゃべりゃアしねえだろうな?!」
じろっとにらんだ龍太郎の目は、ぞうっとするほど殺気立っていた。
「当たりまえじゃアないか。兄さんが木暮五郎蔵に奉公していたろうと三四郎に聞かれた時にぎょっとしたくらいだもの」
「それなら、なぜ野郎がそのことをしってるんだ? そのことは、てめえと、平六と、このおれの三人しかしらねえ秘密のはずだ」
「だからさ、ふしぎでならないっていってるんだよ。あたしと平六が郡上(ぐじょう)の生まれだってことくらい、しゃべったことはあるかもしれないけれど……」
「なにッ?!」
ぐいとのびた龍太郎の指先が、すさまじい力でお徳の手首をつかんだ。
「あ、痛ッ! な、何をするんだよ、乱暴な……」
「てめえ、なぜそんなことをしゃべった? なんの必要があってしゃべったんだ?」
「だって、お前さん、お前さんのいいつけで金森様へ奉公する時、友三や三四郎に口添えを頼むのに口実がないじゃアないか。生まれ故郷の郡上の殿様だから、その金森様に御奉公したいんだって……そのくらいのことしゃべらないじゃア、話がもっともらしくならないじゃアないか。ああ、痛いってば!」
「それなら、なぜ今日までそれをおれにかくしていたんだ?」
「別にかくしてたわけじゃアないよ。大したことでもないと思うから、別に気にもとめないで……」

「その分じゃア、何をしゃべっているかしれたものではねえ」
「それっきりだよ。それ以上、絶対に何もしゃべりゃアしない。信じておくれよ」
「三四郎はもっとほかに何かいったか?」
「いいえ、それっきりだよ。あたしゃア、聞かれたことだってしらをきってそっぽを向いたんだよ」
「てめえは三四郎にほれていやアがる。いいか、断っておくが、これからも妙なそぶりをしたり、妙なことをしゃべったりしたら……ただじゃアおかねえぞ」
と、龍太郎は猜疑(さいぎ)の目で冷たくお徳をにらみすえている。
「くどいねえ、分かってるってば! どうせこうなった悪縁だもの、いまさらしようがないとあきらめているよ」
お徳は半ば捨てばちにいった。
その口裏には、いまさらのように龍太郎をうとましく感じる何かがこもっている。それにつれて、ふっと思いだすのは三四郎のことだった。
――なんという男らしい淡泊な、そして気持ちの温かい人なんだろう。あの人、本気であたしと逃げてくれるつもりなのかしら? もし、あれが本当なら……あたしも本気になって、命も体もそっくりあの人にあげてしまうんだけれど……。
「お徳、何を考えているんだ?」
「え? 別に何も考えてやアしないよ」
「ふん、そらっとぼけやアがって。その面に、三四郎という字が書いてあらア」
「いやだねえ、お前さんのやきもちやきも……」
「いまに見ていろ。てめえの目の前で、あの野郎をたたっ切ってやる。生かしちゃおけねえやつだ」

龍太郎は吐き出すようにいって、
「お徳、頼んだものは手に入れたか?」
「三四郎の筆跡かい?」
いいながら、お徳は不安そうに龍太郎を見つめた。
「お前さんが、なんとでもして三四郎の筆跡を集めてこいっていうから、こっそり盗んでもってきたがね。舟友の女中や若い衆たちに頼まれて、あの人が習字の手本に書いてやったというのがうまいことと手に入ったからね。それでいいんだろう?」
「そいつア好都合だ。出してみろ」
「でも、お前さん、それを何に使うんだね? 一体、何を企てているのか、このごろなんにも話してくれないじゃアないか?」
「つべこべいわずに黙って出せッ」
と、龍太郎はお徳の手からそれをひったくるようにとった。
「どうせあたしゃアお前さんのいいなりだけれど、これからどうしたらいいのかい? もう金森様にも長居は出来ないように思うんだけれど……あのどさくさまぎれにお前さんが忍びこんで、御用箪笥の小鈴と一緒にお美年をさらって逃げた時以来、随分うまくやったつもりだけれど、なんだか御老女さまのあたしを見る目つきが変わってきたんだよ。薄々感づかれはじめたんじゃアないかと思うんだけれど……」
「これからいよいよ仕上げがはじまるんだ。てめえはもうひとふんばり金森屋敷に居座っていろ」
「お美年をどうしたのさ? どうせ、お前さんのことだから、ひと思いにずばりとやってしまうか、それとも、どこかへ閉じこめて慰みものにでもしてるんだろうが、それくらい話してくれたっていいじゃアないか」
「それならいうが、お美年は行方しれずだ」
「ええっ。それじゃア逃げられたのかい」
「てめえの兄貴、平六がさらって逃げたんだ」

「へえ?!」
「野郎、このおれを裏切りゃアがった。平六がおれに煮え湯をのませやアがったんだッ」
「へえ……それで分かった! 三四郎がなぜあんなにしつこく兄さんの居どころをきくのか、そのわけがやっと分かった」
「お徳、てめえにもまんざらかかわりのねえことでもねえんだ。よく覚えておけ。平六は生かしちゃおけねえ。今度、会ったが最後、たたっ切ってしまう。三四郎もそうだ」
「ど、どうして? どうしてあの人が……」
「どうもこうもあるものか。裏切った者はもとよりだが、じゃまになるやつは先回りして片付けてしまうのがおれの流儀というものだ」
「花屋の勘兵衛をあの地下道でずばりとやったようにかえ?」
「しっ! めったなことを口にするなッ」
と叱咤した龍太郎は、何を聞いたのか、手にした杯をそのままぬっとのび上がるように腰をうかしながら、障子越しに店先の気配へじろりと目を向けた。
「ど、どうしたんです、お前さん?」
「黙ってろ。口をきくな!」
宙に座った目が、遠いかなたにある何物かをじいっと凝視しているようであった。
「お徳、てめえ、だれかにつけられてきはしやしねえか?」
「そんなこと!」
「だれかこっちをねらっているやつがいる」
「三四郎かしら?」
「いいや、一人じゃねえぞ」
「じゃア、あれかしら? 舟友の離れで三四郎と話している時、庭先にひそんでる妙な人影をちらっと見たけれど……」
「危ねえ。出よう!」
と、龍太郎はすっくと立ち上がった。
「お前さん、裏から出ようじゃないか。裏の路地は出雲寺の裏木戸につきあたるんです。まだ

その木戸は閉まっちゃいないはずだから……」
と、お徳が声を忍ばせていったが、龍太郎はせせら笑った。
「そんなとんまな相手なら心配はいりゃアしねえ。敵はぐるっと取り巻いているらしいや」
「だれだろう？」
「表へ出りゃアすぐ分かる。いやでも面をあわせるぜ。いいか、あくまでしらをきるんだ。たとえやつらに組み伏せられても、知らぬ存ぜぬで押し通すんだぞ」
二人は勘定を払ってなにげなく店先から表へ出た。いつの間にか、お徳は頭巾をかぶり、龍太郎は手ぬぐいのほおかぶりで顔をかくしている。
二、三歩あるくかあるかぬうちに、通りの斜め向こうの暗やみの中から、やみよりも濃い黒い人影が、まるでわき出るようにゆらゆらと姿を現し、二人の行く手をさえぎるようにふさいだ。人通りの多い車坂の表通りへ二人を逃がさぬためらしい。
いきおい、二人のつまさきは寂しい寺町の奥に向かった。
二人が歩くと、背後のその人数もゆっくりとつけてくる。せかずあわてず、丁度、漁夫が網をひいて魚をその中に追いつめていく時の呼吸を思わせるようであった。
二人は路地の角をついと曲がった。もう駿河屋のそで看板も見えず、あたりはただ一面の月明かりの中につづく寺の土塀ばかりであった。
二人の足音と、それから背後につづいている足音と――ほかにはなんの物音もなく森閑たる静けさであった。
と――その時、急に背後の足音が小刻みに早くなり出したと思うと、突然、行く手の物陰からわらわらっと群れをなして出現した人影が、二人を間へ押し包むような形で足早に迫ってきた。
寺の築地と築地にはさまれた狭い一本道、そ

の中間に思わず足をとめた二人を前後から取りかこんだ人数は、いつの間にか十に余る数になっていた。
声一つ立てない。前後とも、二人から一間半の距離をおいてぬうっと立ちどまった。全部、武士である。すでに大刀の鯉口を切っている者があるくらい、彼らは異常に殺気だっていた。
「あらア！　どなたかと思ったら千川様ではいらっしゃいませんか……」
だしぬけにけたたましい嬌声をあげ、ほほほ……と笑ったのはお徳である。
「まあ、いやでございますわ。そんなわるさをあそばして、わたくしを驚かすおつもりなんでございましょう。本当、どんな悪者に出会ったのかと思って、命が縮むくらいぞうっとしましたわ」
侍たちの先頭に立っていたその男――千川万作は、無言のまま氷のように冷たいひとみで二人をじろりじろり見比べている。
「どうなさいましたの、本当に？　わたくし、徳でございますよ。金森様のお中屋敷におります……御老女花村様付きの……ほら、お徳でございますよ。ほほほ……」
と、お徳はことさら威勢よくぱっと頭巾をとってみせたが、万作のぞっとするような目つきは微動さえしなかった。
「その男、ほおかぶりをとれッ！」
低いが威嚇するような声が、切りつけるように龍太郎の真っ向へとんだ。
「わしの声が耳に入らぬか、町人！　ほおかぶりをとれッ！」
と、万作は肩先をゆすって気短に叱咤した。
龍太郎はもみ手をしながらぺこりと頭をさげて、
「なにか粗相でもいたしましたでございましょうか？　お腹立ちでございましたら御勘弁くださいまし。このとおりでございます」
「いいから、ほおかぶりをとって面を見せろと

申しているのだッ」
「それがそのう……お屋敷に御奉公中のお徳さんをそそのかしましてこのようにあいびきいたしておりました段、重々申しわけございませんが、なにぶんにも若気の出来心でございまして……お慈悲でございます、どうぞお見逃しくださいまし」
「うぬッ、ぬけぬけとこやつがッ。つべこべいわずと面を見せろッ」
「まあ、千川さま。まんざらしらない仲でもないではございませんか。粋をきかせてこの場はお見逃しくださいまし。御恩に着ます。ねえ、千川さま……」
と、お徳が言葉をあわせてなれなれしくにっと白い歯を見せて笑う。
「黙れ、雌ぎつねめ！」
万作は冷たくせせら笑った。
「うまうまと金森屋敷へ化けこんで御老女花村さまにとり入ったうぬの化けの皮がとうにはがれているのに気がつかなんだのかッ」
「あら！　随分ひどいことをおっしゃいます。花村さまの御指図をうけ、柴田さま、千川さまのためには骨身を惜しまず働いておりますのに……なにかわたくし悪いところでもございましたかしら？」
「むだだ、やめろッ！　いくらしらじらしく申しても、もう底の底まで割れているのだ。先夜、われらが花太郎の名をかたって金森屋敷を襲った際、裏をかいて小鈴を盗み去った痴れ者のあまりの巧みさが不審ゆえ、以来、うぬの行動を徹底的に洗いあげていたことをまださとらぬかッ。お徳ッ、貴様こそ花太郎と一つ穴のむじなと承知した。もう逃れぬところと覚悟しろッ」
「まあ、驚きました。わたくしが花太郎と一つ穴のむじなでございますって?!」
「よせよ、お徳。むだだとおっしゃってるぜ」
と、だしぬけに口をはさんだ龍太郎の声音は、がらりと変わっていた。

「そこまで洗いあげて、これだけの御人数をお繰り出しになったとあっちゃア、こいつアじたばたしたってむだに違いあるめえ。そこのだんなへ、まったくもって恐れ入りやした。ところで、これから一体どうなりますんで?」
「さすがに花太郎と名乗るくせ者だけのことはある。いい度胸だ」
「へへへ……おほめにあずかりやして、まことにありがとう存じます」
「お徳を泳がせておいて、その糸をたぐっていけば、いずれは貴様に行きあうものと、今夜の機会を手ぐすねひいて待っていた。逃れぬところと覚悟せい」
「恐れ入りやしてございます」
「まず、そのほおかぶりをとれッ。面を見せろ」
「いやだといったら、どうなさるんで?」
「なにッ?!」
「ふふふ、妙な面アするねえ。いやだといったらどうするって聞いてるんだよう」
「うぬッ、こやつがッ！」
と、気負い立った一人がつかつかっと寄ってくる。とたん、
「けっ！　おととい来やアがれッ」
宙におどりあがった龍太郎の手に、ぎらりと光ったのは匕首であった。
「うわっ！」
と一声叫んだその男は、抜きかけた太刀をそのまま、わき腹の辺りをおさえながらがくっと大地へ片ひざをついた。
すわ！
と、殺気立った武士たちの間から、
「やれ、やれッ！」
と、万作の叱咤する声が突っ走った。
「男も女も、手に余ったらたたっ切れッ。足を切れッ、腕を折れッ。殺すな、生け捕れッ」
「しゃらくせえッ！」
わめいた龍太郎は阿修羅のようであった。
右へ一躍、左へ一躍。おそろしくすばしこい

上に、腕も立つらしい。彼が動いたあとには、手負った男の影が、のけ反り、よろめき、暴風の中の草の穂のようにゆれ動いた。

しかし、なんといっても十人に余る人数である。たちまち体勢を整えた彼らは、怒気を含んでわっと群れ寄ってきた。

「お徳、来いッ！」

「あいよッ」

叫びながら、二人は横に走って築地の下へ来た。

とたん、龍太郎の影がひらりと築地の屋根の上にとび上がったと思うと、つづいて手をとられたお徳の影もその上にあった。

追っ手をかき回しておいて、そのすきに築地を乗りこえて寺内のやみに逃れようというのが、とうから龍太郎の計算していたことだったらしい。

しかし、築地の上に立った瞬間、龍太郎は、ちっ！　とはげしく舌打ちした。

築地の向こうが一面の池になっていて、塀(へい)の真下まで水が深い水深を示してよどんでいるのに気づいたからだ。

とっさにあたりを見回した龍太郎の目に、少し先に池中の島から松の巨木がそびえ立ってこちらへ長い枝をのばしているのが見えた。築地から枝の先まで一間ほどの距離しかない。

しめた！

と思って、その方へ築地の屋根を走りながら、

――しかし、お徳を抱えちゃアとても飛び移れまい。よしんば飛び移ったとしても、二人の重みを支える枝の太さではない……。

と、龍太郎の頭が冷酷な計算を立てている。

「あっ、ち、畜生ッ！」

龍太郎のそでにすがりながら走っていたお徳が突然叫んだ。

足首を、下からだれかにつかまれたらしい。

つかまれたまま、滑って屋根にしがみつき、

「畜生、畜生ッ。はなせったら！」

と、足先でけりつけたが、

「それッ、引きずりおろせッ」

と、集まってきた手が、足を、すそを、しゃにむにつかんで引きたてる。

「あっ、龍さん！　助けてッ……」

お徳の片手は、必死に龍太郎のすそをつかんでいた。それをはなせば下へ引きずり落とされる。

龍太郎の冷たい目が、一瞬、お徳をじろっと見た。

彼は、お徳の方へ手をのばす代わりに、足をあげてその手首をけりつけた。

「ああっ、龍さん！　助けてッ！　ま、待っておくれッ、待っておくれってば！」

びりっと音たててお徳のつかんでいたすそが裂けると、とたん、龍太郎の影は飛鳥のように宙をとんで松の枝先にとりついていた。

「龍さん、待って！　助けてッ！」

叫びながら、お徳は築地の下へどっと引きずりおとされた。

「うぬッ、このあまッ！」

「憎んでも余りあるやつ！」

「これでもかッ！　こたえたかッ！」

と、憤怒に狂った男たちが、小突き回し、けころがし、よってたかってねじ伏せる。

大地へ押しつけられ、どろをかみながら、

「龍さん、龍さんたら！　助けてッ！」

と、お徳はまだ叫んでいた。

しかし、龍太郎はそのころ、松のこずえからこずえへ野猿(やえん)のように飛びうつり、池の向こう側へひらりと飛びおりていた。

あとは森の茂った暗い寺院の境内がつづいている。

「逃がすなッ。是が非でも引っ捕らえろッ。逃がしたら、うぬッ、ただではすまんぞッ」

と、激怒した万作の声がじだんだふむようにわめきつづけている。

彼らがどんなに気負いたっていたかは、その

追及の執拗さでも知れた。入り乱れた足音があっちこっちと遠くなり近くなりしながら、かなり長いこと聞こえていた。
しかし、それが長びけば長びくほど、龍太郎を捕らえることが絶望に近づいていく証拠であった。
お徳は、築地の根方に高手小手に縛りあげられたまま、まるで芋俵のように投げ出されている。
髪は解けて乱れに乱れ、着物の胸元もすそも裂けちぎれて、あちこちに血のにじんでいるのが月明かりにもそれと認められた。
くちびるをかみ切ったのだろう、血まみれになったくちびるが息もたえだえにあえいでいる様子からも、どんなむごい扱いをうけたかそれと知れるようであった。
「お徳、あの花太郎と名乗る若僧の正体は何者か？」
万作が血に濁った目でじろっと見おろしながらいった。
「こらッ、先生が尋ねていらっしゃる。すなおに返事せいッ」
と、一人が土足で腰の辺りをけりつける。しかし、お徳は石のように口をつぐんでいた。
「かくれ家はどこか？」
「……」
「いかなる目的をもって奇怪な犯罪をかさね、また、なんのためにあの小鈴を盗みとったか？」
「……」
「やいッ、ぬかせッ。返事せいッ！」
と、また土足が乳房のあたりをぐりぐりっと踏みつける。
「ううう……」
とうめいたが、それでもお徳は口を開こうとしない。
「いわせずにはおかん。いかなる手段をもっても吐かせずにはおかんのだぞ。いいな?!」
万作は憎さげにいった。

「よしッ、この女をひっかついでいけ」
そのころには、とうとう龍太郎を見失ったか、ほかの連中もしおしおともどってきた。
「まあよかろう。あの若僧をひっ捕らえるのも時間の問題じゃ。人目についてもまずい。引きあげろッ」
万作があごをしゃくると、侍たちはかつぎあげたお徳を間にはさんでさっと足早に歩きはじめた。
三四郎は――
それらの一部始終を、うしろの物陰から残らず見ていた。
「わしには花太郎よりもお徳が必要なのだ。お徳を手に入れねば、お美年さんの行方をしることが出来ぬ」
三四郎はつぶやきながら、ゆっくりとその一団のあとをつけていく。

おとり鳥

一口に江戸といっても、根津権現から白山へ抜ける辺りまできてはもうよくよくのはずれである。
表通りにこそ町家もぱらぱらと軒をつらねてはいるが、一歩裏へ入ると大名旗本の下屋敷か、でなければ寺が塀を接していて、それがとぎれたと思えば鬱蒼たる森ややぶの茂った荒地がつづいているという、真昼でもめったに人声をきかないような寂しい辺りだ。
まだほんの宵の口だというのに、榊原家の下屋敷もひっそりと静まり返っていた。
それでも、屋敷うちのあちこちに常になく明明と火影のみえているのは、二、三日前からお鶴さまがおいでになっているせいである。
お鶴さまが突然本邸からこの寂しいくらい静かな下屋敷へ移られたのは、間近に迫った御祝言の準備のためだと専らうわさしているが、し

かし、お鶴さまの本当の胸の奥をしっているのは、老女市の瀬のほかにはだれ一人いなかった。

榊原家は八千石、旗本としては大身だが、いろいろの事情があって、先代のころから遠縁にあたる金森家から並々ならない恩義をうけてきた。

その金森家から、若殿源之丞の妻に是非お鶴さまをと申し込まれては、いやといえないのが武家の義理というものであった。まして、源之丞は心底からお鶴さまを愛し、どのような犠牲を払っても幸せにせずにはおかないとまで熱意を示している。

内約束が出来てからも、挙式のこととなると何かと理由をもうけては一寸のばしにのばしてきたが、それも今までのところは、お鶴さまがまだお若いから、御病身だから……と、周囲も深くは疑っていなかった。

しかし、最近になって、お鶴さまらしいお方が舟友へさる浪人者をひそかにたずねていかれたらしいなどという妙なうわさがちらちら立ちはじめているし、それに、怪盗花太郎がお鶴さまの御寝所の表へ不吉な張り紙を残していったということも、いつまでかくしているわけにもいかない。

それかあらぬか、先日金森家から来た使者の口上はいつにもなくきびしいもので、もはやいやおういわさぬといわんばかりの語調であった。

近々お国元から金森家の大殿が御出府になられる。その折を期して是が非でも祝言の式をとり行いたい。それについて、いよいよ公儀へ御婚儀御裁可の願書を提出したいから同意してほしいという口実であった。

そして、事はそのとおりに運び、すでに近日公儀の御裁可もおりるであろうといううわさだ。すでにお鶴さまの運命はきまっている。

そのお鶴さまが急に本邸を去ってこの下屋敷へ移りたいといい出されたのは、一つには祝客のおとずれや祝言の支度のあれこれと晴れがましくもにぎやかなのが見るにたえないほど物憂かったからでもあり、また一つにはせめてもの数日を心静かに三四郎への思いの中にひたっていたい切ない願いからでもあった。

この下屋敷は、幼いころ三四郎と親しく暮らした懐かしい思い出にみちている。

その居間、その廊下、その庭、築山や池や森――何一つとして三四郎の思い出と結びつかないものはない。

どこかそこらから、ふっと三四郎の声が聞こえてきそうな気さえする。

お鶴さまは、何かに引かれるように、手燭（てしょく）を手にとってただ一人ひっそりと庭へおりたった。

老女市の瀬は、それと気づいたがわざと後ろに従わず、お鶴さまをそっと一人にしておいた。お鶴さまの心の奥を一番よくしっているのが市の瀬であったから……。

舟友の離れで三四郎にめぐりあうまでは、お目にかかりたい、お会いしたい、せめてこの胸の思いだけでも聞いていただきたいと、ただもう夢中で思いつめていたお鶴さまであった。

榊原家をすて、自分をふり切って出奔した三四郎が、いまさら榊原家へ立ちもどってくれようとは思ってはいなかったが、あの誠実で心温かい三四郎がなぜ突然そういう理不尽とも思われる行動に出たのか、それがふしぎでならなかった。

自分に対する愛情が変わっていないのかどうか、もし三四郎が一言そばへ来いと命じてくれれば、家もすて、身分もすて、いや、一瞬の恋のために命まですててかえりみない覚悟もきめていた。

しかし、やっとの思いでめぐりあえた三四郎の態度は、お鶴さまの目にはまるでとりつく島もないようであった。

「お鶴さま、申しあげにくいことではございますが、三四郎さまにはもう別にお好きなお人が出来ておいでなのではございますまいか？　いいえ、たしかにそうでございます。先日、三四郎さまと並んでおられるお娘御をちらとお見うけしました。美年とか申される町家のお娘御だそうでございます。お鶴さま、なにとぞ三四郎さまのことは御断念くださいませ。そして、あれほどお望みくださいます金森さまへ一日もはよう……」

と、老女の市の瀬がそのあとで口にするのもつらそうにそういった。

三四郎に好きな人があると聞いては、どんなに切なくともあきらめるよりほかはないであろう。まさか、町家の女のように他人としのぎを削って争ってまで己の恋を貫くような物の考え方には縁の遠いお鶴さまであった。

だから、お鶴さまはあきらめた。あきらめたと、歯をくいしばって己の心にいいきかせたのである。

けれども、なぜ三四郎が突如榊原家から出奔したかというその疑惑だけはますます根強く残っていた。

もしや、榊原家やまたは自分に対してなにか不信なことでもあって——と以前はそう疑うこともないではなかったが、三四郎に会ってみて、彼が榊原家に対して少しもそんな感情を抱いていないことが分かったし、また、自分に対する愛情の不変なことは、その涙の出るような優しい心づかいでもよく分かった。

お美年という好きな人が出来たのも最近のことで、榊原家出奔の原因にはならない。いや、それどころか、その人が顔姿ともに自分と生き写しだということから見ても、少しうぬぼれかもしれないが、その人が自分に似ていればこそ好きになり、愛するようになったのではなかろうかと思われ、それほどまでに自分を好いていてくれた三四郎がなぜ出奔しなければならなかったか、その不審さがいよいよ濃くなるばかりであった。

あきらめねばならない人ならあきらめもするが、しかし、もう一度会って、せめてその不審さだけでも明らかにしてもらえないであろうか——

お鶴さまは池にかかった土橋を渡っていく。その池も、昔、三四郎と自分と二人して落ちて屋敷中を大騒ぎさせた懐かしい思い出にみちている、と、お鶴さまはただただ三四郎のことを悲しく思いつめて半ばうつろ心だった。

とたん、さささっと茂みの中に葉ずれの音が起こって、なにか白いものがさっとお鶴さまの目の前をかすめてすぎた。

池の向こう岸の暗い茂みの陰へぱさっと音たてて落ちたらしい。

お鶴さまは、夢からさめたように、しばらくの間、その茂みの陰をじっと見つめていた。

お鶴さまが立っていた土橋から右手へ池のつきる辺りまで七、八間の距離があったであろう。その向こうは土塀（どべい）を境にして隣の寺地に接しているのだが、今の白いものはどうやらその方角から塀越しにとんできたらしい。

あたりはしいんと静まりかえって風の音もなかった。

老女市の瀬は、お鶴さまが庭に出たことはしっていたが、見て見ないふりをしているし、そのほかの女中たちはお鶴さまが庭へ出たことさえ知らないはずである。

お鶴さまは静かに土橋を渡りきった。

茂みの暗い陰に、さっきの白いものが落ちている。拾いあげてみると、中に小石を包みこんだつぶて文であった。

なぜかしら、お鶴さまはどきっとしながら、それを手のひらの中へ堅く握りしめ、同時にあたりへあわただしげに目を配った。

胸がはげしく鼓動をうっている。

だれにも見られた気配のないことをたしかめ

てから、さりげなく築山の裏手へ回っていった。そこは昼間でもほの暗いほど立ち木の茂った辺りで、母屋ともまったく隔絶されていた。

お鶴さまはじっとりと汗ばむほど堅く握りしめていた手のひらをひらいて、中の紙切れをおそるおそる手燭の灯にかざした。

走り書きの墨痕もまだよくは乾ききらないかと思われるほどあわただしげな筆の跡であった。

——かくのごとき手段にて文差し上げ候儀、礼をわきまえず恐れ入り候えども、よんどころなき仕儀と御察しくだされ度。

さて、火急の用件にて是非お目にかかりたく存じおり候。折り入ってお話し申し上げたきことこれあり、お前さまならびに榊原家にとって一刻もすておきがたき大事に御座候。筆にてはしるしがたく、是非是非お目にかかり候て直々申し上げたく存じおり候。時を失うてはお前さま御一命にもかかわりあることと御承知あるべく候。

この文御一覧次第、庭つづきの裏木戸までお越しあるべく、待ち上げ候。内聞のことなり。なんびとにもさとられ候わぬよう、ただお一人にてひそかにおいでくだされ度、ひたすら御待ち申し上げ候。心せくまま、乱筆ひらに御容赦くだされたく。以上——

加賀美三四郎

鶴どの

一瞬、お鶴さまは火がついたように全身をかあっと熱くした。紙切れをもった手が灯火の中にわなわな大きくふるえている。

むさぼるように、二度も三度も読みかえした。思ってもみない三四郎からの文だったからである。

心せくまま乱筆うんぬん——と断ってあるとおり、筆跡に乱れはあったが、たしかに懐かしい三四郎の手に違いなかった。

そのようなことはどうでもいい。いや、文の内容さえどうでもよい。今のお鶴さまには、三四郎から文をくれたということだけで——そして、三四郎がなんの用事があるにせよ、向こうから会いに来てくれたということだけで十分であった。

いや、十分どころではない。驚きと喜びに、まだ体がわくわく震えている。もう二度とは会えまいと思ったその人に、思いもかけず会って顔を見られるというだけで夢心地だった。

何を考える暇もない。お鶴さまは半ば夢心地で裏木戸の方へ歩き出していた。

三四郎のことはもう思いをあきらめたのではないか。会えばその決意がまたぐらつくかもしれない。いけない、いけない、いけない！　と自分をしかりながら、そのくせ、お鶴さまは雲をふむようなそぞろな足どりで裏木戸へ急いでいた。

お目にかかりたい、一目でいいからお目にかかりたい。お目にかかるのは未練のためではなく、この胸にわだかまっている疑惑を是非とも解きあかしていただきたいからだ。

なぜ、三四郎が、榊原家をすて、自分をふり切って出奔したのか？　どうして自分のこの思いがつれなく踏みにじられねばならなかったのか？　その理由だけは、せめてもはっきりと聞いておきたい。

さもなければ、自分はきっと生涯その疑惑につきまとわれ、考え悩んで心の安まる日もないであろう。

三四郎が会いたいという用件が何であるかということよりも、自分はそのことだけをせめて直々三四郎の口から聞きたいのだと、お鶴さまはいいわけするように自分にいい聞かせていた。

その裏木戸というのは、二重に囲った中仕切りの戸口を越えて向こうにあり、めったに開けることはなく、内側から厳重にかんぬきを施し

たまま、つる草がまといつき、こけむして、ひっそりと閉ざされていた。

　お鶴さまはそのかんぬきを外し、手燭をふき消してから、そっととびらをあけた。

　その裏木戸は寂しい裏通りに面していて、通りの向こうには鬱蒼たる森が空を摩している。

　幼いころ、腹の赤い珍しい小鳥を追いかけながら、三四郎と二人きり、夢中になってこの木戸から表へ抜け出し、森の奥へまでまぎれこんでお付きの女中たちを仰天させたことをふっと懐かしく思い出しながら、お鶴さまは木戸の外に出た。

　お鶴さまの胸は早鐘をうつように鳴っていた。理屈はどうつけようとも、二度と顔も見られまいとあきらめていた三四郎に会えることが、無性に心を弾みたたせていたのだ。

　数間はなれた向こうに、淡い月明かりをあびて人影が立っている。

「ああ……三四郎さまッ」

　と、さすがに声には出さなかったが、お鶴さまは小走りにその方へよっていく。

　が――それは三四郎ではなかった。似ても似つかない町人体の若い者である。

「お鶴さまでいらっしゃいますか？」

　と、その男が小腰をかがめながら低い声でいった。

「はい、わたしは鶴ですが……」

　お鶴さまは、呼吸をとめながら、まじまじとその男を見つめている。

「三四郎さまのお指図でうかがいました。使いの者でございます。へい……」

「三四郎さまは……あのお方はどこに？　ここへはおいでくださらないのですか？」

「へえ……ちょっとわけがございまして……恐れ入りますが、そこまでお運びいただきたいのでございます。さ、ご案内申し上げますから……」

　つかつかとよってくるその男の異様に光っ

ているひとみのすごさが、お鶴さまになにか不安なものをちらっと感じさせた。

「だ、だれです、そなたはッ?!」

「へへへ……」

　と、その男は低くわらった。

　お鶴さまはぞっとしたように思わず一、二歩うしろへさがりながら、とっさに懐剣の柄へ手をかけていた。

「だれですッ？　お前は何者ですッ？　名乗りなさいッ」

　お鶴さまははげしく詰問するようにいって相手をにらんだ。

「だから、三四郎さまのお使いだと申し上げておりますんで……さあ、おいでなさいまし。ご案内申し上げます」

　と、相手は不敵な薄笑いをうかべながら寄ってくる。

「寄るなッ。みだりに近づけば許さぬぞッ」

「聞きわけのねえお姫さまだのう。向こうで三四郎が首を長くして待ってるっていってるじゃアねえか」

　声と一緒に、ただでもすごいその目つきがぞっとするほど険しく変わった。

　お鶴さまは危険を感じた。何かわからないが、はかられたと直感した。

　無言のまま、さっとそでをひるがえして木戸を中へくぐろうとする。

　その一瞬のすきをとらえて、男の影が宙にはね上がった。

「おのれ、痴れ者ッ！」

　お鶴さまが懐剣をひきぬいたのは叱咤するのと同時だったが、男の動作はもっと素早かった。

　どっと背を突かれてのめっていくお鶴さまのうしろから、男の腕がその首へへびのようにぎりぎりと巻きついた。

　叫ぼうとしたお鶴さまの声は、ただわずかに低いうめき声になって絞り出されただけで、その右手に握った懐剣も月明かりの中にむなしく

虚空をかき切った。
「このおれがだれだか知りてえのか。お鶴さま、よく聞いて覚えておきな。おれア江戸の花太郎というとんでもねえ野郎さ」
男は、背後からお鶴さまの細首をしめながら、その耳元へ毒気をふきこむようにささやきかけた。
「そんなに三四郎にほれていたのかなア。おあいにくさまといいてえが、いまさらわなにかかったと知ったっておそまきだ。じたばたするねえッ」
体をのけぞらしてもだえているお鶴さまの姿を、男の冷たい目がなぶるようにじろっじろっと見回している。
「とうから『花』の張り紙をして警告していたとおり、いよいよ今夜はこの体を拝借しに参上しましたぜ。なにもそんな目つきでにらむことはあるめえ。このおれこそ、金森家の正統の世継ぎ、すなわち江戸の花太郎さまなんだ。世が世であれば、源之丞に代わってお前を女房にもらう資格のある男だってことよ。おれア金森家には命に代えて晴らさにゃアならねえ恨みがあるんだ。なんにもしらねえお前にゃアかわいそうだが、おとなしく一緒に来てもらうぜ。え、どこへ？　さあ。ことによったら、源之丞の代わりにこの花太郎の女房になってもらうかもしれねえぜ。やい、静かにしろいッ」
ぐうっと腕に力がはいったらしい。
一瞬、お鶴さまの体がはげしくけいれんしたと思うと、その手から懐剣がぽとりと足元へおちた。
その体はもうぐったりと力を失って動こうとはしない。
男はいまさらのようにその顔を月明かりの中にすかしてみながら、
「うむ、似ている。お美年にそっくり生き写しだ」
と、うめくようにつぶやいた。

お鶴さまの変事にまず気づいたのは老女の市の瀬であった。
庭先へおりていかれたお鶴さまが、そのままいつまでたってもおもどりの様子がない。もうかれこれ半刻（一時間）近くなる。
はて？
と、急に胸騒ぎを覚えた市の瀬は、そのまま小走りに築山の向こうへ行ってみた。
いくら広いといっても、たかが下屋敷の奥庭である。この奥庭のどこのすみにもお鶴さまの姿の見えないことはすぐ明らかになった。
思いもかけない裏木戸が開いている。
まさか、お鶴さまがただお一人で木戸から表へお出ましになることなどあるはずはない――
とは思いながら、念のため一歩表へ出てみると、とたん目に映ったのは、道の端に脱ぎとばしたような形で落ちていた一組みの庭下駄であった。
それがお鶴さま専用のお履き物であることは一目で知れた。
あたりの雑草がふみにじられて四散しているのもただごとではないと思ううち、今度は木戸のすぐそばに落ちていた紙切れを発見した。例の、三四郎と署名のあるつぶて文であった。
もはや、お鶴さまの身の上になにか変事が起こったことは疑う余地がない。お鶴さまは、三四郎の誘い文にひかれて、単身ここまでお出ましになった上で、さらになにか――不吉なことが突発したに違いないのだ。
色を失った市の瀬は、ただちに引きかえして老職にこのことを報告すると、自らはひそかに今戸まで駕籠をとばし、三四郎のもとへたずねていった。
三四郎に会いさえすればおおかたの事情はしれると思ったのに、その三四郎は先刻どこかへ出かけていったままだもどらないという。
いよいよ傷心に色青ざめた市の瀬が、がっく

りして屋敷までもどると、急をきいた大殿榊原右京太夫が丁度本邸から駆けつけてきたところであった。

右京太夫はおろおろ取り乱しながら訴える市の瀬の話をただ黙って聞いていた。すでに六十に近い年配であろう。さすがに八千石の祿をはむ老武者は、まゆ一つ震わせはしなかった。

聞きおわると、

「世間に聞こえてもよろしくない。騒ぐな。皆、いずれ沙汰するまで黙って待て」

と、ただそれだけいいすてて、なに思ったか、すいと庭先へおりたった。

すぐ後へつづこうとする近習たちへ、

「わしは一人になりたい。しばらくそれに控えていよ」

と一瞥をくれ、そのままゆったりと池の方へ歩み出した。

池を渡った。しかし、築山の裏へは回らず、池の縁にそって左手へ植え込みをくぐっていく。

その植え込みをくぐり抜けた森の陰に梅渓亭と扁額をかけた茶室が建っている。

その戸口に足をとめた右京太夫は、

「客人……梅どの、わしじゃ。京じゃ」

と、忍びやかに声をかけた。

榊原家の先代は著名な茶人で、梅渓と号していた。

梅渓亭とその名を冠したこの茶室は、先代自慢のものだったらしく、その生前、春秋二季にここで行われた茶会はその道ではなかなか名高いものだったといわれている。

梅どの——と右京太夫から声をかけられて、小窓に映っていた火影が急にちらちらっとまたたいた。

「あっ、これはお殿さまで……」

と、中の人影があわてて立ち上がる気配を見せるのを、

「梅どの、動くまい。かまわん、そのままそのまま……」

と制しながら、右京太夫は自ら障子を開け、上がりかまちへ腰をおろした。

「これは恐れ入りましてございます。御用なれば、お使いをたまわりますればまかり出ましたものを……」

「動くまいと申すに……体に悪かろう」

「いいえ、もう、お陰さまで……すっかりよろしいのでございます」

寝ていたらしいのが、急いで起き出てきて居ずまいを直したらしい。梅どのとよばれる客人は、姿は見えないが、声の様子から男であった。

「御覧のとおり、このようにぴんぴんだと申しましても、お医師の方がまだまだとお許しくださいませぬ」

「医師は医師で、梅どのがもう治った治ったと強情を張り、逃げ出したがって困るとこぼしておったぞ。傷の治療は仕上げが肝心じゃ。大事にせい」

と、右京太夫はやさしくいう。

梅どの梅どのとよんでいるが、それは梅渓亭の客人ゆえに梅の字をとった仮の呼び名らしく、なにか実名を知られたくないよくよくの事情のある男らしい。

そういえば、先ごろ来、ずうっと梅渓亭に泊まって傷の治療をしているその人を、この屋敷の女中たちはだれでもただ梅どのといっせいに呼ぶだけで、その人の実名も素姓も知らずにいる。

「そちは聞いたか?」

と、さすがに右京太夫の声は沈鬱に曇った。

「お鶴さまのことで? はい、たったいましがた、御老職さまから伺いましてございます」

「三四郎の文を見たか?」

「はい、拝見いたしました」

「どう思う?」

「どう思う——と仰せられますと?」

「三四郎はかつてこの屋敷に住み、成長した男じゃ。わしはわが子と同様に思うて育てたつも

りでいる。いささか訳あってこの屋敷を出奔したが、さればといって、もしもこの屋敷に用あらば堂々と表門より乗りこんでくることにいささかのはばかりもないはずじゃ。少なくとも、どろぼうねこのごとくこそこそと鶴を誘い出す必要はごうもないと思うし、また、そのようなこせついたことをする男では断じてないと信じているがのう」

「仰せのとおりでございます、お殿さま。さきほど三四郎様の文を拝見し、どうやらふにおちないところがございましたので、念のため、昔三四郎様がこのお屋敷においであそばしますころお書きになりました御筆跡を拝借し、とくとくらべてみましたが、よくは似せてございますが、もっともらしい偽筆でございました。あれはお鶴さまをお誘い出しします偽手紙だったのでございます」

「思うたとおり、やはりそうか？　して、鶴をさそい出したというそのくせ者に心当たりがあるのか？」

「花太郎でございます」

と、相手の声がずばりと答えた。

「花太郎か？　花太郎が鶴を屋敷のそとへ誘い出したと申すのか？」

「たしかに花太郎に違いございませぬ。先ごろ、お鶴さまの御寝所の戸へ『花』の張り紙を残していったとうかがっております。その、不逞な予告どおりに、きゃつは実動しはじめたに相違ございませぬ」

「よもやと思うた。とるに足らぬいたずらとも思うたが、やはりきゃつめは鶴をねらいおったのか？　なぜじゃ？　なんのために花太郎が鶴をかどわかすのじゃ？」

「お鶴さまの金森家へお輿入れが間近に迫っておりまする。金森家に対して恨みを抱く花太郎が、その輿入れを妨害する計画かもしれませぬ。何にしましてもすててはおけませぬ。時を移しては、お鶴さまのお身にとりかえしのつかぬこ

とが起こるかと存じます」

「どうしたらよいのか、客人。すててはおけぬ。鶴を助ける手段はないか？」

「こうなっては策をかまえているひまはございませぬ。じかに花太郎にぶつかるほかに手段はございますまい」

「む？　すりゃ、そちは花太郎の居どころを存じているのか？」

「存じております。しかし、お殿さま、しばらくわたしにおまかせくださいませ。みだりに騒ぎたてましてきゃつを下手に追いこみますと、いよいよお鶴さまのお身が危のうございます」

「頼むぞ、しかと頼むぞ。よいな！」

「はい。命にかけまして……」

と、男の声が静かにいった。

「それにつきまして、この際、是非ともお聞かせいただきたいことがございます」

「改まって聞きたいとは何事じゃ？」

「わたくしは、お殿さまから、花太郎の正体、素姓を明らかにせよと御内命をおうけいたしました。花太郎なるくせ者のうわさがちらりと人のうわさにのぼりはじめましたそもそものころ、すでにその御内命をおうけいたしましたが、どういう理由からそのようなことをわたくしに御命じになりましたか、おそれながらそれをお聞かせいただきとう存じます」

「ははは……何事かと思えば、そのようなことか。そちもすでに知ってのとおり、花太郎とは金森家の嗣子につける幼名じゃ。しかも、金森家と鶴の縁組みもきまっている。それ故、花太郎と名乗るいぶかしい人物の素姓を明らかにしたいと思うたに不審があるか」

「お殿さま、花太郎という名は金森家の御幼名につけるお名前とは限っておりませぬ。世上いくらもあるべきはずの花太郎を、ちらとそのうわさをお聞きあそばしただけで、至急その素姓を明らかにせよと仰せられましたのは、別に理由がおありであろうかと存じますが……」

「なに?!」
「失礼申し上げました。言葉がすぎましたならば、なにとぞお許しくださいますように……では、申し上げますが、お殿さまは、はじめわたくしに御内命あります時に、何者がいかなる理由から花太郎と名乗っているか、それを明らかにせよと仰せられました。つまり、花太郎と名乗るくせ者が、実は故意にその名を仮称しているのだと仰せられましたように承知いたしておりますが……」
　右京太夫はすっくと立ち上がった。その目が凝然と奥の方のその男を見すえている。が、やがて、ぽつりといった。
「他言すな」
「はい、命にかけて他言はいたしませぬ」
「きゃつは花太郎ではない。断じてない！　しかも、それを、証拠をもって是非とも明らかにせねばならんのじゃ」

　右京太夫が去ってからしばらく時がすぎた。
　梅渓亭の辺りは一段とやみが濃くしんしんと更けていく。更けるにつれて、小窓に映える火影はいよいよさえて、ひっそりと静かだった。
と——
　その火影の下に、ちらりと人影が動くのが見えたと思うと、こそとも音をたてぬ物静かさで、だれか戸口からそっと庭先へすべり出てきた。
　殿からも女中たちからも、いっせいに梅どのという名前で呼ばれているこの家の奇妙な客人であることは間違いない。
　しかとは分からないが、武士とは思われない着流しに手ぬぐいのほおかぶりという影法師であった。
　彼は母屋の方へ一瞥(いちべつ)をなげただけで、その方へは行かず、築山をぐるりと裏手へ回った。
　時々立ちどまって、ふうっと息をつく。けがでもしているらしく、それがまだ完全には治り

きっていないで時々痛むらしい。
　森をぬけて、例の裏木戸の辺りへ出た。
　彼はそこでもう一度母屋の方角へ向き直り、姿を改めながら深く頭をさげた。
「お世話にあずかりました。ありがとうございました」
　と、口の中でつぶやくようにいう。
「お鶴さまのお身が案じられます。もういっときも安閑としちゃいられません。お殿さま、おっしゃるとおり、あの花太郎と名乗る野郎は、実ア本当の花太郎じゃございません。あいつこそ、血に飢えた恐ろしい復讐鬼(ふくしゅうき)なんでございます。何をするかしれたものじゃアございません。お鶴さまのお身が案じられますので、ごあいさつもなしに行かせていただきます。御免くださいまし」
　それから、彼は木戸を開け、足早に表のやみへ消えていった。
　どこへ行くのだろう?

　彼のそぶりには、夜の町をさも歩きなれているという印象があった。裏通りから裏通りへ抜けていく足取りからも、江戸の地理によほど詳しい男らしい。
　そればかりか、すでに閉じている町々の木戸の前まで行くと、彼は番屋の前へぬっと立って二言三言何かいう。
　すると、とたん、番太たちは申しあわせたように愛想よく頭をさげて木戸を開けてやる。
　彼はいつの間にか下谷へきていた。じめじめした不潔な古池の裏手、やぶを背中にしょってぽつんとたっているのは、例の唐人飴屋(あめや)呉龍角の住まいである。
　その住まいは、灯が消えたままひっそりしていた。
　暗い窓下までそっと忍びよったその男は、しばらく耳をこらして中の気配をさぐっていたらしいが、やがてちっと舌打ちした。
「野郎、留守だな。まさか、気づいてずらかっ

たはずはねえ。とにかく、あの烏天狗のようなとぼけた面をした唐人飴屋をたぐっていけば、いやでも花太郎につきあたるはずなんだ。もう気長なことはしちゃアいられねえ。いちかばちか、野郎と真正面からぶつかってみるまでだ」

　雨戸へ手をかけると、戸締まりがしてあるらしいが、彼が二、三度小手先を動かしていると、訳なく開いた。

　唐人飴屋を待ち伏せるつもりだろう、無言のまま中へ入ってから、ぴったりと戸をしめきった。

　梅――とよばれるこの男は、土間に立ったまま、ちらっと顔をしかめた。

　広くもない家の中は一目で見渡せたが、そこにはただごとでない取り乱したあとがありありと残っていたからだ。

　あの江戸中の人たちが見なれた唐人服や帽子、飴売りの道具などが、まるで引き裂いたりけちらしでもしたように乱雑に投げ出してあるばかりか、戸だなも押し入れも手あたり次第に開けひろげられ、障子やふすまははずれて倒れたまま踏み破られたりしている。

　明かりとりの小窓から流れこむ月明かりが、畳の上に残っている入り乱れた土足のあとまでかすかに見せていた。

　――だれかおれより一足先にここへやってきたやつがあるんだな。家探ししたやつがあるにちげえねえ……。

　男は、とたん、ぎくりとしたように耳をそばだてた。

　戸口の方にひたひたと小走りによってくる足音をきいたからだ。表ばかりではない、同時に、裏口の方にも足音が起こった。

　それは、まるで、だれかここへやってくるのを網をはって待ちかまえてでもいたような、間髪を入れない足音であった。

　表、裏の戸が、同時にがらりとあいて、男の影が三つ四つ押しこむように入ってくる。

いずれも頭巾で顔を包んだ侍たちだ。

　男はチッとかすかに舌打ちしたが、別にあわてもしなかった。

　侍たちは、前後から男をとりかこんで、物もいわずにじろじろ見やっていたが、やがて、

「やはり、呉龍角ではなかったな」

　と、はき出すようにいった。

「花太郎でもない」

「貴様、何者だ？　何しに来た？」

　と、一人が低い太い声で威嚇するように詰問した。すわといえば即座に切ってすてる殺気立った気構えだった。

「へえ……ちょっと唐人飴屋に会いてえ用事がございましたもので……怪しいものではございません。御勘弁くださいまし」

　と、如才なくいいながら、男の目が頭巾の間からのぞいている侍の顔を探るようにじいっと見た。

「こやつ、落ち着きはらっている。ただ者ではないぞ！」

「貴様、ほおかぶりをとれッ」

「名前をいえッ」

　と、四方から畳みかけてくる。

「どうか御勘弁を……怪しい者ではございませんので……」

「怪しかろうがなかろうが、われらの知ったことではない。名前をいえッ」

「へえ。梅と申します」

「梅？」

「梅公でも、梅の字でも結構でございます」

「貴様、さだめし唐人飴屋のいどころを知っておろう。きゃつがどこに行っているか、それを教えろ」

「それを存じておりますくらいなら、ここへ参りはいたしません。ここへきてみて、龍さんが留守なんでがっかりしたところなんでございます」

「どうも臭いやつだ。ただ者ではないぞ」

「こらッ、面を見せろ。ほおかぶりをとれと申すにッ!」
　と、いらだった一人がいきなり手をのばして男のほおかぶりをむしりとろうとする。
　とたん、
「うっ!」
　と、その侍がうめきながら、うしろへのけぞった。わき腹へ目にもとまらぬ早さでこぶしの一撃をくらったからである。
　瞬間、ほおかぶりの男は、のけぞるその侍のわきをくぐって脱兎のように表へ走り出た。
　侍は四人いた。その怒号を背後にききながら、ほおかぶりの男は走っていく。
　顔をしかめているのは、傷が痛み出したからであろう。すぐ背後に四人の目があるから、逃げきることは容易なことではなかった。
　とっさに、草むらの底へ、がば! と身を伏せた。
　四人は、一度そのそばを走りぬけたが、すぐ気づいたようにもどってきた。
「くそッ、かくれたな」
「この辺だ。草むらの中だッ」
「うぬッ。だからわしがただ者でないといったのだ。唐人飴屋の同類に違いない。ひっとらえて痛めつけろッ」
　怒声がかくれている男の頭上から降ってくる。手に手に引き抜いている白刃が、月明かりの中にきらっと光っていた。ぐずぐずはしていられない。
　男が傷の痛みに顔をしかめながら飛び出す気構えをみせて腰をうかした時、突然、向こうの方からざわざわっとやぶをゆすりながら走っていく何かの気配が聞こえてきた。
　と思う間もなく、だれか水へでもおちたのか、どぶん! とけたたましい水音が……。
「や! 向こうだッ」
「池だぞッ」
　侍たちは意外だというように顔を見合わせた

が、一瞬、それっとその方角へ向かって走り去っていった。
　――何が起こったのか分からねえが、おれにとっちゃアとんだ天の助けというやつだ……。
　ほおかぶりの男は、苦笑いしながらのっそりと首をもたげた。
　侍たちの影は、ずっと向こうへ遠ざかっている。
　それを見定めてから、男はゆっくりと歩き出した。裏手のやぶつづきに墓地があり、それを抜けると人目につかず隣町へ出られる。
　そのやぶの辺りまできた時、まるで待ち伏せでもしていたように、やみの中から忽然と姿を現し、そばへすうっとよってきた人影があった。
「おけがはありませんでしたか?」
　と、物柔らかくささやきかける。背の高い、白髪の老爺であった。
「池へ大きな石を転げおとしたのです。あのお侍たちもだまされたとすぐ気づいて引きかえしてくるでしょうから、なるべくお急ぎになった方がようございましょう」
「じゃア、あの水音はお前さんが? あっしを助けてくださったんですね?」
　と、ほおかぶりの男はじいっと老人を凝視した。
「はじめから御様子はずうっと拝見しておりました。別に人手をかりなくともあのお侍たちくらいに手込めになるお方とは思いませんでしたが、実は、直々にあなたにお会いしておききしたいことがあったものですから……」
　と、老人は物静かに話しつづけた。
「わしは、日がくれるとすぐあすこへいって、ずうっと呉龍角さんの帰るのを待っていたのです。あの娘さんの行方が心配になりましてね」
　ほおかぶりの男がぎくっとしたのは、自分もお鶴さまのことで唐人飴屋のところへ押しかけてきたからだ。
「そりゃアなんという娘さんですかえ?」

「お美年さんという名前ですが……」
「ええっ、お、お美年?!」
今度こそ、男は愕然として声を高くした。
「お美年? お美年というと、もしや谷中の?」
「そうですよ。花屋の勘兵衛親分の娘さん、あのお美年さんのことですよ」
老人はいいながら、ほおかぶりの顔をじいっと見つめた。
「それにしても、随分びっくりなすったようですが、失礼ですがお美年さんと御懇意のお方なのですか?」
「いいや、いや。ただ、あまりよく似たお話だったものですからね。あっしも、実アあるお屋敷の姫君さまのことで唐人飴屋に会いにきたもんだから……」
ほおかぶりの男はさりげなくいいながら、顔をそむけて足早に歩いた。
いつの間にか、寺地を抜け出て、人通りのとだえた裏通りに出ている。
「それで、一体、そのお美年って娘さん、どうしたってわけなんです?」
ほおかぶりの男は顔をそむけたまま聞いた。
「さあ、ここまでくりゃアじゃまは入らねえ。ゆっくりお話を聞こうじゃありませんか。それで、その娘さんは?」
「わしのところへおあずかりしていたのに、急にどこかへ姿を消してしまわれたのですよ」
「ふうん」
と、耳をそばだてる。
「事情のある娘さんなので……うっかり表へお出ししたらどんな間違いが起こるかもしれず、しっかり手元におあずかりしておくつもりだったのに、今朝方、わしがちょっと留守にしたすきに、黙ってどこかへ姿を消してしまわれましてね。家人はだれもしらない、だれもそれっきり姿を見た者がないのです。心当たりは残らずしらべたが行方が分かりません。ことによったら、ある人物にかどわかされでもしたのではあ

るまいか……いや、疑う理由があるのです。そして、もしそれが本当だったとすると、こりゃもうとんでもない恐ろしいことなので……娘さんの一命にもかかわるかしれないので……すててはおけませんから、唐人飴屋のところへとんでまいりました。あの呉龍角なら、そのある人物のことをしっているはずだと思ったからです。ところが、龍さんは留守でしてね。
是非とも会わねばならないから、日暮れのころからずうっとあの家の近所で待っていました。すると、あなた、やってきたのはあのお侍たちですよ。あの人たちは時々道灌山の辺りへ姿を見せるたちのよくない御浪人衆でしてね。なんでも千川万作という剣術の先生のお弟子さんたちだそうですが……。
何の用で来たのかと物陰から見ておりますと、家中家探ししたあげく、わしと同じように物陰へ身をかくしてだれかを待ち伏せていらっしゃる。そこへいらっしたのがあなたというわけですよ。
失礼だが、御人体からしてきっと龍さんとお知りあいの方だと思いましてね。お会いしてお頼みしたいと思ったのです。どうしても唐人飴屋に会わねばならないのです。急いで会いたいのです。お願いです。もし御存じでしたら、是非あの人の居どころをおしえていただきたいのですが……」
「お話アよく分かりました。だが、あっしも唐人飴屋をさがしているんです。居どころがわからねえのです」
「お分かりではないのですか? ああ、それは困りました」
「だが、きっとつきとめます。つきとめたら、何をおいてもお知らせします。失礼だが、お名前は?」
「尾久の百姓で、林久左衛門と申します」
と、老人はつぶやくようにいった。

空には暁の色がほのかに白く漂っていたが、上野の森はもとより、池も島もまだやみの底に音もなく眠っていた。
　中の島の弁財天の社殿のわきにぴったりと体をはりつけて立っているのは仙太である。
　もう約束の七ツ（四時）には間もなかった。
　花太郎の野郎、あれほど堅い男と男の約束をかわしたのだから、まさか来ないわけはあるまいと思っている。
　仙太は、片手に十手をもち、懐には匕首をのんでいた。相手が相手だからどんなことになるか分からない。場合によったら、とっさに匕首をぬくつもりだ。命さえとらなければ、腕の一本くらいたたっ切ってもやむをえないと覚悟している。
　お美年さえとりもどしてしまえば、もうこっちの方に弱みはない。敵は花太郎と三四郎だ。見ていやアがれと、ぞくぞくするほどの緊張であった。
　それにしても、どうしやアがったのだろう？　素手でくるわけではない。駕籠にのせてお美年を運んでくるのである。もう、ちょうちんの灯か、それとも灯は消していても影法師くらいは見えそうなものだが……。
　中の島へ渡る橋は上野の森に向かってたった一本きりしかない。ここからにらんでいれば見逃すはずはないのだがと、仙太はその方へ目をすえたまま身じろぎもしなかった。
と――
　仙太は、ぎくっとしたように、急にうしろをふり向いた。
　ざぶり……と、魚でもはねたのか、うしろの池の方でかすかな音がしたからだ。
　ざぶり……。
と、また音がした。
　ささささ……と、はすの葉のすれあう音まで聞こえてくる。
　やみの中に、やみよりも濃い舟の影を認めた

のはその瞬間であった。
と思う間もなく、ざわざわっとはすの葉をさわがせて、舟は滑るように岸についた。
　同時に、人目を避けるため覆ってあったらしい黒布がとりのぞかれたらしく、ぱあっとちょうちんの灯がひろがって、その姿をありありと映しだした。
　棹をとっていたのは花太郎であった。うしろに駕籠と駕籠かきの影が見えている。
　花太郎がちょうちんをとって島へあがると、駕籠がすぐそのうしろにつづいた。
「仙太、よく来たな」
と、まるでとうから仙太の姿を見通していたように花太郎がいった。
「男と男の約束だ」
「うむ、立派なものだ」
にやっと笑ったらしい。
くそッ、だまそうとしたって、そうはいかねえぞ。しかとお美年ちゃんの姿をたしかめるまでは、一歩も近寄りゃアしねえぞ……。
　と、仙太は懐にある例の小鈴を上からしっかりとおさえ直した。
「さあ、はええとこ取り引きだ」
「いいとも。望むところだ。駕籠の中を見せろ」
「見ろ、よく見ろ。納得のいくまで、しっかと見ろ」
　花太郎は、駕籠の垂れをぱっとはねのけながら、ちょうちんの灯をその方へずいっとつきつけた。
　駕籠の中の女はぐったりとしていた。
　うしろ手にくくりあげられ、胸元にかかったそのなわが乳房の辺りをくびれるほどにしめつけている。
　横座りになったそのひざがしらと、足首の辺りにもくくりあげたなわの色が見えていた。
　髪が根がぬけて、襟首から肩のあたりまで乱れかかり、血の気のうせた白蠟のようなほおにはさるぐつわが食いこんでいる。

まとっている衣類の絵柄が町娘には似合わしからぬ立派なものだったが、お美年がどこでどうしていたかしる由もない仙太は怪しみはしない。
　いや、怪しまないというより、衣類の様子などまるで見もしなかったといった方が本当であろう。
　――お美年ちゃんだ！
と、一瞥したまま、口の中でうめいた。
　そのむごたらしさが、仙太の胸を、きいん！……と音たてて痛みのように走った。
　それでも、だまされまいと思う用心が仙太をしきりに制している。
「さるぐつわなんぞしやアがって……それで分かるか。さるぐつわをとれッ」
「……」
　花太郎は、無言のまま、なぜかにやっと笑いながら、手をのばして乙女のほおから手ぬぐいをはぎとった。
「兄い、いい用心だ。さすがだ。ほめてるんだぜ。さあ見ろ。得心のいくまでようく見ろ」
「うむむ……」
　うめいたのは、仙太の胸をもうたまりかねたような痛みがしめつけたからだ。
　女はぐったりしている。目をとじたままだ。失心しているのか、さるぐつわをとられても、ぐったり顔をかしげたまま動きもしなかった。
「お美年ちゃん、おれだ！」
　と、仙太は思わずいった。
「もう大丈夫だ。しっかりしてくれ。おれだ。仙太が助けにきましたぜッ」
　しかし、女はやっぱり身動きもしない。完全に気を失っているらしい。
「畜生ッ！」
「何が気に入らねえんだ？」
　と、花太郎はあざわらった。
「顔を見ただけでは得心がいかず、口をきかせて声までたしかめようというのかい？　そいつ

アおあいにくさまだったなア」
「畜生ッ、よくも……よくもそんな目にあわせやアがったな」
「大事にしたんだがなア。ちょっとかわいがり方がすぎたんで気を失ったらしいが、まあ我慢しな。だが、兄い、いいところで手を打つ気になったぜ。まだお美年は傷物にはなっちゃアいねえ。明日のことは約束出来ねえがよ」
　にやっと笑ったその言葉の中には、早く取り引きをすまさないと女が傷物になるぞという威嚇がこもっている。
「やいッ、三下ッ。どうするんだ？　取り引きをどうするんだ？　いやかおうかッ？」
　やにわに、花太郎が叱咤した。
「くそッ、いまに見ていやアがれッ」
　仙太は二、三歩つかつかっと前へ出た。
　その片手には小鈴を、片手にはすわという時の用心に十手が握りしめられている。
「よしッ、取り引きだ」
　花太郎も一歩前へ出た。
　仙太はそれがおとりであることに気がつかない。お鶴さまとは知る由もなかった。
　よく似ているといっても、町娘と大旗本の姫君さま、生まれも育ちも違うのだから、目をすえてみて見分けのつかないはずはないのだが、まさかお鶴さまともあろう人がこんなところへ出てくるとは思いもよらなかった。
「てめえのほしいものはここにあるんだ」
　仙太は左手で内懐をさぐって、手ぬぐいの中に大事に畳みこんである銀の小鈴をとり出した。
「さあ、取り引きだ。お美年ちゃんのなわをとけッ」
「まあ、先に御持参の品を見せてもらおうじゃねえか。念のためにな」
　と、花太郎はいった。
「こっちでもさんざん駕籠の中をお見せ申したんだ。兄い、それをかしな」

「野郎ッ、妙なまねをしやアがると承知しねえぞ」
「くどい野郎だ。もらうものをもらったら、お美年は黙って渡してやる。男と男の約束だ。さあ、それをこっちへかせッ」
「よし、今の一言忘れるなよ」
　仙太は、手ぬぐいぐるみ小鈴を左手にもって前へ突き出しながら、右手は油断なく十手を握りしめている。
　歩みよるなり、無造作にそれをうけとった花太郎は、手ぬぐいをひろげてちょうちんの灯にかざしながら、しばししげしげと見入っていたが、
「間違いねえ。たしかにこれだ」
と、大きくうなずきながら、そのままねじこむように懐へしまった。
「兄い、ありがとうよ。もらっとくぜ」
「さあ、今度はこっちの番だ。お美年ちゃんのなわをとけッ」
「好きなようにしたらいいだろう。ときたきゃアてめえでとけよ」
「ようし……」
と、仙太は勢いこんで駕籠のそばへはせよっていく。
　駕籠の中へ顔を突っ込んで、十手を匕首にもちかえようとしたのは、なわを切ってすてるつもりからだったが、そこにすきがあった。
　駕籠かきの一人が、ものもいわず、やにわに息づえでもってその向こう脛（ずね）をなぎ払ったのである。
　あっ！　といって転がりながら、さすがに一度ははね起きたが、とたん、横から突風のように飛んできた花太郎が、すさまじい体当たりをくれた。
　一間の余も向こうへけしとび、転がり、あげくのはて、どぶんとはす池へ落ちこんでしまったらしい。
「や、や、野郎ッ。はかりゃアがったなッ。男と男の約束だなんて、口じゃきれいなことぬかしゃがって！」
　どろ水の中をもがきながら、仙太は歯がみしてわめきたてた。
「約束？」
　花太郎はうそぶくようににやりと笑った。
「おれアお美年を渡すと約束はしたが、榊原のお鶴さまをてめえにやると約束した覚えはねえぜ」
「な、なにをッ？」
「血のめぐりの悪い兄さんだ。お美年の居どころがわかりゃア、なにもてめえをそそのかして小鈴のありかを探しゃアしねえ。じかにお美年にきくだけのことだ。おとりをそれと気づかなかったてめえのあほうさからだとあきらめなよ。ざまア見やがれ、三下野郎ッ！」
　いつの間にか、駕籠はもとの舟へ移されたらしい。ふっと灯が消されて、たちまちはす池をくぐる舟の気配が向こうへ遠ざかっていく。

黄金の太刀

　空が白むと一緒に漂いはじめた朝もやが、金森家の中屋敷をとっぷりととざしていた。
　江戸の秋はその朝もやと一緒におとずれるというが、乳色の影を作ってゆれている庭先の木々のたたずまいにもそこはかとない秋のにおいが感じられる。
　空は明けていたが、屋敷うちはまだ眠っていた。
　若殿源之丞の寝所には、ひっそりと行灯（あんどん）がともっている。その灯の近くに、源之丞は起き出たばかりの寝巻きのままの姿でむずと座し、何か？　といぶかるように入ってくる惣兵衛（そうべえ）の方を凝視していた。
　老臣惣兵衛は、紋服の上へあわただしく袴（はかま）をつけただけの姿で、足早に入ってくるなり、座る間もあらず、
「御寝中、おそれながら……」

と、早口にいった。

この老人がこれほどあわてているのは珍しい。

「じい、火急の用とは何事か？」

「は、ただいま榊原さまよりの急の御使者が……」

「榊原?!」

といったきり、源之丞は露骨に不快な顔をした。

お鶴さまにはさんざんじらされている。榊原からときならぬ使者とあれば、どうせろくなことではないと直感したからだ。

「鶴どののことか？」

「は、お鶴さまが……」

「申すなッ。もはや、聞く耳もたん。今度こそ、あれほど確約し、祝言の日取りもきまったに、いまさら延引は承知ならん。使者を追いかえしてしまえッ」

「いや、若、さようではござりませぬ。昨晩、突然お鶴さまのお行方が知れなくおなりあそばしたそうでございます」

「な、なにッ?!」

と、さすがに顔色が変わる。

「行方が知れんとはどういう意味か？　鶴どのは家出されたのか？」

「いやいや、かりにも榊原家の姫君が家出などとはしたないまねをなさるはずはございますまい。何者かにおかどわかされあそばされた由うかがいました」

「すりゃ、いよいよ聞きずてならん。鶴どのがかどわかされたとは何事かッ。いやしくも八千石の旗本の息女が……じい、子細を話せッ。くわしく申せッ。かどわかしたとは何者の仕業かッ？」

「しかとはしれませぬが、花太郎と名乗る例のくせ者らしい由にございます。火急の大事ゆえ、もしお心当たりあらば御当家にも御助力願いたいと、さようお使者の口上でございました」

「うむ……花太郎かッ。花太郎の仕業じゃと申すのかッ」

「それ故、若、じいが前々から御注意あそばしますよう申し上げておりました。きゃつめは御当家にとりまして容易ならざる相手でございますぞ」

「じい、そもそも花太郎とはなにやつなのか？　きゃつはなにゆえくりかえし執拗にあだをなすのか？」

「されば、若……」

と、惣兵衛がいいかけた時、突然、外廊下に面した明かり障子をぷすっと破って飛来した一本の小柄が、危うく源之丞のひざ元をかすめてそばの行灯の台に突きたった。

その小柄の柄には、堅くやの字に文が結びつけてある。

愕然とした惣兵衛が、にじり寄りざま引きぬいて結びつけた文をひらいてみると、例の花という字がたった一つ……。

すわ！

と、惣兵衛が刀をおっとって立ちあがった気配は老人とも思えぬ敏捷な身ごなしだったが、それよりも早く、

「じたばたするねえ。動くと危ねえぞッ」

と、どすのきいた含み声が、ぴしゃっと出鼻をたたきかえすように響いてきた。

同時に、雨戸が一枚、音もなくさっとはずれて、暁の薄明かりが障子へさあっとさしかけてきた。その薄明かりの中に、男の影法師が一つくっきりと立って呼ばわっている。

着流しの片すそをぐいとたくしあげ、顔は手ぬぐいで包んでいるらしい。

「騒ぐな、動くな、声を立てるなよ。いいや、お前さんたちのためを思っているんだ。あたら騒いでけがでもしたら物笑いのたねだろうぜ。なあに、安心しな。手出しをしようとしてるんじゃねえ。しんみり聞いてもらいてえ話があってきたまでだ。やいやい、じいさん、何をうろ

うろしてやがるんだ。静かにしなってことよ、おとなしく座りなっていってるんだよ。妙なまねしやアがると、ずどん！　といくぞ」
　懐の中へ片手をさしこんで影法師がなにやら短銃でもまさぐっているらしいそぶりを見せている。
　事と次第によったら何をしでかすかも分からない殺気だったものが、ただの威嚇でない、ぞっとする予感をみなぎらせていた。
「うぬッ、花太郎だなッ」
「おうさ、その花太郎だ。いやさ、花太郎さまといえ、花太郎さまと……」
　と、障子の向こうでその声がせせら笑った。
「源之丞さま、おれアお前さんにとっくり聞いてもらい申してえんだよ。お前さんは知りなさらねえ。知らされていねえんだ。だが、知らないじゃアすまされねえとんでもねえ秘密があるのさ。金森家の秘密さ。ことと次第によっちゃア、金森家の屋台骨がぐらぐらゆれだすかもしれねえ大変な秘密だぜ」
「黙れッ、くせ者ッ」
　と、惣兵衛が叱咤した。源之丞の前へ仁王立ちになったのは、もしもの場合、鉄砲の防ぎになって若殿を守るつもりだろう。
「ここをどこと心得るかッ。御寝所じゃぞッ。さがれッ、申すことあらば、さがって、しかるべき手づるをもって言上せいッ」
「よせやい、じいさん。しかるべき手づるとは笑わせるじゃねえか。それで事がすむなら苦労はしねえや。ねらいにねらっていたこの機会だ、いうだけのことをしゃべらねえうちは、金輪際あとへ引きゃアしねえぞ」
「うぬ、この痴れ者がッ」
「よせってことよ。いくらお前さんが盾になっても、その胸板をぶち抜いてうしろにおいでのお人までずどんとやっつける強薬がこめてあるんだ。おっとっと、あわてるねえ。だからといって、そっちでおとなしくしていりゃア手荒な

ことはしやしねえよ。もしも源之丞さまをやっつける気なら、とうの昔にいくらでも片付けていらアな。やいやい、おとなしくして話を聞くのか、どうするんだよ。ことわっとくが、お鶴さまはだれにも分からねえところに押しこめてあるんだぜ。おれにもしものことでもあったり、おれのもどりがおそくなったら、あたらお姫さまの干物が出来上がるって寸法よ。金森家の花嫁さまがどこの馬の骨とも分からねえ野郎にかどわかされ、あられもねえ姿で野垂れ死にしたと聞いたら、さぞ世間さまが喜ぶだろうぜ。やいッ、どうするんだッ？」
「惣兵衛、ひかえいッ」
　と、源之丞がいった。
「花太郎とやら、わしは源之丞じゃ。話すことあらばはよう申せ」
「さすがにお殿さまだ。話を聞こうとおっしゃる。おい、そこにいるじいさん、お前もしりをおちつけて、すなおに聞いたらどんなもんだい」
　花太郎の声がせせら笑った。
「そうだ、そうだ、そのとおりおとなしくしてるんだ。おとなしく話を聞いてみた上で、腹が立ったら騒ぐなとわめくなと好きにしろっていってるんだよ。いいか、絶対声を出すな。黙って聞け。おれがいいっていうまで動くなよ。ぽつぽつそこらで起き出すやつがある時刻だ。気づかれて騒ぎになったら、おれアお鶴さまの命ア保証しねえぜ。みろ、そういってる間にも、寝ぼけっ面のひょうきん野郎があんなところへ出てきやアがった……」
　声をとぎらせて雨戸の陰へすうっと吸いこまれるように影をかくしたのは、丁度、庭の向こうすみあたりに、庭番らしい小者が一人、ほうきをかついで通りすがる姿がちらっと見えたからだ。
「簡単にしゃべるぜ。しゃべり直しはしねえ。そのつもりで、聞きおとしのねえように聞いておくんなせえよ」

と、やがてまたその声が話し出した。

「今からいやアもう二十三年前、御当家に初の男の子が生まれたんだってねえ。産んだお腹様はお側妾の水尾という人で、場所は丁度この中屋敷だったってねえ。世継ぎの男の子だから、御当家のしきたりに従って花太郎という名前をつけ、家伝の小鈴を守り袋につけて賜ったそうだってねえ。順当にいきゃア、ちょうよ花よと育てられ、今ごろは御当家のお世継ぎさまでふんぞりかえっている男の子なんだ。ところが、どうでえ。生後一ヵ月とたたねえうちに、水尾という人は根も葉もねえ無実の罪をおっかぶせられてなぶり殺し同様の目にあって死んでしまい、花太郎の方はそのまま行方しれずになって、うわさじゃア野垂れ死にしてしまったそうだってよ。その二人をわなにおとして殺した張本人は、当時小納戸役だった柴田新五右衛門と、それに、源之丞さま、お前さんの御生母さまであり、お正室でもあったお茂の方さまというお人だったんだ。おっとっと……待ちねえ。何もいうな。黙って聞けッ」

と、その声がおっかぶせるように叱咤した。

「どんなむごたらしい手段で水尾親子が片付けられたか、おれの口から聞くよりは、それ、そばにいるじいさんにあとでゆっくり聞きなさるがいいだろう。二十三年前、この中屋敷でどんなことが行われたか、間島惣兵衛さんなら多分おれよりもようくしっていなさるはずだからね。

さあ、話アその先だ。行方しれずのまま野垂れ死にしたはずの花太郎が、どっこい生きていたんだぜ。もっとも、生きていたというだけで、浮き世のどん底をうじ虫同然にはいずりまわって、やっとその日その日の命を食いつないでいく世にも惨めな生きかただったがね。

花太郎が物心ついた時、野郎は非人こじきの仲間にへえっていたのさ。成長するにつれて、身につけ、おぼえたことといえば、けんかに悪

事に人殺し……世が世であれば、金森家のあとをつぐべき花太郎がだぜ。

おい、お前さんたち、分かったか？　いや、とうからうすうす見当ぐれえはついていたんだろうなア。おれアその花太郎なんだ。源之丞さま、お前と血のつながるれっきとした兄上さまなんだよう、このおれは……」

いつか行灯の灯がまったくうすれて影を失うほどあたりは明るくなっていたが、源之丞も惣兵衛もそれさえ意識しないようであった。

源之丞はむっとまゆをしかめている。だれかに向かって詰問の声を浴びせかけたいはげしい衝動をじっとこらえているという気配であった。

「お懐かしいと申そうか、お恨みだと愚痴ろうか……同じ血を分けた兄弟が、今こうして障子一枚へだてて向かいあいながら、さても、とんだ身分境遇の違いようだなア……」

と、自嘲するような声でいった。

「いや、分かっていらアね。お前さんはまゆにつばをつけていなさるね。信じやしなかろうさ。あとでゆっくり惣兵衛さんに聞いてみるんだなア。その上で、信じようが信じめえが、お前さんの勝手よ。おれアいうだけのことをいわしてもらうだけだ。

やつらはよってたかって水尾を責め殺してしまったんだぜ。まったく覚えもしねえ罪をおっかぶせてねえ。おれのおふくろさんをだぜ。

花太郎と名乗るとんでもねえ野郎が、ずうっと前から江戸をさわがしていたのは御存じだろうねえ？　芝神明の御家人、麻場喜十郎。浅草馬道の金貸し伊勢屋権六。それに、品川御殿山下のばくち打ち片目の伍平に、黒門町の質屋、丸屋重右衛門とねえ。髪を切ったり、耳をそいだり、じゃまするやつアたたっ切ったり……。お察しがつくかね？　しゃれや冗談、ましてや根も葉もねえこしらえごとで、だれがそんなつまらね

えまねをするだろうかね？
　復讐だ。おれにとっちゃア、生涯かけた仕返しなんだ。おれのおふくろをよってたかってなぶり殺しにしやアがった憎いやつらに、心ばかりのいささかなお返しをつかまつっているだけなんだ。
　恨み憎しみのふけえやつらほどあとに残しておくのがおれのやり口だと思いな。ふてえたくらみを仕組みやアがって、おれのおふくろを殺し、おれを路頭にほうり出しゃアがった張本人、八つ裂きにしてもあきたりねえやつが二人いる。はっきりいうぜ。一人は、お前さんの産みの親、金森家の御正室、お茂の方さま。もう一人は、今御当家でお留守居役にのほほんと納まってときめいていやアがる柴田新五右衛門さ。
　お茂の方さまは五、六年前にお亡くなりになったってねえ。死んだ者はしようがねえ。残る新五右衛門こそ、一番あとに残しておいて、胸のいえるまでとっくり恨みを申し上げさせていただく野郎なんだ。
　安心しなってことよ、源之丞さま。
　おれアお前さんにはなんの恨みもありゃアしねえ。ちいっとばかりおどかしたことはあったが、それ以上なんにもしやアしねえ。仮にもお前はおれと血をわけあった兄弟なんだ。第一、お前を痛めつけ、金森家に傷をつけたところで、おれに三文の得もあるわけじゃアねえからのう。
　だが、金森家に対して多少のいい分がねえわけじゃアねえんだぜ。だれがなんといおうと、おれア世が世でありゃア御当家の跡継ぎになる男だ。そっちでうんといおうと否といおうと、おれのいい分はとおさせてもらうぜ。
　さあ、これで前置きがすんだんだ。おれがどういう人間か、これで少しは分かってもらえたろう。これから、おれのいい分というやつを申し上げる番だ。
　おっとっとっと……動くなッ。じたばたする

なアまだはええぞ。おめえたちのすることが一つ一つお鶴さまの命につながっていることを、ちゃんと胸にしまって覚えておけッ。
　ほう、大分あちこちでがたがたはじめやアがったな」
　いいながら、障子の向こうの影法師はじいっとあたりへ目を配る気配を見せた。
「時間がねえ。人目についたらお互いさまにためにならねえから、てっとりばやく申し上げるぜ。たった一言ですむんだ。おれア金森家に伝わる三つの小鈴がほしいんだ」
　と、その声は一語一語くぎりながらゆっくりといった。
「いまさら、おれの生まれ素姓をふりまわして、金森家へ因縁をつけ、大そうもねえものをふんだくろうなどとはいやアしねえ。申し上げることは、ほんの些細な、つつましいものなんだ。あの三つの小鈴だよ。金森家の跡取りに生まれたら、花太郎という名前と一緒にもらうあの小鈴だ。おれが花太郎であるかぎり、大威張りでおれのもんだといいはれるあの小鈴だよ。なあ、些細なもんだろう。金森家の家伝の品とはいっても、たかがあれだけのちっぽけな鈴なんだ。それをおれがほしいといったって、御当家ではちくりとも腹は痛みゃアしなかろう。
　しかも、三つの鈴のうち二つはすでにおれの手に入っている。その一つは、おれが生まれおちると一緒に守り袋につけて与えられた品なんだ。おふくろがなぶり殺しの目にあった時、おれの命まで危ないと見てとった忠義な家来が二人いてねえ。一人は下男の喜内という男、一人は水尾付きの女中だったお高という女だ。二人はおれを抱いて金森家から脱走したんだが、やがてわかれわかれになってしまい、喜内に抱かれて逃げまわっていたわしは、喜内の急死と一緒に、いつか非人の群れにまじってしまったことは前にも話したとおりよ。
　小鈴はその時お高の手の中にあったんだが、

忠義いちずのこの女は、いつかはおれにめぐりあうことを信じて、大事にそれをもっていたんだなア。
　江戸の町に花太郎という怪物が出没するとうわさをきいたお高は、すぐそれが、おれだ、花太郎だと気がついて、なんとかおれをさがし出し、その小鈴を手渡そうと苦心していたらしいんだ。
　その一心が通じたというか、それとも天道は正しい者にお味方なさると抹香くせえ文句でも引き合いに出すか、その小鈴はめぐりめぐってちゃんと今ではおれの手にへえっているんだ。
　もう一つは、御推察どおり……先夜、御当家の御用箪笥の中からちょうだいして帰ったぜ。残りは一つなんだ。
　いいや、そっちでいえるせりふはちゃんと分かってらア。残りの一つは、二十三年前、納戸役の木暮五郎蔵という男が失踪した時に一緒に姿を消してしまって、今でも行方しれずだ――と、そういいてえのだろう。
　つまり、その一つは木暮五郎蔵がもっているんだ。だから、五郎蔵の行方をつきとめさえすりゃアいいんだ。知ってる者があるんだよ、五郎蔵の行方を……。
　さあ、おれのいうことをよく聞くんだ。五郎蔵の行方をしってるのは柴田新五右衛門だ。野郎はしっている。しっていなければならねえ筋合いがあるんだ。
　野郎を問いつめてみろ。野郎は黄金造りの古い太刀を秘蔵しているぜ。その太刀こそ、花夜叉の守り太刀とよばれるもので、五郎蔵が花夜叉の墓穴から盗み出してきたものなんだ。しかも、柴田新五右衛門は五郎蔵の手からその太刀を横取りした。見ろッ、野郎は五郎蔵の秘密をしっている。五郎蔵について何もかもしっているのは新五右衛門なんだ。
　二十三年前、金森家の藩中で、ほかのだれも知らないうちに、二人の近習役の間に奇妙な暗

闘がつづいていたと思いねえ」
　すでに屋敷うちのあちこちに起き出た家臣たちの気配が重くなりはじめていたが、花太郎はおちつきはらってしゃべっていた。
「木暮五郎蔵は、金森家の古文書を調べているうちに、ふっと思いがけずも花夜叉のことをしったらしいのだ。金森家の古い古い伝説の中にうもれていた希代の盗賊のことをだぜ。そうして、とうとう花夜叉の墓場をつきとめ、そこから黄金造りの太刀をひそかに盗み出してきたのだ。そのことをたった一人気づいたのは、当時同役だった新五右衛門という野郎だ。
　新五右衛門は五郎蔵を罪におとしいれて追いつめ、ついに人知れず命をうばい、永遠にどこかへほうむり去ったことは明らかな事実だ。
　彼がなんといおうとも、花夜叉の太刀をうばって極秘に秘蔵していることが何よりの証拠じゃアねえか。ということは、同時に、やつがもう一つの銀の小鈴を奪いとってもっているということになる。いや、少なくともやつは五郎蔵の行方をしっているのだからなア。
　さあ、これで話はおわった。おれのいうことはたね切れだ。分かったかい、お二人さん。おれアその最後の一つの鈴をちょうだいしてえのだよ。是非、お前さんたちの手からそれをおれの手へ渡してもらいてえのだよ。それが、せめても、おれの――あわれな半生を送った花太郎の、お前に対する腹いせなんだ。
　ただとはいやしねえ。交換に、お鶴さまをかえしてやろう。さあ、約束だ。花太郎地蔵のよだれかけにその小鈴を結びつけておきな。それが間違いなくおれのほしがっているものだと分かったら、すぐお鶴さまは榊原の屋敷へおくりかえすぜ。
　いいや、いやもおうも返事はいらねえ。そっちがどう思おうと、おれアおれのいうとおりにするまでだ。
　三日間だ。三日間待つぜ。今朝から丸三日後

のその時までに、ちゃんと約束をはたしてなかったら、おれアおれの好きなようにするんだ。けちなようだが、お鶴さまに仇をするかもしれねえよ。三日後のその時刻がすぎさったら、お鶴さまの体がもとのままでいると思うなよ。断じて、お鶴さまをおれの女にする。思いどおりに料理するから、そのつもりでいてくんな。

いいや、いやもおうもねえんだ。新五右衛門を拷問にでもなんでもかけて、責めてどろをはかしたらいいだろう。おれのしったことじゃアねえ。おれアただ、その三つ目の鈴が是が非でもほしいといってるんだ」

声がとだえた。

中廊下を忍びやかに通っていく侍女の足音が聞こえる。このごろ朝の早い源之丞のために、起き出たあとの手水や洗顔の用意をいそいでいるのだろう。

「じゃア、約束したぞ。三日間だ……」

障子の向こうの声は、語尾をあとへのこしてさっと庭先へ舞いおりたらしい。

それまで凝然と座していた源之丞は、にわかに頭の上からのしかかっていた不快な圧迫を解かれでもしたようにさっと立ち上がった。

それよりも早く突っ立ち上がった惣兵衛は、ものもいわず障子を引きあける。

庭先の朝もやは一層濃くたちこめて、築山の向こうはすでに一面の乳白の海だった。

そして、あの花太郎と名乗る不敵なくせ者の影は、もうどこにも残ってはいなかった。

源之丞は、寝巻きのまま、縁先に突っ立って庭先を凝視していた。

朝もやの中へ消えさったくせ者の影を追っているというよりは、心の中に起こった動揺をじっと押し静めようとしている気配である。

癇癪が強いといわれている若殿の顔は、青白く沈んでぴりぴり震えているように見えた。

「じい、申せ。包みなく申せッ。きゃつめがいま申したこと、いちいち思いあたることがあるかッ？」

「は……」

「ぬけぬけと申しおったな。この源之丞に兄がある。己こそは当然当家をつぐべき身分、このわしの実の兄じゃと申しおったな。しかとそうか？ 思いあたることがあるかッ？」

「お尋ね故に申し上げます」

惣兵衛は、顔を伏せたまま、源之丞のすそ近くにじりよってくる。

余人に聞かせてならない話であった。

「彼が若君の兄上であられるや否やは決断いたしかねまするが、彼の語りましたことは必ずしも偽りとは申し上げかねまする」

「すりゃ、いちいち心当たりがあるのじゃな？」

「お家の御名誉に関する一大事ゆえに極秘になされおりまして、若のお耳にすら申し上げかねました古い秘密でございます」

「わしは何も知らなんだぞ。父君の御愛妾の中に水尾なる女のあったことさえ聞かされてはおらん」

「すべては遠くすぎさりました悪夢。お知りあそばされずばそれに越したことはない御当家の不祥事と存じおりました」

「先ごろ来、花太郎と名乗るくせ者が出没し、はては当家や榊原家にまで不遜な張り紙をもって挑戦しきたった時、わしはそちにその理由を問うたはずじゃが、知らぬ存ぜぬといい張ったではないか」

「恐れ入りましてございます。江戸の花太郎と名乗るその名前を耳にし、その所業をうわさにききますにつけ、もしや？ と内心憂えてはおりましたが、若君に申し上げずにすむことならそれに越したことはないと考え、今日まで姑息無為に打ちすごしましたこと、なにとぞお許しくださいますよう……」

「話せ。残らず話して聞かせい。得心ゆくまで、包まず申せッ」

「では、若、お心をしずめお聞きくださいます

ように……」
　と、惣兵衛の声は憂悶をふくんでいよいよ低くなっていく。
「彼が申し上げましたとおり、二十三年前、水尾と申します大殿さま御愛妾をめぐりまして、まことに不吉な出来事がおこったのでございます。水尾どのは当時納戸役でございました木暮五郎蔵なる者の推挙によって御当家へ御奉公にあがり、やがて大殿さまのお目にとまりましてお側妾の数に加えられた女性でございますが、まもなく大殿さまのお胤を懐胎し、男子を出生、御当家のお定めにより花太郎という御幼名を賜りましたこと、彼の話のとおりなのでございます。
　しかるに、当時同じ納戸役でございました柴田新五右衛門より、水尾どのと五郎蔵との不義のことひそかに内訴することがございまして、しかも数々の不義の証人が現れ、水尾どのはその申し開きかなわず自害してはてられ、五郎蔵もまた出奔してそのまま行方知れずになりおおせましたことも、まったく彼の話のとおりでございます。
　その折、水尾どの不義の証人として新五右衛門が差し出しました者は、当時、上野池の端で出会い茶屋を営みおりました権六と称する者に、その家の番頭喜十郎、また権六のもとへ出入りしております駕籠かきの伍平と称する連中でございましたが、彼らは口をそろえて、水尾どのならびに木暮五郎蔵に不義の宿をかした覚えがあると申し、それも一度二度ならず、一年有余の間に十数回にも及びましたことと相違ないと申し立てたのでございます。
　事はお世継ぎに関する重大事でもございます故、われら重役ども極秘のうちにきびしく取り調べましたが、証人どもは口をそろえて相違ないと申し立てまするし、かつまた、いろいろ取り調べおりますうち、水尾どのの身元にははなだふにおちぬあやしい点が露顕いたしてまいりました。
　と申しますのは、五郎蔵は国表におります彼の妻女身寄りの者と申して水尾どのを御当家へ推挙いたしたのでございますのに、取り調べの結果それが真っ赤なうそであり、まったく身元も素姓も明らかならぬ怪しい女ということが判明いたしたからでございます。
　しかも、彼らはそのことに関して申し開きがならぬばかりか、なぜか口を閉ざして明らかに答えようといたしませぬ。
　そのため、大殿さまのお怒りははなはだしく、きびしく水尾を責め問いせよと御沙汰がございました。
　そのことにたずさわりましたは、御正室お茂の方さま付きの女中お兼と申します者と、小者の重右衛門と申す者でございましたが、その二人の者は評判の忠義の者たちでございまして、お茂の方さまの御心中を御推察申し上げることあまりに深いため、いささかその責め問いがきびしいものに過ぎたようおうわさをもれうかがっております。
　おそれながら、当時お茂の方さまは若君を御懐妊中でいらせられ、水尾どのの産みおとされました御子と、お茂の方さまの御子といずれがお世継ぎになるか、下々のうわさもしきりにございましたほど故、お茂の方さまの御心中を御推察申し上げましたお兼と重右衛門が、水尾どのに対し過酷なふるまいのありましたことも、あるいはうわさのみでなく、事実であったかとも存ぜられます。
　そのような次第にて、当中屋敷の土蔵の中に閉じこめられておりました水尾どのは無惨な姿で自害してはてられたのでございますが、その節、水尾どのの旨をうけましたものか、水尾どの付きの女中お高と申します者と、老僕喜内と申します二人が、花太郎君をお連れ申し、ひそかに脱走して行方しれずに相成りました。
　彼らの行方は暗々のうちにきびしく取り調べ

おりましたが、かれこれ二ヵ月余り後のこと、喜内一人が内藤新宿の辺りにてみつかり、彼の口から、花太郎君はお屋敷より脱走後まもなく病没あそばされたこと判明いたしました。
　その喜内もまもなく牢中において縊死をとげあいはてましたし、お高の行方もしれず、また一方、木暮五郎蔵も水尾どの自害と前後して藩中より脱走し、それきり行方もしれず、生死のほども分からぬまま、このことは一応落着とみなされ、以後はきびしく秘密にふされて今日まで立ち至った次第なのでございます。
　ところが、若……」
と、惣兵衛は言葉をきって、じいっと源之丞の顔を見上げるようにした。
「その後になりまして、いろいろと奇妙なことが起こってまいったのでございます。その第一は……」
　惣兵衛は源之丞の横顔を見つめたままでいった。
「御家の御菩提寺に埋葬いたしました水尾どのの遺骸が、その夜のうちに何者かの手によって掘りかえされ、いずこともしれず持ち去られてしまったのでございます。これがそもそも奇妙なことの第一でございまして……。
　つづいて奇妙なのは、柴田新五右衛門の行動でございました。彼は、水尾どのの不義を摘発し、花太郎さまを追放申し上げたということよりして、お茂の方さまのお覚えめでたいことは当然といたしましても、しかも彼のわがもの顔のふるまい、およびそれをおかばいあそばすお茂の方さまのなされ方には、おそれながら、心ある者ひそかにまゆをひそめるほどのものがございました。
　かつては水尾どのの手づるにより大殿さまに取り入り、一お納戸役にあるまじいほどのふるまいのありました木暮五郎蔵にとって代わり、彼新五右衛門はみるみるうちにのし上がり、やがてはお留守居役の要職を占めるまでに立ち至

ったこと、ひとえにお茂の方さまの御庇護、お引き立ての結果でございまして、彼の功績とはかりくらべましても、これはいささか奇異なるものを感ぜぬわけには参りませぬ。
　第三に――水尾どの不義の次第はすべて新五右衛門の作為による無実の罪であるという奇妙なうわさが、ちらっと手前の耳に入りましたことでございます。
　これのみにてもすておけぬと思いおりました折から、新五右衛門は花夜叉の太刀と称する黄金造りの古代の太刀を秘蔵しおるといううわさまでちらと耳に入り、もはやすておけぬことと存じ、手前自らひそかに事の究明にのり出した次第なのでございます。
　まず水尾どの不義の一件を明らかにするため、かつてその証人としてまかり出ました連中の行方を追及いたしましたところが、当時出会い茶屋を経営いたしおりました権六と申す者は浅草馬道へ移りまして金貸しをいたしおり、その店の番頭でございました喜十郎なる者は麻場と申す御家人の株を買いとりまして芝神明に住まいおり、さらに駕籠かきの伍平と申す男は品川御殿山下で名うての博徒の頭となっておりました。
　彼らは、水尾どの不義の証人の件に関しましては当時申し上げたとおりといい、深く問いつめますればすでに年数をへて詳しいことは忘れたなどと白々しく申しおりましたが、彼らが転業、ないし移住いたしますにつけ、どこからか大枚の金子をまとめて入手した形跡がございました故、さらにその金子の出所を追及しましたところ、なんと、すべて新五右衛門の手より出ておりましたではございませぬか。
　しかし、彼新五右衛門一人にそれほどの大金が自由になるはずはございませぬ故、さらにその金子の筋をたぐってまいりますと……若、失礼は幾重にもおゆるしくださいますよう。なにとぞ、お心をしずめお聞きくださいませ」

「じい、そちの申すことは分かっている。その金の出所は、わしの母上、お茂さまじゃと申すのじゃな?」
「仰せのとおり……」
惣兵衛は沈鬱な声でいった。
「また、当時お茂の方さま付きの女中でございましたお兼と、小者の重右衛門とは、事件後まもなくお方さまお口添えにて夫婦となりお暇を賜りまして、下谷黒門町に丸屋と申します質商の店をひらきおりましたが……一日、その店を訪い、お兼を問いつめましたところ、新五右衛門の言葉を信じ、お茂の方さまのおためを思う余りに、当時はただただ水尾どのが憎く、苛酷な責め問いをしすぎたと恐れおののき、今にして思うと水尾どのは無実の罪であられたのではないか、どうもそのような気がしてきて日夜後悔にせめたてられていると……さよう涙ながらに告白いたしたのでございます」
「すりゃ、じい。水尾不義の件は、亡きわしの母上と新五右衛門とがはかって作った虚偽の事実じゃと申すのじゃな?」
「恐ろしいことではございますが……花太郎さまは大殿さまの実の御子でいらせられたのではないかと……手前、今ではさように存じおりますが……」
「いまわしい出来事じゃ! 許しがたいことじゃ! じい、して、いかがいたした? それからどうしたのじゃ」
「次に、新五右衛門が花夜叉の太刀を所持いたしおると申すうわさでございますが、花夜叉とは御当家の創業のことにかかわり深い人物ゆえ、はなはだ怪しいことに存じ、新五右衛門の素行をつぶさに取り調べつかまつりました。
すると、はしなくも奇妙なことが判明いたしてまいったのでございます。木暮五郎蔵は水尾どのの手づるにより大殿さまにお取り入り申し上げた機会を利用し、容易に立ち入ることを許されぬお蔵の中にまで侵入し、御秘蔵の古文書

をとり出しましたり、はては御家伝の銀の小鈴にまで手をふれました形跡がございましたが、彼が失脚出奔しました後、新五右衛門がそれにとって代わりましてまったく同じことをやりましたことがあい分かりました。思うに、五郎蔵は御当家創業に関する何かの秘密をかぎつけてそれを私しようとくわだてていたらしく、新五右衛門が水尾どの不義のことを作為しましたのも、一つはお茂の方さまに取り入りまして立身出世いたそう目的でもございましたが、一つには、それより五郎蔵を追放し己がとって代わってその秘密を横領せんと企てましたものらしく……。
彼が御当家創業当時お館のございました道灌山の辺りへひそかに別宅を建てましたことも、また、どこやらより花夜叉の太刀なるものを入手しきたって秘蔵すると申しますのも、その野心のあらわれに相違ないものと存じおります。先ごろ来、手前が御当家の歴史古事に御関心をお持ちいただくよう若にお願い申し上げ、また、遠乗りのもどり道、花太郎地蔵の地下道へ御案内申し上げましたことも、また、何やらしかとはしれませぬが、彼らが必死にねらいおりまする御当家創業の秘密なるものを、新五右衛門めにむざむざと横領させまいと存じます手前の老婆心からだったのでございます」
「しかし、じい、なぜ今までそれを秘密にしていた? 少なくとも、水尾の罪が冤罪であったこと、わしに兄者人がいたことを、なぜ一言も漏らしてくれなんだッ?」
「おそれながら、若、そのことを明るみに出しますことは、御母君お茂の方さまにぬぐいがたい悪名を着せ申すことでございます。
これまでにも、柴田新五右衛門の過去を洗いたて、罪状を明るみへさらけ出してくれんと思いくわだてましたことも幾度かございましたが、いかんせん、その都度立ち至るのはお茂の方様の御事でございました。

手前考えまするに、新五右衛門の巧言にお誘われあそばしましたお方さまは、事の真相御存じなく、うかうかと彼に乗ぜられたもうたもののようにございますが、すべては遠い過去にうもれ、またお方さまもすでに御死去あそばされまして明らかな証人は求めがたく、もし強いて新五右衛門の罪状を追及いたしますれば、いやでもお方さまをおまきぞえにいたさねばならぬ気配があり、また、彼新五右衛門めもよくその間の事情を承知しておりまして、自分に都合よきお方さまの御書状などを秘蔵しおり、それを証拠と称し、みだりなことをすれば冥途(めいど)におわしますお方さまも安らかに御成仏なりがたかろうぞなどと、暗に威嚇する始末なのでございます」

「憎みても余りあるやつじゃな、新五右衛門めは！」

「まことにもって許しがたきやつとは存じますが、しかし、いまさらお方さまのお名をけがし、御当家の不面目を天下にさらすことはなりかねまする。しかも、すべては遠い過去にすぎさりましたことと、胸を押ししずめて何事も知らぬ顔をいたしてまいりましたが……」

「しかし、先刻の男をどう思う？　彼はまことの花太郎であろうか？　わしの兄者人と思うか？」

「もしまことの花太郎さまでありましたら、ひそかにその旨お申しいでくださってよかりそうなもの。さりとてもよしない非道な人騒がせをあそばされるものかなと、その点いささかふにおちぬこともあり、幸い花屋の勘兵衛のごとき心ききました味方を手に入れました故、一刻も早く彼の正体、花太郎さまであるや否やの真相を明らかにしてもらいたいものと念じおりましたのに、どうやらうわさのとおり勘兵衛は人手にかかって相果てました様子……」

「いかがいたせばよいか？　もし、彼が真の花太郎であればすててはおけまいが？」

「さよう。仰せのとおりでございますが、いましばらく様子を見とどけとうございます。それよりも、目下の急務はお鶴さまの御安否でございます。この際、彼の要求どおり、所望する小鈴を与えてお鶴さまを無事お救い出し申し上げねばなりませぬ」

「二十余年前から行方しれぬ小鈴が、うまく手に入ると思うか？」

「彼が新五右衛門こそその行方をしるはずと申しましたのは、しかるべき理由があり、それと信じる根拠があるからでございましょう。新五右衛門にしかとその旨申しつけます」

「新五右衛門はおとなしくそれを差し出すと思うか？」

「もし、彼がみだりな反抗をいたせば、手前にもいささか存じよりがございます。彼の姉、花村に申しつけ、しかと伝えさせますでございます」

「気の毒なのは鶴どのじゃ。当家のごたごたのため、なんの罪もないあのお人が思わぬ憂き目をみるとはふびんでならぬ。じい、しかとたのむぞ。余事はさて、鶴どののことはしかとたのんだぞ」

「心得ました、若……御心中重々お察し申し上げまする」

惣兵衛はそういって深く頭をさげた。そのことさらにしわの影が深く刻まれた顔には、もはやちゅうちょはならぬと決意したはげしいものが浮かんでいた。

館(やかた)のから井戸

花太郎地蔵から森を抜け、浅い谷をわたった丘つづきに、森とやぶにうもれてぽつんとたっている屋敷がある。

建物はこぢんまりしたなにげない造りだが、板塀(いたべい)を囲いめぐらした敷地は、谷の辺りから道(どう)灌山(かんやま)の崖端(がけはな)までとりこんだかなりに広大なものである。

柴田新五右衛門がそれを建てたのは、今から

もう十数年前になる古いことだが、当時まだ留守居役にも登っていなかった軽輩の彼が、いくら草深いこの辺りとはいえ、どうしてこれだけの土地を買いこみ、家を建てるほどの大金を持っていたか、もとより知っている者はなかったし、第一、金森藩中で彼がここに屋敷を造ったことを知っている者すらほとんどないくらいであった。

　よしんば、それを知っていたとしても、なぜこんな草深い不便なところに屋敷を構える必要があったのか、新五右衛門の真意を悟っていた者はほとんどなかったはずである。

「しかし、新五右衛門どの、惣兵衛はしっておりますよ。あなたがなぜここへ屋敷を造ったかという理由を……」

　青白んだ顔をこわばらせた花村の向こうに、新五右衛門の脂ぎった顔が傲然と座っている。

　その屋敷の奥の一間だった。

「そればかりではありません。あなたが二十三年前にお茂の方さまをおそそのかし申してやってのけたあの一部始終もしっているようですし、木暮五郎蔵の手から花夜叉の太刀を奪いとったことまで残らず見通しているようですよ。わたくし、惣兵衛に呼びつけられ、そのことを聞かされた時、もうおしまいだ、だめだと感じて、ふらふらっとめまいがしたくらいです」

「姉者、ちょっともおしまいではないのだ。だめどころか、すべてはいよいよこれから始まるのだ」

　新五右衛門はまゆも動かさずいった。

「惣兵衛が薄々感づいてわしの周囲を犬のようにかぎ回っていることは、とうの昔から存じている。今にはじまったことではないのだ。しかし、年寄りの冷や水めが！　何が出来よう。いくらかぎ回っても、最後には必ずお茂の方さまにつきあたるのじゃ。金森家の御後嗣、源之丞さま御生母の名誉に関することを、なんの、白髪首一ついくら振りたててもどうなることか。

それが証拠に、きゃつがこれまでただ一度でも、このわしに向かって過去のことを一言でも申したことがあるかな？　きゃつもバカではない故、うかつなことを口走って毛をふいて傷を求める愚はようせんのじゃ」

「ところが、そうでないのです。今日わたくしを呼びつけた惣兵衛の形相はただごとではありませんでした。あなたは五郎蔵の行方をしっているたった一人の人物であって、したがって五郎蔵が御宝蔵から持ち出して逃げた第三の小鈴の行方もしっているはず故、至急その小鈴を差し出せというのです。小鈴さえ手に入って、お鶴さまが無事におもどりあそばせば過去のことはすべて不問にふすが、事と次第によってはただはすまぬ、そうあなたにしかと伝えてほしいと、日ごろのあの人らしくもない激しい口調で申されたのですよ。このことは源之丞さまもすでに御承知ゆえ、遅滞はならんと……」

「好きなようにするがいい。もし、出来ることならな」

　と、新五右衛門は吐き出すようにいった。

「残念ながら、わしは五郎蔵の行方もしらんし、第三の小鈴の行方もしりはせんのだ。それが分かってさえいれば、何を今日までこの苦労をするものか！

　知らぬ、知らぬ、知らぬッ！　五郎蔵の行方もしらねば、小鈴の行方も分からぬ！　知らぬからこそ、このようなところへこのような無用な屋敷まで建てたのではないか。二十三年間、寝た間もわしの胸からはなれんのは、その五郎蔵の行方と小鈴の行方だったのだ。それが分かれば、小大名の江戸留守居役など、何をありがたがって勤めているものか。とうにこちらから縁切って出てうせている。この世の中でだれよりも五郎蔵と小鈴の行方を知りたがっているのはこのわしなのだわ」

　新五右衛門は皮肉な笑い方をした。

「姉者、今だから申すが、わしらは花夜叉の怨

霊にたぶらかされ、きゃつのとなえるあやしい呪文にきりきり舞いさせられていたのではないかと、ふっと後悔じみた苦笑いをもよおすことさえあってのう。二十三年間の努力が、一体何をもたらしたというのか？」

　彼は、背後の刀架にあった黄金造りの陣太刀をとりおろして、いまさらのようにしげしげと見入っていたが、

「見られい。この柄に『花』の一字を打ち出した黄金の目くぎが見えておろうが。この一刀が花夜叉愛用の陣太刀であったに違いないという確信があればこそ、二十三年間、わしは執念の鬼と化してこのことに打ちこんできたのじゃが……。

　そもそも、この太刀を探し出してきてひそかに愛蔵していたのは木暮五郎蔵であったが、それと気づいた瞬間、わしは花夜叉の秘密にとりつかれたといってよい。

　五郎蔵の奇妙なそぶりにはとうから気づいていて、それとなく目をつけていたのはこのわしであった。

　五郎蔵が、いつ、どこからどうやって花夜叉の秘密というものを察知し、野心を抱きはじめたかはしらんが、やがて、彼はどこからか水尾という正体不明の女をつれてきて、たくみに大殿さまの御愛妾に奉り、その手づるによって勢力を張り、金森家秘蔵の、しかも他見を許されぬとされていた古文書類をひそかに取り調べ、やがて水尾が花太郎様をお産みするや、吉例によって小鈴を賜る機会を利用し、すばやく三個の小鈴にまで手をふれた形跡があった。

　これらのことは彼の野望の容易ならざるものであることを証拠だてるものであって、しかもそのうち、彼がどこからか花夜叉の太刀をもちきたって秘蔵することを察知したわしは、もうすててはおけんと直感し、同時に、かねてからの計画を断固として実行に移したのじゃ。

　姉者もしってのとおり、お茂の方さまをそそ

のかし、その権力のかげにかくれて水尾の不義の一件を捏造し、一挙に五郎蔵を駆逐してのける……。

　わしの計画は、お方さまにとり入って些々たるお留守居役にのぼるようなつまらんことではなくて、五郎蔵があれほど必死になって追及しおった花夜叉の秘密をそっくりこちらへ横取りすることであったのだが……。

　五郎蔵を駆逐し、花夜叉の太刀をせしめ、彼の歩んだ道をたどりさえすれば容易に達しえられると思った計画が見事にはずれたとは、無念至極というか。以来、二十有年、執念の鬼となってあらゆる手をうち力をつくしたが、いまだに目的を達しえないのは、むしろ奇妙な心地さえする」

　広大な敷地をとりこんでいるというだけで、この屋敷には庭らしいものはどこにもない。

　昔からの武蔵野の名残をそのまま、茂るにまかせた森と雑草にうもれたようにぽつんとたっている建物であった。

　その建物の内外には千川万作一味の浪人者が張りこんで警固についているらしく、それらしい影が森の中をゆっくりと横切っていく。

　やがて、

　窓からその影を見送っていた新五右衛門は、

「バカなッ！」

と、やり場のない憤怒をたたきつけるようにいった。

「危険をさとっていち早く金森家を出奔した五郎蔵めは、まるで天空へでも消えさったかのように行方をくらましてしまいおった。彼を追ったわしの配下の者は、たしかにこの道灌山近くまで追いつめたといいながら、むなしく見失ってしまい、ついに今日まで二度と彼を見た者はない。

　水尾も自害してはて、その死骸も何者かにさらっていかれた。おそらく五郎蔵のしわざと思って、その時もあらゆる手はつくさせたが、ふ

しぎなくらい行方がしれぬ。
しかも、花太郎さま御失踪と一緒に一個の小鈴が、そしてさらに五郎蔵の出奔とともにもう一個の小鈴が、わしの目前から消えさってしまったのじゃ。
金森家の古文書もそのうち花夜叉に関する目ぼしいものは五郎蔵のため持ち出されたとみえて何一つ残ってはおらず、結局、わしが五郎蔵からひきつぎえたものは、花夜叉の太刀一振りにすぎなかったのじゃ。うまうまと五郎蔵をわなにおとしたと思うた時は、実は花夜叉の秘密に関するほとんどすべての手掛かりを失った時であり、しまった！　と思っても、もはや後の祭りに等しかったわい。
しかし、姉者、わしは野心をすてはしなんだぞ。五郎蔵になしえたことが、なぜわしに出来ぬという理由がある？　五郎蔵がつきとめえたと思われる花夜叉の秘密に、なぜ到達出来ぬ理由があろう？
花夜叉に関することであるが故に、かつて彼の山砦のあった場所、しかも金森家の古い館のあった花太郎地蔵よりこの道灌山一帯の土地に何かの秘密がかくされているに違いないとは、すぐ確信したことじゃ。
わしは、金森家古文書より五郎蔵がとり残していったわずかなものをとり出し、その中に古い江戸小源太館の図面のあるのを発見したと思え。
その図面をしらべていくうちに、から井戸と称する二個の記号が目についた。その一個は、道灌山から花太郎地蔵へ行く谷合いの近くにあり、あとの一個は小源太館の真下にあたっている。
そもそも、なんの必要あって館の真下にから井戸などをもうけたのか？　疑惑をおぼえてさらに調べていくうち、それはかつて花夜叉の山砦当時に造られたものらしく、小源太が館を造る時、土砂をもって埋没し、ただその名前のみ

が残ったものと推察されたのじゃ。
試みに、この辺りへきたって付近の古老なる者にただしてみると、たしかに館のから井戸と称する名称が残っており、今は土をかぶり雑草の下にかくれてしまったが、彼らの幼年時代まではたしかに切り石をもってくんだ井戸枠らしいものが残っていたと申すのじゃ。
その井戸をつきとめ、土砂を掘り出してみて、やがてそれが花夜叉の地下道への出入り口であったことをつきとめたのも、もはや容易なことであったが。
二つのから井戸は、花夜叉当時には花太郎地蔵の出入り口とともに地下道への通路だったに違いないが、花夜叉を倒した江戸小源太がここへ館を造る時、一つの出入り口には地蔵尊をたててさりげなくふさいでしまい、残る二つの通路は土砂をもって完全に埋めてしまったものらしく、このことこそ小源太が地下道の存在を余人にしられることを極度に恐れた何よりの証拠に違いないのだ。
しかし、この地下道に花夜叉の秘密のすべてがかくれているとにらんだわしの目算は間違っていたらしいわい。
地下道をくまなくさぐってみて、発見しえたものは一個のどくろとおびただしい人骨ばかり。
しかも、わしが足をふみ入れるまで、何百年もの間、立ち入った者の形跡が全然なかったことからして、木暮五郎蔵が花夜叉の太刀を盗み出してきた場所は、実はこの地下道ではなくて、別の場所に違いないと断定されたからじゃ。
別の場所とはいっても、小源太の館を中心として、それに近接する場所でなければならぬ。
わしはちゅうちょなくここへ屋敷を造り、配下の千川万作の手のものを交代に常住させることにしたが、それはこの近傍にあるはずの秘密の場所を積極的に探し求めるためと、また五郎蔵が姿を現すのを根気よくねらって待ち伏せて

いるためであったのじゃ。五郎蔵が花夜叉の秘密をつきとめたらしいことはたしかだが、そこに秘匿されているはずの財宝はそう手軽く運び去られる性質のものでないことは分かっていたからのう。きゃつは失踪当時、その一部をもって逃げたかはしれんが、その量はとるに足らん微少なもので、大部分は花夜叉の怨霊に守られていまだに残っているはずに違いないからじゃ。

きゃつは、生きているかぎり、いつかは必ず姿をあらわすであろう。しかも、姿を現す場所はこの近傍でなくてはならぬ……。

五郎蔵がつきとめえたものを、なぜわしがなしえないか? きゃつはどこから花夜叉の太刀を盗みきったか?

五郎蔵のたどった道と、わしの手口との間に、なにか根本的な食い違いがあるに違いないと悟りながらも、いまだにそのなぞは解くことが出来ぬ。

やむをえず、わしは待った、待った。今日まて辛抱づよくきゃつの現れるのを待ちつづけていたのじゃ。しかも、なんと、わしの目前へ出現したのは、五郎蔵にはあらず、花太郎の亡霊であろうとは……。

しかし、それが花太郎であろうと亡霊であろうと、わしの野心に新しい息吹をふきこんでくれたことに違いはないわい。

見い、きゃつの出現と一緒に、お高という老婆の秘蔵していた一個の小鈴が忽然と姿をあらわしたではないか。もちろん、それはいま花太郎の手中にある。きゃつは源之丞さま御秘蔵の小鈴も奪いさった。しかも、五郎蔵とともに行方しれずとなった第三の小鈴の行方を狂気のように探し求めているわ。

それをわしが所持していないと知れば、きゃつは第二の手段によって執拗に他の方面を追及するであろう。きゃつはわしの知らんことを知っているはずじゃ。おそらく、きゃつは第三の

小鈴も手に入れずにはおくまい。

その時は、きゃつはどうするか? おそらく、五郎蔵と同じ道をたどって、この辺りに姿をあらわすであろう。わしはそれを待ち伏せているのじゃ。姉者、断言するが、わしときゃつの対決する日は目前に迫りつつあるのだわ」

「それでは、新五右衛門どの、惣兵衛からの申し入れを黙殺なさるとおっしゃるのですか?」

と、花村は弟の顔を見つめながらいった。

新五右衛門は冷笑した。

「五郎蔵の行方もしらず、第三の小鈴も手中にないわしに何が出来るか」

「惣兵衛のうしろには源之丞さまがおられます。お鶴さまの御一命にかかわること故、すてておきますまい」

「すてておけねばどうするというのか。わしの旧悪をあばきたてて糾弾するとでも案じるのか。わしの旧悪はそのままお茂の方さまに通じている。源之丞さまの母君に汚辱をなすりつけてでもあえてそれをすると思うか? いや、仮にわしを罪におとしても、それでお鶴さまの一命が無事にすむというのか。

いやいや。彼らにとって何よりの急務は、お鶴さまを救い出すことなのじゃ。お鶴さまのお命が賭けられている。それをだれよりも恐れているのは彼らではないか。

わしの手に第三の小鈴がないと明らかになった時、おそらく彼らは必死になって別の手段によりその小鈴の行方をさがしもとめるであろう。そこにこれまでのわしの手の届きえなかった新しい世界があろうではないか。

わしにはなしえなかったことも、彼らには出来るかもしれん。小鈴の行方が知れるかもしれぬ。しかも、花太郎の出現によってたちまちお高の秘蔵する小鈴がこの世に姿を現したごとく、思いもかけぬところより第三の小鈴が現れぬとはかぎらん。

ないそでではふれん。わしの知ったことではな

いのじゃ。わしはただ、彼らに好きなようにさせ、じっと待つまでじゃ。いや、彼らが無事に第三の小鈴を入手する時をひそかに祈って待つばかりじゃよ。

結局、花太郎はそれを手に入れる。入れるであろう。そして、ここへやってくるのじゃ。五郎蔵と同じ道をたどってここへ来ざるをえないのじゃ。

わしは待っている。それを、その時を、ただじっと待っているのじゃよ」

「新五右衛門どの、あなたは、花夜叉の秘密、花夜叉の財宝とばかりいわれて、まだ一度もはっきりしたことを話してくださらぬではないですか。あなたをはじめ、木暮五郎蔵や、はては花太郎と名乗るあの男が、それほど必死になって探しもとめているものの正体は、一体、何なのです？ 二十余年もそれほどお金と根気を注いで探しもとめるに値するものなのですか？」

「姉者には話してもよいであろう。それは、花夜叉とよばれた当時関東にならぶ者もなかった盗賊が、おびただしい配下の者を駆使し、生涯(しょうがい)かけてかり集めた黄金のすべてなのじゃ。

砂金で百六十貫。小判に直せば四万両じゃよ」

「それはたしかなのでございますか？」

「わしがかつてたった一度手にしたことのあるたった一個の銀の小鈴が、明らかにそのことを語っているのだわ。先ごろまで源之丞さまのお手にあったあの小鈴がのう」

新五右衛門は、めらめらと執念の陰火が燃えたつあやしいひとみで、遠いかなたをじいっと見つめるようにしながらいった。

「その小鈴はこう伝えている。――江戸小源太が子孫、非常の時にのみ花夜叉の秘庫をひらけ。およそ砂金にて百六十貫……」

その建物の一番奥まった一間は、窓一つない土蔵造りとなっている。

たった一つある入り口も、重いとびらにとざ

されているから、真っ昼間だというのに灯火がなければ踏み入ることも出来ない。

その板の間に、灯火を囲んで車座になりながら酒をのんでいた男たちは、声もなくぬっと入ってきた新五右衛門を見ると、さすがに酒杯をもつ手をひかえて居住まいを直した。

五、六人いるだろう、いずれも千川万作一味の荒くれ男たちであった。

「万作は？」

「階下でございます」

「うむ……」

と、新五右衛門があごをしゃくったのは、階下へおりる戸をあけろという合図であったろう。

片すみの板の間の一部があげぶたになっている。一人が重そうにそれを引きあげると、もう一人がすぐ手燭(てしょく)をとって先に立つ。

そこからほとんど垂直に、地下へ向けて階段がついている。

館のから井戸とよばれていた地下道への出入り口を、この屋敷を造った時にこんな風に造りかえたものらしい。

その階段をおりきったところは、板張りの狭い小部屋だった。いつか三四郎が地下道の中で万作一味のあとをつけてきて発見した小部屋がこれであった。つまり、この小部屋のとびらにさらにあげぶたがもうけてあって、花太郎地蔵の地下道へ抜けられる仕組みになっている。

そこには一人の女と二人の男がいた。女はお徳、男は千川万作とその配下の志賀権太夫であった。

「どうだ？ 女はどろをはいたか？」

と、新五右衛門は突っ立ったままきいた。

「およそこれほどにしぶとい女も珍しゅうございましょうな」

と、万作は淡々と答える。

「並々の責め方では口を割らんかもしれませぬ」

「さもあろう。花太郎の一味だ。容易に口を割

らんというところに、むしろ大いに興味をそそられるところがあろうというものじゃ。つまり、腹の中に容易ならざるどろを含んでいるという証拠じゃからのう」

「さよう。ちょっと手をふりあげただけで顔色を変えてぺらぺらしゃべりまくるようなしろものには、大した価値は期待出来ませんから……そろそろ責めの手口を変えてみるつもりでございます。両手の指を一節ずつ切りおとしてみせるがどうかと、今もじっくり話して聞かせているところでございます」

「よかろう。殺さぬかぎり、好きにやってみい」

新五右衛門とそして二人の男は、いまさらのようにお徳の姿をじろっと見すえた。

昨夜、下谷からひっさらってきて、お徳はそのままここにとじこめられた。

帯は解けたのかはぎとられたのか、細帯一つの姿が半裸同様に乱れている。赤や青の下着や裏地が裂けてひろがり、その間からねっとりと脂ののった真っ白な膚が、男たちの目をさすようにちかっちかっとのぞいている。

まるで、ひきむしられ、踏みにじられた花びらのように鮮やかに、そして無惨な姿であった。

その白い膚にはなわがくびれこむほどまきついていて、ところどころに血のにじみさえ見えている。お徳は片息にあえいでいた。

「これ、お徳、今の話をきいたか?」

と、万作は横倒しになっているお徳の胸元へ片足をかけ、乳房の辺りをぐいっぐいっとえぐるように踏みにじった。

「しぶといやつだといったのは、なにもほめているのではないのだぞ。どれほどほれた男かはしらんが、命を棒にふってまで心中立てするのはおよそ愚の骨頂、あほうの限りだと笑っているのだわ。貴様も花太郎には随分と義理をつくしてきたではないか。もうそろそろ我を折って、すなおにどろをはいてもなんの恥ずかしいことがあろう。どうだ、潮時というものだぞ。女は

親切に口説かれているうちが花というのだぞ」

どうだ、どうだと胸乳のあたりを踏みにじられ、

「ああっ! ああ……」

と、お徳は息もたえだえに、自由のきかない体を波打たせてもだえている。

しかし、そのあえぐ息の下から、勝ち気な声がかみつくようにわめきたてた。

「しつこいねえ。いくらいっても同じことだよ。知らないものを、なんとも申しあげようがないじゃアないか。そんなに欲しい命なら、きれいにくれてやるから、さっさと息の根をとめておくれといってるんだよ」

「子供同士のままごとではあるめえし、知りません、はいさようですかで済むと思うか。貴様はうまうまとわれわれの目までたぶらかして金森家へ住みこんだが、それもこれも花太郎のためではないか。ついにはきゃつを手引きして、われらに煮え湯をのませるようなことまでしおった。それほどに打ちこんでいる花太郎のことを、何も知らんですむはずはないわ。わしらは、いまさら貴様のしたことをとやかくいっているのではない。ただ、花太郎とあの不快な面をした唐人飴屋のことを聞いているのだぞ。花太郎がどうして今日まで生きのびてきて、どうして花夜叉の秘密を感づいたか。きゃつのかくれ家、立ち回り先はどこか。貴様の伯父だと名乗っている唐人飴屋と花太郎とがどういう関係にあるのか? さあ、いえ。きれいさっぱりとしゃべってしまえッ」

「しらない、しらないッ。あたしゃなんにもしりゃアしないんだ」

「花太郎は生後まもなく金森家から出奔し、しかも、その時一緒に逃亡したお高ともはぐれ、喜内もまもなく捕らえられて死んだはず故、きゃつが花夜叉の秘密を知るに至ったのは、だれかそれをしゃべって聞かせたやつがなければならん。そやつが何者だか、まず明らかにしてお

きたいのだ」
「しらない、しらないッ」
「知らんといっても、およその見当はもうつけてある。貴様には平六という兄貴がいたはずだな。こやつは、昔、木暮五郎蔵のもとに中間奉公をしていたらしい疑いがある。五郎蔵の失踪と同時に木暮家から姿を消して、今日まで行方のしれんやつだが、どうもそれが貴様の兄貴平六と同一人物らしい疑いがかかっている。お徳、ついでに平六の行方も聞いておかねばならんのだぞ」
「しらないったら、畜生ッ」
「最後に、あの烏天狗の唐人飴屋だ。きゃつも昨夜以来その住み家から姿を消してしまい目下行方がしれんようだが、きゃつは花太郎の出没するところあたかも影の形に添うがごとく姿をあらわす奇怪なしろものだ。お徳、きゃつは何者か？ 花太郎といかなる関係にあるやつか？ さあ、しゃべれッ」
「しつこいねえ。もう、あたしゃア死んでも口をきかないからそう思っておくれ」
「よしッ、死んでも口をきかぬかどうか、ゆっくりと念を入れてためすとしよう」
万作はそばにひかえていた配下の方へちらっと目配せした。
万作の目配せをうけた配下の男は、お徳の上へのしかかるようにしながら、一度その胸にかかっているなわをほどいた。
なわはとけても、抵抗する力もないほど萎えはてている。その腕を今度は合掌するように合わせて、手首のところを三重にも四重にもくくり直した。
そればかりではない。両脚を折りまげて、足首をそろえたまま手首と一つにして堅くくくりあげてしまう。
いわゆる、くくりざるという形だ。
「惨めなざまだ」
と、新五右衛門がいった。

「これほどの目にあっても、まだ花太郎に心中だてする気かのう」
「……」
お徳はもうてこでも口をきかぬ気で石のように押し黙っている。
「むだです。いい聞かせて分かるような利口な女ではございません。体に聞くより手はないようです」
万作は憎さげにいいながら、やれ！ というように、また配下の男へ目配せした。
いつの間にか、なわの先が天井の滑車をくぐってその男の手に握られている。
「やれッ、遠慮なくやれッ」
男の手に力が入ってなわがたぐられると、ぴいんとはったなわの先に、手足を上に向けたまま、お徳の体がゆらゆらっと宙に浮き出した。
たちまち手首の辺りに赤黒い充血の色があらわれ、それがみるみる鉛色に変わっていく。
「ううう――っ！」
と、思わずうめいた声が、そのままのたうち回るように五体をゆさぶっていく。
その体はもう完全に床からはなれ、垂れた髪の毛の先がわずかに床を掃いていた。
「お徳、よう聞けよ。貴様はどこまでもきゃつに心中だてするつもりかもしれぬが、きゃつの方では貴様のことを紙くずほどにも思うてはおらんのだぞ」
新五右衛門が冷たい声でゆっくりといった。
「貴様はきゃつが救いにでも来てくれるものと思っているかもしれんが、それはとんだ甘い考えというものだわ。花太郎はもう貴様のことなど念頭にありはせん。きゃつは榊原家のお鶴さまをかどわかしていき、それを人質として、金森家にたいし最後の小鈴を渡せとやっきになって挑戦している真っ最中なのだ。どうだ、考え直してみては？ 己一人こんな目にあうのをバカらしいとは思わんか？」
「う、ううっ！ 畜生、どうともしやアがれッ。

あたしがしゃべったことがしれりゃア、あたしゃあの人に殺されるんだ。きっと殺される。絶対に生かしておきゃアしないよ。きっと殺される。なぶり殺しにされるにきまってらア。同じ殺されるなら、一度でもほれた男に心中だてして、お前さんたちに殺されてあげようっていってるんだよ。分かったかい、畜生めッ」

うううっ！　と、五臓六腑をひきしぼるような苦悶の声の下から、どこか骨でも折れたか、関節でもはずれたか、ぐきっと胸にこたえる鈍いいやな音がした。

「お徳、よく見ていろ」

万作が小柄をぬいてずいっと歩みよってくる。

片手をのばしてお徳の手首を握りしめると、ゆっくりと小指の辺りへ小柄の刃をあてた。

「己の指が一本一本この手首からはなれていくのを、さあ、その目でしっかりとよく見ているのだ」

仮面の生涯

三四郎は、昨夜お徳を捕らえて去る千川万作の一味を尾行してここへたどりついたまま、執拗にこの屋敷の周囲からはなれなかった。

お美年の一命が案じられる。いっときも猶予はならない。お美年を助け出すには、お徳の口から兄平六の行方を聞き出す以外に手段はないのだと、いちずにその思いにとりつかれていた。

お徳がどこに監禁されたかはすぐ想像がついた。いつか地下道からまぎれこんだことのあるあの揚げぶたの上の密室に違いあるまい。

しかし、お徳に接近することさえ容易でなかった。万作とその一味は、花太郎の襲撃を予測してか、おさおさ用意をおこたらないばかりではなく、二人三人がのべつお徳につきまとってなにか責めたてているらしい。

お徳に接近するとすれば、地下道をたどってあの揚げぶたの真下へ出るより手段はないが、

それがすでに不可能になっていることがすぐ知れた。

いつぞや、何者か水門をきって地下道に水を流しこみ、おびただしい浸水で地下道を二分してしまったが、いま見ると、ながらく水びたしになっていて地盤の一部にゆるみが出来たものか、丁度谷合いの辺りに大きな陥没が起こり、崩壊した土砂が今度こそ完全に地下道を二分してふさいでしまっていることがわかったからだ。

もし、地下道へ入るとすれば――もはや、それは一つしかない。あの林家の密林の奥にあるほこら神社の口である。

三四郎は、身を伏せ、足音を盗みながら森を抜けて道灌山の断崖の端に出た。

鬱蒼たる樹木がそこから見渡せるはずの尾久村の眺望をほとんどまったく覆いかくしてしまって見通しもつかないほどであったが、しかし、三四郎はその崖下に広がる足のふみ入れ場もないほど茂った例の密林の向こうに林家の屋根らしいものがちらっと見えているのに気がついた。

いまだかつて、だれ一人、こんな崖の端に立った者もないと思われるほどあたり一面は深い草むらであったが、さらに足元の断崖は到底人をよせつけない急斜面をなしていた。

三四郎はその斜面を、草の根にすがり、岩角に命を託しながらくだっていく。

ついに見覚えのある場所へたどりついた。彼が花夜叉の洞穴から脱出した時の例の横穴の口だ。先夜見た時のまま、なんの異状もない。

また、用意のろうそくをともしてから、用心ぶかく穴の口から土砂をかきのけ、はいこんでいく。

この横穴を掘りぬく時は生死の境をさまよっていたに等しい。まるで無限につづくかと思われるほど苦しい長い苦業であったが、今くぐり抜けた横穴は意外なほど短かった。

花夜叉の洞穴に立った。先日のままである。石畳、石壁でかこわれたがらんとした空洞の中に、古びた朱塗りの棺が一つひっそりと横たわっている。

一隅の天井に石塊がとりのけられて小さな穴が黒い口をあけているのも先日のままだった。

三四郎は、石壁をよじのぼり、その天井の穴から例の白骨るいるいたる「墓穴」へ抜け出ると、そのまま館のから井戸とよばれたたて穴――つまり、お徳が監禁されている密室の真下へたどりついて、じいっと息をひそめた。

三四郎はそこにもう一刻以上も耳を澄ましていた。

すきがあったらお徳を救いだすつもりだったが、揚げぶたの向こうからは瞬時も男の声が消えなかった。

お徳を責めたてる一語一語が手にとるように聞こえてくる。その肉体の上にうなりを生じてふりおろされる青竹の響きも、それからお徳のうめき声も……。

新五右衛門が加わった気配も手にとるように分かったし、責め方が変わって、お徳の体が宙へつりあげられる異様なきしみもありありと聞いた。

お徳の目の前で、その指を一本一本切りおとしていく――まさかと思うようなむごたらしいことも、おどしでなしにずばりとやってのける男たちであった。

お高という老婆をこの地下道内であんな無惨なぶり殺しにした同じ手が、何をするか知れたものではない。お徳がたとえどんな毒婦であったにせよ、到底、三四郎の神経が黙って耐えていられるような出来事ではなかった。

もし出来たら、三四郎はとびらをけやぶっておどりこんでいったろう。しかし、その揚げぶたが道具なしにはとても破ることのできない堅

牢なものであることはとうから知っていた。

「返事をしろッ。言えッ、答えろッ。さあ、指をつめるぞッ」

わめいたのは万作の声である。

「もうよい。やめい」

と、新五右衛門の冷たい声がいった。

「それほどいいたくないものなら、いわせずにおけ。むだな手間をかけてもはじまらん。こやつの口が開かんでも、あらかたのことはもう推察がついているのだ。しかも、花太郎との対決が迫っている」

「しかし、こやつめ……」

「つまらん。むだだ」

「では、新五右衛門さま、こやつ、どういたしますか？」

「役にたたん無用なものは、いっときも早く始末してしまうがよい」

「血を流せばあと始末に手数がかかろう。地下の墓場へ投げこんでしまえ。すでに腐れて皮も肉もとけ流れ、うじに食いあらされて白骨と化しつつあるあのお高と並べて静かに死なせてやれ」

「なるほど。どうせ結局はあすこへ投げこむやつでした。これ、揚げぶたをあけろッ」

三四郎は灯を吹き消して、とっさにうしろへ後退しはじめた。

かんぬきがはずされ、揚げぶたがあき、火影と一緒に入り乱れた足音が地下道へおりてくる。

三四郎は例の勘兵衛が監禁されていた洞穴の中へおり、さらに花太郎地蔵に通じる反対側の横穴までかけのぼって身を伏せた。

万作の配下の者が三人、手足をくくったままのお徳を抱きあげ、一人が手燭をとって先に立ち、洞穴へおりてきた。

そして、その一隅にある例の白骨のうずたかく横たわっている穴の中へ、ものもいわずお徳

を投げこんで、そのままさっさと引きかえしていってしまった。

地崩れによって花太郎地蔵の出入り口と完全に遮断されてしまったこの地下穴には、もはや何者も立ち入る気遣いはないと安心しきっているように……。

あたりが完全に静寂に立ちもどるのをまって、三四郎はゆっくりと灯をつけた。

お徳は、嘔吐を催すような屍臭の立ちこめた白骨の間に、それと知ってか知らずでか、堅く目を閉じて横たわっていた。

三四郎の気配を、万作一味がまた引きかえしてきたと思ったのかもしれない。

「お徳さん、安心しなさい。もう大丈夫だ」

と、三四郎が低い声でささやきかける。

「万作一味は去ってしまった。あとはここから抜け出るだけだからな。ひどい目にあったのう」

三四郎は小刀をぬいてお徳の手足にくいこんでいるなわをたち切った。

お徳はまぶたをふるわせたが、目を開けはしなかった。

三四郎の声が聞こえなかったわけではない。その声を三四郎と聞いたからこそ、ぞうっとなって、目を開けることが出来なかったのだ。

まさか、三四郎さまが――

こんなところへくるはずはない。気のせいなのだ。あたしの頭がどうかしたのだ。

「びっくりしただろう。わしは、おぬしが舟友を出る時から、ずうっとあとをつけていたのだよ。なんとか助けたいと思ったが、どうしてもすきがなかったのだ。しかし、もう大丈夫。安心してまかせておきなさい。さあ、気をたしかにもって……」

今までお徳の手足をしばっていたなわをつなぎ合わせ、そのはしにお徳の体をしっかりと結びつけた。

「どうだ、少しは手足が動かせるかな？　この穴の口から下へつりおろす。少し苦しかろうが、

ちょっとの間だから気を張って……なあに、お徳さんは気性が勝ってるから、あんな目にあってもへたばりはせんな。いいか、おろすぞ」

自分を抱きあげて、穴の口からそろりそろりと下へおろしてくれている三四郎の顔を、お徳はやっと目をあけて見つめている。

ぼうぜんと、まるで夢でも見ているような目つきだ。

――本当、三四郎さまだ！　たしかに三四郎さまだ……でも、これが本当なのかしら。夢ではないだろうか。幻でも見てるのではないかしら？　だって、三四郎さまが……あたしのために、こんな恐ろしいところまできて、こんな思いまでして……そんなことあるわけはない。あたしは悪い女だもの。三四郎さまにはさんざん悪いことをした、よくない女だってこと、三四郎さまはちゃんと御存じのはずだもの……。

お徳の体が花夜叉の棺のある近くまでおりつくと、三四郎は白骨を動かして少しでもそこから出入りした痕跡をかくしてから、とりはずしてあった敷石を穴の口へ立て、その一角になわのはしをむすびつけてから、ろうそくを口にくわえたまま、身軽くひらりと下へおりたった。

おりてから注意ぶかくなわをひくと、その力で敷石が倒れ、どうやらうまく穴の口をふさぎ、なわはずっこけてそのまま下へおちてきた。

そこをふさいでおけば、万作一味が急に立ちもどってきても、容易に逃げ道を発見され追われるおそれがないと信じたからである。

「まあッ、三四郎さまッ。ほ、本当に、あなたは三四郎さまですのね？　本当に？」

と、それまでじいっと三四郎を凝視していたお徳が、やにわにまるで何かに憑かれでもしたような激しい声で叫び出した。

「三四郎さまッ、三四郎さまッ……」

お徳は三四郎の手にすがりついて、うわごとのようにいいつづけた。

「三四郎さまですね？　本当に、三四郎さまが

わたしを助けにきてくださったのですね?」
「そのとおりだ、お徳さん。ゆうべからずっと機会をねらっていたが、もう大丈夫。ここはきゃつらが絶対に気のつかない場所だから、安心するがよい」
「ゆうべからずうっとですって?」
「そうだとも。わたしは舟友からおぬしのあとをずっとつけていたのだからな。いっときも早く早くと気はあせったのだが……ひどい目にあったな。苦しくはないか?」
「ああ、信じられません。とても信じられません。三四郎さまがそんなにわたしのために御苦心なさってくだすったなんて……こんな命がけなことまでして、こんな女を助けにきてくださるなんて……そんなこと、とても信じられません」
「なぜ?」
「わたし、悪党です。毒婦ですよ。あなたをだまし、お美年さんをだまし……どんな悪いことをしたか、三四郎さまがだれよりもよく御存じだと思います。そ、そんなわたしのために、三四郎さまが……信じられません。とても信じられないのですッ」
「わしがお徳さんを憎んでいると思っているのか?」
　ははは……と、三四郎は静かに笑った。
「わしはおぬしを憎めるほど立派な男でもないし、また、お徳さんにそんなにふしぎに思ってもらうほど親切な人間でもないかもしれんよ。わしがどうしてもお徳さんを助けねばならんと必死になった気持ちの底には、第一にお美年さんのことがあったのだからな。その口から平六の行方をきき出し、お美年さんを助けたい一心にせきたてられていたためだといってもいいのだからな」
「なんて正直なお方！　ええ、分かってます。それがお美年さんのためであろうとなかろうと、わたしを助けてくださったのは三四郎さま

なんです。花太郎じゃアないんです。あの男ではなかったのです。
　そうですとも、あの男はわたしなんか助けにくるものですかッ。三四郎さま、聞いてください。あいつはわたしを塀の上からけおとしたんですよ。万作一味に包囲されて、土塀の屋根へ追いあげられ、わたしを連れててはどうしても逃れることがむずかしいと分かった時、あいつはものをもいわず、とりすがるわたしを土塀の上からけおとして、自分一人でのうのうと逃げさっていってしまったんですよッ。
　三四郎さまッ、そ、そんなことってあるんでしょうか。仮にも、一度はほれたはれたと夫婦になった二人です。あいつのためには、いやだいやだと思いながらも、ついずるずると心ない悪の道へひきずりこまれ、それこそ命がけで実をつくしたことが幾度あったかしれやアしません。
　それを、あいつは、自分一人助かりたいため、わたしをおおかみのような恐ろしい男たちの群がる中へけおとして逃げていきゃアがったんです。けおとしゃアがって、畜生ッ。
　そんなことってあるもんなんですか。あっていいことなんですか、よう、三四郎さまッ。
　そ、それで、助けにきてくれた人がある。やれうれしやと思ってその人をよく見れば、ああ、そ、それが三四郎さまだなんて……」
　お徳は、三四郎の胸にしがみついたまま、まるでがんぜない子供のようにわっと声をあげて泣き伏してしまった。
「お徳さん、おぬしも性根の底はいい人なのだ。ひょっとしたはずみで少しは足をふみすべらしたこともあったろうが、根は善人なのだよ。わしにはそれがよく分かっていた」
「まあ、三四郎さまッ！」
「それほどの間違いは、だれにも間々あることだし、ことにおぬしは自分から好んで足をふみすべらしたわけではない。運がわるかったのだ。

悪いやつにみこまれたのが不運だったのだな」
「いやいやッ、そ、そんな優しいことおっしゃっちゃいやですッ。わ、わたし、一層自分の罪がおそろしくなってしまいますッ」
お徳はいよいよはげしく泣きくずれた。
「さあ、もうひとふんばり元気を出しなさい。ここを出ると近くに顔見知りの親切な家がある。おぬしはひどく体が参っているようだ。早く手当をしてゆっくり休まないと、後々まで体にさわるようなことになるからな」
「待って！　お待ちになって……お話があるのです。聞いてください、三四郎さまッ」
と、むっくり顔をおこしながら、お徳は三四郎の手にしがみついてはなれない。
「話も聞こう。わしから折り入って尋ねたいこともある。しかし、ともかくも体の手当が第一だ」
「いやいやッ、いやですッ。先に話を聞いてくださいまし。何もかもみんな話してしまいます。ええもうかまいません。しゃべったことがわかれば、あいつはきっとわたしを生かしちゃおかないでしょう。でも、いいんです。みんな話します。聞いていただきたいのです。それが今のわたしに出来るたった一つの罪ほろぼしです。せめても心のすむようにそれを聞いていただかなくては、もう明るいところで三四郎さまのお顔を見ることも出来ません。ねえ、お願いです、三四郎さま」
「そうか。それほどいうなら話をきこう。ここは一番安全な場所だ。だれにも聞かれることがないし、じゃまの入る心配もない。お徳さん、安心して話すがよい」
三四郎は立ちかけた腰をおろし、静かなひとみでうながすようにお徳を見やった。
「あいつのことなんです。花太郎のことなんです。あいつのことを、残らずみんなお話ししてしまいます」
「金森家の嫡子と名乗るあの男が、実は花太郎

ではない偽者だということだな?」
「まあ、それを御存じだったのですか?!」
「それは初めから知っていた。しかし、聞こう。彼がどういう素姓の者か、どうして花太郎と偽称し大それたことを企てるようになったか。さあ、話してごらん、お徳さん」
「昨日、三四郎さまは、わたしの兄の平六が木暮五郎蔵という人のところに奉公していたかとお尋ねになりましたね。そのとおりなのです。ずっと昔、兄は江戸へ出てきて、金森家の木暮という人のところに中間奉公していたことがあるのです」
お徳は息をはずませながら話しはじめた。
「木暮五郎蔵は金森さまの御先祖にかかわるなにか大変な秘密をかぎ出してきて、大層な宝物を独り占めしようとたくらんでいたそうで、その手先につかわれていた兄も、詳しいことはとにかく、あらかたのことはよく知っていたそうです。
ところが、そのうち五郎蔵は金森家を追われて行方不明になってしまい、自分も危ないと気づいた兄もいち早く逃げだして、そのまま行方をくらましてしまったのでした。
それから何年かたち、もうほとぼりも冷めたと思うころになって、兄は主人の五郎蔵の行方をさがしはじめたのです。目的をはたして宝物を手に入れたら大枚の分け前にありつけるという約束を、そのまま思いあきらめてしまうような兄ではありませんでしたから……」
お徳はあえぎながら、しかし何かにせきたてられでもするような勢いで話しつづける。
「方々さがし回っているうちに、五郎蔵にはめぐりあえませんでしたが、五郎蔵の奥さまだった人と、右近というその子供さんとに、信濃(しなの)の国のどこかでぱったり出会ったそうです。
五郎蔵が出奔したころ、奥さまはお国の郡上(ぐじょう)というところにいらして、右近はまだ二歳になったばかりの幼児だったそうですが、五郎蔵の

おとがめがそのまま奥さまにまでおよんで、長いことご入牢なさった上、親子もろともご追放になり、その後は食うにこまって非人の群れにまで入るお気の毒さ。兄が出会ったのも丁度そのころのことでした。

　そこで、兄は五郎蔵について知っているかぎりのことをお二人に話してそのまま別れてしまったそうですが、あとで分かったことでは、それからまもなく奥さまは病死され、一人残った幼い右近は非人の仲間に育てられ、少し大きくなってから、盗み、押しこみ、人殺しと、いつかは大それた悪人になりおおせてしまったそうでした。龍太郎と名前を変えたのもそのころだったそうです。

　そうして、今から一年半ほど前、龍太郎は江戸へ出てきまして、ある時ばったり兄と出会いました。龍太郎は、兄をさがし出し、金森家の秘密をもっと詳しく聞き出して、大それたことをやってのけようと心ひそかに企てていたらしく、たちまち兄と一つになってその計画にかかったのです。

　そのころ、わたしは芝神明の水茶屋に奉公しておりましたが、兄に引きあわされた龍太郎と、いつか妙な仲になってしまいました。それが実はあいつの一つの手段だと、今になってこそはっきり思いあたりますが、そのころはただもう夢中で、あいつのいいなりになっていました。

　わたしがあいつの指図で舟友さんへ奉公にあがりましたのも、舟友さんが金森家にお出入りがあり、ゆくゆくわたしを金森家へ住みこませるのに都合がよいとにらんだあいつの企てからだったのです。

　そのうち、あいつはいつの間にか花太郎などと名乗ってむごたらしいことをはじめましたが、あまりのやりかたのひどさに、さすがの兄も次第に恐れをなして遠ざかっていったほどです。わたしも思わずぞっとしましたが、でも、

もうへびに魅入られたかえるのように、いまさら抜きさしならず、ええ、ままよとばかり、あいつのいいなりになるより仕方なかったのです。

　あいつが花太郎などと名乗ってこれ見よがしのあんなことをはじめましたのも、そのことによって金森家の人たちをおどし、五郎蔵はじめ自分たち一家のうけた恨みを存分にはらす復讐のためと、花太郎のうわさがひろがれば、もし五郎蔵がどこかに生きていれば姿を現すかもしれず、また、花太郎に縁ある人たちが自分から名乗り出て近づいてきて花夜叉の秘密をはっきりとつかみとる足しになるからと思ったからなのです。

　それに、もしも目あてのものがうまくいかねば、しりをまくって金森家相手にゆすりにかかる太い魂胆だったに違いありません。ええ、そうですとも。あいつのやりそうなことなんです！」

「そうか、お徳さん。花太郎の正体は木暮五郎蔵の忘れがたみだったのか。なるほど、そう聞いてみて、すべてが符節をあわすようによく分かってきた」

　三四郎は静かにうなずいてみせた。

「それで、お徳さん。おぬしの伯父と名乗っているあの唐人飴屋の呉龍角は？」

「三四郎さま、お気づきではなかったのですか？　わたし、あなたさまだけはなにかもう薄薄見抜いていらっしゃるようで、そらおそろしい気がしてならなかったのですけれど……」

「では、いおう。呉龍角と花太郎とは同一人物だったのだね？」

「そ、そうなのです！　おっしゃるとおりです。世間の目をごまかすための仮の姿が呉龍角だったのです。あいつは悪事にかけてはまったくそら恐ろしいような男です。小さいころから、顔や姿を変えて人目をたぶらかし、悪事を働くのがうまくて、仲間からも化け物小僧などと呼ばれて恐れられていたそうです。どうしてあのよ

うに顔を変えるかお分かりですか?」
「昔、乱波、素波と呼ばれ、後にお庭番という特異な役柄についたいわゆる忍者という男たちの中には、自ら己の歯を抜きさり、平常用いる歯型のほかにさまざまの奇形な歯型を、つげ材、獣骨材など用いて作りあげ、事に臨んでたちまち相貌を変えると伝えきいているが……」
「そのとおりなのです、三四郎さま。あいつは歯型を変えて烏天狗のような唐人飴屋に化けるばかりでなく、鼻の形は綿をつめてがらりと変えてしまいますし、なにか薬を使って目の色までどろんと濁らせ、巧みにほおの皮をたるませてしわまで作るふしぎな術を心得ているのです」
「そして、花屋の勘兵衛を花太郎地下道で刺し殺したのも彼の仕業であったのだな?」
「は、はい……たしかに、あいつが自分でそう申しておりました。あの時、三四郎さまと仙太さんとが花太郎地蔵の地下道へおりていくのを見たあいつは、はじめはただなんとなくお二人を監視するつもりでつけていったらしいのです。
　あの地下道の途中に水門口へ通じるもう一本の抜け穴があるそうですが、あいつはそこに身をひそませてお二人の様子をうかがっていたそうです。
　そのうち、思いもかけず仙太さんが勘兵衛親分を背負って引きかえしてくるのを見かけ、すぐ殺してしまう決意をしたのです。
　勘兵衛親分は、なんのきっかけからかは分かりませんが、とうからあいつの素姓をさぐりにかかり、かなり詳しいことまでかぎつけていたらしく、勘兵衛だけは生かしておけないと、前前からねらっていたのです。
　仙太さんのあとをそっとつけていき、三四郎さまの小柄とやらで力まかせに勘兵衛親分の背を突きさし、十分手ごたえのあったのを見すまし、そのままやみにまぎれて逃げてしまったそ

うです。
　その前に水門口を切っておとし、地下道を水びたしにしたのは、三四郎さまの逃げ道をふさいで自滅おさせするか、それとも万作一味の手でお命を断ってしまわせようというたくらみだったそうで、そうすれば勘兵衛親分を手にかけた疑いはみな三四郎さまにかかってしまうだろうと。三四郎さま、あいつはそこまで見通して悪だくみをするやつなのでございますよッ。
　三四郎さま、これでみんなお話ししてしまいました。わたしの知っていることは、もう残らず申し上げてしまいました。せめても罪ほろぼしに、わたしに出来ることといったら……三四郎さまッ、これだけしかないのです。たったこれだけです」
「よく話してくれたね、お徳さん。話してくれたその内容はもとよりだが、おぬしが何もかも話してくれる気持ちになったそれが何よりもわしにはうれしいのだよ」
　と、三四郎はしみじみといった。
「ところで、わしにはもう一つだけ聞きたいことがある」
「兄の行方でございましょう? お美年さんをかどわかして逃げた兄の行方を?」
「そうだ。それは是非とも明らかにせねばならぬ。何を犠牲にしても、お美年さんを救わねばならぬ」
「ああ、そうおっしゃられると、わたしつらいのです。花太郎はともかくも、兄までそのような恐ろしいことをしてくれて……三四郎さま、わたし、本当に兄の行方を知らないのです。申しわけなくて、今はこの胸がはりさけそうな気持ちがするくらいです」
「およそのことでも分からぬか? おぼれる者はわらでもつかむというが、わしは……真実、わらにでもすがりたく思っている」
「兄はもう江戸にはおりますまい。花太郎を裏切ったかぎり、とても江戸にはいられませんか

ら……」

「お美年さんを連れたまま江戸から遠くへ逃れるのはむずかしかろう。どこか日ごろから立ち回る先に心当たりはないか……」

「兄の立ち回る先はみんな花太郎がしっています。そのようなところへ、兄が行くはずがありません」

「考えてくれ、お徳さん。お美年さんが生きるか死ぬかの瀬戸ぎわなのだ」

「ああ、そうおっしゃられますと、もういっそひと思いに死んでしまいたいくらいつらいのです」

　と、お徳は顔を覆ったが、

「ああ、そうです！　思い出しました」

　と、何に気づいたか、ふっと顔をあげた。

「花太郎の知らない兄の立ち回り先が、たった一個所ありました」

「それはどこだ、お徳さん！」

「ある時、兄がふっと口をすべらせて、わたしに自慢らしくしゃべったあげく、あとで気がついたらしく、花太郎には絶対にしゃべるなと、こわい顔をしてくぎをさしました」

「それはどこだ？　江戸のうちか？」

「はい、江戸です。この近くです。なんでも、妙な人で、うわさになった花太郎のことに奇妙な好奇心をもっていらっしゃる方らしく、花太郎のことさえしゃべればすぐ大枚の金をくれる、どうせ長いつきあいの出来ない花太郎のことだから、ぽつりぽつりとしゃべっては酒手に代えてくるんだと、兄は自慢らしく申したのです。お金がなくなると時々こっそりそこへ出向いていっていたようです」

「ふうむ、花太郎に興味をもってそのうわさをきくために大枚の金を払う……なるほど、奇妙なお人だが……お徳さん、それはどこのなんというお人か？」

「この近くの……尾久村の、林さまとかおっしゃる大百姓だそうですけれど……」

「あっ！」

　といったまま、しばし三四郎は穴のあくほどお徳を凝視していたが、やがて、すっくと立ち上がった。

「お徳さん、さあ、行こう！」

　三四郎はお徳を抱えて花夜叉の洞窟(どうくつ)から抜け出した。

　お美年の行方がわかるかもしれないという希望が、しらずしらず彼をせきたてる。

　横穴からぬけ出し、崖(がけ)をおりると、例の足のふみ入れようもない原始そのままの密林であった。

　はっきりした道があるわけではないから、一度や二度通ったことがあっても、正確に進路をとらえることなど出来るものではない。

　小川を渡った時に、先日通った地点とまったく違っていることに気づいたが、やがて、前には見かけなかった奇妙な土蔵の前へ出た。

　おそろしく古風な造りの土蔵で、窓はぬりつぶされているし、方々崩れ落ちたまま、とざされたとびらの錠前だけがひどく不調和にものものしい。

　さすがの三四郎も、まさか土壁一つへだてた向こうにお美年が幽閉されていようなどとは気がつくはずはなかった。

　それでも、なにか気になるのか、土蔵の前に一息入れるようにふと足をとめた。

「お徳さん、急いだので苦しかったであろう。しかし、もうすぐ母屋につく。ここがおぬしが話した尾久の林家なのだよ。もうその敷地の中に入っている」

　三四郎は土蔵を見つめながらいった。

「古い家柄だ。金森家がまだ江戸氏と称してあの道灌山にやかたを造ったころから、ずうっとここに住みついているらしい。古いばかりでなく、この屋敷うちにはいろいろと興味ぶかい奇妙なことがあってのう。御覧、あの土蔵を……あの古さといい、荒れはてたありさまといい、

だれもかまわず建ちぐされるままにまかせてあるようだが、そのくせ、とびらの前の草がこんなに踏みにじられている。だれかしげしげとここへ出入りするものがある証拠だな」

三四郎がもう少し大きな声をたてたら、土蔵の奥に幽閉されているお美年の耳にとどいたかもしれないし、もしお美年のうめき声がもう少し強く響いたら、おそらく三四郎が聞きのがすはずはなかったであろう。

しかし三四郎はまたゆっくりと歩き出した。

「奇妙なことが数々ひそんでいる屋敷だが、しかし、やっとわしにはその真相が分かったような気がする。それは、お徳さんから、この家のあるじがしきりと花太郎のうわさを聞きたがっているということを聞かせてもらったからだよ。なぜ、彼が花太郎のことにそのような関心をもっているのか――その疑念をつきつめていくことが、この屋敷に伏在している数々の奇妙なことを、そして、ひいては、今度の事件の核心をなす花夜叉の秘密をそっくり解きあかしてくれるかぎだったことに気がついたのだ。さあ、お徳さん、林家のあるじに会おう。会って、お美年さんのことを尋ねてみよう。たしかに、何かうるところがあるぞ」

三四郎の話し声と一緒にその影が森の向こうに消えさるころ、すぐ近くの草むらからむっくりとおきあがった人影があった。

たくましいくまのような毛深い体、ぎょろぎょろ狂気じみた不気味な光をたたえている目――この家の小作人頭の与助というあの男であった。

彼は、歯をむき出し、かみつくような形相で三四郎の消えた方角をにらみすえていたが、やがて、土蔵の中へとびこんでいくと、さるぐつわをかまされたまま失神したようにぐったりしたお美年を横抱きして姿を現し、そのまま森の奥の方へ飛ぶような速さで入っていってしまった。

丁度いあわせた林久左衛門は、三四郎を見ると驚きながらも、快く例の離れ座敷をあけて、もう寸歩も歩く力もないほど弱りはてているお徳のために、すぐ寝床を用意してくれた。

「二度とこの辺りへ近よるなと堅く御注意をうけたすぐあとで、またこのように押し強くお手数をおかけしまして、なんともお恥ずかしゅうございます。よんどころない事情あってのこと、お許しください」

「いやいや、三四郎さま、そんな御懸念には及びません。御注意したのは、あなたの身を御案じ申し上げたからのことで、わしどもでは一向に……それよりも、あなた、とんだことが出来てしまいましたので……」

と、久左衛門は声をひそめた。

「三四郎さま。あなたはお美年さんというお娘さんを御存じではいらっしゃいませんか？」

「しっている段ではありません。今、懸命にその人の行方をさがしているところです。御老人、もしやその人が御当家に？」

「はい、あなた。たしかに一度はおあずかりしたのですが……」

と、当時の事情をかいつまんで話し、

「わしの留守に、孫娘が、一足違いで三四郎さまと行き違いになったことをお話ししますと、もう夢中になってあとを追って出ておいでになろうとしたそうで……けれども、お体も弱っておいでだし、わしも留守ゆえ、せめてわしのもどるまでと、その時はおとめしたそうですが、そのすぐあとで、孫娘がおそばをはなれましたちょっとのすきに、もう出ていっておしまいになりましたそうで……昨日の朝のことなんでございますよ」

「御老人、それはおかしい。お美年さんはわしを追ってここを出られたとおっしゃるが、わしはずっと会っておらん」

「そうでございましょう。お美年さんは、あわててここから飛び出しておいでになるところ

を、待ち伏せていた男に力ずくでさらっていかれておしまいになったのですよ」
「それは本当ですか、御老人?!」
「当家の小作人頭をしております与助と申す男が、野良へ出かける途中それを見まして、すぐあとを追ったそうですが、見失ってしまったと申します。遠目に見たのではっきりは分からぬが、遊び人風の若い男らしかったと申しておるのです」
「もしや花太郎ではなかろうか?」
「はい、実は、わしもそうではないかと思って案じていたのです」
「そうですわ。あいつかもしれません！」
と、お徳も思わず口をはさんだ。
「もうどんづめへ来ているから、あいつは苦しまぎれに何をするかしれたものではないのです。本当に、気の狂った悪鬼のように恐ろしいやつですから……」
「ともかく、花太郎に会わねばならん。彼は榊原家の鶴どのも誘拐しているはずだ。お徳さん、もし彼がお美年さんまでかどわかしたとすると、彼は二人の女をどこかへかくしているということになる。心当たりはないか?」
「さあ、それが……あいつはとても疑い深いたちでして、ことに平六に裏切られてからは、絶対に人を信じなくなりました。だから、お二人さまをどこかへあずけておくなんてことは決してしないでしょう。といっても、あいつのかくれ家は下谷の呉龍角のところしかないはずですし……分からないのです、三四郎さま。わたしにも分からないのです」
「やむをえない。最後の手段をとるほかはあるまい」
「最後の手段とおっしゃいますと?」
「花太郎に会うたった一つの手段だ」
いいながら、三四郎はすっくと立ち上がった。

西の空が真っ赤に夕焼けしている。

その空の色をまともに浴びながら、花太郎地蔵は黙念と笑みたもうていた。
近ごろでは妙なうわさがしきりと立つためにめっきりと参詣の人が減り、まして、このころの時刻になると、もうこの辺りには人っ子一人通るのさえ見かけない。
三四郎は、ほど近い茂みの陰へ身をひそめたまま、その地蔵尊の方をじいっと見守っていた。
尾久から根津の榊原邸へかけつけ、お鶴さま付きの老女市の瀬にこっそりと会った。
花太郎がお鶴さまの命と引きかえに要求してきた第三の小鈴を、どのような手段で彼に引きわたすのか、それを聞き出すためであった。
そして、その足ですぐここへもどってきて、花太郎の指図どおり、地蔵尊のよだれかけへその小鈴を結びつけた。第三の小鈴とは、つまり、小源太の白骨のそばから拾いとってきたあの小鈴だ。
凶賊の指図どおりに動かされるのはいまいましい限りだが、今の火急の場合には、それが花太郎に会うたった一つの手段だと思った。
突然、三四郎は、おやッ? というように目をみはった。
地蔵尊の前に、寺男らしい風采の男が立っている。
しりっぱしょりのすそから、継ぎのあたった洗いざらしの股引きをのぞかせ、肩に真新しい白木の卒塔婆の一束をかついだまま、石仏に向かって丁寧に腰をかがめている。
どこか近くの寺男が、使いの帰りに、通りすがりの地蔵尊にちょっとお参りする——なんのふしぎもないありふれた風景だ。もちろん、三四郎の見知っている花太郎でもないし、唐人飴屋とも似ても似つかぬ男である。
おやッ? と思ったのは、その男が一度あたりをずいっと見回してから、さもなにげない手つきで地蔵のよだれかけへ手をのばすのを見たからだ。

小鈴をむしりとって、残照の中にかざしながら、食い入るように見入っている。
三四郎はゆっくりとその方へ歩みよっていった。
「会いたいと思っていたのだ。是非、会う必要があったのだ」
いいながら、かすかに笑った。
「お徳さんから聞いていたが、なるほど、すごいような変身のしかただ。おぬしがその小鈴を日にかざしてじっと見入るまでは、どうしてもわしには見抜くことが出来なかったぞ。小鈴を一心不乱ににらんでいる間に、その目つきが突然花太郎のそれに変わったので、それでやっとはあと悟ったのだ。花太郎……いや、呉龍角と呼ぶのかな？　それとも龍太郎か？」
「御丁寧に恐れ入りやす。花太郎でも龍さんでも、お好きなように呼んでください」
と、相手は一歩うしろへ引きながら、じいっと三四郎の顔を凝視した。
「あっしの方でも会いたかったんだ。是非とも一度お前さんに会わねばならねえ用があったのさ」
「そりゃア丁度よかったのう」
「あまりよかねえでしょう。あっしゃアお前さんの命をもらうつもりなんだ。生かしちゃおかねえつもりなのさ、だんな」
と、冷たい声で陰気にいいながら、へびのようなひとみが三四郎の全身をなめるように見回した。
「よかろう。相手になってほしくば、いつでも相手になってやる」
と、三四郎がいった。
「しかし、花太郎、その前に約束をはたしてもらいたい」
「榊原のお鶴さまを引きわたせというのだろう？　分かってらアな。もちろん、約束したことははたす。約束どおり、この鈴が本当のおれのさがし求めていたものに間違いなかったら

な……」
その寺男——花太郎はせせら笑った。
「それを確かめるには時間がいるんだ。よしッ、あすの明け六ツ（六時）だ。あすの六ツに、もう一度ここへ来いッ。ここでお鶴さまを引き渡す。鈴が間違いなしにおれのほしいものだったらな……それから、お前さんと片をつけるんだ。お前の命を頂こうってわけよ。おれア虫の好かねえ野郎をいっときでもそのままにしておけねえ性分なんだぜ。分かったかい？」
「よかろう。明け六ツだな」
と、三四郎はまるで人ごとのようにぼんやりと答えた。
なにか急に彼の心をきゅっととらえたものがあるらしい。
「お前にほれてるんだってねえ、お鶴さまは？　さぞ気になるだろうよ。しかし、大将、安心しな。ちゃんと大事にしまってある。絶対に、だれにも指一本ふれられるおそれのねえところにおかくまい申してあるんだ。明け六ツだぞッ」
花太郎は突然きびすをかえすと、さあっと木立の中へのみこまれるように消え去っていった。
三四郎は、それさえ気がつかないように、じいっと夕焼け空に目をやっている。
思いもかけない近くの草むらに、突然、さやさやッと物の動くかすかな音が起こって、人影が一個、三四郎のそばまですべるようによってきた。
「三四郎さま、お気づきでございますか、お鶴さまの居どころを？」
ささやくようにいったその人は、顔を手ぬぐいのほおかぶりで包んでいた。
「ずうっと呉龍角の家に張りこんでいまして、それから花太郎の影をとらえましてからはあいつの足どりを執拗につけ回してまいりました。結局、その足どりからつきつめてみますと、お鶴さまのかくしどころは……」

「この足の下だ。花太郎の地下道だ」
「そうなんです。わしも、そこしかありえないことを、たった今しがた気づいたのです」
「ほかにかくれ家ももたず、他人を絶対信用しなかった彼が、人ひとり無事にかくし通すため選ぶ場所は、結局ここしかなかったのだ」
「おっしゃるとおりです。この地下道は途中の谷合いの個所が崩壊してしまいました。むしろ、地下道をよくしっているものは、もはや通路として用をなさなくなったこの地下道へ二度と立ち入ることはありますまい。花夜叉のどくろをおさめた厨子(ずし)でふさがれた位置から、崩壊してふさがれた谷合いまでが、絶好のかくし場所、かくれ場所になっているはずです」
「あなたはどなたか?」
いまさらのようにじいっと見つめられて、
「わしは……梅の字です」
と、その男はいった。
榊原邸内の梅渓亭(ばいけいてい)に傷をやしなっていた客人、梅どのと呼ばれたあの男に違いなかったが、三四郎はしる由もない。
「梅の字？　わしには思い出せぬ」
と、三四郎はいぶかるようにほおかぶりの横顔を見つめた。
「失礼だが、どういうお方か？」
「多分、御存じはございますまい。けれども、わたくしの方ではよく存じあげております。いろいろとお世話になっております」
「鶴どのが地下道に幽閉されていると見ぬいた眼力は容易ならざることだと思う。めったに知る者もないはずの地下道の奥の奥まで御存じとは、失礼だが、ただのお人とは思われない」
「お鶴さまのことはお願い申し上げます。花太郎のあとはわたくしがつけます。花太郎のことはおまかせくださいますよう……お鶴さまのことが気にかかってなりません。一刻も早くお救い出し申し上げ、榊原へお送りとどけくださいますよう、幾重にもお願い申し上げます。余人

の手をかりることは出来ませぬ。お鶴さまのためにも、榊原、金森御両家のためにも、不名誉な出来事を明るみへさらけ出すことはなりませぬ。少しも早く、内密にお助け申し上げねばなりませぬ。それには、三四郎さまのほかお願い申し上げるお方はないと存じております。それに、地下道にはお鶴さまのほかに……」
「うむ。ことによると、お美年さんもとじこめられているかもしれぬ」
「さようでございます。もし花太郎にかどわかされたとすれば、多分同じところにとじこめられておりましょう。お美年のことも、どうかよろしくお願い申し上げます」
お美年——といったその言葉の響きに、三四郎が、おや？　と怪しむようにほおかぶりの中をのぞきこもうとしたが、その男はついと顔をそむけてもう歩き出していた。
「わたくしは急ぎます。花太郎のあとを追ってまいります。では、くれぐれも、お鶴さまのことお願い申し上げますでございます」
そう言った声は、もう二間も向こうへ遠ざかっていた。
音もたてず、猟犬のようなすばしこさで消えていくそのうしろ姿が、三四郎の目にしみるように残った。
三四郎はわれに返った。
その男の言葉がなくとも、何をおいてもお鶴さまを救い出さねばならないと、とうから心はきまっている。
三四郎は、まだ燃え残っていたろうそくに灯をつけると、例の地蔵堂のすその石垣(いしがき)をはずして中へはいこんでいった。
入ったとっつきのところに、油紙に包んだ二、三本のろうそくと一緒に、火打ち道具がおいてある。
それを見ても、何者かが最近しげしげとこの地下道へ出入りしていたことが分かった。
地下道を進む三四郎の足が次第に早くなって

いく。

突きあたりまできた。土壁にはめこんであるどくろの厨子も以前見たままだったが、三四郎の目はそれが頻々と取りはずしされた形跡のあることを見逃しはしなかった。もう間違いない。この奥だ！

勇躍した三四郎は、ちゅうちょなく厨子をとりのけ、中へおどりこんでいく。

火影がすぐ地下道の中に横たわっている人影を照らし出した。

荒むしろの上へ、手も足もがんじがらめにされ、半ば死んだように転がされている――もちろん、それはお鶴さまだった。

お鶴さまは泣いていた。

うれしいのか悲しいのか、ただそうするよりなすべきことを知らないように泣きじゃくっていた。

「鶴どの、この三四郎を、さぞかし、邪慳な情けしらずな男と思っておいでであろう。わしとしても、あなたに対してはただ済まなく思っている。わしの生涯を通じて、あなたに対することだけが終生ぬぐいがたい悔恨として残るであろう。許してくれ」

「いいえ、いいえ、三四郎さま。許してくれなどと、もったいのうございます。鶴にはよく分かりました。三四郎さまが今でも昔に変わりなく鶴をおいつくしみくだすっておいでのことが、よく分かりましてございます。そして、昔と変わりなく鶴をお思いくださいます三四郎さまが、それにもかかわらず屋敷をお出なされましたのは、それにはそれだけ深い御事情があってのことと、やっと察しがつきましてございます。仮にも……一時にせよお恨みに思っておりましたことが、今ではそら恐ろしくもお恥ずかしゅう存じられてなりませぬ」

「いずれ分かってはもらえることと思っていたが、あなたのお察しのとおり、榊原の家を出る

にはよくよくの事情があり、よくよくの決意があってのことであった。あれはわしが留学から久々にて榊原家へもどった時だったな」

「忘れもいたしませぬ。お懐かしいお姿を拝見し、やれうれしやと、とび立つ思いのそのさなか、三四郎さまは突然屋敷を出られて、そのまま二度とおもどりがございませんでした」

「帰る早々、わしは父君に召され、ひざつきあわせてしみじみとお話をいただいた――そなたをひそかに当家へひきとったのは、そなたの生後間もないころであったが、当時としては、ゆくゆくそなたを榊原の跡目にしてもよく、あるいは鶴とめあわせてもよいと、そのつもりで育ててきたが、世の中というものはままにならぬものだ。まして、八千石の家柄を守り、あまたの家来の生活を保証してつかわすためには、わしの一存ではどうにもならぬことが起こってくるものだ。そなたもすでに成年に達し、あっぱれ男子一匹として思慮分別も備えること故、何もかも包まず話して聞かせるが……と、わしの手をとらんばかりにしてお話しなされた。

事情があって、もはやそなたを榊原家へとめおくことがなりかねる。それは、榊原家のためであると同時に、そなたのためにもそうせねばならぬことをつくづくと決意したからだ。

それ故、前々より心にもとめ、また、先方よりも熱意あるまま、わしの希望をのべるのだが、千五百石をはむさる旗本より、そなたを養子に迎え跡目にしたい、と前より申し入れをうけている。由緒ある家柄でもあり、そなたとめあわせたいと申すその家の娘御も、才色共にすぐれた佳人と評判なそうじゃ。わしとしてはまことに良縁と思うているが、どうじゃ、快くその申し出をうけてくれぬか。わしからも折り入って頼みたく思う……。

父君からしみじみとお情けあるそのお言葉を頂いて、鶴どののわしになんとお答えが出来るか。

わしは、父君からおうけした海山の御恩をし

ってはいても、榊原家を去ってまで、身分にも禄にも執着はみじんもない。ましてや、鶴どのをさしおいて、他家のいかなる女性をもめとる気は毛頭なかったからのう」

お鶴さまのむせび泣く声がにわかに高くなる。

「父君の仰せられた世の中はままならぬものという御事情は、しみじみとわしの胸にしみた。しかも、千五百石の旗本に婿入りせいと仰せられるそのお情けあつい御配慮にも従う気持ちのないわしに、一体何が出来たであろう。わしは、ただ黙って榊原家を去り、二度とその御門をくぐらぬ決意をするよりほか、分別も手段もなかったのだ」

三四郎はお鶴さまを優しく見つめながらいった。

「それに、もう一つ、わしはその時、父君からお聞かせいただいたこの身の出生に関する秘密につき、己の力で、もっと明らかにしたい、知りたいことがあったのだ。鶴どの、それは、今、わしの口からは言いがたい。折があったら、父君にお尋ねなさい。それを聞かれたら、きっと鶴どのもわしのしたことをゆるしてくださると思う。父君の仰せられたとおり、世の中はままならぬものでのう。ことに、榊原家ほどの身分、地位、格式をもち、あまた家臣の生活をあずかっている家柄ではのう……」

「よく分かりました。よくお話しくださいました。三四郎さま、鶴はわがままでございました。でも、もう心はきまりましてございます。三四郎さまが決して鶴をおきらいあそばすのでも、お憎しみあそばすのでもないことが分かり、せめても、それが……それが、せめても、これからの鶴の生きていきます心の支えになりますでございます」

「ありがとう。それをきいて、わしも安堵した。遠くはなれて二度と会われずとも、わしの心には鶴どのが生きている。鶴どのと幸せにくらした幼いころのことが、終生美しい思い出となって残るであろう。わしには鶴どのという美しい心優しい妹のあったことを、生涯忘れず、しっかり胸に抱いている」

「ああ、三四郎さまッ……」

お鶴さまはひしと三四郎の手にとりすがった。

これが別れである。生涯二度と会えまい別れであると、必死の思いでとりすがった指先の力だった。

その、堅く握りあった二人の手の上へ、お鶴さまの湯のようにたぎった熱い涙がとめどもなくあふれ落ちた。

三四郎は、町駕籠をさがしてきて、それにお鶴さまをのせ、榊原邸までそっと送りとどけた。

門前にとまった駕籠を、三四郎は少しはなれた物陰に立って見送っている。

駕籠からおりたったお鶴さまは、それと気づいて、しばしそれらしい影のある方角をまたきもせずじいっと見守っていた。

もはや、そのまぶたには涙はなかった。八千石の姫君は、みだりに人前で泣くことも許されない。

しかし、そのひとみは、泣くよりももっとはげしい思いをこめ、悲しげに幾度か目礼をした。

「さようなら、三四郎さま。いついつまでも御壮健で……」

と、別離の言葉を絶叫しているように……。

そして、きびすをかえすと、逃げるようにくぐり門の中へ走りこんでいった。

三四郎は——

彼にはまだなすべきことが残っている。

お鶴さまは去るべき運命の人だが、もう一人、去らせてはならぬ人があったからだ。

ああ、お美年さんはどこにいるのだろう?!

三四郎はとぶようにして尾久の林家へもどってきた。

お美年が花太郎にかどわかされたのではないと

すれば、もう一度林家から探索のやり直しをしなければならないと信じたからだ。
「まッ、三四郎さまッ。大変ですよッ」
と、とんで出てきた孫娘のお加代が叫んだ。
「与助さんがいないのです。与助おじさんが見えなくなったのですッ」
「与助というのは、小作人頭のあの人であろう? それがどうして大変なのかね?」
「ことによると、あの人がお美年さんを……」
「ええっ?」
「おじいさんがそういうのです。思いあたることがあるんですって……みんな大騒ぎして与助おじさんの行方をさがしてるんですけれども、どこにもいないのです。おじいさんはいま森の方へいってます」
三四郎はそのまま森の方へ走っていく。
男たちを指図して右往左往している久左衛門に会った。
もうとっぷりと暮れはてて、暗い森の中をちょうちんの灯がただごとならず飛びすがっていた。
「御老人、お加代さんから聞きました。お美年さんはこの辺りにいるのですか?」
「はい、三四郎さま。つい少し前までここにいた証拠があるのです。ちょっとこちらへおいでください」
と、久左衛門が三四郎を導いていったのは、先刻、三四郎が見かけた不気味な窓のない土蔵の前であった。
久左衛門はちょうちんをかざしながらその二階へ上っていく。
「御覧ください、三四郎さま」
老人の指さしたところに、まるで実物としか思われないような生々しく血を浴びた女の人形が横たわっていた。
「これが、二十三年前、行方しれずになったわしの娘の加奈です。いえ、加奈と生き写しの人形でございます。与助と夫婦にする約束だった

娘なのです。与助めが、このようなものをひそかに作って、ここへかくしておいたに違いありません。なんたることか、二十三年間だれ一人このようなところにこのようなものをかくしてあると気づかなんだとは……」
老人の血相が変わっていた。
「それに、御覧なさいまし。ここに真新しい女の腰ひもがおちております。食べものの、食い残しがこれこのとおり散乱して……たったいましがたまで、やつはここにいたに違いありません。お美年さんをかどわかして、ここにとじこめて……」
あたりにはまだ生々しい人間の体臭が残っていた。いや、たしかに女のにおいもまじっている。
「ほこら神社は? あすこを調べてみましたか?」
「はい、今、人をやってあります。さあ、御一緒に……」
老人が先にたって、まっしぐらに森の奥のほこら神社までかけつけてみた。
崖のへりにぴったり密着して建てられているその社殿の床下をくぐりぬけると、その先が横穴になっていて奥深く続いている。
しかし、二間も進むと横穴は岩石や土砂に埋まってしまっていて、あたりには何者の影もなかった。
卒塔婆の束をかついで寺男に化けた花太郎は、ようやくたそがれはじめた道灌山の森をくぐって、柴田新五右衛門の屋敷の前にひょっこりと姿を現した。
何ものかを期待して手ぐすねひいて待ちかまえていた千川万作とその配下の者たちが目ざとく見とがめて、すわ! と色めきたったが、
「これはこれは、皆様おそろいで……ごぶさたいたしました。光明院の吾助でございますよ」
と、花太郎はなれなれしく縁先へ近づいてく

る。
「なんだ。だれかと思えば、いつぞやの寺男か」
　と、万作は拍子抜けしたように苦笑いして、新五右衛門の方にふりかえった。
「この先の光明院の寺男でございますよ。それ、いつぞや申し上げましたことがございましょう。この辺の地理に明るいやつで、われわれの仕事になにかと役立つ心きいた男ゆえ、時折使って目をかけておりました」
　と、新五右衛門にそっとささやいてから、
「なんだ、吾助、このような時刻に？　なんぞ急用があってか？」
　と、鋭い目でじろりと見すえた。
「別に急用と申すほどのことでもないのでございますが、なにか怪しいやつでもこの辺に立ち回ったらすぐ知らせに来いと、いつぞやお言葉がございましたもので……ことに、唐人飴屋の呉龍角には気をつけろと、たしかさようなお話でございましたな？」
　花太郎は、突っ立ったまま、いかにもこの辺りの寺男らしい田舎臭い手つきで鼻の頭を横なぐりにする。
「たしかに申しつけたが、唐人飴屋がどうかしたのか？」
「いいえね、だんなさま。ただいまお寺の御用で卒塔婆を仕入れに参りましたもどり道、この先まで来かかりますと、ひょっこりその唐人めに出会ったのでございます」
「ふうむ……」
　と、万作は新五右衛門と目を見合わせてひとひざ乗り出してきた。
「呉龍角に出会ったか？　ふうむ。きゃつがどこへ行ったか、その行く先を見とどけたか？」
「へえ、お申しつけを思い出しましたので、すぐあとをつけてみました。するてえと、やっこさん、道もないような寂しい森の中へ入ってまいります。一緒に五人ばかり、人相のよくない男をつれておりましてね。しばらく森の中をうろうろしていましたが、そのうち、たしかにここだ！　と独り言を申しながら、葉むらの中を指さします。すると、あなた、連れの五人の男たちが、早速、手にしていた鍬でそこを掘りはじめたじゃアございませんか。
　めったに人なんぞ入ることもない寂しい森ん中でございますよ。はて、妙なことをすると思って見ておりますと、どんどん穴が深くなってまいります。うむ、間違いない、ここだ、ここだ！　さあ、精出して掘れと、唐人めがしきりにいそがせます。
　おかしなことに、いつも舌たらずな日本語しかしゃべらねえあいつが、その時はもう立派な江戸弁でぺらぺらしゃべってるじゃアございませんか。
　こいつアただごとではないと思いましてね。日ごろから、注意して見張っていろと申しつかりましたことはこのことかもしれないと、急いでお知らせに飛んでまいりましたようなわけで……」
　花太郎のしゃべり方は真に迫っている。
　万作と新五右衛門は顔を見合わせてうなずきあった。
　さては！　という緊張の色がありありとうかんでいる。
「吾助、よく知らせてくれたな。追って十分に礼はとらせるが……して、彼らが穴を掘っているという森はどこだ？」
「ここから浅い谷を越えました向こうで……と申しましても、目標も何もないところですから、ちょっと申し上げにくうございますし、お分かりにもなりますまい。なんでございましたら御案内いたしましょうか？」
「新五右衛門さま、とにかくひと走りいってまいります」
　と、万作は立ち上がった。
「ことによると……その辺りに目当てのものがあるのかもしれません。花太郎と一つ穴のむじ

なの呉龍角が、訳もなくそのようなことをするはずがございません。きゃつなら、何かつかんだのかもしれませぬ」
「よかろう、行ってみい。事と次第によっては、のう……」
と、新五右衛門は手でばっさり切ってすてるしぐさをしてみせた。
「はっ、心得ております。では……」
と、庭先へとんでおりた万作は、
「吾助、案内を頼む」
と、気早に門の方へ向かって歩きながら、
「これ、かたがた、わしについてまいれ。少々手荒なことをせねばならんかもしれん。向こうが六人……こちらは八、九人もいればよいであろう。続け！」
と、あたりに待機していた配下の者を呼び集めた。
花太郎は、如才なくその前に立って、とっとっと足早に夕もやの森の中を走っていく。

暮れ足の早い秋の日は、みるみるうちにかげってきて、いつか森も屋敷もとっぷりと宵闇にとざされた。
どのくらい時間がたったろう。
万作たちを案内して去ったと思った花太郎がいつの間にかもどってきたらしく、庭先の暗がりの中に忽然と立った。
万作たちを巧みにまいて、どこかへ置きざりにしてきたとみえ、花太郎のほかには何者の影もなかった。
屋敷うちにはもう明々と灯がともって、その近くに新五右衛門の姿があった。
万作たちの報告をいまかいまかと待ちかねているらしく、落ちつかなげに座敷の中を歩き回り、時折、縁先まできて、遠くの方へじいっと目を凝らしたりしている。
ほかにはなお四、五人の浪人たちがいるはずだが、姿を見せない。
花太郎はにやっと笑った。してやったりとい

う憎悪と殺気にみちた嘲笑であった。
かついでいた卒塔婆をおろし、なわをといて束を崩すと、その間から半弓と十本に近い矢が現れる。
彼はゆっくりと半弓に弦をはり、矢を数えた。縁先まで三間の余しか距離はない。
「思いしれ、新五右衛門め！」
花太郎は、口の中で毒づきながら、半弓に矢をつがえ、縁先に立った男の胸板にひたとねらいをつけた。
ささささ……
と、夜風がこずえを軽くゆさぶってすぎていく。その風の音を追いかけるように、
びゅん！
と、鋭い弦音が起こると、とたん、縁先の人影は、わあっ！　と一声わめきながら、もんどりうって下におちた。
「う、うぬッ、くせ者ッ！」
わめきながら、がばと身をおこし、胸を貫いた矢へ手をかけて引きぬこうとする。
さすがに剛毅な新五右衛門の動作だったが、二の矢は間髪を入れなかった。
今度の矢は、大地へ手をついて起こしかけたその脾腹の辺りを貫いたらしい。
「く、く、くせ者ッ！」
と、一声絶叫を残して、その影はどさっと地に崩れた。
そのけたたましい叫び声は、屋敷中に響きわたったはずである。
すわ！　とばかり、追っとり刀の男たちがふすまをけやぶるようにして灯火の中へ走りこんできた。
くせ者の影は見えず、大地にのめってうめいている新五右衛門の姿だけがあった。
それにつられて、ばらばらッと縁先まで走りよってくる影をまるで待ちもうけていたように、鋭い弦音がたてつづけに響きわたった。
一人、二人……。

「あっ！」
「わっ！」
と、灯火の中へのけ反り、横転しうずくまってしまった。
しかも、その叫びがまた次の男たちを誘いよせるように、ねらい矢の視界へ引き出してくる。
花太郎は一語も発しない。
ただ、やみの中へ突っ立ち、らんらんと目を光らせて、次々に姿をあらわす獲物にひたとねらいをつけては、息もつがせず矢をとばす。
まるで、網に捕らえた魚をヤスでねらい突きするようにたわいもなかった。
もう立っている影はない。新五右衛門を入れて六つの人影が、倒れ、はいつくばい、血潮の中にただうめき声をあげていた。
花太郎は、弓矢をすて、のっそりと火影の中へ歩み出した。
冷酷な目であたりをじろっとねめ回してから、急所の深手にうめきつづけている新五右衛門のそばへ行き、その体を足先でけりつけた。
けられようが、踏みにじられようが、新五右衛門は手足をあがかせ、うめきつづけるだけで、もうなんの抵抗をする力もなかった。
「ざまを見ろッ」
ふふん！と鼻先でせせら笑った花太郎は、なに思ったか座敷へ上がり、まず刀架にあった花夜叉の太刀をとって腰にぶちこんだ。
それから、ろうそくをさがし出してきて、行灯の灯をそれに移す。
さらに、衣類や紙くずをかき集め、ふすまの近くに山と積みあげてから、油壺の油をあたり一面にまき散らし、行灯をその上へけたおした。
一瞬、めらめらッと燃え上がった火が、はじめはゆっくりと、そしてやがては恐ろしい速さであたりへ燃えひろがっていく。
それを見すましてから、彼は瀕死の新五右衛門を横抱きにしたまま地下室へおり、揚げぶたをあけて、ゆっくりと地下道へおりていった。

片ほおにゆがんだような冷たい薄笑いをうかべたまま……。
地下道へおりた花太郎は、新五右衛門を横抱きにしたまま、墓場の口まで来た。おびただしい白骨と一緒に投げこまれた老婆お高の屍がまだ腐臭を放ちつづけているあの穴の口である。
「さあ、新五右衛門。ここまでくれば、何一つじゃまは入りっこねえぜ。冥途の土産に、心残りなくとっくりと話し合おうじゃねえか」
花太郎は新五右衛門の体を投げ出しながらいった。
相手は瀕死の重傷をおっている。うめき声をあげ、憎悪の目を光らせるほか、片手をあげて抵抗する力も失っていた。
「おれをだれだと思う？　寺男の吾助だなどという甘いしろものでねえことはもう気づいたろう？　花太郎？　そうだ、花太郎だ。おれア花太郎だ。花太郎で、そして、花太郎でもねえのだ。唐人飴屋にもなる。何にでもなる。そして、その、だれでもねえのだよ」
彼は口をあけ、入れ歯をはき出すと、懐をさぐってとり出した別の歯を口にふくんだ。
そして、手ぬぐいをとって、額から目のあたり、ほおの辺を幾度かぬぐってから、その顔をぬっと突き出すようにした。
近くの土壁に突き立ててあるろうそくの灯が、花太郎らしくもあるが、しかし別の男の顔をありありと照らし出す。
「見ろ、新五右衛門。こいつがおれの素顔だぞ。やい、見ろッ、しかと見ろッ。思い出すことはねえか？　どこかで見た覚えはねえかよ？　遠い昔だぜ。二十三年前だ。そのころ、てめえが毎日のように見ていた顔だ。てめえと同僚だった男の面だぜ。やい、よく見ろッ！」
「ああっ！」
と、新五右衛門のうめき声は、苦悶のそれから恐怖に変わった。
「五、五、五郎蔵?!　木暮五郎蔵か?!」

「よしッ。よく思い出した。図星だよ。おれア木暮五郎蔵の忘れ形見、龍太郎だッ」
叫んだその声は、地下道の中にがんがんこだまするほどけたたましかった。
「てめえは、おれのおやじがひそかに企てていた仕事を横取りしようとして、根も葉もねえ無実の罪をでっち上げ、むごたらしく殺してしまやアがったんだ。いいや、殺したにちげえねえ。たとえ、おやじが逃げまどう旅の空に野垂れ死にしたところで、てめえが殺したのにちげえねえんだ。しかも、そのために、おれも、おれのおふくろも、非人の仲間にまでおちぶれて、その悲惨のどん底に、おふくろもボロ切れ同様に死んでしまったんだ。いいや、知らねえとはいわさねえ。てめえが殺したんだ。おふくろを殺したのもやっぱり、新五右衛門、てめえの仕業だ。てめえがおやじもおふくろも殺しゃアがって、このおれを終生浮かぶ瀬のねえあぶれ者にしやアがったんだ。
いいか、新五右衛門。それと知った日から、このおれは、生涯かけてその復讐をとげずにゃアおかねえと誓ったんだぜ。見ろッ、おれは、今てめえの息の根をとめて、永遠に日の目を見ねえこの墓地の中に祭りこんでやるんだ。その死骸さえ、骨のかけらさえ人目にふれることのねえ暗い暗い墓場にねむらせてやるんだ。
やいッ！　じたばたするねえ。どうせ、冥途への土産ついでに聞かせてやりてえ話がまだ残ってるんだ。花夜叉の秘庫のありかだよ。百六十貫、四万両の砂金のありかを、今こそおれがしっかとつかんだんだ。聞きてえか？　聞きてえだろう。てめえも生涯かけて追いもとめていた秘密だからのう」
ふふふ……と、龍太郎があざわらう。
「お察しだろうが、おれア問題の三つの小鈴を手に入れたのよ。それ、このとおりだ……」
と、龍太郎は手のひらをひらいて新五右衛門の鼻先へつきつけた。

「見ろ、てめえが生涯かけて探しまわっていたしろものだぜ。二十三年前、おれのおやじが奪って逃げたまま行方のしれなかったのが一つ、お高というばばあの手から花屋のお美年に渡ったのが一つ、そして、もう一つは、金森家の跡取り源之丞の手についこの間まで秘蔵されていたやつさ。
この鈴が何を物語るのか、てめえもよく知ってるのう。少なくとも、源之丞の手にあった一個は、てめえもこっそり手にとって調べてみたことがあるはずだからだ。
鈴というやつは、すべて半球ずつ作って組みあわせ一個の鈴の形にする。この小鈴は、その組みあわせた個所を御丁寧に蝋付けしてあるがな。
表に花という字を彫りつけてあるのは、その中側にも何か彫りつけてあるぞという暗示に違いあるめえ。およそこの小鈴に興味をもつほどのやつなら、一度は中を調べてみるだろうじゃねえか。そのとおりだ。それですべてなんだ。のう、新五右衛門。てめえもそれをやった。源之丞の手にあるやつを調べたはずだ。それが第一の鈴なんだぜ。その内側になんと彫りつけてあったか？
江戸小源太が子孫。
非常の時にのみ、花夜叉の秘庫をひらけ。
およそ、砂金にて百六十貫――
第二の鈴とは、お高からお美年にわたったこの小鈴だ。これから先はてめえの知らねえ世界だ。ようく聞きなよ。
地下道は地蔵堂にはじまる。
花夜叉がどくろは、次なる地下道の関門なり。
地下道は行きどまり出口なし。
これが第二の小鈴に彫りつけてある文句だぜ。そのとおり、江戸小源太は二つの井戸をうめ、その上に館を造ったんだからな。なぜ、そんなことをしたか？　つまりは、この地下道

を花夜叉の秘庫として永遠に世間のやつらに立ち入らせねえためだったのさ。
　さあ、最後の小鈴だ。おれもたったいましがたちらっと目を通したばかりなんだ。もう一度とっくりと読み返してみようぜ」
　彼は、手中の小鈴をとると二つに割り、ろうそくの灯にかざした。
「……白骨を投げ入れたる墓場、
　すなわち最後の関門なり。
　花夜叉の秘庫はその真下なり。
分かったか、新五右衛門。白骨を投げ入れた墓場が、花夜叉の秘庫へ入る入り口なんだとよ。それ、てめえの転がっているその目の前の墓穴がよ。ふっふっふ……笑わせやがる。何百年間、何者にもさとられず守り通されてきた花夜叉の秘庫がそこにあるんだとよ。てめえが二十三年間、数多く人間を殺しゃアがったり非道な目にあわせたりしやがって、目の色かえて探し求めていたしろものが、それそれ、てめえのそのしりの真下辺りにあるんだとよ」
　龍太郎の顔からすうっと笑いの影が消えていく。
　腰にさしていた黄金造りの太刀をきらりと抜いた。
「花夜叉の太刀だ。おやじの手からてめえが盗みとりゃアがった刀だ。その刀が、今てめえの息の根をとめるんだ。おれだと思うな。木暮五郎蔵の執念だと思えッ。くたばれッ、新五右衛門……」
　だんだん息が絶えかけていた。新五右衛門は大してもがきもせず、突かれ、そしてけられて、墓穴の中へおちこんでいった。

砂金の行方

　花夜叉の朱うるし塗りの棺をおさめてあるあの洞窟の中に、二個の人影がうごめいていた。
　一人はお美年、もう一人は林家の小作人頭与助である。

　追っ手に追いつめられて逃れる場所を失った彼は、最後のかくれ場所を花夜叉の墓場に求めたのだ。もちろん、三四郎が掘りぬいたあの横穴をたどって入りこんだに違いない。
　お美年は、花夜叉の棺の上に腰をおろし、ぐったりと石壁に背をよせかけていた。
　あの気丈なお美年も、目をとじ、口をとじ、もうなんの抵抗もなしがたいほどに弱りはてていた。
「娘さん、お美年さん。わしの願いをきいてくれ。わしの女房になってくれ」
　お美年の前へはいつくばうようにして、与助は身もだえした。髪もひげも伸びるにまかせ乱れるにまかせたその顔に、二つの目だけがぎらぎら怪しく光っている。
「わしにはお前さまが昔の加奈嬢さまそのままに思われてならないのだ。あのころの加奈さまにそっくりなのだ。生きうつしなのだ。いや、生きかえってきたに違いない。お前さまは加奈さまの生まれがわりに違いないのだ。のう、お美年さん。わ、わしの願いをききとどけてくれ。半月、一月でもいい、わしの女房になってくれ」
　身をもみながら声をからして哀願する。はては耐えかねたようににじりよってきて、お美年のすそへ手をかける。その鬼気迫るあやしい姿を、石壁の透き間にさしこんだちょうちんがまともに照らしていた。
「このとおりだ。お願いだア、お美年さん。わしのことを、皆、気違いだとぬかしゃアがる！　そうかもしれん。わしは、許婚の加奈さまを奪われ、殺されて、本当に気が狂ったのかもしれん。けれど、悪いことはせん。わしは、生涯、加奈さまを思いつづけてきただけだ。わしが許婚ときめた女のことを思いつづけてなぜわるかろう。のう、お美年さん。お前さまはわしの狂気が恐ろしいのか？　いいや、なんで恐れることがあるものか。わしは加奈さまが恋しい。その加奈さまの生まれがわりのお前さまは……

も、もっと、もっと、胸がはりさけるほど恋しいのだ。その、恋しい、いとしい、大事なお前さまに、なんでわしが悪いことをするものか。のぅ、お美年さん、そのような悲しい顔をせずと、わ、わしの願いをきいてくれ。わしの女房になってやると、そぅ一言……一言いって、にっこり笑ってくれ」

すそにすがった指先が、いつしかお美年のひざへのび、はては、やにわにむしゃぶりつくように胸を抱いた。

お美年は、ただわずかにあえぎ、首をふっただけである。何をされようと、拒む力も気力もなかった。

与助はまさに狂乱であった。この男の生涯かけたはげしいものが、こんな無惨な形の現れ方をしたのだろうか。

両腕はお美年を砕けんばかり抱きしめ、指先はところきらわずその体をなで回し、そのくちびるからははげしい慟哭が堰を切ったようにほとばしり出た。

二十三年間、あの土蔵の屋根部屋で、自ら作った加奈という娘の人形に対して、日ごと夜ごとくりかえしつづけてきたように……。

——と

その、けたたましい慟哭がはたとやんだ。

与助が声をのんだのは、別のある響きが、どこからともなく陰々と伝わってくるのを、ふと耳にしたからであった。

その物音は、次第に近づいてきて、やがて頭上の辺りにとまったと思うと、あの龍太郎の憎悪をこめた独白に変じた。

その声の主が何者かは知るよしもないが、じいっと聞き耳をたてた与助の形相はすさまじかった。

石壁にへだてられた龍太郎の声は、奇妙に陰にこもり、さらに洞穴にこだましながら、高く低く響いてくる。

与助はもはや、あれほどかき口説き、執拗に

まつわりついていたお美年の存在すら忘れはてたようであった。たったいましがたまで恋に狂ったのかと思われたその形相が、忽然と憎悪にたけりたつ悪鬼そのままに歯をむき出していた。

龍太郎の憎しみをこめた長い独白がおわった。目には見えないが、そのやみの中で、一人の人間が殺戮された気配がありありと分かった。

「ざまを見ろ、新五右衛門。さあ、おれは花夜叉の秘庫に入るんだ。おやじ木暮五郎蔵が生涯かけたすばらしい夢を、いよいよこれから実現してみるのだ。見ろ、見ろッ！　だれもかも、しっかと見ろ。さあ、この龍太郎が花夜叉の秘庫のとびらを開くぞッ」

勝ちほこった声と一緒に、洞窟の天床の石壁になっているその一角がぐらぐらっとゆれ動くのが見えた。

とたん、与助は、ちょうちんにおどりかかって灯をふっと消す。さらに、お美年をひっさらうようにして一隅へひたと身をよせた。

天床の一角の穴があき、そこからまずろうそくの灯をもった男の腕がにゅっと下へ伸びた。

下の洞窟の様子をしげしげと伺いさぐっているらしい。しかし、その位置からは与助たちの姿を見通すことは出来ぬ。

一度、腕がひっこんでから、今度はそれに代わって二本の脚が、穴の口をこするようにしてずりおりてきた。つづいて胸が現れ、顔が現れ、ろうそくをもったままの手を合わせて二本の腕で穴の口にすがり、その全身がぶらりと宙にすがった。

「うおうッ！」

と、なにか野獣の咆哮するようなすさまじい声が、があん！　と洞窟を震わせたのはその瞬間であった。

さすがの龍太郎が、雷撃にうたれでもしたように、ぎょっと顔をこわばらせた。

彼はそのわめき声と一緒に自分に向かって突進してくるけだもののようなすさまじくもあやしい影をまざまざと目にしたからだ。
どさっと音をたてて、龍太郎の体が底に落ちた。天床からぶらさがって伸びきっていたわき腹の辺りへ、なんとも分からぬはげしい一撃をくらったからである。
とたん、灯火が消えた。
やみの底で、野獣と野獣の死闘するようなうめき声と荒々しい物音がもみあっていた。
「ううっ！　うおう！」
とわめきつづけるのは与助の声である。
あまりのことに、龍太郎はしばし声さえ発する余裕がなかったのであろう。
「うっ、き、貴様、だれだッ?!」
はじめて、龍太郎の叫ぶのが聞こえた。しかし、その声はもう手負ったけだものの悲鳴のようであった。
ちょうちんに灯がついた。灯をつけたのは与助である。
すでに勝負はついていた。
龍太郎は、全身血みどろな姿で、向こうのすみにボロ布のようにのびていた。
最初、不意をねらって食らわされたわき腹の一撃が特にこたえたらしい。与助は、大きな石塊をつかんで、その刃のように鋭くとがった先で殴りつけたのである。
灯の下に仁王立ちになった与助の足元におちているその石塊が、まるで赤渋で染めあげたように血にまみれていることで、それが、幾回、幾十回、龍太郎の体にところきらわずすさまじい勢いでたたきつけられたか想像される。
返り血をあびた与助の姿は、さらにものすごく鬼気迫るようであった。
「うぬッ、き、貴様はだれだッ?!」
と、苦しい息の下から龍太郎がうめいた。
「わしか？　わしはほこら様の番人じゃ。この

花夜叉さまの洞窟の番人じゃ。ここに棺に横たわったままお眠りあそばす花夜叉さまの御遺骸の番人なのじゃ」
彼の手には花夜叉の太刀があった。与助は、それをうやうやしく押しいただきながら、朱塗りの棺のふたをあけ、
「花夜叉さま、御太刀がもどりましてございます。二十三年前、木暮五郎蔵と申す世にも不埒なくせ者にむざむざと盗みさられましてからついぞ今日までとりもどすことのかないませなんだ御太刀が、これ、このように、無事立ちもどりましてございます」
と、訴えるようにいいながら、太刀を棺の中へ納め、またまたうやうやしく一礼してふたをとざした。
「花夜叉さま、お許しくださいませ。もう二度とこのような失策はいたしますまい。二度とお眠りをさまたげるようなことは、決していたしますまい。なにとぞ、お許しくださりませ」
まるでそこに相手がいるように切々として訴えるその声は、あたりの壁に陰々とこだまし、膚をあわだたせるような不気味さにみちていた。
「う、ううッ！」
龍太郎が必死に死力をふりしぼって体をおこそうと身もだえている。
「うぬッ、貴様、さてはおれの……おれのおやじの行方をしっていたのだな？　木暮五郎蔵がこの洞窟へ忍び入って太刀を盗み出したことをしっていたのだな？　うぬッ、さては、おやじを殺したのは貴様かッ？」
「天罰じゃ！　花夜叉さまののろいじゃ！　見ろ、五郎蔵の小せがれめ、お前のおやじは、それ、そこにいるわ」
与助が指さした棺の横手に、崩れて落ちた五郎蔵の白骨が砕け散っていた。
「憎いやつじゃ。どのような処罰をうけてもあきたらぬ憎い憎いけだもののようなやつなのじ

や。幾百年も平和につづいたほこら様を犯し、黄金の太刀を盗みとり、あまつさえ加奈さまを殺してのけた世にも恐ろしい悪党なのじゃぞ、五郎蔵は……」

与助は、歯をむき、両手のつめを逆立てながら、龍太郎の方へ歩みよってくる。

「加奈さまは……わしの命であったあの加奈さまは、五郎蔵のためだまされて出奔なさり、そ、そして、なぶり殺しの目におあいなされて、むごたらしくこの世を去られたのじゃ。あぁッ、加、加奈さまは……。

よう聞け、龍太郎とやら、わしはな、花夜叉さまのお墓をあばき、御太刀を盗みとった罰として、また、加奈さまをかどわかしおって、あげくのはてにむごたらしい最期をおとげさせ申した復讐として、貴様のおやじの五郎蔵をこの洞窟の中へ封じこめ、これこのとおり、干魚のように干し殺してやったのじゃわ。見ろ、この死にざまを!」

ひっひっひっ……。

と、与助は狂気じみた声で勝ちほこったように笑う。

花太郎は歯がみしながらうめきもだえるばかりだった。

たったいましがた、己が柴田新五右衛門にしかけたとおり、その位置を逆にして、そっくりそのままの運命が今度は自分を見舞っている。

「わしはその時、誓ったのじゃ。今度、この花夜叉さまのお墓にちらとでも近づこうと企てるやつは、事の次第にかかわらず、もう生かしてはおかんとな。このお墓に近づく者あらば、必ずたたりがある、わしら一族にまで恐ろしい不幸が及ぶという遠い昔からの林家の言い伝えがどんなに真実であるかをしったからは、いい伝えどおり、このお墓の秘密はいよいよきびしく守り通さにゃならんと、かたくかたく決心したのだわ。

ここへ近づいたやつは、皆殺す! 殺すとも! 断じて殺すとも!

この世のけがらわしい亡者ども。黄金をねらって忍びより、花夜叉さまのお眠りをさまたげる亡者ども! それ、龍太郎とやら、貴様もその一人じゃ。わしは殺すぞ! この手でずたずたに引きさいて、殺してくれるのだぞ!」

龍太郎に浴びせている罵声か、それとも二十三年前、恋人を失ったその時のはらわたを引き裂くような悲しみを思いかえしてすすり泣きしているのか。

少なくとも、つめをさかだて、歯をむいて龍太郎に迫ってくるその姿は、もう正気のものとは思えなかった。

「うぬ、くそッ!」

さすがに、龍太郎は死力をふりしぼって、よろよろっと立ち上がった。

「おやじを殺しゃアがったとな? よくぬかした! おやじの敵だッ。うぬッ、こ、このおれが、これほどのことに参ると思うかッ。生涯かけた野心なんだ。いいや、お、おやじの代から引きついだてこでも曲げられねえ男の意地だッ。畜生ッ、どうあっても、花夜叉の黄金はおれがもらうぞッ」

その手にはいつひきぬいたか匕首が光っている。

「ひっひっひっ……」

と、与助は歯をむいてあざわらった。

笑った途端、その影がけだもののようにさっと龍太郎に組みつく。

組みあったまま、どすっと地響きたてて地に転げた。

あさましいというか、無惨というか、それはもうただの人間と人間との争いとは見えない。執念と憎悪をむき出しにした、けだものよりももっと醜い肉塊の、すさまじいかみあい、殴りあい、いがみあいであった。

死闘に組み打つ二人は気づかなかったが、その時、天床に開いたままになっていた穴から、

さっと下へ舞いおりてきた人影があった。
　梅どの——とよばれたあのなぞの男。
「二人とも神妙にしろ。御用だッ！」
　と、その男は落雷のように一喝した。
　梅どの——とよばれるその男は、花太郎地蔵のところで三四郎にわかれてから、ずうっと龍太郎をつけていたはずである。
　彼がここへ姿を現したのは当然のことだったが、その来かたがおくれたのは、龍太郎が地下道へとびこむ前に、新五右衛門の住まいにはなった火のためだったらしい。
　油をそそいで放った火の回り方の速さに、その火災の下をくぐって地下道までたどりつくのが容易なことではなかったのであろう。
「御用だッ！」
　と叫びながら、その男が十手をふりかざした時、匕首をもぎとって龍太郎ののどもとへぶちこもうとしていた与助の手首には、さっと捕りなわのはしがからみついていた。
「うおっ！」
　と、ほえるようなあやしい声をたてながら、きっとふり向いた与助は、もう相手の見境もなくなっていたらしい。
　利き腕を捕りなわにとられたまま、龍太郎をすてて立ち上がった。
「うぬはだれだッ？　何しにここへ来た？　はあ、うぬもそこに死にかけている黄金の亡者の一味じゃなッ」
「神妙にしろッ。すなおにすれば上にもお慈悲がある。じたばたすれば罪が重なるぞッ」
「なに、罪?!　なんの罪じゃ？　わしがどんな罪をおかしたというのじゃ？」
「二十三年前の木暮五郎蔵殺し、あわせて龍太郎に瀕死の手傷をおわせた罪でひっくくる。おとなしくおなわをうけろッ」
「何をぬかすかッ、何が罪じゃッ！」
　与助は歯をむいて激怒した。
「花夜叉さまのお墓を犯し、その上、加奈さま

を殺した大それた悪党を干し殺したとてなんの罪になるかッ！　天罰じゃ。花夜叉さまのお怒りにふれたのじゃ！　おのれ、龍太郎の同類め。うぬも同じ天罰にもだえ死にする仲間じゃわ。どうするか見ておれッ！」
　手首のなわをふりもぎろうとしたが、手練でからみつき、ぴいんと張ったなわはとければこそ。
　とっさに、匕首を左手にもちかえた与助は、われから捕りなわをたぐりよせるように、さっと男の方へおどりかかっていった。
　しかし、捕りなわはまるで生きもののように、一度ゆるんで地にはったかと思うと、次の瞬間、与助の小股をすくい上げるように足へきりりっとからみつきざま、その体をぐらぐらっとよろめかせた。
　瞬間、
「神妙にしろッ」
　おどりこんできた十手が、与助の左手をぴしっとうつ。
　匕首はお美年の倒れている辺りまではねとび、与助の影はどっとのめった。
　手練の捕りなわがみるみる与助の体にまきつき、ぐいぐいっとしめあげていく。
　だが、その時、与助は、うおっ！　とほえながら、満身の力をふりしぼって五体をゆさぶった。
　恐ろしい力だ。とたん、捕りなわがばらっと切れて、男の体ははじきとばされたようにうしろへのめった。
　はじめて、その時、ちょうちんの灯が明々と男の顔を照らした。
「あっ、お、おとっつぁん！　おとっつぁんじゃアないの?!」
　叫んだのはお美年である。
「そうだ。おれだ。勘兵衛だ」
　と、その男は立ち直りながらいった。
「死んだんじゃないんですね？　御無事だった

んですねッ？」
「このとおりだ。死にゃアしねえ」
「ああ、お、おとっつぁん！」
　お美年は、感極まったようにすすり泣きしながら、弱りはてた体を懸命にその方へはいよろうとする。
　勘兵衛が無事だったということは、三四郎が父を殺害したという恐ろしい悪夢を払いのけてくれる意味をもっている。お美年にとっては二重の喜びだった。
「おとっつぁん、おとっつぁん！」
　と、夢中ではいよろうとするのを、
「危ねえ。お美年、じっとしてろ」
　と制した勘兵衛は、十手を構えて、ひたと与助に向きあった。
　与助は奇妙な目つきをして勘兵衛親子を凝視していた。
「そうか、分かった！　貴様は岡っ引きだな。前々から同じように花夜叉さまの秘密をさぐっていた岡っ引きだな。みんな敵だ！　みんな花夜叉さまの敵なんだなッ。みんなわしの敵なんだなッ！」
　彼はいつの間にか抜け穴の口に立ちはだかっている。
「この洞窟へ入ったやつは、だれかれの容赦なく絶対に許しはしないのだぞ。ここから一歩も出さぬ。未来永劫に出しはせぬ。貴様も、それからお美年もだ！」
　さあ、逃げられるなら逃げてみろと、与助は歯をむいてあざわらった。
　その笑いの中に、破れかぶれの殺気が狂気じみた光をはなってめらめらと炎をあげている。
「貴様を殺す。花夜叉さまに代わって、不埒なやつはみんな殺してくれる。そして、お美年も生涯この洞窟の中で暮らすのだ。だれにも渡さぬ。だれにも姿を見せはせぬ。そして、わしと一緒に、未来永劫に花夜叉さまのお墓守りになるのだ！」

　両手のつめを逆立てて、与助はじりじり勘兵衛の方へ迫ってきた。
　が――その時、彼は何を聞いたのか、ぎょろっと背後の横穴の方へ一瞥をくれた。
　横穴を伝って、
「お美年さん！　お美年さんはどこだッ？」
　と叫ぶ三四郎の声が聞こえてきたからだ。
　方々探しあぐんだ三四郎は、最後に自分が掘りぬいた横穴の口にたどりついたらしい。
　一瞬、ぎょっとしたように見えた与助は、次の瞬間、けたたましく笑った。
「来たな、来たな！　だれが来ようともうおそいのだ。わしらをここから外へ連れ出すことは出来はせぬ。入ってくるやつも一緒に、この洞窟へ封じこめてくれるわ」
　三四郎とそれに続く人たちが、もう横穴へはいこんだらしい。
「お美年さん！」
　と叫ぶ三四郎の声が、ありありとお美年の耳にまでとどいた。
　その時、やにわにちょうちんをとった与助が、灯のともったろうそくを抜きとるよと見る間もなく、横穴の角にうがたれていた小さな穴の口へそのろうそくをさっと投げこんだ。
　とうからこの事を予期し、覚悟していたのだろう。
　多量の火薬がつめてあったらしく、瞬間、轟然たる音響とともに、花夜叉の洞窟はたちまち崩壊する土砂、岩石の中にうずもれつくしてしまった。
　与助の火薬の使い方がまずかったためか、洞窟の崩壊個所は思いのほか少なく、やがて勘兵衛とお美年とはわずかなかすり傷を負った程度で掘り出され、助け出された。
　しかし、爆風の直前にいた与助は五体をひき裂かれて即死し、また、すでに瀕死の手傷を負っていた龍太郎も息のあるまま助け出すことは

出来なかった。
　お美年は勘兵衛付き添いのまま林家の一間で療養をつづけ、三四郎は毎日のように舟友から見舞いに通ってくる。
　一夜、雨が来て、森にも田畑にもめっきりと秋が深かった。
　六日たった。
　今日はお美年の床上げの日である。
　髪をあげ、うっすらと化粧し、久左衛門心づくしの衣装をまとったお美年を見て、三四郎はあっという顔をした。
　美しい人だとは思っていたが、今日は別人を見た心地がした。
　まだやつれの残っているほおに、目がびっくりするほど大きい。そのひとみが、以前のお美年になかった深い色をたたえてうるんでいる。
　永い苦難に耐えてきたことが、なにかその心をひときわ成長させたように思われる。
　久左衛門心づくしの酒肴が出て、ようやく人人の顔にほっと重荷をおろしたような安堵が流れた。
　今日までまるで申し合わせたように口をつぐんでいた今度の事件のことに、自然と一座の口がほぐれていく。
「今こそ、何もかもお話し申し上げますが……」
　と、まず口を切ったのは久左衛門であった。
「遠い遠い昔のお話でございます。もうあらかたは御承知と思いますが、江戸小源太の手によって花夜叉が捕らえられ首をはねられた当時から申し上げないとお分かりいただけますまい。
　花夜叉と一緒に、その配下のおもだった者ほとんど全部が捕らえられましたが、しかし、花夜叉の妻と幾人かの部下は、小源太の手をのがれて姿をかくしました。
　彼らは、花夜叉が処刑され、その首がさらしものになりました時、一夜、首のない花夜叉の胴体だけをこっそりさらいとってかくしてしまったのでございます。

　そうして、彼らはまもなく、この奥にございます密林の中、道灌山の崖下に小屋を造ってさりげなく住みつくようになりました。
　当時、この辺りは崖下近くまで沼沢地と荒れ地が迫り、とても寂しいところでしたし、また、この付近一帯に住みます百姓や猟師たちはみんな花夜叉から恩義をうけ、彼を徳としておりましたので、森の中に住みついた一党のものを必死にかばい、かくまいして、無事に江戸小源太やその館の者の目をくらまし通してしまったそうでございます。もうお分かりでございましょう。わしども林家の者がその子孫でございまして、あの森の中にあります窓のない土蔵がそのころ建てられました建物の中の残りなのでございますよ。そして、この近所一帯に散在します農家も、あらかたは多かれ少なかれその人たちの血をひきます者なので……。
　ところで、江戸小源太の方はどういたしたでございましょうか。小源太は、花夜叉討伐に成功し、その山砦を占領いたしますと同時に、その地下道のさらに奥に花夜叉とその股肱の者しかしらない秘密の洞窟があり、その中におびただしい砂金が秘蔵されているのを発見いたしました……。
　洞窟の砂金を発見しました小源太は、おそらくこれを独り占めしようと考えたに違いございません。それには、まずだれにも知られる心配のないよう、完全に秘匿する必要がございました。
　なぜなれば、砂金のことが世間にもれれば、まず第一に主家にあたる江戸氏が黙っているはずはなく、当然のこととして召しあげられるかもしれませんし、また、強力な盗賊や、虎視たんたんとねらっております他の豪族どもの襲撃を覚悟せねばならないからでございます。
　そこで、小源太は捕らえた花夜叉一味の者を使い、その洞窟をさらに石垣をもって厳重に固めますと同時に入り口までふさいでしまい、仕事が終わった後にその男たちを一人残らず殺害

し、その入り口にあたる穴の底へ投げこんで白骨の墓場と化してしまい、完全に人目をくらますことを考えついたのでございます。
　しかし、小源太はそれでもなお不安であったらしく、地下道の三個の出入り口のうち二個所のたて穴を埋めてその上へ館を建て、さらに、花夜叉のたたりがあるからなどとまことしやかな風説をたて、最後の出入り口を花太郎地蔵によってふさぎました。その上、花夜叉の首塚を作るといいふらし、第一の地下道と第二の地下道の境をその骨を納めたお厨子をもってさりげなくふさいでしまったのでございます。
　こうしておけば、万が一にも花太郎地蔵の入り口を発見した者があって地下道へ踏みこみましても、やがて花夜叉の首に突きあたり、それが首塚の行きどまりと思いこみ、第二の地下道まで踏みこむことを防ぎうると思ったからでございましょう。
　そして、その洞窟の秘密を自分の直系の子孫にのみひそかに伝える目的をもって、生まれ出た長子には花太郎なる幼名をつけ、さらに男子一人に一個ずつの銀の小鈴を守り袋に添えて与えるという奇妙な命令を残したのでございます。
　つまり、それは、遠い後々までも花夜叉のことを忘れず思い出させるため、そして、常に秘庫のとびらをひらくかぎともいうべき小鈴を身近く大事に保存させるためであったと思われるのでございます。
　多分、小源太は死の直前――そのころはさだめし大人に成長しているはずと予想されました子供に、死の直前に及んでから秘密の真相を口伝するつもりだったのではございますまいか。
　ところが、彼はその時を待たずして――何が原因であったかは分かりませんが、突然発狂してこの世を去ってしまったのでございます。
　そのために、幸か不幸か、本当の真相はついに子孫に伝わらず、当時はうすうすそのことを

知っていたかもしれません小源太左右の重臣たちも、時経て、一人死に二人死にして、やがてはだれ一人そのことを知る者がなくなってしまったわけなのでございます。
　ところで、道灌山の崖下に住みつきました花夜叉の妻とその一党はどういたしたでございましょうか。
　彼らは小源太のたくらみましたことを残らず知っておりました。洞窟の砂金のことを熟知している彼らは、小源太が何を考え、何をやっているか、手にとるように分かったに違いありません。
　そして、小源太がだれにも秘密の真相をつげずに狂死してしまったことを知りました彼らは、時こそきたれと、洞窟を占拠しようとくわだてはじめたのでございます。
　その洞窟の砂金は花夜叉一族の苦心の集積でございました。つまりは、花夜叉の執念のこもる場所だったともいえるわけでございます。
　そこで、花夜叉の妻たちは、森の奥の崖下からその洞窟へ向けてまっすぐに抜け穴を掘りぬくことを考えつきました。
　洞窟の位置をよく知っていた彼らには、それはたやすいことだったに違いございません。
　しかも、花太郎地蔵からの入り口や道路は二重にも三重にもとざされていて、だれ一人知る者もないのですから、この崖下から横穴の掘りぬかれたことは結局だれにも知られる心配はないはずでございましょう。
　かくして、その横穴を掘りました彼らは、洞窟の中へ首のない花夜叉の遺体とその愛用の太刀を入れた棺を納め、彼らの霊地を作りあげまして、さらにその横穴の外には、一つには入り口をふさいで人目をくらますためと、もう一つには拝殿の意味をもったほこら明神のやしろを建てたわけなのでございます。
　そして、彼ら一族以外には何者も立ちよらせぬようきびしい言い伝えを残すと一緒に、一族

の神として今日までずっと伝えてきたわけなのでございます。

と申しましても、今日では、林家のおもだった者三、四人のほか、ほこら明神の真相をしっている者は一人もございませんけれども……。

今までお話し申し上げましたことは、林家に古くから伝わっております『ほこら明神縁起』と申します古文書の中にだけひそかに書き残されてあるのでございますが……。

三四郎さま、あなたさまが花夜叉の洞窟から抜け穴を掘りぬいて脱出しておいであそばしました時、持っていらっしゃいました古文書の焼け残りのようなものがございましたな？　あれがいま申し上げました林家に伝わります『ほこら明神縁起』なのでございますよ」

久左衛門老人はここでちょっと話を切り、まゆをよせて悲しげな表情になった。

「ただ今申し上げましたことは、すべて皆、遠い昔の出来事でございまして、それ以来、この辺りには至極平和がうちつづきました。花夜叉一族の子孫も、以後皆まじめに正業につき、御覧のとおり平和に繁栄いたしておりますし、小源太の子孫もやがて金森様とお名が変わり、平和にお栄えの御様子とお見うけ申しておりました。

ところが、ここに思いもかけない不幸な出来事が起こりました。と申しますのは、二十三年前のあの木暮五郎蔵の事件でございます。

五郎蔵は、何かのことから花夜叉の秘庫のことをかぎつけますと、一人でひそかにそれをさがしにかかりました。あのお人は花太郎地蔵の下にある地下道の入り口には気がつかなかったのでございましょう。しかし、秘密は江戸家の館跡にかくれていると承知して、古事を聞き出すために日暮里(にっぽり)からこの辺り一帯の旧家という旧家を残らず尋ね歩いたようでございます。そうして、最後にわしども林家にたどりつきました。林家が花夜叉当時からの旧家と知って、なにか手づるをつかめぬはずはないとにらんだのは、さすがに恐ろしいお人でございました。

そして、わしどもが用心して容易にあのお人を近づけないと知ると、とたんに方策を変えて、わしの娘、加奈(かな)というものを誘惑し、言葉たくみにかどわかし、連れ去ってしまったのでございますよ。

娘の加奈と子飼いの与助とを夫婦(めおと)にまとめて分家でもさせようと、わしが独りぎめにきめてしまっていたのが悪かったのでございます。

加奈はどういうものか、実直いちずで根っからのごつごつした百姓男だった与助をきらいまして、その縁組みがとてもいやだったらしく、丁度そこへ目をつけました木暮五郎蔵が、言葉たくみに誘いだして家出をさせてしまったらしいので……しかも、その折、加奈をそそのかし、林家に伝わる古文書をそっくり持ち出させたんでございます。

そして、加奈は金森さまの奥にあがりまして、いつかお殿さまのお目にとまり、そのお側妾(そばめ)にということになったわけでして、それもこれも後々になって知りましたことで、当時は五郎蔵という男がどこの藩のお侍かも分からぬくらい、まして、加奈の行方さえ分からずにいたのでございますよ。

と申しますのも、五郎蔵が自分のしていることをだれにもしられまいとしてわしどもにも秘密にするし、金森家へも加奈の身元を知られぬよう加奈にもさんざんいいふくめたものと思われます。金森家へ御奉公にあがった当時は、加奈は林家と金森家との古い関係などまるで知らずにいたでしょうが、五郎蔵はきっとそのことを話し、金森家と林家とは古い敵同士ですから、もし加奈の身分が金森家へしれたり、また、金森家に御奉公中のことがわしどもに知れでもしたら大変なことにでもなると、きっと言葉たくみにおどして、加奈の口を封じたものと思われます。

その上、加奈もお殿さまの御寵愛をうけ、そのお胤を身ごもるようになりましたことですから、きっとその恩愛に手足をしばられて、五郎蔵のいいなりに身元の秘密を守り通したのでございましょう。

ところで、五郎蔵は、加奈に持ち出させました古文書の中から『ほこら明神縁起』をさがし出して、花夜叉の砂金の一件をあらまし承知しつくしたに違いございませんが、その縁起書には、江戸小源太が花夜叉の砂金を横領して、だれにも分からぬ秘庫の中にかくし、しかも彼が狂死したためその所在をしる者がなくなった一件だけは詳しく書いてございますが、花夜叉の妻たちがその洞窟の中に花夜叉の遺体を納めましたことや、洞窟へ抜け穴を掘りぬきましたことはすべて口伝の秘密になっておりまして、縁起書にはただ、ほこら明神のやしろをもうけ、花夜叉の霊を祭ったとしたためてあるだけなのでございます。

そのため、五郎蔵はほこら明神の抜け穴をさがしあてるまでかなり苦心した様子でございます。

とにかく、加奈が行方不明になりましてからおよそ一年ほどたちましたころ、何者かその抜け穴から洞窟へ忍び入り、花夜叉の棺をあばいて太刀を盗みさった者のあることを与助が発見いたしたのでございます。

そやつは加奈をかどわかした犯人の木暮五郎蔵という男に違いないとにらみまして、以来、与助はずうっとほこら明神の付近に張りこんでおりましたが、とうとうまた五郎蔵がその横穴をとおって洞窟に忍び入るのをつきとめ、出口の個所を完全に埋めつくしてしまって、五郎蔵を洞窟の中へ永遠に封じこめてしまった次第なのでございます。与助としては、加奈を奪いさった憎い男への復讐だったのでございましょう。

与助が五郎蔵を洞窟の中へ封じこめてしまいました当時、道灌山の辺り一帯を、木暮五郎蔵

というこれこれの風采の人物を見なかったかと、しきりに尋ねて歩くお侍の一隊がございました。

そのお侍たちの口からして、五郎蔵という人物が金森家の家臣であったこともはじめて分かりましたし、また、その金森家へさぐりを入れることによりまして、加奈が水尾と申す名でお殿さまのお側妾となり、花太郎と呼ぶ男の子を産みましたことも、また、すでに自害してあえなくこの世を去ってしまいましたことも、はじめてやっと分かってきたわけなのでございます。

そのことがございましてから、与助は奇妙な男になりはてました。日ごろは実直な正直によく働く男なのでございますが、加奈のことやほこら明神のことになりますともう気違い同然に手のつけられない恐ろしいそぶりを見せたりするのでございます。

でも、その恐ろしい悲しい出来事もとにかく収まりまして、またずうっと静かな平和な日がつづいてまいりました。

ところが、先ごろ来、奇妙な花太郎という人物が出没して恐ろしいことをやってのける——そういううわさがたちはじめ、わしはぎょっとしたのでございますよ。

もしや、加奈の産んだあの花太郎が生き残っていて、そのような悪事を働いているのではなかろうか——と、つい思い余りまして、それとなく花太郎という人物をいろいろにさぐって様子をたしかめていたのでございますが……。

でも、幸いとわしの恐れはすべて杞憂に終わりました。その男は本当の花太郎ではなくて、加奈のお産み申した花太郎さまは、別に、立派なお人に成人しておられたのでございます」

久左衛門老人が口をつぐんだ。

一座の目が、そっと——しかし、いっせいに三四郎の方を向く。

「もうお分かりのとおり、わしがその花太郎な

のです」
　と、三四郎が静かにいった。
「わしの母は水尾、そして加奈さまです」
「そうでございます。三四郎さまが母君の形見じゃと仰せられた膚守りの『ほこら明神』のお守り。それを拝見しました時は、おやっ？　と思わず目をみはりましたが、でも、その時はまだ花太郎と名乗る男に気をとられ、よもや三四郎さまが……加奈の産んだお子だろうとは……気がつかなかったのでございますよ。そうでございます。あのお守りこそ、加奈の膚守りとしてわしが与えたものだったことに、今こそしかと思いあたるのでございます」
　と、久左衛門はしみじみとした声でいった。
「わしは、母者人が自刃してはてた直後、お高という女中と、喜内という老僕につれられて金森家を抜け出したということです。銀の小鈴をもったお高と、わしを抱いた喜内とは、きびしい追っ手に追いたてられ、はなればなれになった末に、とうとう逃げおおせることの困難なことをさとった喜内は、わしを抱いたまま榊原右京太夫さまのところへ転げこみ、ひそかにわしの将来を託したのだということです。
　榊原家は金森家の親戚にあたり、しかも右京太夫さまは情け深いお方として聞こえ、わしの母者のことにもひそかに同情をよせてくださっておいでだったことをせめてもの頼みに、喜内は右京太夫さまにおすがりしたというのです。
　わしは、相馬藩の浪人加賀美なにがしの遺児と名前も素姓もいつわって榊原家へひきとられたのです。義父右京太夫さまは、わしの成人するのを待ってから事の次第を打ち明けて、堂々と金森家へ名乗り出るとも、またそのまま榊原家へとどまるとも、すべてをわしの希望と判断にまかせるつもりでおいでだったと、それは後になって分かったことですが、先年わしが留学から榊原家へ立ちもどり、義父上からこの身の秘密を打ち明けられたその時は、もはや榊原家

にとどまりがたいいろいろの事情がわだかまっていることを知りました。
　わしが一夜ひそかに榊原家を出奔しましたのも、一つにはその事情のため、一つには二十三年前の奇怪な事件の全貌を明らかにし、わしの母君のことを知りたいため、もう一つには、何者をもたよらず、独力をもって新しい人生への道を探し出したい切なる希望のためであったのです」
「今にして思えば、ぴたりと思いあたることがございます。榊原のお殿さまが、凶賊花太郎をとうから偽者とにらんでおいでだったことは、むしろ当然だったわけでございますな」
　と、三四郎の話のすむのを待って勘兵衛がいった。
「榊原のお殿さまは、以前両三度花太郎地蔵へ参られる途中、花屋へお立ち寄りくださいまして、どこがお気に召しましたか、それ以来、何かとわたくしにお目をおかけくださってでございましたが、丁度、花太郎のうわさが立ちはじめましたころ、急にお屋敷へお召しがあり、かの花太郎は金森家に縁ある者のごとくいいふらしているそうだが、実にけしからぬことである。速やかにその正体をあばいて理非を明らかにせよ、しかも、極秘のうちに頼むと、たっての御依頼があったのでございます。
　そんなわけで、とうからひそかに花太郎の追及をつづけておりまして、彼が金森家の血縁の者でないことも薄々しれましたし、唐人飴屋と同一人物らしいことまでかぎつけたのでございますが、それと知った花太郎は、あの地下道の中ですばやくわたくしを襲撃する機会をつかんだことでございます。
　幸い傷は急所をはずれておりました。地下道からはい出し、花屋までたどりつきましたが、なんと、わが家は焼けうせて跡形もないではございませんか。
　そこで、やむをえず、榊原家まで駕籠でたど

りつき、お殿さまのお情けにすがって傷を養うことになりましたが、世間に勘兵衛が死んだといううわさのたっておりますのを幸い、あくまで死んだことに思わせ、花太郎めに油断させておき、傷の治り次第、一挙に襲撃するつもりだったのでございます。

そのため、三四郎さまには大層御迷惑をおかけ申したそうで、まことに申し訳ございません。お陰で、事件はともかくも片付いたようでございます。新五右衛門にしても、花太郎にしても、また与助にしても、生きていれば捕らえてその筋へ突き出さねばなりませんが、それで事が明るみへ出てはいろいろ迷惑のかかる筋もございましょう。彼らが死んだというのも、なにか天道さまのお指図かもしれません。

皆さん、ありがとうございました。ことに、三四郎さまにはお礼の申し上げようもございません」

「いや、わしよりも、礼をおっしゃるならお美年さんや仙太にいってください。この人たちの働きが大きいのだ。おい、仙太兄い、どこにいる?」

三四郎にそういわれて、仙太は廊下の向こうすみに真っ赤になって縮こまっている。

いやもう、三四郎にはまったく会わせる顔がないというように……。

「ところで、御老人、つかぬことを伺うようですが、花夜叉のおびただしい砂金はどこにかくされているのです? やはり、あの洞窟の中のどこかにですか?」

と、三四郎がふと思いついたように尋ねた。

「はい。伝説にあるとおり、たしかに砂金はあの洞窟の中にあったのでございますよ。しかし、今はもうあすこにはございません」

「では、どこかへ移されたとでもおっしゃるのですか?」

「どうぞ、皆さん、こちらへおいでくださいまし」

と、久左衛門老人は静かに立って一同を縁先まで導いていった。

「徳川さまがまだこの江戸へ御入府なさる以前のことだったそうでございます。この武蔵の国一帯にひどく飢饉がございまして、打ちつづく兵乱とともに土地の百姓たちはひどい難儀をいたしたそうでございます。その折、林家の当主はその苦しみを見すてておけず、黄金の一部をもち出してひそかにその人たちを救い歩いたそうでして……。

と申しましても、その折つかったものはごくほんの一部、残りの大量の黄金は……皆さま、御覧くださいまし、あれ、あのとおり、見事なみのりを見せておりまする」

老人の指さしたのは、庭境の生けがきを越えてかなたに、はるかに遠くつづいている田んぼの黄金なす稲穂の海であった。

「かつては手のつけられぬ沼沢地や荒蕪地だったこの尾久一帯を、御覧のとおりの見事な田畑に変えましたのは、何百年にもわたる人間の汗の努力と、そして、それにつぎこんだ花夜叉の黄金の力だったのでございます。

洞窟にはすでに一粒の砂金も残ってはおりませんが、しかし、その力によってあがなわれた広大な田畑は、年々いや増すばかり黄金の宝をみのらせております。このことこそ、花夜叉はじめ、あの黄金に魅入られて死んでいったあまたの人々への何よりの手向けなのではございますまいか」

もし、その場に新五右衛門、五郎蔵、花太郎の連中が居合わせたら、一体どういう気持ちでその話をきいたであろうか。

それは、黄金にとりつかれて人間の心を失った亡者たちへの痛烈極まる皮肉として響きわたったことであろう。

三四郎とお美年は連れ立って庭へおり、秋の日ざしの中を肩をならべて歩いていった。

「ああ、お徳さんはどうしたであろう?」

と、ふと思い出したように三四郎がいった。

お美年たちと顔を合わせることのまずさを思いやった老人のはからいで、お徳は向こうの建物に弱りはてた体を養っていた。

「お徳さんは、今朝早々、だれも気づかぬ間に、ここから出ていかれたそうでございます」

と、お美年が沈んだ声でいった。

「久左衛門さまにお礼をのべた書置きの中に、もう一度、新規まき直しにやり直してみて、お顔を合わせても恥ずかしくないような女になれたら、その時は、せめてもう一度、三四郎さまにお目にかからせていただきとうございますと、しみじみ書き添えてあったそうでございます」

「あの人も心の底はいい人だったのだ」

「そうでございます。本当に……」

そして、きっとお徳さんも三四郎さまがとてもお好きだったに違いありませんと、お美年は口から出かかった言葉をそのままじっとこらえていた。

森のはずれまできた。

前面には黄金をなす稲田がえんえんとひろがり、頭上には明るく澄んだ秋の日があった。

「早いものだなア、お美年さんにはじめて会ったのはまだ盂蘭盆前であったが、もう秋もこのように深まってしまった」

「本当に……あのころのことを思いますと、まるでもう遠い夢のような気がいたします」

「しかし、季節の移り変わりよりまだはげしくふしぎなのは、人の心の変わりようだな」

「……」

「あのころ、わしの心の中はからっぽであった。わしは孤独であり、そして、それは永遠につづくようにさえ思われていた。しかし、たった短いわずかな月日の間に……もうわしは一人ではない。一人ではいられない人間に変わってしまったのだから驚くほかはない」

お美年さん、あなたのことだよ、と三四郎はささやいた。

お美年の顔は、秋の日ざしの中にかあっと燃え上がるばかり赤らんだ。

「わたくしこそ……わたくしこそ、三四郎さまッ！」

たったそれだけ言ってあえいでいる。胸が迫って、何か無理にいえばそのまま涙がほとばしりそうであった。

「わしは百姓をやろうと思うが、どうであろう？」

「は、はい……」

「林家はわしの母の里だ。久左衛門どのはわしの祖父にあたられる。その好意に甘えて、この屋敷うちの一郭に、わしの新しい人生を築きあげていこうと思うが、あなたはどう思うか？」

「わ、わたくし……ただもう、おそばにさえくらすことが出来ましたら……」

お美年の声はささやくように低いが、しかしはげしい何かをほとばしらせていた。

「御覧、花夜叉の黄金があのように美しくみのっている。わしらがこれから住みつづける世界がここにあるのだ」

そういう三四郎のひとみにも声にも、やっと新しい生き方をさがしあてた人の希望にもえた若々しい意欲が美しい張りになってみなぎっていた。

「三四郎さま、今日は……お鶴さまが金森さまへ……」

「そう……今日は鶴どのが金森家へ嫁いでいかれる日であったな」

「お気の毒で、お気の毒で……わたくし、あのお方がお気の毒で……」

「あの人は勇気のある立派な人だ。きっと、わしらと同じように、新しい充実した人生を切りひらいていくことと思う。お美年さん。人間というものは、皆それぞれの運命を背負って、勇敢に己の道を己自身の力で切りひらいていかね

ばならないものなのだよ」
「は、はい。三四郎さま……」
「さあ、わしらも鶴どのに負けないように、しっかり大地を踏みつけて進むのだ」
そこには二人しかいなかった。
自然な形で手と手がふれあっている。
そして、二人の前には、二人の前途を象徴するかのように、見とおすことも出来ないほど遠くまで黄金の波がえんえんとつづいて、みのりの秋を歌っていた。

0193-010218-3066

春陽文庫

花太郎呪文

昭和51年4月25日　第1刷発行
昭和59年4月25日　第25刷発行

著者　角田喜久雄
1976©
発行者　和田欣之介
印刷　城北印刷製本センター
発行所　株式会社　春陽堂書店
東京都中央区日本橋三丁目四番一六号
電話（二七一）〇〇五一番
振替東京　〇一一六一七番

乱丁、落丁のものは本社、またはお買い求めの書店にてお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

山手樹一郎長編全集 全84巻

- 桃太郎侍 山手樹一郎
- 恋風街道 山手樹一郎
- 恋天狗 山手樹一郎
- 華山と長英 山手樹一郎
- 又四郎行状記(上) 山手樹一郎
- 又四郎行状記(下) 山手樹一郎
- 夢介千両みやげ 山手樹一郎
- 江戸名物からす堂(一) 山手樹一郎
- 江戸名物からす堂(二) 山手樹一郎
- 江戸名物からす堂(三) 山手樹一郎
- 江戸名物からす堂(四) 山手樹一郎
- 鳶のぼんくら松 山手樹一郎
- 新編八犬伝 山手樹一郎
- 遠山の金さん 山手樹一郎
- 花笠浪太郎 山手樹一郎
- はだか大名 山手樹一郎
- ぼんくら天狗 山手樹一郎
- 朝焼け富士 山手樹一郎
- 浪人横丁 山手樹一郎
- 素浪人日和 山手樹一郎
- 青空浪人 山手樹一郎
- 野ざらし姫 山手樹一郎
- 鉄火奉行 山手樹一郎
- 巷説荒木又右衛門 山手樹一郎
- 江戸の虹 山手樹一郎
- 恋染め笠 山手樹一郎
- 青空剣法 山手樹一郎
- 春秋あばれ獅子 山手樹一郎
- 青雲の鬼 山手樹一郎
- 青年安兵衛 山手樹一郎
- 江戸群盗記 山手樹一郎
- 巷説水戸黄門 山手樹一郎
- 変化大名 山手樹一郎
- 江戸ざくら金四郎 山手樹一郎
- 大名囃子 山手樹一郎
- 女人の砦 山手樹一郎
- 若殿ばんざい 山手樹一郎
- 紅顔夜叉 山手樹一郎
- 浪人八景 山手樹一郎
- 朝晴れ鷹 山手樹一郎
- わんぱく公子 山手樹一郎
- 江戸の朝風 山手樹一郎
- 江戸の暴れん坊 山手樹一郎
- 青春の風 山手樹一郎
- 浪人若殿 山手樹一郎
- 天保紅小判 山手樹一郎
- 浪人市場(一) 山手樹一郎
- 浪人市場(二) 山手樹一郎
- 浪人市場(三) 山手樹一郎
- 浪人市場(四) 山手樹一郎
- 八幡鳩九郎(上) 山手樹一郎
- 八幡鳩九郎(下) 山手樹一郎
- 鶴姫やくざ帖 山手樹一郎

春陽文庫

- 天保うき世硯 山手樹一郎
- 天の火柱 山手樹一郎
- 隠密三国志 山手樹一郎
- 江戸へ百七十里 山手樹一郎
- 江戸の顔役 山手樹一郎
- 侍の灯(上) 山手樹一郎
- 侍の灯(下) 山手樹一郎
- お助け河岸 山手樹一郎
- たのまれ源八(一) 山手樹一郎
- たのまれ源八(二) 山手樹一郎
- 千石鶴(上) 山手樹一郎
- 千石鶴(下) 山手樹一郎
- 放れ鷹日記 山手樹一郎
- おすねと狂介 山手樹一郎
- 青雲燃える(上) 山手樹一郎
- 青雲燃える(下) 山手樹一郎
- さむらい読本 山手樹一郎
- 三百六十五日 山手樹一郎
- 素浪人案内(上) 山手樹一郎
- 素浪人案内(下) 山手樹一郎
- 江戸に夢あり 山手樹一郎
- さむらい根性(上) 山手樹一郎
- さむらい根性(下) 山手樹一郎
- さむらい山脈 山手樹一郎
- 殿さま浪人 山手樹一郎
- 虹に立つ侍(上) 山手樹一郎
- 虹に立つ侍(下) 山手樹一郎
- 男の星座 山手樹一郎
- 江戸隠密帖 山手樹一郎
- 錦の旗風 山手樹一郎
- 少年の虹 山手樹一郎

山手樹一郎短編全集 全12巻

- 矢一筋 山手樹一郎
- 将棋主従 山手樹一郎
- 春風街道 山手樹一郎
- 暴れ姫君 山手樹一郎
- 天の火 山手樹一郎
- 恋の酒 山手樹一郎
- 夕立の女 山手樹一郎
- 夜の花道 山手樹一郎
- 浪人まつり 山手樹一郎
- 槍一筋 山手樹一郎
- 秋しぐれ 山手樹一郎
- 下郎の夢 山手樹一郎
- 鍔鳴浪人 角田喜久雄
- どくろ銭 角田喜久雄
- 風雲将棋谷 角田喜久雄
- 妖棋伝 角田喜久雄
- 将棋大名 角田喜久雄
- 恋慕奉行(上) 角田喜久雄
- 恋慕奉行(下) 角田喜久雄
- 半九郎闇日記(上) 角田喜久雄
- 半九郎闇日記(下) 角田喜久雄
- 寝みだれ夜叉(上) 角田喜久雄

- 寝みだれ夜叉(下)　角田喜久雄
- 盗っ人奉行(上)　角田喜久雄
- 盗っ人奉行(下)　角田喜久雄
- 花太郎呪文　角田喜久雄
- 折鶴七変化　角田喜久雄
- 闇太郎変化　角田喜久雄
- 妖異忠臣蔵　角田喜久雄
- 春風まぼろし谷(上)　角田喜久雄
- 春風まぼろし谷(下)　角田喜久雄
- 黒潮鬼　角田喜久雄
- 緋牡丹盗賊　角田喜久雄
- 月姫系図　角田喜久雄
- まぼろし若衆　角田喜久雄
- 酔いどれ牡丹　角田喜久雄
- 姫夜叉行状記　角田喜久雄
- 元禄太平記　角田喜久雄
- 変化如来　角田喜久雄
- 振袖地獄　角田喜久雄

- 緋鹿子伝法　角田喜久雄
- 霧丸霧がくれ　角田喜久雄
- 虹に立つ侍　角田喜久雄
- 兵之介闇問答(上)　角田喜久雄
- 兵之介闇問答(下)　角田喜久雄
- 耳姫三十五夜　角田喜久雄
- 悪霊の城　角田喜久雄
- 影丸極道帖(上)　角田喜久雄
- 影丸極道帖(下)　角田喜久雄
- 海風山風(上)　角田喜久雄
- 海風山風(下)　角田喜久雄
- 白蠟小町　角田喜久雄
- 舟姫潮姫　角田喜久雄
- お小夜悲願　角田喜久雄
- 神変八咫烏　角田喜久雄
- 雪太郎乳房　角田喜久雄
- 赤姫秘文　角田喜久雄
- 怪塔伝(上)　角田喜久雄

- 怪塔伝(下)　角田喜久雄
- 次郎長三国志　村上元三
- たつまき奉行　陣出達朗
- 火の玉奉行　陣出達朗
- はやぶさ奉行　陣出達朗
- 長脇差奉行　陣出達朗
- けんか奉行　陣出達朗
- わんぱく大名　陣出達朗
- わんぱく三度笠　陣出達朗
- よさこい奉行　陣出達朗
- まぼろし奉行　陣出達朗
- すっとび奉行　陣出達朗
- 復讐の美女鬼　陣出達朗
- 孔雀駕籠　陣出達朗
- 隠密姫　陣出達朗
- 隠密将軍と喧嘩大名　陣出達朗
- らんまん剣士　陣出達朗
- 鬼姫悲願　陣出達朗

- おんみつ奉行　陣出達朗
- 影の人形師　陣出達朗
- 世直し魔剣　陣出達朗
- 犬姫様　陣出達朗
- 黄金・万花峡　陣出達朗
- 逆立ち大名　陣出達朗
- わんぱく剣士　陣出達朗
- 騎馬奉行まかり通る　陣出達朗
- わんぱく将軍　陣出達朗
- くろかみ秘蝶　陣出達朗
- 鳴門美女剣　陣出達朗
- 夕立けんか旅　陣出達朗
- わんぱく東海道　陣出達朗
- 鍔鳴美剣士　陣出達朗
- 旗本退屈男　佐々木味津三
- 黄門廻国記　直木三十五
- 水戸黄門　山岡荘八
- 上方武士道　司馬遼太郎

- 梟の城　司馬遼太郎
- 風神の門　司馬遼太郎
- 真田幸村　尾崎士郎
- 仇討ち物語　池波正太郎
- 錯乱　池波正太郎
- うつせみ忍法帳　早乙女貢
- まぼろし若殿　早乙女貢
- 伊賀忍法　早乙女貢
- 江戸まだら蛇　早乙女貢
- 斬らずの若殿　早乙女貢
- 忍法女笛　早乙女貢
- 忍法関ガ原　早乙女貢
- 忍法雪月花　早乙女貢
- さむらい鴉　早乙女貢
- きまぐれ剣士　早乙女貢
- 忍法紅絵図　早乙女貢
- 大江戸花暦　早乙女貢
- 青春の剣　早乙女貢

- 黒潮姫　早乙女貢
- 江戸浪人街　早乙女貢
- 忍法車一族　早乙女貢
- 剣鬼秘伝　早乙女貢
- 剣客往来　早乙女貢
- 江戸の小鼠　早乙女貢
- 戦国恋編笠　早乙女貢
- 慶長水滸伝　早乙女貢
- 八幡船伝奇　早乙女貢
- 鶴千代血笑　早乙女貢
- 風流剣士　早乙女貢
- 江戸の恋とんび　早乙女貢
- 東海道をつっ走れ　早乙女貢
- 志士の女たち　早乙女貢
- 幕末の刺客　早乙女貢
- 竜馬を斬った男　早乙女貢
- さむらいの詩　早乙女貢
- 御家人無頼　早乙女貢

魔笛大名　早乙女貢
花の無法剣　佐竹申伍
若殿まかり通る　佐竹申伍
変化若君　佐竹申伍
真田軍団はゆく　佐竹申伍
むらさき若殿　颯手達治
やまざる大名　颯手達治
若さま地獄旅　颯手達治
ひょうたん侍　颯手達治
若さま隠密帳　颯手達治
若さま恋頭巾　颯手達治
若さま影法師　颯手達治
若さま風来坊　颯手達治
悪たれ若殿　颯手達治
若さま変化　颯手達治
若さま伝法　颯手達治
若さま小天狗　颯手達治
若さま旅日記　颯手達治
若さま青春記　颯手達治
若さま犯科帳　颯手達治
若さま居候　颯手達治
若さま鬼面帳　颯手達治
若さま刺客帳　颯手達治
若さま絵図帳　颯手達治
若さま獄門帳　颯手達治
若さま包丁控　颯手達治
若さま東海道　颯手達治
若さま人別帳　颯手達治
若さま御朱印帳　颯手達治
若さま秘殺帳　颯手達治
若さま中山道　颯手達治
若さま退屈帳　颯手達治
若さま幽霊帳　颯手達治
若さま箱根八里　颯手達治
素浪人大名　江崎俊平
消えた若殿　江崎俊平
江戸っ子大名　江崎俊平
気まぐれ大名　江崎俊平
闇法師変化　江崎俊平
黒百合秘帖　江崎俊平
おもかげ大名　江崎俊平
夕雲峠　江崎俊平
朝姫夕姫　江崎俊平
江戸の野獣たち　江崎俊平
まぼろし絵図　江崎俊平
影法師推参　江崎俊平
江戸の風来坊　江崎俊平
白面剣士　江崎俊平
孤剣街道　江崎俊平
江戸の小天狗　江崎俊平
恋残月　江崎俊平
月夜に来た男　江崎俊平
ひとり鷹　江崎俊平
振袖伝奇　江崎俊平

孤剣士峠　江崎俊平
三日月悲帖　江崎俊平
闇姫伝奇　江崎俊平
花の素浪人　江崎俊平
千両鷹　江崎俊平
剣は流れる　江崎俊平
黒十字秘文　江崎俊平
鬼姫剣法　井口朝生
忍者は斬れ　木屋進
浪人恋変化　木屋進
忍法おぼろ陣　木屋進
仇夢ごよみ　木屋進
赤獅子秘文　木屋進
おとぼけ侍　北園孝吉
めおと大名　風巻絃一
剣豪次男坊侍　風巻絃一
からくり殺法　風巻絃一
竜馬とその女　風巻絃一
柳生十兵衛　大塚雅春
血汐笛　柴田錬三郎
源氏九郎颯爽記　柴田錬三郎
主水血笑録　柴田錬三郎
遊太郎巷談　柴田錬三郎
おれは侍だ　柴田錬三郎
南国群狼伝　柴田錬三郎
異常の門　柴田錬三郎
忍者からす　柴田錬三郎
度胸時代　柴田錬三郎
江戸っ子侍(上)　柴田錬三郎
江戸っ子侍(下)　柴田錬三郎
明治一代男　柴田錬三郎
風魔鬼太郎　柴田錬三郎
剣豪にっぽん　柴田錬三郎
裏返し忠臣蔵　柴田錬三郎
大峰の善鬼　柴田錬三郎
霞の半兵衛　柴田錬三郎
人斬り斑平　柴田錬三郎
旗本伝法　土師清二
無頼三十万石　土師清二
女犯地獄　野村敏雄
異聞忍者列伝　野村敏雄
反江戸獄門党　野村敏雄
風流天狗剣　郡順史
恋ぶみ侍　郡順史
剣に賭ける　佐文字雄策
地獄草紙　名和弓雄
土と炎と城　名和弓雄
天国一刀流　多勢尚一郎
若獅子一刀流　多勢尚一郎
柳生無刀剣　松永義弘
天保あばれ振袖　松永義弘
素浪人横丁　相良俊輔
続・素浪人横丁　相良俊輔
さすらいの狼　生島治郎

春陽文庫

- 恋　花火　江本清

若さま侍捕物手帳

- 双色渦巻　城昌幸
- 五月雨ごろし　城昌幸
- 人化け狸　城昌幸
- 幽霊駕籠　城昌幸
- 虚無僧変化　城昌幸
- 天を行く女　城昌幸

人形佐七捕物帳全集　全14巻

- (1)ほおずき大尽　横溝正史
- (2)遠眼鏡の殿様　横溝正史
- (3)地獄の花嫁　横溝正史
- (4)好色いもり酒　横溝正史
- (5)春宵とんとんとん　横溝正史
- (6)坊主斬り貞宗　横溝正史
- (7)くらやみ婿　横溝正史
- (8)三人色若衆　横溝正史
- (9)女刺青師　横溝正史
- (10)小倉百人一首　横溝正史
- (11)鼓狂言　横溝正史
- (12)梅若水揚帳　横溝正史
- (13)浮世絵師　横溝正史
- (14)緋牡丹狂女　横溝正史

伝七捕物帳

- (1)女狐が来る　陣出達朗
- (2)笑いざる　陣出達朗
- (3)女狐小判　陣出達朗
- 右門捕物帖(1)　佐々木味津三
- 右門捕物帖(2)　佐々木味津三
- 右門捕物帖(3)　佐々木味津三
- 右門捕物帖(4)　佐々木味津三
- 江戸犯科絵図　和巻耿介
- 江戸ねずみ犯科帳　和巻耿介
- ゆっくり雨太郎捕物控　多岐川恭
- 続・ゆっくり雨太郎捕物控　多岐川恭
- 御朱印銀次捕物帳　島田一男

同心部屋御用帳

- (1)はだぬぎ弁天　島田一男
- (2)紅の小指　島田一男
- (3)位牌間男　島田一男
- (4)色道丁半　島田一男

菊太郎事件控

- (1)狂恋ぶろ　島田一男
- (2)お腹拝見　島田一男
- (3)お添い寝比べ　島田一男
- (4)夢屋敷の女　島田一男
- 開化探偵帳　島田一男
- 此村大吉無頼帖　早乙女貢
- 三角館の恐怖　江戸川乱歩

江戸川乱歩名作集　全9巻

- (1)陰獣　江戸川乱歩
- (2)パノラマ島奇談　江戸川乱歩
- (3)屋根裏の散歩者　江戸川乱歩
- (4)D坂の殺人事件　江戸川乱歩

春陽文庫

- (5)人間椅子　江戸川乱歩
- (6)月と手袋　江戸川乱歩
- (7)心理試験　江戸川乱歩
- (8)ペテン師と空気男　江戸川乱歩
- (9)偉大なる夢　江戸川乱歩

江戸川乱歩長編全集　全20巻

- (1)孤島の鬼　江戸川乱歩
- (2)蜘蛛男　江戸川乱歩
- (3)魔術師　江戸川乱歩
- (4)猟奇の果　江戸川乱歩
- (5)黄金仮面　江戸川乱歩
- (6)吸血鬼　江戸川乱歩
- (7)白髪鬼　江戸川乱歩
- (8)妖虫　江戸川乱歩
- (9)人間豹　江戸川乱歩
- (10)黒蜥蜴・湖畔亭事件　江戸川乱歩
- (11)緑衣の鬼　江戸川乱歩
- (12)大暗室　江戸川乱歩
- (13)悪魔の紋章　江戸川乱歩
- (14)幽霊塔　江戸川乱歩
- (15)一寸法師・地獄の道化師　江戸川乱歩
- (16)暗黒星・闇に蠢く　江戸川乱歩
- (17)幽鬼の塔・恐怖王　江戸川乱歩
- (18)化人幻戯　江戸川乱歩
- (19)影男　江戸川乱歩
- (20)十字路・盲獣　江戸川乱歩
- 奇蹟の扉　大下宇陀児
- 宙に浮く首　大下宇陀児
- 高木家の惨劇　角田喜久雄
- 虹男　角田喜久雄
- 霧に棲む鬼　角田喜久雄
- 奇跡のボレロ　角田喜久雄
- 黄昏の悪魔　角田喜久雄
- 笛吹けば人が死ぬ　角田喜久雄

横溝正史長編全集　全20巻

- (1)本陣殺人事件　横溝正史
- (2)蝶々殺人事件　横溝正史
- (3)不死蝶　横溝正史
- (4)吸血蛾　横溝正史
- (5)スペードの女王　横溝正史
- (6)扉の影の女　横溝正史
- (7)夜の黒豹　横溝正史
- (8)悪魔の百唇譜　横溝正史
- (9)火の十字架　横溝正史
- (10)魔女の暦　横溝正史
- (11)支那扇の女　横溝正史
- (12)壺中美人　横溝正史
- (13)死神の矢　横溝正史
- (14)毒の矢　横溝正史
- (15)堕ちたる天女　横溝正史
- (16)貸しボート十三号　横溝正史
- (17)華やかな野獣　横溝正史
- (18)蠟美人　横溝正史
- (19)迷路の花嫁　横溝正史

春陽文庫

(20)金田一耕助の冒険　横溝正史
昼なき男　島田一男
野獣の夜　島田一男
湖底の囚人　島田一男
妖精の指　島田一男
東京暗黒街　島田一男
仮面の花嫁　島田一男
自殺の部屋　島田一男
トップ屋事件簿　島田一男
座席番号13　島田一男
特ダネ記者　島田一男
銀座殺人事件　島田一男
赤い影の女　島田一男
女事件記者　島田一男
特ダネはもらった　島田一男
錦絵殺人事件　島田一男
古墳殺人事件　島田一男
黒いカルテ　島田一男

夜光る妖精　島田一男
冥土の顔役　島田一男
黒い霧の東京　島田一男
事件弁護士　島田一男
夜を生きる男　島田一男
黒い事件簿　島田一男
悪魔の系図　島田一男
拳銃を磨く男　島田一男
殺人名簿　島田一男
上を見るな　島田一男
捜査一課　島田一男
最終都内版　島田一男
人喰いの夜　島田一男
犯罪乱流　島田一男
死神の地図　島田一男
白と黒の谷間　島田一男
北向海流　島田一男
炎の地図　島田一男

素足の悪魔　島田一男
青い手の女　島田一男
その灯を消すな　島田一男
青衣の魔女　島田一男
鉄道公安官　島田一男
0番線　島田一男
待避線の狼　島田一男
灰色の終着駅　島田一男
幻の新幹線　島田一男
火の国特急　島田一男
海抜455　島田一男
捜査線ナンバー・ゼロ　島田一男
新宿25時　島田一男
Qを出す男　島田一男
ふざけるな　島田一男
地図を歩く男　島田一男
波の墓標　島田一男
スキャンダル作戦　島田一男